THE CENTRAL REVIEW

中央公論

九月號

第四十三年第九號　第四百八十[illegible]

現代

一擧五十錢の値下げ斷行!!

(從來一册壹圓の處、九月號より五十錢)

思想國難、世事默視するに忍びず
此の際、良雜誌普及の必要を痛感し
定價改正、並に内容大改善を行ひ

更始一新大飛躍!!

眞の人物出でよ!! 眞の思想起れ!

樂しき家庭、正しき社會、强き日本之より生れん!

上品で面白い! 高級で解りよい!
素晴しい九月號、全國民の必讀を乞ふ!

◎改正定價五十錢(送料三錢)

東京本郷 大日本雄辯會講談社發行(振替東京三九三〇)


寫眞材料界の權威
アグフアの製品を推薦す
Agfa
FILMPACK
ROLLFILM
東京市麹町區丸ノ内仲通十四番館五號
アグフア合名會社
大阪市東區備後町二野村ビル
アグフア合名會社





[illegible]

江戸の[illegible]

繪畫化された運命交響樂……[illegible]

[illegible]

特

[illegible]

東ストリヤン教の十字發見……[illegible]

神經衰弱、不眠症に
カルモチン

神經衰弱、ヒステリー、肺結核、糖尿病患者その他熱性疾患の精神亢奮と不眠及び老人性不眠に對する本劑の効果は既に定評あり。習慣性を認めず。

27—673

秋は能率增進の時

腦神經衰弱症

治療の絶好時季

レーベンは米麥等を主食とせる日本人の體質に適應する植物製劑にして絶對に副作用の憂なし

レーベンは腦の重要なる榮養素たるリンサンを多量に含有し積極的治療劑として**健腦强精**の卓効を有す

▼藥價 一圓、二圓、三圓、五圓、
德用十圓、試用分 五十錢

……各藥店にあり……



卓効證明

岡田、福田、伊藤各醫學博士
北米ロビンソン博士

◇主效◇

記憶力減退、頭痛、便祕、
思考力減退、不眠、陰萎、
精力減退、神經衰弱等

レーベン本舖

東京市京橋區弓町二十二番地
中南定太郎藥房
大阪市天王寺區上汐町六丁目

新秋燈火の下に親しみ易き讀物

文壇の諸氏が激賞せられたる名著

わしが國さ

伊藤金次郎著

四六判美裝　上下各四百餘頁

定價各一圓三十錢　書留送料各十八錢

本書を手にせる諸氏は、活きた世相を、活きた頭腦によつて限なく見聞せらるゝであらう。

【サンデー毎日評】　著者がこの「わしが國さ」を始めて公刊したのはもう二三年も前だつた。報知新聞に眞究巾の變名でもつて連載した頃など、加藤武雄などを始めとして文壇の人たちの間でも眞究巾とは誰のことだといつて大にこの文章に感心したものだつた。錯綜極りなき人文の交流と風土の持つ特色と、それらのものが育てし人物の特色とを即ち生ける人文地理を氣易い讀物式に描き出した新しい風土記である。そしてそこには著者の鋭い觀察と頗る多方面な知識とが輕快な筆致で心憎きまでに巧に描き出されてゐる。趣味の人國記とも多角形な人物評論とも見る可く今あらためて氣のきいた滋味のある裝幀の下に再刊されたことは誠に喜ばしいことである。

最新目錄進呈

帝國學士院推薦

臺灣文化志　上中下三卷　（福田徳三氏序　柳田國男氏序）伊能嘉矩著　九月發行

國民法制通論　上卷　法學博士　仁保龜松著　九月發行

日本經濟史概説　第二分冊　經濟學博士　本庄榮治郎著　九月發行

論文總覽追篇　京都大學司書　天野敬太郎編　十月發行

ヨハネ傳福音書　シルレル　山谷省吾　共著　十月發行

經濟風土記（東海關東の卷）　東京日日新聞社經濟部編　十月發行

東京・神田・駿河臺・ニコライ下

刀江書院

振替東京七三一一八番

電話神田三二七一番　三一八九番

老人國難

——（卷頭言）——

紐育の外電に、最近ロイド・ジョージの原稿で稼いだ金高が累計すると四十萬圓とかになると云ふ報道があつた。羨しい話である。

併し金高の大きい所から漠然とロイド・ジョージの精力絶倫を推定してはいけない。無論それもあらう。が、精力には限りがある。報酬そのものが格別高いのでなければ、到底そんな巨額の收入となる道理はない。

して見ると、英國あたりの操觚界では、斯う云ふ人には特別に高い報酬を拂ふものと見へる。而して高い報酬を拂ふのは多勢の人が爭て之を讀むからでなければならぬ。成る程斯う考へて來れば我々にも能く分る。練達經驗を積んだあゝ云ふ地位の人の飾る所なき意見を聞くのは、獨り英國人と云はず、世界の人のひとしく望んでやまぬ所だらうから。斯う云ふ人が意見を發表して呉れるのなら、毎時でも高い報酬を辭せぬのだらう。敢てロイド・ジョージに限つたことではあるまい。

しかし何よりも羨しいのは、彼國の老政治家達が何れも皆卓拔の意見を有て居ることである。而して其意見は彼れの朝に立つとき必ず實行さるると信ぜられてゐることである。故にロイド・ジョージが今日何を云つたかは、取も直さず、彼れ若し朝に立たば何をするかの問題に外ならぬ。よし近き將來に彼れを再び臺閣に上らしむるの期はなかるべしとするも、彼れ及其一黨の勢力が今日仍ほ英國輿論の構成上一つの重要なる社會的素因である限り、彼れの言說は遠い日本の我々にも輕々看過の出來ぬ値打がある。

之に較べると、日本の老先輩の無氣力は何と云ふみじめさだらう。第一彼等は驚くべき怠慢を貪つて更に後進啓導の任をつくさない。尤も實の所彼等は後進の國民を誨ふべき何物をも有て居ぬ樣でもある。偶々何か意見を發表すると、多くは爲めにする所あるの立言で、口と肚と全然違ふのを常とする。政治家の聲明はすべて空手形と相場のきまつた以上、如何なる名論卓說でも之を傾聽する氣になれぬは言ふまでもなく、況んや其の論說たる、毫も研究と經驗とに根據せざるに於ては、誰か之に向て貴重なる時間を空費するものがあらう。少し氣の利いた新聞雜誌が所謂政界の先覺なるものに僅にその一頁をも割かないのは、固より怪むに足らぬ。

後進を啓導すべき筈の老先輩の驚くべき程無智無識なるは、現代日本の大なる禍である。これにも增して大きな禍は、之等の老人が實際に日本の運命を掌る地位に置かれ、而も彼等が盛に其地位を濫用して憚らぬことである。世人は能くいふ、曰く思想國難、曰く經濟國難、曰く何、曰く何と。知らず、讀者諸君！　今日の日本に果して上述せる所の禍よりも大なる現實の國難があるだらうか。

中央公論



第四十三年第九號
九月號
四百八十八號

文藝復興と資本主義

本位田祥男

一

藝術を破壞するものは資本主義である。此命題は少くとも現代では眞理であらう。資本主義は大量生産の上に立つてゐる。大量生産は人々の嗜好を無視して、同じ類型に屬するものとして取扱ひ、且つ生産者自らは機械により、利潤を目的として生産してゐる。其態度は人格に即し、個性の表現を生命とする藝術とは凡そ正反對である。藝術家がマモンの使徒

となる事はその自明である。

然し、これは藝術と經濟との兩立し難い事を意味するものではない。今日多くの批評家によつて叫ばれてゐる如く、或特殊な藝術は常に、或特殊な經濟社會の上に立つてゐる。經濟も人類の創り出した一の文化である。其文化が、他の精神的文化と全然無關係であり、或は互に反撥し合ふ筈のものではない。其藝術が或經濟生活に對して批判的であり、全く否定的であるのは、其社會の文化が已に新なる變革を遂げようとするのでなければ、其藝術の中に新い時代の個性を殘してゐる時である。そうした藝術の中に批判的態度の出る時は、經濟生活の中にも變革の兆が現はれてゐるのを常とする。

素朴的な比喩が許されるならば、經濟生活は藝術家の身體である。それは他の文化的生活の基礎であると共に、其體質が常に其創作の個性の中ににじみ出してゐる。其內的な生活と他の文化生活とは、本來決して切り離し得るものでなく、お互に一體として其人格を作り上げてゐるのだ。經濟的文化も他の精神文化も一體となつて、始めて或時代の個性ある社會が成立してゐる。素より、或特殊な人々は、其內的生活を否定する事によつて、其藝術を高揚してゐる。然し其場合も物質生活と藝術とに何等の關係がないのではない。否定され乍ら其存在を續けてゐる所に、其物質生活の特徵があり、其上に或特殊な藝術が作り出されてゐるのだ。

今歷史的に見れば、中世のゴシック藝術は手工業を其技術的な基礎とし、ギルドを其の社會的環境として生れ出た。其統一體な存在として中世文化の特徵があつた。同じく近代的な藝術にしても、ヴンディリ、レムブランドの物的基礎として、近世初期の低地方の經濟的發展があつた。シェクスピアは英國資本主義の勃興時代に生れ、ロココ式藝術はルイ治下の重商主義經濟の中に生れた。

然らば、近世文化の搖籃であるとされてゐる文藝復興は如何なる經濟的文化の上に作り出されたであらうか。近代の自然科學がガリレオ、コペルニクスから始まり、社會思想がマキヤヴェリから始まり、其藝術がジョット、ボチチェリは稍く

描いても、ミケランジエロ、ラファエロ等から始まるとする事に全く異存はないにも拘らず、近代の經濟的文化の起源については著しく議論が分れてゐる。

近代の經濟的文化、即ち資本主義經濟は、十五世紀末葉の新大陸發見から始まるとする學者が非常に多い。なる程それは世界を一のものとした、人類にとつての最大な事件の一であつた。資本主義經濟が大量的商品生産を其本質とする以上、此流通區域の擴大は其發展の要件であつたらう。然し、もしも資本主義經濟が此時より始まるとするならば、イタリイの文藝復興は非資本主義的經濟の上に打ち建てられたものであるか。そしてあの運動が中世的經濟生活の上に建設する事が可能であつたらうか。又あれ程大きな冒險を敢てさせた、社會的な原動力は何であつたのか。

二

一口に文藝復興と呼ぶが、其内容は極めて複雜であり、種々な立場から之を掴み得る、形式的に見れば一の解放運動であつた。中世數世紀の生活は、其形式を固め、人間を十重二十重に束縛し始めた。其殼を破る事が、其運動の本質であつた。更に内容的に見れば、宗教の專制に對し、人間のあらゆる欲求を解放する運動であつた。眞理は宗教の侍女から解放されて、自らの爲めに存在する樣になつた。藝術は教會の制約から免れて、純粹に美を内容とする樣になつた。

此解放の空氣の中で經濟丈が、中世の儘に、自らを否定し、宗教の膝下にある事は許されなかつた。經濟的生活も人間本來の慾求に基づくが故に、自らの目的を與へられ、宗教の制約から解放されたのである。貨幣慾、或は物質生活はそれ自身目的として設定され、それに一筋に努力する事が許容された。其家計を整理し、路頭に迷はない事を氣をつける事は、武士が其技を磨き、戰に臨んで迷はない事と同じく重大な市民の任務である。それは市民にとつて神聖である。彼等が家業に勵む事は、牧師の神に仕へると同樣に課せられたる任務であると。だから金貸は、それによつて利子をとる事を許

された、商人土豪を見ても解く説の。富を蓄積する事に付のみ工夫にある如も?たつた。

又色彩として見れば、文藝復興は合理化の運動であつた。自然科學が合理主義を其の出發点とする事は云ふ迄もない。云はと文藝復興に依る生活に對する、この理智の反逆であつた。合理主義と最も遠い藝術すらも、中世のそれに比すれば遙に合理的になつて來た。其代表的な象徵はレオナルド・ダ・ヴヰンチにある。彼は其物理學に於て先覺者であると共に、繪畫に於て不朽な足跡を殘してゐる。

其藝術的態度に於て、聖なるものと美との二つ途から、唯一つの美だけを目的として來た事は、其合理主義の基礎である。彼等は、彼等の見る美を其儘表現すればよくなつた、だから中世のそれよりも遙に自然であり、寫實的となつた。其自然を見つめる事によつて、デッサンはより正確となつた。光線と色彩の把握はより合理的となつた。あの陰影を描く事を學んだだけでも、合理主義へ步を進める事實に百步であつた。

已に利潤の追及を目的とする事が許され、その目的に合理的になつた以上、近代の資本主義精神は其儘彼等の精神となる筈であつた。舊い傳統も、それが彼等の營利に妨害となる以上、躊躇なく撤廢されなければならなかつた。權威ある學說も營利の道に横はる以上、何等かの變革を見なければならなかつた。素よりあらゆる社會制度は、此營利に合理的となる爲めに、次第に變革しなければならなくなつた。若し營利に徹底的でなかつたとすれば、尙ほ舊き色彩を殘してゐたに過ぎない。恰も自然科學に尙ほ魔術的要素を殘してゐた樣に。

だから、資本主義精神の代辯者としてはフィレンツェのアルベルチがゐた。それは決して彼の思想から生れ出たものではなく、當時のイタリイ市民の日常の確信であつたのだ。さればこそ、未だ中世的空氣の色濃かつた西歐諸國に出張して活動した彼等は、最も惡賢い、義理人情をも辨へない人種として輕蔑されたのであつた、一方では其智惠と商才に多大な尊敬を拂はれ乍ら。

社會組織及技術としても、資本主義的なものが次第に育まれて來た。其企業の基礎としては、各人の人格的生活から離れた財産が資本として存在し、特殊な商號を以て、永く其企業の主體となつて來た。あの大規模な銀行業を營み、植民地を經營した一種の株式會社、ジェノアのサン・ジヲルヂオを除いても、合資組織は早くから發達してゐた。其利潤計算の基礎たる複式簿記もイタリイ諸都市に發達したのだ。商業の形式としては、手數料制度、振替爲替の業務が發達した。それは引いて預金業務の開始となり、近世的な銀行を生んだのだ。工業では、多くの手工業者が其生産道具及原料から引離され、少數の資本家の支配の下に働く、問屋制度或はマヌファクチュールが成立してゐた。

未だ其市場が狹く、生産技術が發達してゐなかつたから、其規模こそ小さけれ、伊太利諸都市は十三世紀の中葉から、立派に資本主義化されてゐたのだ。イタリイ市民は北西歐諸國に出張して、利潤を貪ると共に、彼等の資本主義的教育者となつたのだ。此くして教育された西歐諸國は貨幣慾に醒め、イタリイ或はアラビヤ商人の仲介によらず、直接に黄金の寶庫印度に航海しようとする運動が、あの新大陸の發見となつたのだ。だからあの、新大陸の發見は、資本主義經濟の第一原因ではなくして、其發達の途上に於ける一の事實に過ぎなかつたのだ。

三

イタリイの文藝復興運動の中心はフィレンツェであつた。ダンテはあのアルノ河畔にベアトリチェを見初め、ミケランゼロ、ラファエロは此町で成長した。マキアヹリは此町に成長し、此町の歴史を書き、此町の君主の爲めに君主論を書いた。今日全イタリイを遍歴しても、フィレンツェ程文藝復興の跡を語るものはない。永遠の都ロマには巨匠の苦心の作が少くはない。而もそれは古代ロマ、宗教的ロマに壓倒されて、其感銘は薄い。畢竟此イタリイに育まれた、文藝復興の戰士が、そこに呼ばれて其技術を見せたアレナに過ぎない。古き商港ヹネチアはあのサンマルコの寺院に象徴されてゐる

如く、遂に文藝復興の[illegible]となつたのは[illegible]、文藝復興の[illegible]に[illegible]ない。本明の[illegible]があつた[illegible]であらう。一人メヂチ家のみが多くの[illegible]を[illegible]したのである[illegible]。

之に反して、フィレンツェは各市が悉く文藝復興時代の記念博物館である。一つの町家も一つの辻も文藝復興について語らぬものはない。我々は、文藝復興の本質を知る爲めには、萬卷の書を讀むよりも、今尚ほ殘るフィレンツェの街々に數日を送るべきであらう。蓋しフィレンツェの町は、ヹネチア、ピサ、ゼノア等よりも遅れて起つたのであるが、文藝復興の最盛時十四世紀から十五世紀にかけて、イタリイの覇權を握つてゐたからである。

それはあらゆる文化で、イタリイのみならず、歐洲の中心であつた。經濟的にもフィレンツェの市民は、當時歐洲の覇權を握つてゐた。其武器は商業であつた。海港を持たないフィレンツェは早くから毛織物其他の工業を發達させたのであるが、其原料の仕入れ、製品の販賣の爲めにも貿易を營まなければならなかつた。東はコンスタンチノプルから西はロンドンに至る迄、到る所の要路に支店出張所を設けて活躍してゐた。然し商品の貿易には、ゼノア、ヹネチヤアも古くから活躍してゐた。フィレンツェの歐洲の經濟界に覇を唱へたのは、商業と併せて營む金融業にあつた。彼等は各地の支店を利用して歐洲の爲替を一手に掌握した。當時爲替は最も重大な金融業であつたから爲替を握る事は金融界を牛耳る事であつた。當時の商人は勿論法王皇帝、國王等は多く其金權に左右されてゐたのだ。

フィレンツェの有名な商人は凡ね、此金融業者であつた。其ギルドは常に市政に重きを占めてゐた。中にもスカリ、フレスコバルヂ、バルヂ、ペルヂ等十三世紀から十四世紀にかけて有名であつた。此フィレンツェの最盛時に其經濟界を左右したものはメヂチ家であつた。それは後にはフィレンツェの君主ともなつたが、上から天降つたものではなく、其市民の間から成長し、永く善良なる市民として活躍し、文字通り市民の代表者であつた。十五世紀のフィレンツェの歷史は悉く、此メヂチ家と關聯してゐる。

コンスタンチノプルの陥落に前後して、遠くギリシヤに使して、彫刻、メダル、文書を蒐集させたものは中興の祖コシモ、デ、メヂチであつた。ピサにラテイン文化の研究所を、フィレンツェに希臘文化のアカデミイを設けた者はロレンソ、デ、メヂチであつた。リピ、ラフアエロ等の巨匠はメヂチ家の庇護の下に名を爲したのであるが、文藝復興の群がる星の中で、最も輝いたミケランジエロの如きはロレンソの邸内に、設けられた古代藝術の研究所に於て養成されたものである。其他文藝復興期の彫刻建築にして、メヂチ家と關係のないものは殆んどないと云つてよい。

此文藝復興のパトロンであり、又自ら多くの詩篇によつて其運動の一員ともなつた、メヂチ家が、經濟界に如何なる役割を持つたかを見る事は、文藝復興と資本主義との關係を更に具體的に摑む道となるであらう。

四

多くの偉人の例にもれず、メヂチ家も其起源を遠くカロロ大帝の頃に求めようとするものがあるが、實際は其由緒は明でない。明でない事は即ち、其一家が極めて普通の市民から起つた事を意味するものであらう。メヂチの名は十二世紀の半フィレンツェの記録に出てゐるが、やゝ現はれて來たのは十三世紀の末である。十四世紀には商業及び金融家としてフィレンツェの外にも聞こえ、例へばラヱヌナ其他の町に金を貸しつけて、或は貨幣の鑄造權又は關税の管理權等をえてゐた。

然し、メヂチがイタリイのメヂチのみならず、歐洲のメヂチとして著はれて來たのは、十四世紀の末葉、ジヲヴンニ・デメヂチが經營を始めてからであつた。當時の風習に從つてメヂチ家は多くの分家に別れ乍ら、宗家の相續者を主腦として、一の家族會社を作つてゐたが、ジヲヴンニ以後、コシモ、ピエロ、ロレンソと代を變へた。ロレンソの歿したのは一四九四年だから、歐洲のメヂチ家として榮えたのは約一世紀であつた。そして ピエロは事業を管理した年數も少く、且

つて益々盛であつたのだ。其の後は僅に三代しか其の跡を續ける者は出なかつた。

この內メチチの富と事業とを起こした者はジヲブンニであつた。彼は經營の才に恵まれ、此方面に於ける事業を起こし[illegible]して、一意商業の經營に努力した。恰も貿易上フィレンツェの勃興時代であつて、ピサ、コルトナ、リボルノを占領し、久しい間求めて得られなかつた自らの海港を持ち、商船隊を形成し、西歐洲は勿論、エジプト、レソントとの通商を盛にしてゐた。其機運に乘じて、諸所に支店を作つて貿易に從事し、金融業を擴張し、ロマ法王其他數侯の財政を引受け、ドイツ諸侯に貸付け、歐洲に於ける當時の最大な資本家となつたのだ。其歿後子供達に殘した財産は約十八萬金フロリン（一フロリンは約五圓）であつたが、其八割は商業資本であつたと云ふ。

當時フィレンツェに於て商工業者となるためには、幼年の頃から徒弟として嚴密な修業を課せられてゐたが、コシモ・デ・メチチは鋭意立派な商業家となる爲めに仕込まれてゐた。其本店に於て、仕事を見習ふ事は勿論、イタリイ諸都市を始めドイツ、フランス等の支店を遍歴し、此家業を繼いだ頃は天晴なる實業家となつてゐた。其勢望は間もなく彼を政界に引込み、爲めに多くの富を浪費しなければならなかつたが、彼の治下で商業に於ける擴張は醒ましく、或は支店を增設し、取引額を增加し、經濟的にはメチチ家の頂點に立つてゐた。ピエロを經てロレンツォの繼ぐ頃はメチチ家の富は約四十萬金フロリンとなつてゐた。

ロレンツォの幼時は、メチチ家は已にフィレンツェの實質上の君主であつた。其生活も宮廷の如き贅を盡し、交はる所も教會の最高權でなければ、諸國の國王領主であつた。だからロレンツォは實業家としてよりも王子としての教育を受けた。彼が家業を繼いでからも、それにいそしむよりも、寧ろ政治に携はる事を欲してゐた。文藝復興のパトロンとしては最も著はれ、歐洲の政界に於て最大な人物の一人とはなつたが、經濟的には寧ろ失ふ所が多かつた。政治的興味の強い餘り、利潤の追及に專らな事を得ず、實利を棄て名聲を爭つた事もあつた。政爭の爲めに無理な貸付をしなければならなかつ

た。爲めに彼の在命中も破產に瀕する事一再ではなかつたが、漸く之を切り抜けたに過ぎなかつた。彼の歿後收拾すべからざる地位に陷つたのは當然であつた。

以上の如く、各々活動の分野を異にし、勢力に幾分の差異はあるが、此三代はメヂチ家が等しく歐洲經濟界の最大な資本家として著はれてゐる時代であつた。だから此一世紀を一つのものとしてメヂチ家の活動を見よう。經濟界に於て活動した分野は、當時フィレンツェの一般資本家の如く、工業家、貿易業者及び金融業者としてであつた。世界的な勢力としては金融業たる資格が重きをなしてゐたが、フィレンツェでは前の二の資格も亦重大であつた。

五

メヂチは先づ工業に於ける資本家であつた。由來フィレンツェの特產物は精巧な毛織物であつた。最初はシャムパーニュ等の年市で粗製織物を買入れ、之を染色仕上げしてゐたのであるが、メヂチの時代には英國或はスペインから羊毛を輸入し、全行程をフィレンツェでやつてゐた。紡績から仕上げに到る迄の分業は極めて精密であつて、途中の各段階に於て勞働の組織を異にしてゐた。例へば最初の、トップを作る所迄は資本家の手工場で作業してゐた。次の紡績及び機織は家內工業的に各勞働者にやらせてゐた。染色は中世的な色彩が最も濃かつたが、大體に於ても織工業勞働者は、手工業の時代を脫し、何等の勞働具及び原料を持たず、賃銀の爲めに働く無產階級となつてゐた。そして資本家も最早手工的地位を脫し、自らは勞働せずして、單に其經營の支配をするに過ぎなくなつてゐた。

此毛織工業は、後の絹織業と共に、フィレンツェにとつて最も重大な工業であつた。だから、フィレンツェの資本家にして、此企業に參加しない者はなく、此ギルドは最も有力なギルドとされてゐた。メヂチも早くから之を企業し、此ギルドに重きをなしてゐた。それが斯る資本家として如何に重要な地位を占めてゐたかは、次の事實が語つてゐる。コシ

モ・デ・メヂチが政権を掌握し始めてより間もなく、彼は商業資本家達の陰謀によつて[illegible]チアに逃れたのであるが、其逃亡中、従来メヂチ家によつて行はれてゐた工業家保護は[illegible]に上つたが、彼等は一様にメヂチのフィレンツェへ帰へる事を希ひ、帰国後は其忠実たる支持者として、コシモ、ロレンソ等を政治的に祭り上げたのであつた。

此工業の資本家たる事は同時に貿易業者たる事を意味した。彼等は先づ原料たる羊毛を輸入した。其本國に於ては、其羊毛を勞働者に渡して加工させ所謂問屋の地位に立つたのである。それが出來上つたならば、之を更に海外に輸出した。羊毛の仕入地は主として西歐であつたが、精製品の輸出先は主として東邦諸國であつた。そこで、東西兩方面の貿易の必要があつた。此爲めの支店としてはロンドン及びブリユウジが重要であつた。

元來、フィレンツェは商業都市としては、ヹネチア、ジエノアよりも遲れて發達した。主なる要路市場は此二つの都市に分割されて、フィレンツェの割り込む餘地は極めて少かつた。フィレンツェ市民は僅に自國の製品を輸入する爲めに貿易するに過ぎなかつた。然るに、此自己貿易が可なり盛となつて來ては、其設備を同時に中間貿易に利用しようとするのは當然であつた。此傾向はピサ其他の海港を獲てから特に强くなつた。例へばコシモの時代にフィレンツェで開かれた大宗教會議にコンスタンチノプルの皇帝が參列したが、彼は之を極めて丁重に優遇し、其信用を得て、此地方と貿易する特權を獲得した。トルコが勃興してからも、其關係は密接となり、或はエヂプト、ダマスカス、コンスタンチノプル等のスルタンと特約を結び、ヹネチア等よりも却つて優遇されてゐた。

此地方からは東邦産品、即ち胡椒香料、染料織物等を輸入し、之を西歐地方ブリユジ、アンヴエル、ロンドンに賣さばいて莫大な利益を獲た。

フィレンツェ本國に於て、メヂチの最も重要な業務は、明礬の輸入であつた。明礬は染色及硝の材料としてフィレンツ

にとつては極めて重要な商品であつたが、メヂチは之を殆んど獨占して莫大な利潤をあげてゐた。最初は之をトルコ領から輸入してゐたが、後にはイタリイの法王領に之を獲る様になつた。後の場合は法王の特許により、若干の歩合を納めて（但し年額十一萬フロリンとなつた事がある）之を採掘したのであるが、メヂチは同時に鑛山業者となつた譯である。それが獨占的であつただけに、メヂチにとつては有力な財源であつた。だから、法王シキスタス六世によつて之を沒收された時は其打撃は可なり大きかつた。

六

商業と金融業とは離れる事が出來ない。殊に中世末期の如く貨幣の種類の多い所では、兩替振替業者が、賣買に缺くべからざるものであつた。それが銀行の起源である事は何人も知つてゐる。從つて金融業は先づヱネチアに起つたのであるが、フィレンツェが發明してから、それは殆んどフィレンツェ商人の專業の如くなつて來た。恰かも此町の金フロリンが信用を博して、各國の貿易に用ひられた様に、フィレンツェの金融業者は到る所で活躍した。メヂチも古くから金融業者として著はれた事は已に述べた。

當時の金融業として利益の多かつたのは爲替であつた。イタリイの商人が各地で貿易に從事してゐたが、現金の輸送は極めて困難であつたからだ。素より各地に支店が出來れば、他の諸國の商人の爲めにも爲替業務を營んだ。爲替の振出し、或は振替の爲めには預金が必要であるが、それは爲替同志の決濟によつて遊金となる事が多いために、之を貸付ける事が多くなつた。又貸付の爲めに預金を吸收する事も次第に多くなつた。メヂチ等も資金に不似合な多くの資金を運轉融通する事の出來たのは全く此預金の豐富な爲めであつた、だから一朝其信用が下落し、貸金が固定すれば、取付の爲めに沒落しなければならなかつたのだ。

家は當時にはメヂチ家の支店は、ピサ、ヱネチア、ミラノ、ナポリ、アギユオン、リオン、ノイヘチ、ロンドン等にあり、其他要所に取引店を設けてゐた。此等の店では保管が主たる業務であつたが、其地方の商人への貸金は行はなかつた。例へばメヂチがロンドン支店の經營方針として指示した所によると、國王貴族に貸付ける場合は常に確實な擔保を必要とするが、商人には多額でなければ、信用貸をして差支ないと云つてゐる。それは可なり商品の取引を有利にしようとする點もあつたらうが、商人達への貸金が日常の業務であり、信用の厚かつた事を示すものであらう。又コシモが逃亡の留守にフィレンツェの商人達も資金融通の道を失ひ、經濟的危期を引起したのは、其業務の如何に大きかつたかを示してゐる。其形式は合資會社（ソシエタス）か或は普通貸金であつた。

斯る商人への融通の口數は多いとしても、纏つた資金の需用者は公共團體であつた。其危險も大きかつたが、利益も少くなかつた。其擔保として有利な財源が保證されてゐたからだ。其中には宗教的團體と各國の國王及び諸侯があつた。

中世末期の羅馬法王はイタリイに法王領を持つて、大きな諸侯であつたのみならず、歐洲に、宗教的に君臨してゐたから、其贅澤な生活と、儀容を正す爲めの多くの從者を容して莫大な支出を必要としてゐた。殊にカイザーと其優越を爭ひ、歐洲の政界に乘り出してから、外交軍事に要する費用は益々增加した。其收支は法王領からの世俗歲入と、歐洲全土から獻納される十分の一稅であつた。其他寺院の建築臨時の大祭等に際しては、特殊な寄附金を募集してゐた。交通不便な當時に於て、あの廣い歐洲から現金を輸送する事は極めて困難である。何等かの機會が生れなければならなかつたが、其任務を果したものは、貿易業者であつた。それと同時に起つた金融業者であつた。彼等は歐洲の各要路に支店を持つてゐたが、そこで其國に徴收された十分の一稅其他の收入を受け入れ、ロマ又は法王の命令する場所に宛てて爲替手形を振出し、それによつて之を拂渡したのであつた。

此莫大な預金を受け入れ、（例へばバルヂは約九萬五千金フロリンを預つてゐた）之を取扱ふ事は非常な特權であつたが

ら、商人達は爭つて法王廳と特約を結ばうとした。そして、外交其他の爲めに法王の臨時支出が增加すれば、其金を一定の利子をつけて立て替へ、後に徐々に集つて來る收入によつて決濟する場合が多くなつた。此爲めには金融業者の資金は益々多くなければならぬ。後には、其收入を大凡そ見積つて、其徵收を請負ひ、商人自らが租稅取立人となつた事もあつた。ともあれ、此廣い地域に亙る莫大な資金の取扱は金融業者にとつて重要な業務であつた。イタリイ商人が早くから金融業に於て發達し、各地に其實權を握つたのは、(例へばロンドンのロムバート街の如く)貿易の發達した爲もあるが、法王廳との關係が與つて力あらう。

中にもフィレンツェの金融業者は早くから、法王廳と特約を結んでゐた。彼のカイザーと法王との爭に於て終始變らぬ法王の味方であつた爲めであらう。だから、フィレンツェの古からの大金融業者にして、あのリリーの金を取扱はないものはなかつた。例へば最初の大金融業者であると云はれてゐるスカリは十三世紀の半頃から御用を承つてゐた。其他バルチ、ペルッチ等何れもそうであつた。

メヂチが偉大な金融業者となつたのも此法王廳との關係による所が多かつた。ジヲヴンニは初めミラノの大司教と特約を結んでゐたが、彼が法王となるに及んで其御用を受けたのである。啻に其爲替を引受けたのみならず、莫大な金を貸付け、高僧の任命權及び法王領の銀山を擔保としてとつた事もあつた。十五世紀の初めに開かれた、コンスタンツ及びジュネヴの宗教會議には法王廳及び諸司教の御用を承つて利益を上げたのみならず、此地方へ發展の基礎を作つた。コシモの時代にも、同樣の關係が續いた。主なる事件としては、一四五〇年の大祭に、各地から集つた順禮者の寄進だけで法王廳の預金十萬金フロリン(地金として約五十萬圓)に上つてゐる。其他東西兩教會の大宗教會議がバーゼル及びフィレンツェに開かれた際も、其金融を引受け、爲替によつて莫大な利益を上げてゐる。

ロレンツォの時代には波瀾重疊であつた。パウロ二世の頃はそれ程密接な關係がなかつたとしても、野心家シキスタス六

嘗ては、はじめロレンツォを迎へる事に熱心であつた。其就任を祝ふ爲めに、フィレンツェの使節として彼自らローマへ行つた時、彼は法王廳の財政を任された程であつた。其後法王が彼に種々な利權を與へたのみならず、ロレンツォも亦彼に御用金を仰せつけられる事度々であつた。然し其關係は二人の政治的野心の爲めに全く破れて仕舞つた。彼等は互に敵となり、法王は、ローマにあるメヂチの支店を沒收したのみならず、有名な明礬鑛の利權をとり上げて仕舞つた。爲めにメヂチ家の信用は一時に下落し、其破産が傳へられた程であつた。然し其爭が兩者に不利である事が反省され間もなく和睦を見たが、次のイノケント八世の時代には其關係は益々密接を加へた。窮乏した法王の財政は益々窮乏し、メヂチの貸金は増す許りであつたが、(一四八四年には二五一〇プロリン)同時に彼は多くの利權をえた。或は監税を管理し、或はフランスの十分の一税全部を藏受けてゐる。商才にたけてゐたロレンツォの最も利益ある事業は此法王廳との關係であつたらう。

各國王及び諸侯への貸金も莫大な額に上つてゐた。中世末期以來軍隊及び行政組織の變革と共に政府の支出は急激に增加したが、當時の不安な政府は戰爭を相次で引起し、何れも其戰費の調達に苦んでゐた。蓋し封建の遺風尚ほ强く、國家的自覺が稀薄であつたから、國王の租税徵收の額も不足勝ちであつた。加ふるに斯る經常的收入では、戰費の急に間に合はなかつた。さりとて金融市場が成立せず、一般に公債を募集する事が出來なかつたから、當時の大資本家に融通を乞ふ他なかつた。此傾向は十三世紀から十六世紀迄續いたが、フィレンツェの各資本家も各々此役割を演んじてゐた。蓋し、王朝の顚覆は勿論相手の國王の死亡と共に債權を失ふ危險はあつたが、確實な擔保をとれば、危險は少く、且つ其擔保が租税の徵收の他多くの利權を含み、其の運用によつて利子の他に利潤を得る見込があつたからである。

メヂチも最初から各國王との關係が尠くなかつた。ジヲガンニはバイエルン或はウンガルンに貸付け、コシモになつては、政治的野心があつた丈に、其貸付は益々多くなつた。例へば、ミラノ、イングランド、ブルグンディ等への君主に融通してゐる。其傾向はロレンツォの時代に於て益々激しくなつた。爲めにメヂチ家の崩壞が兆した程であつた。コシモの時

代には、確實な擔保をとつてゐたが、彼の時代には貸出しが放慢になつたせいもあるが。

例へば英國のエドワード四世には十二萬金フロリンを貸付け、ブルグンデイのカロロには十三萬金フロリンを融通してゐる。フランスとの關係はより密接であつた。ルイ十一世の商業政策によつてリヨンに新なる金融市場が開かれたが、メヂチも其所に支店を設け、國王との特殊な關係を開いた。爲めにフランスの宮廷寵臣商人等の貯金するものが增加し、爾來フィレンツェの金融業とフランスとは離れ難き關係を作り出したのである。其他イタリイ諸侯に外交的に、又經濟的に融通した額は少くなかつたであらう。爲めにメヂチ家の各國元首の間の聲望は高まり、イタリイに來る元首は必ず彼を訪ね、又特使を送る者少くなかつた。

其貸金の額の莫大な爲めと、それによる利潤の多かつた爲めに、十五世紀から十六世紀にかけて(フツガーの時代)高利貸資本主義時代と呼ぶ學者もある。其名稱は適當でないにしても、メヂチが次のフツガア、ウエルサー等と共に金融資本家であつた事は爭へない。それは今日の金融寡頭時代と趣を一にしてゐる。唯異る所は、今日の借主は企業家であるが、當時のそれは法王又は君主であつた。そこに經濟のみならず、一般文化の個性の差があつた。

七

以上種々と述べた所によつて、メヂチを資本家でありとし、其時代を資本主義の勃興時代とする事の決して誤でない事を知る事が出來よう。素より、此時代の資本主義と現代の資本主義とには多くの差異がある。數量的に見れば、當時は資本主義化された產業は尙ほ少く、其他に中世的な分野が極めて多かつた。資本主義化された產業に於ても利潤への合理化は尙ほ限られてゐた。其企業に着目すればメヂチ家の組織と今日の株式會社には、資本の實現化の程度に著しい差異がある。又經營の方針に就ても、他の要素が著しく交錯してゐる。ジヲヴンニの場合は商業一點張りであつた

だ。コシモの時代には政治的關心強く、商業上不利な貸付も少くなかつた。だから此の晩年の利潤は著しく低下して來た。ロレンゾに到つては企業家と云ふよりも政治家であり藝術家であつた。而も今なほ日常の生活から十分に分離せず、且つ企業に人的な色彩が殘つてゐたから、彼の性格は直にメヂチの商業一般に影響し、遂にあの破滅となつたのである。一般に此の如く合理化の方向に進み乍ら、而も尚ほ中世的な色彩を殘す所に、商業資本主義時代（初期資本主義）の特徴があつた。

ともあれ、あの藝術に於ける自己解放と合理化の運動と、經濟に於ける自己解放及び合理化の過程は相並んで發展した。一は文藝復興の運動であり、他は資本主義の發展であつた。資本主義を藝術が一の束縛と感じ、相容れないものと感じて來たのは、資本主義の合理化が極度に進行し、其價値の獨立が美的の價値に優越を要求して來た後の事であつた。此反撥は同時に資本主義社會の運命を示してゐる。

思想惡導論

高畠素之

一 思想國難論の流行

尾崎行雄といふ先生が、去る特別議會で勿體らしい口調をひねり上げ、例の三個條にわたる國難決議案の説明をやらかした。政友會には政友會の思惑があり、民政黨には民政黨の打算があつて、それぞれ手前勝手な解釋の下に滿場一致で起立したが、さすがに氣がさしたか『腐つても鯛は鯛』だなぞ、妙に擽ぐつたい褒辭を奉つたものである。

それに刺戟されてかどうか、ちかごろ甚だ著しく大袈裟な國難的標語を耳にする。經濟國難の、外交國難のといふのは、政府みづから大臣待遇の委員を網羅して調査會を設け、曲りなりにも怨敵退散を努めつゝあるから滑稽に響かぬが、斷髮國難の、旱魃國難のといふに到つては、誰だつて意味の捕捉に苦しまざるを得まい。斯くて、悲痛深刻なるべきはづの國難沙汰も戲畫化され、日本人一流のお祭りさわぎに轉じてしまつた。當面の論題に供すべき思想國難もその通り、口を開けば匹夫匹婦の思想惡化を慨嘆し、今にも國體國家が破壞されさうな口吻を洩らすが、さればといつて、如何にこれを防止するかの妙案は一向に有ち合はせがないらしく、ただ徒らに風聲鶴唳的な狼狽をくり返へしてゐるに過ぎない。

經濟國難や外交國難に於いても然る如く、思想國難の事實も亦、日本當今の現狀では必らずしも『狼が來た』の譬へに類すべき空念佛ではない。小心的に考へてゆけば、それがため國體國家が累卵の危きに瀕してゐるといふも誇張ではなく、若しこのまゝに放置したなら、龍頭にあらざる蛇尾から駒を出す必然の結果ともなるであらう。だからこそ、識者や役人は思想善導に

拔け目なからんとし、田中首相も濱口總裁も[illegible]して、共に安價な[illegible]國と同時に思想問題において與野兩派の善導的對策を云々したわけだらうが、そんなことで思想が善導し得られると考へる『思想』こそ、先づ何によりも『善導』されなければならぬ緊急の必要がある。

思想などといふものは、善光寺參詣人を牛が曳きずるやうに、その時その場の都合で、さう得手勝手に善導したり惡導したり出來るものではない。泥棒が來たから繩をなひ、共産黨事件が起きたから日本主義を鼓吹しようといふのでは、平素の善導的用意の杜撰さも想像せられ、あはてればあはてるだけ敵の術中に陷り、せつかくの善導的對策も惡導的結果を招くことになつてしまふ。

殷鑑遠からず、文部省的役人の善導施設が即ちそれだ。彼等は學生の思想惡化を防止かつ矯正する意味で、大いに東洋古典研究を奬勵し、科學教育に對抗して精神教育をはかるといふ。誠に結構な思ひつきだと褒めてやりたいが、實は褒めるべき何ものもないのである。何故に然るか？

二　科學萬能の世の中

科學教育に對抗して、精神教育を作興するといへば、一見いかにも尤もらしいやうに[illegible]思想の『モツトー』にすがりすぎて、日本精神、日本古典と[illegible]いはれないだけでも、デモクラ的對策に[illegible]は、大いに助かるといふものであらう。ただ、精神教育といふ表面の看板は尤もらしいが、內容は徒らに依然たる東洋哲學講座の增設であつたり、和漢文學講座の新設であつたりしては、一向に智慧がなさすぎるのである。

西洋哲學に對して、果して東洋哲學が優秀であるか、或は西洋文學に對して日本文學なり支那文學なりが、どれだけ卓越してゐるかは知らぬ。恐らく一長一短を免れざるべく、必らずしも前者に對して後者が勝れてゐるとは考へられぬが、假りにそれが勝れてゐたにしたところで、これを以つて思想善導の武器に利用し得ると考へるのはをかしい。といふのは、今日の思想惡化は西洋流の哲學や文學の輸入によつて齎らされたのではなく、もつと別個な事實——謂はば、科學文明の影響によつて生れたものだからに外ならぬ。

現代は科學萬能の時代だといはれる。その意味は、善惡いかやうにも取れるが、現代の文明が大小となく科學の影響の下に成立してゐる事實は否定すべくもない。最も卑近な實例に見ても、我々の日常生活は行住坐臥ことごとく科學の恩惠をかふむ

り、出づるに電車、歸るに自動車、上るにエスカレーター、下るにエレヴエーターといふやうに、單なる乘り物だけに見ても悉く科學の力に依賴してゐる。オーギユスト・コムトの言ひ草ぢやないが、斯くの如く科學は我々の物質生活を豐富ならしめたのであつた。とはいふものゝ、物にはとかく表裏の背反を免れず、一利あれば必らず一害がこれに伴ふ。それほど人類の生活を多幸ならしめた科學ではあるが、他の反面にあつては、負けず劣らずの不幸を人類に運命づけたのであつた。

先づ第一に、科學の申し子たる機械の影響が算へられる。機械は人間の手となり足となり、これに代つて何千百倍の生產力をもたらすことが出來、それだけ我々の物質生活を豐富ならしめたが、同時に人間の勞働をこれに隷屬せしめ、人間をして機械の補助要具たる地位に低下せしめてしまつた。加ふるに、機械的生產の充用は、それに伴ふ工場の設備なり、原料の購入なり、勞働者の雇傭なりに多額の金錢を必要とする關係上、一方に資本だけ提供して濡れ手に利潤の粟を掴みどりする階級と、他方に裸一貫に持つて生れた肉體の勞働力を提供して、その日その日の米代を稼がなければならぬ階級とを區別せしめ、富める者ますます富み、それに比して貧しき者ますます貧しかるべき社會を造り上げた結果、人道的見地と同時に社會正義の見地から、現代の社會組織そのものを更改せんとする一派の思想を發生せしめたのである。

甚だお粗末ながら、危險思想の通稱を以つて呼ばれる社會主義（廣い意味での）とは、早い話しがそんなものだと合點しても大過はあるまい。

三　科學には科學を！

社會主義思想そのものが、既に斯くの如き起點に發足する限り、如何に東洋哲學の幽玄を說いて聞かせ、如何に日本文學の妙味を敎へ込んで見ても、所詮は馬の耳に念佛たるをまぬかれないであらう。猫に小判を與へ、豚に眞珠を與へることは、昔しから愚の愚たるゆゑんとされて來た。然るに、わが文部省的役人は、社會主義かぶれの學生づれに小判を與へ眞珠を與へ、それで猫や豚を善導し得るかに考へてゐるのである。

猫を手なづけんとすれば鰹節が第一、豚には大根か人蔘の切れッぱしでも與へて置くがよい。それと同じく、社會主義書生を善導せんとすれば、おのづからなる小乘的方法がなければならぬ。小乘的方法とは他なし、科學の立場に於いて彼等を理論的に說服し、以つて流行インタナショナル・コムミユニズムの謬妄を摘發するの一事である。

今もいふ通り、現代はあらゆる意味で科學萬能の時代だ。單に物質的方面においてばかりでなく、精神的方面に於いても、飽くまで理屈のメリハリは明瞭なることを必要とし、苟くも呂律の不正に諧調を許さうとはしない。論より證據、彼等の随喜渇仰する社會科學なるものは、人間活動の内部に超人間的法則を發見せんとする試みであり、熊公八公の一擧手一投足に對してすら、これを天體運行の法則に照應して理解を『科學的』ならしめんとしてゐるのである。それほど科學の名稱は彼等の心理を緊縛し、たとひウソがコジツケでも、もし科學の衣裳を外面的にまとつてさへをれば、白晝公然の眞理として大道を濶歩し得られることになつてゐる。

擧世滔々たるマルクス主義への讃仰も、大半はそれが逸早く『科學的社會主義』の名を僭稱したことに歸せられる。即ち、みづからを科學的と呼ぶことに依つて、爾餘凡百のそれを非科學の埒内に押し込めた手腕が、今日の流行をいやが上に助長したと見られる節が多いのである。もちろん、マルクスの提說は、その意味で充分に『科學的』でもあり得た。が、彼れのいはゆる科學的豫言が殆んど悉く外れたところを見ると、彼れの提說の科學的な點は、必らずしもその理論が嚴正科學的に正確であつたのではなく、理論を驅使する技術が科學的であつたと見るのが適當であらう。

これは他でもなく、科學[illegible]と、好む好まざるに拘らず、思想[illegible]書に於いて考究されねばならぬ。『思想には思想を』もつて對抗すべきものなら、對手の『科學思想には科學思想を』もつて對抗するが當然、古色蒼然たる黴干し思想を持ち出したところで、機關銃に對する石火矢ほどの威力も期待されまい。

四　善導が變じて惡導

東洋哲學もよし、萬葉文學もよし、私は敢てそれにケチをつけようといふのではない。けれども、如何にせんそれらの哲學や文學は、當世流行の社會科學に對して全くの異國語である。メリケン水夫と横濱仲仕の口論より以上に、對手に對する語音的反應は稀薄であり、お互ひに陳紛漢紛で要領を得ない國語的關係に置かれてゐる。これでは、如何に善導を企てたところで效果のあるべき道理はなく、水は水、油は油、しよせん永久に溶解の機會とてもあるまい。

文部省的思想對策は、その意味に於いて全く無益の努力と言はなければならぬ。それどころか、寧ろはなはだしく有害な方面さへ多いのである。彼等は科學教育に對立して精神教育を普

及し、前者のもたらせる惡思想を後者の力で善導するといふ。意氣やまことに壯とすべし、さりながら、物質科學に精神主義や東洋思想を善導的に對立させることは、結局に於いて物質科學そのものが惡思想だといふにひとしく、天體の運行や機械の運轉に向つて喧嘩を吹ッかけねばならなくなつてしまふ。それでは、我れとみづから年來の科學教育に裏切り、彼等のいはゆる善思想が、科學の立場に於いてはたうてい惡思想に太刀うち出來ぬことを自狀したも同然である。ウソがコジツケでも、科學の衣裳をさへまとつてをれば眞理として通用するといふ世に、さりとは下手な戰術をとつたものではないか。

文部省的役人の善導的對策は、その意味に於いて與ろ惡導的結果を招くがオチである。即ち彼等は、精神主義や東洋思想を物質科學に對立することに依つて、遺憾なく自己の非科學的なところを暴露せるのみならず、いはゆる科學的理論の武器を危險思想の陣營に投げ與へて、我れと我が身の首を絞める結果に陷つたのである。科學といへば一も二もなく盲信する代り、然らざるものは頭から輕蔑してかゝる當今の風潮としては、それもやむを得ざる當然の經路だつたと言はなければなるまい。

もちろん、斯くの如き風潮が善いか惡いかの段になれば、人おのづから見解の相違もあるであらう。だが、善いの惡いのといつたところで、それが動かすべからざる現實の事實であるとすれば、善くも惡くも科學に對しては科學を以つて對抗し、理論に對しては理論を以て對抗するの道を講じなければならぬ。そこの道理を知るや知らずや、文部省的役人は精神主義や東洋思想の功德で對手を調伏することばかり考へてゐるが、これは取りも直さず、文部省に善導的科學や善導的理論の有ち合はせがないことを自狀するゆゑんであり、對手の輕蔑に比例して惡導の結果を助長するゆゑんに外ならぬ。

考へても見よ、みづから信じて科學的なりとする理論に對して、文部當局なり學校當局なりにこれを反駁すべき別個の科學的理論なく、古色蒼然たる東洋哲學や日本文學の有りがたみを押し賣りされては、誰だつて「我れ世に勝てり」の自惚れを持ちたくなるであらう。文部省的善導對策は、さらでだに持ちたき若氣の自惚れに對して絕好の挑發力を有する。その意味に於て、彼等の施設は當初の善導的希望に拘らず、似ても似つかぬ惡導的結果をもたらすに貢獻したわけだが、それもこれも身から出た錆といはねばなるまい。

五　思想が危險に非ず

文部省による思想惡導は、單にそれのみに止まらぬ。

十數[illegible]の[illegible]を[illegible]して、[illegible]ることいふ學校教育の觀念は、學校教育の方面に於いても、社會教育の方面に於いても、悉く甚だしい無知と同時に錯誤を發露したのであつた。

先づ學校教育に關する部分を見る。この方面にあつては、前述せる精神教育の充實といふ案のほか、思想調査機關の設置、學生生徒監の増員等、主として懲罰的意味を含んだ訓育施設が多い。が、如何に泥縄的急造の必要を訴へられてゐたにしても、斯うした外部的な強制力を以つて、思想航路の人爲的轉換をはからうとする方針は、少くも善導を看板とする限り自家撞着の譏りを免れまい。

もちろん私は、ブルジオア・ジアーナリストの亞流に追隨して、お定まりの『思想には思想を』主義の原則的適用を主張せんとするのではない。思想などといふものは、それ自身を單獨に切りはなして見れば、毒にも薬にもならぬこと屁の如しといふのが私の持論、その手前からしても、思想彈壓がけしからんなどと言へた義理でもなし、またそんなことを言ふつもりもないが、文部省が今度のやうな巧言令色で思想善導をやらうといふのであれば、右のやうなヤリ方は效果的に當を得た措置ぢやあるまいと言ふのである。

[illegible]性は、[illegible]にはなく、それが或る現實的な力と結びついて、[illegible]にも穏健にも變通し得るに過ぎない。早い話し、一切[illegible]主義に出發する佛教哲學は、あらゆる現實的な價値を否定する意味で、單にこれを思想的見地のみから觀察すれば、危險この上もなき思想といはなければならぬ。ところが、實際に於いては些さかも危險的威力なく、却つて文部省的思想善導のお先棒を擔ぎ得るほど穏健的に通用するのは、結びつく現實に少しも危險的要素がないからであつた。これに反して共産主義の如きは、思想として見れば如何にもチヤチを免れず、佛教哲學や老莊哲學の危險程度に比較すれば、その足許にも寄りつき得ない程の穏健性を發露してゐる。而かも尚ほ、實際的に甚だしき危險的威力を發揮して上下内外を震慄させ得たのは、主としてこれが結びつく現實の對象が危險的だからである。即ち、佛教哲學や老莊哲學が空漠たること夢幻の如き抽象論に耽溺するに反し、共産主義は生ける現實の社會的缺陷を摘抉してこれが改廢を具體目的とするところに、危險程度の甲乙がおのづから生じたのであつた。

その意味に於いて、一個の思想的危險を別個の思想的穏健によつて緩和しようといふ試み、換言すれば『思想には思想を』

もつて對立させることは、全く無意味の努力だとも言ひ得るであらう。隨つて、思想調査機關を完備して黒表的生徒に學生的進級の關門を遮斷するもよし、學生監生徒監の充實に依つて學校警察を遺憾なからしめ、あらゆる思想犯罪の内部的絶滅を期するのも結構である。だが、それでは危險思想を徒らに厄病神として怖ぢ毛をふるふもの、善導といふ獨れ込みとは似ても似つかぬ臆病さではないか。斯くては、不逞青年の不逞了見を増長し、我れとみづから正々堂々の論陣を張つて勝目なきことを告白し、イタチの最後ッ屁に類する彈壓の奥の手を出したと誤解（？）されやすい。

六　中學教育も改惡か

上級學校の善導施設に、斯くの如き時代的無知を暴露した文部省は、中等學校の善導對策にも、飛んだ錯覺の制度改惡を斷行せんとしつゝある。尤もこの方は、中學教育調査會の私案に過ぎず、大姑小姑の機關で審査される間に或は換骨脱胎されぬとも限るまいが、改善案そのものの根本趣意は、近き將來に於いて採用されるものと見て差し支へあるまい。

この案に從ふと、上級學年（四年、五年）を二部制とし、第一部には卒業後ただちに實務に就くもの、第二部には卒業後さらに上級學校へ進むものを包容し、前者には主として實際的教養を授け、後者には主として一般的教養を授けるのだといふ。必らずも惡からぬ案で、現在の如くどつちつかずの中途半端な境地に彷徨させて置くよりは増しであらう。隨つて、その點に關しては一切不服をいはぬが、それに伴つて學科科目の時間的増減を斷行し、外國語の時間を半減する代り國語漢文の時間を倍加するといふやうな方針に對しては、何とかの一つ覺えの譬へをそのまま、思想善導もかうなつては附ける藥のなきを悲しむ。尤も、中學校用の思想善導施設には、この外に尚ほ、國體觀念を涵養し國民精神を作興する意味で修身教育を獎勵し、東洋文化と日本文化の精華を明瞭ならしめる意味で東洋史乃至日本史の知識を普及するといふ案もあるが、それはそれとして、秀逸は何といつても、外國語の縮少を國語漢文で埋め合はせんとする妙案でなければならぬ。恐らくこれは、國語漢文の時間延長を可能ならしめんために外國語の時間短縮をはかり、原因と結果がアベコベ的に作用したものと思はれるが、内心の天日に恐れげもなく、これが思想善導の一案だといはれては恐れ入らざるを得ない。

現在の中學生が、餘りに過重な外國語の負擔に閉口しつゝあるのは事實だ。それほど粉骨碎身しなければならぬほど、一般

中學生に取つて外國語の習得が必要であるかどうか、その點に關しては、素より幾多の議論すべき餘地も殘されてゐるであらう。だが、同じ程度の粉骨碎身を、國語や漢文の習得に拂はなければならぬほど、しかく國語や漢文の一般的重要性が訴へられてゐるかどうかは疑はしい。といふよりも、そんな必要は毫末もないのである。死語や廢語で充滿する古典は、如何にそれ自體に文學的價値があらうと、當世實用の役には立たず、源氏物語や詩經を誦んじ得たところで、今日の時代に活用の機會を發見することが出來まい。

若し文部省の方針が、いはゆる傀儡をつくることに重點を置き、一切の生活的氣力を剝奪せんとするにあるならば、愚策は愚策なりに意味なしともしまい。が、一方に於いて中學教育を二分し、實際社會の實際知識を注入せんとするほど實用的なところを見せ、他方に死語や廢語の諳誦を强制するといふのでは、眞意の所在が奈邊にあるか解するに苦しむ。その位なら、寧ろ外國語の學習に力を入れた方が、學問的にも實用的にも双つながら有效なのである。それほど外國語は、學問的には素より實用的にも、不可缺の必要を訴へられつつある。

七　本末因果を顚倒す

日本のやうに文化の[illegible]した國では、[illegible]學問の研究が出來ぬといふ[illegible]ならず、それ自身が一種の國語でもあり得る。ここに[illegible]を驅逐し、專ら本國語で學生生徒の學習を援助するといふ文部省の方針は、理想として大いに結構なことと疑ひを入れない。けれども、實際問題として現代の學問が、果して外國語の助けを借りずに獨行し得るか否かは、何人も疑問なきを得ぬところであらう。假りに現在、あらゆる外國語の助力を俟たずして獨行し得たところで、先方の日進月歩的な學術發達に遲れを取るまいとすれば、勢ひ外國語の痛切なる必要に迫られなければなるまい。國學であらうが、何であらうが、その點に關する限り日本は彼等の後進國であり、當分はこれに追隨して國力の充實をはかることが肝要である。

中學教課に外國語時間の大削減を加へんとする文部省的役人は、思ふに外國語の知識あるが故に外來思想を輸入し、ために國民の赤化事實を助長するかの如く考へてゐるらしいが、これは猫いらずの存在が自殺者を增大すると見る解釋と同樣、本末因果の關係を倒錯した觀察といはなければならぬ。さきにも言へる如く、一の思想は一の與へられた事實から生れるもので、單なる思想が遊離的に移植されるのではない。

目前の問題に於いてこれを見る。社會主義思想は資本主義社會に附隨する樣々な現象、例へば資本蓄積とか、自由競爭とか、或はブルヂオアの必然的蓄富とか、プロレタリアの必然的赤貧とか、すべてさうした一定の社會的事實が與へられ、これに對する當然の抗議的立場から發生したのであつた。して見れば、社會主義思想そのものは、現實の對象たる資本主義社會――資本制生産が壞滅せぬ限り、永久にその抗議的立場を棄てぬのが當然、對象たる資本制生産が增進すればするほど、それにつれて、社會主義思想の抗議的口吻も猛烈さを加へるであらう。

尤も我が國に於ける社會主義思想は、發生的にも沿革的にも、西洋のそれに負ふこと多大であつた。その限りに於いて、いはゆる外來思想の命名は必らずしも不當でないが、同時にまた、日本の現實の社會に斯かる思想を移植し發達せしめる何らの對象がなかつたなら、現に見るが如き勢力となり得なかつたとも言ひ得よう。逆面的に見れば、社會主義思想をして斯くの如き猛威を逞しうさせるほど、日本に於ける資本主義的現實は急速な發達を遂げてゐたのである。

明治年代の我が國民的目標は、文明開化であり、國利民福であり、海外發展であつた。その國民的目標に則り、明治の教育方針は專ら西洋の科學文明を採取することに集中せられ、知識も文物も制度も、悉く西洋的なそれを追隨するに寧日なかつた。斯くて僅かに半世紀、わが國富は驚くばかり增進し、凡ての先進國を凌駕するほどわが文明開化を促進し得たのであつた。これが原因に關しては、大小幾多のものを算へ得るが、その直接にして最大なるは西洋の物質科學であり、同時にこれを基礎とする機械工業であり、換言すれば、資本制生産そのものの充用に外ならない。斯く西洋的資本主義は、日本人の物質生活を著しく豐富ならしめ、五十年前の如何なる空想家の如何なる空想を以つても描き得なかつたほど、日本國民の生活は物質的内容を增進したのである。

八　彼等の鈍感盲目振り

資本主義の斯くの如き發達に對し、直接間接これに最も貢獻したのは、言ふまでもなく明治以來の科學教育であつた。元來、資本主義經濟なるものは、機械の發見發明を前提として始めて成立が可能であり、その限りに於いて、科學と不可分の關係を保持する。即ち、科學の進歩がます／＼資本主義の隆興を助け、資本主義の發達がいよ／＼科學の發達を促がし、相互關聯的に一は他の原因となり、他は一の結果となつて來たのであ

る。

資本主義的富裕國を理想とした明治政府が、努めて科學教育の普及を期し、その研究を奨勵して來たのも、けだし當然だつたと言はなければなるまい。歐米先進國の科學文明は斯くして遺憾なく輸入せられ、これと平行して、我が資本主義は急速の發達を遂げ、同時に國民の物質的富力も充實したが、一利あれば半面の一害は常に免れぬ。國民の物質的富がそれほど豐饒となつたに拘らず、富の分配に關しては著しき不公平が行はれ、一方には金殿玉樓の人として酒池肉林の贅に耽り得るものがあるかと思へば、他方には雨漏る四疊半で芋粥さへ啜り得ない者がある。而かもそれは、生れついての個人的素質に甲乙があつたからではなく、偶然の出生に依る祖先的な富裕と貧窮とがもたらす差別であると知つては、苟くも不合理を許さぬ『科學』が看過する筈はない。そこで、曾て資本主義の發達に貢獻し、現に尚ほ貢獻しつつある『科學』、その同じ科學が、今度は矛を逆にして資本主義の不合理的部分に突撃することとなつた。廣い意味で總稱される社會主義、またの名を危險思想と呼ばれるものこそ、實は資本主義の次に生れた科學の申し子だつたのである。

歐米諸國の資本主義は、その受胎期も早く、惹いて社會主義の[illegible]日本においてはやや遅れた。日本とても[illegible]したといふだけで、一定の時期[illegible]には、資本主義の受胎期がある以上[illegible]社會主義の分娩[illegible]既に現れては、資本[illegible]一國に次ぐ大資本主義國といはれてゐるだけ、[illegible]胎兒も大きからざるを得ない道理であつた。

これに依つてこれを見る。日本の社會主義思想は、生るべき當然の社會的理由があつて生れ、成長すべき當然の社會的理由があつて成長しつゝある。嬰兒を無理に握殺したところで、社會主義を生むべき當の資本主義母胎が健全である以上、後から後から無限の分娩を繼續するであらう。随つて、さうした非常手段を採つても所詮は無駄骨といふの外なく、餘り虐待して無用有害の拗子根性を培養するよりも、寧ろ健全な成長を援助してやるのが方法としては賢い。

思ふに、持つて生れた社會主義一派のヒガミもさることながら、日本の識者的役人的眼光は彼等に對して必要以上に冷めたく、同時に彼等の心情を察すること甚だ鈍感である。鈍感なればこそ、パンを欲して泣く子の機嫌を取るため童話を聴かせたり、それで泣きやまぬといつては、横ツラを張るやうな馬鹿なまねを繰りかへしてゐるのである。

思想善導もよい。時節柄はなはだ必要な意義もある。しか

し、善導される側の青年が、何を一體欲してゐるのか、欲してゐる物そのものを知らなければ駄目だ。文部省の役人や學校の先生は、一向それを御存じない。

九　善導も自ら法あり

繰りかへしていふ。現代は科學萬能の時代である。ウソがコチッチでも、それが科學の衣裳をつけて現はれると、そのまま眞理として通用するのである。甚だ慨嘆すべき傾向であるかも知れぬが、眞理も非科學的な表現では通用せず、非眞理も科學的な形態をそなへれば、あっぱれ天下の大道を大手ふって濶歩し得る。つまり如何なる大成の眞實も、衣裳をつけた馬子に及ばず、善くも惡くも科學でなければ夜も日も明けぬが今日の時勢だ。考へれば、年來の文部省的教育方針だったとはいへ、よくも斯くの如く科學精神が普及したものだと、感心させられる。

天下の大勢が既に科學萬能となった以上、大勢を動かさんとすれば、好む好まぬに拘らず、科學的に出なければ駄目である。殊に思想善導といふやうな仕事は、對手の有ち合はせる科學的用意より以上の高き科學的準備が必要で、苟くも論理の篩にかけてボロを出さぬだけの整然たる理論がなければならぬ。即ち、對手を理論的に屈服し得て、始めて善導的効果が期待されるのである。ところが、役人的もしくは教師的なる善導對策は、好んで非科學的な陣營に閉ぢこもり、理論を無視した有りがたさだけを押し賣りしようとしてゐる。これでは善導さるべき筈の側が、却って善導すべき側を輕蔑して、科學と理論の武器を取らせれば自分の方が上位だと自惚れ、惹いて自分自身の抱懷する思想に對し、結局的に眞理だとの烙印を押して貰ったやうにも心得るであらう。さうした確信を彼等に與へるだけでも、文部省的善導策は惡導的結果を招來する意味が多い。

實際、今日の善導的必要を介遣されてゐる思想は、日本書紀や論語で善導すべく、餘りに生々しき現實の社會事情を對象として發生したのであった。その限りに於いて、これらの書物が如何に遠大の理想を教へ、如何に高級の眞理を説いたところで、お伽噺ほどの感銘も與へないであらう。這般の道理を知るや知らずや、役人や教師は唯だ頭ごなしに『神典』だけを押し賣りしようとする。これでは、折角の古典も猫の前の小判と同じく、何らの價値を發揮せざるのみか、却って輕蔑と憎惡を挑發するに止まるであらう。

古典などの場合は、幸ひにして大した實害もないであらう。然しながら、同じ手を國體や國家に對しても、試みる結果は、「

實[illegible]の天下に晒さ[illegible]ただし、[illegible]であり、その下[illegible]のであ[illegible]ら深刻ならざるを得たい。

科學の萬能に眩惑する現代の青年は、先づ與へられた事實たり思想なりが、果して科學的に正しいか正しくないかの批判を開始する。而してのち、その正を認識し得たら始めて得心し、これを眞理として奉ずるのである。そこへ持つて來て、頭ごなしに尊重しろ、禮拜しろ、奉仕しろ、といつても素直ほに承認する筈はなく、却つて捲毛をあらぬ方に曲げてしまひ、たとひそれが眞理であつても容易に承知する氣色を見せない。國體國家に對する現代青年の態度には、少なからずさうした傾向が見られる。これ彼等が、無批判に國體的尊嚴の認識を強制され、國家の至上を無理無態に注ぎ込まれたことに對して、謂はば反動的に不信任の意志表示を慣らされた結果である。

役人や教師は、素より斯くの如き結果を豫想して、國體の尊嚴を說き國家の至上を敎へた譯ぢやなかつたであらう。が、如何にせん、結果は當初の希望とはまるで反對、似ても似つかぬ鬼ツ子を生まねばならなかつた。

十　理論と戰術の逆用

當面の論題たる思想善導も正に然り、文部省的役人としては、[illegible]であへて[illegible]のかも知れない。[illegible]精華を發揮し、國家の[illegible]を増進しうる所以だと考へてゐるのかも知れない。しかし、折角の御親切な思し召しではあるが、徒らに惡質的結果を増長するやうな餘計な手數は、斷じてこの際ねがひ下げにして欲しいのである。

とはいふものの、私は當面の思想善導が全く不要だといふのではない。不要どころか、多大の必要を痛感すること人後に落ちぬつもりであるが、それには矢張りおのづからなる方法を擇びたいといふに過ぎぬ。思想には思想をもつて抗すべし、科學には科學をもつて抗すべし、對手が科學の武器でやつて來たら、當方もヨリ精鋭な科學の武器をもつて交戰しなければウソだ。彼等が理論をもつて國家を否認するなら、我等も理論をもつて國家是認の積極的意見を開陳するがよい。然るに、政府のやり口と來ては、理論と科學主義の立場から、十分立派に國家を是正し得るに拘らず、何のつもりかわざわざ精神主義や理想主義の立場に逃げ込んでしまふ。そこで、得たり賢しと青年は理論即國家否認の結論を導き出し、鬼の首でも取つたかのやうに思ひ上がることにもなる。寧ろこれは、政府が彼等を思ひ

上がらせるといふのが適當なるべく、罪は素より政府にあり、惡導の惡導たるゆゑんも玆に求められる。

政府は何故に、理論をもつて國家國體を是正せんとしないか。――などと、些さか意地の惡さを恐縮するが、實のところ、科學主義の立場から太刀うち出來るほどの理論を有ち合はせぬため、やむを得ず精神主義や理想主義でお茶を濁し、掛け聲ばかりは勿體らしい思想善導の宣傳に餘念がないのである。これでは、政府自身がみづから思想問題に容喙の資格たきを暴露し、彼等自身が思想的に善導されねばならぬことを自狀したやうなものではないか。

憚りながら我々は、科學主義の立場から、十分立派に國家國體を是正し得る理論的根據を有つてゐる。その立場から、社會科學に對し社會思想に對し、更らには社會問題に對して、これも十分立派に國家主義的是正を與へ得るつもりだ。如何に是正するかに關しては、遺憾ながら餘白のなきことを嘆ずる外ないが、要するに思想善導の現實的意義としては、これらの全部を悉く善導者の陣營に取り入れ、唯だ誤つた不純部分だけを不逞部類に驅逐し、以つて堂々の科學的論陣から敵軍を壓倒することが肝要である。ムツソリーニの成功は、彼れが敵の理論と戰術を知り盡くし、採長補短よくこれを逆用し得たところにある。その點、日本の愛國主義者たちは淺猿しき限りだ。彼等は敵の理論は素より、戰術さへ知らぬ。隨つて、獨善的な志士國士的大言壯語を痛快がる平素に似もやらず、理論と民衆にはとても叶はぬとの前提から、つひ權勢に縋つたり、その後援で暴力を發揮したりするやうな醜態を見せることにもなる。

上にこの善導屋あり、下にこの愛國屋あり、國家國體が輕視されるのも、亦おのづから故ありといふべきであらう。

(終)

日支條約問題を中心として

小村俊三郎

一

先達て新聞を讀んでゐると、今度田中總理のために、張作霖の會葬使といふ役目を買つて出た林大使が、支那は氣違ひだといつて、大變におこり散らしてゐる記事があつた。成程革命の支那は、氣違ひであるかも知れない。が、たとひ氣違ひであるからといつて、これを氣違ひ扱ひにしては、その支那がますます氣違ひになるばかりでなく、そういふ日本も氣違ひになり、それを見習ふ英米もまた氣違ひになるかも知れない。それについて、自分は近頃屢々兼好法師が、狂人の眞似すとて、大路を走らば狂人なりといつた言葉や、狂人走れば非狂人もまた走るといふやうな諺を思ひ出し、最近における支那と日本及列國との關係は、何だかこれに似たやうな氣がしてならない。狂氣じみた革命の支那を隣國に持つ日本は、實際困つた地位に置かれてゐる。フランスの大革命は、イギリスがこれと似た地位に置かれ、それがため約二十年間に亘る大陸戰爭に捲込まれた。ロシアの革命には、英米諸國就中日本は、五六年に亘るシベリヤ出兵をやつた。たゞし日本の場合には、間もなく、ロシアを承認して、双方共に總べての恨みを忘れ、今日誰れもシベリヤ出兵を、賢明であつたと思ふものはあるまい。

同時に昔しのフランスや、最近のロシアに鑑み、現在の支那においても、苟くも一國の革命といふとが、いかなるショックやセンセーションをその隣國に與ふるものであるかといふとを考へ過激な惡先例を逐ひ、自他共に大損を招かぬやうにして呉れればよいのであるが、しかし、日本としても、恰も一家のうちに、ヒステリーのウアイフや、不良少年を持つたやうな心持で、無暗みに膺懲などと唱へて、折檻をしたり、制裁をしたりするやうなとをせずに、その神經を鎭靜せしめ、正氣に復し、眞人間になる

やうに、これを導びくといふとを忘れてはならぬ。然らされば、日本もまた氣違ひになる上に、列國もまたそうなる外はない。現に米國が支那に對して取つた最近の行動の如き、即ちこれに似た譯のものではないか。通商條約破棄問題その他にしても、支那の不法を咎むる一方において、少くとも、我日本は上述のやうな心持を以て、これに對するのでない以上、その解決の道がないだけでなく、日支及び列國の關係は、更に如何なる事態に成行くかも知れぬとを、自分は先づ第一に豫告して置きたいのである。

二

で、現在支那と日本との間には、大體において通商條約問題の上に、山東問題、滿洲問題の三つがある。その一つだけでも、中々容易ならぬ問題であるのに、今やこれが三つ巴になつて、一時に折重なつて來てゐる。先づその一つ即ち山東問題だけを、支那の大局と相應じて、うまく處置して來てゐたなら、次の二つも今日のやうにならぬ反對に、兩國の國交全體に對して良好な結果を收めたかも知れぬが、今日でも尚ほ何れかの一つを、同樣に取扱つたら、他の二つもまたそれを端緒として、圓滿解決の見込をつけることも出來る。要するに、この三ツと、それから派生した總べての問題は、おの〳〵相聯關した九連環のやうなもので、同時に一つの問題の解決は、他の問題の解決と相待ち、互に相乘除し加減して、全體の總決算をせなければならぬ。そしてそれには、日本としては先づ支那統一の大勢を認め、これに同情援助すると共に、その國權回復の運動をも、達成せしむるといふとを以て、根本方針とせねばならぬ。同時に支那は、我國のこれに關する關係が、遠隔な他の列國とは違ひ、政治上滿洲には特殊利害感情や、經濟上その通商條約にも、特殊な痛痒關係のあるとを認め、これを保證するといふことを以て、同じ根本の精神とせねばならぬ。双方共にかゝる大局の見地と諒解との上から、現在の國難問題に臨むとになりさへすれば、その解決は餘り六かしくない筈である。

日本として最大の問題は、滿洲問題にあるとせられてゐるから、この問題より入手するとは、根本解決の手段であるが、現在における兩國の感情關係では、勿論直ちにこれに這入る譯には行かぬ。山東問題も略同樣である。通商問題とても、それ自體が、中々容易な事柄ではないが、これがまた滿洲問題、山東問題とも、互に相影響し、ます〳〵その解決を困難ならしめてゐる。が、同時にまた先づ通商條約から着手すれば、他の二ツをも緩和して行くとが出來る。凡そ何事によらず、總べての問題には、利害と感情との兩面があり、利害問題の解決には、先づ感

[illegible]にも、[illegible]は[illegible]何とたに[illegible]ば、支那國民革命の標榜は、事新しくいふまでもなく、北方軍閥の打倒と、不對等條約の廢改であり、軍閥打倒の成功に一段落を告げた彼等は、不對等條約の廢改に進むのが、自然の順序である。問題はたゞ改訂以前に、廢棄を宣言したことにあるのであるが、その不法はいふまでもない。かやうな亂暴は支那自身の利益でもないから、我政府が正面から强硬な抗議をするのは、勿論なことであるが、たゞし正面の抗議は、兎に角、抗議として、裏面において何等かの便法を講じ、その改訂を謀つてやりさへすれば、それがまた自然に支那革命の成功を助け、その統一した政府を承認してるやることになるのであつて、それは即ち支那の國民に取つても、第一位に重要な要求である。從つてこれから入手すれば、恰もシベリヤ出兵の後に、日露通商條約の協定に入り、それが自然にロシヤ承認の結果となつたため、日露兩國の恨みは、綺麗に洗い去られた如く、日支の間にも、これにより始めて種々の恨みを忘れ、山東問題も滿洲問題も、またこれによつて解決の端緒を見出だすことも出來るのである。

三

[illegible]的に日支兩國の[illegible]ては[illegible]ならぬ。自分はこの見地に立ち、その[illegible]入るつもりであるが、その前に現在の問題となつてゐる通商條約と、一般にいふ不對等條約とを區別して置かねばならぬ。支那の不對等條約撤廢の主張範圍は、パリ會議にも提出したやうに、通商條約に含まれた領事裁判權、關稅自主權、外國租界、內河航行權等の問題の外に、勢力範圍の外國軍隊、租借地問題等をも含まれてゐる。が、今度の問題は、主としてその通商條約の改廢に關した問題だけである。租借地問題の如きも、何時かはまた問題となるではあらうが、日本は滿洲に廣大な租借地があり、これと共に滿鐵、撫順炭鑛、附屬地、駐屯軍その他即ち所謂特殊權益の重大利害があるため、支那の通商條約廢棄の宣言は、或はそれがまたそれ等の重大問題に觸れて來るものゝ如くに想像し、その結果が、對滿經濟に次ぎ、對張與良政策ともなつたのであつて、支那が數から殊に通商條約廢棄の宣言をしたことは、無益に日本の政府や國民の一部を驚かしたこととなつて、支那のためにも、現にどれだけの損失となつたかも知れぬ。甚だ拙惡な遣り方であつた。

しかし、今度の問題は通商條約に限り、それすらこれを[illegible]

して、臨時辨法を實施する如きは、元來不可能なとであつた。で、日本政府の出方のやうに、法理一點張りでムキになつてその不條理を責むる一方には、廢棄にあらずして改訂による便法を講ぜしむべきであつた。且それと同時に此の如き亂暴な遣り方は、たとひ誤解でも、日支兩國の痛である滿洲問題に關し、餘計のショックとセンセーションを與へ、決して兩國大局の利益とはならぬ旨を、懇切に說き諭し、尙進んでこれを機會に、たとひ將來通商條約以上に、他の不平等條約即ち英佛等の租借地、駐兵問題に進むにしても、日本の滿洲における關係は、是等諸國とは全くその歷史地位を異にするのみならず、侵略主義のアヘン戰爭によつて、勝手に占領し、割取したイギリスの香港や、その對岸の九龍とも、根本に譯が違ふといふとを敎へ、またこれを機會に、滿洲における我既得の權利に對し、何等かの保證を與へしむる位の態度に出た方が、これも數から採に、對滿強硬策や、警告を突付けるよりは、遙かに賢明な遣口であつた筈である。要するに通商條約問題と、滿洲特殊利權とは、全然別な物であり、その七ケ條辨法の如きは、元來不可能のものでもあつたから、我政府國民は、滿洲については、前述のやうな自信と自覺とを持ち、これに臨むべきであつて、何かといへば、出兵騷ぎをしたり、滿洲切放し論を考へて見たり、徒らに、支那本土の政治的思想的勢力の侵入を恐怖する如きは、却つてその自信自覺を欠ぎ、他の侮りを招くのみならず、自らその地位を危うくするものであるとを知つて置かねばならぬ。

四

で、その所謂不平等條約のうち、今度の問題となつた通商條約の事であるが、支那は何しろこれがため、八十年間に亘り、關税といへば、輸出入共一率に五分で、（最近に二分五厘附加税實施と云ふ問題もあつたが、それも我日本は不法課税としてこれを認めぬ）その自主權をば許さぬから、關稅政策により、政府收入の增加を計ることは勿論、幼稚な產業貿易を保護調節することも出來ぬ。そしてその關税問題には、稅關の管理權をも奪はれてゐる上に、外國人の租界工場や、その製造品には、特別の恩典が與へられ、內地通過稅、沿岸貿易稅にも、不公平な待遇を強ひられ、外國人に對する自由競爭が出來ぬ。その他普通品でも奢侈品でも、主として從價稅であつて、煙草の如き日本は三十四、五割の輸入稅を課せらるゝのに、支那はたゞ從價五分を課することしか許されてをらぬ。又た最惠國條款は、絕對的であつて相互的でないから、報復も互惠も共に不可能である上に、總べての場合に、稅率を自由に低昂する權利を奪はれて

ゐこころ、支那にただ[illegible]つた[illegible]に、ダンピングの[illegible]に至まらた、その當[illegible]政策、如何[illegible]結果を、自國の思ふさゝに[illegible]ことが出來ない。要するに、支那の通商條約は、悉く片務的一方的であつて、その自主自由を奪はれてゐるが、單にこれを關税問題のみについても、これを八十年に通算して見れば、どれだけの損失を負擔されて來たかも分らぬ。

支那は現行條約によつて、此の如く關税自主權を奪はれてゐる上に、更に領事裁判權なるものがある。又これと不可分の關係があるものに、かの外國租界即ち居留地制度が、尙存在せしめられてゐる。これがため、支那の主權法權は自國領土內に及ばぬ上に、廣く內地に向つても、外國の領事裁判權や警察權が、屬人主義になつてその居留民に執行され、租界內には尙外國の銀行會社工場があり、支那の法律に從はずして、自由に貿易、製造、營業に從事し、例へば外國銀行の如き、勝手に銀行券を發行し、預金を吸收し、關税鹽税を保管してをる。支那は勿論これと自由な競爭が出來る筈がなく、銀行券の流通による損失だけでも、どれだけの利益を奪はれてゐるかも知れない。普通に治外法權といふのは、外國の公使及びこれに附隨した事物だけに與へられるのであるが、支那では一般の居留民は勿論その使用する支那人にすら、外國の保護が及ぼされる位であ

ころへに[illegible]にまで[illegible]約に對して、治外法權[illegible]よつての外國駐屯軍[illegible]ば、何等の條約的根據のない[illegible]出兵が行はれてゐることは、こゝに說くまでの必要もあるまい。

五

支那ではこれ等を總稱して不平等條約といふのであるが、その端を發したものは、一八四二年アヘン戰爭の結果としての南京條約、つゞいて一八五八年英佛聯合軍の結果による天津條約等であつて、主として英國の侵略主義白人の優越感によつて、極端なる片務的、不均等的な先例を開き、自餘の諸國は皆なこれに均霑したものに過ぎぬ。日本の如きは、日清戰爭以前までは、全く支那と對等であつたのであるが、その戰勝の結果、歐米の先例に倣ひ、更にこれを擴張したものが、即ち明治二十九年の現行通商航海條約、並びに同三十六年の續約である。その頃迄における日本と歐米との條約は、大體支那と列國とのそれの如く、矢張り白人の壓迫脅威によつて締結し、治外法權や關税一率五分によつて、我主權の國權蹂躙を受け、經濟財政上にも莫大の損失を蒙らされて來たことは、支那も日本も同然である

が、たゞ當時倚蒙昧であつた支那は、猶ヨーロッパの中世紀や、トルコにおけるが如く、法權や租界杯を外國人に與へた方が、厄介がないと考へたのと、その自覺の生ずるまでは、日本のやうには、條約改定に對し、餘り熱心な主張も運動もなかつた。これがため、我國一部の學者中には、これに同情する代りに、その自業自得を笑ふものもある。それも或る時代までは、成程そういつたやうなこともあつた。

が、支那が眞に國際的に目醒めかゝつて來たのは、一九〇〇年の義和團や日露戰爭以後である。で、義和團後列國との通商條約改訂には、領事裁判權の撤廢や、厘金廢止を條件に、關稅を一割二分五厘に增加する主張が、原則的に認められた。が、それはワシントン會議や、一昨年の北京關稅會議を經ても、倚實行をば認め得られないで今日に至つてをるが、その一方にかゝる姑息な改訂でなく、根本的に所謂不對等條約廢棄の主張運動が起つて來た。この主張運動は、義和團以後における支那の國際的並びに民族的自覺によるもので、その最も顯著な現象は、歐洲大戰以後の民族自決主義と相待つて、猛烈なる烽火を擧げたときであつた。その端緒となつたものは、日本の二十一ヶ條要求からであるが、支那の青年學生は、この時既に激烈なる排日運動をやつたが、それが一變して、北京大學を主とする思想革命、文學革命の宣傳運動となり、前記の歐戰終了と共に、內においても、再び廿一ヶ條や、西原借款に對する排日運動となり、外に對しては、パリ會議における山東問題の對日抗議と共に、(一)勢力範圍、(二)外國軍隊及び警察、(三)外國郵便電信、(四)領事裁判權、(五)租借地、(六)外國租界、(七)關稅自主權の撤廢乃至回復の提議となり、再び一轉して、廣汎なる主權回復の主張となつた。ワシントン會議においても、略ぼ同樣の要求をしたのであつて、從來の排日運動は、一轉して一般國際的のものとなり、就中廣東事件、上海事件を經て、英國に集中さるゝに至つた。これと共に見逃がすことの出來ぬ現象は、この國權回復の主張運動を、孫文がその三民主義中の民族主義に結びつけ、新たに不對等條約の廢棄を標榜し、更にこれにロシアの舊條約破毀の宣言を動機とし、マルクス主義とその學說により列國多年の壓迫と搾取とに、國際的資本主義とを結び付け、帝國主義の打倒を以て新たなるスローガンとし、その帝國主義と特殊の因緣ありとする北方軍閥打破とを併立せしめて、これを國民黨の綱領ともし、國民革命の目的ともするに至つた。

で、北大派の思想運動と、孫文の政治運動とは、兩者相待つて全支の人心を風靡し、こゝに先づ北方軍閥打破の目的を達するに至つたのであるが、同時に帝國主義打破、その實際方面で

あるべき條約の改正運動に對して、その方針に於けるるのは、明白に於つては、その好ましきことであると否とに拘らず、支那としては、合理的にも兎に角、避るとの出來ぬ歸結であつた。

六

が、支那としても、そこにその不對等條約の破棄は、文字通り即時廢止であるか、また改訂して然る後の廢止、即ち改廢であるか、換言すれば飽迄非妥協主義なボルセウヰツタ的であるか、乃至は妥協的な修正運動であるかの問題が尚殘されてゐた。革命のための宣傳としては、即時廢棄を主張しても、その完成のための實際運動としては、妥協的修正によるべき外、實行の見込のないとは、見易き道理であつて、國際法學者や、法理論者の論難を待つまでもないとである。もし孫文が在世さへしてをれば、その力を以てこれに一轉機を與ふるとも出來たであらうが、軍事匆忙の際、蔣介石以下にはその考へもなく、またその力もなく、これを理想に走る青年外交家の手にのみ、一任して置いたため、今度のやうな即時廢棄の通告ともなつた譯であらう。また列國殊に日本としては、現に現行通商條約が、その期限に達してをり、又た既に北京政權と、その改訂の商議中にあつた際であつたから、[illegible]には、[illegible]實の不當なることを説明して、これに[illegible]、その努力を致すべきであつたらうに、[illegible]反對に南京政府や、對支強硬論者並びに錦州等の手段を強行し、極度に支那國民の反感を買ひ、青年外交家のそれを一層刺戟したとが、たまたま、我通商條約滿期の到來と共に、今度の通告ともなつたものであるといふとも出來る。

但し今度の問題は、一般的不對等條約の廢棄でなく、そのうちの通商條約だけに關するものであるとは、既に前段に述べて置いた通りであるが、この通商條約廢棄問題は、何も今度の南京政府に限つて始まつたものではない。凡そ革命の思想には、南北の區別がなく、殊に國際關係にあつては、北方の軍閥政府の下に在つても、南方と略ぼ同樣であり、若くは却つて競爭の關係にあつた。通商條約に關する問題は、第一獨墺二國は、パリ平和會議により、支那との既成條約を破棄せられ、勞農ロシアは、自らこれを放棄したから、自ら別問題であるが、その他にも、北京政府は、民國十五年に佛支安南陸境關税條約、同年白支通商條約、翌十六年西支條約が滿期となつたため、その無効を通告したとがある。たゞ日本の滿期に對しては、特に六ケ月の改訂期間を與へた。ベルギーの如きは、その六ケ月の期間を

爭ふため、ヘーグ國際裁判所にまで、破棄の無法を告訴したことがあつた位いであるが、その後平等の條件にて改訂に應ずることとなつたまゝ、今日に至つてをる。

その他に北京政府から既に、滿期通告を受けて躊躇中のものに、前記ベルギー、スペインの外にも、オランダ、ポルチユガルがあり、ギリシヤとは、現にパリーにおいて改約中であつたが、本年五月既に調印を了し、これを南京政府に引嗣いで、批准の手續中であるが、これは一九二〇年の瑞支條約、一九二一年の獨支條約とその後の瑞西條約、暹羅條約波斯條約につぎ、全然對等の地位に立つて締結せられた通商條約であつて、利害關係の薄き小國であるとはいひながら、原則上の參考として極めて重要なものである。即ち法權は双方共に所在國の法律に服從し、課税も所在國人民も同様、關税も所在國の國内法通りとし、たゞ訴訟について、ギリシア人の受くる裁判は、支那新式の法廷に限り、ギリシア人の辯護士と通譯とをアドヴアイサーとするとの出來る聲明が、これに附屬せられてゐる。

獨逸との通商條約も、大體同様のものである上、ドイツは既に居留地をも撤回されたのであるが、それで結果はどうであるかといふに、現に最近在北京の獨逸公使シユールマンは、獨逸人は七年間一向それで差支へなくやつて來たことを支那の新聞記者に談話し、又たこの程東京に來訪した通信員ザルツマンも、同様のことを我新聞記者に話してをる。それは關税は各國との現行税率を準用し、訴訟は民事商事並びに支那人を被告とする刑事問題は別とし、ドイツ人は却つてその行動を愼しみ、裁判沙汰にならぬやうにし、支那の法廷でも、國際信用を顧りみ、前記の訴訟事件に關しても、成るべくその判決を公平にするから、自國法權の保護のないドイツ人の方が、支那人に愛好され、その貿易關係の如きも、漸次に回復し、進歩しつゝあるやうな奇現象をも呈してゐるのである。兎に角、支那人における獨逸人は米國人と共に、一番氣受けがよく、支那人の商議は、成るべく獨逸人米國人に對してする事を例とする。

七

で、最近の出來事である南京政府の通商條約廢棄の通告は、どういふものであるかといふに、それは前述ベルギー以下躊躇中の諸國の外、イタリーとデンマーク兩國との通商條約が、本年六月三十日で、おの／＼六十餘年の滿期に達するのと、日本のが七月二十日を以て、三十年目であるのに對し、同七日に臨時辦法七ケ條を制定し、既に滿期に達してをるものは、即時廢止して、新條約を訂結し、未だ滿期に達せざるもの

は、その期限迄に、これを訂結し、當分[illegible]しては、[illegible]訂結に至るまで、輸出入品に課税は、さきの國法に發し、關税だけは國定税率制定まで現行税率を[illegible]用すといふ驚くべき[illegible]な聲明を爲したのである。この通告は、現行條約を即時に廢棄する上に、領事裁判權及び協定税率を非認するのと同様であるから、通商條約の基礎を一擊に打破する外、特に日本の滿期が廿日であるのを控へての行爲であるから、我國に取つては最も重大な友誼の無視を意味してゐる。國民政府の外交部長王正廷は、右七日の聲明を發した後、これを我國にも通告すると共に、更に十九日に至り、正式に條約滿期により、即刻改訂し、双方平等互惠の原則により、新條約を締結し度旨照會に及んだ。

我政府はこの通告や照會に對し、その對支强硬政策からも、勿論その不合理不合法なるとを指摘し、原條約の第二十六條に基づき、條約滿期後六ケ月は有効期限の存續すると、六ケ月中に改訂し得さる時は、更に十年間有効なる旨を主張し、殊に國民政府が條約無効の主張を拋棄せさる限り、改訂に應ずると能はさる旨、極めて强硬なる回答を發した。南京政府は勿論條約無効の主張を拋棄するとは、その主義政策と政府の面目上、實行不可能のとであるが、同時に臨時辯法實施の如きも、また不可能のとであるから、裏面において何等かの便法を講じ、現條約を[illegible]上二つさへ[illegible]、一方において[illegible]要求するに至つたものゝ如く、[illegible]は二つ[illegible]で國に[illegible]し、何事か[illegible]のやうであるけれども、[illegible]心は、中々强硬であつて寸步の[illegible]たきものゝやうであつて、問題は双方の水掛論と睨み合いのまゝ、デッド・ロックにたつたまゝである。この形勢は、當分そのまゝこれを持續する外なからう。

八

尙日支通商條約が、七月二十日に至つて滿期となつたといふとについては、一應の説明を附け加へて置く必要がある。そもそも、明治二十九年即ち光緒二十二年の日支通商航海條約は、一昨年の十月二十日に至り、既に三回目の有効期限に達し、以後北京政府は、ベルギー等に對しては、即時無効を宣言したに拘らず、日本に對しては特に六ケ月を限つて改訂に應ずるやう申込み、日本政府もこれに應じ、昨年一月二十一日に至り、始めて第一回會議を北京に開き、四月二十日六ケ月の滿期に達した後、改めて三ケ月づゝの猶豫期限を付し、その期間內に改訂の談判に從事し、芳澤流の牛の涎れで、五項條約だけに七回かを費やし、約一年以上に亘り、何等の進涉をも見ずして、支那

無耶になつてゐるうち、本月二十日に至り、五度目の延期期限に達し、その間に北京政府が倒れて、何時の間にか、南京政府がこれに代り、我國は同政府に對し、その改訂談判の繼續につき、何等のステップをも取らぬうち、突如として今回の聲明や通告を受くるに至つたものである。

然らば、南京政府は何が故に、特に我國との期限到來を前に、此の如き斷乎たる手段に出でたかといふに、山東問題、滿洲問題により、極度の反感を有する支那は、日本との間に、前述のステップを取るやうな友好的關係を有せず、我政友會政府とは、むしろ斷交同斷の狀態にあつたことと、一面においては、その反動として、英米殊に米國と暗中の握手に成功したやうな事情にあつたとに由るものであらう。我政府が支那から條約破棄の通告を受取つたと殆ど同時の廿五日には、米國の國民政府承認と同然な通告を受取り、同時に關稅自主權容認、それは一昨昨年の北京關稅會議において、我國が率先してやつたその自主權を楯に、支那との條約を調印したとは、何といふ運命の皮肉であらうか。米國の支那に對して執つた行動は、その實際價値につき、既に定評があるから、こゝには繰返さぬが、我政友會政府の對支政策と對照し、その反動としてこれを見る時、特にその意義の顯著たるものあるを覺ゆるのである。

かゝる國際的環境の中にあつて、更に最も我國に不利益なことは、日本との通商條約は、疾く既に滿期に達してをり、その他同様の諸國は、何れも餘り支那と通商的利害の少ない國や、小弱國ばかりであるのに、今後滿期に達する國々は、佛本國とは一九三三年、米國とは一九三四年、英國とは一九三五年であり、おのおの將來五、六、七年の年月を有し、そのうちに、日本と支那との條約改訂が、果してどうなるかを、涼しい顏で高見の見物をしてをればよいのである上に、これ等の國々と支那との貿易は、既に一般に知られてをる通り、關稅問題については、石油、煙草等の外、精製品、奢侈品、器械類等が多いのであつて、何れの國に向つて輸出するにも、多少の高率稅は免れぬものが多いから、關稅問題には、日本程痛痒をば感ぜぬ。それゆへ、米國の如きは、自主權容認の條約をしたのであるが、それすらまた最惠國條款付であるから、自國のみが損をする譯でもない。

又法權問題についても、英國は一九二六年の十二月、米國はその翌年の一月に、申し合せたやうに、支那に對する新自由政策の大綱を定めて、これを聲明してをり、英國の如きは、現に

ずはつ[illegible]し、[illegible]も、[illegible]し[illegible]いできつて、その他の者も、その後の時局[illegible]によ[illegible]、[illegible]つきゝにはなつてをるが、要するに、我等は己に何、時勢の推移と共に、その態度をも、早くこれに順應せしむるだけの用意が出來てゐる。いふまでもなく、米國はこの點につき、最も進退自由の立場にあるが、英國の對支政策も、從來印度における赤化防止の前衛とする事により、政治的軍事的必要もあつたのであるが、ロシアの世界宣傳が、先づ支那において、一大失敗を見た以上、香港も廣東上海も、主として經濟的に平和發展の足場にすればよいのであつて、同時に過去のやうに日本に依賴する必要もなく、反對にこれと競爭の地位に立つを利益とする位のものである。

十

然るに我日本は、單に通商貿易に關する經濟的利益だけでも、英米佛その他の諸國に比すれば、勿論遙かに大にして遙かに深く、且甚だ複雜なる利害關係を有してをる。その日本が、たとひ、條約破棄でなく、改訂にしても、その時期の上、先例の上からも、列國の犧牲となつて、これが模範を作らねばならぬやうな苦しい地位に立たしめられてをる。それゆへにまたその[illegible]は、[illegible]において、[illegible]利[illegible]の[illegible]き、これに[illegible]つて[illegible]を獲得することを得る筈であつたのであるが、今日以後は、たとへその友好な關係にあつたところで、最早容易にこれを望む事は出來ぬ。況んや、山東問題、滿洲問題を加へて、支那の對日反感が全土に横溢してをる今日、よし、條約廢棄のやうな亂暴至極の事がなく、北京政府との改訂交渉を繼續すると同然な事情の下においても、前途は容易ならず困難の筈であつた。その上に現在のやうに亂暴な南京政府と、强硬一點張りの我政友會政府とを控へては、何を考へ何を講じて見たところで、駄目であらう。たゞ自分は我國民の立場から、本論の冒頭に述べた通り、條約問題、山東問題、滿洲問題の三ツを一ツに、先づ條約問題から、その全體の解決を試みるとにつき、多少の興味がないでもないが、それには先づ條約問題につき、肝腎な利害影響を檢討し、その輕重を量つて大計を斷じ、次ぎにその實際の方法をも、考究せねばならぬ。しかし、こゝには既に能へられた紙幅を超過すると、遙かであるから、大部分を問題の解說に費やし、そこに及び能はなかつたことを遺憾とする。

（昭、三、八、五、）

無産大衆党の任務・目標と合同への展望

鈴木茂三郎

戦線の再建と合同への任務

帝国主義ブルジョアジーの支配する資本家＝地主の政府による、わが無産階級の全組織を、一挙にして粉砕せんとする反動政策の犠牲として、階級意識の尖鋭な、わが陣営の一角、労農党ほか二団体が解散せしめられてからは、朝霧がたてこめたやうな陰欝な空気が無産階級の陣営を擁してゐた。

一般的には、混迷と逡巡と萎縮と右傾を、惹き起させたやうな灰濁色の旋風が、わが陣営を染めあげたかのやうに見え、部分的には日和見、今日の両農民組合の合同、解散評議会所属の既存組合諸組合の、有効的な必要な努力が成果を挙げてゐる地方には、追手に帆を孕せたやうな好い心持ちで、右翼的指導者の謀略による分裂的結成がすゝめられたり、或は崩壊してゆく組織を放任した瞬間に、弾圧に向きつめられて狂暴性化者となつたらしい一部の極左的指導者の所作による、一と握りの数にはあまるほどの英雄を以て、あまりにも目覚ましき闘争が演出されたりしてゐる。

さうした部分的な動きと色彩は、灰濁色の陰欝な朝霧のなかに吸ひ込まれてゐた。

しかるにここに無産大衆党は、忽然として躍り出た朝暾の如く出現した。無産大衆党は陰欝な朝霧を破り、灰濁色な旋風を排ひ除けやうとする、輝やかしい任務を課せられて出現したにかゝはらず、しかしそれが、どれだけの成功的効果をあげ得るであらふかはともかくとして、無産階級の陣営に朝暾の光を投じたことは厳として争はれない。

しかし吾々は、ただ、もとより無産大衆党に課せられた任務を、過重に自負したり、又任務の遂行力に附帯するところの無産大衆党の旗の下に結成されつゝある力を、過大に評価したり

するものではないが、吾々が今日に於て為さねばならぬところのものはな
いくつの任務のために、少くも二つの重大な當面の任務を解決するものである。

一つは踏み躙られた戰線の建設、他の一つは單一無産政黨の全國的合同を實現することにあるが、踏み躙られた戰線の建設とは、舊勞農黨々員や黨の影響の下にあつた所謂勞農黨ファンを、無産大衆黨の階級的政治戰線に再組織するといふ、單にさうしたことだけではなく、無産政黨對立の形勢を厭つて、政治的中立の安全地帶に逃避してゐたり、或は既成無産政黨の日常鬪爭に對する不活潑の故に、階級的政治運動に無關心でゐたり、或は又、ブルジョア政黨の影響の下に低迷されてゐたりする一般無産大衆をも、吾々の戰線に動員して、階級的な政治戰線の再建と統一と擴大を期することにある。

そして、さうした努力と成果なしには、他の一つの重大な任務、無産政黨の合同による全國的單一無産政黨の實現は、夢を噛み殼を食ふの願望にをはらざるを得ない。

何故か。それは問ふまでもない。解體されて、散亂したまゝの舊勞農黨大衆と、日勞、社民その他との合同などは、夢の世界ならばともかく、實在の問題としては、普通人には思考さへも出來ないことであり、組織大衆を持たない新黨準備會の舊勞農[illegible]

[illegible]
[illegible]勞大衆が與へつゝ、[illegible]

殊に無産大衆黨による戰線の建設には、[illegible]合同への、さらに特殊な意義と役割とがある。といふのはすでに[illegible]質とになつてゐるやうに社民と日勞との對立は、關西の特殊情勢を除けば重大な他の影響に強制されない限り、合同は困難と見られる。從つて無産大衆黨とすれば、第三黨としての役割の、いくらかのことは果すことも出來るであらうし、又果さねばならぬが、それはさて置くとするも、社民黨の内部に發生しつゝある階級的分子の、萠芽の生育を有力に支持しつゝ、他方には階級的日常鬪爭を果敢に鬪つてゐる日勞黨の左翼的傾向との、力強い協力によつて、無産政黨の合同への具體的な歩みを、現實に踏ませねばならぬ。それは又、實現される一大合同政黨の階級的本質を、これらの諸勢力と合流して確保する上からいつても、無産大衆黨による階級的政治勢力の、一般の建設は、絶對に必要である。しかしてここに述べたこれらのことは、無産大衆黨が踏み躙られた戰線の建設を目ざして、闇暗の如くに光を投げて出現した所以であり、又無産大衆黨に課せられたる輝ける任務でもある。

勞農黨過誤の徹底的淸算

その任務と目標を、かくわが無産階級全體の上に置く、わが無産大衆黨は、合法的政黨を組織する上に、反動政府と反動諸團體と、その他困難に導くところの、周圍の情勢に、體中を耳と眼にしたほどの注意深さを以て、結黨を取り急ぎ、一と先づ東京を中心とする關東地方の地域的基礎の上に、結黨式を擧げたのであつたが、結黨の翌日すでに、山口、廣島、岡山、京都、大阪、兵庫、愛知、長野、岩手、北海道、埼玉、新潟、香川、神奈川の各縣の縣下の各地から、支部組織の要請を受け、數日後には散逸した舊勞農黨員と一般無産大衆を急速にとりまとめ、支部組織の準備が整つたとの報告に接した。

吾々は、これらの情勢によつても、舊勞農黨々員と一般無産大衆が、日常の合法的政治鬪爭機關としての、新黨の出現を、いかに切實な期待をかけて待つてゐたか、いかに感激的な歡喜をもつてさへ迎えてくれたかを知つて、無産大衆黨の結黨と前途に對する、確信と希望を深めたわけではあるが、しかしさらしたことには、ここでは觸れてゐる暇がない。たゞこれに關聯して若干必要なことを摘記するならば合法的大衆黨としての無産大衆黨の本質が、やがて新黨員となるであらうところの、これらの無産大衆に於ては、その骨身に滲透するほどの確さを以て、理解されてゐることとである。

それは次ぎのやうな、舊勞農黨の過誤の淸算、無産大衆黨の本質を鮮明せる立黨宣言の一節が、地方のこれらの無産大衆によつても力強く強調されてゐることが、黨本部への報告によつて確め得られたからである。

吾々は一方においては斷乎として謂ゆる極左翼的分裂主義の傾向と戰ひ、他方においては、いまや高まらんとする右翼的分裂主義と鬪爭し、我國勞農大衆の熾烈なる階級的要求たる、單一無産政黨の結成實現のために努力するものである。

更にこれらの任務の當面的遂行は、日本無産者運動の現在の發展段階の具體的狀勢を的確に把握し、合法的大衆政黨の特殊の役割を認識し大衆黨としての合法的可能性を極度にまで發揮して鬪爭することによつてのみ可能である。」

蓋し舊勞農黨の過誤の最大なものは、第一に、宗派的分裂、排他主義の一群のものが、黨幹部と大衆の愛黨心を巧みにおやつつて、黨を支配したことが、黨の根本的な過誤の源泉であつたが、第二には客觀的狀勢を的確に把握し得る經驗と智識の、いくらかでも持ち合はせた指導者が一人さへゐなかつたことにある。從つて第三には必然的に戰略戰術の上に誤謬をおかし

「すべての人民に自由を與へよ」といふ日和見的スローガンを提唱したり、「勞働者、農民の政府をつくれ」といふ××政府をかつぎ出したり、「勞農協議會をつくれ」と、ソヴィエトを振り廻はしたりしたのである。大きに於ては、大衆黨と前衛黨を混同し、合法的大衆黨としての勞農黨に、前衛的××黨としての任務を課せしめたことにあつたのである。

ここに指示したる、かうした舊勞農黨のおかした救ひ難いかうした過誤は、綺麗薩張りと清算して、新黨へ持ち込んではならぬものであることはいふまでもない。そしてさきにも述べたやうに、無產大衆黨は、黨大衆と共に、卒直に、大膽に、かゝる過誤を清算した新しい姿をもつて立ち現れたが故に、されぱこそ、勞農黨殘存勢力の新たなる建設と、黨將來の發展が可能であり、無產政黨合同への期待が、無產大衆の間に、急速にたかまつてきたのも、合同への障害となるかうした過誤が清算されたところにある。

無產大衆黨成立の意義

しかるに、無產大衆黨に對する、反對の飛礫が二つ飛んできた。一つは極右の反動團體から、他の一つは極左の新黨準備會からである。極左と極右は、同一の社會的根據の上に生れる二分派にすぎないといふ、[illegible]。ここで[illegible]てられたなどとは、無責任極まる暴言であり、[illegible]過誤でなければならぬが、反動團體の反對理由はともあれ、かつては輝やかしき歴史を記録した新黨準備會の成員諸君が、何にを血迷つてか、彈壓下にあつて合法政黨獲得の、涙の生みの惱みを惱みつゝある第一回發起人會の當日、合法政黨獲得への協力と參加の手を差しのべるかはりに、逸早くも反對聲明の泥を投げつけたのである。その手だ。

諸君!! 泥に汚がれた諸君の手をじつと見給へ、その手をもつて、あらゆる無產階級團體に泥を投げつけ、大正十四年組合總同盟の分裂を決行せしめて以來、政治研究會、勞農黨、市電自治會、日本農民組合、その他あらゆる組合と團體を分裂せしめたのではなかつたか。

これらの諸君の言ふところは、「無產大衆黨は新黨準備會による再建の妨害となる。だが準備會の陣容は微動だもしない」といふ自己陶醉の、強がりや「勞農」派の策動だなどと、反動團體と同一の理由を、官憲に訴えて、結黨禁止を強調したことや、醜惡なる個人攻擊の手段に憂き身をやつしたにすぎない。

さうしたことは、彼等の傳統的な戰術ではあり、又準備會の完全な統制のもとにあるは東京二支部と京都、宮城だけの少數

者の集團にとゞまるといふ、彼等の無勢力と、坭試合ひなどは御免蒙りたいといふ、吾々の階級的道義の故にこそ、吾々は雨のやうにそゝがれた彼等の逆宣のビラに對しては、ふり向きさへもせず、無産大衆黨としては、全無産階級全體の見地から、吾黨に課せられたる當面の任務と目標に向つて黙々として一路邁進しつゝあるのだ。

だが、新黨準備會の幹部――そのうちには吾々とほゞ同一の意見を有せらるゝ諸君が、存在されることを、私は喜びを以て確信しつゝある――諸君の、さうした態度なり、意見なりは、吾黨の一路邁進せんとする大道にころがる路傍の石ころのやうなものであるにもせよ、準備會の下にあつて、勞農黨存續のために、指導者の傀儡の道具となつて、示威の先頭に立たされ、質實に果敢に闘つてゐる若い闘士がある。それが多かれ少かれ、たとへ一人であつても、さうした同志には、より有効な又より切實な闘爭の手段が、無産大衆黨の任務に存することを、誠意を以て吾々は話し掛けねばならないと考へる。

又、農民組合、勞働組合の組合大衆のなかには、――準備會がその皮算用に計上してゐるところの――彼等が一般大衆と共に要求する合法的大衆政黨を、準備會がいまにもつくつて與れるかのやうな幻想に、胸を燃やしてゐるものがある。

さうした同志には、合法政黨組織に對する準備會の無力と無成算と、日常闘爭機關としての無産大衆黨の必要を、熱意を以て吾々は語らねばならないと考へる。

しかして、それを、次ぎに逐條的にしるして、ここから、話しかけ、また語ることは、一面さうした吾々の願望の幾分を達成せしむるであらふと同時に、また準備會との關聯に於て、無産大衆黨が、いかなる任務と意圖のもとに、結黨されたかを、より具體的により鮮明に跡づけるであらふとも考へる。

一、新黨準備會は、舊日本農民組合常任委員會の提議せる「(一)解散の口實を與へざるが如き政策を樹立すること、イ、大衆的共同戰線黨たること、ロ、役員の變更、ハ、黨名の變更、(二)新黨は勞農政黨および農民組合の合同を促進する方針を取る事」といふ、忠言をしりぞけ、あはせて再組織方針を異にする同志を排擊し、百度び解散されれば百一度び結黨するといふ、悲壯なる決意と英雄的態度を以て、頭だけの準備會を構成したが、忽ち無産者新聞の逆鱗にふれて、合法的政黨の組織を一と先づ放棄して、勞農協議會をつくれのスローガンをふりかざしたのである。合法的政黨樹立の誠意と熱意なく、又具體的手段と確信をも有しないで、「勞農黨の組織は解體されたが、黨員は全國にあり、その精神は亡びな

いし——いかにも[illegible]らしいマルキシストではないか——と、す
まし込んでゐるのが、現在あるがまゝの[illegible]のせいである。

二、弾圧政策指導のもとに、行はるゝ闘争は、無産者新聞、労農新聞の紙上に於ては、大デモが展開されてゐることにはなつてゐるが支配階級の弾圧に對する、強力なる抗議は、大衆闘争——十人や百人ばかりでなく——による民衆運動を、現實の地上に展開せしめることである。

だが、それは政治的日常闘争の機關を缺いては、大衆は動かない。しかもかゝる機關は合法的政黨以外にはない。

三、解散の弾圧に對して、組合評議會はすばらしきストライキを以て臨へ、労農黨はめざましき大衆闘争によつて、答えたであらうか。否、遺憾ながら答え得なかつたことを、吾々は大膽に承認しなければならぬ。さうしたことを、煩雑な数字をふりかざして誇張してごまかしたり見透のついてゐる筈の弾圧の勢以に、なすりつけたりして、すまし込んでゐてはならぬ。弾圧直後でさへが、さうであつたのに、組合評議會は單一組合の闘争形態の上に、總聯合を形成しやうと、ともあれ踏み躙られた戰線を建て直したのに、労農黨は、なほ今日に至るも、日常の政治闘争機關を再建するに到らぬ。

闘争機關のないところに、どうして大衆による、日常の政治[illegible]
そこで、[illegible]、第一には[illegible]に對する準備、第二には政治に對する準備、第三には政治に對する無關心、之れである。

大衆はさうした方向に急いでをり、こちらに好を向けてゐる。どうしてそこに大衆闘争がおこり得ようか。

大衆へ、呼びかけて、吾等の戰線へ動員するには、合法的政治闘争の組織を引つさげて日常闘争を活潑に展開せしめることでなければならぬ。

四、踏み躙られた戰線の再建、統一、擴大は、合法的日常闘争機關を一應組織した、それからの事だが、とくに、戰線の再建を成し遂げた各労働組合、又は合同を成立させた全日農民組合と雖も、日常の政治闘争機關のない、從つて日常の政治闘争の不活潑なまゝでは、組合闘争それ自體が、發展しないで萎縮するを免れ難い。

五、無産階級運動の一般的狀勢は、猛烈に右傾化する傾向と、その傾向のなかに、侵略的な勢威を浸透させつゝ右翼派の結成がすゝめられつゝあると、他方反動政府の攻撃力は益々強められる模様がない。

右翼的勢力の浸透を防ぎ、政府の攻撃力を弱めるにも、一般

線の再建と統一と擴大は、あはたゞしき必要に迫られてゐる。

六、如上の狀勢は、地方々々に於て地方的無產黨としての、過渡的な鬪爭機關をさへ、必要とせしめたのであるが、次ぎのやうな來信によるも、新勞農黨の大衆が、何にを求めてゐるか、いかにして鬪はんとしてゐるかゞ、明瞭に寫し出されたやうに明らかである（原文の儘）謹啓前略御免被下度候、就而我等が支持せる新勞農黨は去る四月十日命散以來幹部諸君等は再組織に御苦心せられ居る事は影ながら御推察仕申上候へ共如何せん當局の無理解と云ひ當局の政策方針と云ひ當定再組織困難に鑑み無產大衆黨の結黨は當を得たる策略と云ふ事は我々一同の最も感謝する次第に有之候（中略）實に新勞農黨の再組織に關し心待に待居り候へ共再組織無之候爲め止むなく去る六月下旬に地方無產團體たる無產×××を組織の協議を開催し七月三日發會準備會を組織七月二十日前后同村の聲明書發表演說會を開催致可きの處、其內に新聞紙上に依而無產大衆黨結黨を同じく二十日前后に行はるる旨有之候爲め當方一先中止致候處、取急き豫定通り結黨せられし旨は當地方代表として感謝する次第に有之候（中略）たほ支部黨員一同は今回のことは新勞農黨幹部及××聯合會中央執行委員××××氏等の不誠意に起つたる事にて有之候故、何分宜しく御協議の上、何分應援の程御願ひ申上候草々」

たど／＼しく書かれた純情を吐露したかうした地方の同志からの手紙が、吾々の机上に、如何に熟讀に値ひするほどの事實として累積されたことか。

無產政黨合同に對する態度

かかる促迫した狀勢に即して、新勞農黨々員と一般無產大衆による、戰線の再建と統一と擴大をはかる他方には、無產政黨の合同による單一的全國無產政黨の實現に、その當面の任務と目標を集中する無產大衆黨は、後段の任務、即ち無產政黨合同の上に、いかなる波紋をゑがきつつ、いかなる役割を演ずるであらふか。

わが無產大衆黨は、その前段の任務、即ち踏み固められた戰線の再建と統一と擴大によつて、今や一應――その任務の成功的遂行は今後の黨の活動に期待されることはいふまでもないが――合同すべき主體をここに形成するに到つたのだから、合同問題が提起される條件が整つたわけで、それだけのことだけにしても、停頓してゐた合同問題への具體的な一步を踏み出したことになる。

こ[illegible]

それと共に、[illegible]ことによつて、合同の障礙となつた[illegible]されたことによつて、陰惨な障碍が除かれて、合同問題の行く手は[illegible]に於いてもあるし、排他的方針に終始した在労農黨とは異つて、日労、社民、日農その他の地方政黨との合同のための友誼的關係も、滑らかに運ばれるであらうし、合同問題はかくて始めて、可能を前提としたる段階に到達したるやに思はれる。

吾々は、合同に對しては、勇敢に積極的態度を執るであらふ。だが、それは無用なる提議權を爭ふことではない。他黨の大衆を「戰ひ取る」掠奪でもない。

吾々は、他黨との友誼的關係を、黨と黨、大衆と大衆との間に深めるであらふ。だから今日「エセ無産黨」と罵り、明日わが友黨日労黨などと、おだてあげるやうな階級的不信を厳に戒める。

吾々は、地方政黨との緊密なる聯携と協同によつて、地方政黨を、全國的政黨へ、合同政黨へ、合流すべくたかめるであらふ。地方政黨を押し潰すことではなく、その量と質の發展へ協力する。

吾々は、他黨との日常政治闘爭を不斷に闘ふであらふ。他黨

[illegible]

き[illegible]に、[illegible]て、大衆へ[illegible]れたやうに、合同の[illegible]なる[illegible]心と、[illegible]敢に闘ふことを誓ふ。

これについてもここに一つの挿話がある。

無産大衆黨は富山縣下の同志から富山電燈の獨占的横暴と闘ひつゝある、電燈値下げ期成同盟の、民衆運動に應援を求められた。

結黨後まもなかつた黨は、支部組織のために、非常なる多忙のうちにあつたにかゝはらず、黨は敏速に取り上げて立つた。

無産大衆黨が、これを取り上げて立つたは、それが、無産大衆の日常生活に於ける要求にピタリと照合したものだつたからである。

とりあげた無産大衆黨は、次ぎの戰術をとることによつて、民衆運動を有効に支援した。

(一) 民衆運動を富山市へ侵入せしめること

(二) 富山電燈の從業員を、第一には民衆側へ立たしめること、第二には民衆運動に中立せしむること

(三) 必勝を期するために、民衆運動の構成員の上層と下層

の、間隙を故意に利用することをしない
（四）運動の影響を、中央と呼應することによつて、全國的に擴大せしめること
（五）日勞黨、社會民衆黨との協同戰線の實現、但し富山に支部を有する社民の自主權を尊重する。

指令として、富山くんだりの問題を、ここへ引き出したことは、かつて日勞黨の指導する富山爭議に對する民衆運動が、勞農黨によつて妨害された階級的罪惡と照應して、無産大衆黨の態度が、いかに異つてゐるか、そして、さうした些細らしい日常の他黨關係が、合同の上に、存外重大な結果をもたらす過去の諸經驗に顧みて、無産大衆黨が、合同實現のために、いかに細心に、結局花にも心を配る態度をとつてゐるかを、ここに證據立てんがために外ならぬが、かくて無産大衆黨は富山における社民黨の勢力地域にその支部組織を中止し、また運動の展開を存護りつつも、問題を全國的に展開せしむべく中央部からの運動の程度に、富山に於ける運動を限局したのである。

無産大衆黨は、資本主義ブルジョアジーとの鬪爭のために、鬪爭を、より有効に、より有力ならしめるために、無産階級の全戰線の統一、擴大する合同の實現のためには、さうした犧牲を措しまない。又さうした細心の注意をも忘れないでゐるのである。

問題の所在、合同への展望

然らば合同問題の、問題の所在は現に何處に在るか。
ここに一應、合同問題の經緯を、ふり返へることによつて、問題の現に、所在するところを突き止めやう。
經緯の概略は次ぎのやうである。

第一次合同問題に於ける各黨の態度（昭和二年十一月）

勞農黨　他黨絶對排擊の態度から、數日にして機械的に所謂「無角度を抱いた轉換」を遂げて、指導精神にこだわらざる合同を提議したのである。

日勞黨　勞農黨に見喰ふ「宗派的分裂主義排除」の單一絶對條件を條件とす。

社民黨　勞農、日勞の合同提議の對立は、共産主義內の二分派の對立である。右翼結合の方針を明確にす。

合同失敗後の各黨形勢の經緯（昭和三年三月）

勞農黨　勞働者、農民の政府を造れ、社會民主々義に對する批判の自由を條件とし、他方共同鬪爭による信用獲得の方針に變更、之れに對し、大道、大西兩常任は、比較的に正當なる合同方針を提議したるため、大道常任に除名さる、

日勞黨　宗派主義打倒による合同實現の

[illegible]

發作一は、[illegible]したる[illegible]す。

社民黨　大阪聯合會大會（四月八日）は[illegible]一派の[illegible]
[illegible]めると同時に一方無産[illegible]の反[illegible]戰線たるを思ひ、この意を含んで合同せんとするものなり」と決議す。

勞農黨解散後の停頓の狀勢

勞農黨　新黨準備會より日勞黨との無條件合同を提議す、地方政黨並に無産大衆黨再建さる。

日勞黨　新黨準備會は合法政黨でなく、又組織大衆の數も分明でないとて拒絶す。

社民黨　關東に於て、全國的青年同盟に合流せんとする青年同盟成立す。

以上は合同經緯を羅列した荒筋である。いま、荒筋に肉を盛つて、各黨の態度を、事こまかに吟味してゐるいとまを持たぬが、要するに問題の所在は、次ぎのやうなところにある。

「無産政黨の合同を妨害し來つたものは、勞農黨――その宗派的分裂主義者――と社會民衆黨の幹部である。だが、勞農黨はその宗派的分裂主義を清算したる無産大衆黨として再建された。だから無産大衆黨と日勞黨との二つに、假りに限るならば無條件的合同は即時可能であると。」

此の場合、宗派的分裂主義の遺産を相續したところの、準備[illegible]
[illegible]への進路を一[illegible]
といふ、[illegible]實現する場合には、いやしくも[illegible]、大衆的政黨[illegible]上、理論上極左であれ右翼であれ、帝國主義ブルジョアジーに對する廣汎なる戰線へ統一すべく、無條件的に合同を拒否する理由のないは明白であり、いづれにするも極左分裂主義に對する、容赦ない鬪爭によつて、彼等の勢力は、徹底的に無力化されるは、一段と明白になつた今日、合同の前途に對するさうした方面からの障害は、吾々の合同への視野から、除いてもよからふが、さて社民黨――外に日農黨も――はどうか。

社民黨の合同に對するこれまでの態度は、全無産階級の、合同への視野に引き出して、峻嚴に批判さるべきであるはいふをまたない。社民黨の幹部の諸君は、（一）支配階級の部隊が、戰線の分裂の故に、先づ極左の分裂派から叩き潰すといふ、巧妙なる政策によつて、彈壓から遙かに遠い安全地帶にあること、（二）その構成要素と、その右翼的指導方針の故に、ブルジョアジーとの限界が不鮮明なることによつて、運動資金に、さしたる困難を感じないこと、（三）黨の本質上、選擧第一主義の故に、議員を多く所有し、又選擧毎に増加する、特殊な意味に於

ての意味を有すること、など、それらによつて、社民黨としての獨立の存在性を、強烈に脅やかされてゐないところに、これらの諸君の、合同に對する態度が、基礎づけられてゐることは、勿論ではあるが、さればといつて、これらの諸君の、合同に對する、あまりにもかたくなに過ぎる態度は、勞働農民黨との對立に於て、勞農黨の諸君が、社民黨の本質を、ファッショへの傾向の過程にあるとの、極左的認識に基く、誤れる他黨政策の所産と受けとる可き理由がないではない。だとすれば、これが何程かの程度のものにせよ、その何程かのものは、少くも今後、次第に解消されるではあらふし、よしんば、颱風のやうに期待から、それが反れたにしても、關西と東京の青年闘士によつてあげられた、合同への爆發的な烽火は、その發展の方向と速度に見るも、吾々の合同への期待を大ならしめる。

殊に、合同への視野を、掩はうとするものは、各黨對立の時代から、合同の時代へ轉向せしめたる、客觀的狀勢——資本主義の狀勢と無產大衆の戰線統一の要望——を見逃してはならぬ。

それは、いま、吾々の視野に何物を展開してゐるか。

第一には資本主義經濟の累積された矛盾が暴露されてある。農村の窮乏、失業者の增加、賃銀の下落、事業整理の困難、等等、數えあげるには、あまりにも多過ぎる。

第二には、生產原料と製品市場の確保と輸出資本を保護すべく、東三省の分割を企圖して、わが帝國主義ブルジョアジーは戰爭を準備してゐる。

第三には、反動的田中內閣は、無產階級彈壓と戰爭への準備と、又それによつて國內產業の非常的安定を期するために、民政黨の資本黨の分裂をはかつて、政局の安定に必死的努力をなしてゐる。

第四には、日本農民、全日組合の、二つの農民組合の合同、その他の組合運動においてその合同に具現されたところにみるも、無產大衆は、力の結合、戰線の統一、擴大を、切實に要求してゐる。

かうした客觀的狀勢は、どの政黨の、どの幹部が、合同を欲せず、合同に逆はんとしても、よく支へ得ないことは、潮流として大に沖するマルキシズムを、治安維持法の剱をもつてしても、防ぎ得ないと同樣である、との確信の上に、吾々の合同への展望は基礎づけられてある。

だが、もちろん、日勞黨社民黨と無產大衆黨に地方無產黨との合同が、より困難を作ふであらふことを、顧慮しつゝ、吾々は無產大衆黨の任務と目標の下に、まつしぐらに、合同に向つて一路邁進するであらう[illegible]

田中對支外交批判

自ら侮る勿れ

永井柳太郎

一

田中大將は曾て前内閣の對支外交と現内閣のそれとを比較して次の如く云ふた。

「憲政會内閣の對支外交は加藤伯以來國を對手にするものである。吾輩は人を對手にする。最も有力なる人を對手にする。個人にしても家だけ對手にして主人はどうでもよいと云ふ譯に行かぬ。」

と。此言葉は簡單であるけれども、田中大將の對支外交の根本精神と其時代錯誤とを遺憾なく暴露した。

對支外交は支那の主人を對手とすべきであると云ふ言葉そのものに異議はない。然し支那の主人は誰だと思ふて居るのか。國民全體が支那の主人である。如何に有力なる人でも、支那の國民の利害を無視して其横暴を逞ふせんとすれば、其地位にすら堪へ得ないことは、幾多の實例が之を證明した。張作霖とか、張學良とか、二三の有力者がその主人で、その二三の有力者の思ふ儘に支那が左右され得るものだと考へたところに、田中大將の大いなる錯覺がある。

二

孫文、黃興等が始めて武昌に兵を擧げ排滿興漢の大運動を始めてから既に十六七年を經過した。この十六七年間に於ける支那は、內亂又內亂で混沌たる狀態であつたが、然しその根柢に於て二大思潮の戰ひつゝあつたことは見逃す事が出來ない。即ち武斷專制主義と三民主義との二大思潮の戰ひである。武斷專制主義の主要なる代表者は何れも傑出した軍人であつた。例へば袁世凱の如き、段祺瑞の如き、吳佩孚の如き、又張作霖の如きがそれである。これに對抗して起つた主要なる人々は多くは文筆の士であつた。例へば孫文の如き、黃興の如き、宋教仁の如き、其他多くはその系統に屬する人々である。而して袁世凱や段祺瑞や吳佩孚や張作霖や是等の武斷專制を代表した人々は、何れも北方の精兵を提げて戰ふたに反し、之に對抗した革命軍は主として南方の民兵を以て組織せられた。孫文は一時北方軍閥に對抗する必要から南方軍閥の力を藉りた。然し南方軍閥と雖も、戰ひつゝある間は、孫文と進退を共にするが、戰ひに勝てば北方軍閥と同樣の欠點を暴露するので轉ては孫文と衝突する。現に孫文は陳炯明の力を藉りたが、轉て陳炯明と衝突した。唐繼堯と提携したが、轉て唐繼堯と反目した。陳炯明と結んだが、轉て陳炯明のために追はれた。此に於て彼は露使ヨツフエを通して共產黨の力を藉り、同時に黃埔軍官學校を建立し蔣介石を之の校長に任じて、自己直屬の軍隊を編成する事に努力した。從つて最近に於ける國民革命軍の中堅には、黃埔軍官學校出身の訓練せられた青年士官も少くなかつたのであるが、然し國民革命軍の强味は、北方軍閥の武斷專制に反抗せる商工業者、農民、勞働者、學生の如き大衆がその同志として又その後援者として、直接間接にその北伐に協力した點に存する。故に此度國民革命軍が懸軍長驅して、北京城頭に青天白日旗を掲ぐるに至つたのも、決して蔣介石や、馮玉祥や、閻錫山の如き一軍人の勝利に非ずして、商工業者や農民や勞働者や學生の如き支那の大衆そのものゝ北方軍閥の武斷專制に對する一大勝利と云はなければならぬ。

北京占領後國民革命軍の內部が果して統一するや否や、これは大いなる疑問であるに相違ない。既に支那からの報導は蔣介石や馮玉祥や閻錫山や白崇禧等の間に於ける確執が避け難いものゝ如く傳へて居る。然しこれは恰かも我國の討幕維新の大業後に於ける政權爭奪の如きものである。薩、長、土、肥の間には討幕維新の大改革後に政權爭奪が行はれたけれども、然も彼等の間に封建政治に復歸しようと云ふやうな者は一人もなかつたと同樣に、蔣、馮、閻、白等の間に例へ確執が起るとしても、三民主義を尊重し國民黨の精神を遵奉せんとする態度に於ては、大體に於て一致するであらう。即ち他の帝國主義民族の

[illegible]
[illegible]支那[illegible]
府ることとは、これ[illegible]この[illegible]
[illegible]に妨害しつゝある[illegible]の[illegible]して、[illegible]一致作戦を相手とし、一致協力を標榜する事に依つて、支那に對する日本の凡ゆる希望が抹殺し且つ實現するものゝ如く誤解してゐたところに、現内閣の對支外交の失敗に終らざるべからざる兩大原因が伏在する。

三

約十年前田中大將の先輩寺内大將が總理大臣であつた時、宛かも支那に於ては北方軍閥の頭目段祺瑞が支那の武力統一を計畫したのであつた。寺内内閣の所謂西原借款は、直接間接に段祺瑞の武力統一を助くる目的を持つて居つた事は周知の事實である。然るにその結果は如何であつたか、外國を背景として支那の武力統一を計畫した段祺瑞自身は、全支那の非難攻撃に耐ゆる能はずして、その囂々たる輿論のために致命傷を蒙り、段祺瑞のみならずその凡ゆる安福系の政治家は何れも政界から驅逐された。而して朝鮮、台灣、興業三銀行から融通せられた西原借款一億圓は、今日は元利合計一億四五千萬圓に達して居るに

[illegible]
たとい[illegible]が[illegible]の。[illegible]に[illegible]がに[illegible]人[illegible]その[illegible]に[illegible]なる[illegible]して、これで國民政府[illegible]に[illegible]たかはありとせば、私は其點を聞かさるを得たい。

介石一人を相手とする外交には何人か賛成するにしても、この一人の盛衰興亡と運命を共にしなければならぬ。この一人が如何に有力者であつても、人間である以上何時病歿するかも知れぬ。殺害せらるゝかも知れぬ。病歿せず殺害せられずとするも、猶且何時失意の人となるかも知れぬ。この盛衰興亡測り難き一人を相手として、國家百年の大計を樹立し得とするが如きは明かに錯覺である。

四

傳ふるところに依れば、現内閣は林總領事を以て張學良氏に對し國民政府と妥協せざるを利とするが如き忠告を與へたと云ふ事であるが、若し此の如き行動にして事實なりとせば、是又支那本部の形勢に對する錯覺と同一の錯覺に原因するものと云はねばならぬ。滿蒙が我新領土に境し、滿蒙の治亂が我新領土

の治安に影響する事の大なるは云ふを俟たぬ。加ふるに滿蒙には既に二十萬の邦人が在住し、二十億圓の投資があつて、我權利々益の重大なる事は他の如何なる外國にも優越して居る。從つて我國は滿蒙に關しては、他の如何なる外國よりも重大なる發言權を持つて居るのである。これは何人も否認する事の出來ない事實であつて、而して斯如き事實は、皆我國の實力より生れたものである。張作霖が東三省の主人でなければこの權利利益が顚覆するであらうとか、張學良にその後を繼續させねばこの權利々益が危殆に瀕するであらうとか考へる如きは、日本の滿蒙に於ける既得の權利々益が一張作霖や一張學良の恩惠に依るものゝ如き誤解から起るのであつて、日本國民自ら自己を侮辱するものと云はねばならぬ。滿蒙に於ける我既得の權利々益は日本國民自らの實力に依つて獲得したものであつて、我實力の存する限り、斷じて何者も侵犯し得るものでない。滿蒙に於ける我權利々益は、決して張作霖あるがために維持し得たのでもなく、又張學良あるがために僅かに繼續し得るが如き薄弱なものではない。日本國民がその卓越せる實力を以て毅然として滿蒙に於ける我權利々益を確保してゐる以上、張學良が滿蒙の主人たると、國民政府が滿蒙の支配者たると何の擇ぶところ [illegible] のために、戰々兢々たるが如き者は、到底滿蒙に於ける我權利々益を擁護する資格はない。

五

最近の新聞雜誌に現はるゝ對支外交論を見るに、啻に現內閣のみでなく在野の論客中に於ても、滿蒙のみを見て全支那を見ざる者が甚だ多い。日本國民は啻に滿蒙のみでなく、更に一步を進めて東亞の大陸全體に亘つて、その土着の住民と共に共存共榮の新天地を拓くと云ふ事を外交の大方針としなければならぬ。現に我國の對支貿易を見ても昨年度の對支輸出合計四億五千萬圓の中、對滿洲竝びに對關東州の輸出合計僅かに一億三千萬圓にすぎぬ。その殘りの大部分は即ち支那本部に對する輸出である。同年度の支那から我國に對する輸入も亦合計二億四千萬圓の中、滿洲竝びに關東州よりの輸入は合計僅かに一億圓で、大部分は支那本部からの輸入である。

若し經濟關係のみを以てこれを見れば、支那本部は滿蒙に劣らざる重大性を有するのであつて、吾人は啻に滿蒙に於ける既得の權利々益を重大視するだけでなく、更に支那本部に對しても、日支兩國の經濟關係を一層密接ならしむべき大方針を樹立する事が必要である。滿蒙と支那本部とを分離せしめ、滿蒙だ

田中外交の特質

山川均

田中首相は、內閣組織の二日後に聲明書を發表したが、この聲明書は內容において、純然たる對支外交聲明書であつた。田中首相の外交家としての識見と手腕とは、かつて何人も知るところがないが、これに反して、田中首相は支那通をもつて少なくとも自ら許してゐる點では、有名な人である。田中內閣は、對支外交內閣であるかの如き感を抱かせる。そして田中首相の外相兼任が、これを象徵するかのようである。

對支外交をもつてその核心としたこの聲明書の核心は、支那の謂ゆる『赤化』に對する斷乎たる反對決意の表明であつた。もしそれ支那の赤化にいたつては、『直接もつとも影響を受くるおそれある我國の立場として』、また『東亞全局保持について重大なる責任を感じてゐる日本として』、さらにまた『世界の平和と一般人類の福祉との上から』、田中首相の日本は斷じてこれを默過することができないといふことであつた。こゝでは田中外交は、日本のために、東亞のために、いな一般人類のために、支那の思想を取締る憲兵の制服において現はれてゐる。

かりに支那の國民政府が、もしそれ斯くの如き對滿政策を有する政友會の活動にいたつては、直接最も影響を受くるおそれある支那の立場として、これを默過することができないといふならば、明かに、國民政府は日本の內政に干涉しようとするものである。日本國民はその國內において政友會をのさばらせておくか否かについて、國民政府のお節介を俟つ必要はない。誰れもが異口同音に、かう答へるにちがひない。

これは支那と日本とを入れ替へて、政友會と無産黨とを置き替へても、何らの違ひはない。

そこで問題は、他國の內政から日本が影響を蒙る場合

他國の内政に干渉すべきかすべからざるか、といふことに歸着する。ところが田中外交は、この内政干渉の四字だけは、專門のやうに心得てゐる。どうして、一そのことに、日本に影響を與へる以上は、他國の内政にも大に干渉すると、男らしく言ひ切れないものだらうか？内政干渉といふ關所の前に來ると、この巌丈も意外に神經質なところがある。

しかしながら田中外交には、いま一つの一面がある。ことに何も支那の内政に關しては、日本は絕對不干渉主義を嚴守する。しかしながら一度び日本の既得の權益が侵害せられる場合には、何時でも斷乎として「有効適切なる手段」を取る――こゝでは田中外交は、巌丈ではなくて、支那におけるヴェスチッド・インテレストの番兵の制服で現はれる。日本の七千萬國民のうちの、如何なる部類に屬する部分が、このヴェスチッド・インテレストの主人であるかは言ふまでもない。

けれども、すべての「既得の權益」は、必ずしも精密には利害が一致せぬ。三菱資本の既得權益は幣原外交をもつて滿足し、三井資本の既得權益は、田中外交を必要とする。山東出兵の目的は、直接には[illegible]、間接には、滿洲の權益を護るための有効適切の手段として行はれたものた。そして間接の目的は直接の目的よりも、一そう重大であり、目的の目的であることさへもある。これに反して南北妥協に對する、干渉ならざるところの警告は、ひとへに滿洲における權益の防禦にあることは言ふまでもない。或る程度においては、それは南支における立場を不利に導びく危險を冒しても、北滿の權益を防禦するといふ、田中外交の特質を示してゐる。支那方面における投資總額は約九億であつて、滿洲の投資總額は十二億を突破する。しかもそのうちの六億に近い額が、金融資金であることが、この特質を遺憾なく說明する。

國民政府は豫定の通り、滿期となつた日支條約の廢棄を通告した。田中外交は固よりこの廢棄を認めない。恐らくは國民政府といへども、日本の外務省が、よろしいと云つてこの廢棄の通牒を受取るものと認めてはゐなかつたにちがひない。そこで日本の廢棄不承認は、國民政府にとつては、大して意外でなかつたらしい。これに反して田中外交にとつては、廢棄の通牒は、幾分の意外であつたかの如き觀がある。國民政府の條約廢棄の通牒が、法律的に見て「暴擧」であるかどうかといふことは、恐らく專門家の解釋に[illegible]

[illegible]さ、こ[illegible]しなことに[illegible]にとつて、[illegible]ことただに名譽なことだらうか？國民政府の行動は『苦勞』であるといふ假定と、この『苦勞』を中に挾んで支那國民と相對することをやむなくした田中外交が、一〇〇％の失敗の外交ではないかといふ疑問とは、何らの矛盾なくして兩立することができる。ひとへに國民政府の『苦勞』の蔭にかくれようとする外交が、いかに無能な外交であるかは、言ふまでもない。

この點では、米國の拔け駈け外交は、田中外交の最もよい對照だともいふことができる。最も簡單では、米支關稅條約の成立は『友邦として深く慶賀する』ところださうである。けれどもそれが如何に空腹者にとつて慶賀すべき牡丹餅であらうとも、棚の上から卒然として落ち來つたなら、何人といへども驚かざるを得ぬ。ひとり田中外交のみが、この慶賀すべき打擊に驚かなかつたと信ずべき、何らの理由もないのである。北京電報が『あたかも日本が、條約廢棄問題で朝野共にいきり立つてゐるのをよそにして……南京政府を法律的に正式承認せしめたことは絕大の收獲であり、列國をして驚異の目を見張らしむるに十分で、日本側の態度に根本的變化をよぎなくせしたるものとして、日本の出方は非常なる注意をもつて見られてゐる』

[illegible]ところとはこ[illegible]國民もまた、この一[illegible]に[illegible]にいたるまで、國民は、南京政府の苦勞を[illegible]る嶮しい[illegible]かにしては、田中外交から、何らの新しい『出方』をも示されてをらぬ。田中外交は、國民政府が廢棄を取消さぬ限りは、詳條約の交涉には斷じて應じない、何時までゝも睨みつこをしてゐるといふことである。もし田中内閣が何時までゝも續くと假定したならば、何時までゝも睨みつこをしてゐるといふ田中外交の方針も、必ずしも實行できないこともない。

田中外交のクライマツクスが、南北妥協に對する警告にあつたことは、恐らく何人にも異存がない。田中首相によると、全ては『豫定の通り』であつた。南北妥協の成立は、もはや既定の事實と認められ、滿洲に青天白日旗の翻ることは、もはや疑ひのないことゝ見做されてゐた（滿洲の赤化！）瞬間に、まつたく豫定の通りに、張學良が林總領事の『個人としての』意見を拜聽に來た。そして林總領事は、かねて同意してあつた豫定の意見を、豫定の通り『一個人の意見』として參考に供する。張學良はその結果として、何ら日本から受けた警告のためではな

く、全く自發的に、南北妥協の交渉を打ち切つた——辛川度し辛川度し。而はたゞこれだけである。けれども想像はこの挿話を、なほ幾らでも引延ばさせる。田中外交は、支那の內政に對して、絕對不干涉主義を標榜する。この內政不干涉主義は、東三省が『東三省の東三省』主義を棄てゝ國民政府に從屬することに對して、何等の異議を挿む權利はない。けれども若し、國民政府は條約廢棄の『暴擧』を敢へてした。かくの如き南京政府に東三省を托することはできぬ！、田中外交はかう主張する。そこで假りに——そして不幸にも——南京政府が、この暴擧をしなかつたらどうだらう？もし私をして田中外交に代はつて答へしめるなら、その答へは簡單明瞭である。南京政府は、きつと別の暴擧を仕出かしたにちがひない。なぜならば、イソツプ物語の小羊は、狼に食はれるに足るべき何らかの暴擧を、必ず爲すべきものだから！

いま一つの疑問は、『自發的に』支那の國民的統一に背いた張學良に對して、ことに張學良が國民政府と明白に對立したときに、『東三省の東三省』のために田中外交はどのやうな保證を與へるか、そして如何にしてこの保證の實行を保證するか、といふことである。田中內閣がいかに大きな印形を捺して保證してくれやうとも、田中首相の

ふ保證は、どこにもない。東三省は、かう反問する。そこでこの保證は、結局、國民がその代價を支拂はなければならぬといふ意味で現實な問題であるばかりでなく、田中外交にとつても、差し當つて當面してゐる最も現實な問題だといふ點において、第一の疑問とは趣きを異にする。

けれどもこの疑問に對しては、私が代はつて答へるまでもなく、田中外交は自ら答へてゐる。對支外交に關する輿論の統一と外交調査會、これが田中外交が張學良に與へようとする保證にほかならぬ。田中首相によれば、外交調査會は、政府の責任を分擔させようとするものではない。たしかに、それは東三省と張學良とに對して、保證を分擔さへすればよい！

田中外交は、支那において現在權を握つてゐる或一個人、ないしは個人を繞る一勢力を對象とする外交であるといふ點では、その最も典型的なものだといふことができる。これはひとり日本の對支外交ばかりでなく、列國の對支外交の傳統であつた。支那における列國の既得權益は、ほとんど悉く、かうして築づかれたものであつた。そこで既得權益の擁護といふことが、直ちに分裂對立した諸勢力とその現狀維持を意味するものとな

[illegible]

[illegible]ここで[illegible]は、[illegible]主義の運動とならざるを得なかつた。

けれども支那の國民的統一は、いかなる政治の下にも進行する。その正常な進行を妨げることはできる。けれどもその進行を無くすることはできぬ。これは赤色の共産主義が要求してゐるのではなくて、いづくんぞ知らん、黄金色の支那資本主義の[illegible]てきた[illegible]

田中外交は、いまこの[illegible]で[illegible]た。[illegible]、要素をかげつゝある支那國民[illegible]として、[illegible]としてその中に理解しないでゐる政治的[illegible]を對象として團結しようとしてゐるところに、保守的な對支外交の特徴を備へてゐる。

分裂外交の必然性

龜井貫一郎

時代も違へば、又其の意義も違ふ支那革命でありながらも、今日之を見て之が米國の獨立戰爭と南北戰爭を一緒にしたものの樣に思はれると共に、之に對する政友會の對支態度にも、並に之を支持する國民一部の氣持にも、當時米國の獨立戰爭や南北戰爭に對して、英國の保守黨政府や一部國內の英國民が持つた處の、輕蔑的な感情の片鱗が看取せらるゝのも興味ある類似であると思はれる。

不可思議なあるものから、明日何が生れ出ずべきかの視力も持たず、冷熱一吹の下に、政友會も民政黨も、强者說く處に權威並び行ふ可しと云ふ事である。一は威にアクセントを置き一は恩にアクセントを置く我々は此の二つに何等根本的な差違あるのが認められない。强いて言へば、其の方法論に於て、一方は、思ひつきをやり、一方はよく考へてやる。一方に非武官に、一方は紳士らしくと云ふ丈けの事であらう。

彼等は國內に於ける社會的變化と其の必然性に盲目なるが如く、支那に於ける社會的變化と其の必然性に盲目なのである。

今日支那を□命ずるものの知らなければならない事は、其の特殊性を通じて支那が今や如何なる經濟生活の段階にあるかを見ねばならない事である。そして同時に、支那が、次に如何なる段階に入り、夫れが其の特殊性との化合に於て如何なる具體的形態に表現されるかと云ふ事である。そして又、其の推移が必然的のものであると云ふ事である。

彼等に此の必然性の認識を求めようと云ふ事は餘りに痛々しい。支那は今や植民地から獨立國になるの甦生の悩みを悩んで居る。此の甦生が必然なりとすれば、其處には掴操す可き左右の道はないのだ。いづれの考慮よりするも此の甦生を助く可きの外はないのである。

ハムレットを煩悶さした様な—「生く可きか生く可からざるか」の命題——「助く可きか助く可からざるか」の命題はないのである。

だが其の必然性は認めない迄も支那に於ける社會的變化の意味位ゐは認識してもよささうなものである。之が認識されたならば、「助く可きか、助く可からざるか」の命題はここに問題になつて來る筈だ。其れが問題とならない時に、吾人は次の結論を引き出すであらう。支那社會變化の意味の認識がなければこそ、又其の意味を俗化するの[illegible]しこそ、

支那に對して（助けるか助けないの根本問題を離れて）只管「恩威並び行ふ」の外一歩も出で得ない事となる。そして何か豫期以外の事件の突發に當面して、こゝに對支政策の無統一と無方針を暴露することとなるのである。

しかしながら、政府の無方針と無統一は特に對支政策に關聯して、夫れが我國歴史過程に於ける内的必然であるを忘れてはなるまい。そして田中大將の尊敬す可き果斷、換言すれば、無謀、無思慮が、此の内的必然を何等隱蔽するの努力なしに萬邦の前にさらして居るのだ。田中大將は、内的必然の其の命のままに踊つて居るのだ。人或は田中外相を以て反動の首魁と云ふ、或人は田中大將を以てドンキホーテと見る。しかしながら、私は、彼に於て必然の運命の前に亂舞し、心にもなき「おらが」を連發する嘆きのピエロを見る。

内面的必然は我國政治過程の分析によつて明瞭に之を得るであらう。

封建制度の圏内に於て擴大された商品交換は、商業資本を營業利潤の餘剰の蓄積から求め得たブルジョワジーと大型船舶を運用し得た江戸、堺、大阪のブルジョワジーを生んだ。封建制度がブルジョワジーの國家に變遷する爲めには中間的過渡的國家

[illegible]

[illegible]しめ、[illegible]として[illegible]資本主義的資本制の發展できるにもせよ、其の生産力を發展するの必要は捨てて置かれない。農業生産力を發展せしむるために、農業に於て封建制度に於けるよりも、大規模なる水利施設の統制を約束し、資本主義を助長し、封建階級の勢力を抑へつけるの任務は、いはゆる官僚に與へられた官僚國家である。社會に對する國家の強權を主張する思想は軍國主義となつてこゝに軍閥が形成される。だが一方に文化行政に對する緊切なる任務は文治官僚に與へられる。

此間、資本主義は、此の官僚に終始因縁し、自由主義の洗禮を受くることとなくして發達した。之が日本資本主義の最大の特質である。成長した資本主義に追隨して一應の生活を確立し得た階級は政治に發言權を求めた。封建階級から官僚の中樞に乘換へ得なかつた落伍者が此の要求を支持した。ブルジョワ、デモクラシイである、制限選擧である、資本家議會である。

しかしながら、軍閥と文治官僚の中を貫いて居たものは藩閥又は藩閥の同盟である。

かるが故に、軍閥と文治官僚の間には元老を中心として一の有機的組織があつた。資本階級はこの官僚によつて助長された[illegible]をとつたのである。かゝる方法に[illegible]た、日露戰爭を經つて暫くの間迄は、我國の政治に於て[illegible]中心があつたと云ひ得る。と同時に對支政策にしても何にしても政策のイデオロギイに從つてマキアベリ式ではあつたものゝ、具體的な方策と腹とがあつたものである。

だが今はどうか。官僚と資本階級の私生兒である政黨中の一は、政治結社として、父たる官僚に對して獨自の立場をとる樣になつた。即ち政友會は○○○○冊立問題を機會に藩閥間の暗鬪に乘じて長閥を倒したのである。薩派は政友本黨を通じ憲政會の庇護の下に市來日銀總裁によつて十五銀行問題を隱蔽すること二年、支へ得ずして終に倒れた。軍閥及び文治官僚の内部に於て藩閥が統制權を握つて居つた事は、其の處に於ける新陳代謝を止めて、其の力を弱くし藩閥倒れて後、軍閥を官僚の部内に分裂の過程を促進した。參謀本部と陸軍省の間にも對立がある。海軍省と陸軍省の意見の對立は既に歴史的になつて居る。軍部外務の對立は更に著しい。小村現情報部次長が、先頭になつて音頭をとられた先年の外務省内の革新會で軍部の外交容喙の材料は集めた筈である。大藏省農商務省内務省司法省に

も夫れ夫れの對支意見があつて、外務のすることを冷眼に批判する。より一步進んで外務に對し其の對支意見の採用を求める様に上局にけしかける。是等の各部門の上にあつて之を統制する權力が滅亡したことは同時に各部門内部に於ける統制權力も又滅亡した事を意味する。一度、統制權力の滅亡がある以上當然實力のある處に仕事が移る。官僚軍閥のイデオロギイに於て、實力とは、要するに智識である。ある事件に關する歷史的法律的技術的な智識である。其處で參謀本部人多しと雖も、實際仕事をして居るものは支那班と其の上局の數人であり、外務省有能の士多しと雖も支那の事は、亞細亞局内數人のものの外は敢えて容喙する事を許されない。

かくの如くして、一の下剋上が行はれる。殊に、軍部に於ては出先官憲が、一定の任務の範圍に於て、自らの判斷で行動することを許されて居る結果、對支干渉として見らるる多くの事件を引起す。

第二次奉直戰爭の時、河合關東軍司令官は中央の命を待たずして奉軍に武器を供給し、參謀本部の一少佐は、奉軍に武器を渡す爲めに關東軍の某所の武器庫を奉軍に襲擊せしむるの計畫を樹て、武器庫の守備隊長に心得方を内命する迄に至つたと云ふ。同じ時に於て、北支駐屯軍司令官鈴木一馬中將は、請訓に對して何等の訓令なかりしがままに、同處で活動する奉軍に自河の收容陣地を教へ、又奉軍が更に退いて山海關によつて居つた時、之と對峙して居た誰れかの軍隊の戰線を背後から見て奉軍に逆襲の機會を教へたのである。だが之等を概括して、私は、軍閥官僚内部に於ける對支意見のまとまり様のない事態と稱して置かう。だが更に政黨も又公黨として發言權を要求して居る。政府の保護を受くる事比較的少かりし、我國紡績業者は又其の對支政策を政府に命令する。斯如くして軍閥官僚の内部の各對立部門、政黨、對支企業家、對支金融資本家、對支産業資本家（殊に支那に於ける紡績業者）對支通商資本家（日本に於ける紡績業者）更に加ふるに田中ピエロを取り卷く面吹き自稱支那通の一團——この對立と交錯から對支政策は生れて來ねばならないのである。之は不可能事である。ムツソリニを氣取る田中大將は其處で勇斷果決をするのである。だが、悲しきピエロはさも彼の自發的意思であると云ふ様な世間的外觀を與ふる準備のしてある意見のみを複製するの外はないのである。

かくして、松井參謀本部第二部長は「政府は張作霖事件の時全く對策がなかつた」と白狀し、有田亞細亞局長は、國際聯盟に使せんとする藤村男に對して（藤村男は田中さんの對支政策が吃度ゼネバで問題になるだらうから出發の前に、ゆつくり田中さんの腹を伺へる様に面會を取計つて貰ひ度いと局長に依頼したのである）「自分も實は田中大臣の對支方針をよく聞いて居

べられて居る。

然し合理的なる對支政策の爲め一年位を犠牲にし、忍耐しても政治的責任を分離させない迄も此分裂の期にあつて一段の責任に統制的綱領と興味をつけんとする門閥的首腦は遂に必要となつて來る。之が國防統制令となつてあらはれたと言つてよからう。

一宮房次郎氏は對支政策の根本問題は陸軍の軍備を縮少し、陸軍の機密費を削減するにあると云はれた。是れは誠に賛成である。だがこうする爲めにはどうすればいゝのか、之が問題だ。倚々對支政策に禁錮したる分裂は、それこそ、我が政治過程の一斷面であるのだ。即ち斯如き分裂は其の上に政治的權力としての政黨の力を確立することのみによつて救はれるのである。夫れ迄は日本が支那で假りに何か一仕事しようとした處で内部に斯如き分裂したる力を以てして一體何が出來るものであらうか。一部の人は未だ日本の支配階級は戰爭位しかねまじいと思つて居るかも知れない。けれ共、私は彼等にはとても戰爭をする丈の勇氣はないと思つて居る。殊に現下の國際狀勢に於てである。戰爭も出來ないで、權益、權益と騒いでも條約を振廻はしても隣邦の友情と協力を失つて何が出來るのであらうか。政友會内閣の下に於ける滿鐵が、露支の共同競爭にあつて鐵道貨物の激減に苦しんで居るのは皮肉な事であらねばならな**い。人或は此の議論をさして對支穩愛不上主義と云ふ。だが權益**[illegible]

[illegible]ない。かくしてこそ、我等は[illegible]

しかし如何に合法な對支政策も、[illegible]田中外相の下になされてはならない。かくては日本の[illegible]と解せられるからだ。田中外相の援[illegible]の時であるかと記憶するが、彼が援[illegible]に對し、革命の際に當つて援助を口約して置きながら、後に食言したる事は國民政府の要路者のつとに知つて居る處である。哀れな可きピエロは支那に於ける人格破産者である。當面の對支政策是正の第一は田中外務大臣の辭職に始まらなければならない。

日本はそれでも、我々は未だ政黨による政治權力の統制を實現して居ないのだ。この認識あればこそ我々は其國内的對支政策を説かないのである。説いた處で、夫れは畫に描いた餅だからだ。見よ、フォードは支那大陸の道路網に向つて自動車を賣込まんとし、かくしてケロッグの對支聲明はなされ、之と呼應して、米國財閥の意識的四億投げ賣りが行はれた。日本の定見のない帝國主義が頑い帝國主義の間に佇して、支那に對して、生存爭鬪の態度をとりながら、彷徨するの狀態は見て居られない。結局權益をも失ふであらう。それもいゝが、我國特權階級の生活に必要たる支那との公正なる經濟關係さへも阻害されるに至る

であらう。其處で對支問題は根本は、日本として一刻も早く、權力の內的分裂を克服す可き事である。然るに非れば、批評す可き對支政策の具體的對象がないからである。內的分裂は、政黨による政治權力の統制が實現せられる時にのみ實揭される。かくて、よかれ惡しかれ、論議の對照とす可き對支政策を得るであらう。其の對支政策の如何なるものであり又如何になり行くかは政治權力を統制する政黨自體の性質によつて定まつて來るであらう。其の政黨が資本主義的支配の道具であるならば結論は帝國主義的戰爭か資本主義的追隨であらう。勤勞階級本位の政黨ならば流血に非ず退嬰に非ず、自主的積極的な勤勞階級本位の東洋太平洋經濟の確立に向ふであらう。しかも我國勤勞階級の生活は後者を緊切に要求して居るのだ。

日本は金融產業資本閥が官僚其の他の勢力を克服しブルジョア政黨を通じて、其の絕對的支配權を確立しない間に普通選擧が來た。一の特異な事象である。即ち今や我々は十字街頭に立つ。形式的に存するブルジョア、デモクラシーを通じて、分裂した政權の統制が政黨に來る可き過程を過程しながらも大衆は其の過程をして金融產業資本閥の絕對的支配を確立する政黨を生み出すことを促進するの過程たらしむるか、勤勞階級の優勝を保證する政黨を生むの過程たらしむるかの決定權を持つて居る。支那大陸にそゝぐ眼は自らそれに返つて來ねばならない。レーニンの言つた如く世界の何處にも純粹な公式的現象はないものである。たとへ國民革命に於て、蔣介石が何であらうと馮玉祥が何であらうと閻錫山が何であらうと、其の底にあつて之を動かす力は下層知識階級、學生、勞働者農民であり、又は列國資本主義の爲めに伸び得ない商人階級の力である。官僚的法理論を捨てて、實行に於て支那が植民地から獨立國になるの業を助けよ、獨立國としての支那との間にこそ自由なる勤勞階級本位の經濟共通領域を設定し、公正なる我要求を支持せしめることが出來る。然るに非れば、一方共產黨國民黨の一環の間に、一方列國資本主義同盟の間に立ちて、日本は行く可き處を知らないであらう。米國資本主義政府は知らず、英國保守黨內閣は知らず、伊太利のファッシスト外交は知らず、各國勤勞階級は、日本の此の發達を慶賀するであらう事は信ぜられる。この發達は只我が勤勞大衆によつてのみなされる。勤勞大衆の政黨によつてのみなされる。對支低迷をやめ又資本主義的戰爭と資本主義的追隨をやめては流血に非ず、退嬰に非ず、自主的積極的なる勤勞階級本位の東洋太平洋經濟の確立の爲めには內政と外政とは有機的な一環である以上、其の名の何たるとを問はず政友會であれ、民政黨であれ、日勞黨であれ、大衆黨であれ、社會民衆黨であれ、勇敢に官僚資本の日本を打破し、民主主義を確立し勤勞階級の利害の爲めに闘ふ處の政黨によつて隣邦の信頼を列國勤勞階級の友情の下に行はれ得るものであらうことだけは確實である。（終り）

社會時評

床次氏の脱黨騷ぎ

吉野作造

八月一日の夕刊で床次竹二郎氏が突如民政黨を脱して新黨樹立を聲明したと云ふ報道を見たときの私の第一の感想は、長島隆二がモ一人殖えたと云ふ事であつた。段々記事を讀み續けて行くと、本物の長島隆二君が實際之に大關係があるらしいので、成程友は類を以て集まるものかと一寸輕い感慨に耽つたのであつた。

床次氏を長島君に比較したら或は怒られるかも知れない。怒られそうに思へて而も怒る方が床次氏か長島君か是亦一寸私に見當が付かぬ。何れにしても、何不自由なき結構な御身柄で入らせられ乍ら、昨日は東今日は西と無節操と罵る世評を物ともせず寄邊なき浮萍の樣な生活を送る態は、規模に大小の差こそあれ、兩氏の間に酷だ相似たるものがある。床次氏から年の功を積んだ經歷を除き其代りに若干の聰明を加へたら、それは其儘長島君の姿ではあるまいか。

× × × × ×

政界の離合集散はどうせ我々の理義を以ては律し難い。殊に政權の爭奪に目のくらんで居る既成政黨の人達に向て我々の準繩での正しい行動に出でんことなどは到底望み難い。併し掏摸や泥棒の仲にもそれなりに一種のやかましい德義があるとやら。彼等は第一步を踏み損つた以上最早娑婆で正しい生活は送れぬと諦めて、せめては仲間だけでも所謂節義を重んじてその規律を破るまいと心掛けるものなさうだ。仲間だけで節義を重んじたからとて世間に對して犯せる罪は消える筈のものではないが、その仲間だけの德義すら守られぬ者があると、それは人間

の犲として徹頭徹尾排斥して熄まぬと云ふ。正業に復したからとて仲間から悪口されるものもあるが、悪徒の仲間から更に醜劣な者として爪はじきされるに至ては成程人間の犲たることに間違はないのだらう。私は敢て政界の長老床次竹二郎氏の名聲を故意に傷け彼を人間の犲と罵倒して快を貪るものではない。人間の犲か犲でないかは觀る者の勝手として、苟も人間の犲でないと主張せんとたら、少くとも床次氏に之を證明するの責任あることだけは疑を容れない。あゝした出所進退を敢行して世上に真に識者を納得せしむべき底の辯明を與へぬのは、公人として最も耻づべき態度だと私は思ふ。政事は一般世上の俗情とは別の世界だと云ふ人もあらうが、虚心に床次氏の行動の風教に及す影響を考ふるに、例へば師範學校の校長が女郎と欠落して姿をくらましたと云ふ以上の悪印象を與ふることはないだらうか。彼に何の辯明あるにしろ、陰微の間に事を謀り、友を賣り世を欺き天下に對する從來の公約と標識とを一夜のうちに抛擲せるは、斷じて常人の爲すを得ざる所である。それでも醜悪を意にせる日本の政界の事だ、政治家としては却て運命の展開を停止して或は近き將來に意外の成功を收むるかも知れぬ。併し彼は政治家としての成功を夢想する前に、既に人間として回復すべからざる失態を重ねたことを知らねばならぬ。過去の人は識らず、若き將來の日本は、斷じて斯の如き道徳的畸形兒を寛假するものではない。

× × × × ×

床次氏の脱黨がその聲明する如く果して真に公明の動機に出でたものなら、其の公明の心事を一貫する爲に、第一に彼は何を差措いても事前に濱口民政黨總裁の諒解を得べきであつた。第二には民政黨内に於ける親友即ち舊本黨系代議士諸氏に諮るべきであつた。後遂に敵の政友會に降るの内約に出でたでもない限り、何の必要ありて濱口氏に裏切るのか。單純な是々非々主義の第三黨樹立の必要に促された丈けなら、豫め之を他の盟友に諮るに何の不都合もない筈だ。若し夫れ單獨に事を決して後から以前の僚友を誘拐するが如きは、最も吾人の顰蹙を禁じ得ざる所。仲間を欲しいなら初めから相談したがよく、事前に相談するに足らずとせば後から之を誘ふのがをかしい。誘はれる者も亦斯くまで見縊られ乍ら、情に於て忍びぬの何のと、腐れ縁を絶ち切るの英斷を缺いて今更去就に迷ふとは、公人の面目何處に在りやを疑ひたくなる。事態は極めて簡單だ。三歲の兒童といへども進退を間違ふことあるまじき程に筋道は明白なのだ。之を明白ならざるが如く思はしむるは、利害の絆に依て政界の著しく昏迷されて居る結果に外ならぬ。その濁流

つ[illegible]に言ふ[illegible]

て[illegible]に[illegible]

等に簡單不明の言葉を以て無遠慮の批判をヒタ押しに押して行くのを我々の分と考へる。

昔ジョセフ・チエムバレンは僚友三十餘名を率ゐ、多年の政友にして先輩たるグラットストーンに背き自由黨を脱して第三黨を組織したことがある。チエムバレーンの立場は形だけ——質に形だけ一寸床次氏に似て居る。彼は愛蘭問題に對するグ翁の人道主義的政策に慊らず、帝國的統一の確信に據て到底グ翁と同じ軌道を走り難きを認め、慎思熟慮遂に分れて自由統一黨を組織したのであつた。之を決行するまでに彼は屢々グ翁にも會つた。僚友にも相談した。質に公器を擔任する人たるに恥ぢざるの態度を持して誤らなかつた。故に彼がいよ／＼去就を決するや、天下一人も之を怪むものなく、敵も味方もひとしく皆その已むべからざる事態を諒としたのであつた。彼は間もなく保守黨と合體して遂に自由黨の正面の敵となつた。それでも誰ひとり之を不思議とするものはない。況んや先きの脱黨は保守黨との通謀の結果だらうなどと臆測するものに至ては尚更ない。之でこそ本當の公人の出所進退である。行かぬ前から政友會から買はれたのだなどと噂されるのとは雲泥の相違である。

[illegible]

もの[illegible]

ることは今更云ふまでもない。[illegible]を考へると云ふことは[illegible]にあるものではない。又政友會にあつて得つたものでもない。何となれば彼の地位そのものが既に天下に對する重大なる公器だからである。故に之を捨へる以上は出處に重大なる理由がなければならぬ。否、之を他人から聞くまでもなく世間一般が事實上之を諒とする丈の機運の成熟がなければならぬ。有耶無耶の間に理由もなく黨籍の轉換が行はれ、何の事やら世間が暗五里霧中に迷ふと云ふ様な現象は、今日の我國を措て何處にまた之を見ることが出來よう。

× × × × ×

心事が公明正大なら理由などは聞かなくとも可い。動機の怪まるる限り、宣言や聲明やは却て益々疑惑を增すばかりである。この點に於て床次氏の八月一日朝發表した宣言書なるものは、事態の正しい闡明の爲には何の參考にもなるものでない。何が本當に彼を動かしたかは一に彼の今後の行動に依て判斷するの外はない。

只試に彼の發表した第三黨樹立の宣言書なるものを見ると、是亦至て平凡なるものである。彼曰ふ、勢力相[illegible]二大政

黨の對抗は政界を不安定ならしめ、政界の不安定はまた自ら政府をして事毎に勇往邁進するを得ざらしめると。斯うした政局の打開の爲に第三黨樹立に志したと云ふて居るが、その第三黨の政綱はといへば、（一）對支積極政策、（二）思想問題、（三）財政緊縮、（四）金輸出解禁を算へ、更に附隨的に（五）小選擧區制を擧げて居る。この中金輸出解禁と小選擧區制とは具體的問題に関して發せられた一種の手形として注目に値するが、支那問題と思想問題とに関しては徒らに田中内閣を攻撃するに過ぎざるものゝ如く、私共を失望させるだけにしか役立たない。要するに斯んな政綱の唱道なら、少くとも我々國民としては、彼を煩してわざ〳〵第三黨を組織して貰ふ必要はない。たゞ政綱政策の如何に拘らず今日此際相對立する二大政黨を牽制すべき第三黨の絶對に必要なりとする議論については、少しく考慮を費す必要あるを思ふ。

床次氏は曰ふ、勢力相若ける二大政黨の對抗は政界を安定ならしめないと。何故か。差が少い丈け、一二人の出入りで忽ち多數少數の地位が顛倒する恐れあるからである。併し乍ら若し之等の出入りがないとしたら如何なる。兩黨の差が如何に少くても、勢力の比較は固定して動くことはない。然らば憲政の常道に從て一人でも多い方に政權を握らして一向差支ないではないか。あんまり差が少いので不安なら一度解散して見るもよからう。解散しても變りがなくば其儘多數派に政權を執らせて其處に何の動搖も起らぬ筈である。故に私は思ふ、政界の不安定はもと其の原因を勢力相若く二大政黨の對抗に存するのではない、政治家の中に去就の曖昧なるものあるの結果であると。然り、政治家に去就の曖昧な者があると、兩者の差少いとき、多數少數の關係の顛倒を僥倖し得べき機會が多いに相違ない。從てまた政權の爭奪に熱中する幹部政治家に對しての誘惑も強いと觀ねばならぬ。而して今日の我國の議員中には、之等の誘惑に應じ易い弱腰の者が非常に多いのだから堪らない。

その結果として政府がその政策の實行に勇往邁進することが出來ぬと云ふは、正に床次氏のいふ通りであらう。腰の弱い議員も流石に理由のない變節は避けたがるに違ひない。彼等が動くに一番都合のいゝ機會は何等か重大な問題の起つた時である。意見の相違といふ堂々たる口實に隠れて巧に慾望を遂げ得るからである。そこで斯う云ふ裏面の情實を看破して而も一人も逃がすまいとする者は、勢ひ事勿れ主義で進むより外ないことに氣付く。以て逃げ出す口實を發見するの餘地なからしめんとするのである。

何れにしても、斯うした弊害は畢竟議員各自の操持の立たざ

ることであらう。[illegible]

[illegible]

效な制裁の途の立たざるに限り、對立する政黨の勢力によしんば可なりの差があつても、同じ樣の弊害の必ず起らぬとは限らない。然らば如何して之を救治することが出來るか。

之を救治するの方法は二つある。一つはこの弊害に對し直に大規模の誘拐を決行して何く他をして手も足も出ぬ樣にすることである。一つは利權に因る誘惑を愼み且互に相戒めて之を嚴重に制裁するの方途を立て、根本的に弊根を芟除することに依て政界の安定をはかることである。今日の劣惡低能の議員を相手にして後者の假に用ひ難きは私も十分に知つては居る。併し眞に國家の爲に謀りて忠に國民の爲に考へて親切なる者は、功を遠い將來に期しても必ずやこの方法を執る筈である。この點に於て床次氏のやり方は、阿片中毒患者に更に多量の阿片を强ゆるものに異らない。

人或は床次氏を辯護して、政友會の爲に誘拐を試みるのでないと云ふかも知れぬ。表向きはどうでもいゝ。事實に於て彼が眞に政友會と策應するものでないかどうかは今後の事件の發展に見よう。尤も弱腰の木ッ葉武士を多勢集め、うまく行けば天下を取らう、掴く行つても高い値段で身賣りが出來ると考へ

[illegible]

[illegible]

×　×　×　×　×

床次[illegible]の結果政局は豫定通り安定するだらうか。或は一應は安定するとも考へる。但しどういふ形で安定するかは今のところまだ十分に判然しない。床次氏が新黨を組織しても[illegible]意外に少く而してその少數を以てしては如何ともし難いとすれば、オメ／＼政友會に追隨するの外に彼の行くべき途はあるまい。斯くして遂に適當の時期に政友會に併合さるゝが落ちだらう。尤も始めから近き將來に於ける政友會との合同をほのめかせば、參加者或は意外の多數に上るかも分らない。要するに强て多數を得んとせば始めから政友會と默契するの外なきを得ず、之れ無んば麾下に集る者少くして、勢の窮まる所亦合同の外なしとすれば、床次氏の折角打つた大芝居も畢竟政友會の爲に犬馬の勞を取つたに過ぎぬことになる。客觀的形勢の判斷は斯るを以て彼の必須的運命とするも、併し彼れ自らの抱負は固より斯んな所に在るのではなかつたらう。ひそかに忖度するに、彼は自己の伎倆を過信し一ト度呼號すれば忽ち既成政黨に大龜裂を生ぜしめ少くとも三黨鼎立の勢を作り得べしと考へたのではあるまいか。果して然らば節を屈して政友會に哀を乞ふのではない、

我れ自ら音頭を取て政友會を追隨せしめようと云ふ謂たのだらう。少くとも田中濱口と相並んで天下三分の一方の旗頭たるの地步をかたむるは今だ。之が彼をして第三黨組織に決意せしめた本當の動機だと私は想像する。併し斯の如きは果して實現の可能性があるものか。床次氏の思ふ壺にはまりて彼を政友會が擁助することになれば無論之て依ても政局は安定するが、事實は必しも注文通りに進まず、寧ろ政友會の方が床次一黨を操縦して一時の安定を見ると云ふ大間違のない所だらうと考へる。

兎に角政局の一時安定することだけは疑ない。安定と聞いて所謂愁眉を開くものは社會の各方面にあるやうだ。永い間の不安定に惱んだ揚句だから之も尤もの話だが、併し斯んな安定に心から滿足されては困る。安定にも色々ある。病源が除かれて腹痛みのとまることもあれば、モルヒネのお蔭で一時苦痛の忘れられると云ふのもある。床次脱黨に由る政界の安定はその孰れの種類なりやは多言を要せずして明である。加之彼のやり方は從來の弊竇を一層大規模に行ふことに由て其慾望を遂せんとするものである、否單にそればかりではない、その戰術は陰險を極め、世を欺き友を賣り、人間として守るべき最も卑近なる德義をさへ平氣でやぶつて顧みない。目的の爲に手段を擇ばざるに勇なること正にボルシエヴイズム以上である。レーニンの一派だッてあゝまで秩序を無視した行動には出でなかつた。そも〳〵過激派の怖るべきはその抱持する主義よりも之が實現の爲に執る所の手段にある。換言すれば手段方法の選擇に伴ふ戰術に在る。何となればその戰術は一切の秩序を無視して顧みぬからである。この點に於て私共は床次氏の戰術が流石の過激派も一步を讓る底の亂暴極まるものなることに驚かされるのである。

× × × × ×

新聞は報じて曰ふ、床次氏は今に見ろ、びツくりする樣な事が起るぞと云つたとやら。吃驚する樣な事とは何だらうと、いろ〳〵想像を逞うして見た。あの人のやり口は從來の行動に徴しても大抵先きが見へて居る。今度の突然の脱黨その事には成程びツくりさせられたが、之からは他人相手の仕事だ、之れ以上の驚異事が起るべしとは一寸想像がつかぬ。彼程の非常識の人は政界にさう澤山はあるまいからである。彼が若しやがて若槻前首相をも羅致し得たといふ樣な事があつたら、私ももう一度彼の人物を考へ直して見よう。又若し田中首相を逐ひのけて新に政友會總裁に祭り上げられたとでも云ふのなら、本當に肝を潰をして彼の前に今日の不明を恥ぢもしよう。併し彼には斷じてさうした手腕と器量のあらうとは思へない。今までても一

[illegible]
ちすぎたのではあるまいか。

一體彼が今日まで浮草の様な行き方をしたのは何の爲めか。徒らに頭顱を惜みて而して其り及ばなかつたからではないか。彼若し當初から専心政友會の隆盛に盡す以上の野心がなかつたのなら、彼が一黨を率ゐて政友會と分れねばならぬ理由は當然もなかつたのだ。床次が大將とあつては中橋氏も居憎くかつたらう。側でどんなにもり立てようと努めても實力がなければ仲間は自ら離れる。殘るものは彼が萬に一つ總理大臣にでもなつて呉れなければ到底うだつの上らぬ連中のみとなる。勢窮まつて遂に憲政會と合併して見たが、席の少しく溫まるや、持つた病ひが又もや昂じて自前の看板をあげて見たくなる。斯うした經歴を一體彼は之れまで何度繰り返したことであらう。而して之は彼の子供らしき野心に根柢するのは勿論だが、その外また別に陰から頻りに彼を突ツ付いては實力不相應の活働に盲進せしむるものがあるのではあるまいか。私の知人に斯んなのがある。子供が小學校時代一寸優秀の成績を示した所から兩親は直に生來の優等生と其子供の相場をきめ、やがて彼の本當の力を量らず無暗に極度の學業を强請した結果遂に立派な放浪無能の不良兒に仕上つてしまつた。子供彼自身の罪ではない、過當の[illegible]
くあへて[illegible]
の[illegible]なきを得ない。

一體床次氏を是非にも總理大臣にせではと考へてゐる者は誰か。こんな考を抱く者の今日にあらう筈はないなどと云ふものあらば、薩摩の先輩でも訪ねて篤と彼等の腹の底を探るがいい。

× × × × ×

政變當時の數日後、舊本黨系の代議士の夫れ恰も機關の如くならざるに業を煮やし、樺山資英とか云ふ人鹿兒島出身の代議士某々を召致してせめて薩摩だけは擧國一致で床次を扶けて欲しいと勸說大につとめたとやら。床次の成功不成功は藩の面目に關する。所謂大義名分に拘泥して薩摩が天下に號令するの機會を逸せしめてはならぬと云ふのだらう。斯んな理窟は當節稍少し氣の利いた薩摩人にも通用せぬ筈だが、他藩の人達までが之に雷同する必要はない。十五銀行等々の破綻以來薩摩系の勢力た擯斥に對し、今迄で政治家の橫行に依て散々に惱まされた我我國民として、過當に神經を尖らすのも無理はない。どの道此際床次氏が一個獨立の立場を取て政界の表面に乘り出すことは、政界の風紀を益々陰險ならしむる以外の何物でもない。

其後の報道に依ると、前記樺山資英氏は安樂兼道氏だの山之内一次氏だのを寄せ集め、所謂薩摩一統の床次支援方策を一生懸命に講じて居るらしい。床次氏を實力以上に偉くしたのは、原敬の推挽の外、主としては薩摩の背景だが、その薩摩の過大なる期待がまた遂に實力の伴はざる床次を破滅の淵に陷す危險がないだらうか。眞に床次を活かそうと云ふのなら別に方法がある。床次によつて薩摩の頽勢を盛り返さうと云ふのは、張學良を頼んで支那を料理せんとする田中内閣の對支政策以上に目先の利かない話である。

× × × × ×

どの道床次氏の今後の立場の準政友系たることには間違ないらしい。さすれば彼と鈴木前内相との關係はどうなるのだらう。鈴木氏の談として一時新聞は彼の事前に相談を受けたことを報じた。山本達雄氏にすら語らなかつたと云ふが事實だとせば、鈴木氏に相談したと云ふことは取も直さず之と通謀しての仕事だと云ふを意味する。この報道を見たとき、流石鈴木氏の腕は凄いと私は思つた。スリや萬引の味が忘れられぬと同じく、相當の勞務を拂はずして意外の大收獲を得ると云ふは何人にも面白いことらしい。多くの人は之を敢行するの冒險性を缺くも、鈴木氏ならば喜んで之をやつたらうと思ふ。彼には之た自家の有利に導くの自信があるだらうから。それだけに私はオメ／＼之に乘つた床次氏を氣の毒に思はずには居れぬ。何と謂つても政界に於て床次の目指す對手は鈴木だ。田中總裁は恐らく問題でない。故に床次氏にして他日政界に獨自の地歩を占めんとせば、彼は輕々に鈴木氏の拵へた御膳立に着席すべきでない。腕に覺のある鈴木の床次を迎ふるを苦にせざるは分るが、鈴木に迎へられて床次が彼の傘下に走ることは少くとも彼の周圍が許さぬ筈だ。して見れば、其後新聞が床次氏の談として鈴木氏との事前の相談を打消した報道の方が正しいかも知れない。鈴木氏自身も亦後にこの床次氏の取消を裏書きした樣だ。

併し床次氏が政友會の何人とも全然事前の相談をしなかつたか否かは、猶疑問を容する餘地はある。強て之を探すなら、或は之は鈴木氏の勢力に對抗すべき立場に在る方面ではなからうか。中橋氏は曾て床次の下に屈するを肯とせずして本黨を脫したことあるが、鈴木に對抗すべき優勢を作るの必要上新にまた床次と結ぶ氣になつたとしても格別不自然の現象ではない。床次氏に再び中橋氏を乘取するの離れ業が行り了うせれば、道義的批判は別として、政界局面の打開に更に一段の大波紋を描いて面白いと思ふが、併しそは恐くは夢だらう。

× × × × ×

[illegible]ふる者の不思議に多いことも注意しておくの必要がある。唯大の第三黨計劃だいゝと云ふのではない、第三黨と云ふ者は必要なものだから床次の行動を是認し又賛成すると云ふのである。斯うした觀點からでも床次氏の行動の是認し得べきや否やは問題だが、單純な抽象的議論として今日仍ほ第三黨論の唱道を見るは、私の意外千萬とする所である。但し之を主張する者の誰れなるかを吟味するとき、私共はまたその由て來る所あるを察して、若干之を諒とし得ないでもない。

我國の政界には政治に野心を有つて居て而も政黨に屬せざる人が尠く無い。昔は政黨に屬せざることが却て政權に接近し得る近道だつたこともある。政黨に籍を置かずしては容易に政權を握り得ざるに至つた今日から觀れば、轉た時勢の變に驚かされるが、故の奧田義人だとか今の高橋是清や山本達雄など云ふ人達の袂を連ねて政友會に入つた頃でも、世人はまだ次官や局長で首になつた役人の古手が續々政黨になだれ込む時期の斯う早く來ようとは思はなかつたのである。所が斯うした時勢の變り目には何時も落伍者といふものが出來る。大抵は流行に押されて我も我もと政黨を目がけて走るのだが、其中いろ／＼の行掛りで若干後ろに踏み留まるものがあるのだ。始めは踏み留つても[illegible]く[illegible]を見すてて進んでゆく。[illegible]政界の一角で太平樂を[illegible]位の[illegible]に[illegible]と[illegible]には斷念するも、滿々たる野心を政界に斷ち切れないと云ふ連中は陸續の間にいろ／＼の小策を弄する樣になる。此種の連中のうちの最も大なるものとして能く後藤子爵が擧げられるが、子爵の今日の立場を斯く觀るを正しとするか否かは別として、子爵を取り卷く一味の人達をこの類に算ふるは強ち無稽の推斷でもあるまい。併し斯んな詮議はどうでもいゝ。要に我國には今日不思議に黨外の人にして政治的野心の滿々たる者が相當に多いことを呑み込んで貰へばいゝ。

斯かる種類の人達に取り、その政治的野心を滿足せしむる爲に今日に殘された唯一の途は第三黨の出現である。彼等が進んでこの第三黨に參加するか否かは問題でない。既成二大政黨の圏外に在て政治に容喙する彼等の在來の立場が、恰度第三黨の組織に依て具體化された形になる所に、特に一種の強味を感ずるのである。更にそれ以上の特殊の關係の生ずる可能性あることも固より云ふを待たない。

×　　×　　×　　×

斯くして私は今日の所謂第三黨必要論を以て爲にする所ある

の議論と觀る。正に屑に唾して聽くべきである。が、暫く一歩を譲り、さうした心腑を全く離れて眞正直に議論そのものを吟味するとせんに、是亦飛んでもない惨理謬妄を極むるものと斷定せざるを得ない。論者曰ふ、二大政黨對立するときは、政權爭奪に熱中する結果、黨利黨略の爲に國家の大局を忘れ勝ちなる、此際斯かる政爭を超越し眞に國家の爲に公正平明の態度を持する第三黨の來りて之を牽制するは極めて必要であると。

相對立する二大政黨は必然的に黨利黨略の爲に國家の大局を疎かにするといふ論は姑く許すとして、其間に介在する第三黨が必ず至公至正の態度を持して政界の正しき羅針盤たり得るとは、一體誰が保證するのだ。政黨の發達に伴ひ下院の益々優勢に赴くに私を焦ち、樞密院や貴族院邊の人達が政黨の對立排擠に對する牽制機能の必要を說くのならまだ聞へる。甲の黨派から若干、乙の黨派から若干、しかも孰れも腰の弱い從てまた質の悪い議員を寄せ集めて第三黨を作り、之が至公至正の牽制機關として國運の發展に貢獻し得べしとは、人を愚弄するも亦甚しい。現に從來の例に徴するも、所謂第三黨がカスチング・ヴオートを握つた時程腐敗の甚しかつたことはない。第三黨の發生が常に必ず政界當然の進歩を阻害するに止つたことは、少くとも我國の經驗に於ては極めて著名な事實である。

一體第三黨の必要を說くは政黨政治を否認することである。獨佛諸國の如く特別の理由あつて小黨分立の勢に固定した國柄は別だ。斯う云ふ國に在ても政黨政治はまた一種特別の形を以て行はれ得る。我が日本はよかれ惡かれ英米と同じく二大政黨對立の傾向（之は單に傾向に過ぎず、而もまた動かすべからざる傾向であることを認めねばならぬ）を以て進んで來た、從て政黨政治の行はるる形式に付ても既に略ぼ定つた型が出來て居る。之が根本的に良くないのだと云ふのは別論だけれども、之れ丈けの事實を許して、さて其上に如何にして更に一段の向上發展を謀らんかを考ふるとき、第三黨の出現に依て前進に大なる障礙物を投げられるは迷惑至極の話である。尤も今日の我國の政黨が共に國家の重任に堪へざる程下らぬものであることは私も認める。黨利黨略の爲に國家の大局を忘るるが如きは日常茶飯事だ。彼等を俟はしめて政權の歸嚮を決することに私共は常に安心して居れぬのである。併し乍ら能く考へねばならぬことは、斯かる憂ふべき結果を來して居る根本の原因は、二大政黨對立の形勢そのものに固有なのではなくて、政黨員そのものの素質が惡いからだと云ふ一點である。更に換言すれば、之を監督すべき我々國民の怠慢にあるとも云へる。故に之に對して牽制機關が要るなら國民其者を措いて外にはない。國民大衆の

[illegible]

[illegible]以上、[illegible]の時勢の前に[illegible]た第三黨の發生にも伴ふにきまつてゐる。況んや多くの[illegible]三黨たるものは既成政黨の弱點に乘じその勢力を一層助長することに依てのみ、其存在を維持し得べきものなるに於てをや。

×　×　×　×

歷史的に觀れば、第三黨論は官僚政治主義の附帶的遺物に過ぎない。細かい說明は時がないから略する。一ト通りの筋道だけをいへば、(一)昔は官僚政治家は議會の使命を以て自分達の仕事を廣く民間に告げ知らせ以て政府の有難味を天下に傳達するの機關と云ふ所に置かうとした。(二)餘程進んだ時代となつても仍ほ三權分立の形式論に累され、議會を以て政府に對する單なる牽制機關と觀た。當時人々は考へた、明君賢相上にあれば國會の必要はない。併しこの事必しも恒に恃み得ずんば時に暴壓の惡政なきに非ず、而して之を制するが爲に始めて國會の必要を見ると。この見地からすれば、國會は貴族だけで作つても差支はなく、少くとも牽制機關をして其權能を濫用して政府の執務に凝滯を來すこと勿らしむる爲には、權限は出來る丈け大ならざるを必要とし、選擧權亦出來るだけ廣からざるを必要とする。先達中やかましかつた議會中心主義の不試說の如きも、實

[illegible]

[illegible]

分[illegible]に[illegible]、[illegible]にする政論上の一眼目として確立し[illegible]認めらるべきものであつたのだ。只この說を[illegible]前に先づ議會を純[illegible]なる[illegible]機關と觀るの說の當否の吟味せられざるべからざるは言ふまでもない。然るに(三)時勢は進んで今日は兎も角所謂議院內閣一點張りの時代となつてしまつた。議論としては何處かの一隅に之に異議を挿むの餘地も聞へぬでないが、事實今日何人か能く下院に多數の根據なくして內閣の組織に成功し得るものぞ。そこで否でも應でも下院の政黨が代る〴〵政權を取ると云ふことになる。於是從來の官僚の一味は全く政界の積極的立場から驅逐さるゝことになり、僅に樞密院や貴族院に據て餘喘を保つのであるが、それすら民意を背景として押し寄せ來る政黨の勢力に壓され勝である。結局有名無實の虛勢力に墮するがその必然の運命であり、又斯くなることが好ましいのだと私共は思ふが、彼等本人としては忍び得ぬ所なのであらう。何とか自分達の頽勢を防ぎ止める方法はないだらうかと腐心する。斯くして彼等官僚一味の防波堤として選ばれたのが所謂第三黨なのである。若し第三黨が彼等の慫慂に依て生れたと云ふが實際の形質に近ふ

と離せらるるなら、第三黨の出現に、如何なる事情の下に如何なる理由の下に產れたにしろ、秋風落寞を嘆じつゝあつた官僚殘黨の心中無條件に歡迎する所たりと云ふに異論はあるまい。又斯うした連中が樞密院や貴族院の要所々々にまだ多少の勢力を擁して居ればこそ、第三黨など云ふ怪物の橫行が白晝假されるのでもある。して見れば第三黨などの幾分でも今日の政界に問題になるのは、近き過去に於て我國が立憲制の假裝の下に永く官僚的專制主義の支配を受けて居つたこととの明白なる證據である。さうでもなければ、床次氏のやうな行動は假令一時でも眞面目な政治家の話題にさへ上るべき筈のものではない。又如何に擔がれ屋の床次氏でも始めからあんな暴擧には出でなかつたかも知れない。

× × × × ×

舊本黨系の代議士數十名は其後屢々會合を重ねてその執るべき態度を相談して居る。今日まで明白になつたことは、(一)何度聽いても床次氏自身の說明には舊僚友の多數を納得せしめ得る何ものも無かつたこと、(二)全員一致の行動に出づる見込の絕無なることとである。斯くて問題は小橋一太君の言葉を借りて云ふなら、大義名分に依て動くか情に依て動くかに歸することになつた。乃ち見る、床次氏に隨從することの大義名分に背くと云ふ事には始めより誰一人異議を挿まなかつたことを。大義親を滅すと云ふは如何なる場合にも遵奉さるべき絕對的眞理ではない、彼等が眞に床次氏の人格に滿幅の信賴を寄せるのなら、理義の徹底に多少の疑ありとも、暫く忍び難きを忍んで其人に從ふと云ふも奧床しい話である。私は之れまで種々の機會に於て、理窟は時に變り得る變らざる人格の信認に基いて結ぶのが本當の團結だと說いて來た。故に情誼を主とするの立場を一概に排斥するものではないが、床次氏の場合に之を云ふは餘りにも其倫を失をするの感がある。理由もなくして情誼を云々し泣いて床次を見殺しにするなと叫ぶその淚は、博徒の子分が親方の拘引を氣毒だとてこぼす淚とどれだけの差があるか。政黨員と首領とは君臣の誼を以て結ばるるのではない。本來公選の結果では如何樣にも變り得るものではないか。床次竹二郎氏が總裁にならうが沼田嘉一郎さんとやらが總裁にならうが、局外の我々には同じ樣に響く。腕次第又時の模樣次第で如何樣にも決め得るでなければ本當の政黨ではない。特に床次氏から豐富なる選擧費の供給を受け之に依て辛じて當選の榮を得たとでもいふに非る限り、床次氏の不義に殉ずる爲め泣いて大義名分に別れを告ぐる必要が何處に在る。自力で優に當選の見込あるものは大義名分に據る、床次氏に走る者は皆足許の危い連中のみ

だと云ふに[illegible]に用ひまいた、[illegible]の一億など[illegible]に
國家の公議を以て任ずるのなら、[illegible]に[illegible]其[illegible]
を讒誣にするを[illegible]くべきである。

附言　本稿は[illegible]氏[illegible]の報が新聞に見へてから、[illegible]日の報道に拠

[illegible]

對支政策批判

田中内閣は今の南京國民政府を以て未だ十分信用するに足らずとし、一旦は統一の端緒をひらいた様なものの何時再び擾亂の爆發を見るや測られないとの見地から、張學良君に向つて之と斷じて妥協する勿らんことを切諫した。此方から進んで忠告したのではない、向ふから意見を聽きに來たから問はるるまゝに斯うと思ふ所を述べたに過ぎぬと辯解するものもある。耳を塞いで鈴を盗む者を相手にして居ては肝腎の問題は網を脫けて了ふ。形式論はどうでもいゝとして、斯かる觀測は一體我國の對支警告を是認せしむるに足るものか否か、抑も斯かる觀測そのものが本來常人の首肯に値するもの否かを、私共は先づ吟味して掛るの必要がある。

本年七月號の本欄に於て私は「支那の形勢」を論じ、其中に隣邦革命運動の沿革を略叙してのち、『今や彼等は始めて多年の苦心が酬へられ、北京の攻略に由て支那本土を完全にその掌握の中に收め得たのである。こゝまで來るにどれだけの貴い多くの犠牲が拂はれたか、眞に七顚八起の苦みを甞め盡した跡を思ふとき、彼等の作つた道の大勢は最早支那に於て抑へ難きものと思はさるを得ぬ。大勢の進みは或は至て緩慢だともいへよう、併しその歩武の確實なるは亦他に多くその倚を見ない。少しく眼識ある者は必ずや之に逆行することの如何に無謀なるかを感得するであらう』と述べた。讀者に再讀を乞ふもをこがましいが、兎に角支那最近の動きと之を中心とする外交的新傾向とは是非冷靜に觀察していたゞきたいものである。アメリカも南方政府を事實の上に承認した。イギリス亦略ぼ同樣である。之を單に人氣取りだの甚しきは日本に對する皮肉だなどと云ふのは、まるで當今の外交を權兵衛田吾作の喧嘩と混同するの謬

見である。必しも英米の爲す所に追隨せよとは云はぬ。彼等が今日支那をどう觀て居るかを他山の石として參考してもよからうと思ふのである。日本國民の多數が田中外交を喜ばぬのも、一つには隣邦の形勢の評價に於てその觀る所を同うし得ないからではあるまいか。

暫く一歩を讓り田中內閣の支那觀を許すとして、それが當然に張學良に勸めて東三省に獨立を叫ばしむるの理由となるか。東三省は帝國の領土と接壤の地域、故にこの中を擾亂の巷たらしむるを許すべからずとせば、それは南方政府の有力無力に依ることではない。故に南方が假りに非常に有力なものであつても、日本としては斷じてその勢力の滿蒙に入り來るを防げねばならぬわけだ。そこで問題は、（一）張學良は一個日本の精神的支持を受けた丈けで優に南方と對立し東三省の獨立を維持して行けるのか如何、（二）若し彼の實力が獨りで之を成し了うせるに足らずとせば、どれだけの物質的援助を與ふればその目的を達することが出來るのか、（三）それも十分の見据へがつかぬとすれば、田中內閣は一個日本獨自の力を以てしても如上の要請を貫く積りなのか、と云ふに歸する。

奉天發八月三日の電報は「日本に確めたい五つの重大事項」なるものを報じて來た。日本の希望する保境安民の主義を貫くには、（一）日本の援助の即時實行を必要とし、（二）巨額の經濟的援助を要するは勿論なるも交換條件の提議次第に依ては輿論の支持を得がたく、（三）就中從來の懸案の解決をこの際に迫らるるは最も苦痛とする所であるが、之等の點に十分の諒解を得た上、（四）更に兵備上の援助を充當に受けなければ困り、（五）其上內閣が代つて方針が變つたなどと中途でやめられては大變だから、其邊をはツきり保障して貰ひたいと云ふのである。隨分蟲のいゝ要求ではあるが、併しやり掛けた南北妥協をかなぐり棄てて無理な獨立の維持に腐心しようとする向ふ側としては、之れでも最少限度の希望かも知れない。之より安く取引が出來ればよし、我々日本人としては、田中內閣の對支政策を支持せざる可からずとせば、少くとも之れ位の犧牲は忍ばねばなるまい。之れ以下で濟むと云ふ者あらば、私共は寧ろその誤算に非る咎を責めて見る必要がある。一旦やり掛けて之れでは足りなかつたと二段三段の犧牲を求められるは苦痛であり、思ふ通りの効果が擧らぬとて途中で拋棄されては猶更困るからである。

併し我々國民は戰爭の危險を賭してまで田中內閣の對支外交を支持すべきであらうか。田中內閣の出て以て保護せんとする所の特殊權益が孰れも皆我國の存立上缺くべからざるものなり

として、[illegible]つ[illegible]に限るとして、この對價に特利權を求めるは此際特に慎むの必要あるべきが故に、私共は一應は之を將來に回收し得る見込なきものと覺悟せなければならない。段祺瑞からす西原借款の先例がある。之を回收し難きの狀況は、今日は更に西原借款時代よりもわるく、助け甲斐のある無しから云ても、張御曹子は固より段祺瑞の比ではない。同じ馬鹿を二度繰り返すの危險に富むだけ、若し此儘へマな外交を無理に續けるなら、田中內閣の天下に對すに責任はいよ／＼以て重大である。況んや滿蒙に於ける帝國權益の確保の如き、自力を以て之を護るに難からず、張の右すると左するとに依て毫末も動搖を來すべきに非るをや。

× × × × ×

奉天援助の得失は南方の强弱には關係はない。そこで南方の不信と云ふことを擧げ、彼派の勢力の滿蒙に侵し來るは當然に我國權益の蹂躙を意味するが如く說くものあるも、之れすら奉天援助の理由とならざるは前述の通りである。權益の保護は我に相當の覺悟さへあれば奉天政府を扶けなくとも出來る。特に格別の大犧牲を拂て東三省の保境安民と云ふ廣い範圍にまで責[illegible]

更に[illegible]して、殊に今日、右の如き[illegible]ことを希望する。何となれば、支那の人の間には何時、一部は米人の間にも、日本は滿蒙を獨立せしめ之をその保護の下に置かんとすとの誤解が從來可なり廣く流布されて居たからである。我々日本人には固より斯んな野心は微塵もない。噂を聞いても一笑に附するのみだが、少數の不謹愼なるものがあつて斯かる巷說の種を作つたといふ事實も絕無ではないのだから、當の支那の人達や事象を皮想的にのみ見勝ちの外國人中に往々不都合な誤解を抱く者あるも滿更無理ではない。要するに之等の事は我々日本人同士の間には割合知られて居ないが、外部には相當ひどく傳へられて居るのである。我々は固より根もなき巷說におのゝいて肝腎の政策に變改を加ふるの必要は見ないが、好んで彼等の神經をそゝり無稽の誤解をむざ／＼深めるは亦愚の極である。さらでも奉天援助は大變な疑問だ。今日この際之に手を觸るるは日支兩國の將來に取て二重三重の損失たるを私は確信する。

× × × × ×

それぱかりではない、一體今日の時勢はどんな風に動いて居

るものか、政治家ならモ少し之に目を開いてもよささうなものだ。帝國權益の保護に汲々たる內閣大臣の誠意は多とする。どんなに誠意の特むべきがあつても、時勢を見損ふた結果意外の局面展開に面喰つて飛んだ失態を演じた實際は、近き過去にも澤山あるではないか。私は曾て袁世凱の側近の者から聞いたことがある。袁が巧に南方革命派と秘密の協定を遂げ清朝を無事に退かしめて共和政治の確立に全支那を統一せんと焦るや、伊集院公使は日本政府の希望と稱して斷じて清朝の治政を擁護維持すべきを勸告した。清朝の要請に基いて蹶起した袁としては表面之を辭退すべき口實なく、內心非常に迷惑を感じたと云ふ。遂に老猾なる彼等は、清朝擁立の勸告を容るるの條件として莫大な金と兵力との借用を申込んだ。之に對する伊集院の回答の頗る遲延せるを奇貨とし、彼は忽に外字新聞記者を集め、日本の援助を唯一の賴みとして之れまで清朝の爲に盡して來たのに、最後の場面に到つて日本は無情にも我を見棄てたと、悲痛の面持をなし、萬策盡きた以上は附託の任を辭するの外はないとて、遂に清皇室をして餘儀なく退位の詔を發するに至らしめたとやら。この事が本當なら、日本の要路者にも內々分つて居る事だらう。幾分誤算があるとしても、時勢の觀測を誤つて勝手な忠告を押しつける結果二重三重に馬鹿を見るの恐れあるは、この噂ばなしを聞いても警戒すべき事だと思ふ。現に昨今の新聞は、わざ〱田中首相の內命を帶びて使ひした林權助男の奉天に着いたばかりの鋒先で、既に南北妥協の抑止し難きを報じて居るではないか。伊集院の一度ためた苦盃を又もや林老になめさせるのは氣の毒である。

事少しく岐路に涉るが、私の友人に青島で商賣をして居た人がある。日獨開戰の結果同地に民政署の創設せられるや、官憲は內地からドン〱利權屋を招致したばかりでなく、之等の者に向て青島は將來決して何處にも手放すことはないから遲疑する所なく永久的の施設をやれと勸めたものだそうな。政府の方針と聞いて安心し莫大の資本を下して遠大の計をたてが、之が五年と續かないのだから驚く。出先き官憲の出たらめにも呆れるが、青島が永久に日本のものであり得ると觀測した政府者の見識にも愛想がつきると嘆じてゐた。萬事この調子で、爲す事やる事期待がはづれ、自らも惱み人にも迷惑をかけるのは、如何に遠い僻陬の孤島に活くるとはいへ、そも〱二十世紀の政治家の面目ではあるまい。どうか時勢の軌道から脫線しない樣に日本帝國の舵を取て貰ひたいものだ。

× × × × ×

南京政府の不信と云ふことも奉天援助の理由とならざること

[illegible]

[illegible]し[illegible]破棄を通告したといふ[illegible]、[illegible]また日支外交上の一個獨立の問題だからである。

條約は約束である、一方的行爲を以て破らるべきものではない。從て條約破棄の突如の通告はそれ自身たしかに國際信義背反の一事例に相違ない。此點に於て八月初め支那に手交した日本政府の抗議は殆んど全部私の同感を表する所である。只併し乍ら、この點で既に信義に背いた以上他のすべての事に於て亦同樣に信義を重んぜざるべしと誹るのは、事苟くも隣國の責任ある高官の行動に關するだけ、輕卒至極と謂ふべきではなからうか。私は憚る所なく白狀する、王正廷君は私の最も尊敬する友人である。併し私は友人なるの故を以て強て彼の過誤を曲庇するの考はない。只日本の一紳士としての德義を重んじ、出來る丈け親切と雅量とを以て事態の眞相を摑まんとするのみである。同じ形の過ちを犯すにしても人に依て各々その動機を異にすることがある。單一の失行が全人格の信ずべからざることを表現することもあるが、又然らざる場合も多い。條約問題で日本に不信の罪を犯した南京政府が、例へば滿蒙に於ける權益の問題に付ても同じくまた露骨に帝國の立場を無視すべきや否や

[illegible]

[illegible]

はない[illegible]

あつたら、[illegible]

らないのだ[illegible]と云つて私に[illegible]この[illegible]するのではない。只彼のこの[illegible]を唱ふるや茲に年あり、今日南京で公然之を[illegible]するに接して驚いて彼を不信呼ばはりするは、餘りにも彼方の立場の無理解なるに注意を促して置きたいのである。

一々王君の言明を吟味するまでもなく、彼がどう出るかは本來我々に分つて居る筈である。例へば不平等條約の撤廢といふは當代支那の流行文字ではないか。彼等以爲く、支那と諸外國との條約は何れも皆對等の地歩に立て結ばれたものではない。資本家と勞働者との間に眞の契約自由の實なきが如く、支那と諸外國とは被壓迫者と壓迫者との關係であつた。其間に實質的の自由なしとせば、謂はば威迫に基いて強いられた條約ではないか。即ち不平等條約の叫びある所以である。故に之等の條約はそれ自身無效なるべきものであるが、更に一歩を進めて考ふるに、之等の條約は必然的に支那の利益を不當に損傷するものなるが故に、東洋平和の大局から之を觀るに害ありて益なきものたるは明白だ。そこで我々は希望する、支那と諸外國との關係

は一體如何すれば双方の爲になるかを一ト先づ出發點に立返つて別に攻究をつくして見たい。從來の條約に斯うあるなどいつて居ては、何時まで經つても兩方の親善關係は改められない。先年顧維鈞君が巴里の平和會議に於て、支那問題は須らく道義的見地より論ぜらるべく法律的見地より取扱はるべきに非ずと、氣焰を吐いてウヰルソンを煙に捲いたのも、要するに右の根據からであつた。而してこの思想の根源が顧君の黑幕たる王君の頭から出たものなることは、當時すでに外字新聞の喧傳せる所であつた。之を始めて唱へた人の誰かは今更詮索するの必要はない。只彼等が巴里會議の當時すでに之を堂々と世界の檜舞臺に於て披露したことを知ればいゝ。

其後王君は支那に歸ても機會ある每に之を說き廻つたのである。私は固より文字通りに其主張を賛成し得ぬが、一面に於て亦多少の眞理あるを認めざるを得ず、就中從來の秩序の外に新しき國際的秩序を見出さんとするの熱意には相當の敬意を表してもいゝと考へて居る。殊に民間に居つた時とは違ひ、一旦責任の地位に立つた以上、表面の說明は兎も角として實際の措置に就ては必しも理窟一遍で押し通すこともなかるべく、此邊のことは相當話せる筈の男である。只彼は過去に於て如上の說をあまり强く說き過ぎた、今更表面之を緩和するわけには行くまい。謂はば多少自縄自縛の嫌なきを得ぬのである。而して我日本としては、若し本當に外交をうまくやらうとなら、此所大に雅量を示し、王君の立場をも十分同情してやつて、實質的に日本の立場を完全に承認せしむるの方策を講ずべきであつたと思ふ。事情も察せず直にムキになつて憤るのでは、此方も亦自縄自縛のわなにはまつて全然動きが取れぬことにならう。この事に關し私は旣にさる七月の本欄に於て次の如く述べた。『我國の有する旣得權の中には、最近の形勢の變化に伴つて、我から進んで棄て去らねばならぬもの又棄て去るを得策とするものもあるに相違ない。一旦獲たものは事情の如何に拘らず之を離してならぬとするは、特に親善の關係をいやが上にも開拓すべき支那に向つて執るべき態度ではなからう。況んや所謂旣得權の中には或は支那自身の向上發展の爲に多少の障碍たるものもあるべきに於てをや。之等の點に付て我々は出來るだけ虛心坦懷でありたい。無暗に信條を振翳りして宋襄の仁を學ぶ必要は固より毫末もない。讓れないものは放さぬことに決めてよく、欲しいものは直に請求しても一向に差支はない。要は共存共榮の原則に基き胸襟をひらいて新に兩國將來の關係を協定することである。之が爲に私は從來の行掛りや約定やを無暗に引援せぬ樣にしたいと考へるのである。之を一言にして約せば、要する

に[illegible]

こ[illegible]きもつてたが、[illegible]としては一旦内政の干渉に[illegible]して、[illegible]に各に内因の利益を[illegible]しおかたる我の要求に於て決めらるべきであると云ふに關する」と。之は王君の條約破棄の通告以前の私の見解である。我國の當局が之れだけの理解と雅量とを以て臨んだなら、王君との談判は却て他の何人とよりも容易に話の纏りを見得ようと考へる。

× × × × ×

しかし愈々當て見るまでは王君の態度も迂ッかり買被らぬが得策だ。人を見るにも國情を見るにも虚心冷靜が何より大事である。たゞ私は王君を多少でも識て居るだけ、彼に關する我國諸新聞の記事の時に誣妄に失するを遺憾とする。曾て彼が余日章等の基督教徒を採用せんとして内部に大不評判を招いだなどの報道を見たことがある。之はまがふ方なき共産派の流言に相違ない。基督教徒といふことを別にしても、學徳双絶の評高き余日章君を擧用するのなら、心ある支那識者中には恐らく一人も異議を唱ふる者はなかるべきを以てである。

次手ながら言ておく。奉天に向ふ途中林權助男は盛に南方革命派を罵倒し、抑も支那で革命の始つた以來失敗して日本に亡命した所謂志士はいづれも皆巨額の金をくすねて居たと語って[illegible]

に[illegible]するに至ては[illegible]を有つて居たのだ[illegible]人たいて[illegible]つて居たお蔭に其有錢を不在と云ふのではない[illegible]りか故意の捏造か、何れにしても事實を枉げてまで南方[illegible]面へ泥を塗るは淺ましいことである。

× × × × ×

床次氏の脱黨が對支政策の軟弱を理由としたことに鑑みてか、民政黨は新に第三次の聲明を發表した。滿蒙に於ける既得の權益は一毫の微といへども讓らないと力むあたり、宛として政友會の後塵を拜するものの如くである。そこで政友會方面では之を以て對支政策に於ける民政黨の屈服と評るものあり、少くとも對支强硬政策が民政黨の新なる聲明に依て擧國一致の支持を受けた形になつたとて大に喜んで居る樣である。成る程滿蒙既得權益の絶對的擁護と南京政府に對する國際的不信の譴責とに付て、民政黨は全く政友會と同じ立場に立つことになつた。たゞ之と同樣に重大なる「東三省が南方政府の治下に入るを認むべからざるや否や」の問題に付ては、兩者の見解にまだ可なりの隔りがあるやうだ。政府では斷じて之を認むべからずと言明して居るから、張學良と南京政府との妥協説にして實現せん

か、その宣言の手前、日本自ら東三省の治安維持に任ぜねばならぬことにならう。民政黨は果して政友會のこゝまでの決心に追隨するだらうか。

殊に滿蒙既得權益の絕對的保護と云ふ問題になると、成程政友會と民政黨とはその見る所を同うして居る。併し之を以て擧國一致の支持ありとするの揚言に對しては、私は敢て天下無數の庶民に代て一片の異議を挿んでおく。政民兩黨の一致は、既成政黨に依て代表せらるる國民中の極めて少數なる一部の一致に過ぎない。之を外にして幾百萬の無產大衆あることを忘れられては困る。無論彼等は必しも滿蒙權益をどうでもいゝと考へて居るのではない。日本國民の生存のため滿蒙に特殊の關係を作るの必要あることは十二分に認めて居る。但し之に就ては隣邦の友人の考も篤と聽いて見ねばならぬ、ひとりで勝手に決めるべきではないと考へてゐる。斯くして我々は、從來の行掛りにこだわらず新なる合理的基礎の上に兩國の關係を建て直さんと期し、且又確實に之に成功し得るの自信を有するものである。私共は必しも無條件に既成政黨の政策を排斥するものではない。たゞ彼等が所謂擧國一致を唱ふる前に、彼等以外に尙數百萬の新興階級あるの事實に注意を促しておきたいのである。

外交調査會是非

外交問題は黨派を超越し擧國一致で行きたいと云ふ。我方の意思を外國に強要するに際し擧國一致の希望たるの實を示すは成程有利であり又必要なことに相違ない。但しそれには先づ擧國一致の定論を得るの組織を作ることか必要だ。而してこの爲の先決の急務は、時の內閣が少くとも外交問題の處理に付てその當然の權限を放擲することである。故に田中內閣の計劃する外交調查會なるものが、若し果して道路傳ふるが如く所謂擧國一致論の叫びに應ずるものなら、それは必ずや有効に帝國の外交を指導する最高機關でなくてはならない。啻に之ればかりではない、外交調查會の活動を飽くまで自由ならしむる爲に、時としてはその設置以前に決めた方針をも根本的に棄て去るの覺悟あるを要する。自分は全く白紙にかへり、新設機關に自由自在の手腕を振はしめる所までその權能を尊重するのでなくては、本當の擧國一致の機關とはなり得ないのである。

× × × ×

併し田中內閣のもくろむ外交調查會は實はさうした性質のものではない樣だ。田中內閣には既に一定の外交方針がある、他の閣僚にさへ十分に諮らないと噂さるる程に兼攝外相の自信に

[illegible]
外、之が不動の外交方針として何人にも[illegible]べき[illegible]のものでない。諸君もおとなしく之に追随し其旨を公然と聲明して欲しいとて、所謂各方面の代表的長老を集めるのが外交調査會の本體らしい。政府當局者としては至當の希望であり、事實筋書通りに運ぶものなら此上もなく結構な事であらうが、併し呼び出された者は何も己れの良心を殺してまで政府の方針に盲從するの必要はないのだ。國家の利害を愼重に考慮した上自由に贊否を決して少しも妨げはなく、又自由の決定に終始することが國家の爲に必要でもある。從て此意味の外交調査會なら、結局外交方針内示會といふ位のところに止まるであらう。政府の重要なる方針の内示に接しても、之に贊成し得ざるものが將來に於てその拘束を受けざらんとするは當然の事である。

[illegible]
己れの[illegible]
當に外交を[illegible]、[illegible]に本[illegible]
出すことに努めぬのか。

×　×　×　×　×

眞に擧國一致の外交をやらうとなら、外交調査會をして外交指導の最高權を有せしむべく、之が出來ずはどんな偉い人達を集めたとて之に外交政策内示會以上の性質を有たしてはならない。方針は豫め自分できめる、外交は大事だから擧國一致で之を支持して貰ひたいと云ふは、無理心中を人に强ゐるものに外ならない。

經濟時評

不良生命保險の問題

牧野輝智

（一）

近年生命保險會社の不良業態が續々發露され、保險加入者をして著しく不安の思をなさしめてゐる。我國の生命保險會社は會社數四十二、其積立金九億圓、保險契約高五十二億圓（昭和二年三月末現在）、年々の保險料收入二億二千萬圓である。是を十年前の大正六年三月末と比較すると會社數の增加は二社であるが、積立金は五倍の增加、契約金高も五倍の增加、一年の保險料收入も同樣五倍の增加である。十ケ年に五倍の增加といふことが可なり長足の進步であることは改めていふまでもない。試みに是を詳細なる數字にて示すと左の如し。

我國における生命保險業發達の實勢

	大正六年三月末	昭和二年三月末
一、會社數	四〇	四二
一、拂込資本金又は基金	八、〇三三、五五〇	二一、四六三、七五五
一、積立金	一六八、〇四九、九九二	九〇四、九九五、三六八
一、保險料收入（最近一ケ年間）	四六、三三〇、六六五	二二一、〇四一、七一七
一、保險金支出（同）	一三、三八七、八二三	五九、三三四、〇七七
一、營業費（同）	一三、六六三、六五一	六三、三五五、七八八
一、保險契約金高	一、一三〇、四八六、五五三	五、一九七、四八七、〇〇〇

【附言】右統計は商工省調査による

在の如くに生命保險會社の數も著しく増加しつゝある。ことに生命保險なるものは被保險者の生活を保障し、或は人自身の老後の安樂を保證する極めて必要の事業であるからであるが、此の趣旨を全ふするために生命保險として何よりも第一に必要條件は會社の業態が永年に亘り確乎たる堅實性を持續することである。凡そ如何なる事業でも其の業態が堅實であることを要するは當然であるが、特に生命保險にありては此の條件が最も重要である。一ケ年二億二千萬圓の保險料といへば、それだけ國民は保險なる形式により貯蓄をなしつゝあるのであるが、此の貯蓄は主として無產階級の勤勞所得から捻出されつゝあるものである。何が故に生命保險に就ては會社の業態の恒久的堅實性が特別重要であるといえば、生命保險なるものは死亡又は長期契約の滿了によるにあらざれば其の契約を解除することが出來ないからである。同じ保險でも火災保險ならば一年の期間で契約は一應消滅するから若し被保險人に於て其の會社を不安だと思ふならば期間滿了の時に契約繼續を思止るか、他の會社に變更するかすればよろしい。海上保險、運送保險、傷害保險等も同樣である。又銀行預金なども若し其銀行を不安と思ふなら、其預金を引出すことも自由である。定期預金といつても期限は六ケ月或は一年、それも期限内に引出すことも出來る。是に反し生命保險にありては十年、二十年といふ長期に亘るかさもなければ被保險者死亡して、若くは一定の年限に達するまで解除することは原則上許されないものである。其の間に於て途中にて解約すれば非常なる不利益を蒙らなければならない。是等の事情から考へて生命保險なる事業が特に堅實性を重要とすることは容易に理解せらるゝが、さて近年の我國の生命保險の狀態はどうかといふと四十有餘の會社中には業態の極めて不良なるものが稀でなく、近來其醜態を暴露したものも一二に止らない。是は社會の公益上看過してはならない重大問題である。

（二）

試みに是等の不良保險會社に就て其業態の惡化するに至つた徑路を探索して見ると、何れも殆ど其の事情を同ふしてゐる。是を一言にして云へば其の資產の運用を誤つたからである。而して、更に運用を誤つた事情に就て考察すると、最初から生命保險業其のものを經營することが眞の目的でなく其の掛ケ金積立金を或る事業に利用する間に既存會社を繼承し、或は新會社を企劃する者もある。是は例外であるにしても、保險會社の資金を自分の關係せる他の事業會社に流用し、或は特殊の因緣ある

不良會社に隨逝し、保險會社の運命を是等の事業會社の運命と共にせしむるものに至りては頗々たる實例が存してゐる。尤も保險會社の資産運用には法律上種々の制限が設けられてあるけれども、今日の實際では此の制限を誤魔化すのは必ずしも困難なことではない。不良會社に至りては寧ろ如何して是等の拘束を誤魔化し世間體を裝はんかのみを是れつとめてゐるといふ狀態である。最近醜態を暴露した三、四の生命保險會社に就て見るも其の經營振りは言語同斷な不眞面目なものである。德義の問題は疾くの昔通り越して幾多の刑事問題さへそこに潜んでゐる、と云ふ有樣である。八千代生命保險の如きはやつとのこと解散の運命を免れたけれども、何としても解散の外に道なきもあると聞く。元來保險會社は信用を唯一の生命とするものであるから、一旦醜態を暴露したものが、假令後繼者出で曲りたりに業務を繼續することになつても、更に信用を獲得し、健康體に恢復することは殆ど不可能である。此の社會的の制裁が存する爲め、保險の經營者は其の業態を堅實ならしむることに全力を傾注せねばならぬ道理であるが、社會一般の經濟眼鑑識眼は案外に低く、或程度では誤り繰り算段で經營狀態を彌縫し得るものである。從つて不眞面目なる經營を敢てして其の日〳〵を彌縫する者も發生する次第である。

元來今日の保險業なるものは餘程會社自體に採りて有利なものである。それは株式組織の保險會社の株價が概して業態以上に高價であることによりても察することが出來る。明治生命の時價拂込の二十倍、日本生命は十數倍、帝國生命は八倍、さんざんの不評判をさらけ出した八千代生命でも其時價は矢張り拂込みの二倍である。即ち左の如し

	拂込	時價	配當
明治生命保險	一〇〇圓	一、九九七	二割四分
日本生産保險	二五	三一八	二割五分
帝國生命保險	五〇	四〇〇	二割
日清生命保險	一二・五	一三五	二割四分
愛國生命保險	五〇	六〇〇	六割
東洋生命保險	一二・五	七五	一割二分
八千代生命保險	一二・五	二六・五	六分

明治生命の配當が二割四分でも時價千九百九十圓では一分二厘位の利廻りに過ぎない。愛國生命が六割の配當をなしても利廻りは公債以下で五分に過ぎない。斯の如く保險株が株價を無視して高價を維持してゐるのは積立金の巨額なることに存してゐるけれども、更に根本問題は生命保險業てのものが會社自體にとり有利であるからである。而して其の有利なる理由は第一に保險の積立金は銀行預金のやうに取付けに遭ふ憂がない。これは保險の性質から生ずる當然の利益であるが、此の外にもつ

と共[illegible]に十[illegible]に[illegible]し[illegible]たる[illegible]ある。こ[illegible]は[illegible]険金の支[illegible]保険料（[illegible]）收入に對して極めて少額であるからである。別表の示す如く保険金の支拂は保険料收入に對し僅に二割五分乃至三割一分に過ぎない。詳細は左の通りである。

保険料（掛金）収入と保険金支拂との比較

年度	保険料收入	保険金支拂	保険料と保険金の比率
大正五年度	四六、三二〇、六三八	一三、三八七、八三二	二割九分
同六年度	五四、〇六九、六四〇	一四、四八五、五三九	二割六分
同七年度	六七、七六八、八一六	一九、三五五、六五七	二割八分
同八年度	九二、一八六、一四〇	二五、五三四、六五二	二割七分
同九年度	一〇七、四二八、五〇八	三一、〇五八、七〇〇	二割九分
同十年度	一三一、七三九、一七七	三三、六六六、三七一	二割五分
同十一年度	一四六、〇四五、九八八	三七、三六七、八九一	二割五分
同十二年度	一四七、二一四、八〇〇	四六、七七五、三八五	三割一分
同十三年度	一八二、七九四、七六四	五〇、六一八、四四八	二割七分
同十四年度	一九七、七三四、七〇九	五三、八六三、八七三	二割六分
昭和元年度	二三一、〇一四、七一七	五九、三三四、〇〇二	二割六分

［備考］商工省第三次商工統計表に依る。年度は其年四月から次年三月に至る一ケ年とす

右表により昭和元年度に至る十ケ年の平均を見ると、保険金の支拂はかけ金收入の僅に二割七分である。殘りの七割三分の

ま一[illegible]の[illegible]ると一致するものではないと[illegible]保険料の義務者には[illegible]だけ高いかけ金を[illegible]ことになるから[illegible]叶つ此從を[illegible]にすることに絶對に必要であるから此の目標からして積立金を多くすることに或る程度に於て保険加入者に於て忍ばねばならぬことになるが、斯の如く高い料金を徴收したなら是に依て得たる積立金の運用を誤り、或は其の運用に於て私を弄し、保険會社を喰物にし、それ程でなくとも會社の經營を危ふするは非常な罪悪であるといはねばならぬ。

（三）

私は保険料の拂主が概して無産階級であることに鑑み、而して會社の恒久堅實性が絶對的の必要條件であることを考へ、更に斯の如き性質のものであるに拘らず、不良會社の發生は遂に避け難いことに思ひを致し、其取締りを從來よりも遙に嚴重に且つ有効にすることの必要を感ずるものであるが、それも十分の効果を擧ぐることは容易ではない。商工省では保険監督の實績を擧げるために、明年度から監督費を増加するといふ噂もあるが、それも勿論惡いことではないけれども、最も大切な點は適當の監督官を得ることである。學校を出たばかりの空論のみを吐いて實務を知らない下級事務官を是に當らしめ是等が派

して、帳簿の檢査をなさしめるやうなことでは實績は擧るものではない。たゞ銀行監督に比し保險監督の幾分都合のよいことは會社數の少いことである。普通銀行は合同されたといつても依然千數百行に達してゐる。保險會社は僅に四十二社である。これも更に減少せしむることが出來るから此の點は監督上都合の宜い譯である。

（四）

併し私は理想からいへば生命保險は寧ろ國營にす可きものではないかと考へるのである。今日の簡易保險制度にも飽き足らぬ點は澤山あるが、生命保險を國營とすることは社會政策的に見ても合理的の結論である。今日の如く勸誘せられるまゝ加入會社を決定するといふやうな危險は之を國營にすることにより直に除去することが出來る。

斯くいへば不良保險會社と保險契約を結ぶは其の人の不明の致す所であるから是が爲に損失を招くも致方ないといふものもあるか知れないが、然しながら一般の人々に保險會社良否の鑑識を求むるは寧ろ無理な注文である。保險契約高の多寡は普通生命保險會社の良否を判定する一つの標準とされてゐるけれど八千代生命の如きは此の點には完全に近い資格を備へながら、そして此の點を高調して頻りに新契約を吸收してゐたが、其の不良なる實態は遂に明るみにさらけ出される外はないことゝなつたのである。よし又契約當時にありては名實とも堅實なる會社を選定したにしても、其の會社が果して長期に亘りて堅實の經營を繼續し得可きかは、必ずしも確保し得可き限りでない。生命保險會社の恒久的堅實性は之を國營とする以上に之を求むることは出來ない。或は日く保險會社の良否は經營者其人にあり經營者さへ得れば十分堅實に經營することが出來ると。併し人間には百歲の壽命がない。矢野恒太君の第一生命保險は矢野君といふ適任者があつて隆々として榮へてゐるが、矢野君とて既に六十何歲の人である。此の人の存否によりて會社の價値が變るやうでは被保險人としては甚だ危險である。今日株式組織の保險會社にても堅實の聲價あるものは一二に止まらないが、然し是等の會社の株價が十倍二十倍の高價を維持することは生命保險業の公益性に反するもので被保險者の利益とは少からず背反するものである。私は生命保險の經營は株式組織よりも相互組織にす可きもの、相互組織も商事會社の經營とするよりか寧ろ國營に移す可きものと考ふるのであるが、それは種々の理由から出發した結論である。此の論は今直に實行することは不可能であるが、私は近年不良會社の續出するのを見て、其の弊害を除去し、社會公益上被保險人の立場を擁護するために、或は今日の不完全なる保險法の改正を行ひ、保險監督の實績を擧ぐるの道を講ずる等の必要あるを痛切に感ずる次第である。

―昭和三・八・一〇―

床次竹二郎論

馬場恒吾

床次竹二郎氏は彼れが民政黨を脱黨するに到つた動機を、其親友の或者に向つて説明して云ふには

『舊政友本黨の連中は勿論、舊憲政會の人々も僕の所に來て、僕に自重して動くなと說く。其理由として說く所を聞くに、民政黨の濱口總裁は健康がよくない。だから僕さへ自重して居れば、半年か一年かすれば、總理大臣のお鉢が僕の處へ回はつて來る。今は決して動くべき時機でないと云ふのだ。

『かうした說を聞くと僕は民政黨に居らうと思つても、居られない。元より僕は政權を取り度いと思ふ。僕に政權慾がある事を否認しない。併しそれは僕許りではない。苟くも政黨を率いて、天下に立つものは誰れだつて、政權を取り度いと思はない者はない。只政黨の首領のみでなく、其邊の幹部級も大低皆其積りでゐるだらう。だけれど、濱口の健康がよくないから、遠からず、政權が僕の處へ廻つて來ると云ふ心持ちで、民政黨に居ると云ふ事は、僕としては一日も我慢出來ない。人の死ぬるのを待つ、そんなさもしい心持ちを持つてゐると云ふことは考へただけでもぞつとする。政權を取る途ちは、外に方法もあらう。濱口の健康が云々と云ふ說を聞かされただけで、最早民政黨には居られなくなつたのだ。』

『然らば何故に、脫黨する前に、多年苦樂を共にして來た所の、舊本黨系の同志に相談しなかつたかと云ふ話しもあるが、それは出來ない。何となれば、僕が民政黨に居る以上、其黨の中の同志と話し合ふと云ふ事は、黨の內部を攪亂する事になつて、僕としては出來兼ねる事だ。それ故に、僕は誰れにも相談せずに、一人で脫黨した。それで僕に隨いて來るものがあればよし、隨いて來るものが一人もなくても、それも亦巳むを得ぬ

事だ。尾崎行雄氏のやうに一人で行く政治家もある。僕は自分の信ずる所を行ふ爲に、さう云ふ運命になる事も敢て辭さない』と。

× × ×

八月一日床次氏が民政黨を脱黨して、第三黨を樹立すると云ふ新聞號外が出たとき、誰れも初めはこれを眞實だと思はなかつた。現に興津に居る元老西園寺公すら、最初の電報を其日の午前十時頃或通信社長から受取つたときは、これを信じなかつた。後に近衞文麿公其他から同樣の電報を受取つたので初めてそれを事實だと思つたと云ふ事である。

同日床次氏は新聞記者を東京會館に集めて彼れが脱黨の理由書を發表した。それには支那問題、思想問題、金輸解禁、小選擧區制などの事を論じてある。けれども、床次氏が民政黨を脱黨しなければならぬ理由として、成程と納得出來るやうな理由は、其中には發見せられなかつた。だから私は床次氏が民政黨を脱黨した眞實の動機が何所にあるかを知らうと思つて、さうした事を知り得る方面に數日間搜し歩るいた。そして最後にブツカつたのが本文の初に書いた彼れの親しき友人に話した告白である。これで、床次の心持ちは判ると思つた。

濱口の死を待つて居ると云ふ姿が厭だ。さうした心持ちで居るかと人に思はれては、一日も民政黨に我慢して居られないと。それは彼れの考へさうな事である。ヌーボー式の彼れの頭には、外に長所を發見するのに苦しまなければならぬけれども、彼れは薩摩人として、薩摩の代表的人格者と云はれる西鄕隆盛を崇拜する。彼れに對して悪罵を放つ者は今日迄彼れを觀兵式の大將、或は金魚の刺身と呼んだ。そして此仇名が幾許か適評であるとの感を起さすのは、彼れが人格者以外に何物でもないと云ふ彼れの實質を穿つたからであらう。其人格者も幾多の點に於て妥協點を有する人格者であるが故に、事實として彼れが果して完璧な人格者であるや否やは疑問として殘る。只彼れの希望と生命は其人格の上に築かれてゐる。一寸見て彼れの風格に古武士の面影があるのはかうした精神の現はれであらう。それ故に彼れが濱口の死を待つと云ふ立場に居る事を、心苦るしと痛感した事は蓋し事實であらう。從つて亦、民政黨の人々、及び彼れに好意を有する政治家が、彼れに向つて、今暫らく辛棒して居れば、君は濱口の後の總裁若くは總理大臣になれたのではないかと云ふのは、徒らに彼れの心の底からの輕蔑を招くのみだ。

併し、それだからと云つて、此古武士的な感情のみが、床次

をして今迄の若き行動に出でしめたることに帰することに想到つてゐる。床次が前日の死を待つの覚悟をせざる程に焦いたのは事實である。それ故に彼自身としてはこれ丈けでも自分は民政黨に留まり得ないのであると思ふたかもしれぬ。しかしそれは自己陶酔の一種の作用であつて、自分の心の中の美くしき感情を高調して、自分がする醜くき行動を擁護する。彼れ自身がそれを意識的にやつてゐるのではあるまい。併し結果に良心を欺くと云ふ事になる。

尤も彼れ自身は政權欲のあることを否定しない。只それが彼の全部であることを明瞭に云はないのみである。併し過去數年間の彼れの行動は只政權にあこがれて、ヒステリーになつてゐると見る外はなかつた。元より此病氣が治れば彼れは元との古武士的人格者になるであらう。それ迄は彼れの人格は只彼れの野心を粉飾する道具に用ひられるに過ぎない。

されば、彼れをして、民政黨を脱黨して、第三黨を樹立すべく、決心せしめた眞の動機は何か、それは云ふ迄もなく、さうする事に依つて、民政黨に居るよりは早く總理大臣になる機會があると思つたからである。誰れが彼をしてさう思はしめたか、何が彼れをしてさう思はしめたか。それらの經路に付いては彼のみが其全部を知つてゐるであらう。併し筋書の輪廓は稍明白に浮き上つて來た。

床次の頭に渦巻いてゐた一つの意見は幣原式外交は失敗である。その爲めに內政にも影響したる。併し民政黨の外交も軟弱外交と云はれて、決して世間の共鳴を得ない。これ故に、茲に田中內閣の如き强硬な積極政策でなく、幣原の如き軟弱外交でなく、温穩中正なる對支外交を標榜すれば、政權がそれを標榜する第三黨に來る。只理屈として、さう來るべき筈だと云ふのでなく、元老西園寺公が其意見である。それ故に床次としては今が民政黨から獨立して第三黨を組織すべき秋だと思ひ、そしてその決心を斷行したのである。

それ故に彼れは彼れ自身が口授して作つた所の第三黨樹立の宣言の劈頭に於て支那問題を論じてゐる。其れに支那は目下革命運動の途上に忙殺されつゝあり、吾等日本國民は遠からぬ過去の體驗に顧み、隣邦同胞の現になめつゝある產みの苦勞に對し、衷心の同情と援助を寄せ、その迅速なる成功を希ひ』と云ひ、『先きに日本が國運を賭し、最大の犧牲を拂つて日淸、日露の二大戰爭を戰ひたるは、斷じて帝國主義的、侵略主義的動機に基くものにあらず』と云つて、暗に田中內閣の反動主義的な外交を排斥してゐる。それと同時に彼れは『然るを、濫りに內政不干渉の美名に泥み、姑息、退嬰、徒らに一日の安をぬすむは、

頁に維新の皇謨を輕視し、大和民族の自然の發展を妨止するに庶幾し、宜しく飽くまで、合法的、積極的に既得權益の擁護に努めざるべからず』と云つて、幣原外交の對支不干渉主義を露骨に攻撃してゐる。其合法的、積極的と云ふ所に、對支外交の中道を示した積りでゐたのである。

此立場を取れば政權が來ると彼れは思つたのである。然るにそれは一つの幻影に過ぎなかつた。彼れは西園寺公の意志の觀測を誤つたのである。西園寺公がさうした意見を抱いてゐると云ふ事を、床次に吹き込んだのは田中內閣に依つて貴族院勅選議員にされた所の松本剛吉氏あたりであらうと云はれてゐる。松本氏が意識的に床次を載せてやらうと思つたかどうかは判らぬが、兎も角も、西園寺公は床次氏が想像する如き意見を抱いてゐない。又意見があつても容易に其意見を漏らす人でない。只幣原外交に對しては、西園寺公は決して之を非難してはゐない。彼れの意見に依ると幣原外交は恰も碁の定石を行く如く、地道を行く外交だ。だから花々しくない。極めて平凡である。併し外交はこれでなければいかぬ。徒らに覇氣を出したり、奇功を收めやうとしたり、突飛な眞似をして、列國から尻尾を押へられるのは禁物である。其點になると幣原のは無難な外交だ。完全を望めばいくらでも望めるが、外交では無難なのが何より必要だと云ふ意見である。

西園寺公がかうした意見を有してゐることを知つたならば、床次氏は對支外交で、田中と幣原の中間を行く方針を立てる事に依つて、急に政權を握り得ると思はなかつたであらう。然るに彼れは最近一度も西園寺公を訪問してゐない。箱根を自働車で山越しに訪問したなどと云ふのは、床次に箔を付ける爲めに何人か云ひ振らす所の宣傳である。床次は西園寺公の意見だと人傳てに聞いた事を以て、其進退を決してゐる。政權に釣られて、足元を忘れた觀がある。

併し彼れは容易に此幻影を捨てない。現に彼れは民政黨を脫黨して後に、政本黨系の幹部で、民政黨に殘つてゐるものを第三黨に來るやうに勸誘するとき、矢張政權が自分に來る事を理由として勸誘してゐる。田中內閣が倒れるとも、政權は民政黨には轉じて行かない、それは必ず我黨に來る。それ故に君も一緒になり給へと云ふのである。床次と云ふ人は政治家としては珍らしく夢に活きてゐる人である。

床次の懷く今一つの幻影は第三黨が實は第二黨若しくは第一黨となると云ふ期待であつた。彼れの周圍には、前に云つた松本剛吉氏の外に、杉山茂丸、秋山定輔、長島隆二、臼井哲夫などの諸氏が居る。其の中の誰れが何んと獻策したかは知らぬが

[illegible]れも亦責任を負ふべきものではなからうかと思はれる。床次氏が八月一日に第三党樹立を宣明して、翌日の新聞の記事を見ると、天下悉く其非を鳴らしてゐる。而かも床次自身は泰然として尚百名以上の代議士を集め得るものと信じてゐた。其計算に依ると、民政党党内の政友本党系全部五十餘名、片岡直温系二十名、三木武吉系五名、政友会の中で鈴木喜三郎、山本条太郎系二三十名、明政会其他から数名、合計百名以上が第三党に来る。是れ丈けでも衆議院を三分して其一を占める、若し形勢可なりと見るときは他の参加者が増して、第三党はおろか、第一党にもなつて天下の重責に任ずると云ふ豫想であつた。床次は此幻影に囚はれてゐた。然るに事實としては政友本党系の民政党代議士すら大半は民政党に残留する。第三党は二十五名の交渉團體資格を得るや否やが疑問となつてゐる。床次自身の幻滅は察するに餘りあるが、彼れをしてかゝる幻影を描かしめたものは罪の深い事をしたものだ。

曾つて總理大臣であつた一政治家は、私に向つて床次の行動を批評して云つた。床次君が政權を取り度がるのを咎めはしない。政党を率ゆる政治家が一度は天下を取つて、自分の抱負を行はんと欲するのは決して無理とは思はれないからである。併し[illegible]だ。第三党で、[illegible]臣にはなれない。總理大臣以外ならば民政党に居たつて床次君の希望次第で、どの大臣にでもなれるのだ。そしてそれが總理大臣になる近か途ちであらうと。

此批評は今日の床次氏を納得せしめないであらう。何となれば、彼れの夢想してゐたのは第三党ではなく、第一党であつたからである。彼れがかうした考へを懐くに到つた二つの前提即ち西園寺公が田中、幣原二人の外交に反對であると云ふ事、及び、彼が新党を樹立すれば百名以上の代議士が忽ち其麾下に集つて来る事、此れが間違つてゐなかつたならば、彼れが總理大臣になる捷徑として、民政党を脱退した事も、必ずしも拙劣な手段でなかつたであらう。只此二つの前提が共に彼れの周圍の政客の饒舌に依つて作り上げられた幻影であつたが故に、彼れの第三党が一年前の政友本党にも劣るものになつたのである。

併し總理大臣であつた政治家の批評の中で、床次氏が第三党を率ひて政權を取らんとする事の拙劣さを指摘した點は、床次氏に對して其過去を反省せしめるものだ。過去三年間床次は其去就を變更した。大正十四年夏、加藤高明子が率ひた三派

が潰れたとき、床次の率ゆる政友本黨は政友會と一夜作りの提携を拵らへ以て加藤憲政會内閣の成立を妨げんとした。然るに、三派聯立内閣の後に、加藤は憲政會單獨内閣の總理として殘つた。そして床次は政友會との提携を有耶無耶の中に葬つたのである。其次きに昭和元年春の議會に於ては、床次は憲政會の若槻と結んだ。それにはかうした經緯がある。即ち其議會に臨むに當つて、加藤は床次に諒解を求めた、若し此議會に於て政府の税制整理案を通過さして呉れゝば、議會後に加藤首相は辭職して、床次に政權が行く事に好意を有たうと云ふ所の意志を通じたのである。所ろで其議會の劈頭に於て當の加藤は病死し、後とは若槻が總理大臣となつた。そして若槻は加藤の政策を踏襲すると言明したが故に、床次は矢張議會後に若槻が辭職して、總理大臣のお株は自分に廻はるものと信じて税制案を通過せしめたのであらう。議會後若槻は辭職せずして床次に對して、憲政會と本黨の聯立内閣を申込んだ。

若槻の腹では今自分の内閣が辭職して果して床次に政權が行くか否か疑問である。反對黨としては政友會が百六十名を以て頑張つてゐる。政友本黨は九十名に欠げる。だから政權が政友會に行かずして、床次に行くと誰れが保證出來やうぞ。若し自分が辭職して政權が床次に行かなつた日には、自分としては恩を仇でかへす形ちになる。それよりは聯立内閣を作るの無事るに如くはないと云ふ意向であつた。

彼れは秘密に床次を訪問して其意志を通じた。其時彼れは二つの大臣の椅子を提供すると云つた。然し何の椅子とも明示しなかつた。當時の事情は若槻は總理にして内相を兼ねてゐた。仙石鐵相が辭職するので鐵相の椅子が空く筈であつた。床次は早呑み込みで、内相鐵相の椅子を提供せられたものと信じた。尤もそれには仙石が、若槻に相談なしに、床次に向つて、總理以外ならば、どの椅子だつて取つてよいと云つた事が、誤解の原因になつてゐる。それは若槻の知らない事であつた。

若槻床次の秘密の會見後數日すると、床次は内相になる心組で聯立内閣を承諾すると云ふ情報が若槻の邸に達した。若槻は内務を床次に讓る意志はなかつた。然し若し、床次自身又は山本達雄氏が入閣するならば、大藏大臣の椅子を提供してもよい。若し床次、山本兩氏共に入閣しないならば、大藏の椅子をも提供する譯けに行かない。二つの只の椅子で我慢され度いと云ふ意志を床次に向けて通じたのである。それで聯立内閣の交渉は事實上破裂してゐた。新聞に出た所の、若槻の床次訪問、床次の拒絶の訪問はすべて實際の交渉は破裂した後の事であつた。

それを意恨に念つてか否かは知らぬが、其秋から床次は朴烈

[illegible]身で其後に至つて副議長若に出掛けた。そして其後に外烈問題の誤算からさうなつたのであらうけれども、[illegible]は政黨の理由にならない事を説かれて引き退がつたのである。逆ふ事は氣の毒と云ふより外に[illegible]のである。

其次ぎは三頭首妥協後の憲政會と政友本黨の聯盟が出來、そして最後には田中内閣の成立を機會として憲本合同して民政黨が成立することになつた。是れ丈けの經過を見ても、床次は憲政會と政友會の間を二往復してゐる。只表面的に批評すれば其醜態見るに堪へずと云へる。併し第三黨として政權を取らんと欲すれば、床次でなくとも、さうした態度に出るより外に行く途はない。何となれば小數黨が政權を僥倖する途は、平地に波瀾を起して、屢々政權の移動が行はれるやうにする。そしてあはよくば其政權を拾ひ取るより外に方法がないからである。第三黨が常に政界腐敗の原因になり、又それを率ゆる政治家が遂に大をなすに至らない理由もさうした事情から生れる。

併し床次氏は此方法には懲りた筈である。大正十四年から、昭和二年に至る二ケ年間、床次は臨機應變に、或は政友會と結び、或は憲政會と結んで、政權を取る事に焦つた。然るに其效果は少しもなく、政界の原則として、政權は二大政黨間に交互に授受されるものと決つた。それ故にこそ、彼れは憲政會と結んで民政黨を樹立した。然るに今は亦、前よりは一層貧弱なる第三黨[illegible]

彼れの第三黨樹立はそれに依つて直ちに政權を取る目的であつたが故に、現在の政府與黨である所の政友會と結ぶ意志のなかつた事は明白である。又實際に於て、彼れの行動が政府黨と連絡を取つて行はれたと云ふ形跡はない。彼れをして第三黨を組織せしめた策士の中には、或は政府の爲めに彼れを利用せんと云ふ目的を以て策動したかもしれぬが、彼れ自身は利用されるとは知らず、知つてそれに甘んずる筈がなく、飽くまでも自己獨自の立場から行動したと見るべきであらう。不幸にして、自己の志が遂げられず、彼れの脱黨した丈け、それ丈け民政黨の力を弱くして、結果に於て政府を利益する結果になつたのである。

併しそれは將來も彼れが政友會から獨立してゐるだらうことを保證するものでない。彼れは周圍に迫まられて第三黨を組織した。彼れの素志でない所の少數の第三黨を率ゆる運命に陷つた。そして此窮地を脱する途としては民政黨に復歸するか、政友會と合同して、田中の後の總裁になるかである。それは今後に殘る問題である。

今日迄の床次氏の政治家としての經歴は決して成功と云へな

い。寧ろ失敗の歴史を幾回となく繰り返へしたと見る方が適當であらう。若し彼れが清浦内閣を援助する爲めに、政友會を脱黨しなかつたならば、彼れは田中の前に政友會總裁となつてゐたであらう。現に、田中が政友會總裁となつた當時、前總裁の高橋是清氏が云つた。

『原敬氏が凶刃に斃れて、忽卒の際の間に合せに私が總裁になつた。然し原氏の後繼者としては適當の人を物色する必要があつた。そして誰れがよからうと云ふ話しも略々極まつてゐたが、其人が家出をしたために、一時は横田千之助氏を推さうと云ふ事になつた。然るに横田氏は熟考の上、自分は政友會を率ゆる力はあると信ずる。併し自分が率いては政友會が小さくなる。それ故に他に適當な人を求めやうと云ふので、結局田中總裁を迎へる事になつたのだ』と此話しの中の家出をした後取りと云ふのは床次を指してゐる。

若し又今回、床次氏が民政黨を脱黨しなかつたならば、彼れは例令濱口が死なずとも民政黨の總裁になる機會が來たであらう。何となれば、民政黨では若槻は健康であるけれども、總裁を濱口に讓つた先例もある。現代の政黨は巨額の金を作り得る總裁を要求する。若槻には其手腕が乏しいと見られた事が、彼れが總裁の椅子を退いて、顧問になつた理由であらう。濱口にしても、個人的に云へば其方の手腕のある樣子もない。床次が民政黨顧問として、舊憲政會方面にも人望のあるのはかうした事情の存在する爲めではあるまいか。

民政黨の首領株は上品にして理智に長じてゐるけれども、闘志に欠けてゐる憾みがある。殊に二大政黨が交互に政權を取ると云ふ原則が確立した結果、民政黨は益々落着いた。床次は主張して曰く、現代の如く無産政黨が擡頭して來る時代に於て、政黨は街頭に立つて戰はねばならぬと。そして彼れは各地の公開演説に出席した。自分の主張に依つて、かうした演説會が開かれるに到つたのであるから、彼れ自身少なからざる費用を負擔した。過去一年間彼れは殆んど席の暖まる暇のなき程地方の遊説に出掛けた。そして其内情を聞くに、彼れ程の地位のものが、地方選擧の應援に行く時は、必ず何千円かの土産を以て行かねばならぬと云ふ。今はさうした餘裕もないと嘆聲を放つたと聞く。

このやうな立場にある彼れが民政黨を脱したのも、彼れの政治的經歴に一つの失策の記録を加へるのみである。

かうして失敗のみを重ねて行くに拘らず、彼れが世間に與へる印象は必ずしも沒落した政治家と云ふそれではない。戰ふ者は永久に若い。彼れに闘争心の消磨したる形跡は認められない。それ故に彼れは未成品の政治家と云ふ印象を與へるが、老

役にしつて、再び起つ能はざる政治家となつたのではない。

彼れの子分は彼れを稱して無賴漢の政治家だと云ふ。昨日は東、今日は西、其無責任なる事甚だしいと云つて彼れを責める。それは彼れの政治的の出所進退を見れば尤もな批評である。同時に彼れの一生の運命が進む路も亦無軌道である。彼れの運命が向上しつゝあるかと見れば忽ち逆轉し、沒落の過程を辿りつゝあるかと見れば、亦捲土重來の意氣を示し來る。蓋しそれは彼れが非常に樂天的な性格を惠まれてゐるからであらう。如何なる悲境にあつても、彼れが悲觀的な語氣を漏らした例は、彼れの親近者すら知らない所である。鬪志の強き彼れは何の日にも最後の勝利を確信してゐるのであらう。

彼れの友人の語る所を聞くに、彼れは決して哲學者ではない。併し人に對する恨みを忘れる點に於ては殆んと哲學的とも云ふべき所がある。例へば幾年間、彼れが子分として可愛がつた男が彼れに叛いて彼れの處へ寄り付かなくなる。彼れは決して其男に向つて惡聲を放たない。それが自から戒めて惡聲を放たないと云ふ風でなく、寧ろ完全にさうした裏切者の存在を忘れた樣子である。そして幾年の後に、さうした男が彼れの室へ飛び込んで來て、口から出任せの御世辭を云ふとき、彼れはそれが一度彼れに叛いた男である事を忘れたかの如く、喜んで再び其男を愛するのである。[illegible]るが、彼れの友人に一々現在の政友會に居る人の名を擧げて、其實例として示したのである。

同じやうな例で、少しく趣きの異つた話しを聞かされた。彼れが人情に厚い事は世間に定評となつてゐる。其中にも、彼れは屢々窮迫せる新聞記者を救つた事がある。それが必ずしも始終彼れの門に出入する新聞記者に限つた事でない。一年或は幾年か彼れを訪問せざる新聞記者の場合でも、それが家族又は自分の病氣の爲めに困窮に陷り、そして其友人が彼れに其狀態を語るとき、彼れは何百かの見舞を屆けずには措かない。それ丈けならば、敢て驚くに當らない。彼れが他の政治家と異つてゐる點は、かうして人の窮迫を救ひながら、さうして人を救つたと云ふ事を忘れて居る事にある。彼れに救はれた新聞記者が後に彼れの所へ禮を述べに行くと、彼は空呆けるに非らずして、眞實にさうした事實のあつた事を忘れてゐる。

過去を忘れる。それが流轉の哲學の極意ならば、彼れは哲學を知らずして、哲學の極意を體驗してゐる。

彼れは怒り易い。同時に怒つた事を忘れるのも早い。曾つて彼が内務大臣であつた頃宇都宮に大演習があり、彼れは陛下に扈從して往つた。其時地方の官民が其地方で取れた鴨を獻上し

たゞ、余り澤山の鴨であつた爲めに、それが内務大臣に御下賜になつた。處ろで彼れはそれを彼れの宿屋に集つてゐた政黨の有志に頒たんと思つて、秘書官の瀧正雄氏に云ひ付けて、皆さんに御持ち歸りを願へと云つた。瀧氏は有志に向つて、

『さう云ふ譯ですから、御邪魔でもありませうが御持ち歸りを願ひます』

と云つた。床次は之を聞き咎めて

『瀧君、御邪魔でもとは何んだ。苟くも陛下から頂戴したもので、皆さんも喜んで御持ち歸りにならうと云ふものを御邪魔でもとは何事だ』

と叱り飛ばした。瀧氏は默つてゐない。

『御邪魔と云つたのが何が惡いのです。陛下に對する忠誠敬虔の念に於て、私は何人にも劣りはしない。只皆さんにお持ち歸りを願ふに當つて、お荷物になるからお邪魔でもと云つた迄で、それが何處が惡るいのです。陛下に對する忠誠敬虔の念は、そんな言葉の末えで左右されるものでない。そんな事をとやかう云ふあなたとは、皇室に對する考へが違つてゐる』

『何んと云つても、御邪魔などと云ふものがあるか。皆さんにお詫びして取消せ。』

『イヤ取消しません。それで惡ければ私は秘書官を辭します』

『アヽ、辭職しろ、辭職しろ』

と云つた破目になつて、折角鴨を貰つて歸らんとしてゐた地方有志も立場を失つてゐた。併し彼等に罪があるのでないから、鴨は皆んなに分けて、持つて歸へらす事にして、瀧氏は自分の部屋に往つた。

　夕方床次は他の秘書官と一緒に宿屋の風呂に入つた。其時彼れは、

『瀧は何うしてゐるか。心配してゐるかもしれない。あれはあれでいゝのだから、機嫌を直ほして出て來いと、君から云つて呉れ給へ』と云つた。

　床次は怒りぽい。併し腹の底に情愛が籠つてゐる。何んとなく味がある、と云ふのが、彼れに對する、彼れの子分の定評である。政治家としての彼れが、無軌道にして、無定見、そして愚劣にして、間の拔けた失敗を繰り返へしてゐるに關らず、尚相當の崇拜者が彼れの周圍に集まるは、人間としての彼れに捨て難き所があるからであらう。

　床次氏一代の傑作は蓋し其先夫人を吊ふ『手向草』であらう。其數節を拔萃する。

『妻きよは鹿兒島藩橋本勝德の女、年十八にして、明治廿三年の冬、我家に嫁く、翌年式を擧く。偕にあること二十有九年、

其間公私多端に[illegible]、[illegible]、我をして今日あるに至らしむ。[illegible]くる所なし、悲哉。昨大正七年秋以來、妊の病にて床に臥しぬ、醫藥看護に手を盡くしゝも其甲斐なく、遂に今大正八年四月三日午后五時に不歸の客となりぬ。悲嘆やる方なし。…………

『此間恰も議會開會中にて殊に内務省、鐵道院提出の案件も少からず。最も努力を要すべき時なりし、諸種の會合等も可成は斷りたれども、不得已ものは亦、努めて出席せざるを得ず、病人は自分を待ち佗びて居る樣子もあり、心は逼れども、公務は處理せざるを得ず、折角の來客は用も濟さざることを得ず、暇には病床を見參へども足らぬことゝて甚だ氣の毒に感じたるは一再ならず、苦心筆に盡されず。

『妻また夫を思ふこと極めて親切に、己の病の爲に公事の衍勤に心ばかし遏れさせては相濟まぬと、それのみの心配の樣子にて、何日までかくてあらんは、徒に夫のみに心配させて本意ならねば、何れにも早く極りを見たしと、折々言葉の端に表はすことあり、左のみ餘計な心配して、却て病に障りありても宜しからず、且つは幾年病床にありとも此の世にあることは何よりの幸福なれば、構へて心配すべからずと慰めはするものゝ斷腸の想に堪へざりし。…………

[illegible]
[illegible]よ[illegible]と[illegible]、[illegible]
[illegible]話し聞かせければ、[illegible]よく[illegible]
心なされ」と呼ぶ。我は愈々最後に妻の手を握りつゝ

『此上は安心して行けよ、永い間お世話になつたネ』

『との一言を耳に當てゝ逝ぜよかしと祈れり。折々水杯をなして事了りぬ。逝くものは安らけく眠り、世にあるものは殘り惜し

今更らに妻戀ひしこの春は
花も一しほさきそふものを』

此和歌が和歌としてよいか惡いか、それは私が判斷し得る所でない。併し『手向草』は一篇の詩として吾々の胸を打つ。若し床次が一個の哲人として、或は詩人として、或は善良なる良人として、或は情誼のあつき友人として一生を送る事に滿足してゐたならば、吾々は茲に眞實に心の底から尊敬するに足る人間を見出したであらう。然るに彼れは政治家になつた。そして社會は總理大臣にならぬ政治家を偉らいと思はぬ。其社會の傳統的精神に教育された彼れは總理大臣になる爲めには、人間としての他の汎べての美點を蹂躙しても厭はぬかの如く振舞ふ。其結果として茲に吾々は政治の祭壇に犧牲となつて供へられたる所の、一個の憐れむべき人間を見出すのである。

海外近事

勞農ロシヤの農業政策の惱み

一

近頃、各地からの外電は勞農ロシアの食糧難にからんで、農業の問題が眞劍にロシア當局者を惱ましてゐることを傳へてゐる。

食糧不足が果して饑饉を現出する程度であるかどうかは判明しないが食糧問題が意の如くならず、重大な危機に面してゐることだけは疑へない。誰も知るやうにロシアの最上の大藏大臣は農産物だとはいはれ、ロシアが農産物さへ豐饒であれば、これを輸出して、その金で必要なものを外國から買入れることが出來るのだが、最近の狀勢は決して順調に行つて居らない。戰前は農産物の輸出が大體六億乃至七億プード(一プードは約四貫三百目)ぐらゐあつたものだが、一九二六――二七年においては一億五千三百萬プードであり、本年四月一日を限りとする一ケ年には二千七百萬プードしかなかつた。これぐらゐではどうにもなるものではない。

これ等の原因もあつて、ロシアにおける物資の欠乏は想像以上であるらしい。最近のマンチエスター・ガーデアン紙(同紙は英國の自由主義の新聞でロシアに對しては同情的な公平さを有してゐる)には、ロシアの生活に關する讀物が載つてゐるが、その中にこんな記事がある――

『昨年の冬は特にひどかつた。衣服や工業製品は殆んど得られなかつた。今年の春から製品は田舎に送り始めたから、都會の人々は益々品物が得られなくなつた。それは英國人には迚も想像が出來ない。例へば私がハンケチを半打、ベッド・シーツ一枚、リネン及びボタン一打を欲しいとせよ。私は町から町の幾つもの店に行かねばならぬ、そして何時間も費やさねばならぬ。それでも私の欲する半分を得られゝば餘程幸運だとせねばならぬ狀態である。もしそれ何人かが爪みがきのブラッシユ、鑢、チースプーン、エナメルの茶沸かし等の如きものを得んとする大それた野望を抱かうものなら、その一物をも得ることが非常な幸福なのだ。昨冬中一ヤードのフランネルを購入することも不可能であつた。われ等は普通の洋服がどんなものだつたかを忘れてしまひそうであつた。かうした實物は時々賣られるけれども tchastniki (個人商人)が商店主と聯絡をとつてゐて、普通人の手に入らないのである。……食糧品もそうで、食糧品店の前はまるで饑饉の年のようであつた』

こんな狀態でロシアの通貨もいゝ成績を示さなかつた。公定相場は一パウンドに對し九ルーブル四十四コペックであるが、本年四月にはベルリンでは十五ルーブルで取引され、五月には二十ルーブルで取引をされるといふ狀態であつた。

二

昨年の暮、世界の問題になつたスターリンとトロツキーの衝突は、當時右翼と左翼との衝突のやうに思はれてゐた。如何にもそう見るのは不當ではなかつた。併しいよ〳〵正面の敵を追ひ出してしまふと、スターリンは勞

農政府が決してブルジョアーと妥協するものにあらざるを宣言すると同時に、思ひ切った左翼政策をとり出した。

スターリンがまづ注目したのは前に言いたやうな農產物の徵額が少ないことである。元來ロシアの農夫としては農產物を作らないことは無理のないことで、彼等は折角穀物を作つても、物資が不足して居つて日常必要とするものを與へられないからである。殊に近頃はグラーキ(Kulak)といつて、小資農が出來、これ等が穀物を藏に仕舞ひ込んで中々出さない。そこでトロツキー、ジノヴイエフ一派の幹部反對派は前からこの連中を抑壓して、穀物を吐き出させ、これから得たものを以て工業の發達を計れと主張したのだつた。

スターリンは政敵のこの智識を借りた。まづ昨年九月末を期限とする過去一ヶ年に、政府の稅制、穀物の買付けを妨害する商人及び小資本家十萬八千人の營業を停止し、その後の六ケ月間に更に七萬人に同じ命令を發したそして一方穀物を隱匿するものには、刑罰を課し、本年四月十九日には『穀物自由取引の禁止』を法令で發表した。

これについてアーサー・ランソム(Arthur Ransome)君がロシアに在つてこんな實際報告をして居る——

『かうした種々な理由から金持の農家はその穀物を賣らない、政府はこれを集めねばならぬので行政命令を以てこれを實行した。多くの富農は、中農階級の目でみても何等罪にならぬ理由で拘引された。例へば一人の農業家が二十六デシヤチン(一デシヤチンは約一町一段)と、十四の牛、五つの馬、羊五十頭を持つて居るが、この農夫が三千プードの穀物を政府或はコーペレーチヴに賣らないからといふ罪狀で收監された。かういふ罪人が何百人となく裁判所に連れて來られるといふ有樣で、富農は政府のために獄されたと感じ、かく再び戰鬪的共產主義が復歸した以上は、農村は種を蒔かないでこれに反抗せねばならぬといふ考を持たしめた』

農夫壓迫はそればかりではない。政府はその租稅を徵集するに階級的態度を明らかにした。即ち總數の三割五分に當る貧農には租稅を免除し、他の富農には高率の租稅その他の負擔を課することにし、しかも國民の一割二分しかない富農から全課稅の六割二分を取ら

らうといふのだから、その重荷は想像されやう。統計によるとロシアの農家は二千四百萬人に達するが、一年六百萬ルーブル以上の收入あるものは三百二十萬人にすぎないといはれてゐる。

三

かういふ政策が農民の反抗を招かないわけはない。農民は耕作地を放擲し、種子を植付けない態度に出た。政府が富農を敵にすることは始めからの覺悟であるけれども、併し穀物の生產が減少することはたまらない。そこで一方彈壓政策をとると同時に、他方農村を導く態度にも出て居る。

元來ロシアの革命が工業の共產主義化を重大な使命とするものであるのは申すまでもないが、それと同時に農村の社會主義化もその始めからの努力の一つであつた。これがために政府及びコーペラチヴの手によつて、トラクターや農業機械を買入れ、これを共同の使用に共せしめたが、その後このユニオンが富農の利用するところに歸したため、政府は一萬五千のこの種コーペラチヴ・ユニオンを解散して、貧農のために提供したと傳へられるほどである。併し何れにしても勞農政府の目標は農村に關する限り餘り進行せず、前に引用したランサム君の如きは

『社會主義は殆んどロシアの農業にタッチして居らない、私の考へるところによればロシア農產物の全額の二パセント以上が、共產的機關によつて寄與されて居るとは、何人も斷言し得まい』

といつてゐる。

その社會主義政策が成功して居らうが居るまいが、ロシアの繁榮如何は農業に依頼するの外はない。そこで政府は循環期に當つて出來るだけこれを奬勵するの態度に出た。第一には農業機械を田舍に送り出し、また種子も送つたが、これ等が富農の手に這入らないやうにコーペラチヴその他の團體に交附するやうにした。そしてこれを通し貧農と契約を結んで、ある一定の耕地を耕し、成績をあげればその貸與した種子に對しては五割增しぐらゐで返せばいゝことにした。

然らば何故勞農政府が富農を目の敵にするか。前に掲げたやうにロシアの農夫は約二千四百萬であるが、この內剩餘を生產しうるものは六百萬で、この人々の生產の上にこそ、

ロシアの輸出貿易も、都會の消費も、軍隊の維持も依頼して居るのである。この少數の富農に生命を托するといふことが、勞農當局としては主義上堪らないことなのである。故に貧農及び普通農を團體化して——即ち社會化してこの六百萬の富農に取つて代らうといふのがその目指すところなのである。

この目的を成功せしむるためには今のところ大體二つの案がある。一つは Kollkhoz といつて、謂はゞ共產的財產で、農夫が土地と機具を以て、これに加入するのを許すことから見て、一種の株式會社といふことが出來やう。これは政府からトラクターや金や資金を貸し與へられ、また地方銀行、コーペラチヴ、村のソヴエトと共力して行政任務に當りもするのだ。

今一つの案は Komkhoz といつて共產主義的な事業經營である。卽ち農夫が持つてゐる土地をこの團體の所有にし、一定の代價によつて前の所有者に利子を支拂ふ。ある一定の期間を經過すると、その土地は自然にその團體のものとなつてしまふ。この財團は國立銀行の援助を受ける。といふ仕組である。

四

以上はまだ案の範圍を出でないものであつて、實行期に入つてゐるとはいへない。併し繰り返し述べたやうにロシアは革命後、大きな財產を小分した結果、その生產が減少した一事は認めざるを得ない。これはルーマニアやバルチック沿岸國でも同じ現象である。この減收を取りかへすために、そして大量生產を可能ならしめるために、まづ前記の二案によつて農業の社會化を行つて大農組織としこれが發達してからこれ等を合同して好成績を得ようといふのが、その目指すところである。

これは資本と他の便宜のない小農者には頗るアトラクチヴなことには相違なく、これが成功すれば世界の農業經營にも革命を持ち來たすであらうことは明らかだ。

たゞ併し一つの障害は、これに要する資本を如何にするかである。勞農政府の農業豫算は七億一千七百萬ルーブルであつたが、本年は僅かに五千萬ルーブルにすぎないのである。これだけの金では機械の買込みその他は不可能である。更に貧農者が、それが理論上佳い案であるにしても、これに進んで投じて來るかどうか。また富農はその立場上必ずこれに反對するに違(ちが)ひない。現にソヴエート大會に

おいても農業の『合理化』運動に對し反對を示した代表者もあつたほどである。

産業の方面に惱んでゐるロシアは、産業方面においても安固なりといふことは出來ない第一に困難なのは機械類が古くなつたけれども、これを取換へることに困難を感じてゐることである。織物工場において、機械が古びて新しいものを必要とするものが七割乃至七割五分だといふことである。最近レニングラツドでボイラーを檢査したところ總數の四分の三は駄目になつて居つたといはれる。これ等の機械を造つてゐるのは、戰爭中軍事品を製造して居つた工場であるがこれでは迚も間にあはない。

これ等の窮狀を救ふものは資本の輸入である。現にソヴエート政府は、さきに米國のコロンビア大學教授セリグマン博士に依頼して米國において資本を借入れることが可能であるかどうかについて調査せしめ、それがこの頃發表されたほどである。

併しかう書いて來たからといつて、露國の國民が全部革命政府に不滿であるとか、新政府が右翼化するといふのではない。それは問題が全然別である。否、共產黨政府は當分右翼化することはあるまい。これについては私はスターリンの最近の聲明を書いてこの稿を結んでおく——

『われ等は二つの岐路に立つてゐる。われ等は革命の政策を續行し、勞農ロシアをめぐる無產階級と壓迫された國民のために戰ふか——それがためにはわれ等の前途の障害になるものは國際的資本である。或はまたわれ等は、われ等の革命的政策を放棄して國際的資本の主要に讓步するか、然らば彼等はわが社會主義國を『善良なる』ブルジヨアー共和國に變形せしめるに援助を惜まないであらう。或人はわれ等が革命的政策をいだき乍ら、西部歐洲のブルジヨアーをしてわれ等を抱擁せしめ得ると說くものがある。かゝる人々はわが黨と事を共にすることは出來ない。われ等はわれ等の存在を放棄せずして、主義の讓步をなすことは不可能なるが故に、われ等は國際的資本を攻擊せねばならぬのである。』

新刊紹介

産業文明の前途　ラスセル著　堀越菊治譯

この書は、まさしく、現代が最も必要とする、しかしながら最も缺乏してゐる、批判的、社會科學、哲學的現實考察の新運動に大膽なる一嘗試と一體現を自身供給するものだ。一杉森孝次郎氏序より(價二圓五十錢　東京牛込　早稻田大學出版部)

候蟲時鳥　水守龜之助著

隨筆、感想二十八篇を收む。隨時隨處に人生を語り・政治を論じ、或は藝術を說き、しかも飄逸洒脫にして詩趣に富む。好個の東洋的エツセイとして推奬する。(定價一圓　東京牛込矢來町六六　人文會)

世界經濟年報　ヴァルガ著　經濟批判會譯

一九二七年上半期に於ける世界の經濟及經濟政策の分析、批判で、其正確さ鋭さは我々に最も輝かしい模範を與へる。尙二七年下半期及二八年分等も近く完成の由。(價九十錢)

無產者政治敎程　青年コミンテルン編　益田豐彥・冬木圭譯

(第一部)資本主義社會の解剖。(第二部)無產者階級の鬪爭。(第三部)青年同盟論。(各册定價五十錢)

(各東京牛込神樂町二ノ十一　叢文閣)

古今洞隨筆

河上肇

今歲正月宿約を果さんがため一文を本誌に寄せし折、それは餘りの短文ゆゑ他日更に一文を草してその責を償ふべしと約束してこのかた、しきりにその約束の履行を催促されてゐるに拘らず、今日に至るもなほ之を果す能はず、已むなくテエブルに向ひ、さしあたり思ひつくまゝのことを書きつけて、形ばかりの責を塞ぐ。

私が今倚りかゝつてゐるテエブルは、近頃京大經濟學部の學生諸君から贈られたものである。それには『贈恩師河上肇先生、經濟學部同好會々員一同』と書きつけてある。私は近頃大學教授の椅子を去つたが、その代りに、學生諸君から斯かるテエブルを贈られたのである。私は悦んでこれを受け、今後私がなほ生きてゐて、何等かのものを書くかぎり、永くこれを使用しようと思つてゐる。私は從來、私宅では坐つて机に向ひ、大學の研究室では椅子してテエブルに向つてゐたのだが、大學へ出なくなつて毎日うちにばかりゐるとなると、時折テエブルが欲しくなつてゐたのである。

私は極めて保存力に乏しい人間であつて、手紙であらうと、書物であらうと、器具であらうと、差し當り不用のものは、何等か整理の機會ある毎に手離してしまつてゐる。私は京都に來て丁度二十年になるが、東京にゐたころ使つてゐた器具では、只今のところ、たゞ机一つを殘してゐるのみである。それは、私が大學を卒業して間もないころ、神田の古道具

屋で求めたもので、もとはテエブルであつたのを、私のからだにあはせて脚を切り机となしたものである。私は、この過去四分の一世紀以上も使ひなれた机を、書齋の南の窓ぎわに引き寄せ、新しく買つたテエブルを、應接間の東の窓ぎはに据ゑ、氣の向くまゝに、今では太陽を避けて涼風を求めつゝ、坐つたり椅子したりしてゐる。

大學の研究室に置いてゐた本を、自宅に持つて歸らねばならなくなつたので、その置き場所に困つた。例によつて、差し當り不用なものは、この際すべて賣り拂つてしまはうかとも考へたが、齡を取つたせいでもあらうか、多年座右に置いてゐたものと別れるのが何んとなく心細く思へたので、一生のうち再び見る氣遣もなささうな本まで、すべて自宅に持ち歸つた。私は度々藏書を賣り拂つたので、只今持つてゐるものは皆な比較的に新らしいものばかりだが、そのうちに一二の例外がある。その一は、ロッシャアの『國民經濟學大系』である。それは、私がその扉に書きつけておいたので分かるが、明治三十一年十月八日に五圓で買つたものである。私は過去のことは殆ど何も彼も忘れてゐるが、この書物を始めて手に入れた折のことは能く覺えてゐる。

明治三十一年十月といへば、私が山谷から東京へ出て、大學へ入學してから一と月目のことである。震災後はどうなつてゐるか知らぬが、當時は、お茶の水橋を渡つて眞直ぐに駿河臺をおりると、やゝ狹まくなつた路次があつた。そこを拔けると、東明館とかいふ勸工場があつたが、その附近の古本屋で私は前記のロッシャアを見つけたのである。私がそれを五圓で買うたことは、その扉に書きつけてあるから今でも分かる。なほ私はその買うたときのことを今でもよく覺えてゐる。私がその價を訊いたとき、古本屋の人が何と答へたかは忘れてゐるが、私がそれを値切ると相手がすぐそれにまけたといふこと、しかし私は現金を持ち合はせてゐなかつたので明日取りに來ると言つたこと、そしたら古本屋の人々が顏を見合せてクスと笑つたこと、等々を今でもはつきり記憶してゐる。本屋は、あまり簡單にまけたので、私が高く買ひ損つたと思つて逃げを張るのだ、と判斷したらしく思へた。私はそのときそれを非常に不愉快に感じたので、忘れつぽい私

でも。二つときのことを今もなほよく記憶してゐるのである。殊に留學した當座に於ては送られた金をいかに

私は金のしまりの全くできない人間だ。だから外國留學中は、文部省から半ケ年分の學資を一時に送つてくるのに、弱つたものだ。月々送つて貰へば大した浪費もしないが、何ケ月分かが纏まつて手許にあると、先きのことは考へずに、必要に應じて使つてしまふので、後になつて困つたのである。先きで困ることは分かつてゐても、さしあたり手許に金があれば、先きはまたどうかならうといふ風に考へて、當座の必要に費してしまふのが私の流儀だ。私は留學するときニツケルの時計を持つてゐたが、それが狂つたので時計屋へ持つて行つて見ると、修繕するよりも新しく買つた方が得であつた。それでベルリンにゐたとき、向ふ十年か保證つきの時計を買うたが、間もなく世界大戰の勃發のために、私はロンドンへ逃げ落ちた。ロンドンへ落ちついて見ると、新調の時計ははや狂ひを生じたが、向ふ十年かの保證がついてゐても。それはドイツ人の保證だから何の役にも立たぬ。ロンドンの時計屋では、これはドイツ製で機械が違ふから當地では直らないといふ。それで私は腹を立てゝ、ロンドンで有名な時計屋へ行つて、銀側の最上のものをくれろと言つて、百圓出して銀時計を買うた。いつまでもつかと訊いたら、あなたの一生はもちますと店の人が答へたが、それから後私はそれをテエブルから落したことも一二回あるに拘らず、果して少しも狂つたことはない。それはとにかく、當時私は文部省から貰つた半ケ年分の學資を甚だしく使ひ越してゐるに拘らず、百圓の時計を奮發したので、同僚のT君は私の英斷（？）に驚かれた。とにかくさういふ人間だから。私は大學生時代にも、よく金に窮したものだ。

それで先きに述べたロッシャアの經濟學も、大學を卒業する前に、はや古本屋へ賣つてしまつた。ところが大學を卒業した翌年（明治三十六年、）私は神田の淡路町に小さな家を構へてゐたが、先きに賣つたロッシャアが九段下の大きな古本屋に出てゐるのを見て、私はシューンベルヒの經濟叢書と共に買ひ取り、馬をつれてうちまで歸つた。しかるにその後明治三十八年の晩秋、——一切の教職を棄てゝ無我苑に入つたころ、——他の一切の藏書とともに、再びロッシャアを賣つ

てしまつた。ところが明治三十九年六月二十三日に、私は三たび同じ書物を古本屋で見つけて、それを買ひ戻した。そんな因緣があるのでこのロッシャアのみは今もなほ私の藏書の一つとなつてゐるのだが、近年『資本論』を繙いてゐるとこのロッシャア先生、よく馬鹿なことを言ふので、マルクスにより時折脚註のなかで、Herr Prof. Wilhelm Roscher,(敎授ヰルヘルム・ロッシャア氏)が云々とひやかされてゐるのである。——この敎授ヰルヘルム・ロッシャアの著書は、一私が經濟學を習ひ始めたときに買うたものであり、しかも買うては賣り、買うては賣りして、今ではちよつと棄てにくい因緣をもつてゐるものだがと思へば、私はおかしくなる。

ロッシャアの原論の初版は一八五四年に出てゐる。私が持つてゐるのは一八八八年刊行の第十九版本で、私はそれを刊行後十年目の一八九八年(明治三十一年)に始めて買うたのである。マルクスの『資本論』の第一版は一八六七年(慶應三年)に公けにされ、その第二版は一八七三年(明治六年)に公けにされた。そしてロシアでは、原本の第二版が發行される前年(明治五年)の春に、その第一版の『見事な』飜譯がペテルスブルクで公けにされた。『資本論』第二版へのマルクスの跋文を見ると、そのロシア譯の『初版三千部が今やすでに殆ど賣りきれとなつてゐる』と書いてある。なほペテルスブルクの『ヴェーストニック・エヴローピイ』の一八七二年(明治五年)五月號の誌上には、『資本論の方法をのみ取扱つた一論文』が現はれ、そしてマルクスをして『この筆者は、彼れがマルクスの眞の方法と呼ぶところのものを、かくも見事に叙述し、そしてこの方法に關する私自身の應用を問題とするかぎりにおいては、かくも好意的に叙述してゐるのであるが、こゝに彼れの叙述せるものは辯證的方法以外の何物であらうぞ』と言はしめてゐる。だが、それから二十何年も經つてゐる明治三十一年に、私は大學へはいつてもマルクスの學說を聽くことができなかつたのは勿論、その名前をすら聽くことができなかつた。そしてマルクスによつて夙くに子供のやうに扱はれてゐるロッシャアを一番の學者の如くに思つたのである。ロッシャアに比べると、マルクスが問題となつたのは、半世紀もおくれてゐる。マルクスの辯證法について

は、明治五年に『ヴェーストニーク・ニヴローパイ』の[illegible]、[illegible]たのである。このごろ私が大學生になるのであつたら、大學の先生は何んと言はうとも、私は[illegible]に[illegible]たに相違ないのだが、明治三十一年代にはそんなことは思ひもこめなかつた。かくて現在の私にとつて[illegible]に於て縁遠いロッシャアの原論が、最も因縁多き藏書の一つとなつてゐるのである。

私が東京にゐたころ持つてゐた書物で、いまだに殘つてゐるものが今一冊ある。それは島崎藤村氏の『若菜集』で、明治三十二年四月二十二日發行の第四版本である。すでに東京にゐたころ殆ど一冊も殘さず藏書を手離したことがあるに拘らず、この書物のみは、その難を免れて私と共に京都に移り、今もなほ私の藏書の一つとなつてゐる。それは私が大學生時代に愛誦したものである。私はそんな關係から、嘗てフランス留學の際、下宿を決めるに迷うた末、當時パリにゐられた同氏をいきなり尋ねて、同氏の下宿の向側に宿を世話して貰つたことがある。私は同氏より早く歸朝してゐたので、同氏が歸朝されたときは、京都に迎えて洛東の瓢亭で會食したこともある。そんな因みで、同氏から手紙を貰つたりなどしたことがあるが、その手紙が今度屏風に張られた。私は序にそのことを書いておかう。

私は大學生時代に日記をつけたことがあるが、それは夙くに棄てゝしまつた。それ以來私は日記といふものをつけなかつたが、一昨年の正月に、某所から立派な特製の日記帳を貰つたので、それに釣られて日記をつけ始めた。ところが謂はゆる學生事件の關係で、正月の十五日に家宅搜索を受けた。それ以來、私は再び日記を斷念した。家宅搜索を受けたとき、會計簿の提出を求められたが、私のうちでは年久しくそんなものを持つてゐないのである。要るものはどうせ要るのであり、費つた金をつけておいたからとて、その金が再び戻つてくるわけはないのだから、私は家内に會計の記帳を命じたことがない。書翰類も搜索されたが、私の著書の讀者から來た若干のものを除いては、みな詰らしいものばかりで、古いものは一つもなかつた。その筋の役人に向つては、事實ありのまゝに、私のうちでは手紙を見ると、用が濟み次第、

片端から反古籠へ棄ててゐますのでと、答へた。だが、大學の研究室には、古い手紙が數通保存してあつた。それは犯罪搜査の役に立つやうなものでも何んでもない。大概は文學者から來たもので、字が奇麗なために棄てにくかつたのである。殆ど半世紀にわたる私の友人梅田良忠君からは今日まで何百通かの手紙を貰つたことであらうが、字が亂暴な上に、消したり書き添へたりしてあるから、用が濟むと引き裂いて棄てるに躊躇せずに濟んだ。二三の文學者のは、さうは行かなかつた。文字が藝術的である上に、文章がしやれてゐた。半ばは斯かる理由のため取つておいたものに、故有島武郎氏のがあり、齋藤昌花氏のがあり、また長谷川如是閑氏のがあり、(同氏はいつもペンの走り書きだが、私の保存したものは珍らしく筆で立派に書いてあつた)、また島崎藤村氏のがあつた。

大學の研究室を片づけるときに、そんなものが一緒に出た。これは私が宅へ持つて歸つても、いづれ無くするだらうと思つたので、當日手傳ひに來てくれたY君に進呈した。その時、私がドイツ留學中に『大阪朝日』へ寄せた通信文の原稿も出た。調べて見ると、『大阪朝日』に載つたもの――後に『祖國を顧みて』に收めたもの――には、この通信文の一部分が削られてある。それを氣にして、多分私が、歸朝後原稿の返却を求めたのであらう。しかも『祖國を顧みて』を編纂するときには、そのことを忘れてゐたのであらう。これも一緒にY君に進呈した。ところが同君はそれらのものを一枚の屏風に張られた。出來上がつたものを見ると、私にとつては、なかなか面白い屏風になつてゐる。私はいつかF君からドイツ土産としてマルクスとエンゲルスの手紙を貰つたときに、こんなものは私が貰ふよりも大學へ寄附して下さいと言つて、京都大學へF君の名で寄附して貰つたが、今では自分が貰つておけば可かつたと思つてゐる。藤村氏等の手紙も立派な屏風になつたところを見ると、やはり自分で屏風にすれば可かつたと思つてゐる。



笑の文學の起原

柳田國男

一　笑の零落

今日のやうな記錄文藝の隆盛期に於ても、「笑の文學」だけはまだ別系統を持續して居る。所謂滑稽作者は人も容易に之を眞似ようとせず、自分も亦調子に乘つて外へ出て行かうとすれば大抵は失敗する。一方を「泣く文學」若くは怒る文學と名けては勿論狹きに失するであらうが、兎に角に二通りの文學には兩々相容れざる截然たる差別がある。是を自分などは偶然の結果では無く、必ず本來の性質に基くものだらうと考へて居るのである。出來るならば少しでも此問題の緒口を尋ねて見たい。それが私のをかしな野望である。

讀者に與ふべき「笑の文學」の影響又は價値、それを決定するは次の時代の心理學者の領分である。爰には單に何人にも認められる外形の特徴に付いて、先づ分堺を立てゝ見るのが順序かと思ふ。笑の文學の明かに他のものから區別せられる點は、第一には構圖即ちコムポジションの無いことである。趣向を立てゝ居ると却つてをかしく無い。單に或る出來事の叙述を、寧ろ幾分か平板に、素朴にやつてのけるといふことが技術である。從つて第二には其文學は概して短かく、又短かいほど面白い。」能の狂言すら稍長過ぎる嫌がある。即ち我々の所謂諷話形を脫することが出來ず、その小さなもの丶集合方法には昔から人が苦

心して居る。通例は一千一夜式、日本で申せば箱根の番所式とも名くべきものが用ゐられて居た。三馬の浮世床浮世風呂なども此方法で、一つの場所へ入りかはり立ちかはり、次々に目先の變つた滑稽が出現するものであるが、今は是も餘りに古臭くなつた。次にはセルバンテスの鈍機翁傳などの如く、一人の可笑人物の實歷譚、即ち巡島記式とも稱すべきものであつた。膝栗毛の新意匠は正しく是であつて、當時の社會生活の一要素をなした東海道の旅行と取合せた爲に、少なくとも五十三次の間だけは受けさせることが出來たのである。

第三の特徴は笑の文學が、記錄書物の形として世に出ることが六つかしかつたといふ點である。それが同時に又今後どうなつて行くだらうかの問題を、伴なうて居るやうに私は思ふ。本體に非常に變り易い文藝であつたといふことは言へる。同じ人を一つ話を以て二度笑はせることは困難であつた。それ故にこそ本にして文庫に置く必要を、認める者が尠なかつたのである。しかも人はいつも笑はんことを欲求する。年中新らしい「笑の文學」の出現を待つて居る。うつかりして居るとヘイ參りましたと謂つて、何が出て來るか知れたもので無いのである。故に又笑の文學だけは別途に其成長と衰微とを、觀察して居る必要もあるわけである。

日本人はどちらかと謂ふと、よく笑ふ民族である。上方あたりの人間は懇意な者の爲に笑ひ、見馴れぬ人に對しては笑はぬだけの差別を立てゝ居るが、關東以北では無邪氣な者ほど無差別に笑つて居る。小泉八雲さんの「日本の微笑」は有名な文章である。いつもにこ〳〵して居ることを愛嬌と謂ひ、心の優しい兆候と目して居る以外に、怒つた時でも憎んだ時でも、少し笑ひ過ぎるかと思ふほど我々はよく笑ふ。高笑ひや空笑ひは社交の一様式をなして居る。宴會などは何でもかでも、必ず笑を以て終始することになつて居る。つまり善意に之を解說するならば、日本人は笑の價値を知つて居る國民なのである。

ところが實際の人生には、笑ふ種はさう多くは無い。泣く種ほどにも多くは落ちこぼれて居ない。故に笑はんと欲する者は、勢ひ常に笑の安賣、又は高買をしなければならぬのである。といふことは一方から見ると、笑の文藝の殊に純化し難く、墮落し易い傾向をもつて居ることを意味する。是ほどよく笑ふ國民で居ながら、近代の笑の文學は何としても貧弱であつた。日本にもユーモアは有りますかといふ類の、失禮なことを謂つた外國人は多い。それは多くは日本語を學ばうとせず、何物でも英語に譯すことが出來ると思つて居る程度の無知から出た疑問であるが、實際又さう言はれても說明してやるだけの材

料が少しばかり不足であつた。

丸で時代のちがつた二つの笑の話が、現在は日本に併存して居る。其一つは男女の私ごとや所謂下がゝつた話、是は至つて原始的なもので、錫蘭の山に居るヴェッダとか、濠洲の砂漠に住む土人とかでも、こんな話をして聴かせれば必ず笑ふ。今一つのものは最も新らしい變化した形、所謂駄ジャレ・口合ひの類の、細いほど却つて笑ひたくなる滑稽である。勿論この新旧両極端の中間にも、色々の雑然たるをかしみはあるが、當の本人ですら意識し得ないほどに、元の形の崩れてしまつたもので、一派をなす所か、分類すらも出来ない。言はゞ掃溜めである。そんなら大昔から此方、我々は斯んな寂寞たる滑稽生活に甘んじて居たものか、但しは又歴史が永い間に斯うしたか。是が私の最初の題目である。

二　二人づれといふこと

私は思ふ。笑とは何であるかを知る為には、現在我々が何を笑ひつゝあるかを、明かにしたゞけではまだ足りない。曾て如何なるものを笑つて居たかといふ問題から始めなければならぬ。人の笑は今も昔も一様の如く思はれて居るが、笑の材料といふよりも笑はれる相手には、非常な變化があつたのであない。今日の笑の中には大昔にはなかつたことも、僅か[illegible]不断の人に説明して聞かせても、にやりとすることも出来ないこいと思ふものが幾らでもある。それは年の若い人の仲間で笑つて居る中へ、「何がをかしい」などと苦い顔をして、年寄が出て来る場面などは現在でもある。之に反して以前から永々伴はつて居るものは、若し言語の障碍さへ無かつたならば、我々も笑ふことの出来るものゝみである。つまりは一度笑つた覚えのあるものでも、暫く片付けて置くうちに又新しいものになつて戻つて来るのを、忘れて次の方面ばかり捜して居たといふ形で、それと言ふのが餘りに念を要せざる問題であつた為に、誰もが専門に之を管理しようともせず、従つて仲間の縁が絶えなんとして居るのである。

別の言葉でいふと、笑などに理由は無用、たゞ何だか知らぬがをかしいと、笑つて居さへすればそれでよいのだと思つて居るうちに、稀に愚劣極まるものを以て笑はされるやうになつたので、是は確かに人世の進歩ではないと思ふ。果してよく考へてから笑の種を求めたのでは、をかしみが十分でないかどうか、試みに少しばかり前代の笑を観察して見たらよからうと思ふ。そこで諸君のよく知つて居る滑稽文學、殊に形式の新しさを以て称せられた、東海道中膝栗毛を出発點として、その一つ

先へ入つて行かうとするのである。私が改めて一九の書を讀んで心付いたのは、一つには笑の種の案外に涸渇し易く、直ぐに單調な繰返しに陷るといふことである。即ちどうしても在來の小話型から、まだ遠くへは進展して居なかつたといふことである。實際能の狂言には限らず、今日尙笑はれて居る落語家の話でも、强ひて或る長さを得ようとすると、一番に困るのは繋ぎであり枕である。やはりをかしい點はちよいとした瞬間の言葉なり擧動なりで、それが長篇の滑稽物の如き感じを與へるのは、前の可笑味の消えてしまはぬうちに、次のそれへ行かうとして元氣よく、たゞ急いで居るだけである。それから第二には如何にも種がないこと。是ほど數ある笑話の中でも、實驗乃至は寫生に基いたものが、如何にも少ないといふことが感ぜられる。膝栗毛などの可笑味も單に演出法、書物でいふならば叙述の技工といふが如き其場きりのもののみで、しかも畫贊のやうな一首の狂歌を附けることも、決して十返舍の創意ではなかつた。即ち事柄よりも其人が笑ふべきであつたといふ昔からの約束の外へ、一歩たりとも出ては居ないのである。

彌次郎といふ名前すらも既に傳統があつた。彌次郎は即ち最も有り觸れた輕輩の名として、夙くから笑話の主人公を以て目せられて居た。七偏人八笑人の右次郎とか左次郎とかいふのも、亦頓狂者に備はつた名と謂つてよろしい。北利屋喜多八も無論意外な發明では無い。笑つて貰はうと思へば以前から、大抵此類の名を付けなければならなかつたのである。それよりも尙一段と顯著なる約束は、二人連れといふことであつた。即ち一方がしくぢる時には他の一方は批評家となり、若くは少し惡意のある觀察者の地位に立つこと、是は古今東西を一貫した一種笑話の格調、フオルミユラとも名くべきものである。中田千畝君の研究も近い頃出たが、日本では「和尙と小僧」といへば、話を聽かぬうちからもう子供等は笑つて居る。醒睡笑などには大兒と小ちごの話になつて居る。西洋にも僧は大抵之を馬鹿にする相棒の若僧を連れて居るが、普通には親方と下職との話として語られて居る。それが一方が正直で末には神に惠まれる花咲爺の類、今一つ皮肉なのは、一人の非常に惡賢こく又は横着な者が、いつも旨いことばかりして相手を苦しめる。といふ類の話にすらも、曾ては腹をかゝへた時代があつた。つまりはドン・キホテのサンチヨ・パンザであり、乃至は我々の國の春の物吉に、才藏と名のつて萬歳の跡に跟いて居る小男などと同じく、笑を傳へ興味を濃厚ならしめる爲に、見物と主役との中間に立つて註釋をする者が必要であつた名殘に他ならぬ。

ところが今一つ更に奇妙なる一致は、喜多は二人椋助で謂へ

に小話に富し、警句を弄して自分ばかり好い氣になる此輩であるにも拘らず、時々は己も亦馬鹿を盡して、今度は彌次さんに敎誨せられて居る。六つかしい文藝批評家の語を借りて言ふならば、相容れざる二つの人格を具へて居る。これに殆ど有り得べからざる矛盾のやうであるが、それにも亦全國的の、古くからの類例があつたのである。

三　敵を笑ふ術

大分縣に成長した人ならば、名を聽いたのみで如何にもと合點せられることと思ふが、先年來自分たちの集めて居る笑話の一團を、豐後では野津市の吉右衞門といふ人の逸話として傳承して居る。あの地方では實在の人物と信じて居る者が少なくないけれども、豐前に來ればそれが中津の吉吾であり、城井の山村などでも吉吾又は吉五郎を以て知られ、其人の傳記の如くもてはやされる物語が、双方三方に共通であつた。のみならず遠く離れた奧州の一部にも、又京都近くの或田舍でも、キチといふ滑稽人が居て、澤山の類似の話を遺して居る。何故に斯くの如く到る處に彼の名が吉であるかは、興味多き問題であるが今は之に觸れない。兎に角に諸國の「きちよむ話」に附いてまはる一事は、彼が狡猾で能く人を騙するに拘らず、自身も亦飛んでも無い馬鹿な事をして、彼等は[illegible]に、何等一貫した目的は無くて生きて居たかとさへ考へられることである。例を以て說明するならば、吉は時として[illegible]を欺いて貨物を奪ひ、若くは巧妙なる計畫を以て尻の來ないやうな利得をする。或日は軒先に出て居て町へ買物に行く者に、片端から馬の綱を買つて來てくれとあつらへる。町では直ぐに賣切れて馬の綱の相場の高くなつて居る處へ、今度は自分の作つて置いた澤山の馬の綱を持出して、うんと金を儲けて還つて來る。それから又薪を負うて町へ出る者を喚留めて、枝の方を前にてし裏庭まで家の中を通ばせ、それから安い値を附けて破談にてし又持つて還らせる。さうすると家中に柴の小枝がこぼれ落ちて、只で幾日かの燃料が集められた。ところが斯んなずるい事を考へて居るかと思ふと、一方では又御城下へ出て、素麵を食べて非常に旨かつた。どうぞしてうちの村人にも食はせたいと思つて、間違へて元結を買つて還つて、煮て食はせたけれども何分にも堅くて食へない。これは食ひ様が悪いからだと、わざ〳〵皆に草鞋をはかせ、尻を端折つて上り口に腰を掛けて、食べさせて見たがやつぱりくしや〳〵して食へなかつたといふ類の話、平たくいふならば馬鹿な話と馬鹿にした話とを、一人にして兼ね行つたといふのである。そんな事の不可能なの

は最初から判つて居る。それが如何なる理由あつて、斯うして喜多八や吉五郎の徒に付てのみ、その矛盾が認められるかといふと、是は我々の大岡越前守に、あらゆる名裁判が歸屬した如く、若くは飄逸なる旅の探撿が何でもかでも水戸黄門に托せられた如く、もつと古い所では佛本生譚が無數の異類說話を以て、悉く佛祖の前世の出來事なりと說かうとしたと同樣に、笑話にも亦中古の結集があつて、それには殊に中心の一人物を假設して、すべての笑話を之に托する習はしがあつたことを、意味するものかと思ふ。

曾て自分は此事實を以て、苔が古い石碑の表に茂り花咲くに譬へて見たことがある。天然と言はんよりも寧ろ年代の力であるが、人は無意識に又は半ば意識して、斯くの如く空間に浮遊するものを、來て附着して此石と共に與に、永世に傳はることを得せしめたのである。しかも其植物の目に見えぬ胞子の、千差萬別であつたと同じく、說話の根原と個々の因子とには、分類整頓を必要とするそれぞれの由來と成長階段があつたことは疑が無いのである。

大體から云ふならば、我々には常に笑の必要があつて、終始笑はるべきもの、英語に所謂 laughing stock を搜索して居たのである。それが以前の世の中では決して之を見出すに苦しまなかつた。先づ第一に敵といふものは笑ふに足る人間であつた。彼等が弱くして負けて遁げる場合は勿論、時には案外手強くして、しかも結局は謀計を以て之を欺き得た場合、殊に彼等が驚き又は困つて屈伏せざるを得なかつたといふ際などは、最も快く聲を揃へて高笑ひすることが出來た。或は又味方の勇氣を励ますべく、以前のさういふ種類の印象を保存し、時には稍誇張して之を想像上に繰返し、入用の度毎に大に笑つたこともあつた。それが古くからの多くの笑話の成立であつたと思ふ。負けたといふ敵は必ずしも人間たることを要せぬ。寧ろ和睦の望まれない化け物や狐狸、悪い魔術師どもを安々と打滅した物語などは、單なる一人の功名談以上に、愉快なる猛者の教育法であつた。多くの青年等をして自然の怖畏を抑制し、群の爲に常に奮鬪せしめる爲には、斯うして勝つて笑ふ時の歡喜と共に、獨り笑はれる時の痛苦をも學ばしめる必要があつた。腕力の差等は何人にも目算が出來た故に、智謀術計は案外の大昔から、我々の大切な武器であつた。乃ち力の弱く勇氣の足らぬ者が笑はれたのみならず、更に又暗愚にして屢々欺かるゝ者が、以前は同情も無く盛んに笑はれ、同時に能く他人をして笑はるゝ地位に陷らしめ得た者が、無條件に賞賛せられて居た所以である。

四　をどけ役

斯くの如くにして人を笑ふといふことの面白さは、夙に我々の學び且つ實驗する所であつた。笑は寧ろ人類初期の割據時代に於て、自由なる發達を見たらしいのである。然るに社會が擴大し交通が必要となり、平和が是非とも成長しなければならぬことになると、到底四面に敵を控へて居た時代のやうに、矢鱈に笑つて遣るわけには行かなくなつた。しかも尙集まつて大に笑ふといふ快樂は、忘れ棄てゝしまふには餘りに大なる印象であつた。爰に於てか一方には昔々と稱して、現在とは交渉の無い想像上の笑を、時々の入用の爲に大切に貯へたと同時に、他の一方には富の力ある者は、一定の給祿を以て進んで笑はせて呉れる者を傭ひ抱へて置くことにもなつた。それが日本には限らず、東西大小の諸民族の中に、自嘲自笑の文學といふものゝ、次第に流行するに至つた端緒である。

これが制度として我々の間に現れたのは、室町幕府以後のことであつた。大名の家々には必ず一人以上の「咄の者」、又は「咄の衆」といふ臣下が居た。足利家では之を同朋と名け、普通沙彌の形をして何阿彌などと呼ばるゝ故に、又坊主とも謂つて居た。同朋とは御相手の意味で、從つて之を御伽の衆とも稱へた。不完全な自働やなこん、此場に當たくるほどとなまりの て居るが、トヽといふのは元起きてゐることであるから、本來は彼等の如く早く語る者の領分でなかつたことも明かである。其御伽の衆の多くの笑は此役の中では、曾呂利新左衛門たゞ一人、古來最も有名ではあるが、同じ名を持つ蜷川の新左衛門、若くは其友人たる一休和尚でさへも、既に笑話を以て後世に傳はつて居るのを見れば、亦是れ一箇の最後の吉右衛門に過ぎず、それが實在の頃の一つの人生と、どれ迄の關係交渉を持つて居たかは、かの膝栗毛の栃面屋彌次郎兵衛の逸事と稱するものが、どれだけ十返舍一九其人の實歴であつたかといふことゝ、結局は同じ問題に歸着するのである。

曾呂利は勿論たつた一人の俊傑ではなかつた。沼の藤六は織田信長の愛顧を得て、屡々岐阜安土に往來し、一時湖南一帶の滑稽を支配した姿があつた。藤六加六と二人の名を連稱して居るのは、恐らくは彼も亦一人の喜多八を伴なうて居たからであらう。ウソツキ彌次郎も亦高名なる咄の者であつた。曾て佐渡の島で僞つて土中入定をした上人が、逃げて越後に渡つて測らずも昔の下男に出逢つた。露顯是非もなく挨拶にはたと困り、おゝ娑婆で見た彌次郎かと謂つたといふ笑話が、諺となつて今の世まで遺つて居る。ウソツキ彌次郎と此話をした彌次郎

とは別人かも知らぬが、兎に角に彌次郎が下人の通稱であつたこと、猶後世の京の久三、江戸の權助、薩州の太郎などの如く、又猿舞はしや門附けの與次郎なども似たものであつた。即ち斯ういふ輕輩に祿を給し出入を許して、退屈な夜分や雨の日に、話の相手をさせて居た痕跡であつて、それが一方には浮世狂ひと手を組むと、扇子で我が頭を叩く太鼓持ちともなれば、他の一方にはじみな民衆を御客にする、所謂話し家にもなつて來たのである。

世が改まつて大名は外へ出ても遊び、そんな專門の「をどけ役」は置かなくなつたが、其の爲に彼等は無用にはならなかつた。大名が抱へなくなれば町が抱へる。淋しい村に住む人々は、又小規模なる兼業の滑稽人を愛護して居つた。地方によつて其名はさま／＼であつたが、それが吉四六であり彦市であり、又自分等の今も忘れ得ない彦七孫八であつたことは確かである。自分等の郷里の中國東部では、彦七は能く人をかつぎ、孫八は能く難題を負ひかけた。無い物くれの孫八といへば、童兒が嘲笑を感ずるほど高名な逸話の主であつた。つまりは彼等の間にも段々の分業と、修練改良とが行はれて居たので、土地が少なくともさういふ一人の生存を、支へて置くべき必要は依然として續いたのみか、都府が追々に繁昌すれば、京では露の五郎兵衛の輕口噺が咄の類、江戸で鹿の武左衛門の鹿の卷筆の如く、之を文學として梓に刻み、田舎の隅々までも持ち運ぶことになつたが、しかもそれが突如として素地に發芽したもので無いことは、其の一つ／＼の笑話の傳統を辿つて見れば直ぐにわかる。要するに新味の技藝家に屬するものは、換骨奪胎などと呼ばるゝ演出方法の變化、時代の趣味と結び付けようとした努力のみで、根原は本物の頓馬を衆と共に笑ふか、若くは自ら作り馬鹿の役に甘んじて、笑はれてもよいやうな失策を語るか、この二種類の中に蹈跡して、古來の粉本を選擇しようとしたに過ぎなかつたのである。

つまりは一種の由緒ある職人であつた者が、記錄の風習が始まつて、偶然に其名を留めたので、文化の中心地に於ては、實は夙くから其例に乏しくなかつた。昔華山院の法皇に御仕へ申したといふ銀細工延正、延喜の帝の御枕を持つて逃げたといふ太勢法師の類は、明かに上代の曾呂利であつた。平の仲文字は平仲、曾禰の好忠字を曾丹といふ人たちの如く、殆ど笑ふべき逸話ばかりを此世に殘す爲に上流の間に交つて居たかとも思はれる者も、恐らくは單に自嘲の癖ある文人と言はんよりも、寧ろ之を以て一つの生活方法として居たと見る方が當つて居る。即ち社會が進んで無害なる笑の種を捜し始めた時代は古

く、それが文字となつて形を留めたのだ、ずつと前からあつた
といふのみである。

五　ピエロの歎き

しかも笑の文藝の最初の起りは、必ずしも斯様な偶然の記録からではなかつた。所謂興言利口の肝要は言葉であつて、それを新らしくも又上品に改良しようとすれば、人が之に對して最も注意深く且つ眞面目で居る機會を伺はねばならなかつた。歌と物語とが全く手を別つてしまはぬ時代から、もう滑稽は社會教育の一つの要素であつて、其感動を強め又は保存する爲にも、やはり記憶し易い「あや言葉」を必要としたのである。それが一轉して自ら嘲り笑を獻ずる犠牲者の出る世の中になつても、それ等の作り馬鹿からは尚一定の才藻が期待せられて居た。彌次と喜多とがあれ程の低能ぶりを發揮しつゝも、尚本物の一九と同じ位の狂歌を詠じて居るのは、年久しい由來のあることである。即ち彌次さん斯うもあらうかの一言は、狂言の太郎冠者のかうもござりましようか。乃至は中代の御伽草子にかくばかり、かくぞ遊ばしけるといふ様式の後を承けたもので、歌が無くては結局話にならなかつたからである。狂歌も近年の大倉鶴彦翁などとなると、餘りにも獨立した一種の文藝になり切つたものだが、まだ江戸も天明頃へかけたあたりまでには、むかしから狂歌を詠むといふ昔風をのこめて居る。少なくとも今日の話し家どもは、さういふ風に殊なお逸話を傳へようとして居る。卜養にせよ其以前の雄長老にせよ、何れも狂歌は記念碑の如きもので、人物の可笑味は偶然として其外に在つた。玄旨法師といふが如き敷島の道の達人ですら、狂歌を透して見た其姿はバッフーンであつた。さうして又古來の優良たる道化役者の如く、其秀句を以て適切に猛き武士の心を和げて居たのである。教訓の道歌の段々と理に落ちて、「あれも人の子樽拾ひ」といふが如き、生眞面目な繰言になつてしまふ以前、狂歌を以て御手討になるべき御近習の命を救つたといふ類の話は多かつた。粗相に硯箱を足で踏み潰して置きながら、ふみかくとても何の耻かはと詠んだなどといふのは、歌こそは拙いが話としては中々面白い。西行法師を有名ならしめた歌としては、少しも感心しない「ワッパトチの花」とか、さては野糞が跳ねたとか還つたとかいふ歌も、さういふ事を哄笑するやうな階級の間まで、昔話が三十一文字を伴に連れて、あるいて居たといふ歴史と見れば意味がある。曾呂利新左衛門の「けふもごとかいあすもごとかい」といふ逸話の如きも、言はゞ曾呂利の地位を説明する一資料としては珍重すべきである。

和歌に腰折れといふ批評の意味が、少しばかり昔は今と違つて居た。即ち下手は下手でも目的のある下手、とぼけて笑はせて落ちを取らうといふ趣旨で、わざと様式を破り用語を愼まず、自ら柿の本の正統に對して、栗の本と名乗る程の勇敢さであつた。之を歌道の上から無心と名けたのは、多分は萬葉期の無所著歌の傳統を認めたもので、連歌などの集會は却つて有心一式のものよりは、屢々栗の本の無心に腰を折らせた方が興味が濃かであつた。後鳥羽院上皇は畏れ多いことだが、あの時代の文化にアンニュイを感じて居られた英主であつた。即ち笑の新らしい供給を切に求めたまふ君であつた。明月記などを讀んで見ると、水無瀬の行宮の朝夕は稍活潑々地に過ぎて居た。幽靜なる定家卿の有心意識が、終に自己をして一箇の平仲竹丹たらしめ得なかつた苦悶が、あの批判がましい評辭の中からもよく現れるのである。

是などが滑稽文學の別系統、所謂滄浪の水と汨羅の淵との、終に合流することを得ざる運命を暗示するものであらうと思ふ。つまりは俳諧は一種の世渡り法といふ以上に、苦しい人世觀照の態度の差であつた。それが外面から考察せられ、若くは双方からの折合を求めようと試みると、爰に諧調ないピエロの歎きがある。道化役者の涙が兒女子の爲の映畫館に上るに至つては、もう此道も又新たなる生面を切開かなければならぬ。滑世を三分五厘などと茶にしてかゝつて居る連中は、實は笑ふ人よりも遙かに賢く又横着なのであつた。それが笑はれても一生は倦せると思ふまでには、有心の側から見れば辛苦修養、少なくとも人生の改作が行はれたに相違ない。其技術は今や既に埋もれ、徒らに凡庸模倣の徒の名聞と身過ぎにまで零落したのである。江戸の遊び人や京のスッパ、今一つ前の代の隱者といふ生活まで、同じ系統を引いたものゝ如く、折口君などは推定して居るが、私はまださう斷言する程の材料を集めて居ない。兎に角に付ては捕虜や奴隷などを強聘して、この屈辱多き作務に當らせて居た習ひが、いつと無く悟り切つた智慧者どもの自ら甘んじて、我と其境涯に入つて來る風と代つたことだけは、彼等の文藝の進展の跡に由つても、之を想像することが出來るのである。江戸では彰義隊の生殘者として、明治まで渡世をして居た松の家露八などが、さういふ太鼓持ちの最後の雛形であつた。其角や一蝶などは時代がずつと古いけれども、幸ひに作品を世に遺した故に人柄が略窺はれる。座頭にも連歌師にも、後には平賀源内の如き市井の學者の中にも、榮達本位の我々の人生計畫からは、何としても解説し得ない藝術の取引があつた。それがどの程度にまで初期の民族意識と交渉のあるものか。即

た[illegible]

に[illegible]あの[illegible]あるが如く、[illegible]成分子であつたか。或は又館に後者であつたものか、追々に疏外せられて統一圏内から逃出したものか。それを明らかにする爲にも我々の笑話の成長を、今少しく綿密に調べて見る必要があらうと思ふのである。

六　くなたぶれ

所謂狂言綺語の技巧が認められ賞讃せられると共に、次第に我々は正眞の烏滸の者では此大役が勤めきれぬことを知り、寧ろ聰明なる者の最も上手に、わざと裝うて馬鹿を演ずることを望むやうになつたが、そんな事が人間の作爲で出來るものとも思はなかつた時代は、隨分と永い間續いたらしいのである。敬とか禮とかいふ行爲に内外表裏が無かつた如く、狂へば物狂ひといひ、「たわこと」を言へば即ち「たわけ」であると、我々の祖先は考へて居た。さうしてワザヲギといふものゝ範圍は、實は本人にも明白には意識しなかつたのである。吃りの眞似をすれば吃りになるといひ、阿呆の眞似をする阿呆といふ諺もあつた。求めてなれるものゝやうにも心得て居た人があるらしい。加賀の百萬石を繋いだといふ前田利常の大鼻毛は、或はどこ迄も[illegible]

[illegible]」は、[illegible]たと傳へられる。支那でも佯狂して奴と爲るなどといふことがあるが、之を單なる保身の法と解することはむつかしい。恐らくは佛道で發心と云ひ又は遁世とも名けた途が以前から、斯ういふ一種の人生觀の變化が、我々の社會に異常心理の者を、供給する誘因はあつたのであらう。

其誘因の何物であつたかは、自分の知る限り今日迄の文化史ではまだ考へて見ようとした人がなかつた。日本の民間習俗を親切に觀察する人だけが、或は將來發見し得るであらうと思ふ一事は、笑はしむる職分に今一つ以前の、大切な用途があつたらしいことである。愚か者に對する我々の態度は、必ずしも常に殘忍では無かつた。北國の或海岸には白痴を非常に大事にする村があつた。白痴は死んで後に必ず鯨に生れ變り、流れ寄つて土地を富ませてくれると信じて、之を悦ばせて置くことを心掛けたのである。それよりも尚一層愚かなるが故に愛せられて居たのは幼兒であつた。親以外の者が小さい子の片言、若くは頓狂なる言動に笑ひ興じ、それが成人の常識と甚だしく懸隔して居る點に、殊に深い意味を持たせて見たことは、やがては此國の固有宗教に於ける至つて重要なる地位を、彼等に付與すること

とにした原因かと思ふ。村々の社の祭、若くは恒例臨時の家々の儀式には、小兒に往々にして神を代表させられて居たのである。それを彼等が特に愚かであり、能く人を笑はせた故と解することは、無論澤山の證據が無くては斷言し得ないことであるが、自分は少なくともさう想像してもよい二三の理由を持つて居る。神社に從屬した小區域の地名に、手倉田といふものが諸國に存する。羽後雄物川の岸には言語道斷と文字に書いて、タクラダといふ村さへあつた。タクラダ・タクラは多くの地方の方言で愚か者を意味し、ノンダクレとかヘツタクレとかいふ普通語もそれから出て居る。或は又馬鹿をオタカラモノと呼ぶ土地もある。手倉田・田倉田は即ち彼等に田を給し、神役を勤めさせた名殘かと思はれる。三河の山村の花祭の囃し詞に、笛に合せて一同がターフレタフレと囃すのも、やはり一つの語の變化であつて、所謂クナタフレが神に仕へ、其愚かさを役に立てたこと、今の馬鹿囃しの火男などと、本の趣旨を同じくする者かと思ふ。童子を意味するワラハといふ語が、一方にはワラハヤミと謂つて物氣の病を謂ひ、他の一方には笑の日本語と語原を共通にして居るのも、斯ういふ初期の信仰に由つて、稍說明がし易くなるやうである。

七　笑の種の缺乏

文學の形を具へた日本近代の笑話、例へば醒睡笑や「きのふはけふの物語」等に於て、笑はれる客體が何々であるかを見て行くと、時代々々でそれは大よそ定まつたものがある。新らしいものから順々に擧げるならば、先づ第一に慾深物惜み、是は數も少なく敵としても怖ろしくないから笑ひ易い。次には知つたか振と早合點、無筆に物知らず、此等は文書を弄ぶ世になつての發生であることが想像せられる。其次には愚か聟、愚か者の親子、更に又愚か村ともいふべきものが、假說せられて笑はれた。江戶の落語などで權助とか太吾作とか名けて、無暗に農人を愚にしたのは、一つには此技藝が都市のものであつたからだが、又一つには當り障りのない遠方に、被害者を留めて置かうとした以前の習ひを襲うたものであつた。其から尙溯ると且九郎田九郎の話の如く、欺される人の智慧無しが笑はれ、更に子供と子供らしさ、女と女々しさが、其以前からの笑の種であつて、壯年男子としては此二者に稍々近い者、即ち臆病惰弱と思慮分別の不足が笑はれて居た。

此等の實例を見渡して誰にでも心付くのは、何れも笑はれる者が人だつたといふことである。人又は之と對等同視すべき者

お目出度となつて、「宗の二生一」といふ事は起るのであつた。文獻な多くの學者が、近頃笑を研究したけれども、何故か此の肝要なる一點に深く注意をしなかつた。併し何にしても笑は一つの攻擊方法である。人を相手とした或積極的の行爲（手は使はぬが）である。寧ろ追擊方法と名けた方が當つて居るかも知れぬ。弱くて既に不利な地位に在る者に働きかけるもので、言はゞ勝ちかゝつた者の特權である。非常に發達したものゝやうに考へられる江戸人の喧嘩にも、此笑が巧みに利用せられて居た。俗にタンカを切るなどと稱して、奇拔なる警句を平素から貯へて置いて、打合ひの代りに頻りに之を連發する。すると見物の第三者が笑ひもすれば、又笑ふであらうといふ推理が、ひどく其目標となつた相手をひるませる。へらず口は要するに笑の威脈の競走の如きものであつた。昔の關の聲（とき）や今日の彌次馬の掛聲なども、大よそ類を同じくした笑の變形であらうと思ふ。

兎に角に笑はれるといふことは被害であり、精神上の損傷であつた。未開人が人の笑に敏感であることは、夙く旅行者たちの觀測する所であつたが、之と同じことは我々の愛兒にもある。多くの人に又は大きな聲で笑はれると、意味を知らずにも泣出す赤ん坊は多い。文明人などといふ者の中にも、群と共に笑はれないことは不愉快でもめしいのに、往々にして笑ふといふことをする。殊に日本では人が笑ふ自分が笑はれるやうなことを痛感する人が多かつた。三百年前の借錢の證文に、萬が一返濟滯るに於ては、「人中にて御笑ひ下さるべく候」と書いた者があつたといふことは、有名な話になつて居るが、是は或る一二の最も律義なる者だけでは無く、實際この笑はれまいとする努力が、今日の道義律を打立て、又多くの窮屈なる慣習法を作つて居るのである。

しかも違犯者の制裁を肉體の痛苦のみに限るやうになつて、社會の統一は亂れざるを得なかつた。日本人はまだ〳〵此の拘束の多分を承認しては居るが、今日のやうに斯う自笑賓笑の風が盛んになつては、笑の社會的意義も勢ひ一變せざるを得ないのである。

笑の職業化は勿論或人々の想像する如く、近世式生活の産物では決して無い。小兒が色々の心理階段を經て成長して行く如く、是も亦人の歴史として兼て備はり、一度は通つて來なければならぬ經路であつたかも知れぬ。我々が隠れ潜みぶる〳〵とふるへて居る境遇を脱して、追々に勝つて笑ひ得る機會を増して來たのは愉快だが、それが今一つ進むと敵が減じ、味方とした方がよいものを多く見つけ、笑はすに附合ふ必要が内にも周

間にも起つて來る。笑つた爲の怨みと祟りが次々に經驗せられる。そこで他村から來た孤立の聟を笑つたり、奥山家の三軒屋の爺や姥を笑つたりするが、市が立つ御時世になるとそれも種が乏しく、確かに怒らぬ本當のタクラを笑ふか、それで無ければ篤志出願者の「笑はれてくれ手」を、優遇しつゝ少しづつ笑つたので、終には町の暮しに水まで金を拂ふのと同じく、笑は金持の金のかゝる贅澤であるか、然らざれば好んで敵を作り憤りを買ふ無謀なる冒險事業か、さうで無ければ何人も被術を感じない樣な、ゲスびたる惡謔や、愚劣た駄じやれに墮落せざるを得なかつたのである。

八　神に笑はれた事

さういふ際に當つて一盃の酒、もしくは若々しい男女の快い高笑ひを、こよない報酬と滿足して、人には如何樣にも笑はせて、狂愚を以て自ら甘んずる老翁が、多くの村に居てくれたといふことは、幸福なる偶然であつた。それが一方には曾呂利が太閤の耳を嘗めたといふ如く、稀に貴人に近づいて優越の地位を占める者があつた爲に、或は少數天才の新たに發明した技藝の如く、考へて居る人があるかも知れぬが、大名有力者の之を利用したのは後の事であつても、少なくとも笑はれる職務だけは、ずつと古くから其存在を認められるのである。

但し笑ひ手は今日のやうに人間を主とせず、神樣に笑はれるといふことが最初の目的であつた。昔の日本人は勇猛不屈であつたが、神に對してのみは一目を置き、しかも神によつては氣が荒く、斟酌も無く罰したまふ神があつた。十分なる歸伏の意を表し、怒をなだめ御機嫌を取る爲には、人として一番辛抱のし易いのは「笑つて貰ふ」ことであつた。支那人の神佛を拜する所を見るに、文字通り廣庭に叩頭する者が多い。信心深い老女などには額の上に其跡の瘢痕をなして居る者さへある。回教徒の中にも人間同士の最上級の拜禮より、尚一段と鄭重なる御禮を、日に何度とも無く行ふ者がある。佛教でも耶蘇教でも作法は勿論此通りで、もし人間界の御辭儀に階段があるならば、神に對しては必ず其中の一番鄭いものを適用したに相違ないが、禮式といふものゝまだ十分に發達せぬ時代又は社會では、別に何等かの表現方法を、採用する必要が多分はあつたのである。

さういふ昔風は幽かながらも、まだ民衆の生活の中に殘つて居る。例へば閻魔樣の木像を見れば、こわいながらも笑つて居る。又は笑はうとして居る。あのエニグマチツクな機嫌の測りにくい容貌は、人の畏伏を強ひる爲に必要を認められたものと思ふ。神を代表した色々の舞の面に、或るものは甚だ氣六つか

しく、[illegible]以下

我々が幼稚の[illegible]に[illegible]するごく、[illegible]して一身一変した者

殘であることは察せられるが、それ[illegible]どうすればよいか

を、暗示して居ると迄は考へた人が無かつた。併し能の狂言の「大黒」などの、到底七福神の一つとは思はれぬ様な顔をして、しかも笑ふ聲の突如として甚だ怖ろしいのを見ても、神を笑はしむることの如何に大切であつたかゞ窺れる。七福神の中でも毘沙門天などは、今以て何ともいへぬ様なきつい顔をして御座る。即ち愛嬌は却つて福神に奉仕する者の側に、是非とも具はつて居なければならなかつたのである。

天狗笑ひと稱して深山の奥などで、不意に天地も響くやうな高笑ひの聲を聽くことがある。さうすると人は「取つて食はう」と言はれた時よりも、尙一層怖れて縮み上つてしまふ。これを單純に我々人類に對する妖怪の嘲り又は輕蔑と解するのは普通であるが、一歩を進めてそれが何故に輕蔑になり、それを又何故に怖れをのゝかねばならぬかを考へて見ると、曾て斯うして笑はれることに由つて、よく〳〵降伏を自認して居た記念があるからであつた。雷を最も怖ろしい神と想像して居たのも、恐らくは亦あの聲を、天の神の笑と解して居た結果であらう。日本の神話にも雷と神子誕生の奇瑞とが結び付けられて居[illegible]

の笑ひ聲を以てして居る。[illegible]もまだ無いけれども、雷は[illegible]つたといふ[illegible]な布し、それと同時に人間で笑つた者は雷神によつて罰せられて居る。ペリーの東印度諸島文化移動誌を見ると、ニアスの島の昔話では、犬と猫とに衣物を着せて屋根の上で踊らせたら、雷神が笑つて天から墮ちたといふ話があり、一方セレベス島の或部落には猿と猫との人間の衣服で踊るのを見て笑つた爲に、忽ち雷に撃たれて石になつたといふ口碑が殘つて居る。日本でも烏の口眞似をすれば口脇がただれ、馬の屁を笑ふと人中で恥をかくなどといふ諺があつて、特に動物を笑つてはならぬと戒められて居たのは、即ち神獸の異類の形を借りて出現することを、信じて居た時代からの言ひ傳へであるらしい。南太平洋のどこかの島で、大昔蛙が此世の水を飲盡して一滴も殘さなかつたのを、多くの智慧者が色々の趣向を構へて、笑はせに行つた昔話があるといふ。口を結んで苦い顔をして居た大蛙が、たうとう堪へきれずに口を開いて笑ふと、忽ち水が戻つて人間の大旱魃を免れたといふのは、やはり亦雷神哄笑の系統に屬する神話であつて、しかも一方には我々の天の岩屋戸と、要素に於て共通の點があるのである。

九　俳諧と俳優

神が此世の中の何物よりも遙かに怖ろしく、如何なる場合にも之を敵として、寸時も安穏に在り得ないことを信じてから、人は甘んじて神の笑を受け、又にはわざわざ笑はれる様な行為をして、且つは御機嫌を取結び、且つは自分たちの笑はれても一言なき者共なることを承認しようとした。尤も神々に取つて何が笑ふべきものなるかを知ることは、必ずしも容易では無いわけである。例へば諸國の山奥の村に於ては、山の神はヲコゼといふ魚を悦び、之を見れば御笑ひなさるゝと信じて居た。さうすると熊野の或社などでは、笑祭と稱して氏子の重立つた者が神殿に居並び、其ヲコゼを見て大笑ひをする式があつた。其式を今少し詳しく述べると、當日は首席の者懐中に此魚を忍ばせて出ると、一同が之に向つてヲコゼを拜見したいといふ。いや皆の衆が御笑ひなさるから見せますまい。必ず笑ひませぬ故御見せなされと。押問答の末にそつと片方の袖口から、頭ばかりを覗かせて見せると、早一同が高笑ひをする。あはてゝ引込めてそれだから見せまいと申したにといふと、いや今度こそは笑ひませぬ、ひらに御出しあれと懇望し、又ちよいと出すと又笑ふ。こんな事を繰返した末にとう〳〵其魚を丸ごと出して、轉げるやうに笑つてそれで祭が目出たく濟むのである。こんな人間には格別をかしくも無さゝうな事でも、神が笑ひたまふと知れば之を以て笑祭としたのであつた。併し全體としては人が考へても笑ひたくなるやうな事、例へば無細工で下品で擧動に失策が多く、粗忽で早合點で間違へた事を言ふといふ類の、氣の利かぬ愚か者を神も人と同じく、御笑ひなさるものと解して特に之を進め、仲間が見てさへ此通りをかしいから、神ならばさぞと無邪氣なる推量をした。それが神の祭に必ず狂言あり、田樂にはヲカシを伴ひ、タクラは神の前に出て舞ひ狂つた最初の動機であつたと思ふ。猿樂のあと七日面白といふ諺もある。その面白いといふ語にも傳統があつて、神代卷中の最も大切な一段には、天鈿女は胸乳を露に垂れて、桶の上に立つて舞つたとあり、火闌降命の後裔は、永く水に溺れんとして助けられた光景を演じて、服從のしるしとしたと傳へられる。其他神話の中に既に現れて居る「笑の文學」は幾つもあつた。猿田彦神が貝に手を食はれて海底に沈んで行つたといふ話、さては少彦名神が御身法外に小さかつたといふ話の如き、何れも皆神の御笑を目的としなかつたならば、斯ういふ際に於て語られる必要の無いことばかりであつた。

しかも實際に於て嬉笑した者は、先づ之を發明した奉仕者た

[illegible]に、或は其興味を轉用して、之を[illegible]方法に[illegible]した者もあつたかと思はれる。俳諧といふ術語は既に古今集の時代から採用せられて居るが、之を必要とするに至つた今一つ以前の事情は、もう明かにすることが出來なくなつた。併し前にも述べて置いたやうに、日本の文藝には終始所謂有心と無心との併行があつて、滑稽は寧ろ至つて眞面目なるものゝ蔭に活きて居た。我々の愛讀する無住法師の砂石集なども其一例で、當時の世相殊に佛法の頽敗を慨歎した點は、痛烈骨に透るともいふべきものなるに拘らず、他の一面には或は輕妙に失する程の惡謔がある。後世の說教僧は到底其儘に之を襲用することを敢てしなかつたが、しかも彼等も亦別の法を用ゐて、やはり頓智頓作を其傳道の上に應用して居たのである。をかしくないと說教が凡俗を誘導し得なかつたといふ以上に、彼等のをどけ話は獨立して永く一方の效果を收めて居た。近世の落語や童話には、久しく此說教僧の口を經て傳はつたかと思ふものが多い。察する所、是は日本に於ける民間說話の特殊なる方式であつて、由つて來る所は甚だ遠いものであつた。

けだし現在の如き書物の教育では、文字が一つの栞である故に、誤つた記憶にそれてしまふ虞が少ないが、口から耳への傳[illegible]問答一[illegible]に懸りて、他の[illegible]者たちをして[illegible]ること、[illegible]昔のサクソン人が我輌子を所有地の地境に連れて行き、其尻をうんと殴つて痛さによつて永く其地點を記憶せしめようとしたのと、同一の趣旨に出でたものではなかつたらうか。若し然りとすれば是は明らかに轉用であるが、それも亦最初神の大前に笑を獻じて、之を傍聽した者が皆共々に面白く感じたといふ印象が、いつとなく此方法の流行を助けたものだといふことが出來る。さうして何れにしても一人の笑はれることを忍び得る者が、其感覺を犠牲として公衆の幸福を計つたといふことは、決して中世期に始まつたものでは無いのである。

一〇　滑稽作者の功績

私が笑ふことの出來ない人のやうに、如何にも野暮くさく此問題を論じて、多くの讀者から嘲らるゝことを辭しなかつたのも、動機に於ては少しばかり之と似て居る。私の考では、笑の歷史をもつとよく知つた上でないと、現今の笑の衰頽を防ぐことが出來ぬかと思ふ。Sidis の「笑の心理」を讀んで見ると、笑は

誇り也とある。笑は冒す者の與へ、腕力を用ゐざる優越だとも論じてある。併し自分等に取つてはそれはたゞ稀薄なる暗示に過ぎぬ。笑は成程無邪氣なる優勝感、少くとも敵を怖れざる安堵から出た聲であるが、他の一方に人間をして最も平和にしてしかも高尙なる笑を味はしめようといふ志から、自ら甘じて笑はれる人となり、其方法と資料の精選に辛苦した者がなかつたなら、我々はいつ迄も弱い犬が强い犬の前に、四脚を顚へし背をこすり尾を伏せて、凡そ世の中の最も見苦しい姿をして見せる如く、底に憤りつゝも尙この recognition of the ridicule を續けねばならなかつたのである。尋常氣慨ある男兒は悉く自ら「笑の文學」の作者たることを肯んぜず、相率ゐて其愛讀者となつて、永く友少なき弱者を笑はうとしたかも知れぬのである。さうで無かつたら寧ろ普通人の間に損害の最も小さいと信じられる所の、原始的の笑へ走つて行つたかも知れぬのである。

未開人の笑を研究しやうとした人の中に、洪牙利の學者ゲザ・ロハイムがある。彼の說に依れば濠洲の黑人などは、獨り力鬪の勝利を得た場合のみならず、色慾食慾の滿足、それから下腹の張切つて居るものを、排泄し得た場合にも笑ふとある。さうして彼等の神樣も亦之と同樣なる狀態に於て、快げに大に笑ふものと信じて居るとある。斯ういふ下卑たる笑を笑つた場合が、一度は我々にもあつたわけである。今日社交界の最も圓轉滑脫なる人々が、比較的無害な笑の種を求めて、終に此樣なところにまで到達したといふことは、進步では無くして一種の復古であると謂つてもよい。それで永遠に我々の生活が、靜かに又晴れやかであり得るか否かは、凡そ文章の道に携はる程の者が、一心を潜めて考察すべき問題ではあるまいか。

法窓四十年の語り草

前大審院長 横田秀雄

△千葉縣人は袴を穿いてゐて泥棒する△人間、眞實を云はれると腹が立つ△刑事審理の巧みな判事△畠山式の典型的裁判官△名判官大岡越前守△大津事件と兒島惟謙氏△司法部對行政部の正面衝突△ロシアも恐れるが、更に恐るべきは司法權の失墜△品川彌次郎の捨臺詞△「蜂とライオン」の弄花事件

千葉縣人は袴を穿いてゐて泥棒をする

裁くもの、裁かれるもの、その立場こそ異へ要するに同じい人間同志の交渉なのである。裁かれるもの必ずしも良心を持たぬ鬼畜ではなく、裁くものとても敢て牛頭馬頭たることを志してゐる譯ではない。内に岩永の辛辣さを持つは好いとしても、外には畠山の情味を以て對することが眞の裁判官であり、現に刑事訴訟法その他の法規にも、この精神ははつきり規定されてゐるのである。

それといま一つは、前にも述べたやうに、裁判官たるものは飽くまで冷靜に、いかなる場合にも感情に激しないやうな心掛けを以て司法廷に臨み、いやしくも自己の威信を傷けるやうな言動は一切避け、例へ胸に考へたことがあつても、これを外に出すのには餘程前後を考慮するだけの修養がなくてはならない。

勿論常識ある裁判官である以上、この程度の事柄は誰しも充分承知してゐる筈なのであるが、しかしそこは何分にも感情に奔り易い人間のことであるから、稍もすると失敗して飛んでもない波瀾を捲き起すことがある。これが普通人同志ならば、なんでもないことも、裁判官といふ特殊な立場にあるために問題となる譯なのである。數多い裁判のことであるから、その間には隨分珍談奇談も多いが、いま思ひ付いたものを拾つて見ると

こんなのがある。

司法廷に於ては、判事と檢事とは、その本來の職責に依て、自から立場が異つてゐる。即ち判事は調書を基礎として、なほ不明な點を訊すといふ程度であるから、その審問のやり方が餘程苛酷に過ぎるとでもいふのでない以上、滅多に問題は起さぬが、その點檢事は甚だ損な立場にある。大所高所から觀れば判事檢事何れもが、宗教家などと同じく、罪を憎まうとも決してその人までを憎む譯ではなく、法律に依て斷罪することも、要は内にひそむ本來の天性を呼び醒すことを、目的としてゐるのであり、隨て檢事の論告に依て被告人が心から悔悟したといふ實例も決して稀ではないが、先づ多くの場合には、その罪を一々指摘して論告する檢事は、なんとしても敵役たるを免れない。そこで司法廷に於る檢事の言動は、稍もすると波瀾の因となる虞れがある。

たしか私が千葉地方裁判所の部長に赴任した當時のことであるから、かなり古い出來事であるが、いかにも滑稽なので今もよく笑ひ話になつてゐる。千葉縣八日市場の區裁判所であつたと覺えてゐるが、或る竊盜事件の公判が開かれてゐた。ところがその被告人といふのが、相當の資産ある者で、而もその盜んだといふ客體は極めてつまらぬ、大した價値のある品物ではなかつたのである。

司法廷の審理は型の如く進み、檢事の論告をうけて起つた辯護士は、檢事の論旨を反駁し、被告人は相當の資産家であり、かくの如きつまらぬものを盜む筈がない、といふ點を力説して無罪を主張した。すると再び起ち上つた檢事は語調も鋭く

「辯護人はしきりに被告人が資産家であることを理由として無罪を主張するが、これは全く理由とならない。元來千葉縣の人といふものは袴を穿いてゐて泥棒をする、故に被告人が資産があるからといつても、それは無罪を證明する事柄とはならない。竊盜の罪を犯してゐることは、既に記錄に依つて明らかであり、辯護人の言ふところは、何等これを覆すに足るものではない」

とやつた。隨分思ひ切つて亂暴なことを言つたもので、果して辯護士は憤然として喰つてかゝり

「檢事にお訊ねするが、唯今のお言葉中「千葉縣人は袴を穿いても泥棒する」と言はれたが、私は千葉縣の人間であり、袴を穿くが果して何時泥棒をしたか、先づこれを承りたい…………」

と詰め寄つて行つた。檢事もこれには閉口したらしいが、今更失言でしたと叩下がる譯にも行かず、

檢「いや決して辯護人が侮辱したと言つた譯ではない、千葉縣人の中にはさうした者が多いと言ふことを申上げたのである」
辯「それは詭辯といふものです、先刻言はれた言葉は決してそんな部分的な人を指して言つたのではなく、千葉縣人全體を指して言つた言葉なのである、いかなる事實を根據として言はれたのか、充分なる説明を願ひたい」
檢「いやさう惡意にとられては困る、私の言はんとした點は……………」
と果てしない押問答が應酬された。するとその時まで默つてこれを聞いてゐた裁判長が、突然檢事の方へ向き直つて
「私からも檢事にお伺ひする、先刻貴下が言はれた言葉の意味は、私も辯護人の言ふやうに聞きとつたが、私も千葉縣人であつて袴を穿く、一體私がいつ泥棒をしたことがあるのか、どうか事實を擧げて説明されたい」
と飛んだところから横槍をつけた。面喰つたのは檢事で、辯護士だけでも持て餘してゐるところへ、内輪から火の手があがり、而も一層强硬に詰め寄つて行つたので、遂には兩者の間に大激論が始まつて了つた。勿論かうなつては裁判などはそつちのけで、双方眞赤になつて論じ合つてゐた。驚いたのは司法廷にゐた[illegible]度は裁判長その他法廷の者へ、あなたにまで[illegible]、ます／＼と引き分けてその場を納めたといふことであつた。

人間、眞實を云はれると腹が立つ

これはたしか大正七年、天下の視聴を集めた彼の八幡製鐵所大疑獄事件の公判の際に起つた問題である。大分大きな瀆職事件で、多數の被告人中には、高官の連座したものも尠くなく、時の製鐵所長官押川則吉氏までが、巨額の收賄をし、罪の遁れざるを知つて、自ら處決したといふ悲劇まで持ち上つた事件である。

一體製鐵所の事業は官營とはいへ、明らかに一種の製鐵工で、その製品の拂下げは商取引であり、殊に當時は歐洲大戰の影響を受けて、鐵が極度に欠乏してゐた時代で、その拂下げを受けたものは、莫大な利益が得られたため、その指命を受けるためには、隨分極端な運動が行はれ、それら運動者連と製鐵所の役人との間には、かなり複雑な關係が結ばれてゐたものらしい。

それが次第に甚だしくなり、遂には通常の挨拶の程度を超へた物品が授受されるやうになり、その他にもいろ／＼忌はしい

事實が伏在してゐることが曝露し、だん〲調べて行くと、諸る要式にぞろ〲と連類者が現はれ、而も相當の地位にある人までが、關係してゐることが判つたので、輿論は囂々と沸き立つて來た。

　何分容易ならぬ大事件で、その中には親任官までが有力な嫌疑者の一人であり、又被告人中の囑託といふ名目であつたものを、官吏收賄の例を以て律すべきか否か、などといふ問題も起つて、裁判所としても大分面倒な事件となり、時の檢事總長であつた平沼騏一郎君が、自ら出張して取調べたほどの大事件であつた。

　その内に豫審も終り、いよ〲起訴されて公判が開かれることゝなり、東京からも多數の一流辯護士が出張して、それ〲辯護に當ることゝなつた。その内の或る辯護士、名前は預つて置くが著名な一辯護士が、某被告人のために極力辯護し、結局無罪であることを力說して席に着いた。するとこれに對して起つた檢事が、一々その辯護士の所論を辨駁し、最後に被告人を睥睨して『被告人は金にあかせて東京から知名の辯護士を呼び、種々辯護して貰つてゐるが、その罪狀は既に明白であり、到底辯護の餘地はない』といふ意味の論告をした。冷靜に考へて見れば、たしかに不穩當極まる放言で、果してこれが非常な物議を醸して了つた。

　辯護士は辯護を依頼された以上、多少非を理に枉げてゞも、その被告人に有利な辯論をすることは止を得ないかも知れない、しかしその結果は稍もすると隨分無理な議論もあつて、現に右の場合なども、私達局外者として見ても、その無罪論は決して妥當なものではなく、たしかに行き過ぎてゐた感はあつた。故に當事者として聞いてゐれば、腹も立たうし右のやうなことを言ひたくもなつたであらう。しかし現に檢事といふ職責にあつた以上、さう考へることは無理もないとしても、直ちにその感情を外へ現はすことは、愼まねばならぬ筈であつた。

「金にあかせて東京から辯護士を呼び寄せ……」と言はれて見ると、いかにも辯護士は金で買はれてゐるものゝやうに聞へる。そこで當の辯護士は勿論のこと、辯護士全部が大ひに憤慨し、團結して檢事に抗議を申込み、失言を取消せ、いや取消さぬといふので、事態は次第に紛糾し、遂には檢事長が仲裁に入り、最後にその係り檢事を替へて漸く收りがついたといふことがあつた。

　人の思想は自由であるにしても、現在の自己の立場を考へて行動せぬとこんな失敗を招くもので、右の失言などは全く餘計なことで、事件とは何等關係のない事柄なのである。ところが

その當時司法省に法律取調[illegible]といふものがあつて、是もそれに關係し、磯部四郎君なども關係して居つたが、そこへ右の話が傳つて來た。後にも述べる[illegible]君といふ人は、逸話に富んだ極めて面白い人であつたが、その磯部君が右の話を聞くとこれを評して『人間、本當のことを言はれると腹の立つものさ』と言つて笑つてゐた。

寸鐵骨を刺す、うまいことを言つたもので、評し得て妙なりと私は感心した。「人間、本當のことを言はれると腹が立つ」、果してこの言葉が右の場合にそのまゝあてはまつたかどうかは別として、私はその後の經驗に徴して、しばしばそれが實際に適用し得る眞理であることを發見した。

刑事審理の巧みな判事

幾度も言ふことだが、裁判官の仕事といふものは、誠に面倒なもので、寛嚴その度を量つて、法の威嚴を損せず、而も一方當事者を心服せしめるといふことは、却々の手腕力量を必要とする。殊に裁判官の裁量一つに、生殺の鍵を握られてゐる刑事の裁判は一層むつかしい。私は元來が民事育ちで、民事の審理には相當自信を持つてゐたが、刑事は餘り興味もなく、隨て刑事の裁判は苦手であつた。それだけに審理も[illegible]も來ねばならぬことゝなつて、[illegible]た、我乍ら不手際なもので、遂には「一段[illegible]民事は手に入つたものだが、刑事の裁判はまるで駄目だ」などと酷評されたこともあつた。爾來引き續いて刑事には親しめなかつたもので、寧ろ大審院に入つてから、一番多く手がけた位のものである。ところがこれも所謂こつの問題で、私が赴任した當時、千葉の裁判所に奇妙に刑事審理の巧みな判事がゐた。

名前は忘れたが、甚だ奇行に富んだ、一風變つた判事で、決して裁判官としての手腕力量は優れてゐた譯ではないのだが、不思議に被告人からの信望が篤い。そこで氣をつけて見ると、成程いかにも刑事被告人の心理を、巧みに捕へた裁き方をするのである、即ち被告人の辯解はいかに長くとも、默つて聽いてゐてやる、そして證人の申請をなすれば大概許してやるのである。

刑事の司法廷で、しばしば波瀾を起すのは、裁判官が被告並びに辯護士の申請する證人の申請を許さない場合で、その結果裁判官を忌避するといふやうな紛擾も起るのである。裁判官としては最早充分審理の結果、詳細な記錄が出來てゐるのであり、これ以上證據調べをして見たところが、とても好い結果が

得られはしない、といふことに心證が決つてゐるのだが、被告人にとつては、有罪の證據のみを並べて置いて、自分の辯解を立證する證據の申請を許さぬのは片手落の處置だと憤慨する。

唯たゞ裁判官の斷罪の前に戰いてゐる弱い被告人心理としては、これは無理からぬことで、その判事は巧みにその間の人情の機微を捉へて審理してゐたもので、その裁判の結果を見ると、必ずしも被告に有利な判決が下されてゐた譯ではないのだが、不思議に被告人が心服する、こんなに親切に調べて貰いた以上、例へ有罪となつてもそれは致方ない、といふので、その判事の判決には、滿足して服罪し、控訴するものも極めて尠かつたのである。

平生はいろ／＼な失態もあつた人だが、司法廷に於る刑事被告人の、心理狀態をよく知つてゐるといふ點には、私も感心したことであつた。

畠山式の典型的裁判官

次は辯護士に評判の好かつた人の話、餘程以前であるが大審院の民事の部長に寺島直といふ人がゐた、定年制のない時分のことで、殆ど七十才位までも勤めてゐたが、そんな年寄にも似合はず、却々の勉强家で、外國の書物なども他人に翻譯させて參考とし、常に新しい方面の研究も怠らぬといふ、珍らしく心掛けの好い人であつた。

この人が辯護士から非常に評判が好かつた、といふのは寺島さんが係りである場合には、辯護士の辯論はいかに長くとも、默つて聽いてゐる、而も散々聽かされたあとでも、なほ「まだ他に言ふことはないか」と尋ねるといふ風であつた、これが却て普通の人には、出來兼る我慢なのである。

長々とくだ／＼しい辯論を聽かされることは、裁判官にとつては全く閉口であるから、若い裁判官などは稍もすると辯護士の辯論を制限する如きがある、ところが「ものいはされば腹ふくるゝ」辯護人にとつては、ともかくも言ひたいだけのことは言はせて貰はねば承知が出來ない。それを制限されるとなれば、その裁判官に對しては自然好感を持たなくなる。

隨分辛いことには相違ないが、大體それが役目である以上、徒らに束縛することなく、辯論は充分に聽いて居るべきで、不必要な點は右の耳から左の耳へ素通りさせ、傾聽に値する點だけを聽きとつて置けば好い譯なのである。寺島さんはそこを上手にやつて、決して辯護人の辯論を制限せず、而も最後に更に問ひ返してやるといふ風であつたから、ひどく好評で、辯護士達は大ひにこれを德としてゐたのである。

ところがおかしなもので、[illegible]に、必ずしも裁判所内部での評判は芳ばしくないのである。何か特に辯護士の意を迎へるために、さうした態度をとつてゐるもののやうに見るものもあるが、しかし總ての人がさうであると斷定することは早計で、私は寺島さんの[illegible]の態度などは決して惡くないと思つてゐる。勿論裁判官としての威嚴を捨て、辯護士の言ふなりになつて引き廻されるやうでは困るが、内に信ずるところがあつてさうした態度をとるといふことは、結構なことだと考へてゐる。

寺島さんは私が大審院へ入る前に退職されたが、實現したかどうかは覺へてゐないが、その際辯護士達から、長年の功に報ゆるため表彰しやうといふ説が起つた。寺島さんの如きは明治大正を通じての、鳥山式裁判官の尤なる一人として舉げることが出來るであらう。

名判官大岡越前守

古今を通じて、我國での名裁判官といふと、先づ誰でも大岡越前守忠相を舉げる。その他古いところでは、青砥藤綱とか、板倉父子とかゞあるのだが、それらの名法官に比べて、大岡越前守は遙かに一般に知れわたつてゐる。しかし大岡忠相といふ人だ。[illegible]つても達人視せられて、[illegible]で愛讀したもので、中でも[illegible]は、最も愉快に感じたことであつた。

大岡忠相といふ人が、實在してゐたことは疑ふべくもないが、世上傳へられてゐる、所謂大岡裁判に就ては、信憑するに足る記錄は殆どない。私が司法界へ入つてからも、興味を以て大岡忠相の事蹟を調べて見たが、僅かに天一坊に就ての記錄があつたのみで、その他には殆ど目ぼしいものが殘つてゐない。而もその天一坊の記錄も、震災の際帝大の圖書館で燒けて了つた筈だから、現在では大岡越前守に關する、公けの史料といふものは全くなくなつて了つた譯である。

隨て今日吾々が、大岡越前守忠相の事蹟を知り、その行つた裁判の内容を知るのには、大岡講談稗史の類に據らねばならぬのであるから、今日世上に傳へられてゐる所謂大岡裁判が、果して全部大岡越前守に依て行はれたものか、又は他の人の行つたものまでも、大岡忠相の裁判として傳へてゐるのか、その點は何れとも斷定することは出來ない。しかしもし作つた話だとすれば、いかにも巧妙に順序立てゝ出來て居り、殆ど非の打ちどころのない點から推測すれば、實在した事柄であることは、

事實なのではあるまいかと思はれる。

然らば所謂大岡裁判とはどんなものか、今日ではいろ〳〵な意味に用ひられ、專ら人情のみを主として裁判することを、大岡裁判だといふものもあるが、しかし法律家から見れば、それでは必ずしも名裁判ではない。眞の意味の名裁判とは、所謂情理兼ね備はつたもので、今日の言葉で言へば、一面に於て法律に合し、他方實際に適することを必要とするもので、たゞ當時に於ては、法律が極めて粗雜であつたから、極めて自由な裁量が行はれたといふだけのことで、必ずしも大岡忠相は、常識的な人情論のみで、裁判したものだとは思はれない。

私が大岡越前守の裁判で、感心することは、その捜査がいかにも巧妙である、それがどの事件に就ても同樣で、勿論今日のやうに、面倒な手續きを必要としないから、捜査を自由自在に行ひ得たには相違ないが、それにしてもいかにも行き屆いてゐる。それと共にその裁判は、人情の機微に觸れ、何人にも得心の行くやうな、人間味のある裁判をしてゐる。

傳へるところに依れば、大岡といふ人は、人相を非常によく見分けたといふことである。隨て越前守は引出された被告人を一見して、罪惡を働くものであるか否かを、直ちに見きはめたさうで、その結果將に冤罪に陷らんとした嫌疑者も、一度び越前守の手にかゝると、何れも眞犯人を看破して救はれたといふことである。

而も大岡越前守の偉いところは、この者は無罪であるとの確信はあつても、そのまゝでは釋放しない、それまでの嫌疑の基礎となつてゐた不利益な證據を、打消すだけの有力な證據を調べ、その通りの事實を示し、無罪であるとの證りをたてる總ての手續きは殘りなく濟してゐるのである。私は大岡越前守の優れた點はそこにあると思つてゐる、勝手なこともやれば出來た當時にあつて、なほ自分一人が信じただけでは足れりとせず、世間一般を首肯させるに足る順序手續きを踏んだ裁判を行つてゐることは、いかにも公明正大な態度であると感じ入るのである。

史實は別として、大岡越前守忠相といふ人の存在は、いろ〳〵な點から觀て、吾々裁判官にとつて名譽なことである。が、しかし、こゝではかうした離れた時代の話はやめて、私の畏敬する先輩、兒島惟謙氏の功績を傳へたい。兒島氏こそは、啻にわが司法界の恩人としてのみでなく、勇敢なるわが立憲制度の擁護者として、我國憲政史に特筆大書さるべき偉人なのである。

大津事件と兒島惟謙氏

大審院長は[illegible]以前に[illegible]なつて、何れも人は[illegible]せたた人々のみであるが、中でも特に世間に知れてゐる二三の人を挙げると、初代の玉乃世履氏、何分時代が違ふので、私はついに會ふ機會もなかつたが、事件の審理は手に入つたもので、裁判は實に巧みであつたといふことである。丁度その頃が歐米の新しい法律が入つて來た分岐點で、さうした過渡期の人であるから、法律の素養のなかつたことは事實で、これは磯部君が言つたことで、眞僞のほどは保證の限りでないが、玉乃氏には「條件付法律行爲」といふ、今日では法律の一年生でも知つてゐる事柄が、なんとしても判らなかつたと、いふことである。しかしそんなことで、玉乃氏の價値が低められるものではなく、その頃の裁判官としては、なか〳〵優れた人だつたのである。南部甕男氏も傑出した人で、やはり民事を擔當して居られたが、溫厚篤實な、しかし職務には極めて熱心な人で、よく若い人達と議論をしたといふことである、世間では、大審院長で自ら裁判をしたのは、私が初めてだといふ人もあるが、實際は南部さんが既にやつてゐたのである。

兒島惟謙氏は五人目の大審院長として就任され、司法部に重きをなして居られたが、計らずも大津事件といふ、國家の大問題に當面され、處するによく司法官としての途を誤らなかつたゞ、[illegible]の概要[illegible]として、長く後世に名を残した[illegible]裁判官としての立場を語る點に就ては、私も及ばず乍ら努力して來たと信じてゐるが、兒島氏の固さは、更に積極的な勇氣に富み、それも所謂暴虎馮河の勇ではなく、一種の叡明を以て自己の職責をつくし、極めて强固な意思を以て終始したものである。しかし乍ら兒島氏をあゝまで有名にしたのは、大津事件があつたからで、千載一遇の好機に廻り合せた兒島氏は、その點から見れば、運がよかつたと、いへるかも知れない。

× ×

明治二十四年、當時の露國皇太子、過般の革命の際殺害されたといはれてゐるニコラス二世は、シベリヤ鐵道の起工を機會に、東洋巡遊の途に上られ、その際我國へも立寄られたので、我皇室に於かせられても、御款待の準備を整へて御待ち受け申上げたのであつた。然るに五月十一日、當時宿泊されて居た京都から、馬車に召されて琵琶湖の見物に赴かれ、一日の歡を盡して京都へ歸られる途中、大津の八丁の坂にさしかゝつた際、當時警固の任についてゐた滋賀縣の巡査津田三藏といふものが、突如拔劍して皇太子の頭上に切りつけたといふ思ひもかけぬ事變が突發した、幸ひ二の太刀を振はふとするところを用

國のものが取押へて了つたので、皇太子は假の手當をして、直ちに御旅舍京都常盤ホテルへ引上げられたのであつた。この報一度び傳はるや、國內は擧げて色を失ひ、畏くも　明治天皇に於かせられては、翌十二日鳳駕親しく京都に行幸遊ばされ、常盤ホテル內の病床に臨まれて、親から御見舞遊ばされた。露國皇太子には幸ひ負傷は重からず、そのまゝ神戶に碇泊中の御召艦に退かれることゝなるや、明治天皇は親ら神戶波止場に行幸御見送り遊ばされて後、はじめて東京へ還幸遊ばされたが、その間の御軫念のほどは、誠に恐懼に耐へぬものがあつたのである。

こゝに於て國論は騷然として沸き立つて來た。當時の內務大臣西鄕從道、外務大臣青木周藏の兩氏は責を引いて辭職し、滋賀縣知事沖守固、警部齋藤秋夫の兩人は職を免ぜられ、新たに品川彌二郎が內務大臣となり、榎本武揚が外務大臣の椅子について、極力その善後措置を講ずることゝなつた。しかし何分對手は當時破竹の露國であり、當方は未だ國運微々たる當時の日本であり、いまにも露國から難題を持ち込まれ、皇國の前途をすら危ふする事態に立ち至りはせぬかと、朝野ともに憂慮したのであつた。

これが所謂大津事件、又は湖南の變といはれてゐる事件の荒筋で、その犯人津田三藏の裁判といふものが、司法部にとつては、その獨立を脅かされる大問題となつたのである。

司法部對行政部の正面衝突

何分こと國交に關する重大問題であるから、時の檢事總長松岡康毅氏は、自ら大津に出張して、萬般の處置を講ずると共に、裁判所からは堤正誼氏を裁判長として、井上正一、安居修藏、土師經典、高野眞遜、木下哲三郎、中定勝の七人の大審院判事が、特にその係りとなつて大津へ出張し、愼重に審理を進めたのであつたが、計らずもこゝに、豫期せぬ一大困難に逢着することゝなつたのである。

といふのは、現在に於てこそ明確なる法文があるが、當時の刑法に於ては、外國人に關する條規は全く存してゐなかつたもので、これは同刑法起草の際、刑法草案審査局の總裁であつた伊藤博文氏の說に依て、外國人に關する部分は、總て削除されて了つた結果で、恐らく外國の主權者又は國家に對する犯行が起らうなどとは、全く思ひ到らなかつたのであらう、然るにその結果は、思ひもかけぬ大津事件の突發に依て、その犯人津田三藏を律すべき、何等特別の條規がないといふ、容易ならぬ問題に當面したのであつた。

政府もこれには苦慮した。そこで種々これが法律的解決を考究した結果、或る法律家の入智恵に依て、刑法條文の解釋に依りこれを解決しやうとの窮策を案出し、即ち當時の刑法第百六十條「天皇・三后・皇太子ニ對シ、危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタルモノハ死刑ニ處ス」とある法文は、決して我國の天皇三后皇太子に限るものではなく、外國のそれにあつても同樣である、との解釋をとり、遂に檢事總長に命じて「皇室に對する罪」として、起訴せしめたのであつた。

冷靜に考へれば、實に亂暴至極な話で、いやしくも日本の刑法に於て、天皇とあるからには、我國の天皇に限る規定であることはいふまでもないことで、これを外國の君主の場合にまで適用することは、殆ど法律を無視した措置といはねばならない。しかし當時の政府としては、大津事件の突發は、殆ど國家の浮沈に關する問題として驚愕し、露國がいまにも問罪の師を起すかの如く恐怖してゐた折柄であるから、先づ以て犯人津田三藏を極刑に處し、以て露國の怒りを和らげやうとの政策をとつた譯である。

しかし乍ら右のやうな御都合主義の政策から離れ、この事件を純法律的に審理すれば、外國の主權者又は君家に對する特別の規定がない以上、これは當然常人に對する犯罪として律すべきで、即ちせいぜい謀殺未遂として、これを普通謀殺未遂の法條に處する外はない。そこで司法部では、何處までも法律に從つて處斷しやうとしたのであるから、政府の意向は到底容れられぬこととなり、遂に司法部對行政部は、正面衝突の止むなきに立ち至つたのである。

ロシアも恐れるが、更に恐るべきは司法權の失墜

憲法布かれて未だ一年、制度の上に於てこそ既に司法權の獨立といふことが認められてゐたとはいへ、未だ過渡期を脱し切らぬ當時にあつては、その基礎は必ずしも安固であつたとはいへぬ折柄なのである。行政官が裁判に關與するといふ、從來の惰力が全く消滅してゐない時のことであるから、かくの如き危急存亡の際である以上、あくまでも政府の主張通り、法律の解釋を枉げてども、津田三藏を死刑に處し、以て對露關係を有利に導かうと努力したのであつた。

當時の内閣は即ち松方内閣で、殆ど元老總出の有力な内閣であつたが、その勢力の强い内閣の、内務大臣及び司法大臣が、自ら大津に出張して、裁判官を說得しやうと計つたのであるから、形勢は次第に不穩となつた譯である、その時に當つて、敢

然として司法部の威信を背負つて起ち、正面からその矢面に立ち向つたのが、即ち時の大審院長兒島惟謙氏であつた。

對手は何分にも露國である。當時破竹の勢を以て着々と東洋方面へ侵略しつゝあつた折柄であり、いかなる難題を以て、我國に迫るかも知れぬとの恐怖に、上下色を失つてゐた際のことであるから、殊には有力な内閣が、廟議を以て迫つて來る以上、普通の人であつたらば、恐らくはこれに屈して、その主張を容れたことであつたらう、果して七人の裁判官も、漸次軟化して、最後までその主張を枉げなかつたものは、僅かに井上、安居の兩氏のみであつたといふことである。こゝに於て兒島氏も亦大津に赴いて、極力法の尙ぶべきを主張し、例へ事情はどうあらうとも、國法を紊すことの不可なるを說いて、一歩も讓らなかつたのである。

後ちになつて判つたことであるが、兒島氏がかく强硬にその說を主張してゐた裏面には、その背後に穗積先生が控へてゐたのであつた。兒島氏は穗積先生と同鄕の宇和島の人で恐らくは法文の解釋等に就て、兒島氏は穗積先生の意見を徵したのであらうが、先生の說も亦同樣であることを知つて、一層力强く行動し得たのであらう。その結果、幸ひ司法部の主張が徹つて、津田三藏に對する判決が極つた際には、兒島氏は眞先に穗積先生にあてゝ「カチヲセイスルニイタレリアンシンアレ」との電報を發し、穗積先生も非常に喜ばれて、その電報用紙はながく保存され、現にその著「法窓夜話」に、その寫眞を掲出してある。

そんな事情から、法律學者の說も、司法省の說も、後ちには内閣自身の說も「天皇三后皇太子」とある條規が、日本の天皇三后皇太子に限るものであるとの、法文解釋は一致してゐたのではあつたが、ことは外交に關する重大事件であり、區々たる法文に拘泥して國家の大事を無視するは、ことの輕重を知らざるの愚論であるとの主張が、なほ當局及び一部の人々の間に行はれてゐたのであつた。兒島氏はこの裁判の經緯につき、詳細な日記を作つて、その表裏の事情を傳へてゐるが、私もその寫本を所有し、しば〳〵讀んで當時の事情を研究したが、兒島氏の苦境に對しては、心から同情せざるを得ない。その中で兒島氏は、「ロシアにも刑法がある、故にわが刑法の「皇太子」といふ文字が、日本の皇太子に限るものであつて、決して外國の皇太子までを含むものでないことは、ロシアにも判つてゐる筈である、依てわが裁判所が、日本の法律に從てこれを斷罪したからといつて、先方が怒るべき理由はなく、もし左樣なる難題を以て、我國に迫るとすれば、彼は全世界の同情を失することゝ

なる。もしも、萬一この公判の結果、ロシアとの國交が[illegible]て戰爭など起つたとなるにしても、外國の怒りを招くために、自國の法律を枉げるやうな態度を敢てするならば、日本の國威は地に堕ちて、到底とこしなへに榮へることは出來まい」といふやうな、極めて毅然たる議論をしてゐる。この日記は兒島氏が死ぬ前に、穗積先生に依賴して、この日記の中に現はれてゐる人が、全部この世を去つてから、公けにして呉れとのことであつたが、その運びに至る前に穗積先生はなくなられ、一旦挫して了つたが、最近に至り、ある人の肝入りで、その中の唯一の生存者、井上正一氏も承認したので、近く公表される筈だ、内容が内容であり、文章も極めて勁健な、甚だ興味深い讀物であると共に、明治史上の獲難い史料である。

さて兒島氏の、職を賭し、身命を捨てゝの、さうした努力に依り、一度びは節を屈した人々も、最後には本來の面目に立ちかへり、七人の裁判官は一致して、政府の要求を断然排斥し、犯人津田三藏は謀殺未遂とし、死刑より一等を減じて無期徒刑と斷罪したのであつた。

想へば危いところで、兒島氏なかりせば、その結果はどうなつてゐたか、何れとも斷じ得まいと思ふ。憲法に依て保障された臣民の權利を明らかにし司法權獨立の威嚴を實際に宣示し、會に[illegible]めると共に、[illegible]憲法史上に、[illegible]さるべき一大[illegible]を起さしめた功績は、我國民の銘記してよい事柄である。

品川彌次郎の捨台詞

しかし乍ら、兒島氏の當時の行動に對しては、世間は必ずしも良き批評のみをしてはゐない。なるほどそれはいやうに依ては、一つの干渉であつたかも知れぬ。裁判を行ふためには、ちやんと七人の裁判官が選まれてゐたのであるから、たとへ大審院長であつたにもせよ、その裁判事務に立ち入ることは一種の干渉かも知れぬ、しかし乍らこれは行政部の干渉などとは異ひ、殊にあの際の如く、行政部からの猛烈な壓迫に對抗するためには、止むを得なかつた措置であると共に、正しき裁判のために努力した當時の行動は、各種の事情から見て、何等批議さるべき點はないと、私は信じてゐる。

一方また他のある人々は、たまたまあの際、ロシアがおとなしく承知したからよかつたやうなものゝ、もし干戈を交へるやうなことに立ち至つたとすれば如何であつたらうか、その結果領土を失ひ、國を亡すやうな結果を將來したとすれば、後世の

人々は今日の如く稱讃しまい。結果が良かつたからよいのであつて、要するに兒島氏は暴虎馮河の勇を振つたに過ぎない、と批評してゐる。しかしこれとても、既に兒島氏が喝破してゐる通り、國法の大本を抂げてまでも、なほ鄰國の鼻息を窺ふべきであつたかどうか、もとより論のないところであらうと思ふ。

暴虎馮河どころか、兒島氏の「沈勇」とでも名づくべき冷靜な態度には、私は心から感心してゐる、日記を見ても、何分當面の對手は、いろ〳〵な意味で有名な、品川彌次郎氏のことであるから、兒島氏を捉へて、殆ど罵詈讒謗に等しい、過激の言を吐いてゐるが、兒島氏はこれに對して、終始極めて穩やかに應對してゐることが、明らかとなつてゐる、これは常人には出來ぬことで、對手が罵倒すれば、つひこちらも昂奮して罵倒し返すが、さうなつてはもう喧嘩で、到底圓滿な解決は望み得ないことゝなつて了ふ。

面白いのはいよ〳〵兒島氏の意が徹り、津田三藏は無期徒刑といふことに決定して、品川内相は大津を引上げることゝなつた。その際兒島氏は内相を停車場まで見送り『今までは法律上の問題であるから、その解釋に就ては貴下の御説に從ふことは出來なかつた、しかしもし不幸にして、これがためにロシアと戰端を開くやうなことにでもなれば、私は即座に裁判官の一隊を率ひて、貴下の麾下に馳せ參じ、その時こそは貴下の命令に從ふであらう』といふ、極めて皮肉な挨拶をした、ところが内相はかん〳〵に怒つて、『なるほど今回は貴下のいふ通りになつた、しかし憶えてゐなさいよ』と、奥齒に物のはさまつたやうな捨台詞を殘して去つた。

この捨台詞が、果してどんな意味であつたかは不明であるが、故意か偶然か、その翌二十五年に、所謂弄花事件といふ問題が起り、その結果あれほど司法部内に重きをなしてゐた兒島惟謙氏が、遂にその職を去るの餘儀なき立場となつたことは、何かその間に、一脈の連絡があるのではあるまいか、と世間からは臆測されてゐるのである。

「蜂とライオン」の弄花事件

あの場合の兒島氏の立場に對して、私はいつもイソップ物語りの、蜂とライオンの話を思ひ出すのである。蜂がライオンと鬪つて勝ち、凱歌を奏して歸る途中、蜘蛛の巣に引かゝつて最後を遂げたといふ話が、國家危急存亡の際に、あれだけの功績をあげて令名を轟かした人が、あのつまらない弄花事件のために、地位を捨てねばならなかつた兒島氏の場合と、いかにもよく似てゐるのである。

何故臨時弄花事件といふものが起つたか、この事件に就て
は、私も世間の噂以外、必ずしも世間の知らないことを知つてゐないと思
つてゐる、ともかくも大津事件以來、政府が兒島氏を目の上の
瘤としてにらんでゐたことは事實で、時の檢事總長松岡康毅氏
との間にも、大津事件以來、超ゆべからざる溝渠が出來てゐた
のであつて、それら蔭の事情が、どれだけ脈絡をとつてゐたか
は別として、弄花事件が大津事件の反動として起つたことだけ
は、疑ふべくもない明白な事實であらう。

一體他人を裁く身の裁判官が、花牌をひいて賭博をするなど
は、たしかに悪いことには相違ないが、當時は世間一般に行は
れてゐた習慣で、勿論金儲けをしやうといふのではなく、ほん
の娯樂の意味で、相當上流の人々までが、平氣でやつてゐた時
代なのである。そこで兒島氏なども、他の判事達とやつてゐた
譯で、それが計らずも發覺したのであつた。

この事件の口火をつけたのは磯部四郎君である。當時はまだ
判檢事の數も少なかつたので、食堂なども一緒の部屋であつた
が、そこで或る日食後の漫談から、磯部君がつい口をすべらせ
て了つた。あゝいふ呑氣な人であるから、あたりかまはぬ大聲
で『實は昨夜どこそこで花牌をやつたが、僕はこれ〳〵だが、
誰はいくら勝つた』といふやうなことを平氣でしやべつてゐ
た、ところが[illegible]
が[illegible]
は何氣ない風で、「現金で勘定するのかね」と尋ねた[illegible]
られるとは知らないから磯部君は

磯「いや現金でやりやせん、あとで計算するのさ」

檢「あとで？それぢや結局は金のやりとりは有耶無耶になつて
了ふんだらう」

磯「そりや君が事情を知らんのだ、凡そこの勝負の結果に對し
ては、友達は勿論のこと、親兄弟でもこの勘定は間違ひなく
濟すものだ」

これが總て檢事の手帳に記録されて了つたのである。そして
一方警視廳に命じ、當時鬼警部といはれた武藤といふ警部をし
て、ひそかに關係ある待合藝妓等を調べ上げて、一切の準備を
調べて、松岡檢事總長の手で起訴したのである。いかにも情味
のないやり方で、こんなことは公けには言へぬが、ともかくも同
僚であり、大した事柄でもないのであるから、一應は忠告して
なほ改めなかつた場合にこそ、法に訴へてもよくはなかつたか
と思はれるのである。當時司法部内では、これは兒島大審院長
を陷れる行政部の陰謀であるとて、一齊に憤慨したことであつ
た。

當の兒島氏は、事態がかくなつた以上、潔よく自決するといつて、辭意を漏されたのであるが、周國の人々が承知せず、正式に懲戒裁判所の取調べを受けることゝなつた、ところがいよ／＼懲戒裁判所で調べて見ると、參考人として呼ばれた待合のものや藝妓は、今度は一切事實を否認し、武藤警部にはつきり陳述してゐることまでをも、總て否認して了つた。そこで裁判所は『警察の聽取書は必ずしも證據とはならぬ』との理由で、無罪の判決を下したのであつた。

しかし乍ら兒島氏は、たとへ裁判の結果は無罪であつたとしても、大審院長の職にあるものが、さうした問題の渦中にあつたことは、天下に相濟まぬ事柄であるとの考へから、遂に職を退いて了つたのである。一方磯部君も亦、そのために、懲戒裁判所にかけられる前に退職して了つた。

誠に惜しむべきことで、こんなつまらぬ問題から、兒島惟謙氏を司法部から失つたことは、遺憾至極な次第であるが、しかしかやうな些細なことから、兒島氏の功績が沒せられる筈はなく、司法部の恩人として、また大にしては國威の擁護者として、兒島惟謙氏その人の名は、永久にわが憲政史を飾ることであらう。

社交ダンス

秦豐吉

日本の社交ダンス

西暦千八百八十六年、我國明治十九年の十一月三日、聖壽萬歳を祝ふべき天長節の夜である。小説家芥川龍之介の誌す處によれば、わが鹿鳴館には舞踏室に至るまで白菊黄菊咲き亂れ咲き溢れて、その間に獨逸管弦樂の音は三鞭酒と共に湧き上り、レエスと花と象牙の扇と瓦斯の光の漂渺たる中に、一令孃明子は佛蘭西海軍將校にして小説家ピエル・ロチイの腕を擁して、「美しき綠のドナウ」のワルツを踊り、更にポルカを踊り、マヅルカを踊り、遂に巴里舞踏會の夜に憧れたさうである。定に芥川龍之介の愛すべき小説「舞踏會」は、この作者の明治懷古の趣味を滿足せしめたのみではない。街も今を去る四十餘年前のわが東京に、あれ程美しい社交舞踏會のあつた事實を僕等に髣髴させる得難き文獻である。

然らば獨逸にあつてはビスマルクの全盛時代にあたる我國にすら、既に見事な社交ダンスがあつたものを、今日東京の各所にダンス場が出來たからといつて、敢て驚くにも不思議に思ふにも當らない譯である。

そればかりではない。千九百十四年歐洲の社交ダンス場裡は、殆ど熱病のやうにタンゴを踊つたものである。そのタンゴが實にわが東京でも直ちに踊られてゐる。」

「踊れや踊れ、ニッポン・タンゴ

可愛い殿御の手を執つて、手を執つて……」

かういふ歌が同じ年の千九百十四年即ち我大正三年十月に、一帝國劇場喜劇「嘘の旅行」の一節「神戸港香取丸甲板の場」で唄はれるとともに、杵屋六左衛門は自ら三味線隊を指揮して八

分の三拍子を奏し、今はおばあさんになつた森律子河村菊枝は男裝して、藝者に扮した女優を抱いて、舞台にダンスを見せたものである。それが果して歌の通りのタンゴであつたかどうか、それは僕も今日に至るまではつきり分らない。然しその當時歐洲ダンス界を風靡してゐたタンゴを直ちに我國に輸入して、ニッポン・タンゴの名を作り出したのは、さすがに太郎冠者先生でなくては出來なかつた事かも知れない。

然らば今日この東京のダンス場の積用を以て、風俗を壞亂する事甚しいと眉をひそめる老人があるならば、よろしく先づ今を去る四十年前の鹿鳴館の一夜を回想して、自ら顧る處がなくてはならぬ。唯僕は明治社交舞踏史の第一頁が、この美しき天長節の夜のダンスから初まり、しかもポルカ、マツルカを踊る繪の如き光景を想像するのは甚だ快とするところであるが、太郎冠者先生の紹介したタンゴに至つては甚だ心細いものであり、更に今日のダンス場の場景については、僕は殘念乍ら何も知らないので、一言も之に及ぶ事は出來ない。人の話ではダンスの相手と稱して一定の婦女を蓄へ、切符を買つて踊るのだとか。ましてその切符を女の手に渡すのにも一呼吸を要すのだと聞いては、全く僕には想像もつかぬ。かうなると今日の東京のダンスは、一種の賣春に等しいものであらう。まして大阪を追はれて東京に出稼の女があるといふに至つては、滿洲シベリアを轉々する日本娘子軍と相去る事遠しとしない。

ダンス場の取締法

それだからこそ警視廳が心配して、かういふダンス場に常に怖い目を見せるのも一應無理とは思はないが、さういふお上の苦勞が、やかまし屋揃ひの日本ばかりかと思つたらさうではなかつた。千九百二十七年の暮の話に、僕は米國キスコレシンの「ダンス場取締令」を讀んだ事がある。米國はチヤアレストンでもジヤツズ音樂でも、街も新しいダンスと音樂とを作り上げる國でゐ乍ら、ダアキンの進化論を禁じ、アルコオルを差止める田舍もあるから、こんな警察令を發布したのも、いづれキスコンシンの片田舍の署長さんの考へであらう。即ち、

「ダンス、レギュレエション、ロオ」

と題して

1、ダンス場は日曜日之を閉鎖すべし。
2、日曜日以外は午前一時を以て閉鎖すべし。
3、ダンス場には明い供燈をつけるべし。
4、ダンス場の出入はダンス休憩時間に限る。
5、十七歳以下の男女は入場すべからず。

6、猥褻なるダンスの學を禁ず。

7、ダンス場に於て接吻すべからず。

8、第一條乃至第五條の規則に違反するダンス場所有者には、その營業の許可を取消し、第六條第七條の規則に違反するダンス者は、直ちに捕縛し、罰金又は禁錮に處す。

讀んでみると頗る要領を得た取締令である。ところがこんな規則を拵へた丈では、さつぱり駄目な事は分りきつてゐるから、更に男女數名から成るダンス場監督といふものを設けて、各人は一週二回以上ダンス場を巡廻する事になつた。必要があれば巡査を同行しても好い。

これはダンス場の内部の取締だが、郊外なぞにあるダンス場には、自動車で乘り付ける者が多い。ところがそのダンス場で出來合つた二人が、兎角外に待たしてある自動車に入り込んで、飛んだダンスに及ぶものが少くないといふので、ダンス場監督は同時にこの自動車の内部も取締る事になつてゐる。そんな自動車の中のダンスは、勿論警察が好いといふ筈はない。

それから問題になるのは第六條である。どういふ程度のものが猥褻なるダンスか、といふ事はいつも爭の種になるところから、警察では各ダンス場に對して、專門家のダンス屋を連れてきて、警察眼より見て猥褻ならざるダンスの模範を踊らせてみ[illegible]るのである。ところが[illegible]

こんなに苦勞してもやつぱり[illegible]又は[illegible]に[illegible]せられたものお中々多かつたさうであるから、日本の[illegible]をもたのも騷に必なるものであらう。

千九百二十一年迄のダンス

鹿鳴館で踊られたポルカ、マツルカを初め、ガロツプ、クワドリイル・フランセイズ、ワルツ・アレマンド、かういふ名前は、今日のダンスを好まれる日本のお孃さん方は勿論御存知あるまい。然し今日の西洋のおばあさんは、みな長い裳を摘み上げて、かういふダンスを踊つた人達である。勿論かういふダンスは今日のダンスとは根本から性質を異にしてゐる。昔のダンスはそれこそステツプに就いて、型に就いて先づ論じなければならないものを、今日の社交ダンスはリズムに因る運動といふ方面から考へ、ダンス音樂による肉體の表現から見なければならないのである。

そこで先づ千九百年の初めから約二十年間の社交ダンスの發達を調べてみると、近代社交ダンスは米國に起つたケエキ・ウオオクから初まつたものと見られる。このダンスも今日のジヤツズ音樂と同じに、黒んぼの音樂から起つて、それに多少の手

を入れてテンポを正したものがケエキ・ウオオクである。十九世紀の終り頃から米國の黑んぼの音樂は、單純ながらも人の心を動かす悲しい旋律を彈き出して、踊りにダンス場裡を侵して來た。このケエキ・ウオオクに昔の黑んぼの戰爭の踊りの思ひ出と、米國の往來の小歌を交ぜたものから出來たのが、ラッグ・タイムであらう。ラッグ・タイムが米國と英國で初めて踊られたのが、千九百三年四年である。

それから暫くたつて、千九百五年六年に流行したものがボストンだ。ボストンがどういふ出來のものであるか、又ボストンとは何の意味か、今日になつてもまだはつきりしてない。リズムとしてはラッグ・タイムよりも十年か二十年古いもので、千八百九十年頃に米國では既に之に近いものが踊られたさうである。

それに續いて千九百七年八年はステップの全盛時代だ。ステップは英國から起つたが、元來はラッグ・タイムに手入れをして、小綺麗なものにしたに過ぎない。四分の三拍子の行進曲のテンポに、より多くのアクセントを與へて、シンコペエションを少し鹽梅し、急調の連續を減らして、テンポを遲くした點が、ラッグ・タイムと違ふ點である。

これから千九百十三年十四年の大戰迄の時代を、僕は社交ダンスの暗黑時代だと見てゐる。職業ダンス先生が盛に飛び出して來て、奇怪至極な型とステップを案出しては踏み擴め、一般の人達は殆ど何をどう踊つていいのか分らず、徒らに寄席風な職業的ステップを眞似するに努めて、汗だくだくで踊つたものである。そして之をボストンとも、ステップとも、ラッグとも、或はタンゴとも稱した。獨逸あたりでは「陸海軍々人は制服を着用して、タンゴ、ワン・ステップ、ツウ・ステップを踊るべからず。軍人家族又同じ……」などといふ布令が出た位である。所謂タンゴ病時代であつた。

それから歐州大戰になつて、ダンスの流行は一先づ息をつき、千九百十八年十九年の大戰終了後になると、今まで、縛られてゐた手足は驚くべき速力で活躍し出した。戰後のフォックス・トロット全盛時代が來たのである。けれどもこの時代のフォックス・トロットは、殆ど今日考へても身慄ひの出さうな惡疫的ダンス、ポンチ繪的ダンスで、狂姿、誇張、脫臼のダンスであつた。尤もこれはフォックス・トロットばかりではなく、大戰後の歐洲のダンスは、すべて選ぶ所なく手足を八方に跳ね散らして、亂暴の限りを盡したものである。歐州大戰後の家庭悲劇の一つは、おばあさんと母親と娘とが、何も共通のダンスを知らなかつた事だといつても、決して嘘ではない。

かういふ混亂も千九百二十一年ごろには次第に落着いてきて、タンゴ、ボストン、フオツクス・トロツトの三つの違つたリズムは、同時に三つの違つたテンポと表現を求めてくるやうになり、寄席や舞台のダンスとダンス場のダンスとの間にはつきりした區別が出來て來たのである。

それでは今日のダンスはどうか。

今日のダンス

千九百二十一年以後から今日に至るダンスを見て、次のやうに分類した人がゐる。

1、四分の三拍子
ジヤバー——ボストン——ワルツ——英吉利ワルツ

2、八分の三拍子
ザンバ——アルゼンチノ——ミロンガ——タンゴ

3、四分の四拍子
い、早い調子のもの
シミイ——フオツクス——チヤアレストン——クイツク・ステツプ
ろ、緩い調子のもの
ダブル・フオツクス——ブラツク・ボトム——スロオ・フオツクス——エエル・プリユウス

4、い、パソ・ダブル
ろ、ワン・ステツプ

別にブラツク・ボトムとチヤアレストンの變つたものに、ダアチイ・ヂツグといふものがあるが、僕はよく知らない。ツルウダ、ヒビイ・ジビイス、バナナ・スライド、ブタペスト、デタ、キンカヂウ等、等が名前として現れて來てゐるけれども、社交ダンスとしての生命は覺束なく、ぢきに消えてしまふか、もう消えてゐるか、いづれにしても問題にはなるまい。

そこで今日のダンスとして、この內の何が踊られてゐるか。

社交ダンスの足ぶみは、三十女の氣まぐれと、女の帽子の恰好と、チヨコレエトの包み紙のやうに變り易い。一日として、一季節として同じ型はない。今日のダンスはもう明日のダンスではない。今ここで何が踊られるか、といふのは、千九百二十七年から二十八年にかけた舞踏季節に何が踊られたか、或は昨日まではまづ何が踊られたか、といふ丈で、明日は、從つて千九百二十八年から二十九年にかけての舞踏季節に何が踊れるか、といふ問題ではない。これは神様でも御存知ない。

そこで昨日までの歐洲の社交ダンスとしては、まづチヤアレストンとタンゴとスロオ・フオツクスとワルツを擧げなければ

なるまい。之等のダンスはその根本から違つてゐるから、ダンスのプログラムの上から言へば取合せは甚だ面白い。ブリユウス、ボストン、パソ・ダブルは全く死んでしまつたと言つても好からう。ブリユウスに代るものはブラック・ボトムである。タンゴはチヤアレストンが五六回踊られるのに對して、一回位といふ程度に踊られる。

今日のタンゴ、其他

然しこの中で社交ダンスの王と呼ばれるのは、何と言つてもタンゴである。同時に最保守的な、最歴史的なダンスである。これがあの性急快活なチヤアレストンに相對して、輕く、センチメンタルに、上品に、單純に、音樂と振の流るるまゝに身を任して、藝術的なリズムで踊られるのは、寧ろ現代の奇蹟と言つても好いかも知れない。

タンゴは西班牙やアルゼンチンの熱い血を享けてゐるが、その由緒はすでに古い。歐洲で最勢を得たのは大戰の前後であるが、初めはタンゴ・アルゼンチノとして、タンゴ・ミロンガとして知られ、遂にタンゴといふ名前で落着いたのである。その間にタンゴの踏み方にもいろいろの變化があつたが、外形はいつも同じであつた。タンゴの枝からザンバといふ新しい花が咲き、ごく瀟洒な美しい色香を持つてゐたけれども、遂に永くはもたなかつた。

それからこの間まであれ程好んで踊られ、且メロデイとしてもあれ程美しいボストンは、今日では全く影を潜めて、その代りに現れたものが英吉利ワルツである。この英吉利ワルツは所謂ワルツよりもボストンに近いものであるけれども、リズムと拍子に軽く合はして踊る處に、拍子に反して踊らうとするボストンとは全く異る點がある。

「美しき綠のドナウ」のあのヰイン・ワルツの四分の三拍子程、歐洲の生活に浸徹した旋律はあるまい。それも今は昔の儘のワルツでは、もう享け入れられなくなつたのである。古いワルツが又流行し初めるだらうといふ議論はよく聞かされるが、之は誤りと見る人が多い。それを思ふと西洋舞踏史の上から考へて感慨に堪えないものがある。

僕等はチヤアレストンの名を聞いて既に久しい。チヤアレストンは女の足の煽狂音樂として、女の足の絶對賦讃として、僕も既に小著「好色獨逸女」の中で研究しておいた。チヤアレストンは社交ダンスとして、一種の革命を起したものである。今日では誰も最早この踊りを以て新しい偶像と呼ぶ程の者はゐないが、果して今後もこのダンスが生命を保つかといふ疑問は屢

湧起る。多くのダンス家にチヤアレストンを六ケ、まだ〳〵[illegible]終てさせたものだ、そのブラツク・ボトムも。洲の社交ダンス界から消え去るものでないと云へてゐる。

チヤアレストンばかりではないが、すべて新しいダンスが侵入してきた初めは、いつも誇張された粗野な形で紹介され踊られるけれども、いつの間にか次第に角がとれ、靜かになつて、社會的生命を續けるものである。そこで今日のチヤアレストンも一と月毎に落着いて、靜な、氣品のあるものになつて、生來の奇怪奔放な形を無くなしてゆく。今日のチヤアレストンでは、飛び上つたり、跳ねたり、足を蹴り上げたりはしまい。寧ろ一つの場所で足を動かさずに、膝で效果を現して踊るといふやり方である。これをフラツト・チヤアレストンといふ。或は新しいチヤアレストンをクイツク・ステツプとも言ふが、このクイツクの意味は、緩い調子の四分の四拍子のスロオ・フオツクスに相對して名付けられた丈のものである。

シミイは今から六七年前の歐洲を、思ふ存分にゆすぶり動かしたダンスである。その頗る早い調子のシミイに對して、反つて緩かなダンスが起つた。これがブリユウスである。そのブリユウスを橫斷したものが、ダブル・フオツクスである。ダブルの意味は二重に緩やかなフオツクスといふ事である。ところがこの平和なダンスを惡風の如く襲つて、あらゆるものを薙ぎ倒す

ブラツク・ボトムも何れは早く忘れた過去のダンスになる。に踊られたものであるが、それもいつかは立派な規則正しい四分の四拍子に變つてしまつた。これがスロオ・フオツクスである。同じ四分の四拍子であり乍ら、頗る早い調子のダンスと、頗る緩やかな調子のダンスとが殆ど同時に踊られた譯だ。

ワン・ステツプはダンスの中の最古い形の一つであり乍ら、入り易い型である丈に中々根強い。これによく似たパソ・ダブルがワン・ステツプから生れて、今年は一緒に踊られたのである。

今日の社交ダンスの傾向が、温雅と寧和にあるといふ事は、神經と頭腦で踊らうとした心持から、魂と心臟で踊らうとする心持に變つて來たからである。ダンスの新しい型は決して技巧的に生れるものでもなく、故意に作られるものでもない。常に現代の呼吸と脈搏とを與へられて、種々の偶然の動機が相互に作用して、衝動的に生れるものである。いはば現代の鮮明なる身振である。歐洲大戰後のダンスの消長を眺めると、そこに米國の歐洲に於ける拔くべからざる勢力が、政治經濟の問題に及んでゐるばかりでなく、社交ダンスに於ても全く米國の頤使するまゝになつてゐる事が、誰の目にも容易に認められる處だ。

ダンスの拍子

ダンスの拍子（タクト）は、ダンスの脈搏であり、ダンスの血脈である。ダンスの拍子こそダンスの生命を左右する。ダンスの拍子は時代と生活の足並であり速度である。

今日までの二三のダンスの拍子を數へてみると、クイック・ステップはメトロノオムの五十六から六十（一分間）まで、之に反してスロオ・ステップは四十八である。スロオ・ステップが四十八の拍子になるまでには、少からぬ苦心が隠れてゐる。どこの樂隊でもみな早く彈きたがつたからである。スロオ・ステップに好いレコオドを擧げると「ポシビリイ」「マイ、バアト、スツツド、スチル」「アツト、サンダウン」「アイム、テリン、ザ、バアツ」「ドル、ダンス」「サイド、バイ、サイド」「ユウ、ノウ、アイ、ラブ、ユウ」等、等。

四分の四拍子のテンポを思ひ切つて三十六にすると、ブラック・ボトムである。足を翻轉する事なしに、頗る溫和な形のブラック・ボトムは、社交ダンスとしてもつと踊られて好いダンスである。

エエル・ブリユウスはエエル大學の學生から初まつたダンスだといふが、確な所は僕も知らない。この拍子はメトロノオムの三十四である。このダンスも嚴密に言へば新しいものではない。音樂には「ザ、バアス、オブ、ザ、ブリユウス」「マチイ、ヲオタア」「トランペツト、ブリユウス」「アイ、ネバア、リアライズド」等があるが、コロンビアのレコオド九千二百十七番のエチエ、ペエカアのピアノソロが最好いと言ふ人もある。米國にはエエルといふ安全鍵があるので「エエルはブリユウスの鍵だ」といふ洒落も出來た。

新しいワルツは三十六から三十八。タンゴが三十四から三十六は、この數年間變りがない。ワン・ステップ又はパソ・ダブルは六十と決まつてゐる。

ダンス音樂

ダンスが繪や彫刻や詩に及ぼした影響は甚だ明かである。ダンスから生れた他の藝術品を、僕はいくらでも指摘出來る。唯音樂だけはダンスから生れたものを僕は知らない。リズムがダンスを作る事は確である。然しダンスが音樂のリズムを作るかといふと之は甚だ疑はしい。チヤアレストンはジヤツズの生んだものだとは言へるが、チヤレストンからジヤヅは生れてゐない。勿論ジヤツズの作曲家はダンス界の要求に應じてメロデイを作り出す。そればかりではない、チヤアレストンの角をすり

へらして、衣裳に奇抜なタイツ・ク・ステップやスロー・オ・テ・オーター[illegible]オを作り出したのは、實に音樂家であつたと見ても好いのだ。

このやうに音樂と社交ダンスの關係は、他の藝術との關係とは大に趣を異にしてゐる。試に僕はこの點をラッグ・タイム以後のダンスに就いて二つ三つ調べてみやう。

近代の社交ダンスの音樂は、世界で最非音樂國の英國と米國とから生れてゐる。今日では米國を以て音樂を知らない國民だとは誰も言ふまい。二十世紀の初めのダンス音樂のラッグ・タイムも米國から起つて、シンコペエションを利用し、亂暴な間の置き方をして、驀進する足並で音樂界に入つて間もなく、米國の寄席では黒んぼが之に合はすダンスを初めた。一切の秩序を殺して叫喚するこのリズムは、聞いたばかりでは滅茶くちやに押し倒し合つてゐるやうであるが、實ははつきりした四分の二拍子の中に按排したものである。ラッグ・タイムはダンス音樂の革命を起したものと見なければならない。ダンスとしてのラッグ・タイムは永續きがしなかつたが、そのリズムは殘つた。これがステップ、メロディに移つていつて、次第に穏な形を備へるに至つたが、その特色としたシンコペエションは遂に今日のジヤズの淵源となつたとも考へられやう。

ラッグ・タイムが第一革命ならば、タンゴの出現は第二革命である。タンゴのリズムに於ては[illegible]ゐるてラッグ・タイム[illegible]生れたもの[illegible]ば、タンゴは南米の血を享けたものである。タンゴの特色はラッグ・タイムの正反對だと言つたら好いであらう。四分の四拍子で初めの四分の一に強聲部をおく處は「カルメン」のハバネラのリズムと同じであるが、もつと緩やかに、憂鬱な性慾的な處を持つてゐる。そのメロディは短音階であるが、その中に西班牙風に誘惑的な明るい長音階を押し込んである。かういふダンス音樂はマツルカ以來嘗つて無かつた處である。

タンゴのリズムは靜かな物憂げな情趣に身を任してゐ乍ら、その血管の中には抑へつけられた血が燃えてゐる。遠くのものを誘ひ呼ぶが、それが遠く離れてゐる間は、暗い悲しげな心持である。それが近付くに從つて、晴々とリズムは長音階に飛び移る。その美しい遠方はまた忽にかき消されてしまふ。再び失はれた幸福の悲しい情趣となる。タンゴはすべてが明るい憂鬱であり、甚だ貴族的な音樂であり、人生のリズムである。

フオツクス・トロットに至つては、實はラッグ・タイムの遺族だと考へて好い。ラッグ・タイムに倦きてしまつて、ワン・ステップ、ボストン、タンゴの殘り物を集め、一緒にして煮たものである。結局ラッグ・タイムの生れ變りである。然し甚だ

多くの愛すべき旋律を作り、絶えず新しい陰影と變化と機智とを見せるので、ダンス音樂の愛婿者として、大衆音樂として、今日なほ人氣を得てゐる。

近代のダンス音樂の特色は、短音階の旋律が長音階の旋律を押しのけて、自分が主人顏をし出した事と、シンコペエションの發達にあると僕は思ふ。前者はタンゴに最好く現れ、後者はジャッズ音樂の生命となつてしまつた。(ジャッズ音樂については、既に本誌四月號で思ふ所を述べたから、茲には全く略しておきたい)。ジャッズは今やダンス音樂以上のものに成らうとしてゐる。もし之に代はるべきものが現れたら、ダンス音樂の第三革命と言はなければならぬ。

ダンス十戒

(ある人の曰く)

1、決して自分の足許を見なさるな。見たからといつて、決してうまく踊れるものではありません。

2、上體をあつちこつちに振る勿れ。

3、決して誇張する勿れ。飛び上る勿れ。こごむ勿れ。ダンは角力に非ず。

4、見物の人の目をひかうとするやうなステップはやめて下さい。

5、意氣揚々たる態度で登場する勿れ。

6、いかなる場合にありともダンス場の定則を忘る勿れ。必ず右から左へ踊るべし。

7、ダンスは樂みと遊びと知るべし。

8、しかみ顏をする勿れ、かの一懸生命になりていきむ時の如き顏を。舞台に見る如き八の字を寄せる勿れ。

9、走らんとする時は、先づ歩まさるべからず。即ち一つの型も容易に踊れざる内に、五つの型を試みる勿れ。

10、うまく踊れぬとも悲觀する勿れ。君は歩く事を學ぶに、二年半を要したり。況んや踊るに於ておや。

シミイが來た時

ある國の新しいダンスの流行は、それが何時とはなしに入つてくる場合もあるし、傳染病のやうに瞬く間に蔓延する時もある。そのペストのやうにはやる時の人達の狼狽さ加減は、全く観物である。例へば千九百二十一年の冬、獨逸に初めてシミイが侵入して來た時は、獨逸ダンス界は全く周章狼狽して、爲す所を知らなかつたものである。僕はその時の有様を今も折々思ひ出してみる事がある。

千九百二十一年の[illegible]にスコッチッシュ・エスパニヨル巴里から[illegible]入つて来た。これは巴里の「カジノ、ド、パリ」でやつたレビュウの「巴里はジャッズを弄す」の舞台で、ハリイ、ピルサアが「わたしの家」のメロディに合せて作つたダンスである。名前にも似合はず、踊つて見れば何でもない、少し横にぶらぶらする丈である。音樂は粗野なフオックス・トロットに少しばかり新しい陰影をつけたばかりである。するとその翌日に伯林のあるダンス場は突然「巴里オリヂナル、ジャッズ、バンド」の名を掲げて、奇怪な音樂を初めた。初めて聞いたものはタンゴなのか、ワン・ステップなのかさつぱり分らない。すべて早過ぎて騒々しい。どんなにスポオトで馴した足でも、この振には敵はない、この音樂で踊るのは不可能だ、と誰も思つて唖呆れ驚くばかりであつた。スコッチッシュ・エスパニョルの流行を輕蔑した人達は、今や全く爲す所を知らなかつたのである。

ところがそこへ二三の外國人がこのジャッズ音樂に合はして踊るべきシミイを教へたのである。これを忽ち呑み込んだのがダンスの教師で、食るやうに覺えて、覺えた通りに又教え擴め教え盡した。狼狽不安の伯林は全く一夜にしてジャッズとシミイの世界になつた。あらゆるダンス場のオオケストラは、今迄[illegible]バンド」と称し、[illegible]し、[illegible]し、[illegible]き、跳り、袋へ、目汗を流した。

シミイは黒んぼのかみさんがよごれたシャツを着たまゝで、洗濯する代りに肩だの腹だのを振つて、そのよごれを振ひ落さうとする恰好から来たものだといふが、このダンスが黒んぼから紐育に入つて来た時は、少し踊られたかと思ふとぢきに消えてしまつたものである。警察から禁止されたともいふが、米國に於けるシミイの生命は實に果敢ない短いものであつた。ところがこのシミイが、紐育で佛蘭西のダンスの先生の目に入ると、先生は忽ち次の船で巴里に歸つて、これに多少の欧羅巴風の味を加へ、今日までのダンスはすべて楕圓形であり、タンゴ、ワン・ステップ、フオックス・トロットの何れを見ても静かな軟かなものになつてしまつてゐるから、新しいダンスは宜しく鮮明な角のある尖つた線で現さなくてはいかん、と言ひ出してシミイを宣傳し初めたのである。そこで足は電氣をかけたやうに角をつけて外に内に歩き、爪先で踊るのは止められて、膝を曲げずに硬直したやうに延ばして歩き、更に全身を鋸のやうに震はすダンスを初めて、之を伯林にも傳へた。このダンスの表

現主義に折よくぶつかつたのがジャズである。

シミイはその後ピアノ、セロ、ヴイオリンで彈かれるやうになり、その狂姿なダンス振も忽ち影を潜めてしまつた。スコッチッシュ・エスパニョルもその後フォックス・トロットに吸ひ取られてこれも影を失つてしまつた。僕は僅かばかりの間であつたが、シミイの渡來に金伯林のダンス場で負けず劣らず足を震はし腰を震はして踊つてゐた人を思ふと、今でも苦笑せずにはゐられない。

舞踏靴

女の足は舞踏靴をはいた時程瀟洒な意氣なものはない。同時に踊る女にとつて、靴程大事なものはない筈である。舞踏の衣裳は勿論女の命から二番目のものであらう。然し衣裳が惡いからといつて、理論から見れば踊れないものではない。ところが靴となると、少しでも足に支へるとか足に合はないとなると、どんなに面白い舞踏會でも、一晩中不愉快なものになつてしまふ。或は踊りの晩には衣裳よりも靴の方が大事かも知れない。

女の靴は踵の高い程美しいものである。然しダンスの場合には、必ずしも餘りに高い事は不必要である。殊に不斷踵の高い靴をはき馴れない女は、ダンスの時ばかりに踵の高い靴を選ぶのは危險である。それよりもダンスの靴としては、なるべく淺い、締め金の無い、所謂ポンプといふ形の靴が踊り好くもあり、足も美しく見えるものである。靴の色は勿論衣裳に合はさなければならないが、紅でもなし青でもなしといふ場合には、黑の絹の靴をはくのが一番無難である。

靴を足にしめるには、締め金もあり、絹の紐もあり、絹のリボンもある。足癖が惡くてじきに靴が脱げさうになる人は、寧ろリボンでくくり上げる靴の方が安全だ。色物のリボンで足の甲がくくられて、甲の肉が僅に盛り上るのは、男の身に極めて好色的に映るものである。けれども足に當る接觸の程度は、足を振へば落ちる程度が好い。締め金のないポンプは之よりも多少しまつてゐなければならないが、滑かに、しなやかに、軟く、足に當つて强からず緩やか過ぎずのポンプであつたら、舞踏靴としては申分ない。

日本の草履は希臘羅馬時代のサンダルと大差ない。足にゆるいサンダルで踊るのはどんなものであらう。絢爛目を奪ふ日本の裾模様の下から、黑く細い靴先を小鳥の如く覗かしても好いではあるまいか。

世界ダンス選手權

さ二六十日目の[illegible]に[illegible]、[illegible]チソン、ミ・ニア、ミアデン[illegible]たダンス、マラソン競技は、遂に四百八十時間を踊り抜いた後、衛生法規の命令で禁止されさうである。

これは長時間のダンスの競技會で、出來る丈そろそろと踊り續けるやり方である。之と違つて最上手な社交ダンスの世界選手權を與へる爲に、毎年巴里で催されるものが國際ダンス競技會である。選手はアマチユアばかりで、ダンスのオリンピツクと言つても好い。

千九百二十八年のこの競技會は、五月十二日から二十日まで續いて開かれた。財政上の援助は佛蘭西一流の出版者である「ユメチア」が引受け、佛國美術教育大臣が名譽總裁になつて現れてゐる。少くともこの場合のダンスはスポオトであり、政府の援助と新聞の後援によつて開かれるもので、警視廳の一喝によりて轉々するダンス會とは天地の差である。このアマチユアのダンス選手が、他のオリンピツクの選手同様に巴里では有名である事は、世の人の知る通りだ。

今年の競技會では、約百組のアマチユアが參加したが、一週間の初めの五日間には之が殘らず踊つて、その中から準決勝として二十組が選ばれ、あとの二日間にこの二十組が決勝として踊るのである。審判官は英國人四名、佛蘭西人四名、諸威人一名、[illegible]人[illegible]た[illegible]チヤアンストン・サロン、スコツト・チ[illegible]ニー・ブリユウス、[illegible]

そこで決勝の結果は一等が八十一點、二等が七十四點、三等が二十七點を得たが、一等のダブリユウ、エツチ、ハアス君は英國人で、千九百二十六年、七年に續いて世界選手權を獲得し、更に今年もフエイ、フルバアト孃と踊つて、引續き世界記錄の保持者になつてゐる。

この競技の審判方法は、まづ十人の審判官が踊つてゐる選手に夫々採點して、踊りが濟むとその採點數を合計してみる。それから十人がその點數の順序で選手權を決定してよいかどうかを決める。もし六人以上の審判官に異議がある場合には、この問題になつた組を又踊らしてみて、優勝者を決定するのだから、中々念の入つた採點法だ。

ダンスはスポオトか

そこでダンスにマラソンがあり、世界選手權の爭奪があるとなると、ダンスもスポオトか、といふ問題が出て來さうである。ダンス、マラソン競爭の禁止の理由には、保健上の衛生もあるといふ事も入つてゐる。今年の國際オリンピツクの女子八

百メエトルもが、女の保健の上から殘酷だといふ非難が英國に起つたさうである。八百メエトルを走るのがスポオトであるならば、著しく體力の競爭で二十日以上を踊るのもスポオトと名付けてよささうである。僕は嘗てドレスデン郊外のダルクロオズ學校の韻律舞踊を見た事があるが、之ならば明にスポオトであると斷言出來る。然し社交ダンスがスポオトか、といふとなると、僕は、然り、スポオトなり、と答へたくて堪らないであ乍ら、なほ僕の心を怯く哭らせるものがある。

それは外でもない。日本にも嘗つて「新馬鹿大將」の名を以て知られた映畫の喜劇役者マツクス、リンダウが、先年巴里のホテルで夫人と共に自殺した時に、唯一人の愛する娘に書き殘した遺書の中に、我々の死は畢竟お前の母親が餘りにダンスを好んだ爲である。お前は他日成長した時に、決してダンスをやらずに、スポオトを嗜んでくれ、スポオトが好きになつてくれ、といふ意味の哀切なる文句があつたさうである。この悲むべき道化役者は、妻の不貞を憤り、一人の娘を友に託つて、遂に妻を殺して共に死んだのであつた。

この遺書は明にスポオトとダンスとを區別してゐる。僕はこの悲痛なる新馬鹿大將の言葉に面を打たれては、ダンスはスポオトなりと斷言する事が、今日までは出來ないのである。

(昭和三年八月)

八ポイント欄

一、「この八ポイント欄」は有名無名を問はず、評論家、旅行家のために開放して埋れたる智識と隠れたる技術とを世の中に紹介しようと思ふ。故に「八ポイント欄」への投稿を特に歓迎する。

一、原稿は出所責任を明かにするため投稿者不明のものは採らない。紙上の匿名も許さない。そして掲載した分には十圓以上の薄謝をする。枚数は四百字詰五枚以内にコンデンスして頂きたいことを希望する。

嬌態のヴエヌス

森口多里

ナポリの國立美術館の玄關に這入つた時私は一種の淡い色情的な好奇心と喜びとを感じた。それは此の美術館の最も奥まつた一室にあるべき筈の或る特殊なヴエヌスの大理石像に對する内密の豫感から來たもので、譬へてみれば、人の知らぬ郷の美姫の許へと導かれて行く童話のなかの主人公にでもなつたやうな氣持であつた。

ヴエヌス(希臘名アフロデイテ)は愛の神でもあり美の神でもあるだけに隨分艶麗な容貌姿態をとつて表現されてゐるが、ナポリのヴエヌス・カーリピーン程嬌冶なものはあるまい。其の嬌冶が餘りに煽情的なので、付ては人間共の熱情を籠めた眸の痕が其の白い石の肌の上に絶えなかつたさうである。何故に煽情的かと云へば、此のヴエヌスは羅衣の裾を高くからげて肉附きのよい純白の下半身を明白に露出させて居るからである。加ふるに女神は後ろを振り向いて其の視線が腰から足にかけての優美な曲線に沿ふて流れて、いかにも吾が身の美しさをひとにも自慢しみづからも見惚れてゐるかのやうである。

女神ヴエヌスが此のやうな「人間的な、餘りに人間的な姿態をとるに至つた因緣に就ては一つの物語が傳はつてゐる、——むかし希臘の片田舍に二人の娘をもつ百姓があつた。或日此の姉妹は各自の お尻の自慢をやり初めて互に敗けてはゐなかつた。いつまで言ひ爭つても果しが無いので、結局往還に出て通りがゝりの者に審査して貰はうといふことになつた。そこで姉妹は往還に出た、すると折よくひとりの若者が通り過ぎるところであつたから、姉妹は早速呼びとめて裾をからげてお尻の審査を頼んだ。若者は姉むすめのお尻の方が美しいと答へた。勝負は是で決まつたが、可愛さうなのは若者で、彼は其以來姉むすめに戀慕して、町に歸ると同時に病氣になつてしまつた、そして病氣の源因を秘かに弟に打ちあけた。弟は直ぐに田舍に飛んで行つて姉妹に會つた。しかるに今度は弟が妹むすめの方に戀慕してしまつた。兄弟の父親はそれを識つて、もつと身分のよい家から嫁を貰つてはどうかとすゝめてみたが、兄弟がどうしても言ふ事を聞かないので、遂々父親も讓歩して百姓の姉妹を息子共の嫁に迎へた。町の人達は此の二組の若夫婦を「カーリピー

ジ」と呼び慣はした。カーリピージの夫婦は富裕の身になつてヴェヌスの神殿を建てた、そして其のヴェヌスを矢張りカーリピージと呼んだ、といふことである。

　これがヴェヌス・カーリピージの縁起であるが、此の女神の祭儀は曾ては希臘全土に隨分傳播して、他の神々が廢滅してしまつた後迄でも此の女神だけは依然として私祀されてゐた。其の祭儀は次いで伊太利に傳來されて、此處でも矢張り澤山の信者をつくつたが、戀の念願成就とか何んとか、さういふ方面にお利やくがあるといふので信仰されたのであつた。

　ナポリ美術館所藏のヴェヌス・カーリピージは羅馬で發掘されたものであるが、制作地は希臘で、紀元前三世紀乃至二世紀のものであらう。高さは五尺位であつたと記憶する。彼女が故更見せやうとしてゐる部分の豐かな肉附きと美しい曲線とに暫時私は見惚れてゐたが、そのうちにふと氣がついて淡い羞恥を感じたので、眼を轉じて女神の朗らかな容顏を仰いだ、すると其時女神の雙の瞳が微かに瞬いたやうに私には思はれたのであつた。昔は素足の娘達や白拍子が、或は五色の花束を、或は青銅の鏡を、或は鍍金の腕輪を、それぞれ奉納して内密の希願を祈める毎に女神の瞳は實際に瞬いたことであらう。（特選讀物參照）

柔かい薔薇の花輪を一つ妾が神木に懸けるとすれば、それは胸のなかで崇めてゐるアフロディテの神のためよ、妾の肝に缺くものを授けて下さる神さまはアフロディテさまひとりであるから。

けれども懸ける願ひの筋を高い聲では申し上げまい。爪先立ちで背延びをして、妾は樹皮の隙間から、そつと秘密を打ちあけませう。

——ピリテイスの歌——

猥字斷片

神代種亮

「御婦人」

朱舜水で高名な地名の「水戸」は、支那では遊女屋の義にも通ずると石井研堂翁の話である。又、昔支那で娼妓にプルーフを讀ませたので校書の語が起り、今でも書館の語は使はれてゐるから、新たに出版屋を興して日本を四百餘州人口四億の支那に輸出しようとする人が有るならば、日本東京何々書館などとは附けぬが一策である。と同時に、龜の字を屋號に附けては、殊に北支那では嫌はれるから、此れは避けたがよい。龜は忘八と呼ばれ忠孝節義禮智廉恥の第八の恥を忘れるものとして、近代の支那では斥けられてゐるものである。滿鐵會社が初めて日本觀光團を請待した時に、大阪で歡迎會餘興の最後に「鶴龜の舞」を出されて而も其れが最後の歡迎會であつただけに、一切の歡待を帳消しにしたことがあつた。

　日本には日本の漢字使用例が有るとしても、場末の支那料理屋ならばいさ知らず、東京驛の「御婦人室」には、場所柄だけに新來の高賓を仰天せしめたものであつた。今書き替へられてゐるのは、之に氣附いたからである。御は支那では「論語」の六藝「禮樂射御書數」以來三千年、字義に變りは無いのである。「御婦人」は支那では婦人の騎御で

なくて「婦人女子」と言ひ通すなら、既に何處かの會館や倶樂部に「御婦人字」や「御婦人用」が設つてゐるならば、或ひは支那婦人をして悦然快然たらしめるものが有らう。御の字には「馬を使ふ」「馬乗りに乗る」の義も有る。

「紅潮」「新人」

俳句の雜誌に「海紅」と云ふのがあつた。統領は碧梧桐子で、「新傾向」なるものを唱へて「ほとゝぎす」に對立して居つたものである。其の題號を逆さにしたやうな「紅潮」と云ふ雜誌が近年出てゐた。村上鬼城翁、風見明成子の宰領する所であつた。紅潮の名の由つて來る所は不明であるが、支那では月水の異名であること既に澄江堂が說いてゐる。月々出て月々新たなることだけは共通であるが、鬼城翁の俳風とは一味の通ずるものが有らうとも想はれぬ題號である。十年前に青山邊の素人らしき版元に紅潮社と云ふのもあつた。出版意識を超脱したやうな歌集や句集を出してゐた。

海老名彈正先生は長らく「新人」と云ふ雜誌を出してゐた。赤門の中に「新人會」なる派が出來てゐた。新人は何處にも有てゐる。若し目白の丘に、新日本を標榜する團體さへ新人會を看板としたならば、似つかはしいかも知れぬ。

「春」

一風の「藤刈舟」の書が大阪の骨董屋で高値を呼んだことがある。書畫と書款識を刈る一風」と續けて讀むと「儲かる一方」と響くので、堂島界隈で持て囃されたのだと云ふ。雅號の稽めのもつけの幸であること恰も清快丸が支那で一時大いに賣れた如きものである。快の字は支那では多く「速い」の義に用ゐられるので、清潮の末季に南方では「清朝を快く撲滅する」と縁起を附けたのである。

雅號は本來雅號で、雅號そのものを利得の對象とすべきものではないが、故人のものには猥感を作はぬものが無いでもない。自ら「江戸人情本の作者の元祖」と名乘つた金龍山人の春水は、其の名が花柳の異稱らしいのもふさはしいけれども、[illegible]の名は如何であらう。太宰彌左衛門の春臺も、王侯の與座敷を想はしめるとも云ふ。近頃の書家に[illegible]てゐるが、[illegible]つた人が有つて、華人から石鼎の雅號を[illegible]く笑はれたとは[illegible]の「[illegible]」に見える名高い話柄である。石鼎は一鼎を指さして、鼎には春湖であると謂ふのである。併し殷汝耕氏に質した所に據ると、春秋、春湖、春水、石鼎と云ふ成語も無く、强ひて曲用曲解すれば別であるが、今の支那では俗語とは目せられぬさうである。但し、雅號は何等かの意義を含めるべきもので、別に「春の水」「春の洞」などでは凡みも深みも無いとのことである。

後藤朝太郎氏の說に據ると、支那では明陽の俗稱を「百八」とも云ふから、支那へ行つて何か事を成さうとする人で此の二字を名とする人が有るならば、日本人の名前に熟せない者から敬意を受ける上に於いて改名するも臨機の一法だらう。

「エビス」

箱根の關所が消えたので、何か關東關西の境にするものは有るまいかと考へた人があつた。三十年も昔の話である。それで、東京

と大阪との製造品の販賣圏とか、朝鮮に於ける多客一妓制と單客一妓制とか、商業上、風習上いろいろ調べて最後に、朝日ビールと惠美須ビールとが有名湖の今切を境界として居ることを發見し、此處に人文地理上の關東關西境界標を置かうと云ふのである。東西のビール會社が合同したのは遙か以後である。

惠比壽ビールにはローマ字で Yebisu と今猶に商標が貼つてある。發音通りに Ebisu でもなく、惠の字の正音 Webisu でもなく、念入りに也行に働かせて Yebisu である。そこでシベリアのロシア人には全く人氣が無く、とう／＼對抗會社の朝日に顔落されて了つた。一字の過ちと、言へば云はれる。其れは Yebisu のロシア式發音が、ロシア語の動詞 Ebis の第二人稱直接法現在イビーシに似てゐるからである。此の Y こそ顔に猥字である。ロシア人でなくとも、ロシアの領土内では、そもしはいろごとすビールは、店頭へは飾られない。惠美須麥酒會社は驚倣の一策としてウラジオストック行き別商標のものを企てた事もあつた。惠美須麥酒の社長で、今大日本麥酒の社長が、誰彼への手紙にも平氣で拝啓益々清祥催し候處一と書いて、一世の話柄を作つた馬越恭平老であるのは似つかはしい。

江戸の鄕神樂

松本 徳松

現在ではお神樂と云ふと、大概の人が、馬鹿踊を連想する樣であるが、馬鹿踊とお神樂とは別なものである。十二座神樂、謂所の鄕神樂は、此兩者の間に位するものであらう。二十五座、七十五座、甲神樂、以上は一個のものに付けられた別の名である。で、現在では鄕神樂を用ひて居る。是は明治七年以降である。鄕神樂といふのは神社の舞殿で演ずるものに限るので、御祭禮の時片流れの屋臺でやるのとは違ふ。あれが馬鹿踊である。そこで、江戸の鄕神樂の源はといふと、武州鷲の宮の神樂であるが、是が如何にして、江戸に入つて來たか、又如何なる人によつて廣められたか、いさゝか私見を述べたいと思ふのである。

鷲宮神社に行くと、大宮司從五位下藤原岡久が、享保十一年に書いた、一土師一流催馬樂神樂一の次第書（寫本）がある。是は三十六座あつた神樂が、種々の理由で整理された時、書かれたものだと云はれて居る。そして、大道具、小道具、衣裝、面、演出、總てが統一されて、現在迄傳つたものである。是は、江戸に土師流の崩れた神樂が、盛んになつた爲に、急にまとめにかゝつたものとは思はれる。そして、次第書の奥附に、辯文じみたものを書いて、他見を禁じた。江戸で土師流の神樂がはじまつたのは、寛文の末から延寶の始めであるらしいから、享保とでは五十年ばかりの差がある。此の間に本場とは別な意味で發達したものらしい。考古學者の説によると、鷲宮、羽田近邊はその昔土師氏の住んだ所である。一説に土師の宮が、鷲宮に轉稱されたのだといふ。即ち、土師氏の遠祖を祭神とするものだといつて居る。茲に土師一流の神樂が生れた。江戸に於ける鄕神樂發祥の地は、淺草三社權現である。そして、その社家田村八太夫が、總取締であつた。三社權現とはいふ迄もないが、淺草觀世音の靈像を引あげた、檜前の濱成竹成兄弟、及び土師の眞中知の三人を、祭神とし

たものである。松前も祖先は土師氏であるとの事だから、三社の氏も一種の土師の宮といへやう。茲に、鷲宮の神楽と稍々同時代の神楽師が生れた。是は、現在つたはつて居るい、い、ビンザサラである。斯様に考へた時、此の両者を操る系があるのではないかと思はれて、非常に面白い感じがする。尚ほ共通の點は神楽師が、その神社の社家であることである。

斯様な譯で、両者の間には交通でもあつたものと考へられる。そして、寛文あたりに、鷲宮から高橋某が田村をたよつて江戸に來たのではないかと思はれる形跡がある。そこで田村は、此の男を師匠として、配下の釜拂を神楽師に仕立てたものらしいのである。先づ斯様にして鷲宮から、江戸に入つて來たのであるから、江戸の神楽師は全部社家であつた。地方に於けるそれの様に百姓のボランチーアがやつたのではないのである。そこで、此の時代に何人位神楽師が出來たかは不明であるが、是から七十年ばかり後の、寛保三年の調べによると、「大神楽并釜拂神子共六千七百廿三人」とある。此の大神楽が神楽師なのである。で、假りに此の三十分の一と考へても相當の數である。但し、その大部分は釜拂で、本當の數は寡少それ程多いものではなかつた。それは次々の住んで居た土地の狭さからでも察せられる。彼等は釜拂の外に吉田の出張所役所の役人をも勤めて居た。此の關係から淺草新堀の吉田の神楽屋敷に住んで居たのである。是は現在の新旅籠町である。後には人數の増した事から、麻布に其の一部が分れたのであつた。吉田神社が神様の位階を授けるので、「伊勢屋稲荷と犬の糞」と江戸名物に數へられる、お稲荷様の正一位は皆茲から出た。そこで、此のお稲荷様の神宮になるの便宜があつたものと見へて、神楽師の全部が是の神宮であつた。後世有名になつた太郎稲荷などもそれである。斯うした系統のものが二十二軒知れたが、現在では九軒しかない。是等の人達は相變らず、土師流と名乗つて居る。後には神社々々で特別のものが出來た。神田明神の神田流、根津権現の根津流、品川神社の品川流などがそれである。演ずるものは、前述の通り現在では鷲の宮とはまるで違つてしまつた。たゞ翁だけが同じである。鷲宮ではこれを「翁三神舞樂」といつている。江戸では、[illegible]といつてゐる。是は土師流で[illegible]三番叟である。そして、是を[illegible]に用ひるのが常例である。

以上が、郷神楽の略歴であるが、是には一向に茶氣のある、馬鹿は出ない。出ても非常に少いのである。鷲の宮のには十二座以外の一座に「天津岩戸神楽」だけにしか出ない。江戸のでは、現在物(岩組にして四番目)だけには盛んに活躍する。「狐の釣遊」「[illegible]どろぼう」などがそれである。故に、見物するには、郷神楽よりはもつと俗化した馬鹿踊の方が面白い譯である。

繪畫化された運命交響樂

梅津勝男

ベートホヴエンの第五交響樂、それを一名呼んで運命交響樂と言ふ。それは言ふまでもなく此曲の最初に所謂「運命のおとづれ」といふ主題「譜圖」の下にあるもの」が現はれるところから名づけられてゐる。

元來此曲は千八百五年に着手して、七年に完成した即ち作者ベートホヴェンが三十五歳の時に作られたものでベートホヴェンの一生中戀愛受難の最大高潮期にあたつてゐる時の所産である。そしていつも〳〵戀に惱んだ末が、あだとなつて獨り苦しむ。……それは神が巨人に下した運命の試練であり、慘酷を極めた鞭である。この悲慘な運命の惡戲を體驗し、そして征服したらばこそ、ベートホヴェンは永遠にこの交響樂史をもつてしても光ると言ひ得られるし、又それによつて偉大なる第五交響樂を、まざ〳〵と樂化して殘し得たと云へる。

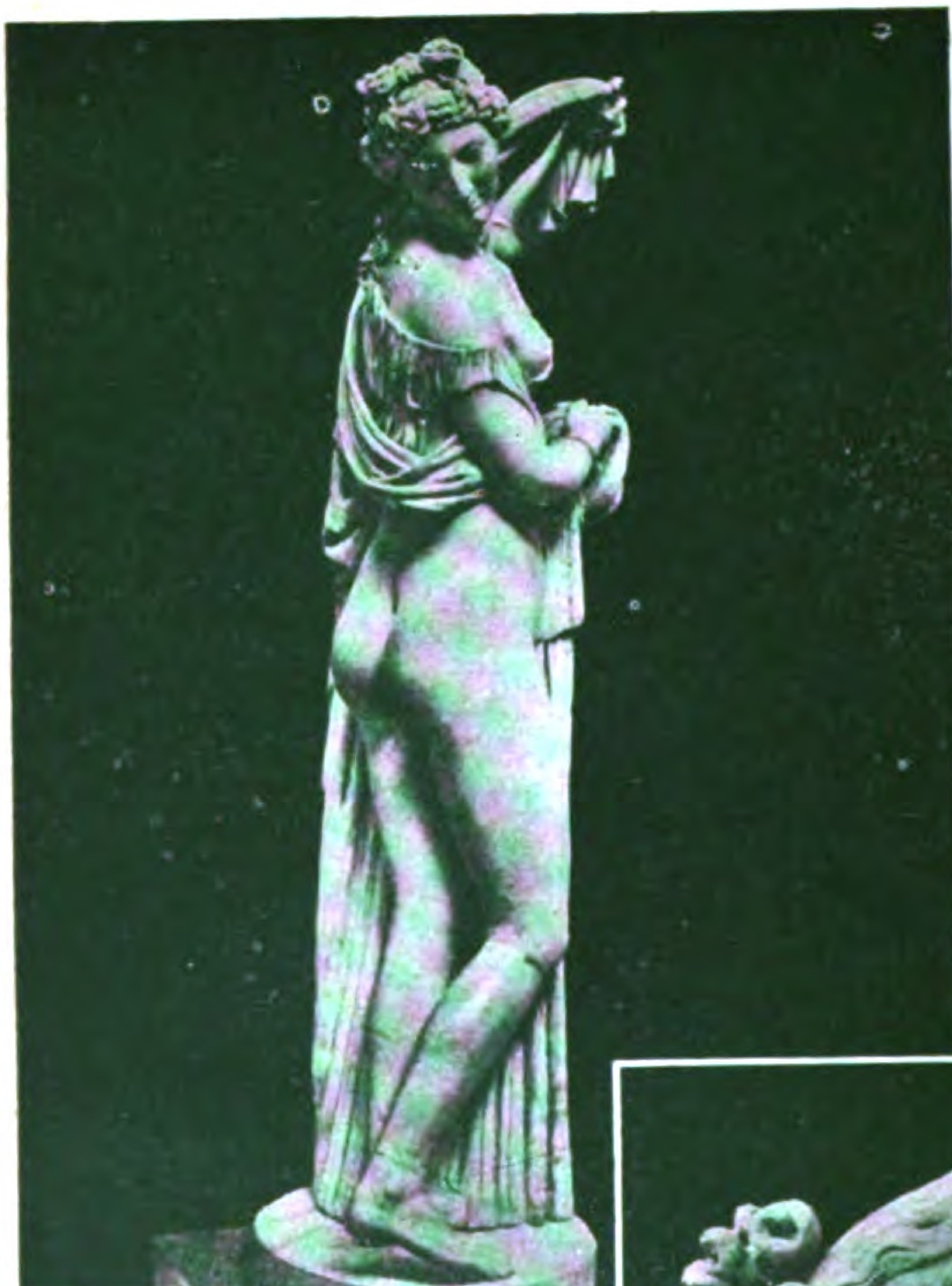
ベートホヴェンは確に戀愛の敗殘者であつた。けれども彼は戀愛を遊戲化しなかつた。彼の戀は、まことに眞劍であり過ぎた。それだから彼はいつも〳〵失敗した。そして一方に英雄的高踏主義を高らかに振り翳してゐながら、運命に對する諦念といふ悟りを開いた。即ちそれは宗教と音樂が同一素質であることを無言の裡に表現した。この運命交響樂もその一つの體現である。

此の五番交響樂の特徴、それに音色の經濟にある。もちろん本質上から言へば斷とも、三番の英雄交響樂に劣つてゐるけれど、其處にはモツアルト風の模倣は全然見られない。三番交響樂は英雄とても運命には反抗出來ないことを說いてゐるに反し、この五番はより一步進めて、すべての人が運命に跪座し、そのなすがまゝに委することを說く、即ち彼の廣汎な人生觀であり、最後に神への讃歌を奏してゐる。然し未だ此の五番では內的勝利の全般は未解決のまゝ殘され、それが八番交響樂に於て完璧なものとなれた、前提となつてゐる。

特選譜例に掲出された譜例1は、シドラアがベートホヴェンに質問した時、ベートホヴェン自身の答へた言葉 かく運命は扉を敲く、即ち恐ろしい運命の力そして人間意志の鬪爭を最近ジョセ・セガレールといふ畫家が、繪畫化したものである。數奇な運命の神は今やノツカアを、コツ〳〵とたたいてゐる。神こそわれ〳〵の定められた生命の織り出す綾の糸の神秘を、ひとり知つてゐるといふことである。

譜例2は、すべての人はその運命に、或は心から諦念をもつて從ひ或は諦め得ないで反抗するさまを描く。それはこの交響樂の第二樂章に現はれる前半である。そしてやがて譜例3の反抗することの無益なることを悟つて斷念し、運命のなすがまゝに、悲哀歡喜とりどりに生の終焉を肯定するさま、即ち第二樂章の後半を畫化したものである。

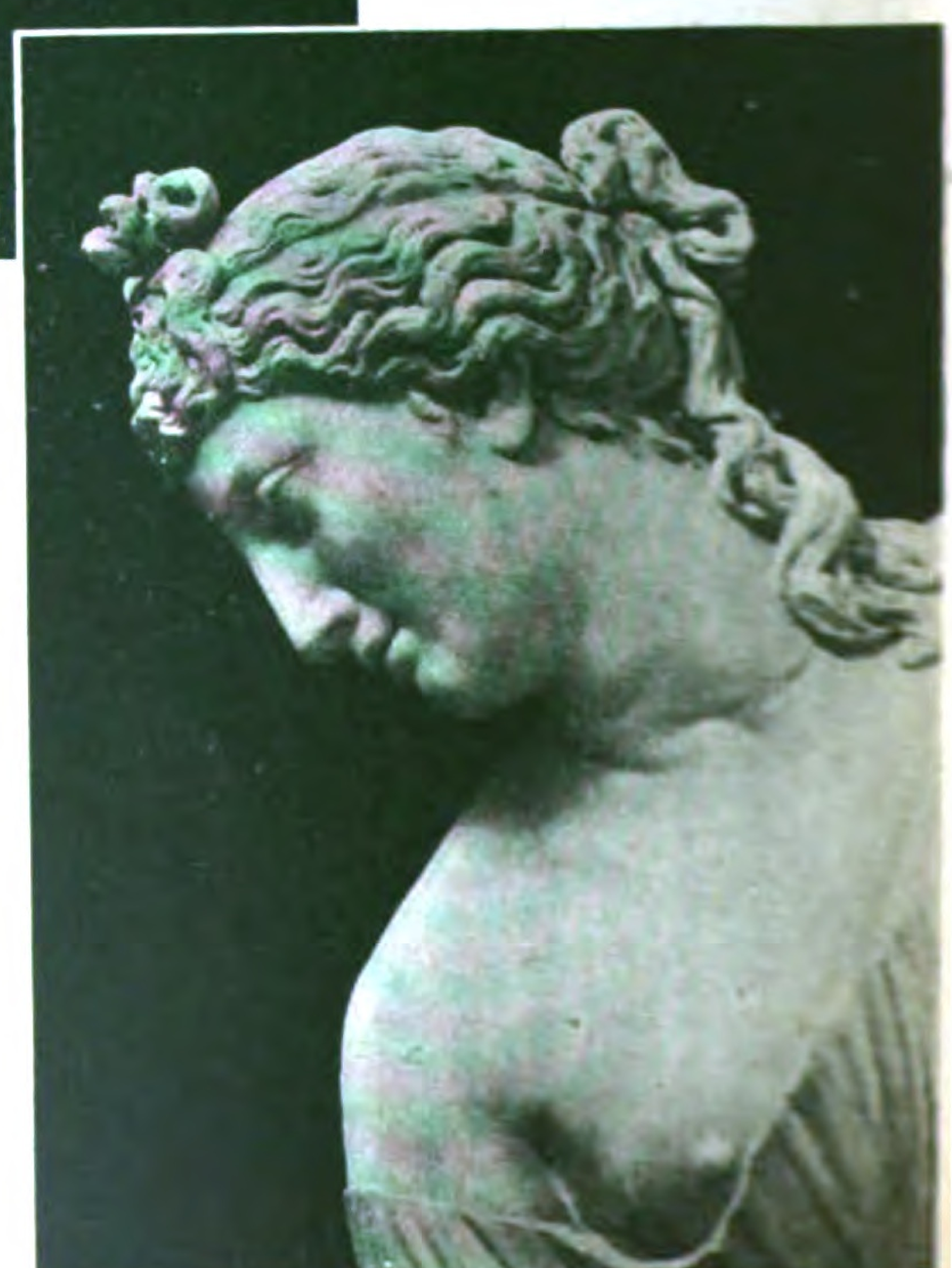
譜例4は、畫家の言ふところに據れば、ベルの音に魅入られたベル爺の娘が、巫女の留守中に禁を破つて己が愛人に與へられた運命を呪咀するにうち鳴らされる、ベルを結びつけてしまふとある。けれどもそれは、この交響樂を繪畫化した畫家の當推量であつて、確にそれは第三樂章に於ける最高潮の纖麗なメツセージが現はれると、遙か彼方の谷間から聞ゆる妖精の國の角笛の神秘的な響を誤つて解釋したものに違ひない。



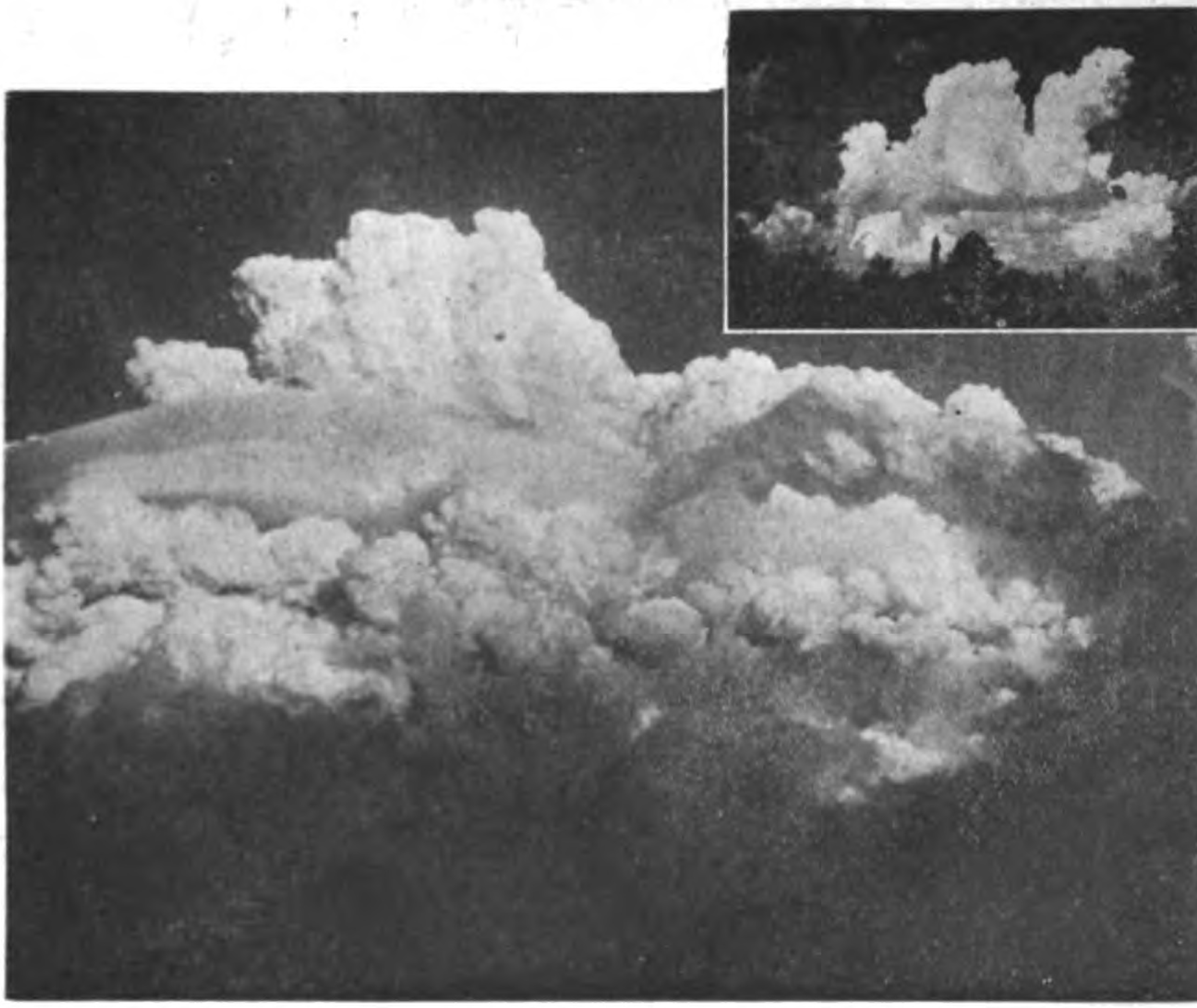
嬌態のヴエヌス

森口多里

美と愛との神ヴエヌスは古來繪畫彫刻に或は優雅に或は艶美に表現されてきたが、此處に見るヴエヌス・カーリピージ程に嬌冶たものはあるまい。是は希臘の大理石像で現在は伊太利のナポリ美術館に安置されてゐる。餘りに嬌*



*艶な魅力を感じさせるので、曾てはそれに魅惑された人間共の熱い接吻の痕が女神の白い石の肌の上に絶えなかつたさうである。また此の女神が斯うして纏衣の裾を高くかゝげて下半身を赤裸々に見せてゐることに就いては、其の起源を説明するところの奇拔な物語が傳はつてゐるのである。（本號八ポイント欄參照）



火事の雲

國富信一

日射が強い時には熱せられた地面に接して居る空氣は暖められて上昇し、上空で冷却するために雲を生じます。斯うして出來た雲は夏に多く、積亂雲とか入道雲とか雲の峯とか名付けられて居て仲々雄大なものです。つまり此の雲は、地面から立昇る激しい上昇氣流に依つて生ずる雲で、其の昇騰の勢力が大なるものは十粁位の高さに迄も昇ります。又昇騰に際して極めて複雜な渦動を生じつゝ昇りますのが、其のムク／＼とした形に現はれて居ます。同時に又昇騰の勢力が激しいため、周圍の空氣との摩擦により多量の電氣が雲中に發生しますから雷雲となります。夕立を降らす雲が卽ち之れです。

所で激しい上昇氣流が起れば必ず斯うした雲が出來ますから、大火事の際などでも矢張り激しい上昇氣流のために此の雲が出來ます。斯の大正十二年の關東大地震の際東京市や横濱市の上空に出來た雲が卽ち之れです。然し此の時は水分が不足して居たゝめ雨を降らす迄にはなりませんでしたが、電光は盛んに雲中で閃いて居ました。米國では大山火事のあつた際など盛んに此の雲が發生するそうです。



ネストリアン教の十字發見

鳥居龍藏

私は今度東部内比利亞、滿洲、蒙古等を探査したが、その滿洲の鞍山で多くの古墓を發掘調査した。これ等の古墓は中々有益なる結果を得たが、就中、今玆に記するものは最も面白いまた極めて大切なる事實である。

この古墓は地下に存在するもので、すべて塼をもつて八角形に組立てられ、内部は上段と下段の二ケ所となつて居る。上段には三人の人が葬られて居るが、そのうち中央にあるものは十四五歳のもので、左右は五十歳のものである。その一人は女子らしく金屬製の耳飾があるそして此處には天目製の德利が二個置かれて居る。更に下の段には四五十歳の人が四人葬られ、中央に小さな鏡が安置せられ、それとともに白磁製陶器の小さな茶碗が各々三個置かれて居る（人の歳は齒その他にて調べた）

以上の埋葬に、尙上段と下段との中央の隅に都合七個の瓦製の十字が置かれてあつた。これ等の十字は玆に比較對照考證をさけるが、まさしくネストリアン式十字である。これに據て此處に埋葬せられた者は、同教と深い關係があることが推知せらるゝのである。

此處からまた『感平元寳』と『祥符元寳』との二個の錢が發見せられた。この錢は北宋のもので、各々互に僅かに十年ばかり相違のあるものである、私のこの二個の錢、鏡その他の物から推考してこの墓が今から九百年を少し去るものと思はれるので、卽ち墓の主人は遼人（契丹）で時代は遼の聖宗あたりのものであらう。これは日本では藤原氏時代で彼の道長の當時にあたるらしい。

以上九百年前、キリスト教たるネストリアンが滿洲に入つて居つた事は、自分ながら這は學問上頗る面白い發見と思はるのである。

寫眞は八角形塼墓で、私の撮影したもの。十字、德利、茶碗、鏡、耳輪、錢等の存在に注意せよ、寫眞の白色は人骨である。圓圖の十字は七個のうち完全なものをスケッチとした、長さ七寸二分、厚さ一寸六分。



（上）ムーヴイトンのセット撮影　これは音波をフキルムに寫す方法で、撮影機と吹込機とはシンクロナイズするやうになつてゐる。演じてゐるのはマツヂ・ベラミイ孃。（下）圓盤使用の發聲映畫を劇場内に設備した設計圖。

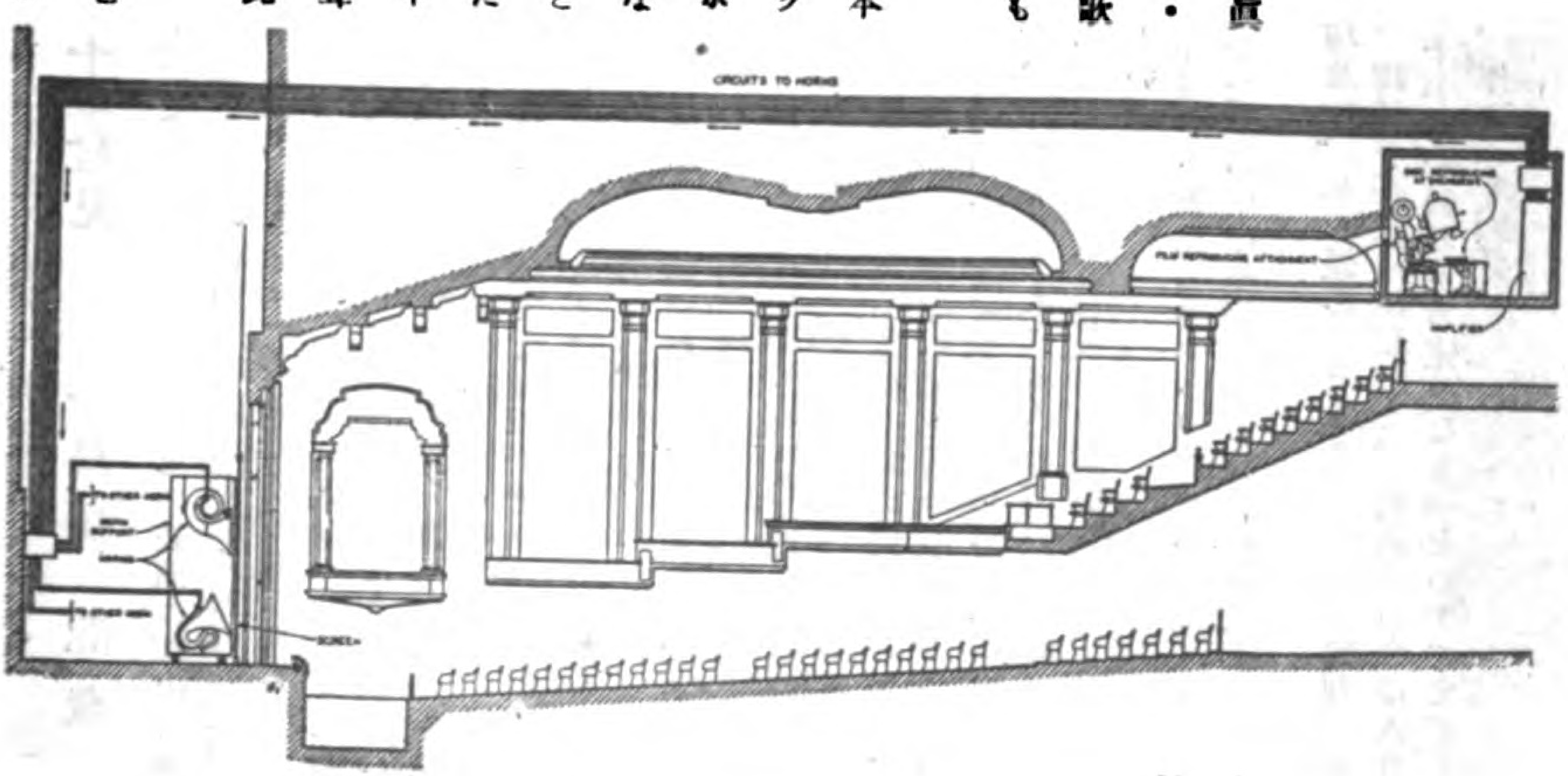
發聲活動寫眞

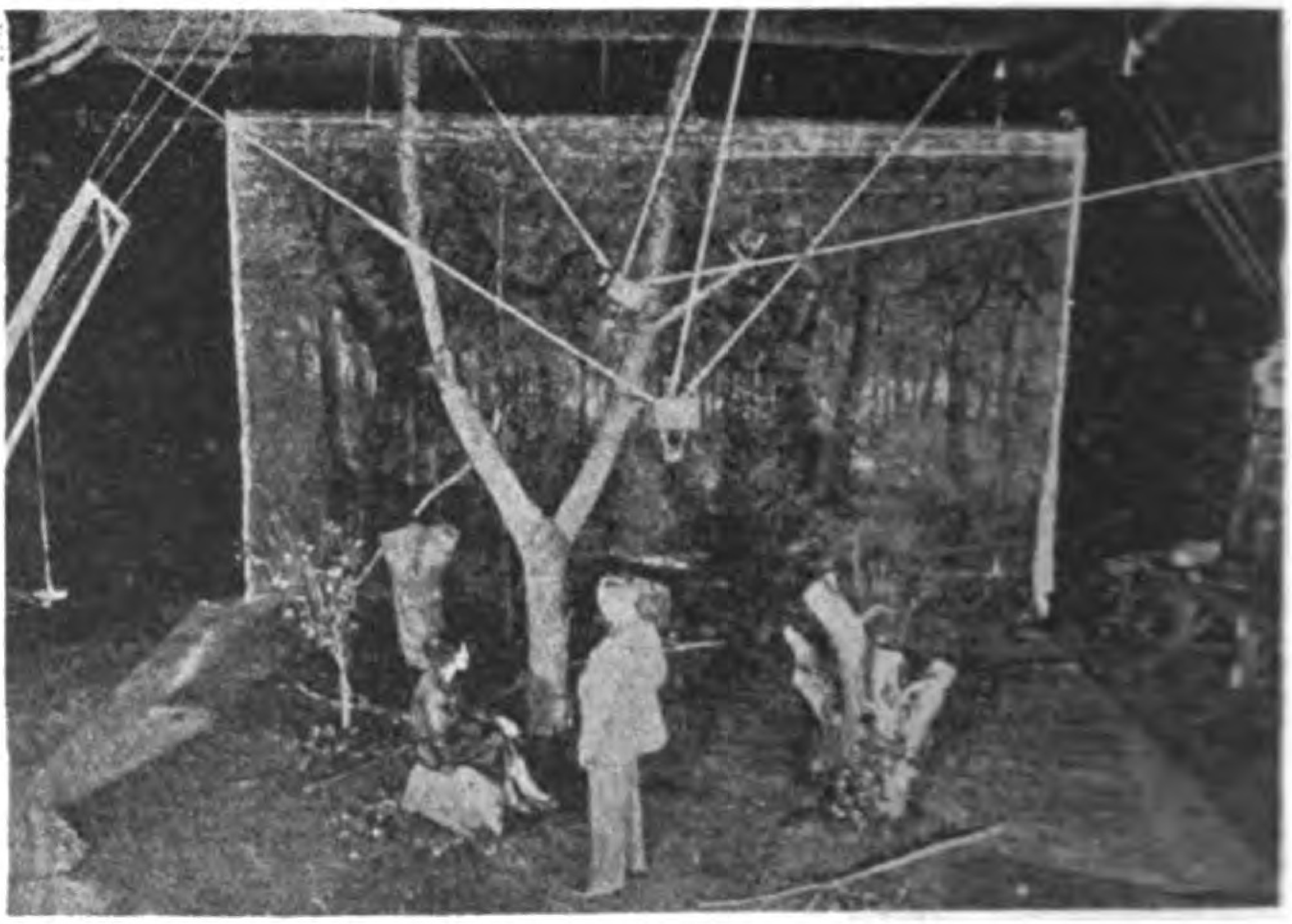
森岩雄

現在の映畫界最大問題は發聲活動寫眞です。アメリカの大會社は續々サンド・プルーフのスチユディオを建て、臺詞や歌の巧い役者を契約し、藝術家も商賣人も今や血眼騒ぎです。

大體是には二種類あります。昔、日本に來たキネトホンの原理により、マイクロフォン吹込法とオルソフォニツク・ホルンに依つて、立派な音が出るやうになつた蓄音機を利用し、圓盤を使用し、畫と音とがシンクロナイズするやうになつた式のものと、發聲映畫の理想論たるフキルム膜面に燒付けた音波の再生音を擴聲機によつて擴大して聞かせるものと、此の二つです。

發聲映畫の實狀は、目下、形容樂器を主とした一二巻喜劇、寄席藝人などの



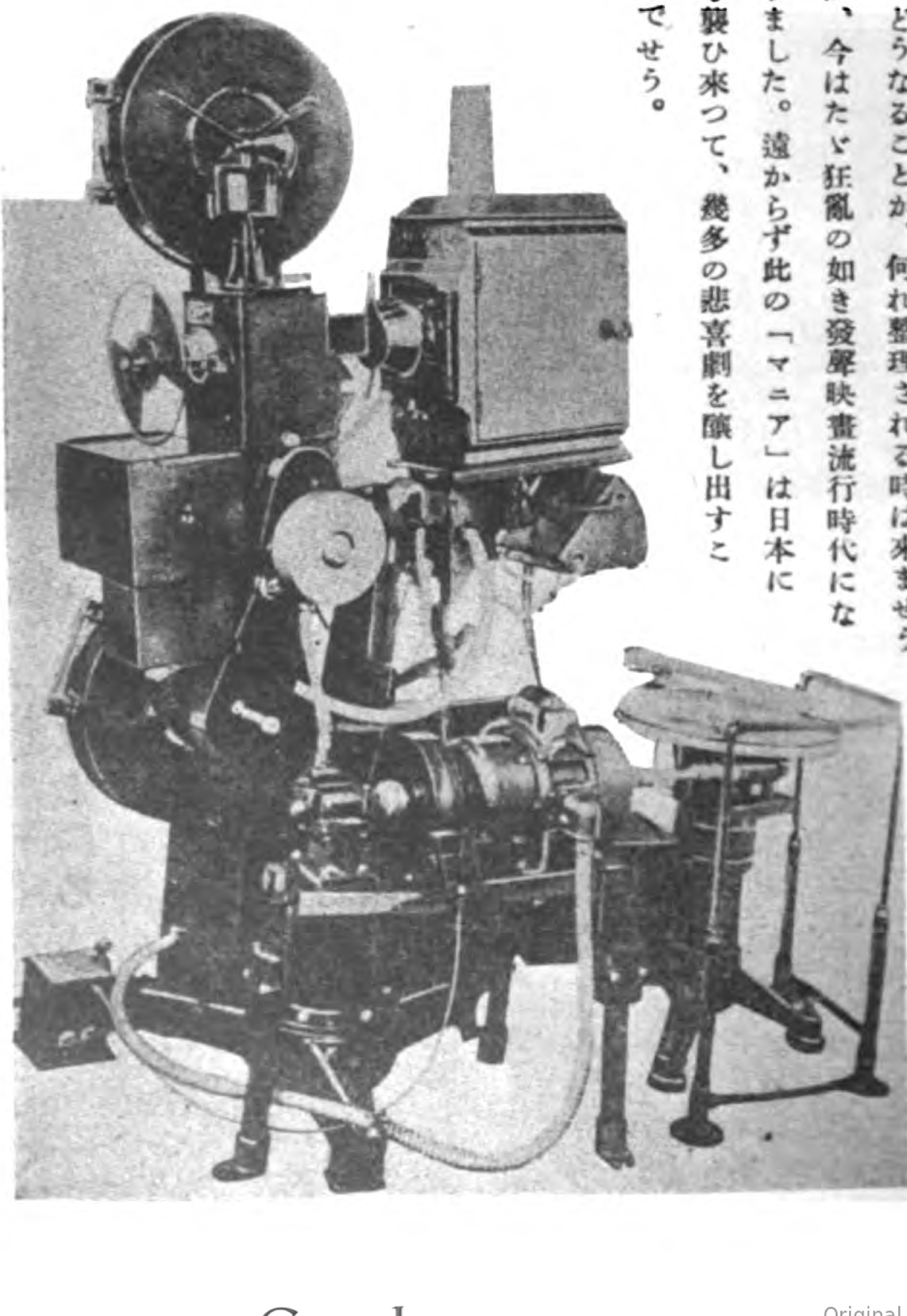


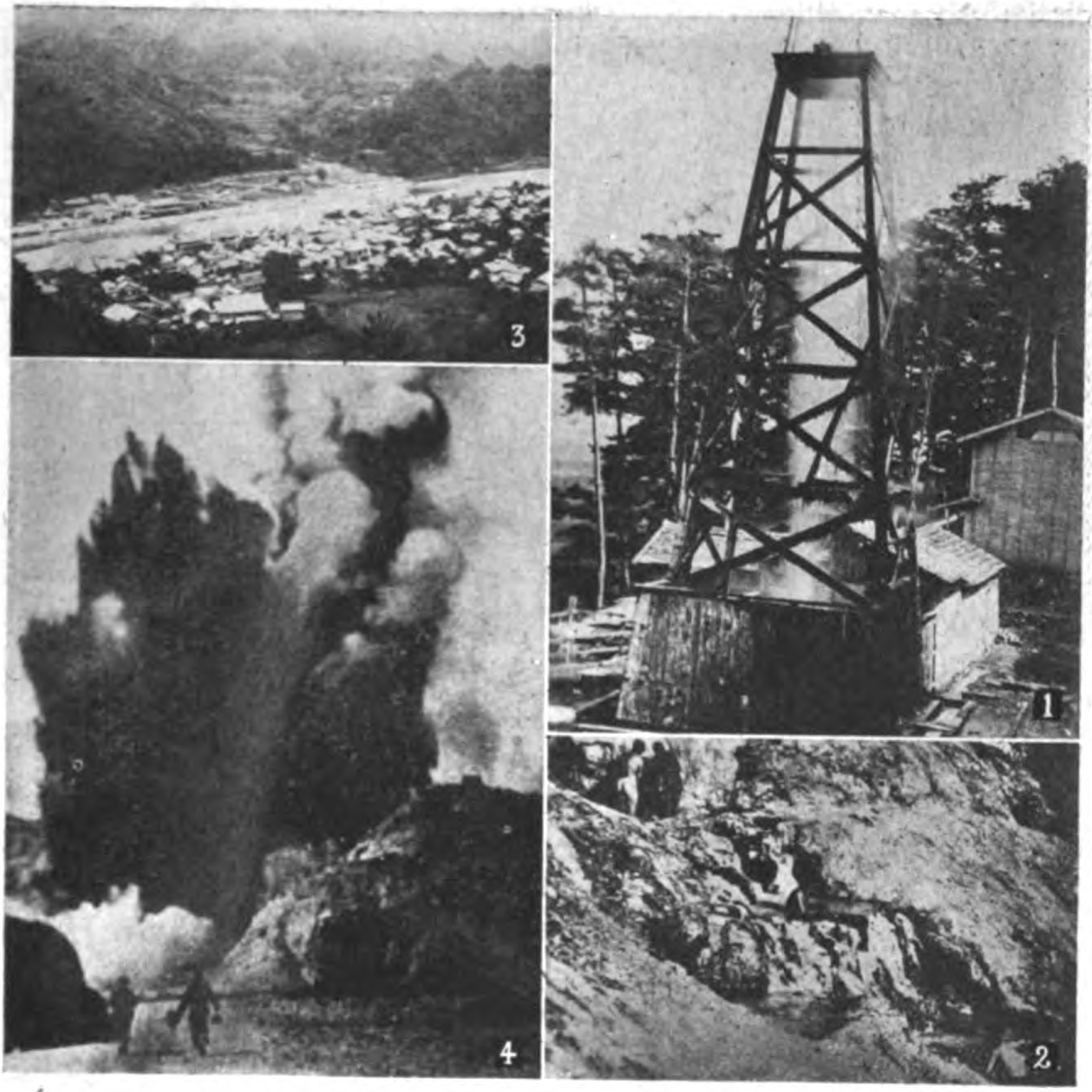
（上） ヴイタフオン撮影所の内部 兩側に照明具を置き、上部にマイクロフネン二つあり、音波をレコード裝置まで導くやうになつてゐる。（下） シムプレツクス映寫機にフオトフオンの裝置を附したもの。

一卷物、全卷中、歌とか、シンフォニィとかだけを發聲化し、後は普通の映畫であるものが大部分で、全卷を通じ、あらゆる音響、人物の會話までを含む映畫は、さう澤山はなく、今後の豫定に上つてゐるに止つてゐます。盛んになることは事實です。

映畫の理想論者は、併し、映畫に「發聲」の興味を附加することは邪道だ、映畫の中の「國語」は、映畫の本質たる「國際化」を危くするものだと論じてゐます。

どうなることか、何れ整理される時は來ませうが、今はたゞ狂亂の如き發聲映畫流行時代になりました。遠からず此の「マニア」は日本にも襲ひ來つて、幾多の悲喜劇を醸し出すことでせう。

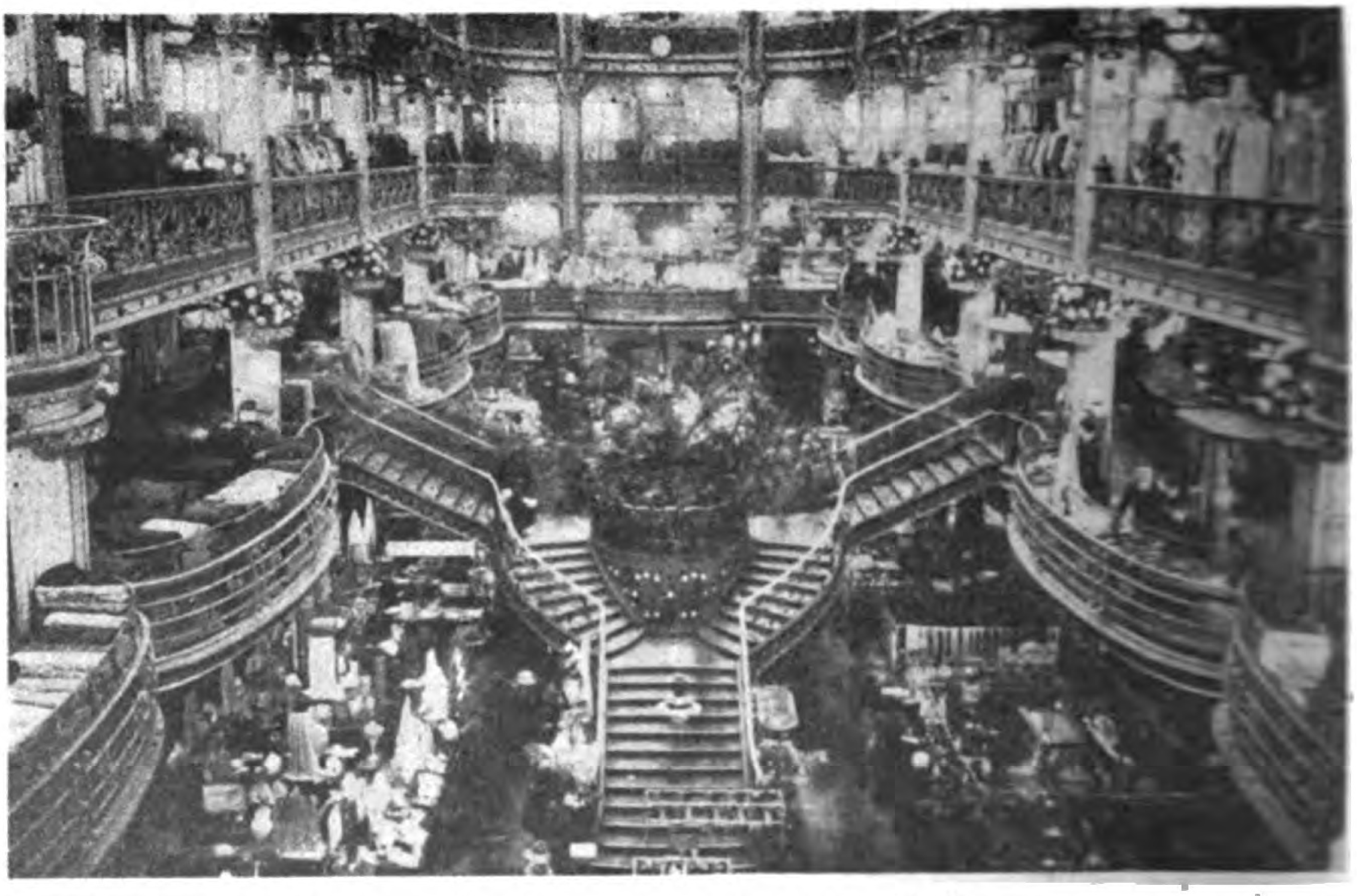




温泉ところ〴〵

後閑文之助

（一）は石油井を堀る目的で新潟縣瀬波で鑿井したところ、石油の代りに熱泉を噴出して今尙壯觀を呈してゐる珍らしい温泉である。（二）は日本アルプスの白馬温泉の景であつて、日本に於ては最高地に位するものである。（三）は日本第一のラヂウム温泉と稱せらるゝ伯耆の三朝温泉で、エマナチオンは一四二マツヘ。冷泉では甲斐の増富が第一で八二八マツヘである。（四）は世界第一の間歇温泉たるニユージランドのワイマングで、千五百尺の高さまで噴上するのである。（寫眞は文部省東京博物館温泉展覧會出品による）。



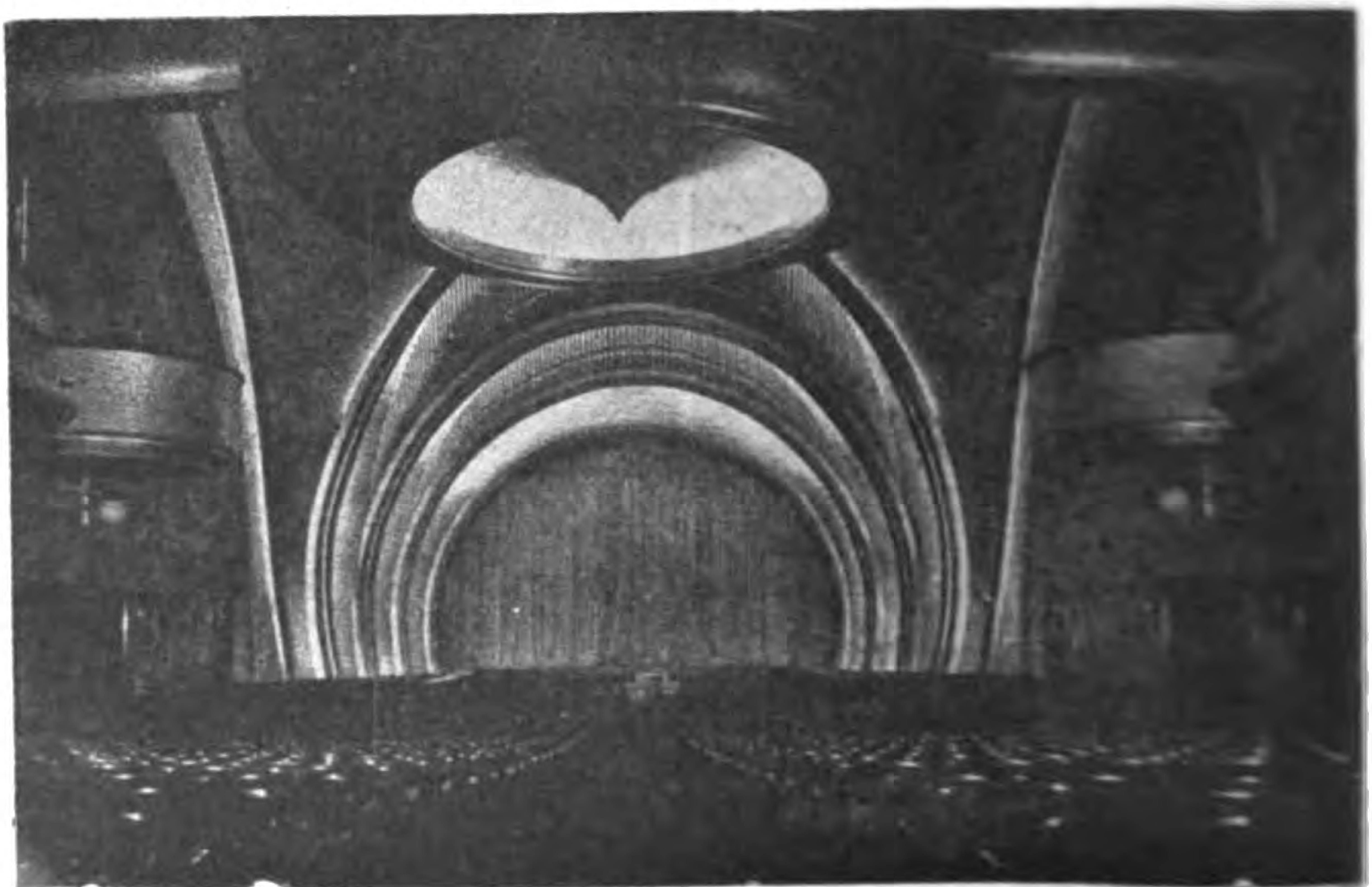
映畫宮殿と大百貨店

辻　恒彦

【上】「プランタン」の内部――アメリカの資本家團が巴里へ大百貨店を計畫中であるといふ。この「プランタン」や「ボンマルシエ」などの百貨店が束になつていつても到底敵ひさうにない大きさだといふ。

【下】「チタニア」パラスト――ナショナル映畫社が伯林に建てた封切館。内部（前方の三分の一）は神田の「シネマパレス」そつくりだ。

伯林と巴里だけでない――世界到るところ尨大な百貨店と映畫宮殿が出來てゆく。





繪畫化されたベートーヴェン

――(本號八ポイント欄參照)――

梅津勝男

逝ける葛西善藏氏

葛西善藏の思ひ出

——主として前期の彼について——

廣津和郎

『奇蹟』の初號が出たのは大正元年の十月だつたが、葛西善藏と自分との交りは、その一年前位からだつたかと思ふ。

　自分は舟木重雄とはその前から知つてゐた。それで或日、舟木をたづねて行くと、彼の部屋に、無口な、沈んだ、皮膚の色の冴えない、顏立が整つて美しいにも似ず、田舍者びた男が、行儀よくキチンと坐つてゐた。舟木がその男を自分に紹介した。その男は遠慮勝に、少し不明瞭のやうな發音で、時々口を開いたが、多くは默つて、畏まつてゐた。重苦しいといふと言過ぎるが、何だか灰色の男、と云つたやうな初對面の印象だつた。それが葛西だつた。

　その時分麻布の材木町の舟木の家には、いろいろな連中が集まつた。相馬泰三、光用穆、葛西善藏、峰岸幸作、小林徳三郎、眞田久吉、川上邦世、それから後に『奇蹟』に秋野俊といふ名で英國風の典雅な、うまい詩を發表した土居通彦等々。だがその中でも相馬、光用、葛西、峰岸等が始終顏を合はせる連中だつた。(谷崎精二が仲間に加はつたのは、『奇蹟』が出來てから後だつた)何しろ二十一二から二十七八位までの血氣な文學青年の集まりなのだから、寄ると觸ると文學論に花を咲か

せてゐたが、併しその中でいつも黙々として、ひかへ目な口の利き方をしてゐたのは、葛西だつた。少し田舎びて、云ふ言葉などが何だか不明瞭で、何か灰色見たやうに片隅に引つ込んでゐると、血氣にはやる連中の間では、どうもさう尊敬を拂はれない結果になる。葛西にも一時そんなところがあつた。

『彼には何處か好いところがある。いや、あんなにぼんやり者だが、併し何處かに好いところがある』と舟木などは、そんな風に云つて、葛西の不得要領さを、他の連中に向つて、しきりと辯解してゐたものだつた。もつとも舟木は人の美點を發見する事にかけては、一寸類のないチャンピョンだつた。

ところが、この不得要領な、言語不明瞭な、不活潑な、皮膚の色の冴えない、仲間中で一番だんまりだつた葛西が、或一日を轉機として、今度は恐ろしく元氣な、一番饒舌な、一番氣焔を揚げる、手のつけられない我儘者に早變りしてしまつたのだ。——この事は昔「新潮」に書いた事があるので、記憶してゐられる人も大分あるだらうと思ふが、それは丁度さうした連中の間に、同人雜誌を出さうといふ話が、萌しかけて來た時だつた。舟木の發案で、連中は一日井の頭に散歩に行つた。そして麥畑の間を歩いて行くと、(麥畑だつたと思ふ。だから初夏だつたに違ひない) 突然葛西が、一番先頭につかつかと出て行つて、『僕がこれから富士の裾野を踊らう』さう云つたかと思ふと、扇子をかざして、何だかへらへらとした手振足振りで踊り出したものである。羽織を着ないで、セルの袴をだらりと後下りに穿いて、撫で肩で、珍妙な恰好で踊り出した光景は、他の連中を呆氣に取らせた。

『葛西が踊つた。奇蹟！奇蹟！』と感激家の舟木が嬉しがつて叫んだ。みんな腹を抱へて笑つて、そして愉快になつた。

その時舟木の口から發せられた『奇蹟』といふ言葉が、それまで何とつけたらいいかとみんなで長い間迷つてゐた同人雜誌の題名を、忽ちにして決定してしまつたのである。

そしてその「富士の裾野」の踊と共に、葛西は今までの「ぎこちなさ」を一遍に何處かに吹き飛ばしてしまつたが、さうなると、今度は飲む、饒舌る、管を卷く、氣焔を上げる、人を頭から侮蔑する、喧嘩を吹つかける、(もつとも、これはアルコホルのまはつた場合で、酒さへ飲まなければ、彼は割に温和しく、そして少々白茶けた顏付をしてゐた) たうとう箸にも棒にもかからない我儘者になつてしまつた。

『奇蹟』時代といふものは、今から考へるとなつかしい。築地の或印刷所でその雜誌は印刷してゐたが、月に一遍づつみんなでそこに校正に行く。その歸りに、銀座の裏の正宗ホールに寄

[illegible]ふ條件を書いてゐるが、その[illegible]の曲に[illegible]やうに、又は[illegible]醉つて、管を卷いて、そして彼一流の氣焔をあげて、[illegible]舟木を手古摺らせる。舟木は手古摺らせられながら、又葛西を好きで、始終一緒に飲み、『もう僕は君と酒を飲む事は止める』などと歸る時には云ひ、又さう思ふらしいが、又一緒に飲む。

――『俺は哀しき父なんだ』と葛西は醉ふと、始終さう云つてゐた。自分は彼の氣焔の全部は思ひ出せないが、『哀しき父なんだ、哀しき父なんだ』と彼が盛んにさう云つて、故郷に歸つてしまつた細君や子供の事を喋るのだけは覺えてゐる。『哀しき父なんだ、俺は哀しき父なんだ』――彼がさういふと、『よし解つた。もう好い善藏居士、もう好い』と舟木は彼の背中を叩きながらこんな事を云つてゐた。

『廣津にはおしるこを』と酒を飲めない自分に氣がつくと、葛西は急にこんな事を云つた。小さな女中がお相伴にあづかるために、直ぐ近くの汁粉屋に駈けて行つたりした。

そして十二時近くなつて、そこを出ると、それからが葛西一流の横恣の發揮となる、銀座のペーヴメントの上で、彼は『ローエストへ、ローエストへ』と叫ぶのだ。ローエストといふのは、最も低いといふ意味だ、最低級――つまり最低級の遊廓に[illegible]向つては彼はさう[illegible]、自分は[illegible]常に心配家である事を、彼は知つてゐるからだ。

併し舟木に向つては、彼は假借しない。

彼は或時は彼のそのローエスト說を拒絶した舟木に向つて、下駄を振上げた。凡そ喧嘩などといふ事をした事もなければ、さうした亂暴を好まない舟木は、この青森縣育ちの何處までも何處までもしつこくまつはつて來る葛西に對して、一種脅迫觀念といふやうなものさへ感じたりした。舟木は下駄を振上げた葛西から逃れるために、足袋はだしになつて、一目散に逃げ出した。彼は不思議な心的現象から、電車に乘つたら、葛西が先廻りしてその電車に乘つてゐさうな氣がした。彼は銀座から六本木まで歩いて歸つた。が、彼の家の門まで行くと、その門の中に、葛西が待伏せしてゐて『やつ』と下駄を打下ろしさうな氣がした。それでたうとう彼は夜の明けるまで、青山練兵場の方へ行つて、歩きまはつてゐた……

この嘘見たやうな話は、併し眞實の事なのである。葛西にはさう云つたしつこさがあつた。殊に舟木に向ふと、それを特に出したがつた。それを特に出したがつたところに、彼流の友情

の表現があつたのかも知れない。何故かといふと、彼は舟木を愛してゐたからだ。舟木もそんな極端な背道觀念などを感じながらも、葛西を深く愛してゐた。――この二人は『奇蹟』時代互に一番愛し合つてゐた友人だつたのかも知れない。

やはりその時分の事だ。自分はまだ早稻田大學に通つてゐた。飯田橋の側の江戸川館といふのに、相馬と光用とが下宿してゐた。自分は麻布から早稻田に通つてゐたので、飯田橋で電車を乘換へる。或朝、自分は學校に行くのがイヤになつて、その江戸川館に光用と相馬とをたづねた。二人は一つの部屋に住んでゐたが、その部屋に葛西と峰岸幸作とが、二人枕を並べて寢てゐる。見ると二人とも頭に繃帶などをしてゐる。

『昨夜(ゆうべ)二人が喧嘩をしたのだよ、飯田橋の雨の中で』と光用が、仕樣のない奴等だ、といふ顏をしながら說明した。おでん家か何かで飲んでから、飯田橋まで來て、葛西と峰岸が摑み合ひを始めた、といふのである。光用と相馬とが交々(こもごも)語るところによると、二人は雨の中で摑み合ひをして、泥んこの中に轉がつて、轉がつたまゝ、互に睾丸を摑み合つて、『睾丸を摑むのは卑怯だぞ。やい、放せ』『貴樣こそ放せ』と怒鳴り合つてゐたさうである。光用や相馬が間に這つて止めようと思つても、泥がはねかゝるので、汚らしくて、側に寄りつけなかつたさうである。だから二人が仕方がなしに傍觀してゐると、たうとう客待ちの俥夫が來て、二人を分けたさうである。

そこまで話が來ると、寢てゐる葛西が、側らに寢てゐる峰岸を顧みて、

『あの俥屋には一つ禮に行かんければならんな』と云つた。

『うん』と峰岸が答へた。

峰岸幸作、この男は谷崎精二と共に、自分の早稻田時代に同級だつた最も親しい友であり、又最も氣骨のある人間だつたが、地方の新聞の主筆をしてゐる中に、書いた論文が災し、入獄したので、腹を立て、その腹を立てたところから、日頃弱い心臟が急に惡くなり、出獄後間もなく死んでしまつた。出獄の際、教誨師から『娑婆に出たら、おとなくして』と云はれると、『刑務所がこの程度のものと解つた以上、何度でも這入つて來るからさう思へ』さう捨白を殘して來たやうな男だつた。『奇蹟同人』の中で最初に死んだ人間で、今まで生きてゐたら、かなり烈しい方面をしてゐたかと思ふが、そして何れにしても何かやつた男に違ひないと思ふが、餘りに早く憤死させて(自分は彼の死を考へると、憤死といふ言葉が思ひ浮ぶ)惜しかつた。今頃は後からやつて來た葛西の肩を叩いて、『やあ、たうとう來たか』なんて云つて、二人で顏を見合はせて、娑婆の惡口でも

云つてゐるかも[illegible]。

もう一つ[illegible]に、葛西と自分との[illegible]

それは『奇蹟』がつぶれて、二三年してからの事だつた。

葛西はその間に東京にゐても食ふに困つて、故郷に『遁走』し、（遁走とは葛西の好んで使つた言葉だ）又その頃家運が傾いた故郷にもゐられなくなつて來て、再び東京に遁走して來る、と云つたやうな事を何度も繰返してゐた。或時彼が突然麴町の自分の下宿をたづねて來た。そして一週間ばかり自分の部屋に置いて呉れと云つた。何でも又東京にゐられなくなつて來たので、生田長江氏のところに行つて仕事を貰つて來た。それをその一週間の間にやつて、そしてそれを旅費として、又々故郷に遁走しようといふ目論見だつた。

『好いとも。併し前もつて斷つて置くが、僕の部屋で酒を飲むだけは困るよ』と自分は云つた。

『ああ、決して飲まない。それに今飲んではならない病氣をやつてゐるんだ』と云つて彼は笑つた。『だが、直ぐ承知してくれるのは、流石に廣津だな。牛込の下宿を追ひ出されたので、相馬や光用に相談に行つたが、彼奴等は俺を置いてくれないんだ。――流石は廣津だ』

これは光用や相馬が無理なわけではない。そんなやうな相談[illegible]

だ。――[illegible]ので、彼の云ふ事を通す人間には、目を細めて[illegible]、彼の云ふ事を一寸でも拒絶しようものなら、今度は目を[illegible]する。彼はよく舟木の事を、『何と云つても、舟木は俺達の仲間で大人だぞ。彼奴三年の長がある』と云つた。そんな時は、舟木に難題を持ちかけて、それを通して貰つた時だつた。かと思ふと、『舟木重雄あれは成つてゐないぞ。あの年になつて、どうしてあんなに人生が解らんのだらう。――なあ、さうぢやないか。彼奴いつまでも大人にならんのう』などと云つた。後で調べると、そんな時は、舟木が彼の借金申込を拒絶した時だつた。

彼は舟木の名を重雄と云はずに、重雄、又は重雄さんと呼んでゐた。

そんな風で、葛西は自分の下宿の部屋に轉がり込んで來た。自分はその時分或新聞に出てゐて、女の事で失敗したりして、憫つたやうな氣持で生きてゐた。酒を禁じられて、白茶けたやうな顔をしてゐる惡病の葛西と、そんな憫つたやうな氣持の自分と、一室の中に寢起きしてゐるのは、明るい氣持のものではなかつた。

たうとう葛西は、丁度一室他に明間が出來たので、そつちに移つた。そしてそつちに移ると共に、酒を飲み始めた。自分は自分の部屋で飲むのではないから、彼が飲み始めても、何とも思つてゐなかつた。唯病氣に障りはしないかと心配したが、そんな忠告など聞く彼ではないから默つてゐた。

ところが、彼の方では、他の部屋に移つても、最初自分に酒を飲むなと云はれたのが氣になつてゐたと見えて、なるたけ自分に隠れるやうにして飲んでゐた。そして隠れるやうにして飲んでゐるといふ事が、へんに又彼の心に苛立を積重ねて行つたものらしかつた。『俺はやつぱり飲まずにゐられない。まあ大目に見ろよ』こんな風に下手に云へる彼ではない。『俺は遠慮しいしい飲んでゐるんだぞ。好いか。遠慮しいしい飲んでゐるのに、何が悪いんだ』そんな風にプスプス燻つて來るやうな彼だつた。

或日、自分が社から歸つて來ると、彼はもう大分醉つてゐた。そして杯を自分につきつけて『一杯飲め』と云つた。

『俺が飲めない事は解つてゐるぢやないか』と自分は云つた。

『さうか。それぢやよし。……おい、これから遊びに行かう』

『いやだ』

『フム』と彼は云つて、醉眼でじつと自分を睨んでゐたが、『おい、廣津、貴様は俺より年少の癖をして、本來なら、俺に兄事すべき奴なんだ。それを生意氣な……』

自分は始まつたなと思つた。『悪癖の舌』と葛西自身が命名してゐるところの、彼のしつこさだ。

自分は對抗する眼で彼を睨み返した。

『貴様、生意氣』と云ひながら、葛西は拳を振上げた。が彼の拳が落ちない前に、素早く自分が彼の横面を撲つてしまつた。——中學時分に二三度撲合ひの喧嘩をした事はあるが、これ程大人になつてから、こんな事をやらうとは思ひもかけなかつた。が、此處まで來てしまふと、もうのつぴきならない。その時自分はフト變な事を考へた。何でも人の噂だから眞僞の程は知らないが、長田幹彦君が非常に酒癖が悪かつたのが、淺草で職人か何かに溝に投げ込まれてから、すつかり酒癖が直つた——噂だから、實際眞僞は知らない。出鱈目だつたら、幹彦氏に非常に濟まないわけだ。——さういふ事が突然頭に浮んだ。そして、この機會に葛西の酒癖を直させようと考へた。さう考へながら、自分は一歩身を引いて彼の様子を見てゐた。

『撲つたな』彼はさう云つて、立上りかけたが、机の上に、鉛筆を削つて開いたままになつてゐるナイフが置いてあるのを見ると、それを取つた。これは面倒になつたと思つて見てゐる

と、[illegible]たが[illegible]止まつてゐた。[illegible]、これは[illegible]て
ゐたと、喧嘩の間に考へて、[illegible]するために、仕舞つたに違ひない。自分は一寸可笑しかつた。

それからが大[illegible]の大格闘である。たうとう下宿中の人が集つて来た。自分は恥しくなつて、階上の自分の部屋に逃げて行つた。『廣津の莫迦野郎、廣津の莫迦野郎！』と葛西は階下でいつまでも怒鳴つてゐた。余りいつまでも怒鳴つてゐるので、自分は宿の者を呼んで、金入を渡し　これで葛西に何處かに投嬢直ぐに飲みに行くやうに云つてくれと頼んだ。葛西は『廣津の莫迦野郎、廣津の莫迦野郎！』を連呼しながら外に出て行つた。下宿は谷地にあつて、下宿の前から北の方へ向つて坂がある。『廣津の莫迦野郎！』と叫びながら行く葛西の聲が、途中で低くなり、やがて坂の上に達すると、へんに又大きく聞え、それから次第に低く消えて行つた。

自分はひとりで笑ひ出した。口が鹽つぽいので、指で抑へて見ると、唇が切れて血が出てゐた。それは自分が葛西の上に馬乗りになつたところを、人に止められたので、立上る拍子に、下から葛西の踵が、最後の一蹴を自分の唇に與へたためだつた。

[illegible]
して[illegible]た。葛西は[illegible]義三を零落者として引つぱつて来た。そして[illegible]をした。そこに酒が出た。『君もなかなか大變だな。親父は[illegible]だし』などと葛西が云つた。それから再び彼の[illegible]が始まつて、彼は『俺は弟よりえらいから、弟を踏みつけて生きて行つていいのだ』と云つた。『それは丁度君の親父が君よりえらいから、君に働かして生きて行くやうなものだ』

『それは違ふ。俺の親父は病氣だから俺が働いてゐるのだ。親父は俺を踏みつけていいなどと思つてやしない』

『いや、そんな事はない。君の親父はえらいから、君を犠牲にしていいのだ。俺は弟よりえらいから、弟を犠牲にしていいと思つてゐるのと同じだ』

『そんな事を云ふなら葛西、君がかうして友達のところなどに轉がり込んで来るのは、自分が友達よりえらいから、友達を踏みつけてもいいと思つてゐるためか』

『まあ待てよ』と彼は暫く考へてゐたが、やがて云つた。『さう云へば、そんな風な事になるかな』

自分は腹を立てながら、『やつはりこの男は愉快だ』と考へた。この男の考へ方は、自分などとは南と北との違ひがある。

が、この我儘な考へ方は、妙な魅力だ。自分なんかには到底ない魅力だ。腹が立つが、併しヤンチヤが可愛いと云つた感じだ。

併しその喧嘩の後、葛西は生田長江氏から貰つて來た仕事をせつせとやり出した。それはアカギ叢書のはやつた時分で、それに類した十錢本を書く事だつた。外國小説の梗概で、二冊の中一つは、自分がその二年ほど前に譯して出版した『女の一生』だつた。葛西の書いたその『女の一生』の梗概は、やがて自分の名で出版された。そして發賣禁止になつた。そうしたら、自分の全譯の『女の一生』の方も急に再檢閲をされる事になつて、引續き發賣禁止になつた。まきぞへを喰つたわけである。

僅に約二冊の十錢本を書き上げた葛西は、間もなく故郷に歸つて行つた。舟木と相馬と自分とが上野に見送つて行つた。さうしたら葛西は發車間際に、汽車の上り口に立つて、自分を見ながら『君もいろいろ大變だな。みんなの中で君が一番大變だぞ。――だが、お互に三年の修養が要るな。三年の……』と云つた。

自分の父が病院に這入つてゐる事、自分が女の失敗で惱んでゐる事、そんな事を葛西はよく知つてゐたのだ。

故郷に歸ると、彼は端書を寄越した。

『考へて見ると、君にはいろいろ感謝しなければならぬ氣がする。が、くどくどは云はぬ。察してくれ』と書いてあつた。自分は住所が轉々したので、人の手紙を保存して置かない質だが、その端書だけは、失くなした事が今考へると、惜しい氣がする。他の文句は忘れたが、上に書いた文句が冒頭にあつて、そして最後に『お互に三年の修養が要るぞ』と汽車の上り口で云つたと同じ意味が書いてあつた。

後になつて、二人とも所謂文壇に出てから、二人でその時の喧嘩の話をした

『あの時の事を創作に書かうと思つても、どうしても書けない』から自分が云ふと、葛西は彼の癖の兩掌をこすり、

『おお、君も書かうとしたか。僕も幾度も書かうと思つてゐるんだが、どうしても書けない。あの喧嘩はあの當時の二人の生活の背景を考へると、いろいろ複雜だからな。――それに何しろ、互に今よりも眞劍だつたからな』と云つた。

『奇蹟』時代（大正元年）に『哀しき父』や『惡魔』のやうな優れた作を書いてゐながら、葛西が世に出たのは、それから七八年かかつた。一年ばかり早稻田文學に寢かしてあつた『子をつれて』が、同誌に發表されると、一躍名作家といふ評判を

[illegible]

丁度妻が『子をつれて』を書いた頃と思ふが、牛込の矢来町に、彼は細君や子供を呼んで、小さな家に住つてゐた。

丁度自分がそこに行き合はせると、古道具屋が來てゐた。彼はその三四ヶ月前に三圓で買つた机を一圓五十錢で古道具屋に賣つてゐた。そして、

『こればかりの事で、態々來て貰つては氣の毒だな。何かないかな』と云ひながら、押入れなどを探してゐたが、何もなかつた。たうとうどうしてそれがそこにあつたのか解らないが、洋食の出前持が持つて歩く箱のやうなものが、台所にあつた。

『やあ、こんなものがある。机だけで歸つて貰ふのは氣の毒だから、これも序でに持つてつて呉れませんか』

古道具屋の親父は一寸その箱に眼を呉れたが、氣の毒さうに、

『それはお置きになつた方がお爲めでせう。頂いても五錢か十錢のものですから』

『ははは。さうかなあ。それは氣の毒でしたな。ぢや、まあ、机だけにして。氣の毒でしたな』

『いえ、もう』古道具屋は歸つて行つた。

自分は貧窮の底にゐて悠々として迫らない彼のユウモアに、明るい微笑を感じた、その後彼はその古道具屋に米を買つて貰

[illegible]

買つてゐた。買ふものがなくなつた時だけ[illegible]米を買つて

買つたわけなのである。

『米なら喜んで頂きます、と云つて、ちやんと桝ではかつて貰つて行つたよ。ワイフの話だと、ちやんと市價並に買つて行つたさうだ』

鎌倉の建長寺時代の彼の生活は、餘りに世に知られ過ぎてゐる。丁度地震後、自分は葛西とつまらぬ意見の衝突をした。それは建長寺の管長が鮮人騒ぎで、竹槍を持つて外へ出たといふ事を、自分が非難し、葛西が是認した爭ひだつた。その爭の末に、自分は腹立ちまぎれに、『葛西の小說は、如何にも名作だが、併し骨董ぢやないか』と考へた。そして、葛西が屏風に雀を描くと、それが朝な朝なチーと鳴いて、外へ出て行くかも知れないが、『たとひ屏風から雀が出たところで、さういふ心掛けは、古臭いんだ』といふやうな事を云つた。

自分は葛西の作が好きで好きで堪らないのだが、好きであるといふ事にさへ、自分で自分に腹を立てた。

自分達はそれから暫く往復しなかつた。自分は鎌倉の家が潰れたので、牛込に下宿し、葛西は建長寺を出て、本郷に下宿してたが、二人とも訪ね合はなかつた。

ところが、その中に彼の『蠢くもの』といふ小説を讀んだ。自分はそれを讀むと、彼に會ひたくて會ひたくて堪らなくなつて來た。葛西一流の誇張があるとは思つたが、その中に出て來る生活は餘りにいたましかつた。自分はその讀後感を新聞に書き、そして或晩彼をたづねて行つた。彼は丁度醉狸州七席七題を中央公論の伊藤君に口述筆記させてゐた。酒を飮んで、線香を立てて、相變らずの調子で、ぽつりぽつりと喋るのだから、筆記する人はやり切れなかつたに違ひない。

『おお、廣津來たか、たうとう來たか。俺は丁度今君の友情について喋つてゐたのだ。おお、よく來た。たうとう來たな』彼は立上つて來て、自分に抱きつき、自分の頰つぺたをぺろぺろ甜めた。

自分はそれに閉口して、三十分ばかりで逃げ歸つて來た。

○

追悼文としては變な追悼文が出來上つた。併しこんな風にして、彼の事を書いてゐたら幾らでもある。そしてこれだけではまるで『葛西と喧嘩』とでも題をつけなければならないかも知れない。その他の事も書きたいが、指定のページに達してしまつたので、尻切トンボで止めるが、併し葛西の我儘に閉口しながら、友人達が常に彼を愛するのは、これは我々が出來ないところを、彼が平氣でやつて行く、といふ事に對する憧憬なのかも知れない。人間は我儘が好きだ。若し自分が出來なければ、それをやり通す人間を見て、我儘に對する自分の憧憬を滿足させる——さう云つたものなのかも知れない。

彼は醫者が何と云つても養生もせず、煙草も止めず、自分の命まで人委せだと云つたやうに、たうとう彼の思ひ通りを通して死んだが、（併し彼が死ぬまで酒を飮みつづけたといふのは文字通りには眞實ではない。彼は何も食べられなくなつても、酒だけを飮み、遂に酒も飮めなくなつて、危篤狀態に陷り、小康を得て、（それが死ぬ前の日だが、）最後の晩餐だなどと云つて、そこで六合飮み、翌日は飮まずに死んだのである。死ぬ前から無意識狀態に陷つたのだから、盃を持つたまま死んだのではない。そんなゴシップが二三ケ所に見えるから訂正して置く。酒仙が傳說化されるのは、面白くもあるが、事實相違は訂正しなければなるまい）死ぬまで、何か我々に微笑を浮べさせるものがある。『あんな事をして、たうとううまく行つてしまつた』そんな風な事を思はせる。

芥川龍之介の死は、自分には葛西ほど近しい友人ではないが、へんに悲しみが胸にこたへた。併し葛西の死は明るい。これは二人の作家の性格の相違だと思ふ。（終）

死の前の葛西善藏氏

佐佐木千之

○

去年傳研へ入院されたのは、五月の五日で、四月中旬の流感以後、氣管を傷め、三十九度以上の高熱がつゞくにも拘らず、自宅で靜養して居られたが、どうもはかばかしくないといふので、友人舟木重雄氏の義兄にあたる鮫島博士の勸告に從はれたわけであつた。

古びた病院の、隔離室の一隅に、薄い毛布をかけて仰臥してゐられた氏の、にはかに瘦せ衰へた、蒼白の髭顏を一目見た瞬間、私は病氣の決して輕くないのを感じた。が、當の葛西氏は、却つて不斷より元氣を出して見せた。

「ちよつと小便して來ますから……。」と、靜かに寢臺から降りて病室を出て行かれたが、喘ぐやうな息づかひを聽いても、小用に立ち歩くことのよくないことは、明らかに素人にもわかつたほどなのだが、氏の潔癖は便器類の使用を嫌つた。

そんな重態でありながら、一合の酒を醫者から許されてゐた。新橋の方に勤めてゐられた弟さんの勇藏氏が、歸りの四時過ぎ、必ず寄つて、お燗番をし、晩酌をすまさせるのが日課となつてゐた。

ベツトに胡座をかいた葛西氏は、心持ち顫へる手で盃を持ち、窓の前に蔽ひかぶさるやうな靑桐の葉の夕風にそよぐのを眺めながら、「一ぱい飮んでもらひたいけれど、外の患者さんの手前もあるもんですから……失敬。」

そして、片隅の新聞紙でくるんだものを指さすのであつた。月桂冠の一升壜である。——そんなに飮んでいいのでせうかと訊くと、「いや、アルコールが入らないと、身體がぐつたりと、まるで死んだやうになつてゐるんで……あ、少しお酒が沁みると藥も利いて來るらしいですね。」

しかし、さすがに二合の、平常ならば番茶の一滴ほどにも足らない酒量が、全部は飲めないらしかつた。

四月の末に、恰もユウ子ちやんの病氣を氣遣はれて、ひとまづ退院といふことになつた。醫者は、病狀は小康だが、もう少しゐた方がよいとのことだつたらしいが、さう思つたら後へひかない性分もあり、三宿へ歸つて來てしまつた。

○

健康は依然として勝れなかつた。創作はもとより、談話原稿すら出來なかつた。ただ夕方からは床を出て、酒に親しんで居られた。飯を食べるために酒を少し入れなければといふのであつたが、その酒が朝までつづくことさへ、決して稀れではなかつたらしい。

仕事が出來ない葛西氏が、比較的靜かな病牀生活をつづけてゐられたのは、その秋發表された、所謂圓本のおかげと言つてもよかつたであらう。今までの寢床が、急に鋼鐵製のベットの上に上り、籐椅子がそろひ、籐の茶卓子の下の棚には、白い瀬戸ひきの洗面器で、上海の龜の子が一匹飼はれ、枕元の硝子鉢の中では、尾鰭の大きい金魚が嬌態をつくつて泳いでゐた。

で、これまでの勤めをやめられた弟さんも、全く家庭の一員となり、專ら病兄の世話役として力をつくして居られた。私は同じ三宿にゐた關係で、よく氏の病床を訪れ、味のある人生漫談を傾聽した。が、その多くは病氣と死ぬ話であつた。氏の枕元には、岩波文庫の、正岡子規の『仰臥漫錄』とか、鈴木孝之助博士の『肺結核治療法』といふやうな本が、讀みさしのまま伏せられてゐたやうである。

また、ややもすると、

「そんなに早く歸らなくてもいいぢやないの！僕には結核菌はゐないんだ。なんなら傳研を退院した時の診斷書を見せてもいい。」とそんなことも言はれた。

十月の末、飯島博士の診察を受けた結果は、舟木重雄、光用穆彌氏の熱心な勸めに動かされ、かねがね、若し病院へでも入るとすれば鈴木孝之助博士のところがよささうだと洩らしてゐたことが實現され、相州七里ケ濱の鈴木療養所へ入院の運びとなつた。十月の二十九日であつた。

煙草と酒を絶對禁じられた。若し、アルコール中毒ならば、酒を禁じるわけにはいかないとのことであつたが、診斷の結果、さうでないと確定したのである。

「アル中なんか、めつたにないものと見えますね。」

葛西氏は苦笑して語つた。そして、この海濱の病院生活は、

何年来の氏の病状を根本的に治すことが出来さうな光明をもたらしたのである。これまでの生活にくらべたら、何もかも随分窮屈なことばかりであつたにちがひない。だが、病状は日に日によくなつて行つた。三宿の留守宅には、弟勇藏氏をはじめ、ユウ子さんをまもるお花子さん——みな健在である。今こそ葛西氏が靜かに病を養ひ、藝術に思ひを寄せてしかるべき好機會とも云へよう。

十一月七日——といへば、七里ケ濱へ移られてから、やつと十日目である——。夜中突然、弟勇藏氏が腸捻轉の襲ひで、近くの病院へ入院、開腹手術をしなければならないことになつたのである。

急報に接して、翌八日の朝、善藏氏がひとり、汽車と電車に揺られて戻つて見えた。が、その時は、すでに勇藏氏は危篤の狀態で、たゞ死を待つのみであつた。十三日午前、三度びの手術の甲斐なく、腸管閉塞症といふ病名の下に遂に亡くなつてしまつた。

十日間の病院生活で、體重三百匁を増した善藏氏に、今また、朝から酒を飲まずにはゐられない日がつゞいた。大島の重ねで、きちんと坐つた膝へハンケチを展げて……。

曾つて病氣をしたことのないといふ勇藏氏の、突然の死去は、非常な打撃だつたにちがひない。しかも、前年その夫人は女の子を産んで他界してゐる。勇藏氏の遺骨は、谷中の天王寺へ一時預けることにしたが、そこには私の亡弟の遺骨が附偶として關係してゐたからで、宗旨も違つてゐた。翌春、雪消えを待つて、善藏氏自ら、郷里弘前の墓地へ埋めに歸る心組にしてゐられた。

遺骨が天王寺へ預けられるといふ時、亡くなられた父君の形見だといふ茶褐色の紋附を着た兄善藏氏は、恭しく線香を捧げた後で、「ぢや、寂しいでせうが、ひと足先へ行つてゐて下さい。直き後から行きますから。」と笑ひながら言はれた。やつぱりお酒が入つてはゐたが。

で、その十七日には、朝早く鈴木療養所へ歸るといふので、送つて行く役であつた私と某君とは、何時でも發てるやうに詰めかけてゐたが、お銚子ばかり幾本もかへて、もう少しもう少しと言つて、外に待たしてあつた自動車を一旦歸したりして、逡巡してゐられたが、何となく二度病院へ入るといふことが、寂しかつたのではなかつたらうか。黄色い夕陽が障子の上にか

すかに射して來た。それでも立たうとしないので、私たちは焦れてゐた。

と、そこへ宇野浩二氏の令兄と母堂とがお悔みに見えた。浩二氏は健康が勝れないので、代りに來られたのであつた。二人が歸られると、「これでいい。愈々行きますか。どうも何かすまない氣が一つされてゐたんだ。僕にはさういふ、へんな神經が働くんで……。」さう言つて、簡單に自動車で東京驛まで驅けつけることが出來た。――もう夜になつてゐた。

二等車の中では、蹲まるやうにして殆んど眠つてゐられたが、鎌倉の停車場を出ると、隨分ひどい疲勞が見えた。驛前の吹きさらし休憩所の、木の腰掛に腰を下ろして、サイダーの喇叭飲みをした葛西氏を護つて、私たちは動搖の激しい電車で腰越まで行つた。

晩秋の空は一面の星であつた。相模灘は渺茫としてただ暗く、波の音ばかりは高かつた。電燈の暗い療養所の診察室で、當直のお醫者が赤い雲母の窓がある石油ストオブをともし、肌ぬぎになつた葛西氏の肋骨の出ばつた胸部に聽診器をあてるのを、私たちは息を殺して見まもつてゐた。

が、思つたより惡くなつてゐないといふお醫者の言葉に、やや焦悴の開ける思ひで、氣の弛いた病室に横たはる葛西氏を見屆けてから、終列車に遲れてはならないと、風の強い七里ケ濱を急いだのであつた。

○

三月の十一日のことである。すでに自由退院をして三宿に歸つてゐた葛西氏は午後の三時頃、頭が惡いから、字でも書いて見たらいくらか紛れやしないかと、襖を締め切り、自分で墨を磨つて、白唐紙を展べてゐた。何枚か書き損じた後で、紙がなくなつたので、半折を細長く半分に切つて書いたものを、畫鋲で長押にとめて眺めてゐると咳が出た。「血が出たやうだから、相川さんを呼んで來てくれ。」――台所で洗濯をしてゐたおハナさん――所謂おせいさんであるが――が、近くにゐるかかりつけのお醫者を呼んで來て見ると、新聞紙をいくつにも折つて痰吐きにしてゐるものに、鮮血を見たのであつた。

次の朝、用件の復命に行つた私に、

「たうとう、出ましたねえ。」と、仰臥して患部に氷嚢をあてた葛西氏が言つた。その嗄枯れた聲調は何故か暗く、いつまでも耳に殘つた。晝間見舞客がいつになく多かつたせゐか、その晩つづいてまた咯血をしたさうである。そして、量も前よりは多かつたやうである。

ン[illegible]に、[illegible]ては、これ以外に書きたい文例もないし、自分の創作と同じ位、若しくはそれ以上のものが出てゐるやうに思ふがどんなものだらう。」と訊かれ、私はただ默つて、その風貌ある顏を眺めた。

古洋何人起釣筆明月蘆花君自者

○

また、先頃、拙著長篇第三卷が上梓される時、四百頁近い校正刷を病床二日間で讀了され、九枚の長跋をわざわざ執筆して下すつたが、丁度、或る人のすゝめで試みた或る注射の結果が思はしくなく、毎日三十九度以上の高熱に惱んで居られた直ぐ後のこととて、私は嬉しいには嬉しくても、氏の身の上が案じられてならなかつた。幸に、別段のこともなく、「筆ならじも出來たし、これからは創作もぼつぼつやりたい」と言はれ、「病床小品」「死せる魂」「死床を飾る」など、腹案中の題名を書いて見せたりされたので、心の中では大いに期待を持つたのであつた。全く、氏の作品は二一年この方一篇もなかつたから——。

然るに、六月に入り梅雨とともに、喘息が起つた。それはこれまでにないやうな、可成りひどい發作だつたらしく、從つて寶材も[illegible]三日、私は小島政二郎氏のお宅へ[illegible]つて小説に書かれたことのある、喘息に特効を有するといふアストール器を取つて來て送つて贈つて來めたら、矢張りやつて見ると、案の定、發作を止めることが出來、安眠するを得た。

尤も、何にしても入梅時を東京で過すのは一番いけなかつた。この事は病人が最もよく知つてゐた。葛西氏は、だから川本の印税をもう少し貰つて、それで一切を整理して郷里へ歸り、山間に小屋を作つて、自然療法をやりたい。また、それより方法はない。藥など利くものでないと言つて居られた。

私はその最後の交渉を開始したのであつたが、月餘に渡つてなほ吉報をもたらすことが出來なかつた。そればかりではない。病勢は遽かに進み、七月十三日、夜遲くまで私たちが飮みながら、談笑したのを最後として、どつと床について、最早小用にすら立つて歩けないほどになつてしまつた。そして、お酒すら飮めなくなり、十六日の朝には、鮫島博士が往診に見えて、最早一週間の壽命と宣告されるに到つたのである。

○

危篤の電報が發せられ、文壇諸家の見舞客も多かつた。氏の

親友舟木重雄氏は行きちがひに葛西氏の病氣を案じて、上京され、日本盛の四合罎を枕頭に置いて、今飲んでは困るけれど、癒つたら飲んでくれと言はれた。すると、

「有難う。……飲めなくなつた。」

「氣の弱いことを言はないで元氣を出してくれ。」

「駄目らしい。今度は駄目らしい。」

さういふ息も苦しさうであつた。葡萄糖液の點滴注腸が過半は排出されてしまふやうな病狀で、脈搏も次第に微弱になりつつあつた。

やがて、北海道の令姉と青森縣浪岡にゐる今年地方の農學校を卒へた長男亮三君とが到着した。

が、葛西氏はどうしても逢はないと言ひ、

「何故さういふことをしてくれたらう、本人の意見も聞かずに、やたらに親類を呼んでくれては困つちまふなア……いけませんね。」と、喘ぐやうにして難じた。その手足は金剛杖のやうに細そり、ただ蛇腹になつた胸がせわしく波打つてゐた。

舟木氏はじめ私たち近くにゐた者が平身低頭して謝罪つた結果、それでは逢はう、しかしもう少し待つてくれ、いい時呼ぶからとのことであつた。——やがて、呼んでくれと言はれ、二人は別々に葛西氏の枕頭に立つたが、亮三君に向つて、

「ビョウキヨロシ、ダレモクルニオヨバヌ——佐佐木さんにさう言つて、すぐ電報を打つて貰へ。」

亮三君は困つて、ただ「あゝ。」と返事をしてゐた。北海道の令姉は十何年振りかで善藏氏に逢はれたのであるが、おハナさんに向つて、この家に下宿でもして病氣になつてしまつたものと思つてゐるやうなことを言はれ、妻子があつた筈だが、どうなつたのかとも訊ねた。

そして、勇藏さんが去年の秋死なれたことも、遺骨をこの春、高田のスキー大會の歸りに、亮三君が天王寺から故郷へ持ち歸つたことも、今度が初耳らしかつた。遠く北海道の僻村で農事に從つてゐられるといふ小柄の、四十ばかりの女の人は、痩せほそつた善藏氏の片手を押へて、

「兄さん、しつかりして下さいよ。きつと癒りますから。」と言はれた。

「どうして來たの？電報でも見たの？」

善藏氏は訊ねた。——姉さんといふ方は初めて東京へ來られたのであつた。

「いいえ、ただ兄さんに逢ひたくつて……。」

「一人で來たの？」

「一人で來たの。」

——とたん、落ち窪んだ善藏氏の雙眼に涙が溢れるのを、私は見た。

（昭和三年八月三日）



テムズに聽く

谷　讓次

窓

私たちの部屋には、四角た枠に仕切られた一枚の淡色街上風景が、まるで美術館の繪のやうにならんで壁にひらいてゐる。くる日も來る日も鉛いろの雨に降りこめられてゐる私達に、からうじて外部の世界との交渉が許されるのは、いま言つたふたつの窓硝子をとほして町に移る陰影のうごきを眺める場合だけだ。窓は家の眼だといふ。が、この窓はたゞちに私たちの眼でもあつた。私と彼女は、ひとりづつその穴ぐらみたいな薄暗い部屋の窓のまへに立ちつくして、解くまで獄を出られない與へられた問題かなんぞのやうに、朝から晩まで狭い往來を見つめてゐることが多かつた。

窓から覗く空は、圓をえがくかはりに平面な一枚の雲の板だ。それが、遠雷

のやうなロンドンのどよめきを反響して、ぜんたいが遅々とそして蒼然と押し流れてゆく。早く言へば、空といふひとつの高いはつきりした存在があるのではなく、ろんどんの呑吐する煙りが厚い層をなして、天と地を貫いて立つてゐるにすぎなかつた。その低空にがあつと音がする。があつと音のするやうな感じで瞬く間に空がくもるのだ。さうすると両側の家を撫でてゐた薄陽がふつと影つて、白い歩道の石に小さな黒點がまばらに散らばり出す。けふも雨だ。

雨・雨・雨――五月の雨。

煤煙と人いきれと音響を溶かして降る倫敦の雨。

なんといふものとにい、何といふ呪はれた受難であらう！

窓枠のなかの風景畫にも雨がけむる。

晝は、石と鐵と石炭の巨大な立體の底に銀色のしぶきをあげて、庭木をとほして見える家々の角度が水氣にぼやけ、黒く濡れて光る道に、走りすぎる自動車のかげがくつきり映つてゐる。空氣のかはりに浩然たる水滴が濃く街を占めて、まるで液體のなかに棲息してゐるやうな氣がするのだ。私たちの愛玩する窓の二枚の繪は、歪んだ建物といさゝかのみどりと炭油（タアル）で固めた路との散文的な風物に過ぎなかつたが、畫面を這ふ日脚と光線のあやとが、そのときどきの添景人物とゝもに見飽きない効果と觸を出してゐた。不思議な帽子をかぶつた郵便配達夫が、大きなずつくのふくろをかついで雨のなかを行く。買物の歸りらしい女が赤い護謨外套（マツケントシ）の襟を立てゝ歩道に水煙を蹴散らしてくる。樹の下に立つて空を見あげてゐる男がある。そこへまたひとり若い女が駈け込んで行つた。彼女は帽子が氣になるとみえて、すぐ脱いで、雨にぬれたところをしきりに拭いてゐる。丘のやうな荷馬車が、その車體よりも大きな箱を積んで私の繪へはいつて來た。荷物のうへで、四五人の勞働者がびしよ濡れのまゝ笑つてゐるのが見える。ちようど繪のまん中で、御者は口いつぱいに雨を飲みながら欠伸をして行つた。彼女の窓には巡査と犬と子供がゐる。巡査は巡査らしく立ちどまつてあたりを睥睨し、犬は鎖を張つて子供を引いて去つた。光る雨ならまだしも五月のにほひを運んで、そこに植物の狀態も沸けば、しづかな詩のこゝろも見出されやうといふものだが、これは夜もひるもない暗い騒がしい雨なのだ。朝となく夕方となくろんどんを包む濕氣の連續なのだ。よし一しきり雨がやんで、白い日光がぼんやりと落ちてくることがあつても、それはまた直ぐ水の線に變つて、太陽よりももつと平均に限なくそゝぐであらう。傘とレイン・コウトの倫敦に名物の薄明が覆ひかぶさる。夜に入つて一さうの雨だ。

すると、ちやうど前の往來に立つてゐる古風な住宅のなかか[illegible]が流れこんで、雨の眞夜中でも新聞の見出しが讀めるほど部屋はあかるかつた。私たちの間借りしてゐるパアム街一〇九番の三階建ての家は、完全におなじ建築と外觀の住宅が何哩も何哩も、ほとんど地球のそとにまでつゞいてゐるやうに思はれる、たましひを搔き挘りたいほど退屈なパアム街のなかほどに、109といふ番號字の剝げかゝつた茶煉瓦の立體が、赤く枯れた蔦をいつぱいに絡ませて、よろめきながら街路にむかつて蹌みこたへてゐる、それだつた。同居人と日用品商人の手垢で黒くよごれた木の門から、呼鈴のこわれたまゝになつてゐる入口のあひだには、芝生のかはりに赤土と石ころがあつて、重病人のやうな林檎の樹の下に忘れな草が咲いてゐた。うしろの庭は塵埃すて場だつた。そして朝晩はどの家からも不健康な料理油のにほひと赤んぼの泣聲とが、五月の雨とゝもに街路に面する窓といふ窓のかあてんをそよがせてゐた。風雨に着色された木柵のところどころを、眞あたらしい板で不器用に修繕したあとが、うすあかりのなかにまるで傷口のやうに生々しかつた。塀にそつて金いろの水蠟樹(いぼた)が芽をそろへてゐた。ことによると、雨を浴びたそのあざやかな黄が瓦斯燈の光線に反射して、それでかうも夜の室内が明るいのかも知れなかつたが、この頃のロンドンに午前[illegible]そのうち[illegible]時にはもうぼうつとした朝の[illegible]が雨といつしよに青つぽく[illegible]わたりて、牛乳配達の馬のひづめが地流れのする固い石疊を鳴らして過ぎる。つぎには、黒人のやうな石炭屋が大型貨物自働車に山とつんだ石炭ぶくろの上に突つ立つて、むかしの倫敦呼聲(ロンドン・クライ)のおもかげをつたへて咽喉自慢らしく叫んでくる。

こうる・まあゝゝん!

こうる・まあゝゝん!

さうすると、雨のなかをあちらこちらの家から細君や娘たちが走り出てその日の石炭を買ひ込む。五月だといふのに、寒い雨のおかげで、人は一日爐のまへに椅子を引いて暮らしてゐるのだ。

とにかく人をめらんこりいにする雨がday after dayつゞいてゆく。四六時ちう勝手に降つたり上つたりする、じつに無意義な灰色の水粒だ。ろんどんの五月の雨よ。呪はれてあれ!

May in England——多くの詩人と、より多くの詩の追隨者たちによつて、薔薇・ひばり・日光・微風・花の香・田舍みち・淡い木影などと古來讃美されてきた五月のろんどんだから、さぞ色彩的な生活情緒が自然に人事に高唱されてゐることだらうと思つたら、ALAS!異國人にとつて倫敦の五月はこんなにまで

不人情につめたく感じられる。げんに雨と霧日と落莫たるたゞずまひとが、いましつかり私を押さへつけて、この多角的な怪物の把握で窒息させやうとしてゐるくらゐだ。

WHY！　あゝ・いえす、しつこい歯痛とゝもに野々として焦立たしいものの代表に使はれるほど、世界的に有名なA London weather——それが私に作用しつゝあるのだ。

私たちだつて、旅行者のもつ裕な善意と口笛の氣輕さで、野花とみどりの斜面と森のむれのケント州の心臓を走つて、「ある日大きな倫敦へ愛蘭人がやつてきた」やうに、黒いヴイクトリア停車場へ着いたものだつた。それを老嬢ロンドンは、老嬢に特有の白眼と冬の陽ざしと煤けた建物の並立とでごく儀式的に迎へてくれた。なんといふ殷賑な、そして莫大な川舎町であらう！これが私の組織を霜閃し去つた正直な第一印象だつた。見わたすところ、家も人も路も權威ある濃灰色の一いろの歴史的凝結にすぎない。そしてabove all——雨。私の部屋の窓硝子に、week in, week out、ほそい水の糸をひく五月の雨。GAWD！

君！

ぼんやりと椅子に崩れてゐる私は、まぶたのうらに、太陽の接吻にめぐまれた日本の五月の思ひ出をころがしてゐる。眼をつぶると、ひとりでに日本と日本の日光が浮かび出てくるのだ。五月と言へば君、わがにほん國では風もないのにひらひらと「サクラ」が散り、櫻の梢からHiroshigeのFuji-Yamaがほゝえみひるがへる燕と女の袂・氣の早い麥藁帽とばらそるーが、現實の私のまへには、窓枠のなかの雨の風景畫が一枚、まるで美術館のやうに並んで壁にひらいてゐるきりだ。

石と鐵と石炭の巨大な暗黒の底に白いしぶきをあげて、くろ光りにひかる道路に、驀進する自動車の燈火がながく流れてゐる。そこには、空氣のかはりに赤然たる水滴が濃く宙を占めて、かうして見てゐると、まるで私たちじしんが魚類に化身したやうな氣がする。またしても私のこゝろに日本の新緑が萌え上つてくる。私は彼女を見た。彼女は煖爐のまへにしやがんでしきりに石炭の火をくづしてゐる。

で、私はやはり私の窓へかへる。があつといふ音が走つたかと思ふと、交通機關の咆哮がしいんと遠ざかつて、水蠟樹の反映のなかを——anyway、また雨だ。

一晩降り抜くだらう。

That Derby Day

視野のかぎり茫茫たるゆるい芝生の起伏に、ありとあらゆる

習慣の衣裳と言語と人種と風習と、そして個性と手段と嗜好と澄渕とお原色の大洋のやうに混乱して、そいつが貴にも大々的な上機嫌(ハイ・スピリット)のもとに一つに団結して跳躍する、躍旋する、哄笑する、乱舞する——何のことはない、くりすます前の市ぜんたいの玩具屋の全商品を、一哩平方の玉突臺のうへへぶちまけて、電氣仕掛で上下左右にゆすぶりながら、そこへ、あめりか中の女學生を駆つてきて足踏踊(ステップ・ダンス)をおどらせ、巴里のキャバレ女に香水を振り撒かせ、猶太人に銀貨をかぞへさせ、支那の船員に口論させ、そばで西班牙人と伊太利人に心ゆくまで決闘をゆるすやうな、ひと口にいへば、なんともすさまじい享楽と騒擾の一大総合場面——バグダッドの朝市場ほど喋がしく、瘋狂院の変會できちがひの大群が露西亜バレイを踊つてるほどにも奔流的な光景(サイト)を呈するのが、馬の謝肉祭——いぎりすの、NO! この世界のダアビイだ。

DERBY! なんとその名の傳統的で、かつ派手(ゲイ)な精神に満ちみちてゐることよ!

六月六日。馬が人よりも神さまよりも巾をきかすべく貴族(ロウド)たちの名において約束された日である。

道理で、この日、太陽は馬のために——特に——かゞやき、青空は馬のために一さうあをく拡がり、草木は馬のために一夜にみどりを着け、鳥は馬のために出来るだけ唄ひそゝぎ、人は馬のために髪の毛をかへ、女は馬のために、[illegible]と帽子と靴をあつらへ、自動車は馬のために喘え、犬は馬のために尾を振り、國旗は馬のためにひらめき、音楽は馬のために行はれ、さうして馬じしんは——馬は馬らしい功名心のためにこれらのすべてへ向つて高くいなゝく。歴史と陛下によつて十九世紀的に祝福されてゐるのが英吉利の大競馬。ことにこのダアビイ——といふから、そこで私たちも、これではならぬと馬のために出来るだけすぽうつに装つて双眼鏡をはすにかけ、下宿のお婆さんナオミ・グラハム夫人を同伴し、いつも夫人の臺所にうろうろしてる身許不明の無職青年ブリグスを運轉手に仕立て、ブリグス青年がいづくからともなく拉し来つた一九二五年型何とかといふ自動車に打ち乗つて、さてこのとほり、國道を流れる車輪の氾濫に加はつてかうしていまエプソム町近郊の競馬場へ馳せ参じたわけだが、BEHOLD!

遠く望めば、混然溷然雑然たる色調の撒布に、蚊ばしら見たいなひとつの大きな陽炎が揺れ立つて、地には人馬と大衆、そらには風船と飛行機——日々かゞみ(デエリイ・ミラア)・タイムス・毎日電報(デエリイ・テレグラフ)・公報(ニュース・クロニクル)なんかといふ新聞社の所属をつばさに大書した——が日光をさへぎり、近づくにつれて自動車は野にあふれ、野は飛散の紙にふ

ほはれ、紙屑は人の靴に踏みにじられ、人は周圍に醉つて矢鱈に大聲を發し、巡査と役員と貴婦人の洪水をくゞつて十八九の若い衆が何人も何人も泳ぎまはつてゐる。番組(カード)賣りだ。

番組でござい(フウウオンネ・カアド)
番組の御用!(レイシング・カアド・ヒヤ)
番組は六片!(シクスペンス・アカアド)
番組でござい(フウ・ウオンネ・カアド)

人を見れば駈けより、自動車がくればぶらドりして、一せいに叱るやうにわめきつゞける——あい! ふ・うおんた・かあど! しくすぺんさ・かあど! あい! ふ・うおんた——。

そして、そのすべての上に、ぶうんと馬の汗がにほつてくるのだ。おゝ、DERBY!

ま、一つ番組を買はう。

『へい! きみあかあど!』

私が吶喊る。近くにゐるふういおんたがぴたりと聲を中止して一枚をさし出す。讀んでみる。かうだ。

エプソム競馬　第二日
一九二八年六月六日水曜日

と莫迦に詳しく、下に委員(スチユワアズ)としてロウズベリイ伯爵、ロンズデイル伯爵、ダルハム伯爵、表紙のうらには、既權利者(テイアル・ホウルダアス)ワエザビイ&息子達會社——これは英吉利競馬の大元締だ——だの、優劣均衡條件決定者、出發合圖人、審判官、獸醫——馬の——、醫者——人類の——だのが一々叮嚀にその住所姓名位階とともに列記してあつて、それから各回の競馬に出場する光榮ある馬族の生立ち、頭數、騎手、色分け等々々を順序を追つて個人的に——ぢやない、個馬的に記述してあるんだが、いまそれに眼をとほしてゐる暇はない。たゞ番組のうらを見ると、「觀客諸氏にむかつて一枚の番組につき公定價格の金六片以上を決して支拂ふことのないやうに非常に熱心に依頼するものである」なんかんと大きな字で書いてある。六片のものを六志はおろか六磅にも賣りつけるやつがないとは限らない。忘れてはいけない、こゝは詐欺と掏摸とこそ泥が組織的に横行する權利ある競馬場だからだ。私が、財布時計ETC——もちろん自分の存在を一應確認してから、つゞく三人にこの忠告を與へると、彼女は寫眞機を下げる手に力を入れ、オナミ・グラハム夫人はオホサカ眞珠の首飾りにちよつと觸つてみ、最後にブリグス青年は照れたやうににやにやした。私はそんなつもりで言つたんぢやあないが、ことによるとかれブリグスは、かねて自分の意圖する活躍に對し先まはりして警告されたやうに感じたのかも知れない。あるひは單に、良心のほか失ふべき何物も有たないこと

を、こりにやにゆによつて支持した[illegible]
いゝ。
　そんなことは何方でもいゝ——として、さて、ふたゝび瞳をあげてエプソム草丘(ダウン)を見わたすと——。
　視線の届く限り茫漠たる芝生の起伏に、ありとあらゆる乗物と人種と喧騒と體臭——馬とさうして人の——と雑色と潑剌と陽光と——とにかく、自動車を構内(エンクロウヂュア)へ入れやうといふので、警官の保護のもとに狭い入口を通らうとしてゐると、耳の近くで大聲がした。
　もつとも、はじめから聲はいろいろしてゐるんだが、これは、紳士づくめのいぎりす競馬のまんなかに、めづらしくも南部あめりかの旋律を帯びてゐたから、とつさに私を振りかへらせるに充分だつた。
　眞珠王(パアリイキング)に眞珠女王(パアレイクヰイン)といふ、帽子から衣服ぜんたいに隙間もなく貝ぼたんを縫ひつけた一組の男女が、慈善病院か何かの資金をあつめるために、パンジョウに合はせて聲いつぱいに唄つてゐる。

　　河(リヴア)のお爺さん——
　　お爺さんの河(リヴア)——
　　何もかも知つてゐて
　　[illegible]
　　たゞゆつと流れてゆく
　　お前は河(リヴア)のお爺さん

——河(リヴア)はあのミシヽピのことだ。いま倫敦のドルウリイ・レイン座は、エドナ・フアウバアの小説からとつた、亞米利加民衆の楽劇「芝居舟(シヨウボウト)」を演して大當りを取つてゐるが、そのなかでポウル・ロウブスンといふ黒人のテノウルが歌ふ「河の唄」が人氣を博して、こゝでこの眞珠王と女王がうたつてゐるのもその「芝居舟」の一節だつた。
　ま、これも何うでもいゝとして——。
　自動車は五志かそこらでそとへ預(パアク)しておくことも出來るが、私たちは、青年ブリグスがこすく立ち廻つた結果、大觀覧席のすぐまへ、コウスに近いところへ割り込んで行つて、車に乗つたまゝ見物することになつた。すると、どこからともなく一人の女が切符をもつて場所代を取りにくる。一磅といふのをこれはナオミ・グラハム夫人が十五志に値切り倒したが、これらの人は、競馬のときだけエプソム・ダウンのコウスに沿つた何英町といふ土地(ラフト)を細ぎりに借りて、當日じぶんの借地へ自動車がとまるのを待つて一車一日いくらと徴收し、多くはそれで一年の生計を立てゝゐるのだ。したがつてその人々は、毎年、とより

も、家によつて代々世襲のわけで、こゝらがはなはだ英吉利の、そしてダアビイらしい――なんかとちよつと感心しながら、またがりにしろ、これでいぎりすへ來て土地まで借りてゐるといふので大いに意を強うし、あらためて傾斜から丘の頂上を眺めると、色と人と音の渦の中央にゐるんだから、まるで曲馬團の群輪へ抛り出されたやうで、あちこちに廻轉木馬・輪投げ・動揺椅子・電氣ろうれつと・綵引き・人形撃ち・玉ころがしなどのゲイムの小屋が茸のやうにすくすくと建つてそれぞれに客をあつめ、樂隊と木笛と風船の音が世界を占め、それらに君臨して螺旋すべりの塔が高く中空を拔いて、賭取人の色傘と黒板と嗄れ聲とにけふの日はさんさんと降り――ジプシイの女がショウルをかけて人波をわけてゐる。多くは赤んぼ――ジプシイの――を抱いてゐて、私たちの自動車もたちまち彼らに包圍された。口々に囀るやうな一本調子である。

『奥さまー』と私よりも一せいに彼女をくどきにかゝる。『この兒に一片やつとくんなさいな。ほら！こんな可愛い兒！運がよくなりますよ！賭けた馬が勝ちますよ！ねえ奥さま、この兒に一片――。』

れんめんとして盡きない哀音だ。知らん顔をしてゐてやるんだが、あんまり「可愛い兒」だといふからつひ見る氣になると、私たちの鼻さきに、握拳大の、それでゐて妙に年寄りじみた赤ぐろい顔が、一打ほどずらりと突きつけられてゐた。ジプシイ――悪いことはすべて彼らの所爲となつてゐて、またじつさいさうかも知れないが、赫々しい色布と人ずれとに身を固め、職業的勇敢をもつて何處にでも出現し、どこまでも肉迫してくる乞食民族の旅行隊――かれらの皺の一つにも諸大陸の味がこまかく刻み込まれてゐる。のはいゝが、赤んぼのないやつは、小さな鏡のかけらみたいなものを持つてきて、あなたの未來を見ませう！競馬の運をみて上げませう！なんかと、こつちが怒るまでうるさくつきまとふ。うつかりしてゐると、そこらにある物を何でも持つてゆくんだから、ナオミ・グラハム夫人は專心この一群の追拂ひ方を引受けた末、たうとう彼らと大喧嘩におちいり、汗をかいた。

それはそれとして、さて馬だが――

このエプソム競馬の特徴は、コウスが半圓をなしてゐることで、競馬線は出發點からゆるく彎曲してタテナム角をまがり、大觀覧席の前面で決勝する、つまり楕圓的な三角形をつくつてゐる。だから、タテナム・コウナアは馬と騎手にとつて運命的な急廻轉地で、ほとんどこゝの拔ひ一つで勝負がきまるといはれてるくらゐだ。漫然とダアビイと稱するものゝ、ほんとのい

はゆるダアビイ日はエプソムの二日目で、しかもダアビイ競馬といふのは、この日の全六回のうち第三回、午後三時に行はれるたつた一回の競にすぎない。今年はダアビイの百四十五年めにあたり、近年になく盛大だつた。ダアビイの距離は一哩半、三才馬、廿三頭出場。翌日は婦人日で牝馬だけ走るんだが、ダアビイは混合だ。

ところで、番組を白眼んで賭け馬の選擇にかゝらう——と言つたつて、ナオミ・グラハム夫人は兄が賭人(ブツキイ)をしてゐるのでいろいろ玄人の豫想(チツプ)が貰へるけれど、私たちは馬の名によつて第六感に訴へるほか仕方がない。この姓名判斷もあんまり莫迦にならない證據には、私は、これで第一回のランモア競馬に「王様の行列(キングス・パレイド)」といふのへ——名まへがいゝから——二志賭けたら、廿對一で二磅——廿圓ばかり——儲け、つぎのウオリングトン競馬にもこの方法によつて、こんどは彼女が「雷風(サンダア・スコウル)」で約五十圓勝ち、大得意でダアビイになつたところが——こゝで私は思ひ出した。

けふの六月六日が迫るにつれてこの二三週間といふものは、電車に乘つても料理屋(レストラン)へ行つても町を歩いても、車掌は切符をきりながら、給仕人は皿を運びながら、通行人は自動車に用心しながら、「at も spoon も、

「ダアビイには何が勝つでせうね。」

「さあ——まづフラミンゴかキャメルッオウドでせうな。」

「ダアビイは君、どの馬だと思ふ？」

「きまつてらあな。キャメルッオウドかフラミンゴさ。」

「ねえ、ことしのダアビイぢやあ——。」

「あら嫌だ！もう判つてるぢやないの。フラミンゴか、さもなけりやキャメルッオウドよ。」「なんかといふ騒ぎ、これを私が不幸にも小耳にはさんでゐたので、今回にかぎり大事をとつて獨特の馬名判斷法を廢し、その素晴しい人氣(フェイヴァ)の二匹の馬をふたりのあひだに分けて、私はフラミンゴをとり、彼女はキャメルッオウドへ、各二磅づつ賭けた——ところが！馬運つたなく、兩頭ともに後塵を拜して、フエルステッドといふ餘計な馬が一着をしめてしまつたから、私たちもぺちやんこだ。これでけちがついたとみえてあとの三回も負けつゞけ、ひと頃は一攫七十圓も領してゐたのが、あとでしらべてみると、とゞのつまり三志ばかりの損だつた。このフエルステッドなる怪馬にはみんながやられたらしく、一同かぎりなく口惜しがつてゐた。たゞ、私の知つてゐる範圍では、これによつて一財産つくつた人が世界にふたりある。ひとりは、言ふまでもなく馬の所有主ユウゴウ・カンリッフ・オウエン卿で、卿は、二三日まへに田舍から電報で加入を

申込んで、なんらの勝算なしに走らせてみたのださうだが、それが思ひがけなくもこんなことになつて、卿もツエルステツドヒしんも心からびつくりしてゐる。そのびつくりしてゐる現場が寫眞にとられて、次ぎ日の新聞に出てゐるのを私が見たんだから確かだ。が、これはまあい〻として、もう一人の利得者は一たい誰か？といふと、何をかくさう、印度の――そして印度にゐる――一赤んぼ――唐突にも――であつた。では、そもそも何うして印度の赤ん坊が――となると、私は疑ふ。いくら預言者の産地印度の赤んぼにしろ、どうも赤ん坊が自分でえらんで賭けたものではあるまい。これは私が思ふんだが、きつと父親が、ツエルステツドの勝利を夢にでも見て、赤んぼの名で印度から賭金を電送したのだらう。大金と言はるべき程度のものだつたから、それが廿五倍になつて返つて、こんにちこ〻に集まつた大群集――私達とナオミ・グラハム夫人およびブリグス青年をも入れて――は、たゞ單に一日こんなに逆上して、その献金により、遠隔の地印度に、ひとりの小さな黒い成金を作製したに過ぎない、といふ結果になつてしまつた。

　金を賭けるには bookie へ行くのだ。何百といふこの獨立の私営賭馬人が、思ひ〻〻のところにずらりと陣取つて、サム・ソウだのアウサ・フウリガンだのといふ名乘りの大看板をあげ酒場の主人らしいのや東部のごろつき然たるのが、汗と泡を飛ばしながら白墨と財布を兩手に握つて、台の上から我鳴り立てる。

「エスカ――六對一！　巡禮の鈴――三對一！　パルビゾン！　ダグヲ！　日本の星！　さあ來た！　みんな賭けたり張つたり――え？　大至急二世へ半クラウン？　有難う。」などと客ともやりとりしてゐる。各回競馬の走り出すまへに驅けてつて、幾らでもい〻、馬の名を言つて金を出すと、引きかへに番號のついた札を呉れるから、もしその馬が勝てば、札を示して何倍かの金を受取り、負ければ、肝癪を起して札を破いちまへばい〻。ぶつきいのそばには必ず高いところに信號係りが立つてゐて、手を振り、肘を叩き、頬をつまみしてお互に聯絡を保つてゐる。これを tick-tack といつて、その場になつて刻々移る一般の人氣によつて激しく上下する馬金率を報らせあつてゐるのだ。そこでもこ〻でも襯衣一まいの男が不可思議な人の海のうへに、白日のふあんたじあを踊つてゐる。これで見るみる値段が變つて行き、それもブツキイによつて色々に違ふので、すこしでも割のい〻ブツキイで賭けやうとあつて、男も女もお婆さんもお金と對準を握り、血相かへて右往左往してゐる。一番にでも二番へでも賭けられて、その上いろんなふうに組合せがつく

んだから、これがじつさいになるとなかなかやゝこしい。あまつさへロンドンとその近くのすべての町が今日はすつかりからつぽになるほどの人出だ。馬みたいに鼻の穴の大きなグウズベリイ伯爵が、灰色の山高帽に双眼鏡といふいでたちで全家族を引きつれて悠歩していくあとから、百貨店の賣子が、これも灰色の山高帽に双眼鏡といふいでたちで――蘇國高地人(スカツチ・ハイランダア)の笛と、その妻のキルト踊り・茶店・道化役・パイナツプル賣り・れもねえど・早取寫眞・歌留多當てもの・競馬の忠告(チツプ)賣り・その他種々のごつた返すなかを往きつ戻りつしてゐる。

『わたしどもの言ふ馬が勝たなかつたら、お金はそつくりかへしますよ――金一志で、この紙にけふの勝ち馬がすつかり書いてある。へん、安いもんでさあ。』

豫報(チツプ)賣りの口上だ。私も買つてみたが、帖面のきれはしに馬の番號が出鱈目に――どうもさうとしか思はれない――殴りがきしてあるだけだ。さすがに自分でも氣が咎めるとみえて、一回ごとに場處をかへては前回の買手の襲撃を避け、同時に新しい犠牲者をさがしてゐる。

やがて――えてかういふ「大きな日(ビツグ・デイ)」は時の經つのが早いものだ――大觀覧席の額の壁が赤く染まり、馬は汗をひつこめ、人は疲れてだんだん無口になり、さうしてエプソム丘に夕風が立

つ。

The Day's end――。

歸路につかれやうとしてゐるジョウヂ五世陛下と皇后陛下が、遠く小さく、おなじく歸路につかうとしてゐる私たちから拜された。四頭立ての白馬と、御通路をあける警官のヘルメツトに陽がちかちかしてゐた。

ロンドンへの路をありとあらゆる類型の乘物がつゞく。歴史的に有名な「ダアビイの歸り」だ。洗濯屋の箱車(ヴアン)の屋根に、その家族らしい肥つたおかみさんと子供たちが鈴成りに足をぶらぶらさせて、笑ひながら歌ひながら私達を追ひこして行つた。Old time coach の紳士倶樂部員と、老夫婦をのせた驛馬車の鈴、赤・黄・緑の見物自動車(シヤラバンク)と最新のロウドスタア。

田舎みちの兩側、ろんどんへはいつてまでも大通りの歩道は、ふるい習慣によりダアビイがへりの私たちから銅貨をほうつてもらはふといふ巷の子供らでいつぱいだ。

黴の生えた銅貨でいゝから
一つ抛つとくれ――いつ！

Throw me out a mouldy copper! と一せいに聲を張り上げるんだが、この「すろうみあうたもうでいか。はあ」が、自動車の速力でひとつに消されて、私たちの耳を聾するのは、灯

のつきそめた巷衢をいたづらに震撼する、無意味な、そして愉快に執拗な金切り聲の何哩かにすぎない。

あゝ――ん！

あゝ―――ん！

あゝ――――ん！

散歩者の感情

「旅は、はるばるほんとの自分をさがしに出るやうなものだ」といふ。この「ほんとの自分」として最初に打つてくるのが、じぶんの屬する人種と國籍にいまさらのやうに氣のつくこと。そしてそのもつとも端的な場合が――床屋だ。

で、これは床屋での出來事――出來事といふほどのことでもないが――である。

いつたい日本でも理髮店は私を臆病にする。鋏といふ女性的な傳說的な存在のまへで刃物と饒舌が思ふさま活躍するからだ。ことに白い布を背のまはりへ押しこめられて、大きな椅子に捕虜になつてゐると、私はすつかり自信をうしなひ、かゞみの中の自分へむかつてひたすら恐縮する。「一男子がこゝろから友達を要求する時」――そんな氣がしてくるのだ。

だからその時も、こみ上げてくるこのはかなさで一ぱいになりながら、私は椅子にぢつとして一刻も早く「手術」のおはるのを待つてゐた。倫敦の町はづれの、一住宅區域内の商業街の、煙草屋の奥の床屋である。午後二時半。良人たちはみな市の中心へ出勤し、夫人達はそろそろお茶の仕度にかゝり、胃は晝飯(ランチ)を消化して睡氣をもよほし、交通巡査はしきりに時計を見て交替にあこがれ――これを要するに、町ぜんたいがやうやく一日の疲れを示し出して、蠅と床屋の鋏と太陽だけがますます調子づくほか、一時ちよつと萬物が虚脱するやうな眞晝の靜寂だつた――どうも如何にも大事件が突發しさうだが、また私じしんにとつては確かにひとつの衝撃(シヨツク)にちがひなかつたが――。

ところで、「近處の床屋(ネイバフツド・バアバア)」と言へば、その舞台裝置はたいがいきまつてる。あんまり綺麗でない壁にあんまり綺麗でない大鏡が二個乃至三個ならび、そのあひだに角の演藝館(ヴアライテイ)の二週間まへのびらと、ジョニイ・ウオウカア――Born in 1820, still going strong――の廣告繪がかゝり、あんまり綺麗でない白衣を着た床屋が――床屋のくせに髪をぼうぼうさせて――とにかく、客はいつもの誰かれとみんな知合ひとみえ、

『ようハアリイ！あれから何うしたい？』

『へつへ、ゆうべの勝負か――たうとう七点の負けさ。』

『わりに輕傷で濟んだね。』

なんかと昨夜の蓄留多を蓄聽したりすることと日本に在ることし――このハアリイやデックやタムだ、ちらとひとつの窓を見ては一樣にちよつとおどろいてゐる。そこに、黄色い黒い顏の、眼の吊り上つた、針金みたいな黒髮の異形な人物の映像がありありと映つてゐるからだ。が、入り代り立ちかはりする外來者が、南あめりか森林地帶で捕獲された不運な小動物――學名未詳――を見學するときの、明白な好奇心と多少の不氣味さをあらはした眼をもつて、いくら斜めに――正面から凝視することはこの怪人を激怒させるかも知れない。そして犬や猫をさへ激怒させるやうなことはしないのが英吉利の紳士だから――見やうと、その映像の本尊たる私は平氣以上に平氣だ。とは言へ、只さへ床屋における私は一ばん弱い瞬間の私だ。私は正直に、このとき私は私のなかの日本人を意識し、三千年の光榮ある歷史を思ひ、私のうしろにほうはいたるにつぽんの背景を感じ、この床屋の椅子のうへで、民族代表の重大な責任にいさゝか身體を硬ばらせてゐた、と告白したはうがいゝかも知れない。つまり、すくなからず氣取つてゐたのである。

公衆のまへで氣取ると私は顏面から水蒸氣を發散するのがつねだ。ことにその日は暑かつたので、私は、鏡のなかの私からぽつぽと湯氣が立つてゐるのを見た。

ちようど暑一日のあひだに不自然に[illegible]だつた。紳士であることの高貴な特權は、既に水蒸氣に氣がついたのを機會に、それを利用して ちよつと變なこの場の空氣を散ふべく、えへん！と一つ英語で咳拂ひしてから直接私へ話頭を向ける。

『お暑うございますな今日は。』

べつに反對すべき理由もないから、私もかるく同樣の旨を發表する。

『然り。何と暑き日でこんにちのあることよ！』

『全くかうあつくちやあやり切れませんな――しかし、こんなのはさう長くは續きませんよ。きつと、また明日あたりみんな外套を着るでせう、へ、へ、へ。なあデック！――』と大きな聲でデックへ――『ロンドンの天氣だけあわからねなあ。』

『さうよ。ロンドンの天氣だけあからきしわからねえ。』

順番を待つてゐるデックが答へる。こいつが店へ這入つてきたとき魚のにほひがしたから、按ずるに、デックは四五軒さきの魚屋（フイシユ・バア）の若い者であらう。と言つても、べつにいなせななりをしてゐるわけではない。金いろの毛の密生した手で新聞を讀んでゐる、

『じつさい、』と床屋は私の頭のうへで、『もう二三時間もしたら

わたしの考へぢやあさあつと一雨來ますね。これからぐつと涼しくなりまさあ。』

『われは、そのなんじの豫言の眞實ならんことを望む。』

これは言ふまでもなく私だ。何だか知らないが床屋はひどく驚いてゐる。

『おや！　旦那は暑いのはお嫌ひですか？』

『われは、あまりに寒きを好まざるがごとく、あまりに暑きをも好まざるものなり。』

『へえい！　そいつあ驚きましたね。わたしやまた、旦那あ寒いのあ閉口だらうが、暑いのは何んなにあつくても、暑くて困るつてこたあないのかと思つてましたよ。』

『そも何が汝をしてしかく思はしめしや？』

『だつて、暑さには慣れておいででせう？　お國は素敵にあついんぢやありませんか。』

『われらは故國において相當暑き夏と、相當さむき冬と、丁度よきところの春と秋とを持つ。』

『ひやあつ！　年が年中べらぼうに暑いつてえぢやありませんか。うそですか？』

『否。そは斷じて事實にあらず。』

會話の速度が早まるにしたがひ、私は一さう切口上だ。床屋は非常に不服さうな顔をしてゐる。

『さうですかねえ――ばかに暑いつてことを聞いたがなあ。うそですかねえ、すると。』

そこで私は、念のために訊いてみた。

『汝は果して世界のいづくに關して談じつゝあるや、われこれを疑ふ。』

すると床屋が言下に應答した。

『印度ぢやありませんか勿論――お顔は？　お剃りになりますか。』

『否！』

『洗髮（シャンプウ）は？』

『否！』

『おつむりへ何か？』

『否！』

『香油でも――。』

『否！』

八片（ペンス）おいて出てくるときひよいと鏡を覗くと、眞赤に憤慨中の「印度人」が、この小さく傷つけられた民族の誇りに、いよいよ昂々然と刈りたての頭を高く持してゐるのを發見した。

戸外は、それこそ印度猛夏の日中だつた。

亞米利加ではしぢう支那人あつかひされたものだが、何といふものか、いぎりすへ來たら今度はよく印度人に間違はれる。

これも或る日の午後、私はろんどん一流の百貨店セリフリツヂで、彼女の命令により旅行用の衣裳掛け——あの、折疊式になつて皮のふくろに這入つてるやつ——を、hunt down すべく、ちようど買物時刻の人ごみのなかを血相かへて右に左に奔走してゐた。すでにこんな努力が必要だつたくらゐだから、いかにその折疊式袋入衣裳掛なる物品が、ふくろにはいつてゐるせいか、旅行用品部のどこを見ても決して露出してゐなかつたかゞわからう。そのうちにつるべ落しの夏の陽はとつぷりと暮れかかるし、足は棒のやうになるし——これぢやあまるで山道にさしかかつてゐるやうだが——いつたい私は、何ごとによらず西洋人にものを教へて貰ふことが大嫌ひで、ロンドンなんかでもたとへ何んなに途に迷つても Bobby 人に訊くといふことはしないんだが、この時だけは仕方がないから、恥を忍んでちらと見えた賣子監督（フロアウオウカア）へ駈け寄つた。

執事（バトラア）と門衛（ドアマン）と賣子監督はいぎりす産に限ると言はれてるほど、いかさま堂々とした「能なし（ノウバディ）」がお仕着せのモウニングを一着におよび微笑の本家みたいな顔をして直立してゐる。

そこを私が襲つた。

「旅行用の衣裳かけは一たい何階に陳列してあるんです？」

あたしは、ここぞとばかりふだんの三倍も[illegible]はなつて[illegible]した。

「旅行用の——何と仰言いましたかしら？失禮ですがあとのほうが聞きとれませんでしたので、はなはだ、御面倒ながら若しおさしつかへ御座いませんでしたらもう一度おうかがひ致したいと考へてをりますところですが——。」

「旅行用のコウト掛け——まさか旅行中ぢやありますまいね。」

「いえ！コウト掛ならば確かに何處かにございますから——。」

「どこに？——その潜伏場所をはつきり——。」

「旅行品部は捜索なさいましたらうな？」

「もちろん！」

「では——と、では、衣裳掛けですから殊によると衣裳掛部にございませう。御案内いたしませう。こちらで御座います。」

といふので、私はこの微笑するモウニング・コウトと伴れ立ち、ふたたびほそい通路の旅行に發足したんだが、みちみちくだんのモウニング・コウトがだんだん個人的な興を出す。

「ずゐぶん長くかかりませうな、お國からここまで。」

「イエ、ス。だから歸りには何うしても衣裳掛けが要ると思つて——。」

『いや、よく解ります。何うですか、コロンボのはうは？やつぱり景氣がよくないですか、ここと同じに。』

「コロンボ？」

と訊きかへしながら私は氣がついた。が、第一うるさいもうるさいし、せつかくこのモウニングがさう信じこんで得意になつてゐるのだから、とつさに私は、そのままコロンボ市を「懐しい故郷」として、とにかくこの場は採用しておくことに決心した。

『あんまり面白くないです景氣は。』

『はゝあ、さうですかな――印度からですと、何ういふ路順でこちらへ――？』

『こつちから印度へ行く路のちやうど逆に當りますね。』

『はゝあ――すると？』

『衣裳かけはこの賣場にあるはずなんですか。』

『は。さうです。こゝで御座います。』

急に現職業にかへつたかれは、そこの賣台(カウンタア)と私の中間に正しくなゝめに停ちどまりながら、つんとモウニングの袖ぐちを引つぱつて、賣子の女に上官としての適度の威をしめして言つた。

『この紳士へ旅行用衣裳掛けをお見せ申すやうに。』

で、つひに私も、こんなに骨を折らせた旅行用衣裳掛けなる怪物を現實に――ＯＨ！　じつに現實に！――私のこの掌のうへに捕獲する機會に到達し得たのだつた。これは一々私が、印度人にまで「變裝」してその難捜査に從事した結果であると、私はいまだに信じてゐる。

買物で思ひ出したが、英吉利人はやたらに「Ｑ(キユウ)！」といふ。Thank you だが、これが何うしても「キユウ！」としか聞こえない。それも恐らく尻上りの「キユウ！」なんだから、はじめは誰でもちよつとびつくりさせられる。店へ這入る。すぐに番頭か女が近づいてきて、

『わたくしに出來ることがございますか――何をお眼にかけませうか？』

なんかといふ。こつちの店の制度は、たいがい賣子がじぶんの賣上高の何割かを貰ふことになつてゐるから、みんな一片(ペンス)でも高いものをひとつでも餘計に賣りつけやうといふので一生懸命だ。これを知らずにいぎりすの店員は親切で熱心だなどと無闇に感心する人がよくあるがたちまち自分のぼけつとへ影響して來るんだから、露骨に熱心にもならうし、賣らんがためには親切であることも必要なわけだ。が、このやり方は私はあまりいゝと思はない。それはなるほど店員の刺激にはなるだらうけれ

ど、時として店の空氣を不純にし、かつ多くの場合客に自由に店内を見てまはる氣をなくさせ、監視されてゐるやうな感じを起させやすい。で、いや、なに、たゞ漫然と見て歩いてるに過ぎないから放つといてくれ——かう店員に言つてやるんだが、すると彼らのすべてが、ぷいとそつぽを向いて「キユウ！」と器樂的な音響を發する。これも例の「有難う」なんだが、この場合は「ふん、お生憎さまでしたね！」ぐらゐにしかこつちにはひゞかない。その他あらゆる機會にあらゆる意味の「多謝」をふりまく。そして、あらゆる意味の言葉なるものは、たゞちに無意味な發音として以外に存在し得ないわけだから、いぎりすの「有難う」は要するに習慣によつて機械的に出る無意味な發音に過ぎないといふことになる。

「Q！」の用例を二三左に示せば——。

假りに電車のなかで誰かゞいやといふほど君の足を踏んだとする。このとき、君がもし大英國の紳士——もしくは淑女——なら、君はしづかにその加害者を振り返つて、おもむろに、しかし出來るだけ金屬的に、社會道德上一般に公認された悲鳴をあげることであらう。

『有難う！』と。

そしてまた。——

市街自動車で車掌から切符を買ふとすると、車掌も乗客も共にこの「キユウ！」をやりあふ。車掌は切符を渡すのがあたりまへ、客は車掌から切符を買ふのが當然で、その間「有難う」も何もなさそうなものだが、そこらがいぎりすの英吉利たるゆえん——車掌も客も紳士であり淑女である證據なのであらう。もつとも何の意味もない「キユウ！」なんだから、たとへこれが「多謝」のかはりに「地獄へ行け」であつてもいつかうさしつかへないわけだけれど——だから、女中が料理をはこんでくれば「キユウ！」、その皿を落して割つても「キユウ！」、皿のかけが飛んで怪我をしても「キユウ！」、雨が降つても「キユウ！」、陽が照つても「キユウ！」——で、かういふ私たちも、朝から晩までボウイにも門番にも運轉手にも「キユウ！」の撒きつゞけだ。

『キユウ！』

皿を割るといふので思出したが、こつちで日本に關してこんなことをいふ。

ある金持の家に、中世紀から傳つてゐる古い英吉利の皿が十二枚そろつてゐた。こんなに見事なものが一打そろつくりあるのは非常に珍しいとあつて、その家でも大いに大事にしてゐたところが、何かの粗相で一枚こわしてしまつた。そこで、殘念で

たまらないといふので、いろいろ相談の結果、一枚同じのをつくらせて補ふことになつたんだが、そのふるい製法はいぎりすではもうあとかたもなく消えてしまひ、どこへ訊きあはせても、それと同じ模樣、おなじ色あひ、同じにほひを出し得る自信をもつて引き受けやうといふところは一軒もない。一打の半ばを滿たさうといふんだから、言ふまでもなくすべての點で完全に他とおなじでなければ新たに大金を投じて一枚燒かせる意味をなさないから、躍氣になつてあちこち照會した末、とにかく日本といふ國は物を眞似（イミテイト）することにかけては世界の天才だから、かういふ仕事には日本が一ばん適任だらうといふことに一決し、こわれた皿のかけらを全部あつめて、これと寸分違はないものを拵へるやうにとはるばる日本の一名匠へ注文したのだつた。と、驚いたことには、早速出來上つて送つてよこした。主人公は大滿悅。たいへんな期待で包みを解いてみると——出て來たのは、色から模樣から「時代」まで元品（オリジナル）とすこしも變らない皿——ではあつたが、見本に送つたこわれた皿と完全に同じに、それは一枚分の新しい皿の破片で、べつに手紙がついてゐた。「ずゐぶん骨が折れ候へども、仕事はかなり細かきつもりに御座候。ちなみに見本の皿破片全部別送仕り候あひだ、なにとぞ新品とお較べのうへ御滿足をもつて御嘉納下さるやう願上げ候。頓首。」

主人は、のこりの十一枚のうへゝ思ひきりよく卒倒した——といふのがおちだが、もちろん、これは、日本人は眞似が上手すぎてこんなに融通が利かないといふことを言ひたいつもりなんだらうけれど、いぎりす製の莫迦ばなしだけあつて何うも狙ひが外れてゐてぴつたり來ない。氣の毒だが、敵ながら天晴れとは言へないのだ。私から見ると、この場合、日本のその陶工のはうが一枚も二枚も役者がうへである。一境地に達してゐる。この話しをそのまゝに取つても、この勝負、あきらかにかれの勝ちだ。下宿の食卓で同席のいぎりす人からこの笑話を聞いたとき、私はいみじくもなせるものかなと大いにうれしく思つた。が、私は默つてゐた。いくら論じたつて彼らには金輪際わかりつこないことを知つてゐるからだ。「こゝろ」の距離は大きい——私は紳士的微笑とゝもにしづかに麵麭をむしりながら話題を轉じただけだつた。

日本と言へば——。

たいがい英吉利人が——それもかなり知識階級の人でさへ——日本に關してじつに何も知らない、いや、知らうとしない——いぎりすの可哀さうな自己滿足がこゝにもあらはれて——事實には、じつに驚かされる場合が多い。だから私たちは、いつ

何どきどんな質問を浴びせられても動じないだけの用心をつねに必要とする。ちよつと親しくなるが早いか、すぐかうだ。

『日本の家はいまでも紙で出來てゐますか。』

『梯子段も紙製ですか。いつも不思議に思ふんですけれど、何うして紙の階段で昇つたり降りたり出來るんでせう。』

なんてのはまだいいはうで、さうかと思ふと、

『日本に鐵道がありますか。』

『保險がありますか。』

『新聞がありますか。』

にいたつては眞面目に應對出來ない。と言つて、默つて笑つてゐたんでは無いやうに思はれるおそれがあるから、ごく紳士的に、

『あります。』

『あります。』

『ありますよ。』

『ありますとも！』

『大いにあります！』

そして――キュウ！　むかうもやつと安心して――キュウ！

じつにじゆんぷうたいとうたるものだ。キュウ！

さて、新聞でまた思ひ出したが――。

私は、あさ眼がさめるとすぐタイムス一面の上段、私信欄を見るのを何よりのたのしみにしてゐる。けさはこんなものが出てゐた。

「いゝえ、決して許す事は出來ません。あなたのしたことを一ばんよく知つてゐるのは、あなたです――ウィニフレッドW。」

きのふは、

「五時に。いつものところで――S・K・N。」

一昨日は、

「こぼれた牛乳を泣くなかれ。グロリアよ、記憶せよ。わが家の食卓につねに一つのあき椅子がなんぢを待てることを――父。」

以下、連日散見のまゝに。

「準備すべて成り、指揮を待つ――ZZ。」

「BON・VOYAGE！　加奈陀の太陽はあなたのうへに耀くでせう。感謝と祈り――谷間の白百合。」

「接吻。フレッドへ――ナニイより。」

「夏季休暇中の友だちとして、同年輩の少年を求む。但し喧嘩好きで、そしてあんまり肥つてゐないこと。當方十一才――JACKベンスン。」

讀み終つた私は、新聞をおいて眼をつぶる。さうすると、私

の耳に倫敦のうなりがひびき、眼のうらに白屋敷（ホワイト・ホウル）の、メイフエアの、聖ジエムスの、南ケンシントンの、ヘムステツドの、プリクストンの、そしてライムハウスの——一くちに言へば大ろんどんの生活種々相が走り過ぎる。ジヨンソン博士が豫言したやうに、チヤアリング・クロスにはいま人間の潮（ヒユマン・タイド）がさかまき、ロンドンは生きた小說でいつぱいだ。その曲りくねつた路と、その暗い夜と、そのスコツトランド・ヤアドと——。

異國者は淋しい散步を愛する。

うつむいて步くと、土に、ちがつた石と草がある。草や石でさへかうもことなつてゐるのだ。まして人と人——西のこころと東のこころ、と言つたやうなことを、ともすると私は重苦しく考へてゐる。が、都會の散步者はもつと伊達で躁狂でなければならない。私も洋杖を振つて頭を上げやう。そして、レンズのやうにうつろになつて、この近代商業のバビロンを映して行かう。

英京ろんどん——その age old な權威ある凝結のなかに、低いビルヂングと國家的記念碑、電車とGENERALの二階つき乘合自働車、市民と市民の靴、これらすべてが現實に地球の引力を意識して、おのおのその完成せる社會制度上の持場にしたがひ、感心なほど靜止したり運ひまはつたりしてゐる。ここでは何もかもが「完成せる社會制度上の定律」によつて、工場の調べ革のやうに滑らかに運轉するのだ。銀行の小使は、銀行の小使としての社會的地位とその役目（フアンクシヨン）を知る事において「紳士であり、犬は、犬としての社會的地位とその役目（フアンクシヨン）を知る知らないによつて「紳士」もしくは「淑女」の犬か、さうでない「普通の（コンモン・ロウ）犬」かと別れ、時計がとまつても犬——これは evidently ひくい生れの犬（パアス）——が走つても、議會と商業會議所と新聞と牧師は即座に結束して起ち、決議をもつて want-to-know-the-reason-why するであらう。だからストランドには、どこまで往つてもおたがひに全然無關係な散步者の列が、排他的に散步のために散步し、ピカデリイでは、芝居の切符を買ふ人が人道に椅子を据えて夕刊とたばこと相互の無言とで何時間でも待ちつくし、街角の酒場（パブ）、歷史的に權威ある "Ye Old White Horse" のまへには、いつもロイド・ジヨウジを汚なくしたやうな老失業者と、バルフオア卿にそつくりの非番のバス運轉手とが、ひねもす政黨政治と競馬の紳士的討論にふけつてゐるに相違ない。そしてハイド公園の權威ある芝生では、やつとのことで「淑女」の貢子孃を伴れ出してきた「紳士」の番頭が、四五年まへに紐育で流行つた made in U. S. A. の駄じやれを、いつたい何時口に出して彼の尊崇を買つたものかと、そのもつとも效果的な瞬間を

坐つてゐる最中だし、[illegible]あるタキシは[illegible]帽と[illegible]の[illegible]を積んでいかにも思慮ぶかく走り、トラファルガア廣場では紳士的な社會主義者が鳩と空氣と落書にむかつて對印度政策の欠陷を指摘し、とうの昔に日本で封切りされた映畫に紳士淑女の禮裝がゐるならび——これを要するにあらゆる感激・突發・殺倒・異常・躍動・偶然を極度に排斥して、只そこにあるのは、壯嚴——生死を問はず——の保持する冷靜・ホテル支配人の常識・非藝術な整頓・商賣な平凡・十年一日除幕式のやうに順序立つた日常・節度と禮讓・一歩も社交を出ない紳士淑女のむれ・權威ある退屈——何世紀かにわたる商業と冒險と殖民とは、いままでの海賊の子孫たちに、速度(スピイド)と藥味(スパイス)と火花(スパアクル)の欠けたさくぜんたる近代生活を單に經營のための經營として強ひてゐるのを見る。何たる個人的感情の枯れた「紳士的現象」であらう！UOGH！なんといふ無關心(インデイフアレント)な、かなしいまでに實際的過ぎる社會圖であらう！紳士と淑女に「調子はづれ」と「若い愚かさ」と「夢中になる經驗」を豫期出來ないのは當然だ。が、個性のはつきりしない表情に歴史と領土による尊嚴を作爲して、あまりにも一絲みだれない毎日を、何らの懷疑も反逆もなしに受け入れてゐる敬愛する英吉利人の道德律(モラリテイ)を呼吸してゐると、私は正確に、死期を逸した陰險な老猫を聯想する。親切と誇示癖と利用本能。何があつても[illegible]を待ちあはせたいロンドンナアに、その[illegible]いおちつき、[illegible]はたたいひとりよがりの[illegible]AH！[illegible]瑕だらけな[illegible]の、しかもやり切れない長尺物だ。テンポのおそい悲哀なJAZZ、銅版畫の古錢からきこえてくるニイル・ブルウの舞踏(ステップ)、英文學の古本にこぼれた混合酒(カクテル)のにほひ、牛肉と山高帽・牛肉と山高帽。そして alove 三 ——テムズを撫でる粉炭の風。

いまの倫敦は、町も人も、人のこゝろもあまりに横にひろがり過ぎてゐる。繪と詩と、文學と音樂と天才と革命よ、このろんどんを見捨てよ！

街上、よく見かけるもの。

松葉杖。脚部に故障ある人——片足ながい、あるひは短い——笠。ひげの生えた女。肥つた老婆。しるく・はつとと晴天の洋傘。ブウツの紐屋。ライオン食堂。ABC——アルフレッド麵(ブン)麭會社(ド・カンパニィ)——。あめりかの觀光客。古着賣買のゆだや人とかれの手押車。屋根に荷物置きの小欄干のついた箱みたいなタキシ。「すつかり盲ら(トウタル・ブラインド)」とか「かなり盲ら(クワイト・ブラインド)」とかと細かい區別を明表した大きな紙札を背から下げてゐる乞食。勞働者の辻演說。慈善花うり娘。相乘りのモウタア・サイクル。道路工事。石炭配達者。深夜の屋台店。宣傳揭示「英產品を買へ！(バイ・ブリテシュ・グッツ)」。海外侵略の

英雄像と歐洲戰爭記念物の林立。歩道畫家(ペイヴメント・アーテイスト)。廣場と芝生——夜門を閉めるのが公園で一晩ぢう明けはなしなのが共有地(コンモン)——陽にやけた殖民地の青年。雀。犬。老大木。

おぺら・ぐらす

六月廿三日——ロウヤル・アルバアト會館(ホウル)にロウヤル・コウラル協會の「ヒアワサ」を見る。ロングフエロウの詩をコラリッヂ・テイラアが拔粹作曲したものを、フエアベイルンが演出してゐるのだ。音樂指揮マルコム・サアジエント博士。ヒアワサの結婚祝ひ、ミネハハの死、ヒアワサの出發の三幕に別れてゐる。一大合唱と群集運動の連續で　室内野外劇とでもいふべきものだ。衣裳と色彩と照明とでちよつと印象的な效果を出す。コウラス八百人、舞踊(バレイ)二百人。すり鉢の底のやうな獨特の舞臺に約千人の西印度扮裝者が一時にあらはれる。見物(スペクタクル)といへば見物、幼稚といへば幼稚。第三幕の白人のくる場面は全然ないはうがいゝと思つた。このため喜劇におはつてゐる。廊下では、片つぱしから扮裝のまゝの役者に掴まつて挨拶された。ほん物が檢査に來たと思つたのだらう。

六月廿六日——コヴエント・ガアデンのロウヤル・オペラ。だしものは「フアウスト」。ユウジン・グウセンスの指揮。シヤリアピンのメフイストフエレス。大禮装の紳士と淑女。私たちも禮装して自動車を乘りつける。それだけ。切符ひとり金廿五圓也

六月廿八日——ロウヤル・ドルウリイ・レイン座。樂劇(ミユウジカル)「芝居船(シヨウ・ボウト)」。黑人聲樂家と踊子。あめりか南部棉花栽培地方のはなし。わりに退屈。

六月三十日——皇太子劇場(プリンス・オヴ・ウエイルス)。「現場不在證明。」アガサ・クリステイの「ロジヤア・アクロイド卿殺害事件」を舞臺化したもの。トリイ夫人が出てゐる。

七月三日——女王座(クヰインス)。「メリイ・ドユウガンの裁判。」これは市俄古の上級法廷を背景とする亞米利加のメロだが、妙に變つてゐて大受けだ。現に世界中三十七個國でやつてゐる。觀客一同を陪審官に見立てゝ舞臺で公判が進行する。なかなか考へたものだ。如實なそしてかなりに cleverly done なスリラアである。

聖マアテン街の家

まづしい小人形(マリオネツト)の踊りをその踊りの輪のなかゝら見るつもり

で、さんざん探した末この貧民窟へうつつて來た私たちには、第一に幻滅を味はゝなければならなかつた。といふのはこれは私がすこしく物語的に失したせいかも知れないが、そこの貧民窟には、さういふ人々に特有な、無智から來る超國境の好意と狡猾な歡迎があるだけで、私がこゝろひそかに望んだやうな、「逃げるやうにして動く人影」も、「格子縞の鳥打帽を眼ぶかにかぶつて口を曲げてものをいふ傷痕の男」も、「誘拐されてくる社長の令嬢」も、OH！何といふあり得ないことであらう！ピストルの音さへもかつて一度として聞えたことはなかつた。たゞみんなが平和な怠惰と不潔な食物と無害な嘘言とに樂しく肩を叩きあつてゐるばかりだ。それが私にはたまらなく不平だつたが、より以上に私を不思議がらせたのは、この人々が、私が日本の社會で私の周圍に見たのと全然同じ小市民的な雜事に追はれどほしてゐることだつた。たとへば「何をやらせても駄目な息子」「六片(ペンス)あるとすぐ呑んでしまふ父親」、「妹の結婚に嫉妬のあまり狂言自殺をする姉」、「年中洗濯の手腕を自慢してゐるおふくろ」、「何うも近頃様子のへんな娘」、「ごみを食べて困る赤ん坊」、「何かちよつと借りに來ちやあ決して返したことのない隣家の女房」――登物人物と出來事はたいがい型のごとくきまつてゐて、どこの國の裏店もおなじに、人は雨と煩瑣な感情にわづらはされながら無自覺な混迷のうちに年をとつてゆくにすぎない。こんな當然の發見を發見としなければならないほど、あまりにもその諸相(フエイセス)が同一なために、いつしか私たちは異國に來てゐるといふ心もちをすつかり忘れて、故國にのこしてきた小さな身邊といさゝかの變りもない人情と世の中を見出してそこに一つの驚きを經驗したのだつた。これは、その土地の生活に親しみを知る最初であり、旅行者としての私達が自分じしんに課する「速力あるフレキシビリティ」の觀點からも、まづ自負していゝと私は思つたりした。かうして何時ともなしにいくぶん彼らに同化しつゝある私達のうへに、窓から見るテムズの一部は朝晩の色をかへて、無風帶の日がつゞいて行つた。

水を吹く靴

『あらつ！』

　一番さきに見つけたのは彼女だつた。

『どうしたんでせう？靴に水がはいつてゐますよ。』

　といふのだ。何を妙なことを――と思ひながら、彼女の眞劍な顏におどろいた私は、いそいで駈け寄つてみた。なるほど、けさ家を出るとき寢臺の横に脱ぎすてゝ行つた私の代りの靴

が、片はらだけ浪々と水をたゝへてゐる。

『――！』

『――！』

私たちは默つて顔を見合つた。あちこち移つてあるいた一つの、その聖マアテン街の素人下宿である。朝から外出していま歸つてきた私達を、部屋へ這入るなり、このへんてこな現象が待ちかまへてゐたのだ。

じつさい、ちよつと說明のつかない異常事である。

私はよく覺えてゐる。私は、出がけに靴をはき更へて、その一足をいつものやうに亂雜に寢台の下へ蹴込んでおいたはずだ。それがいまかうして壁の切り爐のまへにきちんと揃へてある。これはいゝ。私たちの留守のあひだに、宿のおかみさんが部屋を掃除することになつてゐるのだから、そしてお神さんは、貧乏にかゝはらず人なみはづれて整理好きだつたから、けふに限らず何時だつて私たちのぬぎ散らして出た靴は、おかみさんによつて暖爐のまへに並べられるのがつねだつた。

しかし、問題は水である。

下宿人の靴へ、しかもその片方へ、おかみさんが水をいつぱい注ぎこんでおかうとは、何うしても考へられない。が、事實は事實だ。このとほりいつぱうの靴に滿々と水がみたされて、しかもかなり長時間そこに溜つてゐた證據には、內側の皮のいろが水に溶けて、それはうすい黃味を帶びた透明な液體だつた。ついでだが、四五日まへにリジェント街のマンスフキルドで買つたばかりの新しい靴なのだ。

『まあ！何でせう？あなた自分で入れたんぢやないわね！こんなところへ水を。』

『莫迦な！誰が靴へ水をつぐやつがあるものか。知ないよそんなこと。』

『だつて、變ぢやありませんか――。』

『變だとも――大いにへんだとも！』

おなじことを繰り返しながら、私たちはいつまでも兩方から靴を覗きこんでゐるだけだつた。

『ほんとに只の水でせうか？』

しばらくして彼女が言つた。私は鼻を近づけてにほひを嗅いでみた。無臭だ。やはり、水はたゞの水らしい。が、その只の水が、どうしてこの部屋のこの靴の片つぽにこんなにあふれんばかりに存在することになつたのか？――私は、反射的に仰向いて眞上の天井を見た。雨漏りといふやうなことを瞬間私は想像したのだが、言ふまでもなく、天井には隙間はおろか汚點ひとつなく、第一、こゝは二階で、うへにもう一つ三階があるの

だし、それに、私たちといふ私たちのたれか、いまゝでこしも氣[illegible]ていなかつたし、あ[illegible]の降らなかつたことに、誰よりも、一日外出してゐた私が承知いて、過失にしろ何にしろ、人一ばい眼と耳の働く下宿のしてゐなければならないはずだつた。また非常に珍しいいゝお天氣だつたからこそ、私たちもかうして朝から夕方まで歩きまはつたわけだつた。

『不思議だなあ。』

『妙なことがあるものですわね——おかみさんが間違つて水をこぼして、そのまゝ氣がつかずに出て行つたんぢやないでせうか、お掃除のときにでも。』

彼女が思慮ぶかさうな眼をして言つた。私たちはまだ、靴のうへに蹲踞みこんでゐたのだ。彼女のこの想定にも一理ある。私はさう思つた。で、私は、水の動揺しないやうにしづかに靴を持ち上げておいて、犬のやうに床に手をついて注意してそこらを撫でまはしてみた。もし、なんらの故意と技巧なしの靴の上から水をこぼして、偶然それが、かう今にもあふれさうに内部にそゝがれたものならば、これだけの分量の水が靴を満たすためにも、一足の靴ぜんたいはもちろん、その周囲の敷物一體が、より多分の水量を受けたものであらうことは、ごく自然に考へざるを得ない。そして、そんなにたくさん水がこぼれたとしたら、靴のなか以外に、一目瞭然としてそこらにあとが残つ

おかみなる人物が、それに気がつかずに、靴に水を充満させて放任しておくといふことは、いふまでもなくちよつと肯定しにくい。論より證據、水は靴をみたしてゐるほか、その他の場所には何らの痕跡をとゞめてゐないのだ。靴の周囲の床など、すこしの水滴も知らずに、水のあとはおろか、いくら押してもさわつても濕つてさへゐないのだ。水のはいつてゐる靴の表面も、内部の水が作用しかけていくぶんかふやけてゐる以外には、上から水をかぶつた形跡はすこしも示してゐない。たゞ、ちようど靴の底にあたつてゐた床の一部分が、かすかに濕氣を帶びてゐるのが感じられたが、これだけの水なら、ながいあひだに靴皮を滲透して、幾らか底を濡らすにちがひないとは、誰でも容易にうなづき得る。何よりも、一足分密着して揃へてある他のひとつが、何らの災難をかうむつてゐないことだけでも、この水が人の意思(インテンション)の實現化した結果であることがわからうといふものだ。じつさい、水のみの字も、その特定の靴の内部のほかには、一さい認められないのだから、かうなるとこれは、過失でもまちがひでもなく、あきらかに何人かの悪戯か復讐か挑戦かに相違ないといふ、じつにおだやかならぬことにな

る。私の頭は、早やいそがしく嫌疑者の列擧につとめ出した。只、いぎりすへ來て數週間、私たちはさらさら人のうらみを買ふやうなことをした覺えはないし、またわざわざこんな奇計を弄してまで、私たちに戰ひを挑む人も理由も、見わたすところありさうに思へない。すると當然これは誰かのいたづらなのだらうか？——と、私が、すぐ前の彼女の眼を見詰めて思案してゐると、彼女も固く口を結んで私の眼をみつめ返してゐたが、このとき彼女が、低い聲を出して私を驚かした。部屋の空氣は、いつの間にかそれほど窒息的に重大になつてゐたのだ。

『泥棒が入つたんぢやないでせうか。』

これも一つの意見である。

『泥棒——さうかも知れない。』

と言ひながら、私はてつきりそれに違ひないと思つた。盜賊が、じぶんのはいつた家に、迷信もしくは單なるいたづら氣から、色んなしるしを殘しておくことは日本にも西洋にもよくある。と氣がつくと同時に、私は素早く室内をしらべてみた。がふたりの荷物はもとより、この部屋についてゐるものも何一つ失くなつてはゐない。どろぼうの假定もこれで見るに逆說されてしまつた。

で、やはり最後に惡戯だらうといふことになつたのだが、この理論を確立させるべく、そこにもつとも可能性に富んだひとりの有力な容疑者があつた。下宿の一人息子、惡たれ小僧のレムである。下宿といつても、これはごく家庭的な小さな家で、建物はかなり大きかつたけれど、止宿人は私たち夫婦きりだつたから、食事なんかも家の人とみんな一しよにしたゝめて、來て間もなくだつたが、私たちはもう自分の家のやうに勝手に振舞つてくらしてゐた。家族といふのは、ホルボウンの家具工場に出てゐる四十あまりの好人物の主人と、よく私たちの世話をしてくれる、几帳面すぎるほど几帳面なその主婦と、それに夫婦のあひだに、レミヨンといふ七つになる男の子があるだけだつた。レムは、年齡のわりに身體の小さな、非常に病身な兒で、そのせいかまだ學校へも行かずに、うちにぶらぶらしてゐた。獨りつ子のうへに、からだが弱いからとあつて親が仕たい放題に甘やかしておくものだから、レムは、意氣地がないくせに妙に鼻つぱしのつよい、しぢう顏いろを變へてはしやぎ切つてゐる、おちつきのない子だつた。私たちにもはじめはへんに人見知りをしてゐたが、間もなく、ことに彼女とすつかり仲よしになつてしまひ、いつも裏の庭で、彼女を箱車のタキシへ載せて自分が運轉手になつて遊んでゐた。それをおかみさんが台所の窓から眼をほそくして半日でも見てゐたりした。私もよくレムに捌

まつて、夜になつてそこらをごろごろまはらなければならなかつた。じつさい遊び相手がないので、何時でも一日いつぱい私たちとふざけてゐたい様子だつたが、ときによると、そのあんまり強情なのが子供らしくなくて、憎らしくなることがあつた。何よりも狂的に亂暴なので、私より先に、親友のはずの彼女がすつかり辟易してまつてゐた。私も正直のところ、うるさくて閉口してゐた矢さきだから、そこで私たちは、いろいろ相談して、最近ではそれとなくレムを避けるやうにしてゐた。すると、七つのレムがはなはだ七つの子供らしくないといふものは、かれがこの私たちの採用した敬遠主義をすぐに感づいて、この二三日、ことにあきらかに敵意を示し出した一事である。食事のときも、廊下や庭で會つても、レムは彼女と私を見かけ次第顔をくしやくしやにして、西洋の赤んべいをすることにきめてゐた。それも、ほかに人がゐると決してしないんだから、一そう可愛くなかつた。

『嫌な子ねえ、あのレミョンつて兒。』

『うん。ちよつと病的なところが見えるね。やつぱりひよわだからだらう。』

などと私達は話しあつてゐたが、あんまりしつこく呪面(メイク・フェイス)されると、何だか小惡魔にでも魅入られてゐるやうで、つひ私たちもお全然にされることになつたのさ。いまさらできたので、つくつてレムの相手に專念してやるんだが、つまりこんなわけで、私たち對レムのあひだには、近來敢然あんたんたるものがあつたのだ。

惡戯——とあたまへ來ると一拍子に、私は早くからこの狀態(シチュエーシヨン)に思ひ當つてゐた。が、子供の仕業にしてはすこし謎があるやうだ。かう考へ直して、出來るだけレムを嫌疑者の表から除外しやうとつとめたのだが、かう事態が逼迫してゐるところから見ると、あきらかに報復をふくんだレムのいたづらと判斷するよりほか、仕方のないものがあつた。留守中部屋は開けはなしなんだから、子供にだつて譯なく出入りできる。家は普通の大きさで、間數も相當あるんだけれど、往來にむかつた二階の一室を私たちが借りてゐるきりで、おなじ階(フロア)のほかの部屋も三階も、下宿の看板を掲げて人さへ見ると來て貰ひたがつてゐるくせに、何ういふものかがら空きにあいてゐるんだから、他者がそとから這入つたんでない以上、それは一階に住んでゐるこの家の人々のうちの誰かに極限されるといふことになる。そして、それは、前にも言つたとほり主人夫婦とレムだけなのだ。

『レムね。』

『レムにきまつてる——あいつ、恐しく調子に乗る質の子供だ

から、默つておくとこれからも何を仕出來すか知れやしない。とにかく、この靴の水を棄てゝ、それからミセスを呼んで一つ皮肉に注意してやらう。それも、何もレム公が水をつぐ現場を見たわけぢやあないんだから、こつちだつてあんまり强くも言へないしね。』

『あら、ミセスを呼ぶんなら、水を暫らくそのまゝにしといて見せてやつたはうが宜かなくつて？』

そこで私は、厳然と威儀をとゝのへてその水入りの丼みたいな靴のかたはらに立ち、彼女は勇躍しておかみさんを呼びに行つた。おかみさんはすぐ來た。が、一眼私の足もとの靴を見るが早いか、彼女は「またか！」といふやうに悲しさうな聲を上げて顔を覆つた。そして、つゞけさまに「何も言つて呉れるな――なにもおつしやらないで下さい！」と繰り返すばかりで、私に何ら發言の機會をあたへず、私と彼女が先手を打たれてぽかんとしてゐるうちに、おかみさんはひとり委細承知のていで水のはいつた靴を捧げ、倉皇として逃げるやうに引き取つて行つた。

『何だらう？』

『どうしたんでせう？あんまり愕きもしないのね。』

『いや、おどろいてはゐたさ。が、あれあ慣れてる驚きだつた――こんなことをされちやあこつちが困る。迷惑しごくだといつたやうな。』

『すると、誰がしたんだか、おかみさんには判つてるわけね。』

『さうさ。だからちつとも不思議には思はないで、そのかはりただ平謝まりにあやまつて行つた。本人になりかはつて――といふところがあつたね。レムにきまつてる。』

『さうよ。レムにきまつてるわ。』

これで私たちとしては、おかみさんを通してレムを懲戒する目的を充分以上に達したわけだから、夕食のときも、私たちは靴について何も言はなかつた。おかみさんも、氣のせいか悄氣て見えるだけで、べつにまたその問題へ觸れやうともしなかつた。が、私たちがちよつと不審に思つたのは、うんと叱られたはずのレムがいつこう平氣で、相變らずナイフとフオウクをもつて思ふさま暴威をたくましうしてゐることだつた。

『あれだから駄目さ。』

『何故もつとちやんと言ひ聞かせないんでせう？』

部屋へ歸つてから私たちはいさゝか不平だつたが、靴は、おかみさんが乾かして綺麗にして持つてきた。で、この事件はこれなりに、何時ともなく忘れてしまつた。

が、四五日たつた或る日、朝から外出して歸つてみると、こ

んどにはほかのだつたが、やはり私の眼の前でほに、私たちは私いつぱいの水を発見しなければならなかつた。

しかし、その時も、私たちの怒りは、おかみさんの不得要領な哀訴嘆願で軟化されてしまつた。おかみさんは、前とおなじに矢鱈に手を振り頭を下げて、早速瓶を掃除して返しにきただけだつた。決して一言も、何うしてこの部屋の瓶の一つへしきりに水がはいるのか、その點を説明しやうとはしなかつた。

眞實、無人の室においてある瓶がいつの間にか水をたゝへる。その、水の滿ちた瓶を窓からの白い光線のなかにぢいつと凝視めてゐると、一種異様な莫迦げた、そしてグロテスクな恐怖が私を襲ひかゝるのを意識する。私たちは、すくなからず氣味がわるくなつた。

そんなことがもう一度あつた。

怪異は飽くまで怪異としても、さうたびたび水漬けにされたんでは、第一瓶がたまらない。それに、この神秘の底を掘り下げなければならない責任も、私は私の常識に對して感じ出してゐた。と言つたところで、下手人はレムにきまつてゐるんだから、そこには何らのミステリイもないやうなものゝ、私はレムが、私の瓶へ水を入れるところを押さへつけて、次第によつては一つぐらゐこつんとやつてやらうと決心したのである。

三度目のつぎの日から、私たちは何もきかないことにした。それし、おかみさんが掃除をすますのをまつて、すぐに出たければこりこつそり戻つて寝台の下にひそんだ。そして、誰かひとりでに水を吹くかも知れない奇蹟を、根氣よく待ちかまへたのだが——さう長く待つ必要はなかつた。

この冒險をはじめて二日めの正午近くだつた。私は、寝台の下に腹這ひに隠れて、たゞぼんやりしてるわけにも往かないから、自分のこの使命と立場をときどき思ひ出しながら本を讀んでゐるのだが、ふと室内に衣ずれの音がしたやうな氣がして、頁(ペイ)から眼を離した。さうしてすこし首をまげると、寝台の脚をすかして向うの大鏡が見える。何氣なくその鏡にうつつてゐるものが眼にはいつた私は、あやふく聲を立てるところだつた。

レムではない。

女なのだ。

どこから來たのか、下宿のおかみさんより二つ三つ年上で、小さつぱりしたなりの、どつちかと言へばふとつた女である。そとから這入つて來たものでないことだけは、一目でわかつた。部屋着らしいドレスに上穿(スリツパ)をはいてゐたからだ。それが、すぐそばで私が見てるとも知らず、じつに世にも生眞面目な顔で、提(さ)げてきた水入(ジヤグ)の水を非常に注意ぶかく、そこにわざと出

待的にぬぎすてゝある私の靴のひとつへあけ出したものだ。何か壯嚴な宗教上の儀禮をいとなんでゐる時の高僧のやうな女の顏と、しづかに水を飲んでゐる私の靴とを鏡のなかに見てゐると、その妖異さはわけもなく私から呼吸を奪つて、さうさうたる水音が部屋を占めるなかで、私は冷い床板に一さうぴつたりと身を貼りつけた。

ひたひたに水をつぎおはると、すつかり安心したらしい女は、かすかな足音とゝもに部屋を出て行つた。あとには、私の靴が口きりに水を張つて、それに、窓ごしの青葉の影がこまかく撓れてゐた。

女は狂人だつた。おかみさんの姉で、戰爭で良人をなくしてから氣がへんになつてゐるのだつた。二階の一室に監禁同樣にし、しぢうおかみさんが氣をつけて私たちにはひた隱しにしてゐたのだが、そつと拔け出て來ては、靴に水をそゝぐことにのみ、狂へる女は異常な興味を感じてゐたものらしい。じつはこの姉なる人が原因で、下宿人もゐつかなかつたのだ。私たちはすこしも知らずにゐたが近處ではとうから評判の家だつた。

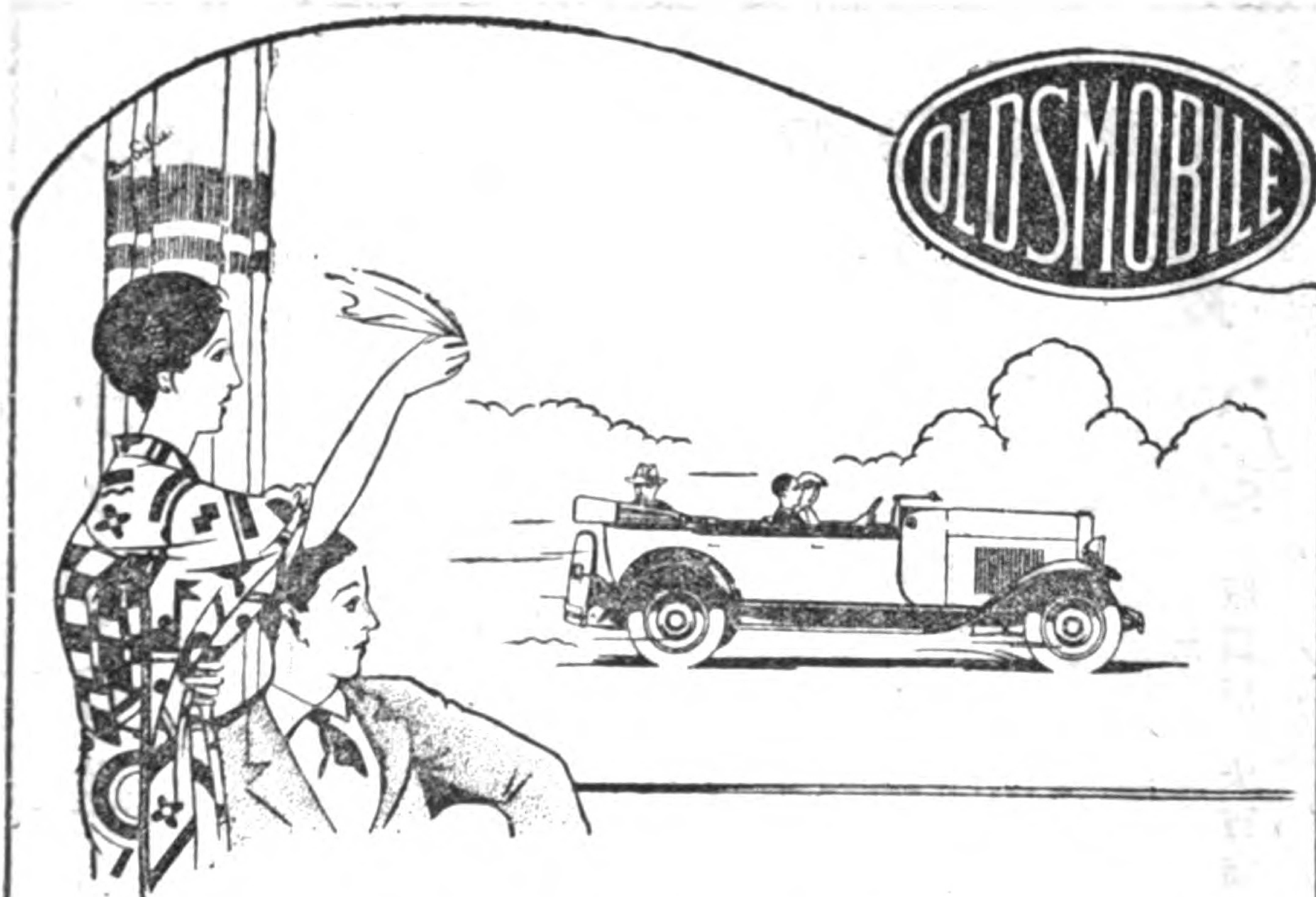
私は、彼女の神經と私の靴を保護するために、その日のうちに引越した。出がけに振りかへつてみると、私たちのゐた二階の窓から、小さな蒼いレムのしかめ面が私たちをめがけて突きでてゐた。

樂屋噺

谷讓次氏の新世界順禮、第一回通信『踊る地平線』は果して異常の反響を呼びました。第二回通信「テムズに聽く」はユーモリストの異彩を發揮して、讀者をして失笑を禁ぜざらしむるものがある。前回に增しての好評を呼ぶこと必せりである。

谷氏はロンドンでは市村羽左衛門に會つて「……珍聞奇聞の種タクサン……」と言つて來てゐます。なほ氏はロンドンから飛行機で巴里へ飛んで、今頃は巴里のシャンゼリゼーあたりで珈琲を啜りながら、次回の原稿の腹案を錬つてゐることでせう。或は今頃は、アムステルダムの國際オリンピックの壯觀に、印度人的日本魂を發揮してゐるかも知れない。

一回から一回へと回を追うていよ〳〵發展する本稿の續稿を待ち給へと云爾。


OLDSMOBILE

高千穂紀行

荻原井泉水

「あ、霧島が見えてきました……」

Gが指さす方の空に、なるほど、薄い藍色の山が見える。遠くて、中腹から下はぼうつと霞んではゐるが、其峰が幾つかに分れて、殊に兩翼が高くなつてゐる事ははつきりと解る。

「……あの左が今日登らうといふ韓國岳、右があした登らうといふ高千穂峰です」Gはなほ言葉を繼いだ。G、I、S、R、Aの五人と私とは自動車で此日の朝から走りつゞけてゐるのだつた。私は前日に、鹿兒島に着いて、其地の俳句會同人に案内されて、市内を見たり櫻島を見たりした。それから霧島山行の打合せをした。普通に、霧島山に遊ぶといふのは、鹿兒島から汽車で牧園驛まで行つて山へかゝる、中腹の霧島溫泉までは自動車が行く。登山となれば溫泉を足溜りとして韓國岳又は高千穂峰をきはめるのだといふ。私は翌日、宮崎の句會へ出なければならぬ約束がある、其時間を考へると高千穂まで登るのはちと無理のやうでもあるが、峰越えをして高原といふ驛へ出れば、宮崎へ出る道の順は好い、即ち大隅から日向へ國境山嶺を越えるのだ――私は同人達から山の地理などを色々と聞いた上で、峰越えをする事にきめた。同人のうちでも、霧島溫泉までは行つたが高千穂峰は未だ知らぬといふ人が多かつた。で、最も地理に委しいGが案内役として、行つてくれる事になつた。Aは自分の自動車を使つてくれると云つた。で、すべてが都合好く、其上、此日はすばらしく好天氣である事を喜んで、鹿兒島を立つて來たのだつた。

道は鹿兒島灣に沿うて、櫻島を右手に見ながら走るのだが、灣内は大きな池と思はれる程に凪ぎきつて、初夏の水のやうな空の色と映り合つてゐる、櫻島は十五年前に大爆發をした山と

は思はれぬ程に、緑の滴るばかりな若葉に蔽はれてゐる。私達の走りつゝある道も、左手の山からふつさりとした若葉が垂れかゝつてゐる。つまり、若葉を吹いて過ぎる風のやうに、自動車はへう〳〵として、村から村を通りぬけた。「りやんぼうを買へば好かつた」――一人がさう云つた時は、りやんぼうといふ名物の餅を賣つてゐる茶店から大分遠くまで走つて來てから氣が付いたのだつた。「いや、加治木饅頭を買はう」――路傍にある饅頭屋では店先に大きな蒸籠を重ねて、今しも蒸れあがつたところらしい、熱くて手に持つことの出來ない程の、しかもばかに大きな饅頭が車の窓から持込まれた。皆は――運轉手も――其を吹き吹き食べながら、子供のやうに愉快な氣持になつてゐた。煙草の産地として名高い國分村も過ぎた。隼人塚、てんの山も見て過ぎた。その邊は大方は麥畑であつて、かんがりとした色に熟れて、もう鎌を待つばかりの穂並がひろ〳〵と續いて、雲雀が鳴いてゐる空には雲の一片もない。「あゝ霧島が見えてきました」と空を指されたのは、その邊りだつた。前の日、櫻島からも霧島が見える筈だと云はれながら、見えなかつたので、私は初めて此山の姿を眼にとめたのだ。天孫降臨の傳說のある神代ながらに美しく秀でてゐる高千穂の峰の男性的な、而して韓國岳の女性的な姿を――。

國分八幡（鹿兒島神社）に詣でる爲に、私達は鳥居前で車をおりた。「御手洗川の近くにある樟の木は巨きくて麗しいものだ、其は二つの木が相對して、艶々しい葉を光りおはしてゐた。私は太宰府の天滿宮でも、老大な樟の木を仰いだ。九州には樟が多い、殊に由緒のある神社の境内には必ず此樹が茂つてゐる。杉や松はうつさうと林をなしてゐる所が好いが、樟は一本立つてゐても好い。杉や松は齡が老いると如何にも老いきつたといふ風に見えるが、樟は老いた幹から若々しい葉を吹き出してゆく、かう〳〵しく、而もみづ〳〵しい。千年の風雨に鍛錬されつゝ生長してきたもの、しかも、滿身に新しい緑を裝うて天に聳ゆるもの――斯うした老樹を仰ぐことは厳肅な喜悦を感ずる。宮前の茶店で、枇杷と小さい土の鈴とを同じやうに網にさげて賣つてゐた、その鈴は色からも、形からも豆柿のやうで、その赤さが、黄いろい枇杷と並べて吊してあるのも好かつた。手に取ると、鈴の口は小さな果實がしぜんにゑみ割れたさまで、其中に同じく土で固い種の如きものがあり、十ばかりを貫ねてある紐のまゝ振ると、タリタリタリと、如何にも土の音らしい、鈍な、純な音がするのも好かつた。――「土の鳩はないのか」と一人が質ねた。其も此社の土産として喜ばれたものだつたが、今は其を作る老人がなくなつてしまつたといふ。

今の子供達が土の臭よりもセルロイドのキユーピイ人形を好むやうになつたからでもあらう、此の土の鈴もブリキのラツパに見かへられつゝあるのだらう、此先きいつ迄、この鈴が作られてゆく事か、さう思つて、私は其一提げを求めた。

私達の車は一つの流がある谿をたどつて、だん〳〵と山の懐へ浸入しつゝあつた。此霧島川に沿うて大小五十三の温泉があるといふ、所々に一二軒の小さな家が、百姓家としては珍らしい二階建であるのは、忙しい温泉宿であるらしい。高みに、明るく、平らに、草原として茂らしてあるのは、しばしよだといふ、その邊には放牧の馬があちらこちらに遊んでも居た。此處まで遠く來ても、振返ると、櫻島が見えた。むつくりと海の中から盛上つて――。私達はそこの果樹園で枇杷を賣つてゐる枝からちぎりながら食べた、同人の一人が此園主だつたので、低く垂れてゐる枝の下をくゞつて、園のまつたゞ中へ案内された。どこもかしこも枇杷の實だらけで、手を殊更に伸ばさなくとも、自由にちぎる事が出來た。それは文字通りに鈴生りで、しかも私がいま手にしてゐる土の鈴よりもずつと大きな實だつた。木のまゝ熟しきつてゐたので、水氣は滴るばかりにして甘かつた。私達は琥珀のやうな種を木の根もとに吐き散らしながら、飽きるまで食べた。鶯が鳴いて、うつすらと夕靄がおりてくるまで――さうした中にも、ぷんと鼻をついて來るにほひに温泉の香を以て打消されたる。いつの間にか霧島温泉の一つなる榮之尾に着いてゐたのだつた。

温泉宿は、自動車を乘捨てた所から、細い徑を二三丁登つた茂りの中にあつた。つゝじが眞赤に咲きさかつて、青葉の垂れ枝に燃えうつゝるかと思はれた。温泉の量の豐富な事は驚くべき程だつた。大きな温泉槽には、數條の湯瀧が落ちて、ど、ど、ど……と快い音を立てゝゐるのも盛んだつた。湯瀧をこゝでは「うたせ」と云ふさうな。强弱いろ〳〵とある、自分の好む瀧にうたせる事が出來る。湯槽の周りに、少し低く、きはめて淺い槽が作つてある、其中に寢轉んで、ひた〳〵と身體を浸す事が出來る。私達はしばらく、湯に抱かれ、湯と戯れ、からだも心も湯にとかしてゐた。

山にある日を見てもまだ高かつた。然し、ゆつくりとしても居られない。湯上りの浴衣のまゝ、登山杖を手にして、私達は韓國岳への道を登つて行つた。道傍にある小流は皆温泉だつた。その流にさうづを仕掛けてあつた。温泉では米を搗かせるとは面白い、此さうづを爰で「しやこんたらう」(迫の太郎)と呼んでゐるのも面白い。岩の間からふつ〳〵と烟があがつてゐる所があつた。そこの岩角や石塊を踏んで登ると、ほか〳〵

と熟氣を感じた。苔が生えたやうに硫黃が吹き出てゐた。

　コーン、コーン

　木を伐り出してゐる音が聞こえて來た、その邊から、樅(もみ)、栂(つが)、の深い林の中の路になつてゐた。此山を非常に愛して、又研究もした獨逸人のタレスレルといふ人がゐた。彼は此山の木がだん／＼に伐られてゆくのを見て「惡い人達ですね」と歎じたと、而して、此山に文化的の施設をする其財源を得る爲にこそ、此處の樹を伐らねばならぬのだといふ事を聞いて、彼は其矛盾に當面したと、Gはそんな話をした。

　「このやうな黑谷(くろだに)でなくては猪が居ないのです」

　Gは如何にも山の通らしい事も云つた。樅や栂の茂つてゐる所は、普通の林の靑さではなくて、なるほど黑いといふ感じだつた。其の黑い林の中につゝじがほち／＼と咲いてゐるのは目さめるやうだつた。樅が古い葉の先から、鮮かな綠の新しい芽を吹き出してゐるのも美しかつた。路は黑い土がしつとりと潤してゐるので、踏み心地が好かつた。うらじろ、山蘭(やまらん)などが路だけを殘して、木の根方をうづめてゐた。愛らしい草の花と見て摘んだのは時鳥草だつた。

　木樵が働いてゐる、その近くの所では、木の枝からしぜんに下つてゐる藤蔓を懸けわたして、子供がぶらんこをしてゐた。

　やがて、樅にまじつて赤松があらはれてきた。しばらくは、赤松のすばらしい樹帶が續いた。私達はそこで一休みした。後れて姿の見えぬ一人二人があるので

　オーイ、オーイ

と聲を掛けてみた。が、返事はなくて

　ホウ、ホウロ、ホウ

　梢で鳥が答へるのだつた。それは何鳥か名を知らなかつたが、時々、駒ひき鳥も好く鳴いた、其は輕い爽かな聲をして、私達の少し疲れた氣持を和げてくれるのだつた。

　木の株がびつしりと靑い苔を被つて、道傍に立つてゐた。「こりやいゝ」――皆なで其を撫でて通つた。犬の背を撫でると同じ感じだつた。

　松笠のやうで、長細くて滑らかな樅の笠が落ちてゐた。そのこけのやうな外皮は、さながら、老いた鯉の鱗を思はせるものだつた。

　「や、今頃、椿の花が咲いてゐるね」

それは松の木の間にちりばめられてあつた。

　「あれは紅梅かしらん」

　一體に山上は季節が後れてゐる爲に、さうも見えたのは深山(みやま)つゝじで、ずいぶん高い木振りだつた。

「これがさねかづらといふのです」

Gは其を指さしておいて、少し先へ行つて、同じ木がかづらの本性を現して、他の木へ蛇のやうに纏付いてゐるのを又指さした。

林相は爰まで登つて來ても、大體に同じやうであるけれども、樹木の一つ一つがだんだんに小さくなる事が注意された。道は細くなつて、熊笹の中をざくざくと漕いで登るところもあつた。灌木の枝を兩手で分けて、終には頭を突込んでゆく所となつた。

「頭を低くしてあがつて下さい」

暫くは窮屈だつたが、然し、そこを上へ突抜けて、頭を上げ得た時、私達の前に展げられた眺望の何とすばらしかつた事か――。

眞正面に高千穂峰がそゝり立つてゐる。

右手に烏帽子岳がむつくりと座つてゐる、

遠く、櫻島がほがらかに浮いてゐる。

高千穂峰から手前に、山つゞきに、おだやかな一隆起をなして、鮮かな緑の色に見えるのが新燃といつて、其山裏は所謂きりしまつゝじが一面に咲盛る所だといふ。

其と眼をとめて見れば、茂りの間に幽かに人家が點々と數へられる。ここが神話ゆかりのある所だといふ。

夕日がほがらかに、その展望の全體を染めて、今日もまたすべての鶯が一つ鮮かに鳴いてゐる。

私達は然し、その眺めとは反對の側に、大浪の池を見出す爲に急いだ。それは山の背をなした草原を少し下るのだ。

「おゝ」

私は思はず感嘆の聲をあげた、とつとと下つて行つた足の先が俄かに斷崖をなして、そこの深い底に、大きな鏡盤のやうな池の面をのぞいた時に――。大浪の池とは云ふものゝ、どうして此山の底の池に浪が立たうぞ、其水は嘗て激情といふものを經驗した事のない高僧の心のやうに靜かだつた。いや、止觀の定に入つて魂を澄ましきつてゐる仙者の青白い行相を感じさせた。まことに靜寂そのものである其水の上には、韓國岳の肩が青い影をうつしてゐた、而して夕日の色を帶びた雲のふんわりとした影を――。

私達は、なほ池を親しく眺める地點を得る爲に、緑をなした草原の道をめぐつた。而して腰をおろした。好く見ると、池の面の一所に細かい漣が立つてゐる。風の爲に、と考へるやうなソヨとの風もなかつた。魚の爲に、さうかもしれない、此池には何千尾とかの鯉を放飼したといふから――然し、詩を思うて

沈默しきつてゐた心が會心の句を得て自らほゝゑまれた其微笑を、私はその邊に見るやうな氣がした。

たゞにしづか太陽西におはしけれ　　此君樓

此句を私は同時に想出してゐた。此詩人が此句を得た時の氣持がぴつたりと感じられる氣がした。夕靄につゝまれて、ほんがりと赤らんだ太陽が今しも落ちかゝる所だつた。

「あゝ、あちらが西なんですね」

「さうです、あちらに白蓮の池、六觀音の池などいふのもあります」

私達は草原に腰をおろして、魔法壜に詰めてきた葡萄酒を飲みまはした。浴衣の袖がいつしかしつとりとし、草の葉が濕ばんできたのを覺えた。兎角して、太陽が樹海の中にすつぽりと沈むと、あたりは幻のやうに薄暗くなりかけるのだつた。

下りの路は、登りの其よりも好い道だつた。けれども、樹林の中にはいると、俄かに幕をおろされたやうに暗かつた。槲の葉が落ちて、それだけが白く、斑らに脚元に散つてゐるのが、木の間を洩れる月の光のやうに見えたが、いよ〳〵本當の夜になりきると何もかも見えなくなつた。登りには、さして必用を感じなかつた登山杖が、此時になつて初めて、按摩に於ける杖のやうに大切なものとなつた。螢であるか、蛇の目であるか、草の中に光るものがあつた。遙かに遠くに、灯火の見えるのは國分あたりらしかつた。宿から多分、迎への提灯をよこしてくれるだらうといふ事を頼みにして、たゞ足をすべらさぬやうに、俄かめくらのやうな足どりをするより外はなかつた。

暫くして、谷川の音が――それは榮之尾に近いことを知らせる――さう〳〵といふ水の音が頼もしく聞こえてきた。

×

けさは、草鞋で足を堅めて、榮之尾温泉を立つた。其に直ぐ續く明礬温泉を過ぎて、美しい樹帶にはいつて行くのだ。くろき、こじひ、しらかし、あかゞし、一位、いすのき、ゐごのき、やなりぎのきなどと少し珍しい樹には標名を記して、其等は皆亭々と聳えてゐる、其木間から朝日がはなやかな光の筋を通してくるのだつた。而して、其光のひろがる所に、あざみ、はゝこぐさ、きりしますゞらんなどいふ草の花が微笑してゐるのだつた。

「山へ登るやうじやない、好い散歩道ですね」

「斯んな道を、馬で靜かに打たして行きたい」

その邊は美しい赤松の林がつゞいてゐた。下の谷に煙が見えるのは湯の谷温泉だといふ。

そちらには下りないが、道がしぜんに下つた所に小さな湯槽を立てゝゐる噴湯があり、古びた一軒の宿があつた。宿のかみさんが、其の硫黄臭い湯の中からうどを引きあげると、ふんとうどの好い薫りがするのだつた。野天にある湯槽の湯は灰色をして、下からぷつ〳〵と湯玉をあげてゐた。

「是はこしき（甑者）に利くといひまして、彼等は下駄ばきではいるのです」

Gはさう云つた。そこは湯の尾といふ所だつた。

再び登りになつては行つたが、あたりは打ひらけて、裾野といふ感じだつた。薄や、萩がもう伸びて、青い葉を涼しさうに戦がして居た。其間に木瓜の花も咲いてゐた。わらび、ふきなどは道傍にいくらでも生えてゐた。

「此邊にゐれば、實際食ふ物だけには困らないだらうな」

「さうさ、燥でるには温泉がいつも熱く湧いてゐるし……」

その邊から高千穂峰はくつきりと正面に其全容を現してきた。好く雲のかゝる山だといふけれども、此日はからりと澄みきつてゐた。ピラミツトにも似た其尖端に所謂「天の逆鉾」が立つてゐるのださうな。噴火口から立騰る煙もほの〳〵と一筋、丁度、香爐に焚く名香の烟がゆら〳〵とのぼるやうだつた。

「一山還がもう七十年にもなつてゐる。一週間程前に長さ六尺にも及ぶ大度位りでした」

Gは話した。松の枝から垂れてゐる藤が其に代つて、今は盛りなのだつた。

「さあ、持ち物を輕くする事にもなるから、河原で辨當とませうか、まだ時間は少し早いが、これからが難所ですから一つ腹をこしらへて……」

其の河原と唱へて、噴火の際に熔岩を押し流した跡のさく〳〵してゐる所で、一人の爺さんが茶店を出してゐた。床几などがあるのでもなく、河原の上にむしろを敷いてくれるだけだが、其方が疲れた脚を投げ出すのに勝手が好かつた。サイダアもあるといふがビールの壜につめた生水を買つた。辨當の食べ餘りは、爺さんについて來てゐる大きな黒犬がきれいに仕末してくれた。

こゝから上は樹木が無いので、山の肌に取付いて登つて行く人の姿が見通しに小さく、その蟻のやうな一人々々が如何にも喘ぎ喘ぎ、時々息をいれながら行くさまゝで感じられた。私達は杖を取り直して立上つた。その蟻になつて登るために。

そこは富士の砂走りのやうな急斜面で、しかも細く、燒石の道だつた。けれども、其燒石がしぜんに足踏み石となるので、

思つたほど辛い登りではなかつた。その焼石の間に小さなつゝじの花の咲いてゐるのは可憐だつた。多分、氣まぐれの風が其種を吹き寄せたものだらうが、乏しい土に根をおろしたものの、大きく育つことも出來ず、それでも花だけをつける事を忘れなかつたとは。

十町程の急な登りで、さすがに汗になつた。其汗を私達は、噴火口の縁邊でさました。こゝの風は凉しかつた。その風に岩燕がすいすいと輕い身をひるがへしてゐた。

噴火口のなかは、煙の少い爲に、底まで見渡された。孔底に少しの影もない程、太陽は丁度、其眞上に懸つてゐた。私の時計の針はかつきり十二時を指してゐた。

噴火口から、頂上へはまだしばらくの距離がある。右は火口、左は絶壁、其間の極めて細い道を渡つて行かなくてはならない。そこを馬の背といふが、絶頂を馬の頂と見れば、まことに馬の背といふ感じではあつた。而して此馬は栗毛だつた。いつ又、荒れ出すかもしれぬ慓悍な馬でもあつた。馬の背を越して首筋と思ふ所の急な登りが再びあつた。その二三丁の間に息をはづませながら、乘りきつてしまふといよいよ絶頂だつた。

東の方は日向の國、西の方は大隅、薩摩の國、――韓國岳は北に見えた、中岳、新燃を前にして、夷守、大浪を左右にして――櫻島はこゝで又も其の美しい、こゝから見ると夢のやうな姿を南の方に描き出してゐた。私達は所謂「天の逆鉾」といふものゝ傍に並んで、そこに出張してゐる寫眞師に撮さしたりした。馬の背を越して、頂上を見上げた時、マッチの軸のやうな三脚を据ゑて、黒い布を被つて、腰をかゞめてゐる小さな蟲のやうなものゝ形を見出して、一寸ユーモリックな圖柄を感じたが、そのレンズの中に自分もはいつて見てやりたく思つたので――。所で、「天の逆鉾」といふものも、誰が建てたものかしらぬが（橘南谿の「西遊記」にもあるといふから、かなり古いものではあらうが）微笑すべきものだつた。其は唐銅で作つて、鉾といふよりも寧ろ大きなステッキのやうな形で、握りの下に天狗の面のやうなものが鑄出してあつた。或時、狂人が是を抜き取つて麓の村までおろしたのを、村人が驚いて、おまつりをして、再び擔ぎ上げる時には壯丁二十人を要したといふ。それからは盗まれぬやうに鐵柵を設けたので、一層、近代的な、つまり「天の逆鉾」といふ神代的な觀念とは正反するものになつてしまひながら、やはり天の逆鉾らしく、其傍に榊なども立てて恭敬してある所に、一種のユーモアがあつた。こゝは又、登山者が辨當を使ふ處にもなつてゐるので、蠅や虻が所謂さばえなしてゐるのもをかしかつた。然し、兎も角、眺望としては無

二つの[illegible]なつて、私達も[illegible]、[illegible]つSが[illegible]

て來てくれた日向蜜柑を食つて賞味した。

Sは鹿兒島から直に私と宮崎へ同道するつもりで迎へに來てくれたのだが、私が高千穗越をすると定めた爲に、自分は老足だからとて別れて、今夜の何分の事などを用意するとて先へ戻つた。で、今日はどうしても宮崎へ出なければならない。それには高原驛を三時に發する汽車に乘らねばならない。頂上から高原まで三里半。時計を見ると既に一時。二時間で三里半を下ることは決してむづかしい事ではないが、同行者があるので、果して出來るかどうか少し心もとなくもあつた。

「兎も角、强行しよう。出來るだけ急ぐこととしよう」

私は自分から先づ腰をあげた。下つて行くべき道はずつと眼下に見通されてゐた。其向ふに御池といふ小さな池がエメラルドのやうな濃い色に光つてゐた。脚はひとりでに小きざみに早く、宛も機械人形になつたやうに、自分の意志以上に身體が飛んで行くので、其御池にぽちやんと飛込んでしまひはせぬかと思ふやうだつた。だが、道は横手に外れて行つた。而して右に左にカーヴしながら付けてある路を串ざしにしたやうな近徑があるのを選んでは走り込んだ。

「それ自動車だ」

[illegible]

そんな[illegible]を云つて[illegible]いて[illegible]、[illegible]だつた。其邊から顧て、高千穗の頂を仰いだ[illegible]には、[illegible]りの[illegible]と全く違つて、丁度、表と裏との相違があつた。大隅の側はべにがら色と黑との線をぐい／＼と引いた表現派的な圖柄の感じだつたが、こちら側は灌木叢の青さと露出土の黑さとが柔かに調和して、山の斜線の切込み方が大きくどつしりとしてゐた。灌木叢は下るほどに、密になり、又高くなつて、近徑をする爲には其を擦分けて行かねばならなかつた。

「走るど、走るど……」

「ホウ、ホウ……」

しぜんに聲が出た。灌木叢の盡きる所が樹林になつて、私達はいつしか松の木の間を急いでゐた。そこでは、蟬が鳴き出してゐた。それから道幅が廣くなり、平らになつた。

狹野神社近くまで來て「高千穗頂上まで八〇〇〇米突」といふ標木を見た。時計を見ると此二里の道に一時間半を要してゐる。あんなに急いだつもりで、こんな事では到底いけない。私達は改めてヘヴイーを掛ける事とした。

神武天皇御降誕地と傳へる狹野神社は樹林の皆蒼とした清淨の地だつた。それも參拜をそこ／＼にして走りすぎた。今日は

日曜の事とて參拜の人もちらほらあつた。で、高原驛からの乘合の馬車か自動車かゞ、鳥居の前までは來てゐるかも知れない、幸に其を捉へ得ればいゝが――。神社から街道まで、老いた杉並木の下の長い參道をＧは殊更ひとり先へ走つて行つた。

「此杉にみやがらすといふ特殊な鳥がゐるのです、氣をつけて下さい」

走りぎはにＧはさう云つた。

グエッ、グエッ

杉の梢で、姿は見えないが、不思議な聲をして鳴く鳥の聲は聞いた。

向ふで小さく見えるＧの姿が手を振つてゐた、早く／＼といふ風に。

私達がそこへ駈けつけた時は、一臺の客馬車があつて、馭者がそこの藪から竹の枝を折取つて、葉をむしりながら、鞭をこしらへあげたところだつた。

「なに、急げば十分で驛まで行かれるさうです、間に合ひます」

Ｇはやつと安心したやうに云つた。

さて、馬が駈け出すと、恐ろしく動揺して、身體が飛上るので、皆は顔を顰めた。だが、

ピポオ、ピイポオ……

馭者がのどかな喇叭を吹きはじめると、誰もがしぜんと、微笑したい氣持になつてゐた。

（三年五月二十日）

急告

近頃、本誌の信用を利用して「中央公論」社員池上哲三と名乘り、奈良大阪地方を徘徊して本誌の購讀、廣告等を强請し、前金を詐取して歩く者があるさうですが、――それらの被害者には誠に氣の毒に存じますが――これまで本社では地方にそれらの勸誘を試みたこともなく、勿論「池上哲三」なる社員も居りません。今後本社の隆盛と共に此種詐欺漢の横行も益々多くなる事と存じますが、將來地方に社員を派す場合がある時には適當な豫告を致しますから御注意下さい。なほ購讀や廣告料については直接本社へ御交渉下さる方が安全且つ御便利です。

中央公論社

怪談

露伴學人

予は怪力亂神を語らず、と人も知つた述而篇の一節は有るが、さて人といふものは常態の事の圓滿なのを望みながら、常態の事で無い驚くべく怪むべく畏るべく危ぶむべきことをも見たり聞いたりしたがるものである。勿論自身が怪異紛擾の事態の中に入りたいと望むものは少いだらうが、自分は安全平和の地に立つてゐて、そして目を瞠つたり魂を縮めたり、毛骨悚然となつたりするやうな事態を見聞したがる者は多い。朝起きて、家族睦まじく平和に朝餐を取り、晝間はおのが職務を蹉躓無く過失無く執り、夜は復び家族團欒して賑やかに樂しく夜食を濟ませ、そして各「御機嫌よう」を云交して無事淸穏の夢に入る、といふことは誰しもが熱望してゐることで、其爲にこそ營々として世人は身を勞し心を使つてゐるのだが、他人の然樣いふ生活の實際の噂を耳にさせられた日には、誰もが「なんだ、詰らない」と云ふであらうし、「某郵便局の配達夫が何々横町の空屋の前で嬰兒を抱いた女の亡靈に出會つた」などといふことを聞けば、それが全くの虛説であらうと、何かの誤傳であらうと、それには關はずに、「へゝー、それは不思議だネ、一體何樣いふ譯で」と首を前へ出して委細を聞きたがるであらう。好奇心といふのか、趣味性といふのか、何か知らぬが、人は異常の事を見聞したがるものである。

で、怪力亂神どころか、妖怪變化、幽鬼冤魂、狸でも狐でも一目小僧でも見越入道でも、何でも變なものでさへあれ

ば、見たがり聞きたがる。そこで怪談が起る、幽霊話がはじまる。最初は臆病者の疑心暗鬼からにせよ、又は古語古談の歪斜解釋からにせよ、又は有心故造の虚誕妄説にせよ、又は何かの譬喩、模擬にせよ、又は其他の意味から出來たにせよ、何にせよ人文あつてより以來出現した怪談幽霊話の類は實に夥多のものである。

古代人の心理には理智の火の照らしかたが少くて感情の水の潤ひが多かつた。水は結んで堅氷となり、騰つて白雲となり、剛柔有無變化多端で、それ自身すでに立派な「おばけ」である。で、古代人は眞に「おばけ」を見もしたり、「おばけ」と談話も交へたり、「おばけ」と手を取つたり接吻したり、或は又「おばけ」に攫みかゝられたり殺されたりもしたことであらう。それから又山阿水隈の幽闇なところには飛んでも無い不思議な妖怪を眞に認めたことも有つたらう。何の國にも史前傳説が有つて、それにはいづれも神怪妖異が伴なつてゐる。それは或部分は事實の偏歪されたのもあらう、或部分は後代の粧飾の加はつたのもあらう、が、古代人の感情の水の潤ひが豐富で、理智の火の光りが幺微なために、事實若くは事實のやうに思へて、それらの事が談り傳へられたらうことは想ひやるに難くない。歴史がはじまつてからも猶ほ然樣いふことは系圖を引いて遺つたもので、そして今日になつても猶且つ吾人は古人の兒孫であるから、自ら意識せぬまでも何處かに古代人の香氣を保有してゐるのであらう。

他の一方には又それと同時に傍觀的の場合には人は常態的ならぬことを喜び、常態的のことに高い價値を認めぬといふ傾がある。此の二者、古代の遺影と現在の傾向とが有るのだから、怪談幽霊話のやうなものが或力を以て世に存するのに何の不思議が有らう。

そこへ加はるに宗教の中の神秘の部分、事實上の稀有なる例の存在、詩人小説家戯曲家評論家諷刺家等が世人の此の心的傾向を捉へて之を利用する奔放な想像等が有るのであるから、まだ〳〵長く此世に怪談おばけ話等は消滅せぬであらう。

であるから文學有るより談に異やう話に存在し、また文學有らん限り我々の談話に存在するだらう、で我々の口頭に上り心境に觸くものは、すべて常理で無いといふことを先づ有すべき條件とすると云つても宜い位であるから。歴史にせよ小說にせよ、其の記するところは必ず先づ異常であるからで、歴史が何年何月何日雨降つること麻の如しといふ記事を掲げることは有つても、何年何月何日天氣が好かつたとか雨が降つたとか云ふことを記したことは無いやうであり、雜書が小野小町の卒塔婆に尿をかけて歌を詠んだことは記しても、同人が顔を洗つたとか飯を喫したとかいふことを記したのを見たことは無い。

支那人は人間として最も常識的であるといふのに大抵の人は異存は有るまい。如何にも善く勞作し、賢く飲食し、盛んに生殖し、平和を愛し、金錢と名譽と道德とを尊重し、善く生き善く死せんことを欲する立派な國民である。突飛な想像の羽翼を九天に搏たせたり、馬鹿げた深刻の念慮を何處までも鑿りこむやうなことは餘り敢てせぬ中正な國民である。それでも其の史前傳說は何樣であるか。それは怪異幻奇の錯生りである。歴史時代になつても、左傳は何樣であるか。そこには「おばけ」が中々に有り、占卜は中々に當つてゐる。孔子と併べ稱された大學者の墨翟は明鬼論をあらはして、孔子が怪しげなことを語られぬに反し、明白に幽靈の存在を肯定してゐる。關尹子の今の書は書からしてが怪しいが、中に不死の人を談じて、これも經からしてが怪しい楞嚴經の所說と一味通ずるところがある。神仙談は怪しい物語の一大部だが、其の夥しいことは大變なもので、秦漢から引續いて今に及んでゐる。秦の始皇は死せんことを豫言され、漢の高祖は帝たらんことを豫想されてゐる。薜荔を被て女蘿を帶にす、と屈原の歌つてゐるのは何だ。死して鬼の雄となるといふ語は楚辭の名高い句だ。老子と關尹子とが蜀で再會した談は、今に青羊宮を成都に存せしめてゐる。鄭の子產は孔子にさへ指まれた賢人だが、厲鬼の存在を是認したことがある。漢になつて、聲の聞える神君といふ正體不明なものが出て來たり、李夫人の亡魂が呼び出されたりしてゐる。漢はいろ〳〵怪しい奴が出た代で、いろ〳〵神異の味のある宗教みたやうな者

が出來た。劉根が太守史祈に其の亡父を視せて驚悲せしめたのも漢の時であつた。後漢の末は魔法使が出て愈々世が亂れたのだが、張角は擱き、于吉仙人が吳主に殺されて其の鏡中に姿をあらはして祟つた談は史を讀まぬ者も演義三國志で知つてゐる凄い一場である。于吉仙人一派の著述は殘缺して今存してゐるが、之を讀んで考へるに、化けて出さうな人でも無い。けれども然樣云傳へられてゐる。晋に豪氣な阮千里は無鬼論を著はしたが、其爲におばけに出られたといふ。それより嵆叔夜が燭下に鬼を見た時、つく〲おばけを見据ゑた後、叔夜が蠟燭をフツと吹消して、「魑魅と光を爭ふを恥づ」と云つたといふのは流石は叔夜だけに痛快で、夜暗におばけを見たら急に懷中電燈をパツとさせさうな人々より何程徹底した好い心を有つてゐる人だか知れない。然し「おばけ」を見たことは見たにされてゐる。同じ晋の代の阮宣子も無鬼論を立てゝ世に鳴つたのであるが、大阪の中井竹山門下で孔明と稱せられた桝屋小右衞門の無鬼論辯も畢竟晋の二阮に増すこと幾干も無く、たゞ古の幽靈話が多く左氏の妄に出づることを指摘してゐる位で、宣子は幽靈對治の先達である。

其後、唐に至つて小說が大に興つた、但しそれは文章の手腕を見せるためといふほどのもので、宋後の長篇の俗語の小說とは樣子合が大さに差があるが、それはそれとして、短話的の興味あるものが作り出されたに連れて、怪談幽靈話は多くならざるを得ざるに至つた。玄怪錄幽怪錄といふ風のものが出來だして、其中には假托も有り、出來の宜しくないものも少からずあるが、それ等の中で宋以後の小說の種子になつたり、戲曲の本づくところとなつたものも可なりある。又唐の時は神仙怪異の談も持囃されたらしいので、それこれで漸々に怪談幽靈話も發達したと云つても宜いか知れぬ、其代りに怪異鬼妖も漸々に後世化して來た傾も有らう。宋の時に、おもて座敷の眞面目向のものでない叢脞の書を集大成したところのいはゞ小說叢のやうな厖然たるものが出來て、太平御覽と相對立してゐるその廣記の中には、隨分澤山の怪談幽靈話妖異神仙譚を含んでゐる。宋までの異常變てこな談は先づ網羅されてゐると云つても宜いが、扨又宋の代は宋の代で、唐系の小說が澤山出來、又新に宣和遺事風の小說、後の元明淸以下の小說の先祖に屬するところのものが芽ぐんで來たので

あり、宮中、上流家庭、民間にも流行の如く半音楽的の説話をする習慣あり、賢豪の類に至つて職業者而して出入し居る
の説話をする講釈師様のものが盛んに出来たのであつて、今日でも南宋の時の講釈師や宋の雑人などは其名を擧げ得るほどなのであるから、それ等に依つて怪談幽靈話などが改造されたり新製されたらうことは猜察するに難くない。宋第一の文豪の蘇東坡は一面に洒落なところの有る人だが、田舍に謫居の時、田夫野人を相手にしても談話を交換した際、大先生に對つてゐるので人が何も談話をすることが無いといふと、そんならおばけ話でも何でもしろと云つたといふ逸話が傳へられてゐる。如何にも洒落でおもしろい。宋同時の北方の金でも又宋でも此時代は神仙道家の持囃された時で、宋の徽宗皇帝は美術家であつて、且又靈異嗜好者であり、で、宋には林靈素などいふ怪しい奴が大に威張り、金には又王重陽一派が擡頭したのである。王や王の弟子の馬などは元の時には既に戯曲の主人公とされて、神異の物語中に大見得を切らせられてゐる位である。斯樣いふ時代であり、又大衆文學が芽ぐんだ時であるから、宋末頃は隨分面白い談が江湖に存したことゝ想はれる。元になつて劇が大に興り、所謂元曲が今に猶其百餘種を傳へられるに至つた其の戯曲の中には勿論怪談幽靈話は相應にある。「倩女離魂」は日本の「かげの病」であり、我邦の小説にも影響を及ぼして居り、「李鐵拐」が他人の身體に吾が魂を托して生きるのや、「盆兒鬼」が瓦燒き窰に屍を入れられて跡を滅された亡靈が身は既に土に泥じて瓦盆にされながら、警吏に會つて聲を出して躍り、遂に其冤を晴らすのや、殺された小兒「神奴」の冤を訴ふる「神奴兒」や、鬼仙王母天人の後身たる傾城の劉倩嬌が仙人に濟度される「柳梢青」や、姉の碧桃死して命猶ほ盡きず、妹の玉蘭死して身猶ほ壞れず、碧桃の魂遂に妹に憑りて應慕の情を遂ぐる「碧桃花」や、隨分いろ〳〵の怪談がある。此等の中、美人劉倩嬌が自分の前世に詠じた歌曲「柳梢青」の詞の後半部をば仙人に歌ひ出されて、恍然として前緣を了悟し、現世を解脫せんとするといふが如きは、凡常おばけ話の陳套を脫して、何となく一種の面白味がある。吾邦の「遊行柳」はこれと關係は無いやうだが、何處かに似た響が有るかといふ氣もする。「碧桃花」のやうなのが有るかと思へば又「竹塢聽琴」とい

ふのが有つて、これは竹塢幽雅のところに琴聲を聽きて美人に會したが、人がそれは「おばけ」だといふので驚いて其女と遠ざかり、學業を勉め、遂に立身して後、おばけならざりし其女に再會して安らかに偕老を契るといふのも有る。敵討たずの作意が、仇討れ說大流行の後に出た我邦の合卷の事を思ふと、「竹塢聽琴」の作意の背後には隨分美人のおばけが有つたことを思はせられてをかしい。

小說の方も水滸傳のやうなものが出て、其中に幽靈談が無くは無い。水滸傳中、武大郎の幽靈が有無の間に弟の武松に感ぜられて其の横死に弟の憤恨する段は誰も記憶するところである。それから又宋江の靈が皇帝の夢に入つて、一片耿々の志遂に人の知る無く、空しく奸臣の鴆殺するところとなつた冤を訴へんとするあたりは、作者が隨分骨を折つてゐるところである。然し水滸傳は水滸傳で、竟に之をおばけ小說とすべくも無いのである。西遊記は妖怪變化と魔法神通との連續で、正に怪談には相違無いが、たゞ其の異常狀態の途方も無いのがをかしいだけで、これを世に今茸吾本とされてゐる大本の批評が、西遊記を寓意諷化して興味を深めようとしてあつても、要するにお伽譚的で、たゞをかしいのみである。餘り面白いものでも無く、突飛で野方圖も無いところを買ふべきだけである。西遊記も水滸傳も劇化されたものはあるが、西遊記の方のは矢張りお伽譚的で面白い者は無く、且又齣數は少い。水滸傳の方は今の水滸傳が先づ存して後に戲曲が出たり、戲曲の方が講釋師ばなしの水滸傳物語を曲化して後に小說の方が集大成したものか、それが不分明な位に早くから、即ち元の時に既に梁山の水滸豪傑に關する曲が出て居て、金聖嘆の所謂古本の妄をそれらに依つて明白に證せるほどであるが、それはおばけに關せぬことである。たゞし小說の水滸傳より餘程の後になつて出來た疑の無い戲曲の水滸記にはおばけが點出されて、それが本傳には無くて新意を以て添加されたものである。宋江に殺された美人閻婆惜のおばけが其情人即ち奸夫のところへ出て、奸夫を誘つて冥土へ行くといふのであるが、一寸おもしろい幽靈の出方である。殺した宋江のところへ出ないのが面白い、殺した人のところへ恨めしやで出るのなぞは月並過ぎてゐたからの作意か知らぬ。

いろ／＼おばけ譚を載[illegible]もなくしたが、何といつても[illegible]のは、[illegible]にたつて[illegible]剪燈新話であらう。これは水滸傳三國志などの俚俗文字で出來てはゐない、唐宋小説の文字で出來てゐる[illegible]が其中おばけ話は甚だ多く、吾邦へ響いて例の牡丹燈籠の話などを傳へてもゐる。筆力は弱いが、[illegible]、又艶冶なの士女を魅するに足りてゐる。此書が一時世人の好尙するところとなつたから、つゞいて剪燈餘話だの何だのと、剪燈因話を成すに及んだのである。もと是れ輕薄文人のわざくれで多く論ずるに足るものではないが、新話が一流妖怪文學の源頭になつたといふことは、作者瞿宗吉の名を今に傳ふる所以となつた。瞿宗吉の傳は自分はよく知らない。たゞ錢塘の人といふことを知るのみであるが、新話の著者といふので多くの人も宗吉を知つてゐるのである。然るに其の剪燈新話は宗吉の著では無くて、明初元末に於ける有名の大文家の楊廉夫の作だといふ異説がある。楊廉夫は一代の大家であり、人品も低くない人で、明初を飾る大文家の宋濂にさへ非常に敬意を拂はれたにもかゝはらずして、自分は宋濂を苛評した位の男であるから、たとへ新話が眞に楊の著であつても楊が自分の名をそんな綺膩猥雜な書に署しさうな譯は無い。であるから署名の如何に關らず楊の著であるといふ說は成立たなくもないのであつて、其時分の士人の風氣から云へば心有るものはあんな書に署名するのを喜ぶ筈はないのである。明の弘治の頃の人で吳縣の都穆といふものが、嘉興の周鼎といふ先輩に聞いたのに、元末に富某といふ者があつて、杭州の吳山の上に家して居た、富は宋の富鄭公の後で勿論素家であつた、楊廉夫が杭州に居た時に、嘗て其家に至つたところ、主人は生憎他の地方に出てゐた、ところが大雪に値つたので廉夫は款待さるゝまゝ其家に留まること旬日で、主人の歸るのを待つた、其間の徒然の餘りに戲れに草したのが即ち剪燈新話であつて、それは此を主人に視せて一噱せんとしたまでゝあつた、ところが瞿宗吉といふ男は少い時に富氏の養婿であつて、廉夫に侍して其稿を得て、後に遂に掩つて自己の作と爲したものである、新話中の秋香亭記一篇だけが宗吉の筆である、といふことである。然し都穆は此事を其の都公譚纂の中に記して居るが、都穆自身も疑を懷いて「今新話の文を觀るに廉夫

に類せぬ、周先生の書は別に本でも有つての事か知らん」と附評してゐる。何様も邵元敬の書は當つてゐて、新話の文が楊廉夫の筆に出でやうとは思へない。楊は一代の文宗で、明の天子に禮遇されてもフンとあしらつたほどの傲骨のあつた男である。山陽が日本樂府を著はした時、廉夫の詩を酷評してゐるが、それは丁度馬琴が西鶴を詆つたのに類してゐる。何様も新話の文宗は廉夫の筆ゆきではない。然し廉夫も一面には洒落極まりなき男で、四人の美女を侍從させて西湖に浮れ遊びまはり、西湖竹枝などゝいふ風流な詩を作つて一時を騒がした位の先生だから、若し眞に新話が其手に出たのならば、蓋し楊の少壯時代叉ニキビと共に吹出させたものかも知れない。が、要するに周鼎が何か附逑へたのを都穆に語つたに過ぎない。新話が楊に出ても瞿に出ても關ふことでは無いが、二人の爲には周鼎の話が出逑だらうと思做したい。

新話に釣出されて剪燈餘話を作つた廬陵の李昌祺といふのは眞面目な學者だつたが、おばけ趣味人情趣味の有つたゝめに餘話を作つたが、新話ほどには歡迎されなかつた。それはかりか死後に廬陵の學宮に郷賢として祀らるべき議が有つたが、餘話を作つた報として、怪しからぬ瑕瑾とあつて、祀られぬことになつたといふ。此事などは明白に支那士人の間に小說雜書が何様な位地に置かれてあるかといふことを語つてゐるものである。然し餘話の後に猶ほ續貂を敢てするもののあつたところを見れば、おばけ趣味人情趣味も扨々強いものである。

淸になつて聊齋志異は何といつても怪談幽靈話妖異譚の頭株である。これも作者の文才學識を示すべく、俗文で無く、しかも自在に揮灑されてゐる。相當に襃めてもよい。然し要するに田舍先生のコツ〳〵と丹念に書いたもので、イヤに氣取つた評論を挿んだり、飣餖成文の痕が見えてゐたりして、靈氣の乏しいものであるを免れない。齊天大聖の條に、孫悟空は即ち邱翁の寓言、といつてゐるなぞも學問稗販の書の外に出ないことを示してゐるので、邱翁何ぞ猴精を幻出せんやである。志異の類で遙に後に出た夜譚隨錄などに至つては愈々詰らない。が、然し此等の書は丁度世の人々に取つて「頭合のもの」であつたといふ理由からであらう、志異以後の長い間、大に行はれたものであることは否定できない。志異以

後に至て讀むものは讀むに堪へなくて、其の筋は一言で盡い果たし、其の他洒落、地口、口合、又は宛字、阿呆陀羅の枝葉沙汰と、精力消耗、事業失敗に満した怪事を猥雑的の無稽な怪談で語つてゐる一方には、實にもつかぬ面白くもない可笑しくも無い妖怪談の流行が、生文章の一つも書く手合の中に大勢力を有するに至つて、其間は長髪の時世でゝ後、提燈籠に餘談を掲げて遂に亡びて了つたのである。

少し横道にそれるが、閲微草堂筆記の如きも、怪異神鬼の談を記することが甚だ富んでゐる。志異はちと惡く書き過ぎたか知らぬが、これは撰者からして段違ひだから、氣取り氣も餘り無く、もとより排斂などしたものでもなく、すらくくと淺川に水の淸く流るゝが如くに書かれてゐるが、流石に觀奕道人である、腹中萬卷の書があつて筆下生花の才もある人であるから、無造作に何のこだはりも無く書かれた中に、中々おもしろいところが多い。たゞし何れも小品であるから、且又青年男女の心を惹付けようといふ意が有るのでも無いから、身にしみ込むやうな人情談的のおばけ話は割合に少いが、虚實不分明、作意の有無定かならぬ中に、諷刺の如く、勸懲の如く、寓意談の如く、又然樣でも無い寫實式の如く、ふわりと物惜みせずに、敷衍すれば何程かの長い談にもなるものを、大富豪が銀器や蒔繪の器を何でも無く扱ふやうに無頓着に扱つてゐるところは、何と云つても面白い。普通支那小説に臨むやうな態度を以て此書に臨めば必ず失望するだらうが、學問も有り、浮世の事も知つてゐる、枯れたおぢいさんに勝手な談をさせて、それを聽いて居ると思つて素直に讀めば甚だ面白い。一寸一つ、人情話では無いが、怪しい話を示せば斯樣なものである。李慶子といふ人が談つた。嘗つて友人の齋中に宿したところ、夜明け方になつて大騷ぎが起つた。それは二匹の鼠が騰擲相逐ふたのであつて、室中を暴れ廻ること、飈輪の旋轉し、彈丸の迸躍するが如く、花瓶も筆洗も硯屛も、擊觸して折翻へり、カツチヤンバツタン、倒れるもの碎けるもの割れるものゝ音、人をして呆れ駭きて、心をして、度を失はせるばかりであつた。其中に一の鼠は空中に跳り上ること數尺であつて地に墮ちたが、再びまた跳り上つて、再び墮ち、そして乃ち死んで終つた。之を視ると眼口

等の七竅皆血を流して居たが、何といふ譯も分らなかつた。で急に其家僕を呼んであたりを取片けさせたところ、一盤があつて其中にさぼしてあつた丸藥數十丸を大半鼠が齧みちらしたことが分つた。其丸藥は媚藥で有つた。乃で悟つた、鼠が誤つて此藥を多喫したから、狂淫度無くなつた。牝鼠は勝へずして竄け避ける、牡鼠は追ふ、牡は遂に發洩するところを得ずして、熱氣内に焦りつき、狂躍して斃れたのである。友人は出て來てこれを視、且駭き且笑つたが、既にして悚然として「乃ちこゝに至るか、吾懼るゝことを知りぬ」と云つて盡く畜ふるところの藥を棄てた。といふのである。そこで附記して言ふには、蓋し退之の硫黄、(韓退之が硫黄を服したといふ傳説がある)賢者も免れず、殷子の此友は、殆んど天命がまだ盡きぬので、鼠に鑒みて而して忽ち悟つたのか。と輕く捌いて居る。斯様いつた調子で、少し人を揶揄してゐるやうなところもあるが、此頃の新聞に種々の藥の廣告のあるのを目にすると、此一段が思出されては可笑しくなるのである。一體此の觀奕道人は滑稽味のある人で、其の本色としては支那のあらゆる典籍の解題を尋ねて批評をする事業に當つたので、今日現存する四庫全書提要は此人が自ら言つた通りに此人の一生の精力を專注したので、甚だ立派な仕事をした人だが、一種のおもしろい一面を有してゐた。或地方官が出京した時に、高地位の人ではあり大學者ではある此人の御機嫌を伺ひに參候した。其の知事と大先生と對談款晤してゐたが、其人は横面に大きな瘤のある人であつた。觀奕道人つら〳〵と其大きな瘤を觀てゐたがやがて、貴殿は態度言語もすべて立派であり好個の眞にふさはしい牧民の官人だが、たゞ聊か君子の威容を殺ぐところのものを有せらるゝのは遺憾だと云つた。知事は少ししよげて、仰せの通り、直接に人民共に臨む場合の多い身分でござれば、自分でも療治したくないことは御座らぬが、醫師も受合つてくれませぬ雜物の事ゆゑ困つて居りまする、と云つた。すると大先生は、成程、取去れるものなら除いた方が宜しからう、丁度宜いことがござる、軍官の某氏は醫家では無いけれども贅を除くの妙術を得て居らるゝといふことである、其人に御頼みになつたらばと云つた。武官と文官とは交際の無いものであるが、名を聞けば相應の地位にある武官であつたから、地方官殿は喜んで、其武官を訪問した。勿論然るべき進物を調へ、威儀堂々と、禮式缺くること無く叮嚀に乘込んだのは、其人の好意によつて厄

介た大将を手術して貰はうとの意であつた。武官の是に因りもちさぬ異見もありさうな人つて、を受けたことであるかつた が、立派な進物をも受け、禮儀正しく訪問されたのだから、今は拒む訳にも行かぬ。で、兩義に答を申して置いて、初對面の事とて、これも官職相當の禮服にあらため、儼々然として出た。初めて御意を得ましたる小生事は何々、イヤお尋ねに與かりましたる拙者は何某と、双方しかつべらしくお辭宜を仕合つた後、文官の方が頭を擡げて主人公を見ると、如何な事、堂々たる將軍の横面に、丁度自分のと同じやうな大たんこぶが威を張り光を揚げてゐる。武官も愈々立派な進物をもつて交りを求めに來た客人を看ると、これは如何なこと、自分のと兄たり難く弟たり難い大たんこぶが、文官大人の横面に渾乎として玉の如くに照つてゐる。互に見かはす瘤と瘤、文武の二官が呆然として相對して、それこそ瞠目駭心したさまは想遣られるをかしさである。客は訪問の目的を何と云つて宜いか分らず、主人は訪問された目的が何に在るか分らず、双方氣味合の無言の且つ無限の滑稽味を漲らせて、とても名優にあらざるよりは演出することの出來ぬ一場の活光景を演じたが、正しくそれは觀奕道人の惡いたづらな立案脚色に成つたものであつた。道人は斯樣なことをして、そして兩相對面の場を想像して書齋の中で引くり反つて笑つてゐたのである。かゝる無邪氣の大茶目大人紀文達公の妖怪神鬼の譚であるから、怪談だか何だか分らないやうなものも有り、そして讀者がうつかりして居ると其大たんこぶの持主のやうに扱はれてゐるのでは無いかと思はれるやうな節も稀には有るのである。しかも二十四卷といふ分量であるから、先づ以て怪談文學の拇指としてもよい。

閲微草堂筆記に對すべきものは子不語二十四卷、續子不語十卷である。これも撰者が好い。袁枚即ち袁隨園である。隨園はもとより清朝での詩人である。字は子才、ほんとに才のある男で、其の詩の風格は人によつては嫌はれるが、何にしても矢張り一方の雄である。人品も常人は達士ぶつてゐるが、少し感心されない通人風のところや食は世者のところがある。自分の弟子の女房の女ぶりを評したりなんぞしたところは、いけすかない老夫で、しかも女弟子を多くちやほやしたりなんぞする、兎角の評のある男だ。隨園よりはずつと下るが、十種戲曲や十二樓の作者の李笠翁と隨園とは評判の宜くない人で

笠翁なぞは李漁々々と吾邦の漢學先生には呼つけにされたのであり、隨園もまた二朝に仕へた錢牧齋などよりも或は感服されぬ人であつた。然し隨園を好まざる人でも其才をば認めぬ譯にはゆかなかつたほどであり、其の隨園詩話の如きは今でも多數の讀者を引付けてゐる。此先生が、自分は酒も音曲も博奕も能くせぬ、文筆以外に自娛することが無いから、廣く游心駭耳の事を採つて記して之を存したのがこれだ、と云つて公にしてゐるのが即ち「子不語」とも云ひ、新齊諧ともいふものなのである。子不語といふのは子不語怪力亂神の語から來り、新齊諧といふのは、齊諧は恠を志すものなりといふ莊子の一句から來てゐるのである。編中多くは妖異奇怪の事のみであるから、これも怪談には違ひ無いが、大體は閱微草堂筆記のやうであり、怪談的隨筆と云つて宜い性質のものである。凡そ觀奕道人のと近似してゐるが、閱微草堂筆記の方が佳いやうであり、隨園のゝ方は好ましくないところがある。が、しかし聊齋志異なんどの文のやうに「よそ行きづら」をしたものでは無い、隨意に揮灑したものである。觀奕道人隨園二人の妖怪隨筆を語つてゐるので思出したのは宋の洪景廬の夷堅志である。夷堅志の事を今思出して擧げるやうでは甚だ間の抜けた怪談の談であるが、此の放談もたゞ是れ夏日の閑餘のわざくれで、別に研究の發表でも何でも無く、次第も何もないのであるから、海容して貰ひたい。夷堅志は觀奕道人や袁隨園の先を爲したもので、其量も亦二著より勝つて居るほどで、實に怪談書の大關株である。思出せば古いところで劉義慶の幽冥錄なども擧げて言はねばならぬものであつた。明からの小説戲曲等に語らねばならぬ筈のものが猶ほ澤山あるのを今思出したが、記憶の緒を引張りそびれて、こゝに至つて終つたが、もう自分も倦んだし、人も倦んだらう、これまでにして置く。與が盡きたから。

追記

閱微草堂筆記の事を談じた條の中、拍子に乘つて少し其當を得ぬ云ひ方をした所がある。該筆記は好いものには相違無いが、多くは知人の言に本づいて之を錄したもので、曉嵐の空想構意に成つたものは却て寥々であるやうである。勿論朋友知人の語つたところに本づくにしても、之を採記する前には、之を取捨するといふことが有るのであるから、やはり全

[illegible]名を道人が擧げてゐるのであり、しかも其の談者の中には有名な人々もあるのであるから、道人が其[illegible]恰も筆記が道人の胸臆から出たもの丶やうに人に取られては宜しく無い。蒲氏の聊齋志異や袁氏の子不語の後に出たもの筆記は、今日の我々から云へば殆んど信じられないことのみを記して居て、我々に取つては其の信ずべからざる所に興味を感ずるのであるが、それには關らず其の談者の姓名をわざ〳〵擧げて、さも信ずべからしむるやうに書いてあるところも亦おもしろい一特色である。觀奕道人の滑稽ずきで、瘤の大きい二人を相會はしめた談は、恰も芭蕉があのやうな人で有りながら瘤に就てをかし味を有する句を遺してゐる如く、一寸おもしろい談だが、それは果して然樣いふことが有つたか何樣か、雜書（今其名を一寸忘れてゐる）に見えてゐるには相違無いが事實は或は疑はしいと思廻らされることが胸に浮んだ。それは筆記の卷二十三に、門聯の事を記してある條に、戯謔の欲無きことを道人が云つてゐるからである。張晴嵐といふ道人の同鄕人が、除夜の前に當つて自ら門に題して、「三間の東倒西歪の屋、一個の千鎚百錬の人」といふ句を書した。句の意は貧乏ではあるが自ら守るところ有る人の自負自信を打出したものであつた。ところが、これも貧乏ではあつたらうが、聊か威張り氣のある鍛鐵業者で有つて、彭信甫といふものに、家の門聯を書いて與れと賴んだ。信甫は輕い戯れ氣で、前の張明經の二句を書いて與へた。鍛冶屋は悅んで其聯をかけた。鍛冶屋の家と張晴嵐の家とが遠く隔つてゐたら宜かつたのだが、生憎對ひあつてゐたので、兩家の其聯を見るものが失笑せぬのは無かつた。信甫と晴嵐とは同年の貢進生で仲が好かつたから、信甫もつい心易立に斯樣なことをしたのだつたが、此事からして兩人は互に疎くなり嫌隙のある間となつた。凡そ戯は欲無いことである、此も亦一端だ、と道人は評して、そして其因に黃曲江が戯をした爲に人の深怨を買つた談をも載せてゐる。して見ると道人は惡戯を敢てしさうにも無い人であるし、瘤の談は何樣いふものか知れない。雜書の說は多く信ずべからざるものであるが、たゞをかしいには可笑しい談であるから思出したまゝ談つたに過ぎないと輕く看過して貰ひたい。其夜又記

御挨拶

麻田駒之助

溽暑の候に候處彌々御多祥奉賀候　小生斯業に從事いたしてより玆に卅三年　其間深甚なる御眷顧を辱ういたし來り候處御承知の通り最早老齡にも及び旁何事にも兎角遅れ勝氣味と相成何時迄も新時代に適應し得べき後進の途を杜塞いたし居り候事斯業發展の上にも少からぬ支障を來すことと被存候に付今回社長の職を隱退いたすことに決定し後事一切を從來業を共にいたし居りたる島中雄作君に相讓ることに取定め候に付玆に御吹聽申上候

尚社業に對しては今後一層の御同情及御指導を賜らんことを千祈萬禱仕候　不敢取御挨拶迄如此御座候

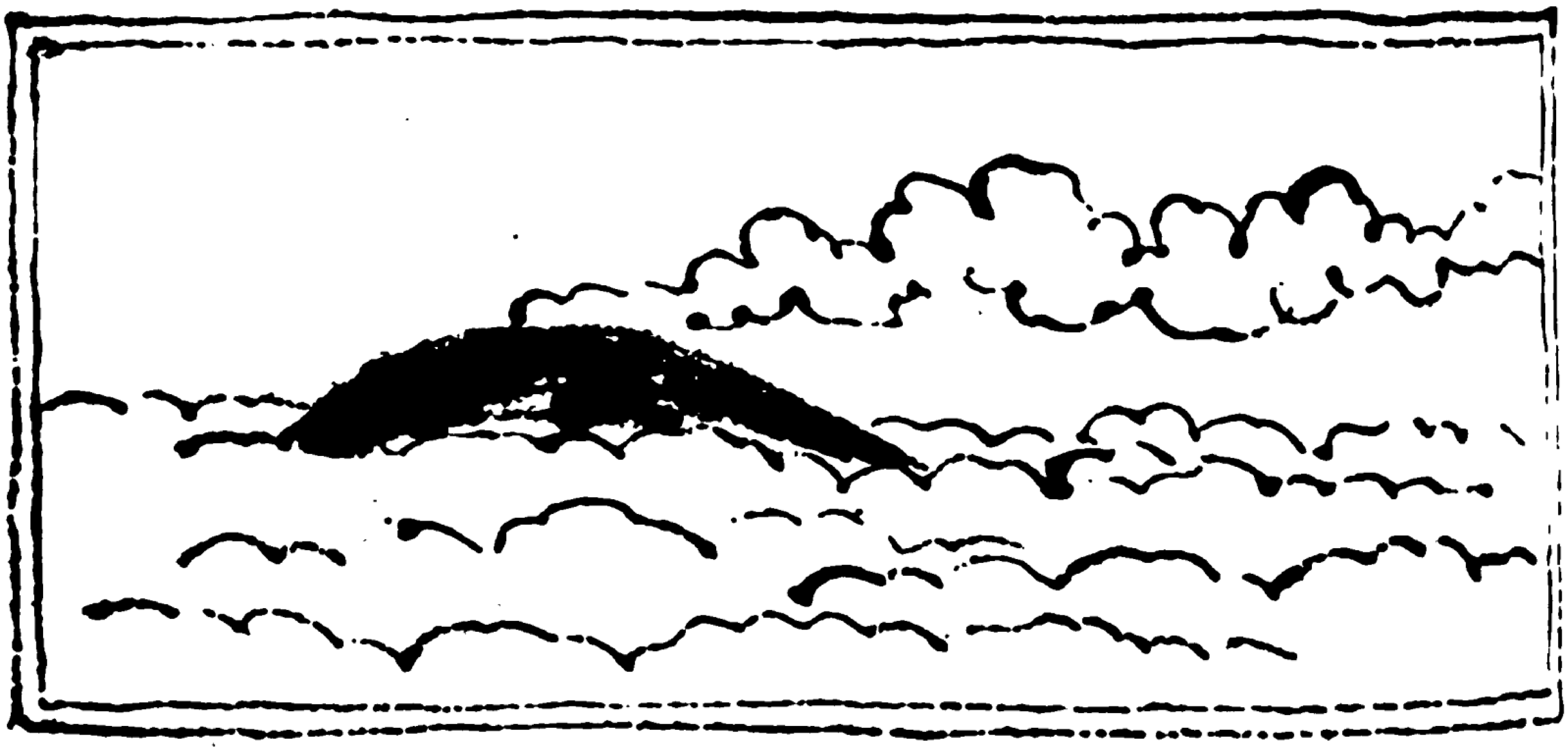
島中雄作

私儀此度麻田前社長の後を承けて中央公論社長に就任いたしましたについては、菲才微力ながら奮勵斯業の發展を期したいと存じます。私が今日あるを得ましたのは一に麻田前社長の恩顧に因るところ深きは申すまでもないことでありますが、又一方公私ともに皆様の御同情御後援に因るところ多いのであります。玆に深甚の感謝を表して今後一層の御援助を希望いたします。

惟ふに雜誌界の近況漸く多事を加へてゐます。打續く財界の不況と圓本流行の餘波を受けて、われら人も、通關の難所に立つてゐるのは事實であります。然しながら、それらの原因以外に、なほ今日の雜誌をこの悲境に導いた原因が、その經營者編輯者の側に全然無かつたとは云へないと思ふのであります。一般人の生活から沒交渉になつた雜誌の存在といふものは一部特殊な性質のものとその讀者以外、その必要を認められないのは當然であります。或者は徒らに新興運動の手先きになつて一般社會人の生活から離れ、或者は寧ろ餘りに卑俗低級に阿附して識者の顰蹙と輕蔑とを買ひ、また或者は徒らに文壇偏重の餘弊にかぶれて片々たる文壇餘錄の蒐集に身魂を疲らし、自ら相率ゐて窮地に溺沒した觀がないでもないのであります。然しながら、讀者階級の普遍化は、一般社會的生活に即した雜誌の需要を今後無限に廣汎ならしめるでありませう。吾々は及ばずながらその覺醒的新時代に適應するの覺悟と準備と努力とを忘れないことを期してゐます。

幸に皆様の御同情によつて私どもの事業を大成せしむるを得ばいかばかりか欣幸に存じます。

昭和三年八月一日



もどかしく

正宗白鳥

（一）

「丹三叔父さんは、娘をまた田舎の土百姓の家へやるんですつてね」仙吉は、植物園裏の両親の家を久振りに訪問した時に、母親に訊いた。赤岩丹三といふのは、仙吉の母親の弟で、相州厚木に住んでゐる田地持で、傍ら、砂糖やメリケン粉を主要とした雑品の卸し賣や小賣を營んでゐた。商賣は可成り手廣くやつて、身代は殆んど自分一人の腕で仕上げた。

「何だかそんなことが此間來た手紙の端に書いてあつたよ。お絹も次第に歳を取るばかりだから、どんなところへでも早く片付けた方がいゝんだらう。あの子が極りがついたら、叔父さんも親の役目が濟んで安心だらうよ」母親は事もなげに答へた。

「子供を何處へでもやつちまひさへすりや、親としてそれで安心してゐられるんでせうか。惣領のお福さんは番頭におつつけて、二番目のお捨さんは、高利貸の息子の、しかも初婚でない男のところへやつて、末のお絹さんだけは、何處か氣の利いたところへやるのかと思つてたら、相變らず土百姓の家へ追ひやつて收まりをつけるなんて、子供に對して少し殘酷ぢやありませんか」

「でも勤め人なんかに緣付けるよりや、田地持にやつといた方が、喰ひはぐれがなくつていゝと思つてるんだらうさ」

「さきの事はどうだか分つたもんぢやない。姉二人はそれでもいゝだらうが、お絹さんは、東京生活の經驗もあるんだし、容色も姉さんよりはいくらかましなんだから、東京で相當な家と緣組みをさせようと思へば出來ないことはなかつたのに……可愛相だな」

「それは、當人だつて東京で暮したいのだけれどね。あの親爺さんは、自分でかうと極めたら、人の云ふことなんか聞くこつちやないんだから」

「親も親だが、あしこの娘はみんな意氣地なしなんですね。いくら女だつても、一人くらゐは自分の我を張通す者があつてもよさうに思はれるけれど」

「お絹からお前に何か云つて寄越したのかい。今度の緣談が自分の氣に入らないとか何とか云つて」母親はふと疑ひを挿んだ。

「お母さんは、この頃は呆けたことを云ひますね」仙吉は笑つて、「お絹さんが腹の中で思つてることを、僕に打明けたりなんかする筈はないぢやありませんか」

「それはさうだらうけれど。……お前が厚木の叔父さんの家のことを氣にしてるのが珍らしいと思はれたから」

「なに、別段氣にしてる譯ぢやありませんがね」

仙吉は、会社の[illegible]について[illegible]に親の家を訪問した。ある要件を果すと、間もなく、其處を出て、[illegible]れの[illegible]い日に[illegible]のだから、[illegible]の自分の家へ急いで歸つた。

彼れは、入江家の相續者としての權利と義務とを有つてゐたから、結婚後は好んで兩親の家庭を離れて、小さな借家住ひをしてゐて、老いた兩親も、彼れの氣儘に任せてゐるのであつた。長男を病死させ、次男を戰死させた後の入江の老夫婦は、三男の仙吉に、殆んど絶對の自由を許して、その望みに逆らはないやうにと心掛けてゐた。しかし、仙吉は今まで兩親に大して迷惑を掛けるやうなことはしなかつた。臨時に補助を受けることはあつても、普通の生活費はどうにか自分の腕で稼ぎだしてゐた。彼れの自活は兩親が期待してゐるのではなくつて、彼自身でそれを主義としてゐるのであつた。

彼れは、一つ所にじつとして固定した職業を守つてゐる方ではなくつて、父親の關係してゐる保險會社から新聞社に轉じて、映畫の會社にも入つて、ある企業家の秘書役にもなつた。まだどの方面でゝも成功はしなかつたが、年齢は三十を越したばかりなのだから、前途の夢は豐かであつた。

「近いうちに、歌舞伎座へでもお誘ひしませう」と、仙吉が例になく柔しい言葉を置いて歸つて行つた後で、母親は、散らかつた物を片付けて、ザツと掃除をして、それから、下女に風呂を沸かさせる差圖をしてゐたが、その時ふと思當つたことがあつたので、茶の間の眞中に腰をおろして、獨りで考込んだ。

「仙吉は若しやすると、お絹を何とか思つたのぢやあるまいか。さうだつたら、二三年前にお絹を此方で預つてゐた時分に、明らさまにさう云つて呉れゝばよかつたのに、いくらお父さんが丹三嫌ひであつても、仙吉の思詰めてゐること分つたら、赤岩の家との緣組をまさかいやとは云はなかつたに違ひない。お絹をこの家の後繼者の嫁に貰つてゐたなら、家のためにどれほど幸福だつたか知れない。……お夏のやうなあんな當世女と關合ひをつけたもんだから、兩親と別居するやう

にもなつたのだし、あの子の身にしたつて、毎日の生活(くらし)が幸福(しあはせ)でもなささうだ」

獨りでかういふ思ひに耽つてゐると、それをきつかけに、不斷の不平が彼女の胸に爆發した。しかし、仙吉の神經に障ることは何も言ひ得ない彼女は、仙吉が絶えず庇つてゐる夏子に向つても、剝出しには何も云ひ得ないので、それで、壓えきれない不平の吐け口は、いやでも自分の夫(をつと)の方へ向けなければならなかつた。

彼女の腹の中がもだ／＼してゐるところへ、折よく――あるひは折惡く――夫の啓助が素人謠の會から歸つて來た。彼れは、この日曜に半日の淸遊を試みたので、いゝ氣持になつてゐた。

老婦は、茶の間の眞中から立つて、玄關へ出迎へたが、いつものやうには顏が晴々してゐなかつた。啓助は、羽織や袴を脱ぎながら「ひどく喉が乾いた。何か冷たいものを飮ませて貰ひたいな」と、御機嫌のいゝ聲で云つたが、老婦はそれを聞流して、

「さつき仙吉が來ました」と云つた。事ありげな口調だつたので、

「仙吉が？」と、啓助は老婦を顧みて、聲に力を入れて訊返して、「仙吉が來たのなら、おれが歸るまで待たせとけばよかつたのに」

「あなたに會ひたければ、私の方からさう云はなくつたつて、自分でゆつくり落着いて、あなたのお歸りを待つてたでせう」

「ぢや、仙吉がおれの小言を煩がつて、おれを避けてるとでも、お前は思つてるのか。そんなことはないよ。そこは男同士だ。あれの氣持はおれにはよく分つてる。おれの氣持もあれには分つてる筈だ」

「またいつもの氣休めを云つてゐらつしやる」老婦は棘々しく云つて、「丹三をあなたが毛嫌ひしてゐらつしやらないで、あたり前の親類交合ひを續けてゐたなら、仙吉はお絹と緣組みをするやうになつてたかも知れないんです。さうなること

お絹も喜んでゐました。あの子にも［illegible］……［illegible］です、それに、［illegible］まで
いでしまつたゝめに、私達はこの様になつて、たつた一人の［illegible］々の生活を立てなきやならないのに、ただ［illegible］
を見るんぢやありませんか」

　その険しい目と尖つた言葉とに打たれて、啓助は半日の清遊を台なしにしてしまつたやうな不快な感じながら、

「お前は今日はどうかしてるな。言ふことが突飛過ぎるぢやないか。まさか、仙吉がお絹をどうかしようと云つた訳ぢやあるまい。仙吉がそんなことを腹の中に有つてる筈はないんだから」

「それはあなたに思ひやりがないから、察しがつかなかつたんです。私もあなたに気兼ねをし過ぎて、お絹のことを言出さなかつたのがいけなかつたんです。あの頃私が意気地がなかつたから、お絹のためにも丹三のためにも、皆んなのためになるいゝ運を取逃がしてしまひましたよ。……いくら悔んだつてもう追付かない。……でも、あなただつてよくお考へになるといゝ。御自分の間違つた偏見のむくゐがみんな御自分の頭の上に落ちかゝつて来るんぢやありませんか」

「……お前は今日はどうかしてゐる」啓助は今度は強いて微笑を浮べて、「天気が蒸すから頭の加減が悪いんだらう……仙吉の結婚は、当人の望み通りにしてやつたんぢやないか。あの子は親の慈悲に感謝こそして居れ、不平なんかある筈はないのだ」と、説諭するやうに云つた。

「二人も子供を殺して、親の慈悲も何もあつたものぢやない」

「いやな話は止せ」啓助は胡麻塩頭を振つて、「兎に角すんでしまつた昔のことなんか思出さないやうにしよう。お互ひに昔のことは忘れるやうにしようと、お前も不断さう云つてゐたぢやないか」

「それは将来に楽みがあるのなら、昔のことは忘れられるでせうけれど。私達に何の楽みがありますか」

「さう理窟を云つたつて為様がないよ。……まあおれにサイダーでも飲まして呉れ。咽が乾いてるんだから。……水でも

い〻」

啓助は氣を鎭じようとしてさう云つて急立てたが、老婦は兩眼に涙を溜めて、前に坐つたまゝ動かなかつた。

「丹三だつて、剛慾は剛慾でも、世間馴れた男だから、まさかの場合の相談相手にはなるんです。それをあなたが下嫁ひして寄せつけないやうになさるから、先方でもたまには意地の惡い仕打をする譯ぢやありませんか。親類は寄りつかず、子供には別居されて……」

「くどいなあ」

啓助は舌打ちをして老婦の傍を離れて、二階の自分の部屋へ入つた。もつと愚痴を云ひにやつて來るかと氣遣はれたが、幸ひに梯子段に足音がしなかつた。しかし、彼れは、もはや謠曲の一くさりを口すさむ氣持にはなれなかつた。自分の家にゐながら、乾いた喉に冷水の一杯も快く飮めないやうな窮屈さが感ぜられた。

「道雄は剃刀で喉を掻切つて死にやがるし、眞治は地獄の苛責に會つてるやうな呻き聲を立てゝ死んだ。おたに（老婦）の奴も首でもくゝつて死にやがれ」

彼れは自棄でさう思ふと、六十の心にも昔から持續けて來た元氣の餘燼が燃え上つた。何處かの手ごろな土地に深い穴を掘つて、老婦を生埋めにでもして葬つてしまつたら、さぞせい〳〵することであらうと、その痛快な光景を思浮べたりしてゐた。

暫くして自分の思ひに疲れてゐるところへ、玄關から訪問客の聲が聞えて來た。耳を峙てゝ聞くと、女の聲らしかつた。應對してゐる老婦の聲はおとなしかつた。快活な笑ひもまじつた。

「厚木からお客樣がいらつしやいました」

やがて下女が知らせて來たので、啓助は救はれたやうな氣持で、直ぐに階下へ下りて行つた。訪ねて來た客は、丹三の

長女の会ほであつた。何年目かの來訪なのだが、[illegible]

「ヤア、研ちやんか。よく來たね。……一人で?」

丹三の一族に向つて、啓助がこんな懐しみのある聲を掛けたのは珍らしかつた。

「えゝ」お縞も悦しさうに啓助を見上げて、「一人で一日駈けずり廻りました。用事を濟ましたら直ぐに家へ歸る筈にしてゐたのですけれど、久振りに伯父さんや伯母さんにお目に掛りたいと思ひまして、ちよつとお邪魔に上りました」

「まあ、今夜は泊つて行つたらいゝだらう」

「たまに來たんだから泊つてお出でな。一晩くらゐいゝぢやないか」

老婦はさつきの物狂はしさからケロリとして、嬉つこさうにお縞の顏を見据ゑた。お縞も東京の親類に甘やかされるのは惡い氣はしなかつたので、勸められるまゝに泊つて行くことにして、お絹の縁談を中心にして、自分の家の内輪のことをいろ／＼に話しだした。啓助に取つては、氣性の合はない丹三の家族に關した噂はさほどに興味を惹かなかつたのだが、お蔭で快く風呂に入れて、快く冷たいものが飲めて、快く晩餐の食べられるのが有難かつた。

「私なんぞ詰りませんわ。年中家の中にすつ込んでばかりゐて。今年になつて町の外へ一歩でも出たのは、今日がはじめなんですもの。お拾は仕合せですわ」

お縞は、妹二人が自分の家を出て他所へ嫁ぐのを羨ましがつてゐたが、始終彼女の話に耳を留めて相槌を打つてゐた老婦が、「お拾の時には、私の家は眞治の病氣で大騷ぎだつたから、結婚式にも出られなかつたけれど、今度は私だけでも式には出ることにしませうよ」と、心安立てゞ云ふと、

「それは、式の時には皆さんに來て頂きたいんですけれど……」と、お縞は、間の惡い顏して言淀つた。

「私が行つちやいけないの?」老婦は、敏捷に相手の心を讀んで訊返した。

「アラ。そんなことありませんわ。……でも、若い時節だし、先方では極く質素に、ほんのおしるしだけの式を擧げるらしいんですの」

「だつて、田舎のお百姓の家といふものは、結婚式なんかには、親類も大勢呼寄せるのがお極りになつてるぢやないの？　あなたのお父さんが私達を嫌つて除け物にしようと思つてるんだらう。……お父さんの目算みかけてた何とか合名會社の株を斷つたり、お拾の結婚の時にも世話をしなかつたりしたんだから、あなたのお父さんがそれを根に持つてるんだらう。……だつて、お前の家でも、眞治の葬式に來てくれなかつたんだからね」

「いえ、さうぢやないんですけど……」お稲は二人を恐れて小さくなつて、「お父さんは皆様に來て頂きたいと云つてるんですけど、お絹がそれだけは勘忍して呉れと、泣出しさうな顔して云つて爲様が御座いませんの。極りが悪いんでせう」

「だつて、あなたのお父さんは娘の云ふことなんか取上げさうな人ぢやないのに。私にはどうも呑込めないね。私の方ぢや、遠方まで押付けがましく行きたいなんて思つてやしないけれど」

「ハヽヽ。そんなことはまあどうでもいゝぢやないか。お稲の所爲ぢやないんだから」

啓助は取做し顔でさう云つて、話を外へ轉じたが、老婦は侮蔑を受けたやうで心淋しかつた。お稲の方でも、「いづれ改めて御招待するでせう」くらゐのお座成りを云つて置かなかつたことを後悔しながら、針の蓆の思ひをしてゐた。そして、宿泊契約の解除の口實を見つけようとひそかに企てゝ、「仙吉さんは今夜御自分のお家にゐらつしやるか知ら」と訊ねた。

「あなた、仙吉に會ひたいの？」

「えゝ。仙吉さんにも何年もお目に掛らないんですから。次手にお訪ねしちやいけないでせうか。」

「でも、此處からは隨分遠いのよ」

「遠くつたつてかまひませんよ。此方へお伴ひしても伯母さんにお断りしなきや。いたゞきたいと思つてゐたい」

「さう思ふだらうね」老婦は同感して、「是非伯吉に會ひたいとお思ひなら、私もこれから連れてつてあげようか」

老婦は、先日行つたばかりの伯吉の家庭へ、また遊びに行ける機會を捉へたのを喜んだが、お絹はこの場合、伯母の同行をば有難迷惑に感じてゐた。伯吉訪問は、單に外出の口實として持出したので、外へ出た都合で、何處へも道寄りしないで、遅くなつても厚木へ歸ることにしようかと迷つてゐたのであつた。が、伯父までも傍から伯母を唆かして、「小さな家だから、捜すのが骨折だ。案内人が必要だ」と云つたので、お絹は今更否む譯には行かなかつた。

「遠くつても自働車で行きや何でもないよ」老婦はさう云つて身仕度に取りかゝつた。

「私、自働車には乘りつけないから、頭がくら〳〵していけませんの」

「若いくせに弱いのね」

「田舍者なんですもの」

「田舍者で結構ぢやないかね。私は田舍で暮したいと時々思つてゐるの」

老婦はさつきいやみを云つたことなんか忘れて、御機嫌だつた。

（二）

夏の衣替えの支度は、今日母親に頼んで置いたので、此間からの心配の一つが無くなつた。去年の夏は四川の大將に追ひつかはれて、隨分忙しい目に會はされたが、この夏はその埋合せに、自分で暇をこしらへて、海のほとりか山の中かで暑さを避けて、都會で汚れた身體の垢を落して、心の埃を拭うて、そしてゆつくり落着いて、かねて志してゐる映畫の臺本を一つ二つ書上げることにしよう。……おれには、いくつでも考察の緒口はついてゐるが、まづ第一に、あの材料がい

い。兄の自殺がいゝ種だ。弟のおれには兄の心理狀態がよく分つてゐる。あれをおれの空想で自由自在に色取りをつけて、映畫向きに面白くするのだ。あの撮影所の所長もおれの才を認めてゐるから、頻りに起稿を勸めてゐた。俳優にはあの男とあの女とを主役に使ふつもりだ。……

仙吉は、圓タクで搖られながら、映畫の境地を想像して、田村町の自宅へ歸つた。彼れの長兄の道雄は、じめ〳〵と陰氣に一つ事を思詰める方だつたが、仙吉は空想の才が火花のやうに散つて一つところに心がじつとしてゐられない方だつた。そして、世上の事物の目まぐるしく變轉しないで、ノロクサしてゐるのを齒痒く思ふことがあつた。自分についても心の歩みのノロさをもどかしく思つてゐた。

妻の夏子は、湯から歸つて勝手口に上つたところであつたが、流し場で、も一度顏を洗流しながら、臺所の入口に立た仙吉を顧みて、「お歸んなさい。お父さんもお母さんもお變りがなくつて?」

「あゝ。老病依然としてゐる。……小石川は無人で廣々としてるが、あしこから歸つて來ると、この家が馬鹿に狹つ苦しく見えるよ」

「だから、もういゝ加減でお父さんのお家へお歸りになつちやどう? こんな家にゐて無駄に家賃を拂ふだけでも詰らないぢやないの?」

「當分そんな決心はおれのお腹のなかに湧いて來ないね」

「どうして? あたし、あのお母さんの側なら、大丈夫辛抱してゐられてよ。あたしのために息子が別居してるやうに思はれちや、あたし大迷惑よ」

「まあ成行にまかせて打つちやつとくさ」

「相續者が兩親を打遣つて平氣でゐるやうなら、外から養子でもすると云はれたら、あなたは、どう御返事をなさる?」

勝手にしろと仰るつもりね」
「詰らない取越苦勞は止せよ。おれが別居してるのは、自分の爲めやお前の爲めばかりぢやない。兩親の爲めにもなるんだよ。つまり入江家全體のためになるんだよ」
「變ですわね。どういふ事情があつて？ あたしには初耳よ。そんな深い譯があるのなら、聞かせて下さいね」
夏子は半信半疑であつた。
仙吉は空想に捕られてゐた圓タクを下りて、家へ入ると早々、妻との間にこんな話が偶然にはじまつたので、彼れの映畫氣分は意外に濃厚になつた。思ひつきの映畫の臺本の筋立が頭の中で急速に廻轉しだしたので、下書のつもりでそれを夏子に話して聞かせようと思ひついた。夏子が面白がらなかつたら、それを參考に筋を立直すことにしようと考へた。
「聞きたきや聞かせてもいゝよ。お前は一生知らなくつてもいゝことなんだが、おれの方では隱す必要もないんだ。……まあ、話は飯の時にして、おれも湯に入つて來よう。その間に膳立てをしといて呉れ」
仙吉はさう云つて、坐る間もなく再び外へ出た。そして、湯に入つてゐる間も、專念一意、臺本の製作に取掛つた。兩親や長兄や次兄に關はつた實際の事件が新たに生氣を帶びて現はれるとともに、それ等がいろ／＼に潤色されて、赤くなり青くなり灰色になつたりした。しかし自分で滿足するやうな、一聯の作品にはならなくつて、未成品のまゝで家へ歸ると、
「大變な長湯ね。お料理が冷めつちまふぢやないの」
夏子は、食卓の側で夕刊を讀みながら待ちあぐんでゐた。
この若い夫妻は、湯上りの艶々した顔を突合せて、ちやぶ臺を挿んだ。仙吉は下戸のくせに、西洋名前の酒を味ふことに精神的享樂を感じるのを例としてゐたので、今夜もソーセーヂなんかを肴に、琥珀色の液體の一盃を甜めた。

「入江家にはあたしの知らない秘密が潜んでゐるんですか。あなたの兄さんの自殺ばかりぢやないんですね」

夏子は、この夫は自殺した人の弟であるといふ、この頃忘れてゐたことを思出して、今までと異つた目でその顔を見据ゑた。あの鼻の先の赤い四角な顔した父親や、猫背で、話をする時には顔を前へ突出すやうにする癖のある母親などが、今までと違つた物珍らしい人として目の前に浮んだ。

「兄の自殺したことは、入江の一家族の運命にいろんな關係をもつてゐる」

健吉は、自殺した兄を有つてゐることを、むしろ誇りとしてゐた。

「因果應報は爭はれないものだね。……おれは三年前に死んだ叔父から、これは内所の話だと云つて聞かされたことがある。叔父が小さな時に祖母さんから聞かされたと云ふのだから話は古いよ。叔父の曾祖父に當る人の時代だから、天保弘化の頃なんだね。江戸から驅落者が入江の家へやつて來たのださうだ。無論何かの縁故があつて手頼つて來たのだらう。男はどうだか知らないが、女は錦繪から抜け出たやうに美しかつたさうだよ。その頃の役者で見立てたら、岩井半四郎とか瀬川菊之丞とか云つたやうな美しい女が、男に手を引かれて、夜道を踏んで、汚い田舍の百姓屋へやつて來て戸を叩いたのさ。二人は家の中へ入れて貰つて、行燈の側に坐らされた。男が譯を話して當分かくまつて呉れと云ふので、曾祖父は一も二もなく承知した。しかし、曾祖母の方では、一目見たゞけで、その女客のヅバ抜けて美しいのに嫉妬を感じたのだよ。田舍の醜い女が都會の洗錬された女の美に反抗しようとしたのだ。曾祖父だの曾祖母だのと云つても、その時はまだ、三十前後の若い盛りだつたのさ。それで、二人の客を奥の室へ寢かしたあとで、主婦は、かゝり合ひがつくといけないから、早く宿を斷つてしまへと云ふ。主人は一旦引受けたものを、そんな薄情なことは出來ないと云ふ。夫婦が言爭つてるのに引きかへて、二人の客は平和に眠つてゐたのだ。……主婦は、同じ女でありながら、自分の醜く生れついてるこ

ことに主人の[illegible]、[illegible]
すべて寂しくなつて來る。主人の目にも、自分の女房の姿が[illegible]、男として[illegible]
しい。

そこで、講談か活動寫眞にあるやうなイキサツがあつたのだ。昔の世は、文明開化になつた今の世の中よりもよかつたところもあつたのだね。憎い奴やいやな奴をバサリと刃物でやつゝけて平氣でゐられた時代だつたから面白いね。腹のなかでお互ひに睨み合つてゐないで、生死の勝負を露骨に早く極めるから面白いよ。主人は、男の客を鮎釣りに誘ひ出して、淵の中へ突落して溺死させやうと企むし、主婦は女の客の咽笛を草刈鎌で搔切らうと企んだのだ。ところが、どつちも成功しないで、二人の墮落者は、生命からがら逃げ出したのだ」

「あなたの御先祖樣にはそんな方がゐたんですかね」

話の切れ目に、夏子は言葉を挿んだので、仙吉は我れに返つて、

「子孫として、さういふ御先祖を持つてることは名譽にならない譯だね。だけど、大抵の人間の先祖はそのくらゐなことはやつてるんだね」

「でも、それが親子の別居とどんな關係がつながつてゐて？」

「默つて聞いてれば、その關係が自然に分つて來るんだよ」

「だつて、昔話を聞くのは退屈よ。天保時代のことなんか、どうだつていゝぢやないの。肝心のことを早く仰有いよ」

「肝心のことゝ云つたら、親子が同居してゐたら、子供が次ぎから次ぎへ死ぬるといふことなんだ

仙吉が眞面目でさう云ふと、夏子は痴人の譫言のやうに聞いて、「そんな馬鹿なことがあるもんぢやない。あなたの兄さん

だつてあなたどつて、赤ん坊の時から兩親に育てられて大きくなつたんぢやありませんか」

「されはさうさ。兩親と同居してゐると若死をすると、おれの云つたのは、色氣づいてからのことなのさ。上の兄が自殺したのも、次ぎの兄が病氣で死んだのも、彼等が色氣づいた後のことなんだからね……たつた一人殘つた子供はおれだ」

「若しもあなたの仰有ることが本當だつたら、お父さんやお母さんは不幸な方ね。死ぬるまで、老人同士二人きりで淋しく暮さなきやならないぢやありませんか。外に不自由のない御身分でも、お氣の毒なやうね」

夏子も、この時は、馴染み難い老夫婦をも、氣の毒な人のやうに心から思つた。すると、仙吉も感傷的になつて、印象の薄らいでゐる長兄の變死を、新たに身に染み〳〵と思出した。剃刀で動脈が切られて血の滴つてゐる死體が、目前に横はつてゐるやうで、仙吉の神經は顫動した。食卓の料理も味はひを失つた。

「色戀のことだから、兄弟には打明けなかつたさ。本當の事情はよく分らなかつたが、おれの見たところぢや、取柄のない詰らない女に兄貴も迷つたものなんだ。おれの家と多少血緣の續いてる家の娘なので、一時おれの家に預つて母の手助けをさせてゐたのだが、容色だつて性質だつて決してよかあなかつた。男に失戀の苦勞をさせるほどの價値のある女ぢやなかつたのだが、どうも爲方がないな。……しかし、そんなことがあつたために、氣六ケしい親爺もよつぽど氣が折れて來たのさ。それからといふものは、親の方から、自分の子に逆らつちや子供が死ぬると思ふやうになつたらしいね。二番目の兄貴も、醫者が有振れた病氣として診斷した病氣で死んだのだが、その病氣の原因がやはり女に關係を有つてるらしい。おれの二人の兄が二人とも、女には脆かつたのは、何かの祟りかも知れないが、それ以來、兩親はおれを、腫れ物に觸るやうな態度で取扱つてた。壞れ物を持つてる氣でゐたらしいよ。おれは、二人の兄とはちがつて頑健で、親爺の拳骨くらゐで壞れるとは思つてゐないんだが……」

仙吉は、何かの祟りと云つたやうな迷信は抱いてゐなかつたが、これを祖先から代々この一家に附纏ふ何かの祟りとし

て默つて、映畫の台本に仕舞はうとしてゐた。

「では、あなたの兩兄弟のうちで、父に馴くないのは、あなたお一人ね」夏子はお愛想に云つた。

「おれのことは兎に角、親爺だつてあんな風に見えても、案外女に弱いやうなところがあるよ」

「さうでせうか。あんなきつい顏してゐらつしやるのに。それに、お母さんには專制的で、お母さんもお父さんには、柔順に仕へてゐらつしやるぢやありませんか」

「ちがふよ。それは見掛けだけだ。親爺は母にだつて脆いよ。外の女に對しても脆いのだらう。おれには、世間はみんな男が強くつて女が弱いやうに思はれるのに。おれの家に限つて男が脆いのは、どうも變挺に思はれてならんね」

「外の女と云つて、お父さんには、お妾さんか何か、關合ひのある女が外にあるのか知ら。……あなたは御存じ？」

夏子には、この話こそ面白かつたのだが、仙吉はそんな話に觸れるのもいやだつた。

「おれは知らない。……本當に知らないんだよ」

「でも、會社に出てゐてお父さんくらゐな地位にゐる方は、怪しい女の一人や二人にかゝり合ひがあるのは、世間普通のことらしいのね」

「いやな所へ話が飛んでしまつた」

「でも、お父さんに御寵愛の女なんかあつちや大變よ。その女の人に子供でも出來てゐたら……」

「そんな下らない空想は止せよ。……そこで、本筋の話に移ることにしようか。本筋の話はまだ糸口を切つたばつかりだつたね」

「もう澤山。自殺の話なんか、食卓で聞くべきものぢやないのね」

「おれも頭がいやに重苦しくなつた」と云つて、仙吉はふと思ひ出したやうに、「さういへば、今日うつかり、近いうち叔

舞伎座へ誘ひませうと、母に云つといたから、實行しなきやあなるまい。母はおれの云ふことは、一々眞に受けてよく覺えてるから困るよ」

「歌舞伎座のお伴なら結構だわ」

「三人も四人もで行くと、随分高くかゝるからね」

「だつて、場代はお母さんがみんな拂つて下さるでせう」

「するいことを考へてる」

仙吉はさう云つて笑つたが、自分も腹の中でさう思つてゐないでもなかつた。

「だつて、お金持が奢るのは當り前ぢやないの」

その時、表の格子戸が開いた。仙吉は母の聲を聞きつけて、いぶかしげに顰め面して、妻を見て、「どうしたんだらう」と小聲で云つた。取次を待たないで上つて來た母親の後に立つてゐるのが、お福だつたので、彼れはなほ更意外な感じに打たれた。「お福の縁談に絡まつて何事か起つたのぢやないか」

（三）

廣いことだけは廣い田舎の家に住馴れてゐるお福は、仙吉が間數の少い、庭もない、せゝこましい所に住んでゐるのを見ると、侮りたくなつた。それに、はじめて會つた夏子が、噂に聞いてゐたほど美しくもなく、華やかな服裝をしてもゐないで、貧弱な只の女に過ぎないのを案外に思つた。そして、會つてゐて此方で退け目を感じない心安さを覺えた。

「よくいらつしやいました」

夏子は、母親の紹介で手輕に初對面の挨拶をすますと、下女に食卓を片附けるように吩咐けて置いて、自分の部屋へ入

つて衣服を着替えたり髪をつくろつたりした。

その間に、お福は仙吉に向つて、夏子の身元や年齢や、月々の生活費のことなどを、無遠慮に訊ねたので、仙吉は不愉快を覺えながらいゝ加減にあしらつてゐたが、

「お絹は、父が今度の縁談を極めかけた時に、一度仙吉さんに御相談したいと云つてましたのよ。それには及ばない、人に相談なんかして迷ふといけないと、父は取合はなかつたのですけど。……お絹からあなたに、手紙でゞも何とか云つて來ませんでしたでせうか」と訊かれると

「無論、お絹さんから手紙なんか一度も貰ひません」と、尖つた聲で無愛想な返事をした。

「ぢや、御相談したつてはじまらないから諦めたんでせう。どうせお父さんの極めたことに反對は出來ないんですもの。……でも、あなたはどうお思ひになつて？　お嫁に行つたつて、自分で野良へ出る譯ぢやないんだけど、お百姓の家へ行くと、多少は荒仕事をしなきやならないし、第一、家の中が汚らしくつて、食物だつて粗末な物を食べなきやならないんですよ」

「それはさうだらう。……當人は行きたくないんですか」

「でも、外にいゝお嫁入口がないから仕方がありませんわね。私をはじめ、私の姉妹は三人とも、どこからもいゝ縁談を持込まれなかつたんですのよ。でも、私の知つた家では、いゝお婿さんを取つたりいゝお嫁さんを取つたりしてゐるところは、何處にもなささうね」

お福の無遠慮なサバ〳〵した口吻に、母親も仙吉も笑つた。そこへ、隣りの部屋で彼等の話を聞いて面白がつてゐた夏子も、新たな身裝をひけらかして、笑ひをこぼしながら入つて來た。

「厚木では、姉妹が三人揃つて、嫁入りや婿取りをして、こんな結構なことはありやしないよ。お前も不服をお云ひでな

いよ」

母親は、弟の丹三を羨ましく思つたが、お絹は調子に乘つて、

「父もそのことを云つて自慢してますわ」

「さうだらうね。入江の家のやうぢやないと云つて自慢してゐんだらうね」

「アラ、さういふ譯では……」お絹は伯母の顏を見て、早くもそこに險相の現はれてゐるのを見つけると、ヘツと胸を落かせた。鈍感な彼女も思當るところがあつた。

少しの間、誰れも口を利かなかつた。

「お絹さんはいつ御結婚の式をお擧げなさいますの？」

夏子が、何故だか白らけてゐる座を取做すつもりで云ふと、

「今月の十日に極つてゐますから、後もう幾日も御座いませんわ。お寒い時の式ですから至つて手輕に濟ませますのよ」

「お仕度が出來まして？」

「仕度といふほどのことは御座いませんのですけれど、私が今日少しばかり買物にまゐりましたの。大急ぎで來て大急ぎで歸るつもりでしたのに、つい皆樣に久振りでお目にかゝりたいと思つたものですから」

仙吉は、かういふお座成りの世間話には退屈してしまつた。母親がゐなければ、もつと切込んだ話を運ぶことが出來るのだが、母親が目障りで、そのために座が窮屈になるばかりであつた。お絹はお絹で、此處でも居づらくなつて、用事を果たしたあと直ぐに歸らなかつたことを後悔した。もう時刻が遲くなつたから、何處かに泊らなければならないのだが、小石川の伯母の家よりも仙吉の家の方がまだしも氣が樂なやうだつたので、夏子がお世辭に勸めるのをいゝ機會に、この家に泊る目算を立てゝゐた。しかし、仙吉の母親は、自分が一度も泊つたことのない一人子の家へ、不斷反目してゐる

る母[illegible]をいらせることをおそれたのだつたので、一人で小石川まで訪ねるのも心細いから、一しよに[illegible]へ行くことに
なさいよ。話があるのなら、ゆつくり此店で遊んで行つたつてかまやしないけれど」
「私はどちらでも構ひませんわ」
「おや、お母さんもお泊んなさいましな。こんな狹いところでは御不自由でせうけれど」
「さうねえ」先つきから蟄つてゐた母親の御機嫌は直ぐに直つた。仙吉の家へは一度泊つて見たい〳〵とかねて望んでゐたのだから、娘の通り一ぺんの柔しい言葉にも直ぐに乘つた。「私が家を明けたことなんか、一度もなかつたのだから、お父さんが御心配なさるかも知れないけれど」
「電話でお許しを願つたらよろしいでせう。あたくし、これから掛けて來ますわ」
夏子は調子に乘つた風だつた。仙吉は氣づまりを豫感しながら默つてゐた。さう事が極ると、夏子は、客を持做すための買物をかねて家を出た。
彼女は、近所の食料品屋へ寄つて、そこの電話を借りて、小石川の家へ掛けた。取次の書生の黒田に用向きを傳へて、「お差支えはないでせうか」と聞いて貰つた。すると間もなく電話口に出て來て、「仙吉か」と云つた聲は、父親の聲だつたので、夏子は恐縮した。
「あたくし、夏で御座います」
「あゝ、さうか。實は此方から大急ぎで使を出さうと思つてたところなんだがね。厚木からお絹が不意に訪ねて來たところなんだ。今此處にゐるんだよ。仙吉にさう云つてお呉れ。お母には知らさない方がいゝから、仙吉にだけ秘密でさう云つてお呉れ。それで、大急ぎで此方へちよつと來て貰ひたいんだよ」
「承知いたしました」

「おれの云つたことがよく分つたかね。仙吉にだけちよつと來て貰ひたいんだ」

「ハイ、よく分りました。お絹さんと仰有る方が其方にゐらつしやるんで御座いますね。それから、お母さんは此方へお泊め申してもよろしいんで御座いませうか」

「それはどつちだつて構はないよ。泊りたきや泊らせるがいゝ。……ぢや、仙吉に大急ぎで。いゝか」

夏子は心の中で、くどく云はなくつても分つてゐると思ひながら電話を切つた。そして、大いそぎで水菓子などを買つて家へ歸つたが、彼女は人に怪まれるやうな興奮を顏に現してはゐなかつた。家にゐた三人は、更にお絹の嫁入先の噂をしてゐるところであつた。

夏子は、「あなた、ちよつと」と目くばせして、仙吉を次の室へ呼んで、父親の電話を傳へて、「お母さんにはお知らせしなきやいけないでせうね」

「いや、お福さんが變に思ふといけないから、兎に角おれ一人で行つて、様子を見て來ることにしよう」

仙吉はひどく氣色ばんだ。元の部屋へ入るや否や、出仕度に取りかゝつた。

「お父さんは何と云つて？」と、母親は仙吉の顏色に心を留めて、不安を覺えながら訊いた。

「お母さんは此方へお泊りになつてもよろしいんですつて」と、夏子が事もなげに云ふと、それに續けて、仙吉は、

「僕は突然急な用事が出來て、これから出掛けなきやならないんです。お母さんはお福さんのお相手をしてゐて下さい」

と云つて、つゝと玄關を下りた。

その不穏な態度を、夏子でさへ怪しんで、「不斷親しみのなかつた田舍の女が、結婚前に訪ねて來たつて、そんなに驚くことないぢやないか」と、疑ひを寄せたが、母親は、折角泊らうとしてゐる自分を棄てゝ出て行くわが子の慌たゞしい様子を、手頼りなく思つて、お福をお相手にする話に身が入らなくなつて、夏子にいろ〳〵訊ねた。

「どんな用事ですか。あたくしにもわからないんで御座います」と、夏子は、後でバレた時[illegible]ますことを承知の上で、自分にくれてゐた。

「時々、かういふことがあるんですか」

「どうかすると、足許から鳥が立つたやうに、慌てゝ出て行くことが御座いますのよ。でも、あたしは馴れてますから、何とも思ひませんの」

「仙吉さんも、會社のお仕事がお忙しいんでせうね。何處へ行つても東京の人は忙がしさうにしてゐますわね」

お福一人は平氣であつたが、母親も夏子も、心で仙吉の後を追つてゐたので、お福の方をば自から等閑にしてゐた。林檎やバナヽもそこに置かれてゐるだけであつた。

「どうか、召上つて下さいましな」夏子はやがて、取つてつけたやうに云つて、ナイフで林檎の皮を剝きだした。

「仙吉はこの頃も毎日果物をよく食べてるんでせうね」

「えゝ。果物をきらすと御機嫌が惡いんですの」

お福は夏子の剝いてくれた林檎を口に入れて、その酸つぱいのに顏を顰めながら、厚木の家庭の、早寢の仕度をしてゐる人達の樣子を思出してゐた。自分の家で寢るほど樂なことのないことが考へられた。

（四）

仙吉は圓タクを急がせながら、二年あまりも會はなかつたお絹の顏を思出してゐた。そして、ひそかに胸騒がつてゐた彼女の縁談に波瀾の起つたらしいのに、快心の微笑を洩らしてゐた。彼れは、小石川の家にお絹が寄寓してゐた時分には、おのづから多少の愛着を感じてゐないではなかつたが、それは昔の淡い夢として追想されるに過ぎなかつた。そし

て、厚木の母方の叔父の家とは、音信のやり取りも止切れ勝ちで、其處の三人の姉妹がどうなつてゐようと、蚤に喰はれたほどの痛さ痒さを感じなかつたが、今度お絹の縁談の噂を耳にすると、ふと異様な義憤を感じた。相當な身代があるのに、娘の幸福を無視して打算的な縁組を企てる親爺も親爺なら、それに甘んじて、若い女らしい情熱は燃やさないで、煤ぶつた田舎くさい結婚生活に入つて平氣でゐる娘も娘だと、獨りでもどかしく思つてゐた。姉二人は薄ぼんやりの方だから、舊弊な剛慾親爺にあやつられるも止むを得ないとしても、お絹は、今日の婦人雜誌くらゐ續けて讀んでゐるだらうし、東京にゐた間は、時々評判の映畫を觀てゐたのだから、豚のやうな痴鈍な、田舎の小地主の息子なんかに 無反省に嫁ぐ氣になれる筈はないのだと思つてゐた。

「強いられた縁談をいやがつて、おれの知恵でも借りに來たのだつたら面白い」と、仙吉は、現代振りの知恵ならいくらでも授けてやれるといふ自信に醉ひながら、ガタピシする圓タクの中で反り返つて、小石川の父親の家に着いた。

二階の父親の居室では、紫檀の机を挾んで、老若の男女が、止切れ／＼に話聲を立てゝ、互ひに氣詰まりな時間を過してゐるところであつた。

「オー、仙吉が來たのか」と、待ちかねてゐた父親が座を立つた時に、仙吉はすでに勢ひよく階子段を上つてゐた。此方を振向いたお絹の、頬を紅らめた容貌は、田舎くさくはなつてゐなかつた。却つて以前よりも成熟した色つぽさがあつた。かの墮落者の、昔の美女のモデルにしてもいゝやうに思はれた。

「しばらく……」と、氣取つた會釋をして、仙吉は机の側に坐つて、「東京に着いて直ぐ此處に來たの?」

「えゝ」

「おれも吃驚したのさ。頭の加減が惡かつたから、氣晴しに近所を散歩しようと思つて門を出ると、お絹に行會つたのだ。入つていゝか惡いかと迷つて、家のまはりをうろついてゐたのださうだ。……お駉がお前の家へ行つてゐたからよか

つたやうなものだがね」

父親はさう云つて苦笑した。

「今日は何か譯があつて東京へ來たんですか」

「おれもいろ／＼聞いて見たんだがね。つまりは、今度の結婚を自分では望ましくないと云ふんだ。よく譯を聞いて見ると、無理もない話らしいんだが、無關係なおれが、人の家の縁談に餘計な口出しをすべきものぢやないからね。……しかし　お福を呼んで引渡すのも差し出た仕打のやうに思はれたから、お前だけを呼んで意見を聞かうと思つたのさ。……お母さんには知らさなかつたのかい」

「えゝ。秘密にしときました」

「それがいゝ。騒立てられちやお互ひに迷惑だからね。お母さんにも知らさない方がいゝだらうが、おれも、これから階下へ行つてるから、お前から直接、譯をよく聞いて御覧。おれには言ひにくい理由があるんだらう」

父親は、氣を利かせたやうに座を退いたが、それは、若い者の心を思遣つたばかりではなかつた。彼れは、年を取るにつれて、丹三の家族に對する片意地な反感が募つてゐるので、老妻の性情擧動に嫌惡を感じる時にも、丹三の姉だからと、丹三を厭ふ思ひを強めるのであつた。そして、丹三の娘の結婚沙汰なんかに喜んで耳を傾けてはゐられなかつた。

「今夜お福さんにいろ／＼なことを聞かされたのだが、結婚は極つて、式の日取りまでも極つてるんだらう」

健吉は、二人きりになると、せき込んで訊ねた。

「さう極つてるらしいのよ。お父さんが勝手に極めて」お絹は平然として云つた。

「それで、あなたはお父さんの極めたことに不服で、今日無斷で家を飛出して來たんだね。あなたの家の家風から云ふと、隨分突飛なことをした譯だな。家ぢや今時分大騒ぎをしてるだらう。愚圖々々してると、此處へ追手がやつて來るか

も知れないよ。僕の兩親はさういふことには全く同情がないんだから、厚木から追手が來た時、あなたを保護してくれやしない。あなたはどういふ處置を取らうと思つてるんだね」

仙吉が慌たゞしく獨合點の口を利くのを、お絹は呆氣に取られて聞いてゐたが、

「あたし、無斷で東京へ來たのぢやありませんよ。東京で姉さんと一しよになると云つて、お午過ぎに家を出て來ました」と、しつかりした口を利いたので、仙吉は意外に思ふとともに、何だか當てが外れたやうな氣がした。

「ぢや、此處で姉さんと落合ふ手筈にしたの？」

「いゝえ、さうでもないの。さつき姉さんが此方へお伺ひしたつてことを伯父さんに承つて吃驚しました。……姉さんはあたしのことを知らないんでせう」

「僕は知らせないやうにしてゐたんだが、後で勘づいたかも知れないな」

「ぢや、あたし早くお暇しなきやならない。此處で姉さんに會ひたくないですもの」

「だつて、僕はわざ〳〵やつて來たのに、肝心の話をしないで行つちまふの？」

仙吉は、當ての外れた忌々しさから、詰責するやうに云つたが、お絹はさして驚かないで、微笑を洩して、

「あたし自分で思つてることは、大抵伯父さんに申上げたのですから、後で伯父さんによく聞いて下さいな。……姉さんに會つちやいけないから、大急ぎでお暇しなきや」

「姉さんの來る氣遣ひはないさ。……もう遲いのに、これから何處へ行くの？」

お絹が座を立ちかけるのを、仙吉は目付で押留めた。

「青山にゐるお友達の家へでも泊めて貰ひますわ」

「そして、どうするの？」

「御父さんは、今夜はこの家に泊るか、それともお気が済むなら、以前の通り先生の家に泊るかして、明日早く家へ帰れと仰有いました」

「ぢや、親爺の説諭通りにしようつて云ふの？　親爺はあなたの家と関り合ひのつくことを恐れてばかりゐるんだよ。……ぢや、かうしよう。青山へでも何処へでもお絹さんが泊りに行くのなら、僕がそこまで見送つて行かう。僕も早く自分の家へ帰らなきやいけないんだから」

仙吉は、近来稀れなるこの異様な用来事に関り合ひをつけないで、手を空うして見逃すのが、残惜しく思はれたので、相手が見送りなんかどうでもいゝやうな素振りを見せるのを、無理強いに押付けた。そして階下へ下りて、父親にさう云つて断はつたが、父親も異存はなかつた。

「お母さんが知つたら、なぜ引留めて置かなかつたかと、不平を云ふかも知れないから、お母さんにはお前の口からいゝやうに云つて置け」

「それは、僕からうまく云つときませう」

仙吉は、階子段を下りかけてゐるお絹を誘つて、彼女が父親に挨拶してゐるのをもまどろこしく思つて、戸外へ出た。

「まあよく考へて、量見違ひはしないことだね」

父親は玄関に立つてさう云つたが、それが、いかにも形式的の辞令であつたことは、仙吉にもよく分つてゐた。

兎に角、青山までと指定して、通りがかりの圓タクに乗ることは乗つたが、仙吉は、途中下車の覚悟を堅く極めてゐた。

お絹は仙吉と並んで自動車に腰をおろすと、溜息を吐いて、

「小石川のお家へ寄らなきやよかつた」と呟いた。

「どうして？」

「以前御厄介になつてた家だから、懐かしくつて、つい足がそつちへ向いたものだから、伯父さんに見つかつちやつて……
……」と、お絹は再び呟いた。

「お絹さんが何か決心してるのなら、僕の親爺や母に相談したつて仕方がないよ」

仙吉は、相談相手として力になるのはおれ一人だといふ腹を相手に見せやうとした。かうして、同じ車に、身體の温かみも通ふやうに膝を並べて乗つてゐると、二人が駆落者になつてゐるやうな氣がした。それは悪い氣持ではなかつた。胸屈托を抱つてゐるらしいお絹の姿が、夜目には一層色つぽく見られた。左右の燈火や雑踏が浮世離れのした夢心地で見廻された。……今夜は珍らしい夜であつた。何か異つた面白いことの起りさうな夜であつた。タップリ味はゝなければ一生の損になりさうな夜であつた。

「アゝ、もう神田」と、仙吉は、途中の短いのを惜んだ。「青山にあなたの懇意な人が住んでるの？　何といふ人？」

「澤井さん」

「あの人、この頃は青山にゐるのかい。あの人は結婚してるんださうだから、そんな所へ行つちや氣詰りだよ。……それよりも、僕が居心地のいゝ宿を紹介しやうか。あなたの事情もよく聞きたいし、何處かで一先づ足休をして、僕が眞面目に身の上の相談に乗つて上げることにしようぢやないか」

「あたし、あなたの思つてゐらしやるほど無考へな女ぢやないのよ」お絹は寂しい笑ひを洩らして、「伯父さんが飛んでもないことを仰有るから、あたし呆れちやつた……」

「たまに田舎から東京へ來ると、意外なことを見たり聞いたりするもんだよ」

「伯父さんは自慢さうにかう仰有つたのよ。……仙吉は結婚して平和に暮してゐるんだから、外の女には目も掛けない。だからそのつもりでゐて呉れつて……何だか、あたしが仙吉さんを慕つて來たやうな口吻なんだから、あたしは呆れ

つちやつて、言譯をする氣にもなれなかつたのです。あなたも伯父さんと同じやうに思つてゐたのかと思ふと、なさけなくつて」

お絹が伯父の言葉に呆れたのにも勝つて、仙吉はお絹の言葉に呆れた。この女がこんなことを云ふ女になつたかと顧みると、彼女の顏には侮り難い威力が動いてゐるやうだつた。

「僕がそんなことを思つてるものか。親爺はこの頃頭がどうかしてるんだよ」

「あたし、仙吉さんにはお目に掛たりいと、しよちう思つてゐたのですけれど、仙吉さんを欺つてるなんて……」と、お絹は言差して、この人をと云はぬばかりに、仙吉を見据ゑた。仙吉は强いて笑ひを浮べながら、腹の中で恐縮してゐた。

「馬鹿な話だね」と、空々しく受答へをした。

二人は身體を搖られながら、斜めに顏と顏とを見合せてゐた。

「お絹さん、青山の澤井さんへ行つて泊つて、それからどうするつもり？　明日の朝厚木へおとなしく歸つて行くの？」

仙吉は、顏と顏とを見合せてゐながら、はじめの元氣は失せて、女の前に氣おくれがするばかりであつた。短刀直入に女の胸を抉つて引廻はすことなど、とても出來なくなつて、當らず觸らずの口を利いた。

「あたし、半年くらゐは食べて行かれるお金を持つてゐてよ」

「用意周到だね。しかし、お父さんが打つちやつときやしないだらう」

「お父さんはお父さん。あたしはあたしよ」

「それはさうだが、僕でさへまだ親の心から離れつきりになれないのに、……變だな」

「あたし、まだ縁談を承知しましたと口へ出して云つたことは一度もないんですもの」

「結婚式の日が迫つてるのに……」仙吉がさう云ひかけた時に、圓タクは擦違つた自動車を避けようとして烈しく動搖し

て、車中の二人は、頭をかち合せた。
「危(あぶな)い」と叫んで、仙吉は坐直したが、
「ア、びつくりした」と、お絹も恐怖の色を現はしてゐた。
「叔木の時は近年滅多に聞かなかつたが、あなたの身の上に何か異つたことがあつたのぢやないかね」
「あたしは二年の間、家の中にじつとしてゐました。それつきりなの」
「誰れか、あなたの思つてる男がある譯でもないんだね」
「あたし、二年の間、家の中にじつとしてゐたんですもの」
「じつとしてゐたつて、人間は年中眠つてばかりゐないんだから、頭の中ではいろんなことを考へるだらうし……お絹さんも、僕の家にゐた間は、子供見たいにおとなしくつて、愛する人なんかありさうな素振りは見えなかつたのだが」
「あたし、この邊でおろして貰ふわ。あなたはお家へお歸んなさるんでせう」
お絹がふいに下りたがつて、運轉手に聲を掛けようとすると、「まあお待ちよ」と、仙吉は引留めて、「やたらに下りちやいけないよ」と云つて、外を眺めた。
「あたし、下りたらあなたにお別れするのよ。あなたの御親切は、此處まで送つて下すつただけで澤山ですわ」
「いや送屆けるところまで屆けとかなきや、僕の責任が果せないよ」
「あたしが小石川へお訪ねしなかつたことにしといたらいゝでせう。伯父さんやあなたに御迷惑を掛けやしませんよ」
お絹は聲を強めて運轉手を呼んで車を留めさせた。そして、自分で賃金を拂つて車を下りた。仙吉も仕方なしに下りて、「こんな半端な所で下りたつて爲樣がないぢやないか。あなたは東京の地理をよく知らないのに無鐵砲だな」
「あたし、あなたと御一しよに自働車に乘つてゐるのが怖くなつたんですもの」

お絹は、あたりの様子は分らなかつたが、向うを通つてゐる電車を見つけると、そちらの方へ歩いて行つた。そして、仙吉の随いて來るのを顧り〳〵した。仙吉は、強いて女に附絡つてゐるやうに、通りがかりの人[illegible]た目では[illegible]の[illegible]はつた。

「左様なら」と、お絹は、電車に乗ると、振返つて云つた。その顔は晴れやかだつた。

（五）

仙吉の家では、お福だけが先きへ寝かされて、母親と夏子とが話に倦んじて、仙吉の歸りを待ちあぐんでゐた。そこへ、狐に抓まゝれた氣持で仙吉は歸つて行つた。

「急用はお片付きになつて」と、夏子は母親の手前、おとなしく訊ねた。

「さあ、片付いたやうな片付かないやうな……」仙吉は曖昧に云つて、今夜のことは打明けないことにした。

「あなたは歌舞伎座の見物をお母さんにお約束なすつたさうだから、明日御案内なすつちやいかゞ」

「都合で行つてもいゝがね」

「お母さんはお差支えないんですつて。お福さんも芝居なら一日延ばして見に行きたいやうなことを云つてましたよ」

「氣樂だなあ。それどころぢやないだらうのに」

仙吉は、お福が妹の家出について何も知らないのをもどかしく思つたが、ここで打明けて、皆んなして騒立てゝ、平凡な解決をつけるのを惜んで、うかと喋舌りたくなるのを、我慢して抑えつけた。そして、三人で芝居の話なんかをして夜を更かした。

寝床に就いてから、夏子が、今まで聞きたくつてたまらなかつたお絹の様子を訊ねると、仙吉は、朝タクの同乗だけは

秘密にして、その他の事はあらまし話した。
「なぜお福さんに知らせないで默つていらつしやるの？　厚木のお家のためには大變な事件ぢやあなくつて？」
「今騷いで親の側へ連れて歸つたら、あの女に、嫁ひな結婚を强いるやうなものぢやあないか。女としての一生の破滅だよ」
「でも、世間知らずの田舍娘が、一人で東京をうろついてゐると、どんな間違ひが起るかも知れないぢやあないの。それこそ一生の破滅になるかも知れないと思はれてよ」
「どうせ破滅するなら、いやな所へ嫁に行くよりや、好きなことをやつて破滅した方が、いいだらうよ」
「一人の女の浮沈の場合に、あなたはよくそんなに冷淡にかまへてゐられるわね。あたし、今からでも、お福さんやお母さんの目を醒ましてお知らせしようかしら」
「親爺の命令だ。そんな餘計なことをしちやいけないよ」
「お父さんの命令だなんて。あなたの口からはじめて承はるのね」
夏子は、未知の若い女の行衞を氣にしながら、いつの間にか眠りに落ちた。しかし、仙吉は、夏子とはちがつた意味で、お福の將來を想像しながら、眠らうとしても眠られなかつた。そして、頻繁に寢返へりを打つたり、咳をしたり、溜息を吐いたりしてゐたが、眞夜中頃に便所へ立つと、障子の開くのを待設けてゐたやうに、母親が次の室から顏を出した。
「眠れないのかい。いつもそんなに眠れないのかい」
「お母さんも眠れないんですか。いつも眠れないんですか」
二人は廊下に立つた。
「お前は宵のうちから眠づらさうにしてゐたぢやあないか。道雄がさうだつたよ。氣をつけなきやいけない―

「僕は大丈夫。不斷によく眠りますよ」

「お前が眠らないでゐるのに、夏子は氣樂さうによく眠つてる」

お福や夏子の寢息が、靜かな廊下に聞えて來るのを、母親はしかめつ面して耳に留めてゐたが、仙吉は、母親の注意の煩々しさにむしろ戰慄して、「お母さんは人のことは氣にしないで、お休みなさい」と云つて行過ぎたが、自分の寢床へ戻つてからも、母親の監視が心の邪魔になつて、一層眠りづらかつた。

そして、明け方になつてやうやく熟睡に落ちたが、彼れの眠つてゐる間に、三人の女は下女を加へて、狹い臺所で賑やかに朝食の仕度に取掛つてゐた。互ひに田舍の副食物拵らえと都會の料理法との比較研究をしたり、田舍の味噌や梅干の製造法などを、お福が得意で說明したりした。そんなことをしてゐると、母親も昨夕の憂欝を忘れた。仙吉の起きるのを待つて、皆んなで朝餐の食卓に向つたが、母親は、不斷はお福や夏子に好意を有つてゐなかつたにしろ彼女等を前に据ゑて、自分だけ年長者としての扱ひを皆んなから受けながら、一しよに箸を持つてゐると、晴れ〲した氣持で食慾も進んだ。

「私は、伯母さんや仙吉さんのお家では、どんな風にして暮してゐらつしやるのかと、時々思つてゐましたのに、今度よく見せて頂いて、ほんとにいゝことをしました。日返りと極めてたものが一日延びて、家では、お父さんが怒つてるでせうけれど、でも、一年に一度もこんな氣儘をしたことないんですから、叱られたつて構ひませんわ。……今度は話の種が大變出來ました」

お福はさう云つて歸り仕度をした。もう一日延ばして歌舞伎座へお伴してもいゝと、昨夕云つたのは、それも何年目かに一度心に起つた彼女には珍らしい浮氣な出來心であつた。

「お絹の結婚の仕度で忙しいだらうから、お引留めしてもいけまいね」母親は名殘り惜しさうに云つた。

歸るとなると、お絹は時を急いで、夏子に停留所まで見送られて別れを告げた。母親は一しきり世帶話をして、これも夏子に電車まで見送られて家へ向つた。

夏子は二人を見送つて、やうやく昨夕からの重荷をおろした氣で家へ歸ると、

「あなたはそれで平氣でゐられて？」と、非難の言葉を仙吉に向けた。

「おれは昨夕から夜も眠ないで、映畫の臺本を考へてた」

「お絹さんといふ人、どんな女か知ら。お絹さんの妹なら、さう美しかないわね」

「姉妹だつて同じやうな顏してるとは限らないよ」

「あなたがみんなに惧まれてよ。あたし、卷添へにあつちやたまらない」

「ぢや、お前が義俠心を起して救出したらどうだ」

仙吉の戲談に夏子は刺戟されて、

「居所が分つてれば、あたし行つて連れて來てよ」

「居所はお絹に聞いて大抵分つてる」

「敎へて頂戴。……靑山の何といふ家？」

「本當に行く氣なのか」

「行きますとも」

仙吉は、夏子の意氣込みに當惑しながら、一旦思立つた彼女を壓えつけることの煩はしさが豫想された上に、お絹に拘はりをつけることは自分の興味にもなつたので、澤井何子の嫁してゐる筈の野村某の家を敎へてやつた。

「靑山南町の四丁目か五丁目かだが、番地はよく分らないよ」

のしやい」

「お前のいゝやうにしろ」

夏子が時間を潰して、身装を凝らして出て行くと、仙吉は結果を待ちあぐんでゐた。昨夕お絹を護つて間タクに同乗してゐながら、どうもなし得なかつたのに、夏子によつて、事件が意外に發展しさうなのを、天が我が映畫の立案を助けようとしてゐると、勝手な忘想をめぐらしたりしてゐた。

子供の意志を沒却させて、家長としての專横を恣まゝにして自省するところのなかつた丹三叔父も、老後に娑婆の苦勞を體驗するのだと、それを痛快視してゐた。「入江の家は親の仕付けが惡いから子供がみんな變なことになつてしまつた。おれの家は違ふ」と、頑固の表象のやうな鼻を高くしてゐたのが、今度はお絹のためにへし折られるのを面白いと思つてゐた。

待ちに待つてゐた夏子の足音が戸口に留つたのは、勤め人が勤めから歸つて來る時刻であつた。手間のかゝるほど、事件の發展が内容を豐かにする譯だと、勝手に極めてゐた仙吉は、夏子が一人ぼつちで玄關を上つて來るのを見て、まづ當てが外れた。彼女は、暑さに蒸れて、頭髮が崩れて顏面の装ひも剝げて、不様(ぶざま)な息をせか〱吐いてゐた。

「あなたは罪もないあたしに、一杯喰はせましたね。惡戲(いたづら)もいゝ加減になさい」と、彼女はだし拔けにいきり立つて、仙吉に迫つた。

「どうしたと云ふんだ?」仙吉は夏子の嫉妬を想像して、「何を誤解してるんだ」

「人を馬鹿にするにも程のあつたものだ。……あなたの兩親もあなたも、入江の家族は、揃ひも揃つて詰らない人ばかりね」

「何だと」仙吉の顔は火照(ほて)つた。「おれの兩親まで罵倒するのは怪しからんぢやないか。譯も云はないで」

「あなたの云つたことが戯談でないのなら、あなたもあなたのお父さんも正氣ぢやないのね」

「惡口はあとにして、譯を云へ譯を。……お絹には會つたんだらうね」

「あたし、馬鹿正直に青山ぢゆうを搜しちやつた。人一人助けようと、折角思立つて來たものを、中途で挫けちやならないと思つて、汗みどろで、足を棒のやうにして歩いたの。……いろんな人に頭を下げて警察にまで頼んで、捜當てるまでにどれほどな苦心をしたと、あなたは思つて？」

「そりや氣の毒だつたなあ！」

「あなたは夢でも見てゐたのね」

夏子は續けて惡口を吐いたために、いくらか心が鎭まつた。

「野村といふ人の家を訪ねて、事情を聞くと、あたし全く拍子拔けがしてしまつた。だつて、あの人は今朝(けさ)故郷(くに)へ歸つたと云ふぢやないの。腑に落ちないから、疑念晴らしに、昨夕からあたしの聞いたことをスツカリ話して、いろいろに訊ねると、そこの若い細君が面白がつてころげるやうに笑出したの。あたしの方で極りが惡くなつたの。あなたは旦那樣に騙(かつ)がれなすつたんだ。絹子さんは結婚前に親類や友達の家へお別れに來たと云つて、昨夕は機嫌よく遊んで、今朝早くお立ちになつたと云ふんですもの」

「ぢや、お前はお絹に會はなかつたのだね」

「無論ですとも。……澤井さんといふ野村の奥さんは、あたり前の奥さんで、嘘を吐いたり策略をめぐらしたりしさうな人ぢやないの。あの人、お絹さんを東京驛まで見送つて、プラットホームで握手して、結婚の幸福を祝して笑つて別れたと云ふんだから、お絹さんが親の家へ歸つて行つたことに間違ひないんです。時間を計つて見ると、お絹さんよりも一汽

言ふ二言目が早かつたぐらゐだから、今日迄も厚木に知れないで、絹さんの居るのを気にかけてゐるですもの。何でもないことに目
立てたあたし達こそ、よつぽどの間抜けだつたのよ」
「そんな筈はないが……」仙吉は、これだけは秘密にしてゐる四タ町上のお絹の態度と行為とを思浮べた。
「そんな筈はないと仰有るの？」夏子は仙吉の表情を見据ゑて、「あなたは、あたしに打明けないことで、お絹さんと込入つた關係があるんぢやない？」
仙吉は、自分の心に突進んで來る夏子の目を追拂ふやうに、「そんなことはない」と、慌てゝ力づよく云つた。
「ぢや、お互ひの疑念晴らしに、厚木へ訊合せて見ませうか。わざ〳〵訊合さなくたつて、お絹さんに間違ひがあつたら、先方から小石川へでも知らせて來るでせうけれど」
「さうだね。おれが手紙を書いて訊くことにしようか」
「賭けるわ。」お絹はふと心を躍らせた。「こんな場合に賭けきなや詰らない」
「また賭事か」
「今度は大きいのよ。芝居やシネマの御同伴のやうに安價なものぢやないのよ」
「だつて、おれには、今資本がそんなにないぢやないか」
「あなたは小石川のお家のお嗣世ぢやないの？ケチなこと云ひつこなしよ。それに勝つといふ自信があるなら、一つしかない首を賭けたつていゝでせう」
「お前が負けたらどうする？」
「あたしこそ、首でも何でも。……でも、實際問題として首のやり取りなんか出來つこはないんだから、そんな空な賭事は止して、あなたが負けたら、あたしの洋裝の費用を負擔なさい。此間ホテルのアーケードの支那人の店で見たものでもい

いの。そして、あたしが負けたら、この衣服一枚の着たつきりで、ここをお暇することを條件にするわ」

「それはどういふ意味だ？」

「言葉通りよ。あなたから永久にお別れして、埃だらけの街頭へ出て行く事」

「妙な條件だね」

「だつて、あたしには最も酷い條件ぢやないの？二年も主婦として生活してゐた家を、着たきり雀で出て行くんですもの。解職手當も恩給も貰はないで出て行くんだから、大きな犧牲ぢやないの。あなたの方の條件の洋裝の費用とは比較になりやしない」

「眞面目にそんな下らないことを云つてるのかい」

「眞面目でも不眞面目でも、實行したらいゝでせう。……あたしが身體を拭いて來る間に、問合せの手紙をお書きなさい」

夏子がさう云つて臺所へ行くと、仙吉は机に向ふことは向つたが、そんな賭事をはじめる夏子の心が疑はれた。この家を飛出さうとする機會を見つけてゐるんぢやないかと、先日うち漠然疑つてゐたことが思出されたが、それとゝもに、お絹の身の上はどうなつてもいゝやうに、興味が失はれた。それに、お絹のことは、打やつて置いても、厚木の家の誰れかから消息のあることは分つてゐるので、此方から訊合せるのは拙い所行のやうに思はれたが、あゝ云出した以上、夏子が一回にせつくことの煩さゝも豫想されたので、義務のやうに、端書に筆を執つた。當り障りのないお絹に宛てゝ出すことにした。

いや〳〵書終つたところへ、夏子は奇麗に顏を洗つて入つて來て、「お書きになつた？」と、端書を手に取つて、

「……御無事にお歸りになりましたか。お宅にはお變りはありませんかなんて、氣の利かない變な文句ね。でも、いゝ

ま、どうせ無事の事を見るやうなものだから——

夏子は直ぐ下女に手紙を托けてポストへ入れさせた。そして、野村の妻君の品定めなどして樂んだ。

「旦那樣はお勤めに出て、奥さん一人でお留守居してゐるの。下女も使はないで、つましく暮してゐるらしいのね。仙吉さんにはお絹さんを小石川のお宅へお訪ねした時、一二度お目に掛つたことがあると云つてゐてよ。大人しさうな奥さんだけど、小柄で貧相で、見栄のしない奥さんね。……さう云へば、昨夕お福さんは、東京へ來て見ても、いゝお婿さんやいいお嫁さんを取當てたところは何處にもなさゝうだと云つたでせう。世間見ずの田舍者のくせに生意氣ね。東京の生活を知りもしないで」

「あの人は無邪氣でさう云つたのだらうが、あしての親爺は、以前東京へ出て來た時に、東京者は、表べだけ派手にしてゐても、皆んな腹の中は苦しさうだなんて、皮肉を云つちや自分で得意になつてたよ」

「お福さんなんか、あんな服裝をして滿足してるのなら、苦勞はない譯ね」

夏子でさへ、お絹の上京が何の波瀾をも起さないで通過ぎたことを物足らなく思つてゐたのだから仙吉はなほ更さうであつたが、しかし、夏子から間接に聞かされた野村の妻君の話を、そのまゝ受入れられぬやうにも思はれた。

「それではあんまり勇氣ないではないか」彼れは、自分のせいで、物事を勇氣なく終らせたやうにも思はれて後悔された。

(六)

小石川の老主人入江啓助は、老婦が仙吉の家から歸つて來る前に、丸ノ内の會社へ出勤してゐた。重役といふ名前は有つてゐても、今は閑散な地位にゐるのであつたが、日々の出勤は怠らなかつた。家庭に蟄居してゐるよりも會社に出て何

かやつてゐた方が、心が明るくつて窮屈もしないでよかつた。同じ煙草でも、自分の家で吸ふよりも會社の椅子に腰を掛けて吸ふ方が味がよかつた。日本酒でも西洋酒でも多少は嗜んでゐたが、それも自分の家で飲むよりも、何處か外で飲む方がうまかつた。それは、老婦の萎びた手で注がれるよりも、若い軟い手でお酌をされる方が、飲み心地がいゝに極つてゐたが、彼れは有振れたごみ〳〵した食堂での獨酌をも、家庭の晩酌よりは快く思つてゐた。でも、老婦の相手なしの食事を思遣つて、晩餐は努めて家庭で採るやうにしてゐた。仕事に關係した宴會へ出席する時でも、自分の好みで家庭外での食事を企てる時でも、電話で老婦に斷はるだけの手數は厭はなかつた。をり〳〵は老婦の口に適ふ料理を折詰にして持つて歸つた。たまに、馴染の料理屋の女中などから「奥様思ひの感心な方」として、褒められるか冷かされるかしたこともあつたが、彼自身はさして奥様思ひの情味を感じてゐるのではなかつた。料理茶屋の主婦や女中頭などは、人物批評が鋭いと云はれてゐるが、皮相なところしか觀ないのだと蔑視しながら、彼れは、折詰をぶら下げて、笑つて受答へをすることがあつた。

その日も、彼れは、一日の役目を終つて、會社を退出する前に、自宅へ電話を掛けて、晩餐の仕度の無用を知らせた。そして、例の如く、「今日は變つたことはなかつたらうね」と、訊ねたのであつたが、

「變つたことは御座いません」と、今日は偶然電話口へ出て來た老婦が答へた。

「仙吉の家はどんな風だつた？」

「仙吉もこの頃は何だかソハ〳〵してゐまして、私もさつきから氣掛りでなりません。あなたが御自分で、今夜にでもお寄りになつて、様子をよく御覧になるとよろしいんですけれど」

「そのうち寄つて見ることにしよう」啓助は、昨夕仙吉に會つたことは云はないで、電話を切らうとしたが、老婦は、「ちよつとお待ちなすつて」と取掴まへるやうに急込んで、

「きのふのお客様は来たと申しましたか？」
あれはお絹だと、杉助は明らさまに答へてもよかつたのだが、神経が苛立つてゐたので「今お前には係はりもないよう、そんなことは帰つてからゆつくり話さう」と、答へきらない間に、老妓は、
「あなたはお隠しになつても駄目です。黒田に聞きました」と、噛りつくやうな声に云つた。
「まあ話は帰つてから。左様なら」と、杉助は、あたりを憚つて密かに云つて、電話を切つた。
彼れは、老妓の声が耳に残つてゐるやうで鬱陶しくなつた。昨夕は幸ひに、下女は使に出てゐて家にゐなかつたし、書生の黒田には堅く口留めして置いたのに、あの沈黙家の黒田が、お絹の来たことを老妓に洩らしたのであらうかと疑つた。
「お隠しになつてもと云つたあの口調は姪のお絹のことを指したとしては、少し烈し過ぎるので、黒田の奴、あるひはいやなお喋舌をしたのぢやないかと邪推された。すると、食欲も失はれるやうだつたが、しかし、約を守つて同年輩の同僚と、日本橋の上方料理へ行つて、簡單な飲食をすました。
飲みながらの話のうちに、
「これはまだ世間に發表しない内密の話ですが、××屋では組織を變へて食堂式に直して、ダンスホール見たいな演藝場をつくる計劃をしてるさうです」と、同僚は、さういふ社會についての早耳を誇るやうに云つた。
「時勢で仕方がありませんね。……食堂も便利でよう御座んすが、食堂で大勢が飯を食つてるところを見ると、殺氣立つてるんで、見てると恐ろしくなることがあります」
「それもさうでせうが、しかし、我々の學生時代の寄宿舍の食堂のことを思ふと、今の若い者は飯の喰ひぶりでも紳士的ぢやありませんか」
「左様。我々も賄征伐で暴れた經驗もないぢやないが、どうもあの時分の方が無邪氣だつたやうに思はれる」

今の若い者は飯の喰ひ振りまでも陰険だといふ啓助の持論が出て同僚を笑はせたが、この茶室じみた座敷で、凝つた御馳走をあさつて、小ざつぱりした女中のお酌で、過不及のない醉心地を味はひながら、若い者の陰険を罵つたのは、沈默家の書生の黒田が、自分の命を奉じないで、秘密の漏洩を試みたことを、心の中で憤つてゐたからであつた。

若い者の非難なら、同僚も、一も二もなく賛成であつた。

「飯の喰ひ振りは兎に角、若い者は迂濶に信用が出來ませんな。今の若い者はいろんなことを心得てるから調子がうまくつて、我々のやうな鈍物は、雜作なく手の中にまるめられてしまひます。今度も飼ひ狗に手を噛まれたので、一つどうして呉れようかと考へてゐるんです」

「それは御同様だ。私の家の玄關番も、主人の手へ噛みつきさうなんで油斷がなりません。氣の利かない、むつゝりやの方がいゝと思つて、側へ置いて使ふことにしたんですが、そのむつゝりが却つていけない」

「玄關番になら、私の保證してもいゝ男が一人ありますがね。あなたのお宅で使つて頂けますまいか」

「左様ですなあ。いゝ代りがあると、今ゐる書生は早晩追出してもいゝですが」啓助は無雜作にさう決心した。

「ぢや、代りに使つて頂きたいものですね。御都合のよろしい時に、當人に會つて御検分なすつて下さい」

「承知しました。あなたの保證さへあれば、會はなくつてもいゝ譯ですが」

「いや、人の保證ぐらゐ當てにならぬものはないのですから、御自分で試して下さい」

「それは、玄關の書生ぐらゐはどちらでもよう御座んすがね。自分の肉身とか縁者とかいふものは面倒なものです。追出して取替える譯には行かないので」

「私などは追出すよりも追出されない用心をしてゐなきやなりません。……」

同僚のこの言葉は、會社の地位に關係してゐるらしかつたので、啓助は苦笑して、話を外へ外らした。彼れは同僚と別

れた時、まだ時間があつたので、妻の言葉を思出して、円タクで仙吉の家へ向つた。自働車がその家の前に停ると、手土産の果物を買つた。

折角思立つて行つたのであつたが、仙吉夫婦は家にゐなかつた。

「何時歸つて來るか分らないか」と、留守居の下女に訊くと、

「御一しよに出ていらつしやると、お歸りは大抵遲くなります」と、下女は答へた。

啓助は失望したが、「兎に角一休みして行かう」と、ズン／＼上へ上つた。しかし、仙吉の部屋へ入るのは遠慮して、茶の間に腰をおろして、下女に茶を入れさせて、煙草など吸ひながら一しきり時を過した。下女に何か訊ねてもろくな返事の得られないもどかしさに、默つて若夫婦の生活について、心の中で自問自答を重ねてゐたが、さうしてゐるうちに睡魔が差して、コクリ／＼居睡りをつきだした。しまひには横になつて肱枕をして寢込んだ。

その樣子を下女は隙見して笑つてゐたが、暫くして散歩から歸つて來た若夫婦は、父親の睡眠を妨げないで、ひとりでに目の醒めるのを待つてゐるやうな態度で、その側に坐つた。

「お父さんも疲れてゐらつしやる」

「何しに來たのだらう。果物なんか持つて來てるのだから、小言を云ひに來たのぢやあるまい」

「あたし、眠れる父さんをはじめて見たのね。平和ない丶お老爺さんぢやありませんか、起きてゐらつしやる時は怖いやうだけれど」

「何も用事のある筈はないのだが……お絹のことか何かで家庭で言合ひをして家を飛出して來たのかも知れないよ」

「だつて、洋服を召してゐらつしやるから、社からお歸りの途中ぢやないの」

「家へ歸つて着物を着替える間がなかつたのかも知れない。……窮屈さうな寢樣だ。枕を當て丶蒲團を掛けておあげな」

「あなたは親孝行ね」

夏子のその言葉が、仙吉には皮肉に聞えた。孝行といふ言葉が小學校以來久振りに耳に觸れたやうだつた。

「あたしも、今お父さんの寢顏を見てると、いたくしくなつてよ。あなたはお父さんと同居して孝行してお上げなさいよ」

夏子は感傷的な聲を出してさう云ひながら、枕と毛布とを押入から出した。毛布は父親の裾の方へそつと掛けたが、枕を寢てゐる父の頭に當てがふのは躊躇されて、仙吉に目くばせした。

が、仙吉が手を出すまでもなく、父親は薄目を開けた。そして、二人の顏を見ると、ムックリ起上つて、「もう何時頃だ?」

「まだ早いです。……今日お母さんにお會ひになつたのですか」

「いや、まだ會はないよ」父親は目をこすりく

「おれも意氣地がなくなつたものだ。いつの間にか眠つてゐた。……さあ、もう歸らなきやなるまい」

「何か御用がおありになるんぢやありませんか」

「ウ、ン。話す事がないでもなかつたが、まあ、今度にしよう、……お前もよく考へて見て呉れ」

父親は、それだけ云つて立ち上つて、夏子の引留めの言葉にも取合はないで。玄關へ出た。さつきのだらしのない寢顏とは違つて、態度がしやんとしてゐた。

「それから、黑田には近日暇をやらうと思つてる」と、思出したやうに言捨いて、何故かとの仙吉の問ひには答へないで外へ出た。

「あたし達が家にゐなかつたから、怒つてゐらつしやるのか知ら」

「さうぢやないよ」

「あたし、あなたのお父さんに叱られたつて何とも思つてやしないけれど」

夏子が面憎いまでに傲然として云ふのを、仙吉は耳目に觸れると、圓タクの中のお絹の色氣のある目付が思出された。そして、自分が天與の機會を逸したことが殘惜しかつた。

「お父さんは、あの卒氣ない身振りで、あたしに當つてるつもりなのよ。あたし、老人は誰れをでもいたはつて上げてるのに」

「おれには、親爺の心はよく分つてる」仙吉は重つ苦しい聲で云つた。

「それは、親子だから分りますさ。……よく考へて見て呉れと仰有つたのは、何を考へることか？」

「さあ、何だかね」仙吉は空返事をして、さつきの後悔を續けてゐた。あの時、お絹の心と手を握つて置いてゐたなら、夏子の身がどうなつて行かうとも、世の中が大丈夫であつたのにと、自分に勇氣のなかつたことが腹立たしかつた。

「お父さんはあたしのことを云つたのね。お母さんに知恵をつけられて、あたしのことをよく考へろと、わざ〳〵あなたに注意しにいらしつたのよ。そんな暗號を打つても、あたしにはよく分つてゐてよ」

「暗號の解釋はおれのは少し違ふよ。親爺は自分が老衰して意氣地がなくなつたから同居して呉れといふ意味で、あゝ云つたのぢやないか」

「どつちでも同んなじことよ」

「まるで意味が違ふぢやないか」

「さうか知ら。……暗號の意味を考へるのは面倒くさい。……そんな面倒くさいことを考へるよりも、厚木からの返事を待つてる方が張合ひがあるわ」

夏子は叩きつけるやうに云つた。

（七）

その翌朝、厚木からお福の出した端書が屆いたが、それは仙吉の問合はせに對しての返事ぢやなくつて、お福が自發的に出したものであつた。

「昨夜はたいへん御厄介になりました。父に叱られました。いろ〳〵申上げたいことも御座いますが、他日改めてお手紙を差上げることにいたします。皆樣へよろしくお傳へ下されたし」と、端書には簡單にしるされてあつた。

「それ御覽なさい。あなたの負けに極つた。……お絹さんの家出で騷ぎがあつたのなら、何とか云つて來たに違ひないわ。變つたことはなかつたのよ」

「まだハツキリ極められないよ」

「そんな無茶を云つちや駄目。兜を脫いで降參なさい」

夏子の勝ちほこるのを、仙吉は口惜しがる風をしたが、腹の中では、自分が負けたゝめに、夏子の洋裝費の支出くらゐで、平穩無事に結着がつくので安心してゐた。

「しかし、どうも不思議だ。世の中はさういふものかな」

「あなたは詰らないことを不思議に思ふのね。あたしはお絹さんといふ人に會つたことないけど、お福さんのやうな人の妹なら、田舍のお百姓のところへお嫁に行くのが相當してるぢやないの？」

「さう云つてしまへば話にならんな」

「負けたのがそんなに口惜しいのなら、あたしが負けたことにして上げませうか。さうしたら御儉約になつていゝわね」

「なに、約束の實行は、今日か明日のうちにでも實行するさ」
「どうぞ徹底な御實行をお願ひしますよ」
「へゝゝ」
「へゝゝ」
　二人は、顏と顏とを見合せて笑つた。
　これで一篇の結末をつけるのを、仙吉は惜んで、一工夫を凝して云つた。
「丹三叔父は、この頃祝ひ事があつても、質素主義を名義にして、おれの家のものを招かないんだから、今度の結婚式にも呼ぶかどうだか分らないが、おれはどうかして式に列したいと思つてゐる。行けるやうに道がついたら、お前も行つちやどうだ？　新調の洋服姿で」
「田舍の結婚式へ？」夏子は意外な話に好奇心を起した。「でも、あたしが招待される筈がないわ」
「おれだつてさうだが、若し兩親の名代として、おれ達が出席してもいゝやうに話がついたら」
「さうね。行きたくないこともないわ」
「おれは、あの花嫁がどんな顏して祝言の席へ坐るか、よく見たいと思つてる」
「招待されたければ、今からお祝ひを送つとかなきやならないでせう」
「それは小石川へ頼んどけばいゝ。親爺があの家を嫌つて るのは幸ひだ。母を說付けて、名代になつて行くこととして、祝ひ物は、おれの名義で送らせとくことにしよう」
　夏子の洋風の服裝に要する費用は父親の名前を保證にする負債で支辨していゝので、厭な思ひをして急いで母親にせびつたりなんかしないつもりであつたが、結婚式出席のことについては、母親を說落す必要があつたので、その翌日仙吉は

夕方の散歩時間を利用して、小石川の本宅へ行つた。

玄關脇の書生部屋には、薄汚い黒田とはちがつた、頭髪の手入れのいゝ、生つ白いモダーンな顔した、新しい書生がゐた。仙吉は反感をもつて一瞥して、茶の間へ通つたが、そこには誰れもゐなかつたので、

「お母さんは何處かへ行きましたか」と、後戻りして書生に訊くと、書生は、この無斷の侵入者が此處の一人息子であることを察して、恭しく手を突いて、

「私は佐川健太郎と申しますが、今日からお宅に置いて頂くことになりました」と、自己紹介をした。

「さうですか。僕は、仙吉です」と、仙吉は入口に立つたまゝ、ちよつと頭を下げて、「母はゐませんね」と、再び訊ねた。

「御主人と御一しよに、さつきお出掛けになりました」

「散歩に？　珍らしいな」

仙吉はさう云つて、書生部屋の入口に蹲んで、佐川の身の上をいろ〱訊糺してゐたが、そこへ意外にも、黒田が外からぬつと入つて來た。

「君はこの家を出ることになつたさうだね」と仙吉が何氣なく訊くと、

「忘れ物があつたから取りに來ました」と、黒田は無愛想に答へた。そして、佐川に譯を話して、押入から新聞包を出して持つて歸らうとしたが、仙吉は、

「まあ、話して行きたまへ。僕も訊きたいことがあるよ」と云つて、黒田を茶の間へ連れて行つて、

「君はどうして此處を出ることになつたんだね」と訊ねた。

「僕には理由がよく分りません。御主人に御都合がおありになつたんでせう」

「君が親爺を怒らすことを何かやつたんだらう」

「さうかも知れません」

「隠さないで話したらどうだね」

「私が御主人のある秘密を知つてゐることが御主人のお氣に障つたんでせう」

黒田は陰鬱な顔に冷笑を洩らして云つた。

「ある秘密？　會社のことかね」

「いゝえ」

「ぢや、何だね。僕にあかしたらどうだ？」

「云つたつていゝだらう。僕は君の不爲になることはしないよ」

「……」黒田はなほニヤ／＼笑つてゐた。

「私があなたのお父さんの御別宅を知つてるもんだから」

「御別宅？　變んなことを云ふ。御別宅と云つて、妾宅のことでも云ふのか」

「へゝえ」黒田の笑ひは小憎らしかつた。

「出鱈目を云つちやいけない。親爺にそんなものがあるものか」

「……」

「何處にそんなものがあるといふんだ」

仙吉は責め寄つたが、相手が何とも答へないので焦立つた。父親に隠し女なんかゞあらうとは豫想しなかつたのだが。

それが事實であらうとなからうと、假渡を含んでゐるやうな黒田の面付に、仙吉の自尊心はいちじるしく傷つけられた。

そして、黒田が返事をしないで座を立たうとするのを見ると、仙吉は、「默つて行つちやいけないよ」と叫ぶとともに、發作的に手を伸して、彼れの腕を掴んで引留めた。

「何をするんだ。僕はもう此處の書生ぢやないんだ」

黒田は相手の手を振離して、相手が追縋らうとするのを、勢ひよく突飛して、さつさと出て行つた。佐川は襖の間から覗いて呆氣に取られてゐた。

仙吉の顏には血の氣がなかつた。……間もなく、彼れは悄然として家を出て、本郷通りの方へトボ／＼と歩いて行つた。その折、彼れの兩親は、連立つて散歩した歸りに、仙吉と擦れちがつたのだが、どちらも氣がつかなかつた。

仙吉は、彼れの頭の上へ天から石が落ちて來たやうな思ひも染めない災難に挫かれて、黒田を憤る力さへなくなつた。歸つて夏子に話す氣にもなれなかつたので、當てもなく、町から町を歩いてゐた。そして、先日來の事件が、自分の工夫を待たなくつても、黒田によつて、自から結末がつけられたやうに、思ひたくもないことが思はれて仕方がなかつた。

（八）

「お前はなか／＼足が達者だ」

啓助は、茶の間で胡座を掻いて、一服吸つて云つた。

「さうでもありません。隨分疲れました。自働車や自轉車が危くつて、足よりも頭が疲れましたよ」

老婦も腰をおろしたが、二人は互に話したいことを話盡くしたと云つたやうに、向ひ合つたまま暫く默つてゐた。

やがて、啓助が二階へ上つて行くと、それを待つてゐたやうに佐川が、後から上つて行つたので、

「どうかしたのか」と、啓助は振向いて訊ねた。

「お留守に御子息おいらつしやいました」佐川は事ありげに聲を潜めて云つた。
「何か言置いて行つたのか」啓助は早くも怯えを覺えた。
「何も仰有らなかつたのですが……」
佐川は「御別宅」の件だけは拔かして、仙吉と黑川との爭ひを報告したが、すると、啓助の顏は見る〳〵變つた。
「君はその喧嘩をぼんやり見てゐたのか」と叱りつけた。
佐川は答へなかつたが、玄關番としての最初の日から任務を果さなかつたことに心を痛めた。
「黑川が仙吉を蹴飛ばして亂暴をして行つたと云ふんだね。まあいゝ。すんだことだ」啓助は自分を宥めるやうに云つて、佐川を手眞似で、あちらへ行けと命じたが、ふと思出したやうに、「しかし、そんな話は奥さんにしない方がよからう」と、注意をした。
「二人の兄に似た仙吉だ。黑田との爭ひも、おれには云はないで、自分獨りの胸に收めて神經を病んでるだらうか。……おれの子は三人が三人とも、どうしてかう意氣地なしなんだらう。おれの後をしつかり嗣いで行く奴は、一人も生れて來なかつたのか
彼れは、長男の變死の樣と次男の病死の樣とが、新たにあり〳〵と目のさきに浮んでゐるやうな氣がした。それとゝもに、仙吉の姿までも、死相を帶びて彼れの前に現はれてならなかつた。
その時、階子段の足音がしたので、心を見られぬやうに泰然と構へてゐると、老婢は一通の手紙を持つて上つて來た。
「厚木から招待狀を寄越しました。二十日に式があるから、二人で列席してくれと書いてありますよ」
「それで、お前は出掛ける氣になつてゐるのか」啓助は、渡される手紙を手に取ることは取つたが、一瞥したゞけで、不快なものを手にしたやうに、直ぐ下へ置いた。

「私達を呼んで呉れたのは、先方に好意があるんですからね」

「ぢや、お前は行つたらよからう」啓吉はあたり前にさう云つたゞけでは氣がすまなかつたので、「他所の婚禮がお前には面白いのかい」

「あなたも詰らないことを仰有る。面白いから式へ出る譯ぢやありませんよ。私も此間の晩お絹に會つてたら式に出なくつても氣休めがついたかも知れなかつたのですけど、一人でゞも行つてやりませうよ。あの子の一生の大事なことですから」

老婦はさう決心して、それから、丹三の三人の娘のことをはじめに、自分の若かつた頃のことなどを話題としてゐたが、しまひには、例の駈落者の話を持出した。

「しばらくその話を聞かなかつたね。縁喜のよくない話だ」

「……曾祖父は、男のお客を鮎釣りに誘ひだして淵の中へ突落さうとするし、曾祖母は女のお客の咽喉を草刈鎌で搔切らうと企んだのですつて。どちらも手筈が狂つて、人殺しは出來ずじまひだつたのださうですけれど、それからは、曾祖父夫婦の睚み合ひがはじまつて、二人は敵同士が同じ家に住んでるやうになつたんださうです。夜も氣を許して眠ちやゐられなくなつたのだから、因果なものぢやありませんか。……その子もその孫も」

「もうそんな話は願ひ下げだ」

啓助は激しく遮つた。そして、二人は互ひに無意味な笑ひを洩らした。

一周忌

久保田万太郎

□

おきく。　若い未亡人　（二十七八）

おゑん。　おきくの姉　（三十六七）

富蔵。　おゑんの夫、魚商（四十一二）

川本。　保険勧誘員　（三十六七）

□

現代

□

浅草

……八月のはじめの曇つたとも晴れたともつかない午後（一時前後）——川本、肩をつかひながら熱心に稽古つてゐる。おきく、しづかにそれを聞いてゐる。——窓に朝顔の鉢がならんでゐる……

（……かの女の夫にわかれたあとの假住居で、かの女の義理の仲のきやうだいの店「魚富」とおなじ地つづきの露次の中にある。狹いがしかし、器用に、手勝手よく出來てゐる。一ト目みて、かの女の、つゝましく、心弱く日々をおくつてゐるさまの感じられるなかで、ならんだ諸道具の、以前の榮耀を心なく語りがほなのがさびしい。）

川本。と、あなた、そのさなかで鶉の椀と鯛のさしみが喰べたいといひ出したぢやアございませんか、病人が……

おきく。…………？（しづかに相手の顏をみる）

川本。これには弱りました。——どこもかも灰燼になつてしまつた東京で鶉の椀。……無理といつてこんな無理な注文はありません。——が、折角病人のさういふものを……それももう助らないと決つた病人のさういふものを、兄さん、そんなことをいつたつて駄目だ。……とはいへません。——人情で、これ、さうはいへません……

おきく。…………（しづかにうなづく）

川本。何とかして喰べさせたい。——さう思ひました。——さう思つてさがしました。——人にもたのみ、自分でもはうばう心當りといふ心當りを片ッぱし聞いてあるきました。——ありません。——どこへ行つてもいけません。が、これはしかしさうあるべきが當りまへで、何としたつてまだ世間は、すいとんの時代からやつとライスカレーの時代になつた……かならなかつたかの時分だつたんですから……

おきく。…………………（寂しくわらふ）

川本。で、とう〴〵もう思案に盡きたとき上ツと人にいはれたのが雑司ケ谷の……雑司ケ谷のあの鬼子母神の境内でです。——なるほどあすこへ行つたらあるかも知れない、さう思つてすぐつかひを出しました。——と、また、さうなるとそれからそれいろんな知慧の出て來るもんで、岡でもこれ、どツか大阪ずしをあたつてみたらいゝ、何とかみちがつく。……とさうは案じのついたものゝ、一體大阪ずしといふものがさらにさうはう〴〵にあるもんぢやアごさんせん。——どツかにあるだらうかしかし、燒けないところで……さういふと近いところですぐ本郷にあるといひます。——すぐにそれから出かけました……

おきく。…………………

川本。すツかりわけをいつて何とかなるまいか？——さういふと主人らしい肥つた男が出て來て、しばらくだまつて考へてゐましたが、麹町のかういふところにこれ〳〵いふ者がある、店は小さいがいろんないゝ得意をもつてゐる、そこへ行つたらことによると手に入るかも知れない。……さういつて親切に地圖まで書いて敎へてくれました。——禮をいつてゲートルを卷直し、すぐにその足で行きました、麹町へ……

おきく。…………………

川本。なるほど店は小さいが大したけんしきの者やです。——入つて行き、そこでまたわけを話し、本郷のこれ〳〵いふすしやから聞いて來たといふと、ようがす、分けて上げませう。病人さんの喰べる位だつたらどうにでもなります。……谷川にさう請合つてくれました。——が、今日といふことには行かない、明日來てくれ、ちやうど明日何さま……と かいひました。有名な華族です……の御座敷へ御注文で納めるのがあるからそのなかで何とか工合しよう……

おきく。…………………

川本。……われ〳〵平民の罐詰さへまんぞくに喰へないといつてゐるなかで、そんな者、どこからいゝえ持つて來るのか知らないが贅澤にもホドがある、と、あとではまアぐづ〳〵いつたものゝそのときはやれうれしや、まアよかつた……これで病人のいふことも聞いてやれた。――ホッとしました、實際……

おきく。………………（しづかにうなづく）

川本。で、喜んでうちへ歸ると雜司ケ谷へ行つたつかひも歸つて來てゐて明日ならそのはうもお間に合ひいたします。――どつちでも一ト品あればいゝ。……一ト品でも間に合へばあとは何とでもいつてごまかす。……さう思つてゐたのがちやんとさう兩方……

おきく。（しづかに）お喜びなさいましてせうねえ、さぞ……

川本。（うなづいて）喜びました。――あの强情な、もの喜びといふものをこれッぱかりもしたことのない兄貴が、有難い。とんだ無理をいつてすまなかつた。……眼に一ぱい泪を溜めてしみ〴〵さういひました。……もつて生れたわがまゝでさうはいつたものゝ、とても駄目だ、そんなことをいつてもはじまらない。……自分でもさう內々あきらめてゐたんだらうと思ひます。――なるべくかくして聞せないやうに。……東京中がそんな灰燼になつたなんぞいつたらどんなに驚いて病氣がすゝむか分りません。――だから、伏せて〳〵、それこそはじめのうちは日本橋と深川にあつた家作でもいゝ鹽梅に助かつた位なことをいつてゐたんでしたが……

おきく。でも、お上りなれましたか、その……？

川本。さしみのはうは三切やう〳〵でしたが、吸物のはうはあれで半分も喰べましたらうか？……あとで、附いてるものに、しきりにうまかつたといつてゐたさうで……

おきく。でも、それでしたら。――はう〴〵さう御苦勞なすつておさがしになつた甲斐がおありでございますわ。

川本。(わざと聲を落して)そのあとしかし三日經つて亡りました。
おきく。(しづかに)三日……
川本。その弱つてた體で咯血したからたまりません。
おきく。………………
川本。しかしそのはうが當人にしても仕合でした。――どうせさきの分つてる體なら、あなた……
おきく。……
川本。(急にまた快活に)……ところがこれは……あとになつてこれは分つた話なんですが……
おきく。……?
川本。その、いゝえ、鶉の椀。……病人のその喜んで喰べたのは鶉ぢやアなかつたんで。……鶉ぢやアなくすゞめだつたんで……
おきく。すゞめ!
川本。つかひに行つたものゝ才覺で、折角さう雜司ケ谷とまで知慧の出たものを、そこにも矢つ張なかつたといつて素手で歸つたらさぞがツかりするだらう。それよりも相手は病人だ、さういつたつて喰べるかどうか分つたもんぢやアない、氣休めになればそれでいゝんだ。……それなら何も鶉でなくつたつていゝ、鶉の代りにすゞめだつていゝ、すゞめを持つてつて鶉だといへばそれでいゝ……
おきく。……
川本。さうなんで、實際。――いはれてみればその通りなんで。――だからあとで、すまないことをしたとその男の詫びて來たとき、そんなこたアない、病人はそれで喜んだんだ、鶉と思つて喜んで喰つたんだ。……なりやそれでいゝぢや

アないか。……もし、正直に、矢つ張さがしたがなかつたといつて君に歸つて來られたらそれこそこつちの立つ瀬のなかつた……

おきく。……

川本。といつてさう觀はいつたやうなものゝ、考へるとまた、食道樂の、あれほど以前贅澤ばかりいつてた人が……春日がどうの、浪花家がどうの、このごろの八百善のものなんぞ喰はれたもんぢやアないのと、そんな始終、利いた風なことばかりいつてゐた兄貴が鶉とおもつてすゞめを……

おきく。……

川本。いくら耄けたからといつて思へば可哀さうな。……とんだところで兄貴も一生の總勘定をつけられました。——いゝえ、はじめつから、ものゝ味のほんたうに分るやうなそんな人間ぢやアなかつたんで……（わらふ）

おきく。………………（眼の遣り端を失つた感じ。）

川本。いや、これは……（おもひだしたやうにいまゝでつかつてゐた扇をたゝむ。——それと一しよに居住ひを直してまじめになる）とんだつまらないおしやべりを……（まへと違つたさまに再びわらふ）

おきく。いゝえ……

川本。つい、どうも、古いお馴染だと思ふと勝手が分つて稼業を忘れます。——この間も、實は、大阪町の淸洲家さんへ上つて稼業そつちのけに二三時間。……むかしのあの強羅行きの話なんぞ出たもんですつかりいゝ心もちにおしやべりしてしまひました。——しかしあの淸香さんといふ方、六七年ぶりでお目にかゝつたんですが、ちッとも以前とお變りありません。——驚きました、お若いのに……

おきく。お綺麗な方は、矢つ張、どこかお違ひになります。

川本。いゝえ、けど、それとは反對に駒代さんはすつかりお老けになりました。――老けてすつかりもつともらしくなつてしまひました。――驚きました、これにも……

おきく。まアそんなにも？

川本。あ、御存じぢア？

おきく。まるで、わたくし、どなたにもお目にかゝりませんから……

川本。それは、また……？（おきくの顏をみる）

おきく。清香姐さんにはいつか……といつても震災まへ電車の中で一度お目にかゝりましたけれど、外のむかしのお友だちには機台がなくつてどなたにもお目にかゝりません。――いゝえ、無精してわたくしがどちらへも出ないもんでございますから……

川本。（やゝ、また、はじめのやうなとりなしで）それア、いゝえ、清香さんにもうかゞひました。――すつかりもう貞淑な奥さんに……

おきく。いゝえ、そんな……（しづかに外らす）

川本。清香さんでもしかし、あちらではよく御存じで。……實はこちらへ上つたのも、ありやう申すと清香さんが知恵をつけて下すつたんで。……番地は知らないけれど、小石川の傳通院のそばへ行つて訊けばすぐ分るさうだ。――それから、すぐいゝことをうかゞつたと思つて金富町のお宅のはうへ……

おきく。あら、あちらへいらして下すつたんですか？

川本。あれで、さア三日位さがしました。――あの近所、金富町から竹早町にかけてうそをいへば一けん〳〵聞いてあるきました。――が、どこにもそれらしいお宅はありません……

おきく。小石川の宅は昨年の春に引拂ひました。

川本。……といふことがそれからそれとたぐつてやつと知れました。――森田さんならいま淺草のかういふところにおいでになる。……それからまたこつちをさがしました。

おきく。おひすみませんでした、それは。――いえ、主人が亡くなりましたのに一人でそんな……

川本。いゝえ、あとになつてそれも分つたやうなわけで。――ちツとも存じませんでした。――とんだこツて、しかし……

おきく。いえ、有難う存じます……

川本。よツぽどしかし長くでもお煩ひに……？

おきく。いゝえ、寢みましたのはほんの三日……

川本。三日？――それは、また……

おきく。…………

川本。兄貴のやうに半年も一年も寢られてもこまりますが、三日とはまたあんまりアツケない……

おきく。まるでもう夢のやうな……

川本。さうでございませうつて。――しかし去年の……昨年のいつ……？

おきく。八月でございます。

川本。八月？――と、今月……？

おきく。ちやうど今日がその一周忌にあたります。

川本。（やゝ狼狽て、）と、今日……？

おきく。お熱いときでもあり、取越して、先月みなさんにお寺へは来ていたゞきましたが……

川本。(わけもなく感心したやうに)さうでござんしたか。――それアしかし……

おきく。…………………

川本。(急に立直る)が、まア、それはそれといたして。――いかゞでせう?――いかゞでせう、一つ?

おきく。でも……

川本。いゝえ、たんとのおねがひはいたしません。――五千圓ばかり。――いかゞでせう、五千圓だけ?

おきく。とてもそんな……

川本。ほんとなら、いゝえ、一萬圓とおねがひいたしたいところなんですが、今度はまア突然ではあり、御緣つなぎといふかたちでとりあへずまアそれだけ、……

おきく。…………………

川本。うち明けたお話、濟介さんにも駒代さんにも三千圓御無理をねがひました。――すれば、あなた、こなたでどうしたつてその位は……

おきく。……………

川本。無論それは外の會社との御契約も……

……と、そのとき、階子段の下からおゑんがおきくを呼ぶ。

おきく。(それにこたへて)はい……(川本に)すみません、一寸……(そのまゝ立つて階子口へ行く)

おゑん。…………（階下から何かいふが聞えない。）

おきく。えゝ。――いゝえ……

おゑん。…………（何かいふが聞えない）

おきく。えゝ。――えゝ、かまひません……

おきく、もとの座にかへる。

川本。あひすみません、お忙しいところを………

おきく。いゝえ……

おゑん、階下から上つて來る。

おきく。こつちへ、姉さん……

おゑん。えゝ、有難う。――御免なさい　ずん……（川本のわきを通つておきくのそばへ來る）

おきく。姉さん、こちら川本さんと被仰つて、以前いろ／＼あたしのお世話になつた方です。

おゑん。あゝ、さう……

おきく。（川本に）姉です、わたくしの………

本。あゝ、それは。――わたくし、川本。――こちらの奥さんには古くから御贔屓にねがつてをります。――どうぞよろしく……(手早く内衣兜から名刺入を出しておゑんのまへに一枚さし置く)

おゑん。(それに手も触れず、いたつて冷かに)どうぞよろしく。……(そのまゝおきくのはうを向いて)どうしたの、お前さん、行かないの、お寺へ？

おきく。いゝえ、行くんですわ。

おゑん。行くんなら行くやうに、さつさと仕度しなかつたら……何ていつて、お前さん、昨夜？

おきく。えゝ、ですけれど……

おゑん。いくら先月法事をしてしまつたからつて、祥月に、お前さん。……必と、今日だつて、外の人たちはみんな早く……

おきく。えゝ、ですから、よつぽど朝のうち行つてしまはうかと思つたんですけど。――それぢやア、でも、折角姉さんが一しよに行つて下さるつていつたのに……

おゑん。それならさうのやうに、昨夜あのときさういつてくれゝば、朝だつてあたしはかまやアしない。――いつそ、それならそのはうが涼しくつてどんなによかつたか知れやアしない。

おきく。えゝ。

おゑん。御覧な、折角いゝ塩梅に曇つてゐたのがだんだんまた青い空がみえて来たぢやアないか。(窓のはうへこなし)

おきく。ほんたうに……

川本。(やゝ間のわるくなつたかたちに)どこかお出かけのところでしたか、これは？

おきく。（ごく弱つた氣に）え丶、い丶え。……いま申したやうに、今日、主人の一周忌ななので……

川本。あ丶……

おきく。一寸、それで、うちのものでこれからお寺詣に……

川本。いや、それは。――とんだお邪魔を……

おきく。い丶え……

川本。また上ります。……さういふお忙しいなかでしたら、い丶え、そのうちまた……改めてまたうかゞひます。（といふと一しよに出しかけた書類を鞄の中にしまひかける

おきく。（いたはるかたちに）さうでございますか？――折角しかしおいで下すつたのに……

川本。い丶え、出直します。――また……

おきく。わたくしの一存にもまゐりません。――よく、また、義兄とも相談いたして……

川本。一つさういふことに、どうぞ。――御無理をおねがひしても決して御迷惑になるやうなことは……

おきく。い丶え、さういふことは……

川本。これといふのも、實は、今度會社から責任をすこし持たせられましてね。――どうしてもそれだけはこしらへないと。……さうしないことには、これ、男の立たないことになるんで。……そこが宮仕への辛いところで……

おきく。…………

川本。では、これで今日はおいとまいたします。――いづれまたうかゞひます。――（おえんに）失禮いたします。

おえん。（にべもなく）御免なさいまし。

川本、いさゝか逃れ去るといつた感じに……といふのは、おゑんのそこへ出て來たあと、急にかれは氣ぶッせいなやうな恰好になり、いふことのうへでゝも、いつとなし、幕のあいたときみられたやうな「自由さ」「なめらかさ」をすつかりといつていゝ位失つたかれである……階下へ下りかける。——おきく、とも〳〵送つて立つ。

川本。（ふり返つて）あ、もう……

おきく。えゝ……

二人、階下へ行く。

間。

おゑん、疊のうへに殘された名刺を取上げてみる。——あり〳〵と輕侮のいろ。——すぐまた抛りだす……

間。

おきく、階下からかへつてくる。

おゑん。なアに、おきくさん、あれ？

おきく。え〻？

おゑん。い〻え、あのね？

おきく。保険屋さんですわ。

おゑん。さうのやうだけど（名刺へこなし）――お前さん、ほんとうに知つてるの。以前から？

おきく。え、稼業してゐる時分、よくみえた中橋の唐物屋さんの弟御さん。……始終兄さんと一しよにみえてゐましたから……

おゑん。道理こそへんに馴々しい奴だと思つた。――どうしてそれが保険屋なんかになつたの？

おきく。い〻え、矢つ張震災でお店を。――それにはじめて今日聞いておどろいたんですけど、その兄さんといふ方も、震災まへからずつとわるくつて、震災後とう〳〵いけなかつた。……随分丈夫さうな、血色のい〻、わたしなんぞのお目にか〻つてる時分にはとてもそんな五年や十年で亡る方のやうには思へなかつたんですけど……

おゑん。何の病氣？

おきく。肺がわるかつたらしいんですけど……

おゑん。それぢやア仕方がない。――けど、いくら丈夫さうにみえたつて、血色がよくつたつて、さういつたらお前さん、森田さんだつてあんな……

おきく。え〻……

おゑん。どうしたつて順に行けばお前さんのはうがさき。……お前さんを知つてゐる人はみんなさういつてゐたんだよ、かげで。――だつて森田さんはあんない〻恰幅だつたのにお前さんのはうは絲のやうに。――い〻え、ほんたうに、一

時はあれでどうなるんだらうと思つたよ。
おきく。（しみ〴〵と）分らないもんですわねえ、ほんとうに……
おゑん。全くだよ、それは。——分らないもんだよ、ほんたうに。——だつてその頃のやうに痩せこけたお前さんがこのごろはまたすつかり……み違ひるやうにすつかり肉がついてしまつたんだもの……
おきく。さうですかしら？
おゑん。分らない、自分で？
おきく。それは一トしきりからみれば幾らか……（帯のあたりを撫でてみる）
おゑん。いゝえ、ふとツて來たばかりでなく、膚のいろでもつや〳〵して。……すつかりまた上つたよ、女ぶりが……
おきく。（しづかに）いやですよ、そんな……
おゑん。いゝえ、お世辭でなく。——一ばんいゝことは生き〳〵して來たこつたよ。——ないやうにみえても矢つ張あつたね、苦勞が……
おきく。えゝ。
おゑん。いゝえ、森田さんと一しよのとき。——大ぜい奉公人もつかひ、大きな家に住んで、それこそ傍目には何不自由なく暮してゐたやうにみえたものゝ……
おきく。それは、姉さん……
おゑん。結句、森田さんは、お前さんを大切にしなかつたんだね。
おきく。（寂しく）さうなんです……
おゑん。けど、いゝわ　ほんたうに。——その體になれば大丈夫。——それなら、もう保險なんてそんな無駄なものつひ

るこたァないわ。

おきく。えゝ。

おゑん。五千圓だの一萬圓だの。――ばか〳〵しい、そんな。――足許をみるにもホドがあるわ。

おきく。あら、聞いてゐたんですか、姉さん？（おゑんの顔をみる）

おゑん。（腹の立つやうに）聞いてゐたわ。――すつかり、あたし、聞いてゐたわ。

おきく。ぢやア、姉さん、あのときあたしを呼んだときみえたんぢやァなかつたんですか？

おゑん。いゝえ、あたし、あの奴のあとからすぐ來たのよ。

おきく。え、あとから？

おゑん。いゝえ、あの奴、こゝへ來るまへうちの店にゐたのよ。――うちの店でお前さんのことを、根掘り葉掘り聞いて行つたのよ。

おきく。あら、さうですか？

おゑん。知らないのよ、あの奴、あたしのうちとお前さんのうちと何うなつてゐるのか。――だから知らぬが佛で、いろんなこと。……いろんなことはいゝけれど、もと段町にゐたことがおりやァしなかつたかの、かういふ名前で出てゐやアしなかつたかの、淸元がうまかァないかの、そんな下らないことまでいふもんだから店の人たちはみんなビツクリして。……いゝえ、みんなへんな顔をしてしまつたぢやアないの。

おきく。………

おゑん。途中からかへつて來てうちの人の惱るまいことか。――知らねえ、うちぢうやアそんなこたア分らねえ。……聞きたけれぱぢかにぶつかツてきいたらいゝだらう。――ふざけやアがつて、何をいやアがる。……大したもう權幕だも

んだから、驚いて、あの奴……

おきく。（腑に落ちたやうにふつと）あゝ、それで。——それで跡つけて行つたんですわ、あの人……

おゑん。え、！

おきく。いゝえ、あの人、姉さんの顔をみたら急に疑りましたもの。——そわ〳〵し出したやうな固くなつたやうな。——可笑しいと思つたんです……

おきく。ですから……

おゑん。知らない顔はしてゐたけど、あたしだつてゐたんだもの、店に……

おゑん。薄ツ氣味のわるいへんな奴だ、あんな奴何をするか分らない、いつてみろ、すぐに。——さういはれてすぐ來たのさ、あたし……

おきく。すみません。

おゑん。階子段の下にゐて、いま出ようか、いま出ようかと思つてゐるうちに鋏だの剃刀だのとさがしてあるく話がはじまつたぢやアないか。——それぢやア出ようにも出られやアしない。——こまつちやつた。あたし……

おきく。すみません、ほんたうに……

おゑん。けど、また來るよ、あのね。——氣をつけたはうがいゝよ。

おきく。えゝ、けど、そんな惡い人ぢやア……

おゑん。——惡かアないかも知れないけど圖々しいよ。——圖々しいことは圖々しいよ。——だから、あたし、つけ〳〵あゝいつてやつたのさ。

おきく。（わらつて）ビックリしましたわ、必と……

おゑん。いゝえ、平氣だよ、あんな奴は。――あんな奴はあの位にいつてちやうどいゝんだよ。

おきく。…………………

おゑん。（急におもひだしたやうに）行かうか、ぢやア？

おきく。えゝ。――けど、姉さん、仕度は？

おゑん。あたしのはすぐだもの、――一寸待つてくれゝば五分とかゝりやアしない。――だから、お前さん、すぐにおしよ。

おきく。えゝ、ぢやア。――すぐですわ、あたしでも………

おゑん。どうせしかし汗になるんだからいゝ着物のことは入らないよ。

おきく。えゝ、ほんたうの平生着で行きます。

おきく、簞笥のそばによつて地味な明石の着物だのおなじく地味な柄の絽の帶だのを出す。――浴衣を脫いでそれと着替へる。――おゑん、そばでそれを手傳ふ………

やゝ長き間。

おゑん。（ふと）けど、何だよ、お前さん………

おきく。（帶をしめながら）えゝ？

おゑん。大へんだよ、こしから？

おきく。…………！（帯をしめる手をとめておゑんのしごきを見る）

おゑん。いゝえ、一周忌がすむと。――何としても一トくぎりつくからね、こゝで。――いそいで……いはなくつてもだ……むすしてゐた人たちが一時にみんな好きなことをいひだすから……

おきく。でせうと思つてゐます。（帯をしめつゞける）

おゑん。はじめにまづ出て来るのが再緣の話。――まだ若いんだからいまッから一人でゐることはない。どこへでもしかるべきところへ片附かなくつちやアいけない。それにはちやうどいゝところがあるから世話をしよう。――必とはうばうからさういつて来るから……

おきく。いやですわ、そんな……

おゑん。いやだといつたつて仕方がない。――ちツかりそれを下手に斷らうものなら、それこそ今度は……

おきく。（わらつてそれを押へる）結構、姉さん……

おゑん。そのつぎに危いのがいろんな己惚の强い人たち。――これは、まア、お前さんのこつたからどんなものが來たつて心配はないとは思ふけど、不意にまた、いまのやうなおんなへんな奴がどこからまた出て來ないとも限らないから……

おきく。（かさねてわらつて）大丈夫ですわ……

おゑん。いゝえ、さうぢやアない。――いまの奴だつて、あれ、隨分惚れてゐるわ、お前さんに……

おきく。そんなこと……

おゑん。いゝえ、ほんたうに。――以前、お前さん、何かあつたぢやアない、あの人と？

おきく。眞逆……

おゑん。いゝえ、そんならいゝけど。――何だか、へんな、わるく人みしりをしない、執念ぶかさうな奴だから……

おきく。（もう一度わらつて）大丈夫ですよ、姉さん。――誰もそんな、姉さんの思ふほどあたしのことなんぞ、おもつてくれる人はありやアしませんから……

おゑん。いゝえ、それだからいけない。――大へんなものよ、お前さんの人氣のあることつたら。――知らないの、お前さん？

おきく。知りませんわ。（しめ終つた帶のうしろを鏡にうつしてみる）

おゑん。森田の奥さんのためなら火ん中へでも水ん中へでも飛込む。……うちの店の人たちなんかゝんなさういつてゐる。――だからこつちのうちの用といふと、俺が行く、いやおいらが行く。――それは、もう大騷ぎ……

おきく。（鏡臺のまへから。――さうするより外に仕方のないはぐらかしでわざと切口上に）どうぞよろしく被仰つて下さいまし……

おゑん。（全くのまがほで）ほんたうよ、しかし。――うそだと思つたら大へんな間違ひだから……

おきく。だつて、姉さん……

おゑん。ちやアいふけど、そのそも〱の大將を誰と思つて？――いゝえ、その先棒をふる大將を……？

おきく。…………

おゑん。うちの人なのよ。それが……

おきく。お止しなさいよ、つまらない……

おゑん。分らない、お前さんに？――あのあんたの最屓なことを？

おきく。…………

おゑん。あんたのこつたら夢中よ、もう、このごろ？

おきく。…………………

おゑん。いゝえ、むかしツからの縁ひぢやアなかつたの、お前さんがつ――俺は好きだよ、おきくさんが……といつたこと
は始終さういつたの、以前から。――けどこのごろの熱と來たら……

おきく。…………………

おゑん。いへば、まア、どこかへ行かうといつてお前さんをさそふ。――お前さんが行つてくれゝばいゝけれど行つてく
れなかつたら。……行つてくれなからうもんならそれア慘めよ、外のものが……

おきく。…………………

おゑん。寄席へ行かうが芝居へ行かうがぷんぷんして口だつてろくにきかない。――可笑しいくらゐよ、それア……

おきく。…………

おゑん。たゞもうお前さんをそばへ置けばいいの。――さうさへ出來ればいいの。――だから、あたし、たのしみにして
ゐるのは、いまにもし再縁の話の出て來たとき、これはいけないと反對するのは必とうちの人だから。――必とさうだ
から……(わらふ)

おきく。でも、よござんすわ、義兄さんなら……(ともに無理からわらふ)

おゑん。だからあたしだつて安心してゐるの………

おきく。(ふッと)ですけれどねえ、姉さん……

おゑん。えゝ?

おきく。先刻の話ぢやアありませんけど、あたしはすゞめですわ。――鴉ぢやあなくつてすゞめですわ。

おゑん。何が?

おきく。いゝえ、あたしつていふ人間です。――それを世間で……先方さまで勝手に……

おゑん。………

おきく。人さまにそんな何とかいつていたゞけるやうな、そんな決して、感心な、甲斐性のある女ぢやありませんわ、あたし………

おゑん。何をいつてゐるんだね、つまらない……

おきく。いゝえ、ほんとうに……

おゑん。何をまた急に。……いやだよ、この人は……仕度が出來たら行かうよ、さア………

おきく。あゝ、すみません……

二人、かりにそこらを片附けて立ちかける。――と、そのとき、富藏、階下から上つて來る。

富藏。（わさとさツかけなく）何をぐず／＼してゐるんだな――ぐづ／＼してゐねえで早く出かけたらいいぢやあねえか？

おゑん。女には仕度つてものがあります。

富藏。そんな氣の長えことをいつてたら時間がなくなるぢやアねえか。

おゑん。戯談でせう、二時ですよ、まだ……

富藏。二時よ。……だからよツぽどいそがなかつたら五時までに歸れねえぢやアねえか。

おゑん。どうして五時までに歸らなくつちやアいけないんです。

富藏。花火へ行くんぢやアねえか。

おゑん。花火へ？

富藏。知らねえのか、今夜川開きつていふことを……

おゑん。知つてますよ、それは……

富藏。みに行く約束になつてゐるんぢやアねえか、この間ツから……

おゑん。あら。お流れになつたんぢやアないんですか、あれ？――あたしは、また、あのとき雨でお流れになつたから約束も一しよにお流れになつたんだとばかり思つてゐましたわ。

富藏。そ、そんな料簡だから。――ねえ、おきくさん……

おきく。あら、あたしもさうだと思つてゐましたわ。

富藏。そ、そんな心細い。……一旦男が約束したものを……

おゑん。そんならさうのやうに今朝でも早くいつてくれたらいゝぢやアありませんか。

富藏。だつて、まだ、今朝の工合ぢやア天氣になるかどうか分らなかつたんぢやアねえか。

おゑん。だつて、それは。――止さう、つまらない。……その手間で早く出かけたはうが悧巧だ。――さ、行かうよ、おきくさん……

おきく。えゝ。――（富藏に）行つてまゐります、義兄さん……

富藏。道草をくはねえやうにね。

おきく。えゝ、大丈夫……

二人、そのまゝ富藏を殘してさつさと階下へ行きかける……

富藏。（うしろからさりげなく）綺麗だなア、しかし……

おゑん。えゝ？（ふり返る）

富藏。いゝえ、おきくさんよ……

おゑん。……ね？（おきくを突ツつく）

おきく。あら……（わらふ）

富藏。な、なんだ？

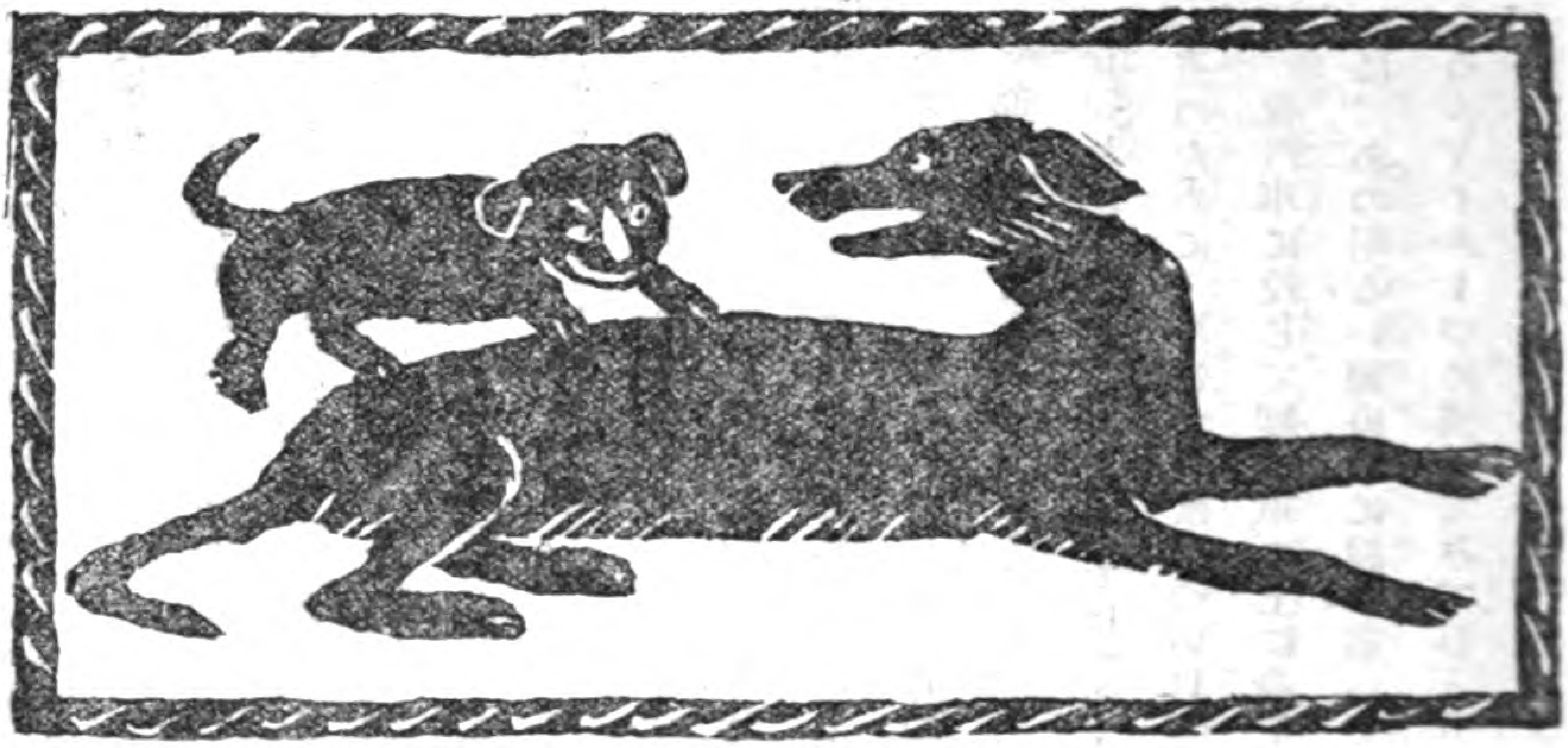
おゑん。いゝえ、こつちのこと……

二人、そのまゝ階下（した）へ下りる……つゞいて富藏も下りようとする。――そのとたん、遠く兩國で打上げはじめた花火の音空にひゞく、――それと一しよに子供たちの玉屋アと囃す聲きこえる

富藏。もうぼん／＼はじめやアがつた……（そのまゝ二人のあとから下りて行く）

幕

（昭和三年八月）



秋の花

近松秋江

今年の春中國の方へ旅行した歸途、久し振りに一寸京都に下車して四五時間を過した。その癖關西の方に旅行する度に、京都には、ちよい／＼立寄つてゐたのであるが、以前、自分が二三年假住居をしてゐた祇園町裏の陋巷には、何といふこともなく訪ねていかなかつた。

つい、まだこの間のやうに思つてゐたが、よく考へてみると、もう、ざつと、あれから十年の歳月が過ぎてしまつた。そこにはまだ、粗末な寢道具だの、古机だの、行李のやうなものなどが置いたまゝになつてゐた。その時分旅寢の佗しさを慰めるために愛撫してゐた大きな火鉢も二つ預けてあつた。現在は七十幾つになるといふ老翁と老媼との夫婦がもう六七年も、ずつと住んでゐて、私が京都にいつた時には、そこで寢泊りしたり、食事をしたりするのであつたが、一昨年の春にいつて一晩泊

つたきり、去年の春も京都に一寸下車して四五時間過したが、たうとうそこの陋巷には立寄らないで歸京してしまつたのであつた。

去年は何故にそこへ寄らなかつたか、一昨年の春自分の老母が死んでから、毎年その忌日には展墓の爲に郷里を見舞ふのであるが、歸途は、ずつと郷里から直行して、神戸で急行車に乘換すればいゝわけなのであるが、いつも京都まで來て、そこで一泊するか、又は汽車の都合で宵のうち四五時間を過すことになつてゐる。そんな場合京都には、たとひ一泊しないまでも、かならず四五時間を過すといふのは、昔馴染んだ女が居る土地であるといふよりも、やつぱり京都といふ土地が好ましいからであつて、神戸や大阪で塵埃つぽい市街を歩いて見る興味は、とんと起らぬのであつた。

去年の四月の初歸京の途次下車した時にも、その露地裏に一寸寄つてみるつもりでゐながら、つひにその時間がなかつた。その時は、東京を立つて行く時には、今度こそ何年振りに、數日を京都で遊んで來るつもりで出掛けたのであつたが、田舍の方にいつて五六日を過してゐる間に、子供のことなど思つてゐると、もう一日も早く歸つて彼等の顔が見たくなるのであつた。それで、前から、手紙で宿のことなど頼んで置いた京都の若い知人達にも、停車場までは電報まで打つて迎へに來てもらつたりしたが、その人達の期待に背いて、わづかに四五時間を、下河原の方の、ある席貸で御飯を一緒に食べたきりで、せめて今晩だけでもといふのを、厚情に謝して寢台券を買つてゐる汽車の間に合ふやうに停車場に急いだ。そのために、そこからは、つい目と鼻との間である祇園町裏の、昔の古巣には立寄つてみることもしなかつた。

夜汽車に投じて寢台車の上に身を横へると、私は、何よりも、今夜一晩の汽車が忌はしい事故もなく、無事に明朝までに、あの明るい國府津に歸り着いて、そこから熱海線に乘換へることを心の中に祈りながら、二人の子供の顔を、かはるがはるイメージに描いてみてひとりで笑つたりするのであつた。

同じ祇園町裏の、そこから、もの一二町とも離れてゐない小路の奥に、私の昔馴染んでゐた女が住んでゐるのであつた。そのことは、もう、これまでに度々「黒髪」などに書いて、私の讀者にはめづらしくない事なのであるが、京都にいつてゐる二年の間、つねに、眼と鼻との間に住んでゐるといふことだけで、彼女に對する失はれたる戀を、せめて滿足してゐなければならなかつた。さうして、初のうち、彼女がそこの路地奥に隱れて住んでゐることを發見した當座は、「黒髪」などに書いてゐるとほり躁氣になつて押掛けていつたものだが、一年ばかりの時日が經過して、自分もその近くに假居を構へるやうになつてから、次第に、こちらの胸の嵐もなぐともなく凪いで、諦めるともなく、爲方なしに諦めてゐた。そして、同じ京都の市中で、しかも、行つて覗かうとおもへば、すぐにも行かれる近處に居て、今のところ、彼女が一寸他へは行きさうもないといふのが、せめてもの安心であつた。

しかし、さすがに私も、いつまでも、そんな狀態で京都に長く居る心もなかつた。いつとはなしに、遠く離れた東京へ歸つてゐてもよいといふ氣になつた。東京に歸つた後の留守を老人夫婦に貸した。老人は私と彼女との經緯をよく知つてゐて、このことは、今急に好い都合に話が纏らなくつても、いつかは、どうかなるもの、したいものと思つてゐた。

「ほんなら、まあ暫時東京へいておいでやす。私が引受けてきつと姉さんの方のことは、あんじよう致しますよつて。」

「何分よろしくお頼み申します。」

私はそんなことをいつて、足掛三年ぶりに東京に歸つて來た。歸つて來た時には、一寸のつもりで歸つたのであつたが、さて戻つてみると、又、向うに出掛けるのが臆劫になつてしまつた。そして半年立ち一年立ちしてゐる間に、もとの東京の方へ又根を下ろしてしまつた。尤も、その間にも一寸々々向うにいつてゐた。そして行くたびに彼女の隱れ家を覗いてゐた。

そこは、三和土と花崗石とで固めた小奇麗な路地になつてゐて、三軒建の棟割り長屋になつてゐたが、小態に家などを

住して置くに、あつちへ向きの處であつた。

私は、これが自分の姿を置いておくのなら、どんなに樂みであらうなどゝ、よく思つてみた。その頃彼女には旦那とか世話になつてゐる者とかいふやうなものはなかつた。一度私が東京に歸つて來た翌年の春であつたか、向うにいつた時、一やつぱり、どんな様子でゐるか、見たくつて、見にいつた。

「ごめんなさい。」といつて、入つてゆくと、彼女の母子はすぐ取附の室で、内職仕事にせつせと羽二重しぼりの加工をしてゐた。

「おめづらしうおすなあ。」と、さすがに彼女は笑顔を見せて、「この頃はもう女工どす。」と、少し照れたやうにいつた。

私は、さういつた彼女の顔と、向ふからこちら向きに坐つてゐる母親の顔とを見比べるともなく、そうつと見くらべると、娘と打つて變つて、母親は、誰れが入つて來たかとも素知らぬ風で、むくれた顔をして、せつせと手先を動かしてゐる。

「はゝあ、女工。……………」私は又、彼女の方を見ながら、「女工とはいゝ。しかし小奇麗な仕事ぢやないか。」と、合槌をうつた。彼女は、その時もう、たしか二十九か三十であつた筈だ。すつかり白粉けなしでゐたが、それでも商賣をしてゐる時分に比べて、まだ、そんなに容色が衰へてもゐなかつた。羽二重の生地を絞る仕事であつたが、見たところ、別に汚れぬやうな仕事でも、指先などが、ひどく荒れてゐた。

私は、その時、近頃買つた寫眞機を携へてゐたので、それを持つていつて、寫眞を撮らせてくれといつたが、彼女はどうしても承知しなかつた。しかし、寫眞を撮らしてくれといふ段になると、母親ははじめて口を利いて、

「寫しておもらひやすな。」といつて、すゝめたが、娘は、どうしても諾かなかつた。

私は爲方なく、光線は不足であつたが、そのまゝそこで、ぱちりとやつた。が、勿論うまく映つてはゐなかつた。

それは今から、回顧つてみると、もう七八年前のことである。その後も大抵年に一度は向うにいつてゐたが、老人夫婦から彼女の噂を聞かされるくらゐのもので、格別覗きにいつてみる興味も起らなかつた。二三年前から、彼女が又どうも少しく精神に異狀があるといふやうな話をその老人から聞かされてゐた。精神に時々狂ひを生ずるのは、先からのことで、商賣から身を退いたのもその爲であつたが、その後鎭つて暫くそれが出なかつたのだ。話の樣子では、だん／＼親子の生活が不如意になつて來たので、ヒステリイが昂じて又病氣が出て來たらしい。そのことはもう、一昨年の夏一度、私のもとの假住に住んでゐる老人が上京して來た時に話してゐた。

「姉さんが、この頃また一寸氣が狂ふてゐまして、おばあがえらい困つてゐます。」老人は、離れた坐敷にゐる家内などに遠慮してゐるやうに低聲にいつた。

「あゝ、さうですか。そいつは、いけないですなあ。私も又そのうち一度行つて樣子を見ませう。」といつて、その話はそれきりであつた。老人はその時折角すすめる晝飯も食べずに、同作者があるからといつて固辭して歸つてしまつた。

それから去年の春だが、前いつたとほりに、京都に一寸立寄るには寄つたけれど、たうどう老人の露地奥の家には訪ねてゆかなかつた。

それで、今年の春は、まる二年で、めづらしく訪ねていつたのであつた。三月にも一寸廣島の方まで行つて、その歸途一寸下車したが、その時も、停車場からすぐ自動車に乘つて、烏丸一條の方までも去年の春一緒に夕飯を食べた若い知人を訪ねていつたりして、方々飛び廻つたにもかかはらず、老人の處のすぐ側をいく度も通りながら訪ねなかつた。その後五月にいつた時に寄つたのであつた。

「まあ／＼德田さんどすか。おめづらしいこつとすなあ。」といつて、長い間リユウマチスで手足の不自由な老媼が起つて下りて來て、入口の横手の小庭の木戸口を開けた。

「隨分お久し振りです。」といひつつ、私は狭い庭から縁側の方に上つた。

一昨年の春來て、それから、前いつたやうに、その夏七月の中頃老人が一寸上京した時會つたきりなので、老媼には丁度まる二年も會はなかつた。實は、あんまりお互に無沙汰にしてゐるので、二人とも七十を越してゐる老人のことであるからこの冬など、どうしてゐるか、まだ無事でゐるか、どちらか一人くらゐ死んではゐないかと思つて、一月時分であつたか手紙で訊ねてやつたのであつたが、返事も越さなかつた。毎年新年狀は向ふからも必ず越してゐたのに、今年はそれも越さず、それで、どうしてゐるのかと思つて手紙を出したが返事がない、で、重ねて出すと、やつと三度めに、はじめて返事を越した。それによつて二人ともまだ無事であることは分つたが、その手紙の文句は、老人が自分で話して、誰れかに代書さしたものでどうしたわけか、隨分ひねくれたことをいつてゐた。本來がかなり皮肉屋の老人で以前は、一ところ京都の商賣仲間でも顏を知られた骨董商であつたが失敗してすつかり零落してから一層人間が皮肉屋になつたらしい。なか〳〵聞かぬ氣の、自分は困つてゐながら、人の世話をするのが好きな人間である。

「どうして、こんな皮肉なことをいつて來たのだらう。」私は口に出して獨り言を言つてみた。そして、やつぱり七十過ぎて生活の不如意なところから、こんなことをいつてゐるのだなと思つてみたりした。

老媼はひとゝほりの挨拶をしながらも、

「えらい早うおいでやしたなあ、あんたはんがおいでやすちうこと、もう、こないだから聞いてゐました。ほん、今の先きまで門にゐましたのどすけど、今ちよつと、そこらまで出ていたらしうおす。あんたはんがお越しやすのをよう知つてゐますよつて、そんな遠いところへ行きやしまへん。ちよつと迎へにやります。」

「なに、ゆつくりでようございます。」間もなく饒舌な老人は戻つて來た。

老人も自分も年齢に二十年の相違こそあれ、どちらも同じやうな懶惰な性分なので久しぶりに會ふと、相變らず茶器骨董などのはなしを中心にして、雜談はそれからそれへと擴がつていつた。それから、露地の奥の女のことを語ることも老人は忘れなかつた。

「あゝ、それからあんたはんに申上げるのを忘れてゐましたが、諧田の姐のことでは、私もさん〴〵な迷惑をいたしました。言語同斷どす。」

老人がさういつて語りだすと、昔の京都の女らしい、おとなしい口のきゝやうをする老媼も傍から、

「あの人達は結局ご自分達でお困りやすのどす。内でも隨分あの人達のおかげで難儀をしました。」

「へゝ、それは又、どういふわけで？」私は、あらためて、老人夫婦の顔を見なほした。

老人達の話によると、もう大分前から彼女等の生活が不如意になつてゐて、それが原因となり結果となつて、女のヒステリイは次第に險惡に募つてゆくばかりであつた。勿論そんな有樣であるから彼女には何等の生活の資も働くわけには行かなかつた。母親がわづかに製茶場へ茶を撰りにゆくゝらゐの賃銀では母子の生活を凌ぐには足りやう筈がなかつた。そこへもつて來て、娘は以前泡沫錢の使へる時分の放恣な錢の味が、そんなヒステリイの症狀の發作と同時に定つて思ひ出されるのであつた。不斷神經の鎖つてゐる間は、つましい京都の女であるが、一旦頭が變になると、ありつたけの錢を、ぱつ〳〵と使つてしまはずには居られなかつた。卑吝な母親が始末して藏つておくものを、又しては取り出して煙草の煙のやうに使ひ果した。それで母子のいさかひは毎日々々絶えなかつた。どうにかかうにかして、長年住み馴れた家賃も延引にえんにんを重ねて去年の春時分までには半年分も滯つてゐた。それと同じやうに、八百屋だの米屋だの、日用品の勘定も滯つてゐた。

たうとう老人が面倒を見てやつて、家主の方の延滞をそつくり半年分まけてもらひ、自分の處の二階に二人を同居さした。さうしておいて、老人は私の處へ手紙を出したものだ。老人の考では、東京の方の事情も以前とはすつかり異つてゐるし、それに隨分、黴の生えた話で、まるで忘れてしまつた古證文を取り出したやうなものであるが、東京の方に縋れば、少しつゝの補助くらゐは、きつとしてもらへるにちがひないといふ見込みがあつたので、老人も氣の強いことをいつて、出入商人の手前などは大丈夫自分が引受けて置いたのであつたらしい。

すると、東京へ出した手紙の返事は、いつまで待つても來なかつた。老人の方でも、今は獨りでない、しかも二人の子供まである東京へ押していつてやるのは遠慮であつた。女母子が、老人の二階に同居して來たのは四月で、それから半歳ばかりそこに居つたが、生活は困る一方で、それにつれて親子は毎日いさかひばかりして暮してゐた。そこら中の商人といふ商人は借りしてしまひ、後は葱一本も買ふことが出來なくなつてしまつた。そして十月頃までゐたが、今度は自分達で又、どこかそこらの、一層つまらない裏街の二階を借りて移つていつた。そこでも困るのは同じことで、だん／＼どん底に落ちてゆくばかりであつた。無論そこにも居りきれなくなつて、その年——去年の暮に押迫つて、それでもまた、風爐釜であるとか、衝立であるとか書畫のやうなもので多少家財道具などを所持してゐたので、今度は、すつかり賣り拂つて路銀にし、老人にも大分立て換へてもらつてゐるのがあつたり、そこら中の商人の借錢はそのまゝにしておいて、その路銀を持つて、夜逃げをして、下の關にわづかの縁者があるのを頼つて、遠落ちをしてしまつた。

老人は語りおはつて、ひとりで強く頭振りをふりながら、

「いきまへん、あんな根性の腐つた人間はもうあきまへん。今度といふ今度はすつかり騙されてしまひました。」

「以前はあんな人達でもおへなんだがなあ。人間といふものも、まあ、あんなに變るものかと思ひました。」婆さんも靜かにいふのであつた。

「へえ、そんなに困つてゐるのですか……」

私は呆れたやうにいつたが、じつと考へてみると、それが當然なことであつた。

『もうあきまへん。」老人は又語聲を强めていつた。

「ほゝう、いつ此の二階に來ましたつて？……去年の四月。去年の四月といふと、私も丁度その頃一寸京都に來るのは來たのでしたが、こゝへは、心に掛りながら、つい歸りを急いで、お寄りしなかつた時分のことです。………私の方へお手紙を下すつた。はて不思議だなあ。その手紙はついに拜見しなかつた。」

私はさういひながら、丁度一年前のその時分のことを、あれこれと思ひ起してみようとしたが、老人からの手紙のことは、どうしても思ひ出せなかつた。四月の初に東京を立つて岡山の方に行つて、たしか九日の晩歸京の途中京都に下車して四五時をその路地から、ものゝ三町とも離れてゐない下河原のある貸席で風呂に入つたり夕飯を食べたりしたのであつた。四月のその頃の京都といへば、ことにまだ春寒が强くつて、そのために、たうどう風邪心地になつたりした。そして、その翌日はもう熱海に歸り着いて、三四日ゐてから又東京に戻つて來た。老人の手紙は東京の方にあてゝ越したものと思ふが、どうも記憶にない。或は受取つて讀んだかも知れぬが、他見を遠慮して具象的に書いてなかつたゝめに、つい何でもなく讀んでしまつたものかも知れぬ。

「さうでしたか、さういふことなら、あの時一寸寄つてみるのでした。………そんなに困つてゐるなら、あの連中はともかくも、それほどご心配して下さつたあなたに對しても、何とか少々の扶助はしていゝのでしたが……」

「いや、私の方のことは一向構やしまへんけど、あの連中には、すつかり騙されてしまひました。そのうち餓え死をしますやろ。」

「ほんまにお氣の毒どしてなあ。こつちや困つてる身の上どすけど、あの人達の困りやうたら、そら又きつい困り樣どし

て。」

「えゝ困るのがあたりまへはあたりまへですがな。しかし、今こちらが多少どうにかなつてゐる時ですから、こゝの二階にゐる時分に丁度來合はしたら、何とかするんでしたのですが。」

「私もそれを考へましたよつて、娘や婆に私から一つあんたはんお縋りいたしてみるからといふて、奧さんのお手前、えらい失禮なことゝは存じましたが、あんな手紙を差上げましたやうな譯どして。」老人は頭を下げた。

「いや、その邊の事情が分れば、わざ〳〵にでも又やつて來るのでした。」

下の關には、たしか母親の義理の妹とかゞゐて、小さい旅館か何か營業してゐるらしかつた。老人の話によると、そこの離れに母子の者を置いてゐるのだが、向うでも、この頃はもう大分厄介にしてゐるといふのである。

「あんな口數の少い、おとなしい人が、それは一日でも一人で何かいふてはるのどす。それが、うるさいのどす。」老媼もぽつり〳〵いふ。

精神に異狀を呈して、ひとりでに饒舌るのであらうと思ふ。

今となつては、もう色でも戀でもないが、そんな様子であつたら、多少の扶持を與へてやりながら、彼等の最後を觀てゐたかつた。眼先の見えない、勝手者の、愚かな母子の女二人がさうなつて來るのは自業自得といふのほかはない。京に生れて京で育つた女郎の果この女が、四十にも近くなつて身過ぎに困り、わづかな縁者をたよりに下の關の方までも落ちていつたといふことに、私は少からぬ哀愁を感ずる。まるで西鶴の草紙にでもありさうなことだと思つて、老人夫婦の話を聞いてゐた。向うでも持て剩してゐて、こちらの縁者の方へ又、二人を引取つてくれと手紙を越してゐるといふことだ。さうなれば、平家の上臈達が最期を遂げた時のやうに、下の關の海に身を沈めてしまふか、或は汽車のレールに身を横へて無慘の死を遂げるかするよりほかに方法はなからう。

「ほんまにお氣の毒なんどす。い丶具合に娘さんの方が先きにお死にやしたら、よろしいけど、もしお母はんが先きにお死にやしたら、あの方後に殘つて、どんなにお困りやすやろ思ふと、お氣の毒どす。」老媼は、古い京の婦人らしい、生遲い調子で語るのであつたが、しかし、その意味は、人間の最も悲慘なることの一つであつた。それで私は、自分に向つて註釋するやうに、老媼のいつたことを別な言葉で繰返してみた。

「は丶あ、あたりまへなら、子が年寄りを見送るのが本當ですがなあ。」

いつもの慣例によつて、私は、近處の、大阪の鶴屋の支店から取つてもらつた二三の品で、老人夫婦と、そんな雜談を交はしながら夕飯を認めた。そのうち寢台券をとつてゐる夜汽車の時間が迫つて來たので、再訪を約して露地裏を辭して出た。老人は近處のタクシイを呼んで表の通まで見送つてくれた。熱海では子供が待つてゐることを考へると、私は、人生は少しも油斷はならぬものだと思つた。

話の筋が分れるが、私は、昔親しかつた女のことを思つてみると、どれも、さすがに憎む氣にはなれない。それどころか、今に、自分がこの世の暇をもらふやうなことがあると、せめて死顏の一度くらゐ見に來てくれるとい丶といふやうな氣がするのである。そんなことをいふと、考へやうによつては滑稽に聞えるかも知れぬが、たとひ暫くの間でも、そして互に深淺の相違はあつたとしても、曾て愛し合つたものが、一度別れてしまふと、終生再び相見ることなくして、遂にその死期さへも知らずにゐるといふことは、何といふ人生の敢果なさを思はしめることであらう。今の私には戀といふものが藥にしたくもない。そして、これから先そんな經驗を繰返さうといふ心もないのであるが、昔、さま〲の戀に苦樂を重ねて來たといふことは、今思ひ出してみると、自分の過去は羞恥であつた半面に、又かなり思ひ出にも事を欠かぬといふ氣もするのである。

昔親しかつた女には、たれにでも會つてみたいやうな氣がする。勿論彼女等の居る處が分つてゐれば、手土産くらゐ携へて、こちらからは氣輕に訪ねていつてみたいのだが、その何人（なんぴと）の居處も生死も分明でないといふことが、私には、いひやうもない寂しいのだ。かうしてゐても、何處からか、手紙の一本くらゐ越して來る女がありさうに思へてならないのであるが、そんな殊勝な女はないのか、それとも向うでは、こちらを怨みに思つてゐるか、一旦緣の切れた男のことは、思ひ出してもみぬのか、さりとは、あまりに人間といふものが味氣ない。

「あの女は、今どこに、どしてゐるか。」と思つてみる女が、さしあたり、三四人ある。やつぱり今年の春の初、中國の方に旅行した時、それ等の一人である女の故鄉の市に一泊した時、その市に居る私の甥から、彼女が一と月ばかり前に一寸歸省した時、甥の處に立寄つて話していつたといふことを聞かされた。その女は東京に住んでゐることだけは分つてゐた。その時「おぢさんに何か用事はありませんか。」と、それは無論「それならかういふ用事があるから、賴みます。」と、いはれては困るくらゐの、通り一遍の挨拶であつたにちがひないが、私は、その晚旅舍のつれ〲に、めづらしく長い手紙を書いてみた。そして、彼女の、まだ住んでゐると思ふ、古くから居るところへあてゝそれを出した。東京に歸つてからも半月ばかりの間何の沙汰もなかつたが、こちらが忘れてゐる時分になつて、めづらしく彼女の拙い文字の手紙を越した。それによると、彼女は今、先に居つた處にはゐなかつた。

先の處はある大きな商店の社宅のやうな處の奧向きのことを預つてゐたのであつたが、はじめ夫婦で住込んで間もなく夫と別れてしまつた。そしてその夫は、遠くの故鄉に歸つて間もなく死んだといふことであつたが、その夫がまだ死なゝい時分、別れて故鄉へ歸つてから、間もなく彼女は、私の處へ手紙を越した。その時分私は、前にいつたやうに丁度京都に長く行つてゐる時であつた。そして、いつまでゐても、京都の女との話も面白い方には縺らぬから、いつそ暫く東京へ戻つて來ようかと思つてゐる矢先だつたので、彼女の手紙に對して返事を出した。その手紙によると、わたしは今度こ

そ、いよ／＼長い間別れようと思つてゐて別れることの出來なかつた夫と別れる時が押つめて來た。夫も今度は仕方なく諦めて故郷へ歸つた。これ故、わたしは今獨りで居る。今後の身の落ちつきについて、考へてゐるが、もし、あなたが東京に歸られるなら、あなたのお歸りを待つて、いろいろご相談したいことがある。もし又、あなたが今後永久に京都に住まれるお考なら、わたしもそのつもりで、早く別な決心をしなければならぬといふ、暗示に富んだ手紙であつた。――その女とのことも、今までにもう度々書いたこともあるがこゝに書くことは、今まで書いたこととはちがつた場合のことである。――

私は京都の女のかはりに彼女を得て滿足する氣にはなれなかつたが、これから東京に歸つて彼女と親しく交はるのも、まんざら惡い氣持ちもしなかつたので、東京には近日歸るといつてやつた。事實、三年越しの長居をしてゐた京都を引揚げようとする場合であつたのだ。

彼女と知つたのは、まだ、それから五六年も前のことであつた。私の居る下宿の近處に彼女はその夫と二人で、かすかな飲食店を營んでゐた。そこで知つたのであつたが、一年ばかりするうちに、かなり浮氣物で、そしてさういふ情事にかけてもかなり才智の働く彼女は、今の夫と別れてしまふつもりであるといふ心の秘密を私に打ち明けてしまつた。そして、それを決行するには、私の彼女に寄する好意の度合に依つて勇氣づけられるのであつた。その頃彼女は、たしか三十五か六であつた。もう姥櫻の色香は褪せてゐたが、その浮氣者めいたところに、また、どこか男の心を惹くものがあつた。――これは、後でいふつもりであるが、その頃京都に思ふ女があるほかに、も一人、人の囲はれ者で、向から口說いて來た女があつた。いくら何でも二人の女は私にも背負ひ切れぬと思つたが、忍び／＼樂む、責任のない女ならば、身すがら者の自分には女が何人あつても厭ひはせぬと思つてゐたので、姥櫻の彼女が色つぽい調子で夫との別れ話を仕掛けるのを辛抱して聞いてゐた。

彼女はその時分、もし好い機會があるなら、夫があつても、秘密な罪を犯すくらゐの氣は十分にあつたのだが、さうかといつて、外に出てさういふ機會をつくるといふやうな積極的な態度に出ることは、さすがに愼しんでゐるのであつた。それは、こちらの方からも積極的にならなかつたからでもあつた。

それから、いつしか五六年が過ぎた。私は、それから半月ばかりして東京に歸つて來た。彼女との親しい交はりは歸京後わづかに四五日にして始まつた。その後三年越し彼女との關係が繼續してゐた。それから別れる段になつた場合のことも度々書いてゐるから、少數の私の讀者にはめづらしいことではないが、最も親しかつた時分に屢々取り交はした言葉はこんなことであつた。

「正直なはなしが、私はこの後も、ずつと獨りでゐるかどうかはわからない。もしそんなことがあつても、お前はお前で交際は絕ちたくない。」といつて、私がお前を晴れて妻君にすることだけは、一寸困るのだ。そのことを今から、ことはつておくから、それは承知してゐてもらはねばならぬ。」

「えゝ、それは承知してゐますわ。その代りわたしをいつまでも棄てないで下さい。」

「棄てはしないさ。妻君があればあつて、隱れて逢ふ女は又格別樂みなものだよ。女の方だつてその筈だ。」

「さうでせうか。」彼女は微笑してゐた。

「さうでせうかもないもんだ。お前なぞは、最もよく、その邊の心持ちを知つてゐる筈ぢやないか。」

彼女は何とか斯とかいひながら十年も伴れ添ふて近頃別れたその夫の前にも、まだ十年ばかり持つてゐた夫があつた。それには死に別れたが、その間にその夫に秘密で深く交つた男があつたり、又、前の夫に嫁する前にも十六七で子供を生んだ夫があつたりした。

「ほゝゝ、でも罪には責められますわ。」

「少しくらゐ責められるのはあたりまへさ。でも責められるところが歌になるのさ。」

「こんなことをいつてゐても、やつぱり、何時かは、わたしの方で、あなたに棄てられるでせう。」彼女は涙ぐひになつて、敷島を一本ぬき取りながらいふのであつた。

「だから、お前の方で、私が今後もし一人でなくなつた場合にでも承知して今までのとほりの交際を絶たなければ、私の方からは決して絶ちはせぬさ。妻君といふものは、畢竟表向きのもので、面白くも何ともありはせぬさ。隠してゐる女には格別の憐憫が加はる道理だ。そこが女の方でも亦た面白みのあるところぢやないか。」

「ほゝ、この間も、わたしの行くとこの髪結ひが、あんたどうして嫁かないんですか、あんたくらゐの人だつたら、私の知つてゐるところにだつてお嫁にもらひたいものも幾人もあります。お世話をします。おいでなさいよといふから、わたし、もう人のおかみさんに行くのは懲々です。お妾ならいつてもいゝといつたら、その髪結ひ、まあ、あんた、どうしてそんなことをいふんですといふから、どうしてといふわけでもないけれど、ちやんと定つた、人の家内になるのは厭だ。お妾の方が、いゝといつて笑つた。」

「さうだらう。私もお前をそのお妾にして置く方が、君に對する愛情の永續を保證することが出來るのだよ。」

「あんたがその氣でゐて下されば、わたしは、いつまでも變りません。」

「茶呑み友達に一生交際するよ。」

こんなことを會ふたびに繰返してゐたのであつたが、そのうちに、こちらの方で、ほかの女が出來たゝめに、彼女の方で短氣を起して切れてしまつた。その邊のことも、「嫌はれた女」といふ、小説によつて、私の少數の讀者だけは知つてゐることであるから、くはしいことは省くが、彼女は、もし、私が、相當の婦人と晴れて結婚をするやうなことがあつた場合には、かならず前以つて一應それを彼女に打明けてからにする筈だと定めてゐたのであつた。しかし私の方で、そんな

ことをしなかつたのだ、私も、割れ鍋にとぢ蓋とやらの相當の緣の者が見附かつたならば、そんなこともしたかも知れなかつたが、女運が悪くつて、そんな婦人には出會はなかつた。そのうちに一人の女に出會つた。そして、やつぱり女の樂みといふものは、世間に晴れて結婚したりするよりも、人知れず隱して置いて、會ひにゆく方が、一層樂みなものであるところから、その女もさうしておいたところ、女の念力といふものは實に凄いほど恐ろしいもので、彼女は、私に、ほかに増す花が出來たらしいことを感づいて、たうどう私の隱れ場處を突留めてしまつた。そのために、私の秘密は、すつかり露顯してしまつた。ひとり、私の新しい女との秘密が彼女に暴露したのみでなく、今まで、私の新しい女に巧に隱しておいた彼女自身と私との秘密が、後の彼女に暴露することになつてしまつた。さうなれば、もう、何もかも打壞しであるにそれは無理な注文かも知れないが、彼女がもし、堪えられないところを凝乎と堪えて、そんな破壞的の行動に出でなかつたならば、私は決して終生彼女を棄てる氣はなかつたのである。だん〳〵年をとるに從つて、新しい戀愛をする氣はないが、その代りに昔親しかつた女のことを、あれこれと思ひ出してみることに、新しい戀をするよりも一層詩味があるやうに思はれるのである。

それで、旅先から出した手紙の返事は、半月ばかりも來なかつたが、そのことを忘れてゐた時分になつて來た手紙によると、彼女は今はもう先にゐた日本橋の方の主家にはゐなかつた。八九年も勤めてゐたそこから近頃暇をとつて、本郷の奥の方に屈婆さんを對手に二人きりでゐる。あなたのお手紙も先の處から廻送して來たので拜見いたしましたが、今では、あなたに對する、うらみつらみも、あの震災を區切りにして、消えてしまつた。あなたには逢ひたいとも思ひません。といふやうなことを書いてゐた。そして、たゞ本郷の駒込と書いたばかりで居處を明記してゐなかつた。私は、それを讀んで、彼女が誰れかの世話になつてゐるのではあるまいかと思つてゐる。わざと居處を明記してゐないのは、私に居處を知らせる必要がないからといふ意味よりも、もつと積極的に、居處を知らして、訪ねてゞも來られたら迷惑するからであら

うと思はれた。年もゝう五十に近い四十六七の筈である。その年でお婆といふわけでもないが、先の家に勤めてゐる時分から、いろんな男から色氣のある話を持ちかけられてゐたのであつた。でも私といふものがあつたゝめに彼女は、それ等に靡かなかつたのである。年に似合はぬ氣の若い女であることはいふまでもないが、話し對手に隠して置く女にして一寸小氣のきいた女である。前にいつたやうに、彼女がもし、あの時、おとなしくして、堪えられないところを辛抱して世てゐたならば、私は、今でも彼女との交際を繼續してゐたであらうと思ふ。私も年を取るにつれて、だん〱後生を願心が萌して來たことが、自分にもわかる。これは極めて自然なことのやうに思はれる。そんなことを考へるにつけても、彼女は老後の話對手によいやうに思はれるのである。

同じ東京に住んでゐるのだから、どこかで彼女に行逢ひさうなものだが、五年も十年も命はなかつた人にも、どうかして、ふつと電車の中や、飲食店などで偶然行逢ふことがあるにもかゝはらず、まだ彼女には行逢はない。

今いつた女と、はじめて顔を見知つた時分――その前に話した京都の女とは二年めの時分であつた、これは、初め向うから手紙で口說いて來たのが元で二年ばかり親しくしてゐた女があつた。その女のことも、もう私の二三の短い小說に書いてゐるから、それを讀んでゐる人には古い話になつてゐるのであるが、それを書いた時分、そのことを現在にして見た場合と、それから後の追憶とには多少の相違がある。

あの女も今、どこに、どうしてゐるか、何だか、つい、その邊に住んでゐるやうに思はれるのだが、一向居處が分らない――勿論私の先の時分のやうに、女の行えを一所懸命になつて探すといふやうなことをしてゐるわけでもないが――。

その女と知つた時分は、前いつたやうに、京都の女を知つた二年めであつたから、今から十二年ほど前の夏であつた。

女は三十一ぐらゐであつた。京都の女が二十五で六つ年下であつた。それから先きいつた女が三十七で、いづれも六つゞつ違つてゐた。二十五の女三十一の女、三十七の女と三人の女に興味を持つてゐた時分の私は、その方の苦勞もありはしたが、又隨分今よりのんきでもあつたわけだ。しかし、その中では、ひとり京都の女によつてこちらの生命を枯渇させられてゐたので、三十一の女と三十七の女とに對しては、ほんの浮氣であつた。しかし、今から考へてみると、京都の女は、前にいつたやうに、彼女自身、目先きの見えなかつたこと、それから、それ以上の理由は母親の無智と淺慮とのために、たうとう一生を誤つてしまつた。どこの物好きが、文明開化の今日女郎上りの女を女房にして家に入れる者があるか、たつた一人私のやうな天下の愚者があつて、なに、自分が惚れてゐる女ならば鳥追ひだつて、非人だつて女房に持つといふ、昔でいふなら、さまと寢ようか五千石取ろか、何の五千石、さまと寢ると歌つたやうな徹底的の戀愛實現を思ひ詰めた自分であつたから、京都の女には、見えも外聞も犧牲にして離さなかつたのであつた。それほど思つてゐた男に生涯を托さなかつたゝめに彼女の今日は、下の關の海に身を投げるか、汽車に轢かれて死ぬかより生きる道はなくなつてゐるのである。

私は一方、それほどに彼女を思つてゐたので、ほかの女に對しては、どうしても眞劍になれなかつたが、三十一の女は、今から思ふと、一寸惜しい女であつた。小柄な、見榮えのせぬ女であつたが、その頃は何か、その時分世話になつてゐた旦那との間の葛藤から、心が樂まなかつたゝめか、肉が落ちてゐたせいもあつたらう、それから、ずつと後になつて、私との關係が絶えてから一度會つた時には、先の時分と見ちがえるほど肉が附いて、そのため背まで高くなつて見えた。私はそれを見て、「あゝ、これなら、あの時分、あんなに、自分勝手なことばかり仕向けなかつたのであつた。一度向うから切り出したとほりに、妻にしておけばよかつた。」と思つた。

彼女は、まだずつと若い時に藝者に出たことがあつたゞけで、それから後は、旦那は變つたがお妾ばかりして來た。そ

して逢ふ日ごとに、一寸の間だけ藝者をして藝者になるが、すぐ旦那が出來て一緒にさせられたのであつた。藝はたいしてないし、さうかといつて、まるで不見轉でもなかつたし、どちらかといへば、たゞの座持ち藝者で、口のきゝやうなどは、然るべき良家らしい上品な物の言ひつぶりであつたから、そんなところから男の心を引いた。筆蹟なども、かい書での藝者にしては、まづくはなく、趣味も下品ではなかつた。だから私に手紙を寄越した時分には、ある醫學博士で病院長の世話になつてゐた。旦那には無論妻君があつて、その妾よりも縹緻も學識も優れ、五六人の子女があつたが、彼女は彼女で、それを近悲に際して泣くのが何よりもの男としての樂みであつたことは、その女が時々その旦那のことを話して聞かすので察せられた。

　すると一度面白いことがあつた。彼女は、その旦那が毎日のやうに必ず定つてやつて來るので、私と會ふ機會を見つけることに腐心してゐるのであつたが、初のうちは二三度外に出ていつた。そして餘程都合の好い時があつたら私を自分の家に呼寄せたりしてゐた。が、そんな時決して私に長居をさせなかつた。旦那は殆ど毎日やつて來ても、これも長くは居なかつた。なかなかの活動家で病院の方が多忙であつた。そして本宅と病院ともつゞいてゐるし、彼女を隱しておく處もそこに近かつた。たとへば午後の食後の休息時であるとか、夕方食後の一寸した外出の時を盗んで顏を見せた。旦那は一寸でもいゝから一日でも彼女の顏を見ないでゐると寂しかつた。それでも巧に秘密を守つてゐるので、もう七八年になるが、妻君には知られないでゐた。私は、彼女からそれを聞いて、ほんに男は惡性者といふ歎の文句にあるとほりだと思つたが、又、男のさうした歡樂にも、しみじみ同情することが出來た。さうして、それほど旦那の可愛がつてゐる彼女と、私が、又、そんな秘密な歡樂を交はしてゐることを思つて、あゝ、自分は、何といふ果報者であらうかと思つた。しかし、そんな時でも私の戀の病の蟲は時々私の心臟を嚙むやうに頭を持上げた。それは、今、自分がこんなことをしてゐる間にも、京都の女は、他の男と、どんなことをしてゐるであらうかと思ふと、烈はしい疾妬は、それからそれへと湧きあがつて心を苛(さいな)んだ。お妾の旦那には相濟まぬことだが、さうして彼女と密會してゐるのが、せめても、京都の女を遠く

にゐて思つてゐる、堪えられない氣持ちの慰めだとおもつてゐたのであつた。

一月の半であつた。久し振りに京都にいつて彼女と會つて、一晩泊り、金もないので、翌日の夕方は、もう立つて歸らねばならなかつた。極寒の夜をステーションまで女に送られて、別れを惜みつゝ夜汽車に乘つた。じつと閉ぢた眼の中を絶えず往來する彼女のイメージのために、安らかな夢も結ばれなかつた。その間も私は、金のない悲しさを心の中で喞ちてゐた。

それでも翌朝になつて、明るい朝日の影が車窓にさしこむと、自から、いくらか氣分も變つて、このまゝ、つまらなくつて、東京に歸へられはせぬ。「うゝ、さうだ。あの女の處に寄つて氣を晴さう。」と、心でうなづいた。その女は横濱に住んでゐた。朝の、まだ八時頃でもあつたらうか、一月中旬のことゝて、その朝はわけても厚い霜の降りた朝であつたが、天氣は快晴らしく、國府津から平塚あたりの湘南の松林には、相模灘の南から立ち上る水蒸氣がちやうど煮かしものでもしたやうな心地のよい白い霧になつて低迷してゐた。それに遥かな朝暉が薔色に射してゐる。これから横濱で下車して、あの女の處に寄つてみようと決心した氣分の轉換と、それ等の湘南の朝景色の快さとで、昨夜からの打ち沈んでゐた悲しい、遣る瀬ない氣持ちが、松林から立ち上つてゐる朝霧の如く、だん〳〵に消えていつた。

横濱驛で下車し、そこから、あんまり遠くない道を歩いて、一度訪ねていつたことのあるのを心覺えにたづねていつた。そこは、堀割に沿ふた、つまらない街筋の、とある、露地の奥であつたが、いつか來てくれといふ彼女の招きでいつた時、

「こんな家賤でせう。……お父さんが自分で探したんです。」彼女は旦那のことをよく、お父さんといつてゐた。さういつて、笑ひ〳〵その家の氣の入らないことを話してゐた。その前一度招かれて、はじめて彼女のところへ行つた時には、何でも南太田町あたりの高台で、小さつぱりした家であつたが、その二度めの家は、まるで、がらくた普請の居心地の惡い

家であつた。一度とも、私の方でも何だか心[illegible]た。女[illegible]なかつた。

で、その汚い二階家の家を訪ねて路地の内へ入つてゆくと、これは、どうしたことか、その家に入口が[illegible]空家になつてゐるではないか。そして、轉宅したとも、何處へいつたとも貼り出してゐなかつた。さうなると、誰れでもさうであるかも知れぬが、私の性質として、失望の反動から、どうしても彼女の行く先きを探し出さねば止まれなかつた。で、まづ、その隣家にいつて訊ねてみると、

「さあ、どちらへおいでになつたか私共では一向にぞんじませんが、家主さんですか、差配をしてゐる家ですか、この路地を出たところを、四五軒右の方においでになると、左側に炭屋があります。あそこの家で家賃など受取つてゐますから、あそこへいつてお訊ねになつたらお分りになるかも知れません。」と、心細いことをいふ。

私は早速路地を出て、堀割にそふた街筋に汚い炭屋のあるのを見附けて、そこに立ち寄つて訊いてみた。鼻のまはりを眞黒にした炭屋のいふのでは、

「さあ、私の方でも、その方、何處にお變りになつたか一向知らないんです。」といつて少時考へてゐたが、關内のかうかうした處に床屋がありますから、そこにいつてお訊きになつたら、分るかも知れません。私の方では、もとから住んで居つた方にお貸しゝたのではないのです。床屋が借りに來て、あの床屋さんに貸したのです。ですから、住んで居る人がどんな人であつたか、一向知らなかつたくらゐです。容ける時にも、やつぱり床屋さんからその話があつたのですといふ。

「あゝ、さうですか。どうも有難うございました。」といつて、私は、その床屋の處を重ねて詳しく訊いて、そこから又關内にあるといふ、その床屋を探していつた。今はもう名も忘れたが、果してその床屋はあつた。まだ朝の早いうちで仕事場には客は一人もゐなかつた。二人ばかり二十ばかりの弟子が剃刀を磨いだり、棚のまはりを掃除したりしてゐた。

「ごめんなさい。」と、入口に立つて聲をかけると、若い職人は、まだ眠の、すつかり醒めきらぬ顔をしてこちらを向い

た。私は一寸物をいひ澁みながら、

「ちよつとお訊ねしますが……」

といふと、職人は、朝つぱらから、理髪をしてもらひに來た普通の客でもない、妙な風體の人間がやつて來たといつたやうな眼をして、返事もせず、無愛相に、こちらを、じろ／＼見守つてゐる。その時の私の風俗は、その頃よく好んで冠つてゐた、變な茶人頭巾を冠て、まるで教會の叔父が着けてゐるやうな恰好の黑い長いトンビを着てゐた。そんな風俗をしてゐるのが、理髪屋の若い職人などには、きつと變な者が來たといふやうに映つたに相違なかつた。

私は重ねて、

「ちよつと物をお訊きしたいんですが。」といふと、

「なんですか。」といつて、はじめて返事をした。

「親方さんはおいでゞすか。」

「居りますが、何んですか。」

「ちよつと親方さんにおたづねしたいんですが……もし親方さんが御用でしたら、おかみさんでもいゝんです。」

職人は、棚の下の窓のやうなところから、奥の間の方に何か聲をかけた。そちらからも、仕事場の話聲をきゝつけて、もうおかみが顔をのぞけてゐたものと思はれる。

すぐおかみさんが、こちらへ出て來た。

「何でございますか。」三十六七の肥つたおかみさんである。

「えゝ、朝つぱらから、おいそがしいところを、飛んだお邪魔です。」と、私は先づ丁寧にわびをいつた

「いえ、どういたしまして。」おかみは、さういつて、後は何かといふやうに私の顔を見てゐる。

「あの、こちらでは、こたいだまで戸部の河岸の店に住んでゐた茨木といふ婦人の引越していつた先きを御存じではありませんでせうか。」

「……戸部の河岸の店に住んでゐた……婦人……」おかみは、私のいつたまゝのことを、千切れ〳〵にいつて、不審さうに頭を傾けてゐた。

「今、その先の家へ訪ねていつたところ、他へ引越して留守になつてゐるんです。それで、その近所の差配ですか、家主さんですか、とにかくその貸家の世話をしてゐる炭屋へいつて訊くと、あなたの方にいつて訊いたら、きつと分るでせうといはれたので、又お宅まで來たのですが。」

「あゝ、さうですか。ぢや、ちよつとお待ちなすつて……」といつたまゝ、おかみは奥に入つた。そしてやゝ暫く奥で話してゐるやうであつたが、やがて今度は洋裝をした四十恰好の主人が現はれた。

「何かお訊きになることでもありますか。」と、まるで話を新にして、穏かな調子でいつた。

「えゝ、今、おかみさんにお訊ねしたんですが、戸部の河岸の裏にゐた茨木といふ婦人の變つていつた先きを、もし御存じではありませんでせうか。」

「…………」

「あゝいふ境遇の婦人のことをお訊ね申すんですけれど、私は決して別條のない者ですが……」私は爲方なしに體裁をつくろつて、さういつた。

「はあ。」と主人は、黙案するやうにいつて、暫らく沈默してゐたが、「あの方とは前からのお知合ですか。」

「えゝ、相當古く知つて居ります。けれども、あんな婦人ですけれど、決して、そんな譯で知つてゐるといふやうたのではないのです。全く他の事で知つてゐるんです。」私は、事もたげに笑つてのけるやうにいつた。

た。私は一寸物をいひ澁みながら、

「ちよつとお訊ねしますが……」

といふと、職人は、朝つぱらから、理髪をしてもらひに來た普通の客でもない、妙な風體の人間がやつて來たといつたやうな眼をして、返事もせず、無愛相に、こちらを、じろ／＼見守つてゐる。その時の私の風俗は、その頃よく好んで冠つてゐた、變な茶人頭巾を着て、まるで敎會の敎父が着けてゐるやうな恰好の黑い長いトンビを着てゐた。そんな風俗をしてゐるのが、理髪屋の若い職人などには、きつと變な者が來たといふやうに映つたに相違なかつた。

私は重ねて、

「ちよつと物をお訊きしたいんですが。」といふと、

「なんですか。」といつて、はじめて返事をした。

「親方さんはおいでゞすか。」

「居りますが、何んですか。」

「ちよつと親方さんにおたづねしたいんですが……もし親方さんが御用でしたら、おかみさんでもいゝんです。」

職人は、棚の下の窓のやうなところから、奥の間の方に何か聲をかけた。そちらからも、仕事場の話聲をきゝつけて、もうおかみが顏をのぞけてゐたものと思はれる。

すぐおかみさんが、こちらへ出て來た。

「何でございますか。」三十六七の肥つたおかみさんである。

「えゝ、朝つぱらから、おいそがしいところを、飛んだお邪魔です。」と、私は先づ丁寧にわびをいつた。

「いえ、どういたしまして。」おかみは、さういつて、後は何かといふやうに私の顏を見てゐる。

彼女は、去年の夏、初めて手紙で私を口説いた時から、もう、逢うから何かにつけて、私の書く、つまらないものにでも氣をつけて讀んでゐたので、京都にそんな女のあることは、よく知つてゐた。そして、そんな女があることが、彼女と私との情交關係に何等の妨げとならなかつたらしい。

「樂みでもありませんよ。苦しみだ。」

「ほんとにそんなものねえ。早く自由な身體にしてお上げになつたらいいぢやありませんか。」

「ところで、そんなわけにいかないんですからな。」

その日は、朝早くから、靜かな佳い日であることを思はせたが、だん〳〵午に近くなつても、まるで春のやうな暖かさであつた。

「何か召上る？」彼女はやつと氣がついたやうにいつた。

私は彼女の顔を見返しながら、

「そんなことをしてゐていいんですか？……」

尤も、この前先の家に訪ねて來た時にも鰻丼をとつて御馳走してくれた。

「うむ。」と、彼女は輕く頭を振つて「今日は大丈夫。遠くへ往診してゐるからもう來ない。」

「さうですか。……ぢや、どうです。これから東京へ遊びにゆきませんか。」

彼女は心が動いたやうに、二階のガラス障子に麗々と射しかけてゐる暖かさうな冬の日影をじつと見て、

「暖かさうねえ。」

「えゝ、とても佳い日ですよ。」

「ほんとうに家の中にゐたくありませんわねえ。」彼女はそゞろに微笑した。

「いきませうよ。」
「さうねえ。」と、しばらく考へてゐたが、やがて決心したやうに「いきませうか。」と浮き立つていつた。
それから彼女は、一寸失禮しますといつて、階下におりていつて三十分ばかりかかつてお化粧をした。俥を二台いはして、それに乘つてステーションにいつた。
「こんなことをしてもいいんですか。……女中が何もかも知つてゐるでせう。」
「うむ……あんな者、ちやんと鼻藥をやつてあるから。」彼女は、徒戯者のやうにいつて笑つた。
「でも電車の中だけは、離れてゐて下さいまし。ひよつと知つた人に逢ふといけないから。……でも私と斯波のことなんか誰も知つてゐないから構やしないけれど。……斯波の方で秘密にしてゐるから。」彼女は半分彼女自身に向つていふやうにいつた。
「今日は私が、うまい鳥屋に案内しますよ。あなたも知つてゐるでせう。末廣といふ鳥料理。」
「知りません。」
「さうですかなあ。でも日本橋に居つた人ぢやありませんか。」
「それは、もう二た昔も前のことですもの。横濱にいつてから、すつかり田舍者になつてしまひました。」
そんなことをいつてゐるうちに東京に着いて、そこから自動車ですぐ上槇町の末廣へつれていつた。それは震災より六七年も前のことであつた。
美しい女中に案内されて、二階の小隱れた意氣な三疊の座敷に通ると、彼女は、すつかり悦んでしまひ、
「へえ、こんなとこ、私はじめて。……古くからあつたんですかね。私日本橋に居つた時分には、まだなかつたか知らん。横濱なんか厭ですわねえ。こんなとこがあるのを、ちつとも知らないなんて、お話になりませんねえ。」

「あなたも東京に住んでゐたら、どうです。」

「斯波が承知しない。………そんなことをいつたら、いけない〱〱。といふ風になつてゐる彼女の口吻りを眞似るやうに甘えたいひ方をした。

そこでゆつくり鳥料理を食べてゐる間に、短い冬の日あしは、もう酒精に廻つて來た。

「厭だなあ、昨夜京都の女にステーションまで送つてもらつて、今朝あなたの處に寄つて、やつと氣を決まらせたと思つてゐたら、もう今日の日も暮れてしまつた。これから牛込の汚い下宿屋に歸つて獨りで轉つてゐなければならないんだ。」

「ぢや、又いきませうか。」彼女は戯談のやうにいつた。

「どこへ？」

「私の家へ。」

「これから？………又あなたの家へ？」

「え〻、お大儀？」

「え〻、格別大儀でもないですが。」といつたが、いくら彼女との間であつても、あんまりづう〱しいと思つて控へてゐると、「お厭でなかつたら。」といふ。

「ぢや又いきませうか。」

「え〻、どうぞ。」

「それから鳥屋を出て東京驛から又櫻木町行きの電車に乗つた。プラットフォームに停車してゐる二等車の中に入つてゆくと、まだ一人の乗客も腰をかけてゐなかつた。日暮の電車の中は暗かつた。二人並んでクションの上に腰をおろすと、微醺を帯びて温くなつた身體と身體とが衣類の上から、やんわり觸れ合ふと、彼女は暗示のやうに、いきなり口を擦寄せ

て來た。

たうとう又彼女の家に歸つてゆくと、彼女は女中に命じて、それからこと〳〵風呂を立てさした。

「どうも濟みませんなあ。」

「なあに、いゝんですよ。」

「でも、大丈夫ですか。」

「ご心配なく。どうぞご安心なすつて。」

それから湯が沸いたといふので、私は、すゝめられるまゝに入つてゐると、彼女もあとから入つて來た。彼女は、去年の八月はじめて私と逢つたその時から、今ではもう六ケ月の身體をしてゐるのであつた。――そんなことは、私の筆で書いた「秘密」その他に書いてあるから省く――

「不思議なものですねえ、もう、こんなにお乳が出るんですよ。」彼女は湯の中に立ち上りながら、黒染んだ乳の頭を捻つてみせたりした。

それから二階に寢床をとらして、彼女が自分で置炬燵に火を入れたりして寢に、就いたのは、もう十二時を過ぎてゐた。

翌日は彼女も、私をいつまでも置いとかうとしなかつた。私は丁度昨日の汽車を降りたくらゐの時間に思ひ切りよく東京に歸つた。

それから後も私は、彼女が冬の夜更けて、置床になつた火鉢の火を自分で台十能にとり分けて置炬燵をこしらへてくれる暖かさを思ひ起しては、牛込の薄汚い下宿にたつた一人でぽつんとしてゐるのが堪へられなくなつてくると、どんなに寒い風の吹き荒ぶ晩でも、又どんなに遠くからでも、横濱まで通ふていつたものだ。

すると、ある晩のこと、向うへ行くだけの電車賃しか持たないで出掛けていつた。もとから女にひつかゝると、有るつ

たけの金を入れあげてしまふのであつたが、その時分は、もつとふさうで、すこしでも殘つたお金があると、みんなその女の方へ送つてやり、自分は電車賃や風呂錢にも不自由をしてゐた。私はその夜も、いつものとほりの、うまいことを思ひ味はひながら、横濱までの電車ももどかしく、向うについて、彼女の家の門の前に立つて、門燈の消けさに心を叩きつつ、こつこつと扉をたたいたが、奥へは聞えないと思はれて、なかなか玄關の開く音がしない。あんまり大きく叩くこともならず、夜は寒いし、どうしたらよからうと思ひわずらふては、又やや強く叩いてゐた。それでも玄關はことりといふ音もせぬ。ああ困つたなあ。こんなことなら、九時を過ぎて遙々の牛込からここまで出て來るのではなかつた。もし今晩ここへ入ることが出來なかつたら、東京にかへる電車賃も持つてゐない。そのうちにもし電車でもなくなつたら、歸ることも出來ない。一文なしで、そこらの宿屋へ泊れないこともないが、そうまでもなりたくない。ああ、こんな目を見るのも自分の心柄とはいひながら、もとをといへば、あの京都の女に入れあげてゐるからだ。しかし、京都の女は、どうしても思ひ止ることは出來ない。かうして横濱の女の處に忍び寄つて來ても、やつぱり京都の女に見かえる氣にはなれないのだ。

「ええッ、構はない、もつと強く叩いてやれ。」と、しまいには四隣に遠慮をせず、どんどん門扉を叩いた。

と、やつと内へ聞えたと思はれて、やがて玄關の格子戸の動く音がして、女中のお竹が顏を顯はした。が、彼女は、「いらつしやいまし。」といつたきり、いつものやうに歡迎する顏をしないで、當惑さうな様子でゐる。

「奥さんは?」

「奥さんはゐらつしやいますけど……」

「旦那さまが來てゐるの?」

「ええ、おいでになつてゐます。」

「さうか。………………今晩は又えらい混んだなあ。」私は、口では氣輕にいつたが、心の中は木から落ちた猿のやうで

ある。

「お竹さん、ちよつと、ねえ旦那には氣のつかぬやうに奥さんを呼んでもらへまいか。」

「でも、旦那さまと話してゐらつしやるんです。」

「さうかね。それは困つたなあ。」私は一月の夜半の寒氣に骨身を蝕はれながら、入口の外に立ちあぐんでゐた。——あの女の腹の中に一日一日と育つてゐるのは、おほかた旦那の子ぢやないのだ。さう思ふと、いくらか胸も透くが、今、奥の座敷で冬の夜半戸外の寒さも知らずに何をしてゐるか。………よし、旦那の歸るまでこゝの軒下か縁の下に踞んでゐても、ぜひとも今晩彼女に逢つてゆかねば、心が癒えない。それには旦那が來ていつたあとの方が一層彼女の肉體に對する興味がそゝられるのであつた。

「お竹さん、爲方ない、それでは、私、しばらくこゝで待つてゐよう。」忍びやかにいつた。

その時もし、女中が待合かなんぞの女中であつたら、さうつと家の中に入れて、自分の三疊にでも隱しておいてくれるのであつたらうが、茨城の田舍の女中は、そんな氣轉のきかうはづがなかつた。

「こんなところで………お寒いでせう。」

「……旦那さまは今晩は歸りさうにないかねえ。」

「お泊りになるかも知れません。」

「めつたに泊つてゆくことはないんだらう。」

「そんなことあんまりありませんけれど、たまにはあります。」

「さうかねえ、困つたなあ。ぢやあねえ、奥さんにさういつて、一寸わきへ呼んで、濟まないけれどもねえお金を電車賃だけ貸して下さいといつてくれたまへ、ね。」

「ちよつと話してみませう。」彼女は進まない顔をして入つていつた。

やがて又出て來て、壹圓札を一枚渡した。私はそれを持つて、おとなしく引返した。せめて五圓か拾圓、もつと餘計に強請つて、どこか女氣のあるところへ泊つてもいゝのだと思はぬこともなかつたが、そんな氣の散らけた興味も、起らなかつた。そして牛込の冷い下宿の部屋に舞ひ戻つて來たのはもう一時を過ぎてゐた。

そのうち春が來た。彼女は五月の末に分娩して男兒を産んだが、一ケ月ほどして死んだ。夏から秋の初にかけて又時々逢つてゐたが、その時分になつて彼女の氣持ちがやゝ變つて來た。

ある秋の夜又一度出掛けてゆくと、その時は旦那も來てゐなかつたが長い雨の降つたあとの夜で、いつもより早く寢ねゝゐた彼女は、又しても門の扉を叩いて呼び覺されたといつて、ひどく昂奮して憤つた。

「あなたもう私の家へ來ないで下さい。來てよければ、私の方でさういつて手紙を出した時に來て下さい。始終夜分遲く戸をとんとん叩いて、隣近處では、あそこの家で何事か起つたかと思ひます。外聞の悪い。」

「どうも濟みません。」

「濟みませんぢやありません。あなたのこと、すつかりあの床屋が知つてゐますよ。」

「へえ、それはどうして?」

「どうしてつて。あなたが、いつか御自分であの床屋へおいでになつたぢやありませんか。」

「それは、この一月一寸あなたの引越し先きを知るためにいきました。あの時、あなたに話したでせう。」

「それは聞きましたよ。もうそれで、すつかり向ふに分つてゐますさ。あんな喧へない奴ら、一寸見りや、はゝあと思ふのは定まつてゐます。」

「そいつは困つたなあ。」

「ですから、もう、あなたは、私の處へは來ないやうにして下さい。………まだ、それだけならいゝんですが、何も斯も床屋知つてゐて、此の間こゝへ來て、すつかり話しました。さうして、そんなことをしては、あなたの身の爲めに好くないといつて、散々いはれました。」

「何を知つてゐるんです。」

「何をつて、あなたが、いつか、竹を呼んで金を貸せといつたでせう。そんなことを、みんな床屋が知つてゐます。」

「はあツ、そんなことまで。」さすがに私も彼女の前で面伏なやうな氣がした。

女中のお竹は一と月ほど前に暇をとつて田舍に歸つたのであつた。その時床屋へも挨拶にゆくと、床屋夫婦は巧みに鎌をかけて、主人の家の秘密をすつかり探つたのであつた。お竹は、男が夜半に入口で壹圓のお金を無心した事實までそつくり話した。

「あの時、竹なんぞに、そんなことをいはないで、なぜ私を呼んで話さなかつたんです。澤山のお金ならまだいゝが壹圓ばかりの金を。」

「ぢや床屋は、私を、餘程つまらん坊と思つて、あなたにそんな强脚を絶つことを忠言したのでせう。」

「まさかさうも思はないでせうが、壹圓ばかりの金、みつともない。私、あんな床屋風情にそんなことといはれたのが癪に障つて爲様がない。」

「それは御尤もだ。」私もいふべき言葉がなかつた。

その晩逢つたきり、ついに彼女とは絶緣してしまつた。彼女にも私は怨みは殘らぬ。しかし、彼はり、つたはつた噂によると、彼女は、その後私と同じ關係の男が出來たゝめ、たうどう斯波博士を失敗つてしまひ、その次の斯波さんが出來たり又、私の次の次の男が出來たりしてゐたさうである。彼女もゝう四十を越してゐる筈だ。（おはり　七月廿四日）



京都御構入墨者

眞山青果

第四幕

時――文久三年二月二十日の夜。即ち前幕と同日。

處――京都三條の大橋。橋詰高札場の邊。

春の夜は朧に深けて、道ゆく小提灯の影も絶えたり。

位置は三條大橋の東詰にて、名所圖會にて目馴れたる高札場の附近を撰むべし。舞臺正面には大橋の擬寶珠を見せ、その右方に高札場あり。綠色地に垂るゝほどの青柳二三株。捨石などあり。

霧明く。河原は水烟立ちて、流聲咽ぶやうに靜かなる夜景。月は天心にかゝりて中空に明るく、地上には暗し。對岸の燈火は夢見るやうに點はる。

柳樹の蔭に、橋柱にもたれて立ちたるは坂本龍馬、肩をそびやかして激昂せる態をなすが野添於莵馬なり。犬の聲、遠く聞え來る。

於莵馬 （急込みて口吃る。唾を飛ばしつゝ）そんな馬鹿な、馬鹿な、そんな馬鹿なこと……。

坂本 （常になく亢奮して）何が馬鹿だ。國家の一大事、打捨てゝ置けない大損害だから云ふのだ。馬鹿なことゝは何んだ、（腕を摑む）

於莵馬 馬鹿なことだ。馬鹿な、そんな、馬鹿なこと……。

坂本 こいつ！（舌打ちして、睨む）何うでも從はないか。

於莵馬 おれの立場は何うしてくれる。おれは、何うなる。

坂本 貴様に立場――？ 何んの立場があるんだ。

於莵馬 最う、好い！ 貴公とは話しせん。（龍馬を突除けるやうにして、口唇をピリ〱痙攣させつゝ、高札場の方へ出て來る）

坂本 （その態度にむツとして、後を追ふ）於莵馬、貴様、徇泣――。

於莵馬 話しせん。絕交だ！

坂本 何――。

於莵馬 絕交だ！

於竜馬、稍激して足踏み一つ。高札場の石垣へ来て腰掛ける。腕を組んで一直線を睨む。泰然としてゐる。
龍馬も無言、不興らしく於竜馬を見詰むる。

於竜馬 （同じ姿勢。稍くして、口惜しさに迸り出る言葉のまゝ、断絶して云ふ）坂本。貴公いつも、然う云ふ無茶を云つて、おれを困らせる。おれにだつて、おれは有る。貴様に貴様があるやうに……、於竜馬に、於竜馬がある。虫にも、一寸の蟲にも……。

坂本 えゝ、その五分の魂は何うでもいゝ。一尺の蟲、一丈の蟲が大事だ。

於竜馬 （恨めしさうに龍馬を睨め）坂本。おれは今、新兵衛と契約して、何んの大事を引受けてゐるか、お主それ、知つてゐるか。

坂本 兎に角、勝先生は今、わが新日本のために、無くてならない大事な人だ。田中顕の無謀者に、先生をあやまちさせて何うする。新兵衛が勝先生を狙ふなら、禦ぐやつは貴様より外はない。行つて勝先生の護衛をしろ。行け、於竜馬、行け。

於竜馬 おれが、勝の護衛……？（鼻先に嘲笑せんとして能はず。たゞ顫えて）何を、馬鹿な……、何を、何を云つてるんだ。

坂本 何が馬鹿だ。何が馬鹿だ。勝先生を失つては、日本の両の目を潰すやうなものだ。日本は闇だ。盲になる。

於竜馬 新兵衛と、おれの約束で、出来るか、出来ないか、考へて見ろ。

坂本 （聲を静かに、於竜馬の肩を叩き）おれはこれから紀御川で、兵庫の海軍塾へ急行しなければならないのだ。先生は今姉小路家を訪ふてゐられる。その帰り路が心元ないのだ。おしんの話では、田中はその途中を要撃する計画らしい。行け、行け、行つてくれ。

於菟馬　……。（腕組みのまゝ、しぶとく動かず。）

坂本　於菟馬。たゞ一太刀の間違で、取返しのつかない大損害になるのだ。大事な時だ。國家の大損害だ。

於菟馬（首を振つて）厭だ！　おれは攘夷黨だ。勤王だ。

坂本　こいつ――。（グと肩先を掴んで）勤王黨なら猶もつて、護衛の任に當る筈だ。勝麟太郎は日本國の新知識、天子様の御家來として、失ふことの出來ない人物なのだ。

於菟馬　朝廷は攘夷論だ。勝麟太郎は開國論者だ。

坂本　於菟馬。貴様、飽まで……、おれに逆らふな。（苛立しく肩を掴みつゝ、肩先をこづき廻し）先生に萬一のことがあつても、貴様、惜しい惜しむべき人とは思はないのか、先生は、先生は、將來の日本のために、天子様のために、是非無くてならない人だ。攘夷にしろ、開國にしろ、百年の人物を失つては國家の損害だ。木に刻んだやうな木像勤王が、何になる、何になる。陛下のために必要なる人物を守護するのが、眞の勤王、眞の忠誠といふものだ。行け、行つて先生を衞れ。

於菟馬（頑強に、腕組して動かず）厭だ！、おれは攘夷だ！、

坂本　何。何、何――」。（切齒して、睨み付ける）

於菟馬　絶交だ！、おれは最う、貴公に動かされてゐない。

坂本　好うし、好うし。（顫えながら、突き放して）何うとも勝手にしろ、頼まん……、最う頼まん。

於菟馬　何――？

坂本　馬鹿者。大馬鹿者！（口惜しさうに絶叫して）この、この算盤の桁狂ひは、將來、國家のために、甚大なる損耗として現はれるのだ。その時、帳尻の精算書を見てびつくりするな。先生を殺せば、來べき新しい時代を遅らすの

だ。悔むな、その時悔むな。

於莵馬（わざと先に笑はんとしつゝ）それほど大切な勝先生なら、貴公自身に護衛するがいゝだらう。おれは、控佐幕だ！

坂本　おれは、勝先生の密命をうけて、兵庫へ詰め寄せる外國使臣等に、重大な或る任務をはたさなければならない。非常外國交際の問題だ。一刻の猶豫のために、日本帝國は信義を世界に失はなければならない。時がない、時間がないのだ。

龍馬、いら〳〵して歩き廻はり、懐中の時計など出して見て、思案に迷ひゐる。於莵馬、龍馬の焦燥するを尻目にかけて、わざと落付きはらつて動ぜず。

於莵馬（やがて又、ブツ〳〵と呟き初める）おれは何時でも、貴公等の議論の玩具(おもちや)だ。貴公等の議論次第で、於莵馬、それ國のためだ、あつちへ走れ、こつちへ行け……、自分を無くなして、獵犬のやうに驅り立てられる。龍馬、おれは骨を惜しむんぢやないぞ。元より動くのは大好きなおれだ。けれども、それでは……。

坂本　何、何――。（歩いたり止つたり、思案に耽る）

於莵馬　けれども、それでは、おれといふ者は何うなるんだ。貴公等は議論の度に、日本だ、皇國だ、世界だと、大きな問題を持ちかけて來て、厭でもおれが動かずにゐられぬやうにする。武市先生は一概勤王だ、國家の爲だ、於莵馬働けと云ふ。貴様は貴様で、日本だ、新時代だ、於莵馬働けと云ふ。平井の言分も朝廷の大事ならば、間崎の說だつて大切だ。そつちへも於莵馬、こつちへも於莵馬……。おれはな、無學だ、見識がない。諸兄の言葉は、皆信じなければならんと思ふから、いつもウロ〳〵マゴ〳〵して、命じられる通り働いて來た。勤王だ、切れと云ふから、その言葉通り勤王と信じて人を切つて廻つたけれど、おれは一度だつて、自分の心から眞に勤王と信じて人を切つたことはない。武市が然う云ふから勤王だらう、龍馬が云ふから國家のためだらう、然う思ふより外に、おれ

と云ふ人間はまるで無くなされてゐるんだ、凡そ馬鹿々々しいたつて、こんなことはあるまい。

坂本　（於莵馬の繰言を半ば聞き、半ば聞かず、立迷ひつゝ、獨語）然うだ。半平太の膝を抱いて話すより外あるまい……。

（と行きかけて、又考直す）然し、それも……

於莵馬　坂本。よく考へてくれろよ。貴公等は人を使ふ身だからいゝが、善惡も知らずに、たゞ使はれて働いてゐる身も察してもらひたい。おれは何んのために働くのだ、それを知らずに働く者のつらさを思へ。同じ人間を、あつちでは切るのが勤王だと云ふ、こつちは斬るのが國のためだと云ふ。いや開國が勤王だ、いや攘夷が國論だ。中に立つて、おれは何うすればいゝ。おれは武市先生を見ても、心底誠實に發して議論してゐる立派な人間と思ふ。先生の說は確然不動と思ふ。頭が下がる。が、貴公の說を聞いても、嘘ではないと思ふ。頭が下がる。依賴や利慾のために、危險を冒して自說を立て、同志に裏切つてゐるのではないと思ふ。兩方の人間が、おれには偉い。兩方の人間が、至誠をもつて國家を憂へてゐる。嘘がない、眞實だ。

坂本　（ツカ／＼と戾つて來て）於莵馬。何う考へても、やはり勝先生を護衛するのは、貴樣だ。行つて、田中を繋いでくれ。賴む。

於莵馬　（目を上げ、龍馬を見て）貴公、おれの話を聞いてゐないのか。

坂本　夜が深ける。勝先生の歸路が、心元ない。

於莵馬　その通り、その通り貴樣は殘忍だ。

（口惜しさうに呼ぶ）

坂本　何？　殘忍？

於莵馬　殘忍ぢやないか。殘酷だ。貴樣は現に今、おれの云ふ話など聞入れずに、自分がおれを使はうとする、その用事

ばかり考へてゐたらう。武市も然うだ。皆、然うだ。君等は於龍馬の言葉など、頭から聞かずに、八釜しく云ふ言ひ方ばかり考へてゐるのだ。それで好いか。それで好いものか。(目を閉めて、龍馬に詰め寄る)

坂本　然し、今夜、勝先生は——。

於龍馬　それ、それ、見ろ。貴様は、自分の必要ばかり考へてゐる。於龍馬も、野添も貴様のこゝろの中にはないのだ。それが残酷でなくて何んだ。残忍でなくて何んだ。

坂本　——。

於龍馬　おれは犬になつて働くのは厭はん。然し日頃敬愛する君や武市の目にまで、おれが犬に見えてゐるかと思ふと……おれは苦しい。同時に君等の残酷が……憎い。(ホロ／＼と涙を流し)納得(なつとく)させてくれ、納得させてくれ。おれが、気持よく働けるやうに納得させてくれ。いつでも口笛に呼ばれて、黙つて君等が指差す方へ、夢中になつて駈出すのは、最う……厭だ、厭だ。於龍馬にも自分を持たせてくれ、おれにも根性を持たせてくれ。

坂本　(重く頷いて) なる程、それは有るだらう。分つた。然し今は、それを説明しても、容易に君には會得(ゑとく)されることではない。龍馬を信じて、今日はこの難事に赴いてくれ。

於龍馬　厭だよ。それが無理だ。(鎌首を擡げて、龍馬を見る) それぢやおれが可哀さうだ。納得させてくれ、何故武市先生は開国論者を倒すのを勤王といふか、何故君は勝先生を衛るのを王事と云ふか、その意味をハッキリ納得させてくれ。

坂本　困るなあ——。

於龍馬　君は勝先生を大人物と云ふなら、何故同志一同は彼を奸賊と憎むのだ。同じ勝麟太郎が、悪人であつて善人である、そんな……そんな馬鹿な理屈があるものか。おれは何方でも構はない。何方かへハッキリ極めてくれ。勝は、

坂本　賊臣か、忠臣か。何方だ、何方なのだよ、坂本。（詰め寄せるやうにして云ふ）

坂本　――。

龍馬、當惑してホツと吹息する時、橋下の方にガヤ／＼と相爭ふらしき五六人の聲聞ゆる。於菟馬、吹驚りして立ち、橋欄に伸び上つて河原の闇を透し見る。龍馬も注意を拂ふ。ややありて人聲鎭まる。

坂本（小聲に）何んだ。ひどく揉めてゐるやうだが……。

於菟馬　諸藩有志の秘密會が河原にあるんだ。おれもそれへ列するために、今ここへ來て、君に逢つたんだ。

坂本　秘密會？

於菟馬　同志のうちに、行動胡亂のやつがある。その詰問のための會合なのだ。（と說明しつつも、耳を立てて動靜を鋭く注意する）

坂本　誰だ。（於菟馬を見て）君しや會津の、大場とか云ふ男ぢやあないか。

於菟馬　うんつ（唇を嚙むやうな心持にて、重く頷き）疑つたのは最初おれだ。人にも然う云つた。けれどもおれの……輕率だつたのだ。その後交際するのに、彼は古い神道學を修めて、立派な勤王學者だ。柳子新論に似たやうな、書物さへ書いてゐるのだ。

坂本　（橋下に注意しつゝ）笑ひ聲が聞える。疑惑は解けたのだらう。

於菟馬　うむ……。（下顎部を脊向にして、不安さうに佇む）

坂本　諸國有志のうちには、諸岡三輪田、却つて老功の者がゐる。われ／＼土佐のやうな、無茶な行動はないだらう、

於菟馬　うむ。さつき詰問には、おれから好く話して置いた……。

坂本　於菟馬。貴樣も同志を離れて、餘り他藩者とのみ交際すると、今に一同の嫌疑をうけるぞよ。長州人は猜疑心が深

いぞ。

於菟馬　うむ……。（階下にのみ注意して）事なく済んだやうだ。先づ、よかつた。（両人の方へ歩み寄る）

坂本　處で、於菟馬。おれは何う考へても、兵庫に急がなければならん。

於菟馬　勝の話か。（不快さうに）おりや、知らんよ。

坂本　然し――。

於菟馬　坂本。（屹とその前に立ち）おれは新兵衛と誓約して、貴様の命を預つてゐるのだ、そのおれが、田中に、馬鹿な……。考へて見ろ。

坂本　それぢや仕方ないが……。（溜息）何んとしても、困つた。

於菟馬　坂本。貴様の才能にまかせて、あまり人の目を、挟るやうなことをするなよ。（寧ろ憎悪をもつて睨み）勝の身よりも、貴様が危ないんだ。友達が、友達が蔭でどんな苦労してるか、少し考へろ。自分の我儘、自分のノホヽンから、然う人を困らせるもんぢやない。貴様は大體、人はみな自分に使はれる動物と思つてる我儘者だ。勝手過ぎるぞ、無法だぞ。

坂本　貴様の言分にも道理がある。おれも理屈では頼む言葉がない。と云つて、こゝで先生に怪我あらせたくない。おれは貴様に、龍馬のためだ、死んでくれないかと頼むだけだ。

於菟馬　（身にかゝる穢れでも拂ふやうに身顫え、舌打ちして）又、又、又――。然う云ふ難題を……。

坂本　だつて先生は殺せないぢやないか。後の損失が、おれには明かに見えてゐるのだ。攘夷黨は何んと叫んでも、世界の大勢は開國の機運に向つてゐるのだ。日本は海國だ。船舶によらなければ國は立たん。戰爭も、經濟も、交易も、總ての原動力は船だ。

於菟馬　聞かん〳〵。（身を逃げて）おれは、攘夷だ。勤王だ。

坂本　その攘夷說だ。元來京都の攘夷論は、居竦まりのお公卿樣達が、夷人恐怖の結果から生じたのだ。若し萬一こゝで叡慮が一轉して、通商交易の御方針に變化したら何うする。

於菟馬（呆れて龍馬を見て）馬鹿な、狐を馬に乘せたやうな……。

坂本　いや、夢話ぢやない。勝先生の今度の上京は、青年公卿の間に世界の大勢を說明して、舊弊固陋の議論を一洗するためなのだ。現に青蓮宮樣にも參謁して、國是大方針の演說をも致してゐる。又今晚姉小路家を訪問したのも、愛國の至誠をもつて彼の人々の迷夢を啓かんとしてゐるのだ。いや、現に、見識の士は、次第にその迷夢をひらきつゝあるのだ。見ろ、一兩日の中に、必ず朝廷では攝海視察の勅使を發せらるゝに相違ない。そしてその使臣には姉小路卿が下向されるに相違ない。その時こそ、その時こそ龍馬畢世の智慧を絞つて、姉小路卿の舊弊を說破して、開國々是の切要なることを知らして見せる。手段も定まり、策略も熟してゐるのだ。攘夷論頑強派の彼の卿さへ動かし得れば、後は何うにも方法がある。な、於菟馬、その非常の際だ。こゝで勝先生の身邊に萬一のことがあると、百計は破れて國家の大事を失はなければならない。於菟馬、おれは理窟で君を責めるのぢやない。おれのため龍馬のために、君の命をくれてくれと、頼ふんだ、頼むんだ。

於菟馬（龍馬の辯舌に動かされんとする心を、危ふくも押立てゝ）厭だ。おれは厭だ。攘夷だ！　攘夷だ。（寧ろ苦しさうに叫ぶ）

坂本　於菟馬。田舍鎭守の大木を切るにさへ、樵夫は祟りを恐れて、斧をあてるに躊躇すると云ふ。況して勝先生は、百年にして稀に見るほどの學者だ、偉人だ。例へ議論は開國鎖國と相違しても、それをあの剛愎者の新兵衛の、氣紛れ輕卒な刃の下に斃し、後に悔みはないと思ふか。後悔はないと思ふか。是非とも切る木なら、斧はいつでもあて

られる。議論の定まる時、おれのために、五月七日の日を延ばしても、またなにかの日はいつでもあるのだ。於菟馬、攘夷親征の勅命が発ふされるまで、先生の命は君が守つてくれ。卑劣者と云はれても、卑怯者と云はれても、君の命をおれに友人に呉れてくれ。頼む、頼む。

於菟馬（固くなつて、首を振り）厭だ！　おれは攘夷だ。

坂本　これほど頼んでも、貴様――。（哧として脣を噛み、於菟馬の胸座を摑む）貴様、命が惜しいか。

於菟馬　命ぢやない。われの、その、難題が惜いんだ。

坂本　貴様――。（顫えるやうな視線、拳に力を入れる）

於菟馬　何をする。（ギョッとして、一歩あとに退る）

坂本　臆病者！　腑抜け者！（激しく睨み付くる）

於菟馬（狼狽しつゝ龍馬の視線を避け、苦しさうに叫ぶ）おれは攘夷だ。攘夷だ〳〵、勤王者だ！

坂本　頼まん！　馬鹿！　惜しい命なら、くれとは云はん。

於菟馬　何――。

龍馬　力任せに於菟馬を突き放す。於菟馬、よろ〳〵と三四歩よろめき、當惑さうに龍馬の憤怒を見てゐる。龍馬、佇立して沈思に耽ける時、又橋下の人聲急に騒がしく、會津藩士大場孔平を取圍んで、諸藩有志八九名ドヤ〳〵と堤上に上り來る。大場は極度に興奮して、聲音もしどろもどろなり。一同はその態度に驚き、宥めつゝ來るなり。

大場　脇差を返せ。なぜ止める。介錯がなくとも、死にかねる孔平ぢやない。死ぬ〳〵、脇差を返せ、脇差だ……。

於菟馬（びつくりして走り寄り、腕を摑み）何うしたんだ、大場！　何をそんなに狂つてゐる。おれだ、於菟馬だ。

大場　野添か……。(顏を見て、セイ〳〵呼吸をきらしつゝ）丁度いゝ死場所だ。僕は諸君の面前で割腹したい。野添、友達甲斐に、貴公介錯してくれ。死ぬ、死ぬ、死にたいぞ！

於菟馬　貴公、諸君から、何か嫌疑でもうけたのか。

大場　死場所を探してゐたんだ。脇差をくれ、死ぬ！

孔平、一同を振りきつて橋の欄干に凭れる。兩手の間に顏を突ッ伏せる。やがて嗚咽の聲聞ゆる。

於菟馬　何んだ、何うしたんだ……。(呆れて眺めゐる、

諸國有志の一人某、釋明のために進み出る。

某甲　野添君。われ〳〵も手に餘したが、斯う云ふ次第なのだ。……

坂本（思案を定めて、顏を上げ）於菟馬。ではおれ……兵庫へ行くぞ。澤村にでも云つて、出來るだけは警戒させやう。

於菟馬（龍馬が二三歩歩む姿を見てから、急に）坂本、坂本待つてくれ、坂本、今の話だ……。

坂本　僕の無理だつた。然う君の意志を蹂躪されまい。

於菟馬　いや、遣る〳〵。あの件は、慥におれ引受けた。

坂本　何――。(悦ばしさうに立止つて、於菟馬を見る、

於菟馬　(龍馬の喜びをわが喜びに感ずるものゝ如く、晴れやかに）大丈夫だ、大丈夫だ。君が運動する間は、僕あの方は引受けた。安心して、君は君の思ふ通り働くがいゝ。君の仕事は、誰よりも君のために、大事だ大切だ。遣つてくれ〳〵。

坂本　然うか。それは有難い。それで僕も思ふ通りに……。

於菟馬（對者の喜びにかぶせ、萎れたる聲）只、坂本……。これだけは覺えてゐてくれ。おれは……厭なんだぞ。心から

氣に染まないが……、それを、それを云ふんだぞ。（咽び泣く）

坂本　うむ、察する。（流石に氣の毒さうに）然し、將來から見ると、君は、確かに天下に功績を……。

於莵馬　坂本！（兩手にて抑へ）それ、云つてくるなよ。おれは大局から見て働くんぢやない。（涙含んで）心からはだけれど……、仕方なく……仕方なく働くんだぞ。

坂本　然うか……。では、おれは安心して行つて來るぞ。

（坂本、欣然として去る。於莵馬、その後を凝つと、寧ろ恨めしさうに見送りゐる。）

大場（突然、叉）刀をくれ。何うでもおれは死ぬ！　野添。君の介錯なら本望だ。頼む。（橋上に胡坐を組み、腹を出す）

於莵馬　何んだな……。何うしたんだ。

大場（腹部を按じつゝ）今日まで、死にたくて耐らなかつたのだ。

某甲（進み出て）野添君、これは斯うなんだ。今日突然同志のうちから、動議が出たんだ。今度の將軍上洛は、容易ならぬ事と思ふ。必ずわれ／＼勤王黨に、大壓制が加はるに相違ない。それを禦ぐと共に、世間の耳目を聳動させるために、薩長土州以外の諸藩有志一致して、威嚇の逆襲を將軍家に試みやうと云ふのだ。

於莵馬　威嚇の逆襲？　とは――？

某乙（代つて）洛西等持院にある足利尊氏以後三代の木像を斬つて、首を三條磧に梟すんだ。名分を明にし、鎌倉以來代代將軍の反逆暴惡の罪を鳴らす旨、高札を立てゝ天下に意氣を示すのだ。事が意表外に出てゐるだけに、必ず效果があるに相違ないと思ふ。

於莵馬　そりや面白い。屹つといゝぞ。

某乙　それで今、一同橋下に集つて壯士の人選をしたのだが、大場は無理にもその人數に加はりたいと、狂ひ出して聞か

ないのだ。

大場（顔を上げ、叫ぶ）いや、違ふ。君等が僕を人選から除いたのは、底意があるんだ。深い底意があるんだ。

某甲　底意？　何んの底意があるものか、われ〱は公平に協議したつもりだ。人數は十名と定つてゐるのだから……。

大場　いや、君等は僕を疎外してゐる。知てる、知つてる。

某乙（進んで大場の肩を叩き）君は兎に角、會津家の食祿を食む人だ。事がもし露見する場合には、われ〱は何處へでも亡命されるが、君は逃げ込む鄕國を失ふではないか。われ〱は同志として、君一人をその危地に落すに忍びないのだ。

大場　そんなら腹を切らせろ。刀をくれ。

某甲　然う……君、激昂しては困る。相互に同志の命は大切にしなければならない。

大場　いや、然うぢやない。君等は底意あつて、僕をはぶくんだ。おれは死ぬ。死ぬ〱、死にたいんだ。（大聲に泣く）

一同、呆氣にとられて顔を見合はす時、遠く建仁寺の時の鐘四ツを報ずる。於菟馬、屹と耳を立てゝ數を數ふる。何か思案を定めて、孔平の手を握る。

於菟馬　大場！おれが惡かつた。最初に君を疑つたのはおれだ。君は苦しからう。然し、死んぢや可けないぞ。死ぬなよ。

大場　え……？（突然の言葉を不審さうに、於菟馬を見上げる）

於菟馬（帶など締め直しつゝ、遠く木屋町の方を睨みつゝ、呟くやうに）死ぬなよ……、死ぬなよ……死ぬな……。

（何か考へる）

（幕）

編輯者雜記

○

本誌は新秋雜誌界の興味の中心たるべく充實した内容を以て現れた。先づ河上、幸田兩博士の論策を初めとして、卷頭に本位田氏の「文藝復興と資本主義」、馬場氏の「床次竹二郎論」、高畠氏の「思想惡導論」の三大論文及讀物に桑氏の「社交ダンス」等總て必讀文字のみである。谷氏の「新世界巡禮」は果然讀書界の人氣を沸騰せしめたが、本號に於ける第二信「テムズに聽く」は愈世界巡禮の本舞臺に入り息もつかせぬ興味を以て讀者子の自然的歡迎を受くべきを信じて疑はない。

○

本號の創作四篇悉く大家の力作揃の偉觀である。殊に正宗氏の一篇は氏近來の長篇力作で最近文壇の收獲たるを失はない。問題の眞山氏の戲曲は本號に於て愈々佳境に入り、久保田氏、近松氏の二篇は兩氏の特色を十二分に發揮した近來の傑作である。

◇

「動あれば反動あり」で、愈々圓本もいけなくなつならしい。この圓本に依つて苦杯をのまされて來た「雜誌」の惡戰苦鬪こそ悲壯そのものであつた。再び雜誌の[illegible]いふ事たつ[illegible]、これ[illegible]、一旨も二旨も[illegible]に、文化の指導者だとか、指針羅針盤だとか云つて、おさまつて居られないところに雜誌編輯者の悩みはどこまでも續くだらう。健康なる社會を持ち來すためにとか、中正なる思想を植ゑんがためにとか、そんな事ばかりですましては居られない。猫の眼のやうにクル／＼變る現代人は何を求めてゐるのか、何を提供すべきかに編輯者の腦味噌は搾取される。

◇

とはいへ、これは泣言ではなく職責に忠なるところ、この雜誌好轉の期に乘つて我社は社長の新任を機に、新陣容を敷いた。新社長の經綸は今後の誌上に、又他の新しい社業の上に具現されるであらう。

□

今月も支那問題の檢討批判を諸氏に御願ひした。恐らくは「またか」と眉を顰める人もあらう。だが、今日の對支外交は重大な危機に直面してゐるのである。田中首相の要求する所謂輿論の喚起とは正反對の意味に於て、我々は支那問題に對する深き理解と正しき意見とを把持しなければならない。而して、支那を世界の謎と目し、國際問題の淵叢と視るの[illegible]一つ、[illegible]時にはなかなか[illegible]

今日の新しき人類に心を致したるに[illegible]衆の[illegible]な紳士のみではあるまい。[illegible]我々の活動は[illegible]に支配されはしない。先づ、窓を開け、天の自由なる空氣を吸き入れよ。

△

別に豫告してある通り十月號から「新刊評」欄を新たに設けたることになりました。これまでも記事の餘白を利用しては新刊書の紹介に力めて來ましたが、更にそれ／＼の方面の專門大家をも煩はして、何ものにも囚はれない眞に權威ある批評を掲げたいと思ひます。その上裝幀製本印刷等にも批評の筆を及ぼしてそれ等の技術方面に對しても誠意ある警告を呈したいと思つてゐます。

△

この計畫を發表しただけで今日の出版界の間に大きな反響を捲き起し、早速讚辭や激勵の言葉を寄せる者もあり、續々新刊書の寄贈を受けて居りますが、これは從來雜誌專業主義で押し通して來た本社の立場と、つねに公正な權威ある批評を有ち續けて來た本誌の信用の然らしむるものと信じます。

婦人

●●近來しきりに兩性の問題が云々されて居る。我が婦人公論は特にこの問題を『異性間の友情』なる觀點に立ち、凡ゆる角度から考察した。大方諸兄姉に何等か益する處あれば幸甚である。

●●戀愛及び友情の對象としての異性……大宅壯一

男の友だち
女の友だち

●●フロインディン……池谷信三郎●●
●●カメレオンの如く……花柳はるみ●●
●●友だちといふ言葉……平井滿壽子●●
●●わが女友觀……新居格●●
●●たよりにならぬ女友達……伊福部敬子●●

●●異性の友達と同性の友達……文壇論壇諸家

異性間の友情號

●●あめりか大學生の男女交際ぶり……宮武繁

ちよつとした動機から

●●放浪の日のべんちの上……伊藤深水●●
●●押込められた納屋の中……吉田信子●●
●●空の箪笥を覗いて……守屋東●●
●●安い古本の買ひ歩きから……花園歌子●●
●●冷たい家庭を逃れて……松井千枝子●●

●●名女優エレン・テリーの死……永田龍雄

映畫小説 砂の塔…鈴木傳明

●詩◆英美子◆歌◆栗原潔子◆コドモ・ページ◆

●●政友會の婦選案に對する全國婦人同盟の聲明批評……らいてう

中央公論

●●婦人參政と其の力……………………………田川大吉郎

細君のふくれた顏

●●ふくれつ面の緩和策……………水守龜之助●
●●食后笑談…………………………川路柳虹●
●●知らぬは放つとけ………………安成二郎●

●●●漫畫漫文●●●仙境見物●●●●●

◆福田正夫●翁久允●麻生豐●永田衡吉●大泉黑石●竹久夢二●堤寒三◆

らんでぶう

●●二百里を距てゝ●はなこ●
○●エレヴエタアの逢曳●照●
●●冠をつけた蛇●愛子●
●●作爲から出た眞實●三郎●
●●にがいくちづけ●都代●

●むびいせくしよん●

⊡サンライズ
⊡スペインの花
⊡赤き踊
⊡新人の天地輝く

●●二十年の惡夢から覺めて…………………佐藤都代子

創作

◆◆試 練　田中純◆
◆◆脂粉の凡　伊東光◆
◆◆憂鬱な愛人　松岡讓◆

●●ノビレ少將北極遭難記………………………山西健吉

家庭記事

●●早老豫防の化粧●
●○漂白美顏法●
●●季節物のお献立●
●●果物應用のお八つ●
●●ドライクリーニングの仕方●
●●Yしやつの廢物利用●

●ていたいむ●

▲酒井眞人
▲天草潤一
▲橋爪光雄

すぽーツぺーじ

◆始めてらけつとをもつ婦人へ◆
●●ランラン●
◆結婚ろまんす◆

●●天文講座　星に親しむには……………………野尻抱影

●九月號●

中央公論社

●定價七十錢●

社告

本誌十月號から「新著月評」欄を新設いたします。

月々の新刊書の重要なものを網羅して、各專門大家の高評も乞ひ、之に對する嚴正な批評を掲げて、良書選擇の便に供へるとともに、著者との間に立つ誠實な通辯の役を果したいと思ひます。

嚴正な批評、誠實な通辯。これこそ讀書界今日の切實な要求です。

從來、雜誌專業主義に終始して來た本誌こそその要求を滿たす唯一のものと信じます。

どうぞ本誌十月號をお待ち下さい。

中央公論社

定價

	定價	送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事
△爲替郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

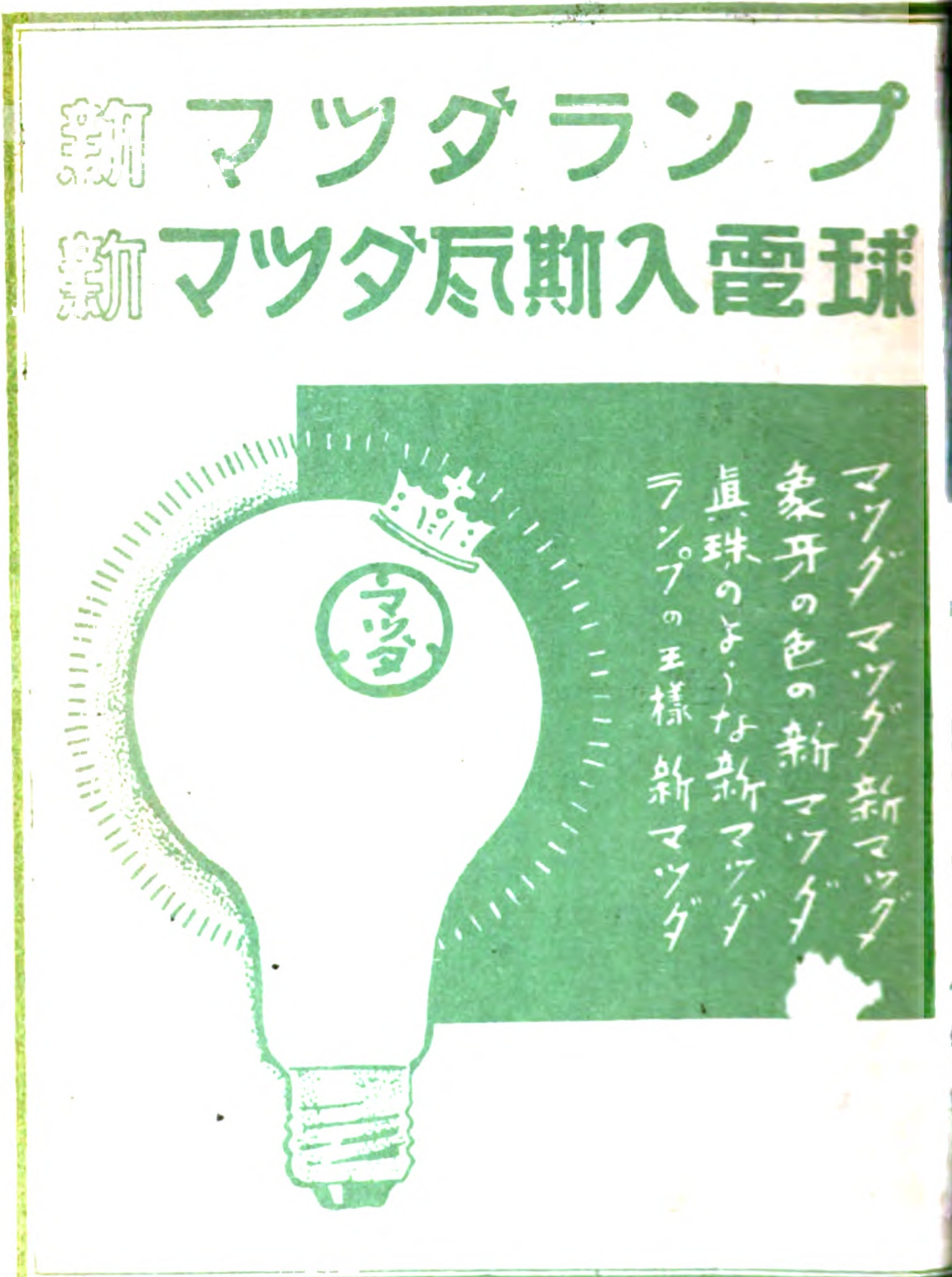
廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和三年八月十八日印刷
昭和三年九月一日發行（禁轉載）

編輯兼發行人　嶋中雄作
印刷人　高木鳥三
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社　秀英舍

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
中央公論社
電話丸ノ内二〇六番
振替東京三四番
同　長野三二〇五番


新マツダランプ
新マツダ瓦斯入電球
マツダマツダ新マツダ
象牙の色の新マツダ
真珠のような新マツダ
ランプの王様新マツダ

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.